昭和四年七月五日印刷
昭和四年七月十日發行

國譯一切經 本緣部 四

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地一番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地一番
振替東京一九四七一番
電話芝{三二〇一四一〇六}番

製本所 兩角製本所

索　引

（頁數は通頁を表す）

—ア—

—イ—

—ウ—

—エ—

—オ—

—カ—

—キ—

—ク—

—ケ—

—コ—

—サ—

—シ—

—ス—

—セ—

—ソ—

——本緣部四索引終——

已に滅し盡して證を作し、　已に八正道を修せり。　已に四眞諦を知り、
清淨なる法眼成ぜり。　此の四眞諦に於て　未だ平等眼を生ぜず。
解脱を得ると名けず、　所作已に作せりと言はず、　亦、一切の
眞實知覺成ぜりと言はず。　已に眞諦を知る故に　自ら解脱を得しを知れり。
自ら所作已に作せるを知り、　自ら等正覺を知れり。』　是の眞實を說くの時、
憍憐族姓子と　八萬の諸天衆は　眞實義を究竟し、　諸の塵垢を遠離し、
清淨法眼成れり。　天人師は彼を知り、　所作事已に作れり。
歡喜して師子吼し、　[二五]『憍憐如よ、來れるや』と問ふ。　憍憐卽ち佛に白す。
『已に大師の法を知れり。』　彼の法を知るを以ての故に、　[二六]阿若憍憐と名く。
佛弟子の中に於て　最も先に第一に悟れり。　彼は正法の聲を知り、
諸の地神を聞き、　咸共に聲を擧げて唱ふ。　『善い哉、深法を見たり。
如來は今日に於て　未曾所轉を轉ぜり。　普ねく諸の天人の爲に
廣く[二七]甘露門を開けり。　淨戒は衆輻と爲り、　調伏寂定は齊にして
堅固、智は輞と爲り、　眞實の法輪を成す。　正眞にして三界を出で、
退いて邪師に從はず。』　是の如く地神唱ふれば、　虚空の神は傳へ稱せり。
諸天は轉じて讚嘆し、　乃至梵天に徹せり。　三界の諸天神は
始めて大仙の說を聞いて、　展轉して驚いて相告げ、　『普く聞く、佛、世に興り、
廣く群生類の爲に　寂靜なる法輪を轉じたり。』　風霽れ、雲霧除き、
空中に天華を雨らし、　諸天は天樂を奏し、　未曾有を嘉歎せり。

佛所行讚卷第三

苦報を集起する故に集と言ふ。滅は涅槃で、惑業を滅し生死の苦を離れて眞空寂滅なれば滅といふ、道は八正道にて、涅槃に達する故道といふ。

【二五】「問憍憐如來」、或ひは「憍憐如來れ」と問ふ。」

【二六】阿若憍憐（Ājñāta-kauṇḍinya）覺知せる憍陳如の意。

【二七】甘露門。卽ち不死（Amṛta）への門、解脱への門。

八道は坦として平正なり。
所作已に究竟し、
三界は純ら苦の聚なり。
正法の清淨眼は
生・老・病・死の苦を超ゆ。
及び餘の種々の苦あり、
離淨功德者は
微と雖も熱を捨てず、
貪等の諸煩惱
捨離すれば則ち苦滅す。
衆緣の和合せずして
天より惡趣に至り、
則ち相續有る無し。
[二三]軟中上の差降は
此、有れば則ち彼、有り、
地・水・火・風無く、
賢聖の住む所にて
是の方便は餘ならず。
[二四]我は苦を知り、集を斷じ、
遂に等正覺を成ぜり。

生死の苦を免脫し、
此彼の二世の
唯此の道は能く滅す。
等しく解脫道を見る。
愛と離れ、怨憎と會し、
離欲と未離欲と
略して斯く皆苦を說く。
寂靜なる微細我にも
及び種々の業過は
猶ほ諸の種子の
芽葉は則ち生ぜざる如し。
輪迴して息まず。
種々の業が因爲り。
種々の業盡きれば、
此、滅すれば則ち彼、滅す。
亦、初中邊無し。
無盡の寂滅
世間は見ざる所、
滅を證し、正道を修し、
謂ふに我已に苦を知る。

此の塗より出ずる者は
苦數の中に墮せず。
本より未だ曾て聞かざる所。
唯我今始めて
求むる所の事は果さず、
有身及び無身
猶ほ盛なる火の息む如く、
大なる苦性は猶ほ存せり。
是は則ち苦因と爲す。
地水等を離れ、
性有れば相續有り、
斯く貪欲より生じ、
若し貪等を滅すれば、
差別の苦は長く息む。
生・老・病・死無く、
亦、欺誑の法無し。
說く所の八正道は
彼々は長く迷惑す。
此の四眞諦を觀じ、
已に有漏の因を斷ず。

雜阿含中の轉法輪經（Dhamma-cakkappavattanasutta）・に事情內容類似する。馬鳴は之等に基いて、多少自己の見解を加へ之の部分を書いたらしい。

【二〇】以上、徒らに身を苦しませる苦行道と、享樂に耽る樂行道との二道を示し、解脫の道にあらざるを指摘し、この中間を行く中道 Majjhima-mārga）が成道への正道なるを說破す。

【二一】八正道（Aṣṭāryamārga）正見(Samyag-dṛṣṭi)正思惟（Samyaksaṃkalpa）正語(Samyagvāc) 正業(Samyak-karma)正命(Samyag-ājīva)正精進(Samyag-vyāyāma)正念(Samyak-smṛti) 正定(Samyak-samādhi)。

【二二】正精進に當る。

【二三】西藏譯によれば、「下・中・上の差別は」。

【二四】四聖諦 Catvāri-ārya-satya)苦(Duḥkha)集(Samudaya)滅(Nirodha)道(Mārga)人生は苦であつて、苦の存在するは十二因緣の經路を取つた集の結果で、八正道(中道)を步み行ふ事によつて、滅(涅槃、解脫)に到達する。苦は三界六趣の苦報で、迷の果である。集は・貪瞋等の煩惱及び善惡の業である。三界六趣の

而して本名字を稱するは、
父を慢る罪を得る如し。』
佛は大悲心を以て、
哀愍して彼に告げたり。
彼は 二〇八 愚騃心を率ひ、
正眞覺を信せず。
言先づ苦行を修し、
猶ほ尙ほ所得無し。
今、身口の樂を恣にし、
何の因にて成佛を得ん
是の如き等の疑惑は
如來、佛道を得て、
眞實義を究竟し、
一切智を具足せしを信ぜず。
如來即ち彼の爲に
略して其の要道を説く。
二〇九『愚夫は苦行を習ひ、
樂行は諸根を悅ばず。
彼の二差別を見るに、
斯は則ち大過と爲す。
是は正眞の道に非らず。
解脫を逮ふるを以ての故に。
身を疲らし、苦行を修し、
其の心は猶ほ馳亂し、
尙、世智を生せず。
況んや能く諸根を超へん
水を以て燈を燃やす如く、
終に闇を破るの期無し。
身を疲らし、慧燈を修するも、
愚癡み壞す能はず。
朽木にして火を求むれば、
徒勞にして獲ず。
鑽と鐩と人の方便にて
即ち火を得て、用と爲す、
道を求むるには身を苦まして
甘露の法を得るに非ず。
欲に著するは非義と爲す。
愚癡は慧明を障ぐ。
尙經論を了せず、
況んや離欲の道を得ん。
人、重病を得て、
病に隨はざるの食を食するが如し。
無知の重病は
欲に著して豈に能く除かん。
火を曠野に放つに、
乾草は增し、猛風あり、
火盛にして孰か能く滅せん。
貪愛の火亦然り。
我已に二邊を離れ、
心、中道に存す。
衆苦は畢竟して息み、
二一〇 安靜にして諸の過を離る。
二一一 正見は日光に踰へ、
平等覺觀は乘にして、
正語は舍宅爲り、
正業の林に遊戲す。
正命は豐姿と爲り、
方便は 二一二 正修の塗にして
正念は城郭と爲し、
正定は床座と爲り、

星・馬師と譯す。威儀第一として知られ、威儀によつて舍利弗を感化したので、有名である。跋陀羅(Bhadra 仁賢)。異説には、十力迦葉の代りに摩訶男(Mahānāma 大號)。婆沙波の代りに摩訶男拘利太子とすることがある。

【二〇三】瞿曇(Gotama)。「最も良き牛」の意。釋迦族、悉達多太子の姓(Gotra)である。

【二〇四】要言。要は誓の意。

【二〇五】釋尊が、五比丘が姓名を以て呼ぶのをたしなめたのは、諸傳に出で、意義深い。佛陀の尊嚴を示してゐる。然し後までも、外道、婆羅門は佛を呼ぶに「沙門 Śramaṇa」「瞿曇 Gotama」を以てしてゐる。

【二〇六】阿羅訶(Arhan)。小乘の悟を極めたる位の名、譯、一、殺賊、煩惱の賊を殺す意、二、應供、人天の供養を受くべき意。三、不生、永く涅槃に入つて、再び生死の果報を受けざる意。

【二〇七】褻慢言。褻、一木媟に作る、媟は、けがす。狎る。なれて禮を亂る。

【二〇八】愚騃心。騃はをろか(癡)なること。

【二〇九】初轉法輪 (Dharmacakrapravartana)。即ち佛の最初の説法である。之は巴利語

心、先に期する所あるに隨つて、　路より各ゝ分れ乖けり。　念を計つて未曾有とし、
歩々に顧みて［一九八］踟躕せり。　［一九九］如來は漸く前み行いて、　迦尸城に至れり。
其地は勝れて莊嚴され、　天帝釋の宮の如し。　恒河と波羅捺の
［二〇〇］二水、雙ながら間を流る。　林木の花果は茂り、　禽獸同じく群れ遊ぶ。
閑寂にて喧俗無く、　［二〇一］古仙人の居る所。　如來の光は照耀して
其の鮮明を倍增せり。　［二〇二］憍隣如族子　次に十力迦葉
三に波澁波　四に阿濕波誓　五に跋陀羅は
苦を習つて山林に樂しめり。　遠く如來の至るを見て　集り坐して共に議して言ふ。
［二〇三］『瞿曇は世樂に染り、　諸の苦行を放捨せり。　今復た還りて此に至る。
愼んで起きて奉迎する勿れ。　亦禮して問訊して、　其の所須を供給する勿れ。
已に本誓を壞つ故に、　應に供養を受くべからず。』　凡そ人は來賓を見て、
應に先後の宜を修すべし。　且く爲に床座を設け、　彼の所安に任す。
此の［二〇四］要言を作し已り、　各々正基に坐せり。　如來は漸次に至るに、
覺へずして要言を違ふ。　請ふて其の座を讓る有り、　爲に衣鉢を攝る有り、
爲に足を洗摩する有り、　所須を請問する有り。　是の如き等の種々をなし、
師を尊敬して奉事す。　唯其の族を捨てず、　猶ほ瞿曇名を稱す
世尊、彼に告げて言ふ。　［二〇五］『我が本性を稱して、　［二〇六］阿羅呵所に於て
［二〇七］褻慢言を生ずる莫れ。　敬、不敬なる者に於て、　我が心は悉く平等なり。
汝等は心に恭はざれば、　當に自ら其の罪を招くべし。　佛は能く世間を度す、
是の故に稱して佛と爲す。　一切の衆生に於て、　心を等しくして子を想ふが如し、

【一九八】踟躕。行きて進まず、ためらふ。
【一九九】如來(Tathāgata)。佛十號の一。如は眞如、眞如の道に乘じ、因より果に來りて正覺を乘ずる故に如來と名く。(眞身如來)　又眞如の道に乘じ三界に來りて化を垂るゝ故に如來と言ふ。(應身如來)、諸佛の如くにして來る如に如來といふと。
【二〇〇】カンニシガム(Cunningham)によれば、ベナレス(Benares)市は恒河の左岸に位し、東北の金河即ちバルナー河(Barnā)、南西ロアシ・ナーラ(Asi Nāla)との間にありと。バラナーはアラハバッドの北に發する相當な大河で、百哩の長さあり。アシは短い小川である。
【二〇一】古仙人住處(Rṣipatana)。
【二〇二】憍隣如族子(Kauṇḍinya-akulaputra譯了本際)。五比丘の一人。初説法に最初に阿羅漢果を得た。この故に佛は「阿若、憍陳如」と言はれた。阿若は Ājñāta 旣知の意である。十力迦葉(Daśabalakāśyapa)。波澁波(Vāṣpa 正語?)。釋種婆沙波とは同名異人。阿濕波誓(Āśvajit)。又阿濕婆恃又は阿惾示とも書き、馬勝・馬

比丘儀を執持し、　恭しく路傍に立てり。　未曾有に遇ふを欣び、
合掌して啓して問ふ。　『群生は皆染著す。　而も著無き容有り。
世間の心は動搖す。　而も獨り諸根を靜む。　光顏は滿月の如く、
甘露津を味ふに似たり。　容貌は[一九二]大人の相にて　慧力は自在王なり。
[一九三]所作は必ず已に辦じ　[一九四]宗稟爲るは何の師ぞ』　答へて言ふ。[一九五]『我は師無し、
宗無し、所勝無し。　自ら甚深の法を悟り、　人の得ざる所を得たり。
人の應に覺るべき所を　世を擧げて覺る者無し。　我今悉く自ら覺れり。
是が故に正覺と名く。　煩惱は怨家の如し。　伏するに智慧の劍を以てす。
是の故に世の稱ふる所、　之を名けて最勝と爲る。　當に波羅棕に詣り、
甘露の法鼓を擊つべし。　慢無く名を存せず。　亦、利樂を求めず。
唯爲めに正法を宣べ、　苦める衆生を拔き濟はん。　昔弘誓を發せしを以て、
諸の未度者を度さん。　誓の果は今に成る。　當に其の本願を遂ぐべし。
當に財を自ら供すべきのみ。　名義士と稱へず。　兼ねて天下を利すれば、
乃ち[一九六]大丈夫と名く、　危に臨んで溺るゝを濟はざれば、　豈に※勇健の士と云はんや
疾病を救療せざれば、　何ぞ名けて※名醫と爲さんや　迷を見て、路を示さゞれば、
孰れか※善導師と云はんや　燈は幽冥を照し、　無心にして自ら明るきが如し、
如來は慧燈を然やし、　諸の欲を求めるの情無し。　燧を鑽すれば、必ず火を得、
空中の風は自ら然り。　地を穿てば必ず水を得、　此れ皆、理自ら然り。
一切の諸牟尼は　成道は必ず伽耶に於てなり、　亦同じく迦尸國にて
[一九七]正法輪を輪ず。』　梵志憂波迦は　『嗚呼』と奇特を嘆じ、

【一九二】大人相（Mahāpuruṣa-lakṣaṇa）。卽ち佛又は轉輪王の三十二の妙相を言ふ。光顏如滿月、慧力自在王は妙相の一、自在王とはヴィシュヌ（Viṣṇu）神を言ふ。

【一九三】所作已辦。爲すべきことを已に成し遂げしを言ふ。（Kṛtārtha）。

【一九四】宗稟。宗族と天與の性質。

【一九五】普通この折の佛の憂波迦への說話を、說法卽ち初轉法輪とは取扱はず。後世の大乘的進步敎派は說法と認むるに至る。

【一九六】※佛陀の德行を喩ふるに好んで用ひられる稱號。

【一九七】過去佛思想。瞿曇佛も之の事跡に從ふとするは、佛傳の形式化、神話的修飾である。

世尊は已に　生死の大苦海を免れ度れり。　願くは當に彼の
沈溺せる諸衆生を濟度すべし。　世間の義士の　利を得て物を與へ同じくする如くせよ。
世尊は法利を得たり。　唯、應に衆生を濟ふべし。　凡人は多く自ら利し、
彼と我と利を兼ぬるは難し。　唯願くは慈悲を垂れ、　世の難中の難を爲されよ。』
是の如く勸請し已り、　辭を奉じて梵天に還れり。　佛は梵天の勸請を以て
心悅んで其の誠を嘉し、　長く大悲心を養つて、　其の說法の情を增せり。
念ひて當に乞食を行ずべしとす。　[一八七]四王咸鉢を奉ず。　如來は法の爲の故に
四を受けて合して一と成す。　[一八八]時に商人の行く有り。　善友天神は告ぐ。
『太仙牟尼尊は　彼の山林中に在り、　世間の良福田なり。
汝應に往いて供養すべし。』　命を聞いて大に歡喜し、　初飯を奉施せり。
食し已つて顧みて思惟す。　『誰か應に先ず法を聞くべき　唯阿羅藍
欝頭羅摩子有り、　彼は正法を受くるに堪ゆ。　而して今已に命終れり。
次に五比丘有り、　應に初說法を聞くべし。』　寂滅の法を說かんと欲するや、
日光の冥を除く如し。　[一八九]波羅捺　古仙人住處に行詣せんとす。
牛王の目にて平に視、　安庠なる師子の歩なし、　衆生を度する爲の故に
[一九〇]迦尸城に往詣せり。　歩々に獸王の如く顧み、　顧みて菩提林を瞻たり。

轉法輪品第十五

如來は善く寂靜にて　光明顯れて照曜し、　儀を嚴かにして獨り遊歩し、
猶ほ大衆の隨ふ若し。　道に一梵志に逢ふ。　其は[一九一]憂波迦と名く。

【一八七】四天王(Caturmahārājā)。最低の神界の支配者。この說話は各傳に出る。詳しいものは、各王が各々捧げた鉢の何れに縻を受けても、不平のあるのを思ひ、之を一に合して、それに受けたと傳へる。
【一八八】この二人の商人の名は帝梨富娑(Trapuṣa)跋梨迦(Bhallika)で、この說話は多くは原始的經律に現れる。
【一八九】波羅捺(Vārāṇasī)は當時も印度文教の中心で、各宗派學派の敎師行者がこゝに集つた。未曾有の法を覺悟した後、佛陀が此處に志されたのは理由がある。今日のベナレス(Benares)である。こゝにある園を鹿野園(Mṛgadāva)といふ。園に鹿が多いのでこの名がある聖地。
【一九〇】迦尸(Kāśi)。恒河流域にある小國で、この內に有名な波羅捺(Vārāṇasī)がある。
【一九一】梵志憂波迦。梵志は Brahma-cārin 卽ち梵行を行ふもの、憂波迦(Upaka)。普曜經(Lalitavistara)では彼は Ajivaka 派の外道であつたと。

恐怖悉く消除し、
皆、[一八三]漏盡の人と同じ。
煩惱は暫く休息し、
諸有生天者は
卽ち天の宮殿にて
聲を同して佛德を嘆じたり。
一切皆隨喜し、
心に大なる憂苦を生じたり。
菩提樹を觀察し
宿心の願を遂ぐるを得、
哀愍心を發上し、
飄流して其の心を沒す。
勤方便を捨離し、
復た說法心を生ぜり。
[一八六]梵天は其の念を知つて、
苦める衆生を度せん爲に、
妙義悉く顯現するを見る。
諸の虛僞心無し。
『世間何ぞ福慶なる。
塵に穢れし滓雜心あり、

諸の恚慢心無し。
諸天は解脫を樂んで、
智月漸く明を增せり。
佛の世に出興せるを見て、
花を雨らして以て供養し、
世人は供養を見、
踊躍して自ら勝へず。
佛は彼の七日に於て
瞪視して目瞬かず。
無我の法に安住せり。』
淸淨を得しめんと欲す。
然るに解脫は甚だ深妙にて、
默然に安住せんとす。
諸衆生を觀察するに、
法は應に請ふて轉ずべきとし、
來りて、牟尼尊の
實智中に安住し、
恭敬し心歡喜し、
大世尊に遭遇せり。
或は重き煩惱有り、

一切の諸世間は
惡道も暫く安寧なり、
甘蔗族の仙士
歡喜は身に充滿せり。
諸天神・鬼龍は
及び讃嘆の聲を聞き、
唯魔天王有り、
[一八四]禪思して心淸淨に
『我は此處に依り
[一八五]佛眼にて衆生を觀て、
衆生は貪・恚・癡の邪見にて
何に由りて能く宣ぶるを得ん
顧みて本誓願を惟ひ、
煩惱は孰れか增微ありや
普く梵光明を放ち、
說法の大人相
留難過を離れ、
合掌し、勸請して曰く、
一切の衆生類は
或は煩惱輕微なり。

---

dhāra) 大なるマンダーラ華(天の妙華)のこと。
【一八三】煩惱(凡ての欲望)を滅し盡した者の意。
【一八四】成道後、佛は倘覺悟の當體を思つて禪定されたのは事實であらう。他傳四七日其他禪定されたと傳へる。
【一八五】佛が成道後、衆生の智淺く、佛の證覺の解し難いのを思つて、傳道を躊躇され、最初の誓を思ひ、衆生をいとほしんで、梵天の勸請によつて說法を決意されたのは、諸傳が傳へ、恐らく事實と思はれる。
【一八六】梵天(Brahmadeva)。大梵天(Mahābrahman)。色界十八天の一。初禪天の第三に住する天で娑婆世界を領する。

識を縁とし、名色を生じ、　【一七六】名色を緣として識を生ず。　猶ほ人と船と倶に進み、
水陸更に相運ぶが如し。　識の名色を生ずる如く、　名色は諸根を生ず。
諸根は觸を生じ、　觸復た受を生ず。　受は愛欲を生じ、
愛欲は取を生ず。　取は業有を生じ、　有は則ち生を生ず。
生は老死を生じ、　輪廻し周くして窮り無し。　衆生は因緣より起る。
正覺は悉く覺知され、　決定して正覺し已れり。　生盡れば老死滅す。
有滅すれば則ち生滅す。　取滅すれば則有滅す。　愛滅すれば則ち取滅す。
受滅すれば愛滅す。　觸滅すれば則ち受滅す。　六入滅すれば觸滅す。
一切の入、滅し盡すは　名色の滅するに由る。　識滅すれば名色滅す。
【一七七】行滅すれば則ち識滅す。　【一七八】癡滅すれば則ち行滅す。　大仙は正覺成ず。
是の如く正覺成じ、　【一七九】佛は則ち世間に興る。　正見等の【一八〇】八道は
坦然たる平直路なり。　畢竟するに我所無し。　薪は盡き火滅する如し。
所作は已に作し、　先づ正覺道を得たり。　第一義に究竟し、
大仙人の室に入れり。　闇は謝いて明相生じ、　動靜悉く寂默し、
無盡の法を逮得せり。　一切の智は明朗として、　大仙の德は淳厚にて、
【一八一】地は爲に普く震動す。　宇宙は悉く清明にして、　天龍神は雲と集り、
空中に天樂を奏し、　以て法を供養せり。　微風は清涼にして起り、
雲無くして香雨を雨らし、　妙華時非ずして敷き、　甘果は節を違へて熟せり。
【一八二】摩訶曼陀羅　種々の天の寶花は　空より亂れ下り、
牟尼尊を供養せり。　異類の諸衆生は　各慈心にて相向ひ、

【一七六】本讃の十二因緣觀は行(Saṁskāra)。無明(Avidyā)が順を追つて出ないで、後に出る。(八四頌を見よ)
【一七七】行(Saṁskāra)。解釋は種々あるが、盲目的意志と解すべきか？
【一七八】癡(Moka)とあるも、無明(Avidyā)を言ふのであらう。無明は過去に於て種々の煩惱を起す位である。
【一七九】佛(Buddha)。覺者。宇宙の眞理を證得し、人格を完成し、流轉の繫縛を斷つたもの。
【一八〇】八正道(Āṣṭāryamārga)中正にして理に契ひ、涅槃に至る道である。正見(四諦の理を正しく見ること)。正思惟(四諦の理を正しく思惟觀察すること)。正語(不實の語を離れること)。正業(身の三過―殺・盗・婬―を離れること)。正命(五種邪命を離れること)。正精進(戒・定・慧の道に一心に精進すること)。正念(正法を思念すること)。正定(身心寂靜にて亂想を離れること)を言ふ。
【一八一】以下(八八―九〇)成相の瑞相である。之等の奇しい自然現象は釋尊の自内證の朗らかな心境を象徴的に語つてゐるのであらう。
【一八二】摩訶曼陀羅(Mahāman-

地獄は衆苦を受け、
畜生は相殘殺す。
餓鬼には飢渇逼り、
人間は渇愛に疲る。
諸天は樂しと云ふと雖も、
別離は最大の苦にて、
迷惑して世間に生じ、
一も蘇息する處無し。
嗚呼、生死の海は
輪轉して窮り已る無し。
衆生は長流に沒し、
漂泊して所依無し。
菩薩は是の如きの淨き天眼にて
五道を觀察せり。
虚僞は堅固ならず、
芭蕉と泡沫の如し。
即ち彼の第三夜に
深き正受に入れり。
諸世間を觀察し、
輪轉の苦は自らの性なり。
數々の生老死は
其の數、量有る無し。
貪・欲・癡の闇の障は
由つて出ずる所を知る莫し。
[一六六]正念して内に思惟す。
『生死何に從つて起るや』
決定して[一六七]老死は
必ず生の致す所に由るを知る。
人の身有る故に
則ち身の痛、隨ふ有る如し。
又『生は何の因なるか』を觀じ、
諸の[一六八]有業に從ふを見る。
天眼にて有業を觀るに、
自在天に生ずるに非ず。
自性に非ず、我に非ず、
亦復た無因に非らず。
竹の初節を破れば、
餘節は則ち難無きが如し。
既に生死の因を見て、
漸次に眞實を見る。
有業は[一六九]取より生じ、
猶ほ火の薪を得る如し。
取は[一七〇]愛を以て因と爲す。
小火の山を焚くが如し。
愛は[一七一]受より生ずるを知り、
苦樂を覺り、安きを求む。
飢渇は飲食を求む。
受の愛を生ずるも亦然り。
諸受は[一七二]觸を因と爲す。
三は等しくして苦樂生ず。
鑽燧に人功を加へれば、
則ち火を得て用を爲す如し。
觸は[一七三]六入より生ず。
盲は明覺無き故に。
六入より[一七四]名色起る。
芽より莖葉を長ずる如し。
名色は[一七五]識に由り生ず。
種より芽葉生ずる如し。
識は還りて名色より
展轉して更に餘る無し。

つて來ると、一般に信ぜられてゐる。

【一六六】以下(五三―八〇)は十二因緣の順觀(五三―七三)逆觀(七六―八〇)である。

【一六七】老死(Jarāmṛtyu)、生(Jāti)。

【一六八】有(Bhava)、存在の事。

【一六九】取(Upādāna)。生存に對する執着。

【一七〇】愛(Tṛṣṇa)。欲望のこと。

【一七一】受(Vedanā)。感情感覺を言ふ。

【一七二】觸(Sparśa)。心と根(感官)と境(その對象)との接觸をいふ。

【一七三】六入(Ṣaḍāyatana)。又は六處。五根と意根(内部にあると考へられる)を言ふ。

【一七四】名色(Nāma-rūpa)。名は五蘊中色蘊を除いた餘の四蘊。色は色蘊で、名色とは托胎以後、眼等の六根が圓滿に成就する迄の間の五蘊を言ふ。

【一七五】識(Vijñāna)。過去前世の無明・行の因によつて現在今生の母胎に託し來る結生の初念を言ふ。

重きを負ふて軛を抱き、　鞭策鉤錐にて刺され、　體を傷けて膿血流れ、
飢渇を能く解する莫し。　展轉して相殘殺し、　自在力有る無し。
虚空水陸の中にて　死を逃れんにも亦、處無し。　慳貪の增上する者は
餓鬼趣に生ず。　巨身にて大山の如く、　咽孔は猶ほ針鼻の如し。
飢渇の火毒は然へ、　還つて自ら其の身を燒く。　求むる者には慳にして與へず
或は人の惠施を遮げし者は　彼の餓鬼中に生じ、　食を求めて得る能はず。
不淨にて人の棄つる所を　食はんと欲して變じ失はる。　若し人、慳貪は
苦の報、是の如きを聞かば、　肉を割いて以て人に施し、　彼の〔一六三〕尸毘王の如くせん。
〔一六四〕或ひは人道の中に生れ、　身は行厠に處り、　動轉して極めて大に苦しみ、
胎を出でゝ恐怖を生ず。　軟身は外物に觸れて、　猶ほ刀劍にての如く截たる。
彼の宿業の分に住し、　時にして死有らざる無し。　勤苦して生を求め、
生を得れば長く苦を受く。　福に乘じて天に生ぜし者は　渇愛にて常に身を燒き、
福盡き命終る時、　〔一六五〕衰死の五相至る。　猶ほ樹の華萎れ、
枯悴して光澤を失ふ如し。　眷屬と存亡分れ、　悲み苦んで能く留むる莫し。
宮殿は廓然として空しく、　玉女は悉く遠離し、　塵土中に坐臥し、
悲しみ泣いて相戀慕す。　生者は墮落を哀み、　死者は生を戀いて悲しむ。
精勤して苦行を修し、　生天の樂を貪求す。　既に此の如き苦有り。
鄙しい哉、何ぞ貪る可き　大に方便して得る所も、　別離の苦を免れず。
嗚呼、諸の天人は　脩短、差別無し。　劫を積んで苦行を修し、
永く愛欲を離る。　決定して長く存すると謂ふも、　而も今は悉く墮落す。

理される」地獄(Kumbhi-paka)、即ち生前二足を殺し食したものが、報として釜に入れられるに似る。

【一五九】同書火與地獄(Śiraṃ-ma-yādāna)。即ち盜賊の行く所で、夜摩(Yama)の二十の犬に苦しめられるに似る。

【一六〇】同書、地獄二四、シュラプラタ(Śulaprata)に似る。無實の罪で島流し幽閉をなした國王大臣が行き、鳥の嘴につゝいばまれる。

【一六一】佛敎の劍葉地獄(Asi-pattra-naraka)。

【一六二】斫剉。斫は刄物にて擊つこと、又打ち斷つ、きる。剉は、折傷す、破る。剟む。

【一六三】尸毘(Śivi)王は修行中に鷹に追はれた鳩を助ける爲、鳩丈の重さの自分の肉を與へやうとし、身體各部の肉を鷹に與へ、尙足らなくて身體全體を與へた。布施の例として好んで引かれる。マハーバーラタ中にも本生話中にもこの說話がある。

【一六四】以下梵本には馬鳴の眞作はなく、後世の筆寫者アムリターナンダ(Amṛtānanda)の補書したものがある。以下漢藏譯は梵本原作を傳ふ。

【一六五】諸天も積んだ福德が盡きて來ると、衰死五相が現れ、次第に容色が衰へ、光輝を失

一五二 初夜、正定に入り、
此に來生せり。』
生死を受くること無量に、
而して大悲心を起せり。
六趣中に輪廻し、
一五三は 芭蕉または夢幻の如きを觀る。
一切の衆生を見るに、
貴賤と貧富と
惡業者を觀察するに
一五五 人天中に生ずべし。
一五六 洋銅を 一五七 呑飲し、
駈けて盛火聚に入る。
火を畏れ、叢林に赴けば、
或は利斧 一六二 斫剉す。
不淨業を樂修し、
苦の報は甚だ久しく長し。
惡業ある諸衆生は
恐怖にて崩血し、死すべし。
死して畜生道に墮ち、
毛角骨尾羽の爲に死す。

過去の生を憶念せり。
是の如き百千萬の
一切の衆生の類は
大悲心を念じ已り、
生死は窮極無く、
卽ち中夜の時に於て、
鏡中の像を觀るが如し。
清淨業と不淨業とに
一五四 『當に惡趣の中に生ずべし。
若し地獄に生ずる者は
鐵槍は其の體を貫き、
一五九 長牙の群犬食し、
一六一 劍葉は其の體を截つ。
斯の極苦の毒を受け、
極めて苦んで其の報を受く。
戲笑して苦の因を種き、
若し自らの報を見れば、
諸の畜生の業を造り、
種々に各々異る身あり、
更に互に相ひ殘殺し、

『某の處より某の名にて
死生を悉く了知す。
悉く曾て親屬爲り。
又彼の衆生の
虛僞にて堅固無く、
淨き天眼を逮得し、
衆生の生の生死と
隨つて苦樂の報を受く。
善業を修する者は
無量種の苦を受く。
之を沸 一五八 鑊湯に投じ、
一六〇 利き嘴の鳥は腦を啄む。
利刀、其の身を解き、
業行にて死なしめず。
味に著するは須臾頃にて
號泣して罪を受く。
氣脈は則ち應に斷じ、
業は種々にて各々異り、
或は皮肉の爲に死し、
親戚は還りて相ひ噉ふ。

【一五一】妙定。定は三昧(Samādhi)を言ふ。
【一五二】梵本(十三・七一)、「陣地を敵に破られた敵意ある軍勢のやうに」(「佛陀の生涯」一八一)。
【一五三】初夜に(Prathama-yāme)。或ひは初更に。yāma は印度時で一日の八分の一、三時間を言ふ。卽ち夜の內の三時、時間の意。
【一五三】梵本(十四・六)。「佛陀の生涯」一八四)には「甘庶(みばせう)の髓のやうに流轉には實質がない。」芭蕉の髓は輕柔にて實質なし。
【一五四】以下の數頌に說くものは、惡趣である、五道である、地獄(Naraka)、畜生(Tiryagyoni)餓鬼(Pretaloka)、人間(Manuṣya)天(Deva)。
【一五五】人天。梵本は三天(Tripiṣṭapa)。卽ち因陀羅の天を言ふ。至高天、この方よし。
【一五六】淨銅、淨は多き、あふるゝの意。こゝでは「溶けた銅」の謂か。
【一五七】デーヴィーバーカプラーナ(Devibhāga purāṇa 四.)にある地獄、廿一、鐵飲地獄(Ayaḥpāna)に似る。梵行期に禁酒戒を破つたものが行き、死して熱鐵を飲まされる。
【一五八】鑊。おほかなへ。足なき大鼎。同書中「瓶釜にて料

云何にして滅せしめんと欲するや　衆生は悉く生死の大海に漂沒す。
脩き智慧舟と爲らん。云何にして其を沒せしめんと欲するや　[一四八]忍辱は法芽と爲し。
固志は法根と爲し、律儀戒は華と爲し、覺は正しく枝幹と爲し、
智慧の大樹は　無上法を菓と爲し、蔭は諸衆生を護る。
云何にして伐らんと欲するや　貪・恚・癡の枷と鎖は　衆生を覊縛す。
長劫、苦行を修し、衆生の縛を解くを爲し、決定して今に成らんとし、
此の正基に於て坐す。[一四九]過去の諸佛の如く　堅く金剛臺に堅つ。
諸方は悉く傾動するも、惟此の地は安穩にして、能く[一五〇]　妙定を受くるに堪ゆ。
汝の能く壞す所に非らず。但れど當に汝に輕下心あり。諸の憍慢の意を除くべし。
應に知識想を修し、忍辱して奉事すべし。』魔は空中の聲を聞き、
菩薩の安靜なるを見て、慚愧して憍慢を離れ、復た道により天上に還れり。
魔衆は悉く憂慼し、崩潰して威武を失ひ、鬪戰の諸器杖は
縱横に林野に棄てられたり。[一五一]人の怨主を殺し、怨黨悉く摧碎されしが如し。
衆魔は既に退散し、菩薩は心虚靜なり。日光は倍々增明し、
塵霧は悉く除滅し、月は明かに衆星は朗かに、復た諸の闇障無し。
諸天は空中に天花を雨らし、以て菩薩を供養せり。

阿惟三菩提品第十四

菩薩は魔を降し已り、志固く、心安穩に、第一義を求め盡し、
深妙禪に入り、自在にして、諸三昧は　次第に現に前に在り。

すに便なるを言ふ。
【一四三】彌伽・伽利(Megha-kārī)。一人とすれば「雲の(如く)黑い女」の意。他傳は魔王の妹であると言ふ。
【一四四】負多神。負多(Bhūta)にて天神(Deva)より稍低い神を言ふ。梵本(十三・五六、「佛陀の生涯」一七八頁)は「ある姿の見えぬ、性の勝れた者」(Kiṁcidadṛśyarūpa-viśiṣṭa-rūpa)とあり。
【一四五】この神の魔羅勸告の辭は內容深く、韻律流暢で、阿私陀豫言(一・五七―六九)と共に珠玉の樣である。結尾(七〇―七三)の羅羅敗北の後の叙景も靜かな美である。
【一四六】正思惟、梵本(十三・五九)は決定(Niścaya)又は決心。精進、梵本は勇力(Parākrama)又は勇略。光明(Tejas)、慈悲(Dayā)は又同情。
【一四七】日の千光(Sahasraraśmi)。千の光ある者卽ち太陽。
【一四八】忍辱(akṣara)。堅固(dhairya)又は確然。漢譯、固志、律儀戒、梵本は善業(cāritra)。覺(buddhi)又は智、智慧(jñāna)、法(dharma)。この頌には波羅蜜思想がある。この比喩は甚だ妙である。(梵本十三・六五、「佛陀の生涯」一八〇)。
【一四九】過去佛思想である。

事に隨つて自ら傷く。　魔王に姉妹有り。　一四三 彌伽・伽利と名く、
手に髑髏の器を取り、　菩薩の前に在り、　種々の異儀を作し、
婬惑して菩薩を亂せり。　是の如き等の魔衆は　種々なる醜類の身にて
種々なる惡聲を作し、　菩薩を恐怖せしめんと欲す。　然れど一毛を動す能はずして、
諸魔は悉く憂慼せり。　空中に　一四四　負多神は　身を隱して音聲を出せり。
一四五『我、大牟尼を見る。　心に怨恨想無し。　衆魔は惡毒心あり、
怨無き處に怨を生ず。　愚癡なる諸惡魔は　徒勞にて爲す所無からん。
當に恚害心を捨て、　寂靜に默然として住すべし。　汝は口氣にて吹いて
須彌山を動かす能はず。　火は冷く、水は熾え然え、　地の性は平かに軟濡とならんとも、
菩薩の歷劫に　善果を修するを壞す能はず。　菩薩は　一四六　正思惟し、
精進し勤方便し、　淨き智慧と光明あり、　一切を慈悲す。
此の四の妙功德は　能く中に斷截して、　爲めに留難を作し、
正覺道を成ぜざる無し。　一四七　日の千光は明かに　必ず世間の闇を除くが如し。
木を鑽して火を得、　地を掘りて水を得る。　その如く精勤し正方便し、
求めて獲ざる無し。　世間は救護無く、　中に貪・恚・癡の毒あり。
菩薩は衆生を哀愍する故に　智慧の良藥を求め、　世の爲に苦患を除かんとす、
汝、云何にして彼を惱亂するや　世間は諸癡に惑され、　悉く皆邪徑に著く。
菩薩は正路を習ひ、　衆生を引導せんと欲す。　世の導師を惱亂するは、
是は則ち大に不可なり。　大曠野の中　商人を欺誑して導くが如し。
衆生は大冥に墮ち、　至る所の處を知る莫し。　彼は燃ゆる智慧燈と爲らん。

著名である。
【一三一】懍愴。ふるへ、心がねぢけ傾くこと。
【一三二】戰掉。をのゝき、ふるへる。
【一三三】以下魔の菩薩を恐喝する描寫はキラータールジュニーヤ(Kirātārjunīya)に於けるアルジュナ(Arjuna)の試みに似る。
【一三四】怡然。悅ぶ貌。
【一三五】惕然。憂ふる貌。
【一三六】魔醯首羅は、梵本はシヤンブ(Śambhu)とす。然らば、シヴア(Śiva)の名。カーリダーサの作つた有名な詩にこの說話が引かれてある。苦行に耽つてゐたシヴア神が愛神によつて山王(=雪山)の娘パルヴアティー(Pārvatī)を愛するに至つた。
【一三七】兕。野牛に似て、其の色青き獸。一角あり、長さ三尺、其の皮は堅硬にして甲を製すべし。
【一三八】蹠。くびす(踵)、ふくらはぎ(腓腸)。
【一三九】螺髻。ほらがひの如く束ねたるもとどり。
【一四〇】擘裂。擘はつんざく、さくこと。
【一四一】呑噉。噉は食ふこと。
【一四二】矟。ほこ、矛の長さ一丈八尺なるを矟といふ、馬上に持つ所。その矟矟として殺

或は腰に大鈴を帶び、　或は縈髮、[一三九]螺髻あり、　或は髮を散し、身を被て、
或は人の精氣を吸ひ、　或は人の生命を奪ひ、　或は超擲して大に呼ばり、
或は奔走して相ひ逐ひ、　迭に自ら相ひ打ち害し、　或は空中に旋轉し、
或は樹間を飛騰し、　或は呼叫し、吼喚し、　惡聲、天地に震ふ。
是の如く諸の惡類は、　菩提樹を圍繞せり。　或は身を[一四〇]擘裂し
或は復た[一四一]呑噉せんと欲す。　四面は放火に然へ、　烟焰は盛にして天を衝く。
狂風は四方に激しく起り、　山林は普く震動せり。　風・火・烟・塵合して
黒闇、見る所無し。　愛法の諸天人　及び諸龍鬼等は
悉く皆魔衆を忿り、　瞋恚して血涙流れたり。　淨居諸天衆は
魔の菩薩を亂し、　欲を離れ、嗔心無けれど、　哀愍して、彼を傷けんとするを見て
悉く來つて菩薩を見るに、　端坐して傾動せず、　無量の魔に圍繞され、
惡聲、天地を動かせり。　菩薩は安んじて靖らかに默し、　光顔に異相無し。
猶ほ師子王の　群獸の中に處る如し。　皆歎じて嗚呼と呼ばり、
奇特未曾有とす。　魔衆は相駈策し、　各〻其の威力を進む。
迭に共に相催切し、　須臾にして摧滅せしめんとす。　目を裂きて齒を切し、
亂れ飛びて超擲し、　菩薩は默然として觀て、　童兒の戯るゝを看る如し。
衆魔は益〻忿恚し、戰鬪力を倍增す。　石を抱いて擧ぐる能はず、　擧ぐる者は下ぐる能はず。
矛・戟・[一四二]利矟を飛ばすも、　虚に凝りて下らず。　雷震へて大雹を雨らすも、
化して五色の花と成る。　惡龍蛇は毒を噴くも、　化して香風氣と成る。
諸の種々の形類の　菩薩を害せんと欲する者は、　傾動せしむる能はず、

には三子名をも擧げ、迷亂・悅樂・驕慢（Vibhrama-Harṣa-Darpa）とす。他傳に出る魔の子女の名も大同小異である。皆愛慾的のものゝ象徴で、譬喩的に作つたものである。

【一二六】軍神降誕(Kumārasambhava) III. 64 參照。本詩七、八の魔羅(マーラ)の描寫と同詩の描寫とは殆んど同一である。カーリダーサ(Kālidāsa)は馬鳴のこの部分に暗示されたか。

【一二七】剎帝利（Kṣatriya）は印度古代四階級の第二位で、武士階級（王族もこの中に含まれる）で、悉達多は之に屬す。

【一二八】冑。血統、後裔。

【一二九】梵本(十三・一二)は「月の孫罣羅の子」。この方正し。月(Soma)の孫罣羅の子(Aiḍaḥ)プルラヴアス(Purūravas)を言ふ。ウルヴアシー(Urvaśī)との情事に關係あるか。看十一・十五とその註。

【一三〇】シャーンタヌ（Śāntanu）を誤譯せるか。シャーンタヌはジャータヌの孫のヴイチイトラヴイールヤ(Vicitravīrya)の事か。(cf. Viṣṇu Purāṇa IV. 20)。月氏族の王。プラテイパ(Pratīpa)の子。ビーシュマ(Bhīṣma)の父。信仰・慈悲・謙遜・不屈・決意にて

況んや汝末世中にて　我が此の箭を脱せんと望む。　汝今速かに起てば、
幸にして安全なるを得可し。　此の箭は毒熾盛にして　[一三一]慓儉して　[一三二]戰掉し
計ひ力、箭に堪ゆる者も、　自ら安ずること猶ほ尙ほ難し。　況んや汝、箭に堪へず、
云何にして能く驚かざらん。』　[一三三]魔は斯の如き事を說き、　菩薩を迫脅す。
菩薩は心　[一三四]怡然として　疑はず、亦、怖れず。　魔王は卽ち箭を放ち、
兼ねて三玉女を進む。　菩薩は箭を視ず、　亦三女を顧みず。
魔王　[一三五]惕然として疑ひ、　心口に自ら相ひ語る。　『曾て雪山女の爲に
[一三六]魔醯首羅を射て、　能く其の心を變ぜしむ。　而して今菩薩を動かさず。
復た此の箭及び　天の三玉女を以てしても、　能く其の心を移かす所となり、
愛恚を起さしめず。』　當に更に軍勢を合し、　力を以て強く逼迫すべし。
此の思惟を作す時、　魔軍忽然として集る。　種々なる各ゝ異る形なし、
戟を執り、刀劍を持ち、　戟と樹と金杵　種々の戰鬪具を捉る。
猪・魚・驢・馬の頭あり、　駝・牛・[一三七]兕・虎の形あり、　師子・龍・象の首あり、
及び餘の禽獸に類す。　或は一身にて多くの頭あり、　或は面に各ゝ一の目あり、
或は復た衆多の眼あり、　或は大なる腹と長き身あり、　或は羸瘦して腹無く、
或は長き脚と大なる膝あり、　或は大なる脚と肥へし　[一三八]蹄あり、　或は長き牙と利き爪あり、
或は頭・胸・面無く、　或は兩足にて多くの身あり、　或は大なる面、傍に面あり。
或は灰土色を作し、　或は明星の光に似、　或は身、烟火を放ち、
或は象の耳あり、山を負ひ、　或は髮を被り、裸身にて、　或は皮革を被服し、
面色は半赤白にて、　或は虎皮の衣を著し、　或は復た蛇皮を著し、

傳中降魔の說話は可成古くからあり、之は佛胸中の愛慾と菩提心との爭鬪をこのやうな文學的樣式に佛傳作者が構想したのであらう。殊に本讚としては宮廷叙事詩(Kāvya)としての必須條件としての、戀愛の場面、經倫道義の場面の外に、戰爭の描寫を爲さねばならないが、降魔品はこの要求を十分に滿してゐる。雄渾活躍の筆致、躍動する韻律、その深淵なる象徵は全篇の逸作である。殊に太子の靜と魔王の動、聖と惡との對照に興が深い。後半の佛傳の降魔記述は多く之を模倣する。

【一三三】仙王族、王仙(Rājarṣi)とは王族にて仙士になつたものを言ふ。かゝる王仙を出す族を王仙族と言ふ。

【一三四】魔羅(Māra)。菩薩を誘惑退轉せしめやうとする魔王は、人性中解脫を求めやうとする善性に對する煩惱殊に愛欲(Kāma)を象徵したものか。本讚の諸傳に魔の名を破旬(P. yīyā)と記するものがある。梵本欲天(Kāmadeva)漢譯五欲自在天は愛慾の神。華の箭を標(しるし)として持つと傳へる。

【一三五】能悅人・可愛樂・欲樂(Rati-Prīti-Tṛṣā)。梵本(十三・三)「佛陀の生涯」一六九)

魔王は三女有り、　美貌にて善き儀容あり、　種々の人を惑はす術は
天女中の第一にて、　第一は欲染と名け、　次は[二二五]能悦人と名け、
三は可愛樂と名く。　三女、時を倶にして進み、　父波旬に白して言ふ。
『何ぞ憂慼するや、寧かならず』　父、具するに其の事を以てし、　情を寫して諸女に告ぐ。
『世に大牟尼有り。　身に大なる誓の鎧を被り、　大我の弓と、
智慧の剛利なる箭とを執持し、　戰つて衆生を伏し、　我が境界を破壞せんと欲す。
我は一旦彼に如かず。　衆生彼を信じ、　悉く解脫道に歸し、
我が土は則ち空虛ならん。　譬へば人の戒を犯し、　其の土は則ち空虛なる如し。
慧眼未だ開かず、　我が國、猶ほ安きを得るに及び、　當に往いて其の志を壞し、
其の橋梁を斷截すべし。』　弓を執り、五箭を持ち、　男女眷屬と倶に
彼の吉安林に詣で、　[二二六]衆生の安らざるを願ひ、　牟尼の靜かに默し、
三有海を度らんと欲するを見て、　左手に强弓を執り、　右手に利箭を彈き、
而して菩薩に告げて言ふ。　『汝、[二二七]剎帝利、速かに起て。　死は甚だ怖畏すべし。
當に汝、自らの法を修め、　解脫法を捨離し、　戰を習つて福會を施し、
諸世間を調伏し、　終に生天の樂を得べし、　此の道は善き名稱ある
先勝の所行なり。　仙王高宗[二二八]冑には　乞士は所應に非ず。
今若し起ざれば　且く當に汝の意を安ずべし。　愼んで要誓を捨つる莫れ。
我、一放箭を試みん。　[二二九]罣羅月光孫も　亦我が此の箭に由つて
小しく觸れて風に吹かるゝ如く、　其の心狂亂を發せり。　寂靜なる[二三〇]苦行仙も
我が此の箭の聲を聞き、　心大に恐怖し、　惛迷して本性を失へり。

【二二二】卽ち「食を取るのがこの法に達する所以である」。
【二二三】難陀波羅闍。その名、素姓には異說が多いが、優婁頻螺村の村長又は地主の娘といふのが、通說である。
【二二四】珂釧。珂は玉に次げる一種の石。一說に一種の玉、又一說に白き瑪瑙。又は螺の屬。釧は腕環。
【二二五】乳糜(Pāyasa)。牛乳にて調理された食、殊に牛乳にて煮られた米又は牛乳と米と砂糖との供物。
【二二六】五大(Pañca-dhātu)。五の要素。身體組成の要素。
【二二七】吉祥樹(Aśvattha) 卽ち阿濕婆達多樹。「その下に馬立つ」意。學名、Ficus religiosa。「神聖なる無花果樹」。卽ち菩提樹。
【二二八】盲龍の名を梵本はカーラ(Kāla)とす。之は本生話(Jātaka) 一・七二にある龍王。
【二二九】青雀(Cāṣa)。「青き樫鳥」。
【二三〇】穫草人。穫は草を刈る。
【二三一】梵本(十二・一一六)は「吉祥なる草」(Tṛiṇ.ni śuci-ni)。卽ちクシャ(Kuśa)草。學名Poa cyosuroides。萱の一種。坐禪にはこの草を敷く習である。
【二三二】Māravijaya-sarga。佛

彼の[一一七]吉祥樹に詣ず。當に彼の樹下に於て　等正覺道を成ずべし。
其地廣く平正にして　柔澤にして軟草生ず。安祥なる師子歩なし、
歩々に地は震動せり。地動き、[一一八]盲龍を感ぜしめ、歡喜し、目開明せり。
言ふ『曾て先佛を見るに、地動相今の如し。牟尼の德は尊く長く、
大地の勝へざる所。歩々、足は地を履み、轟々たる震動聲あり。
妙光、天下を照し、猶ほ朝日の明かなる若し。五百の群[一一九]青雀
右繞して空中に旋れり。柔軟なる清涼風は　隨順して迴轉せり。
斯の如き諸瑞相は　悉く過去佛と同じ、是を以て知る、菩薩は
當に正覺道を成ずべし。彼の[一二〇]穫草人に從ひ、淨き[一二一]柔軟草を得て、
樹下に布施し、身を正して安坐せり。加趺して傾動せず、
龍の身を絞縛するが如し。『要つて斯の座を起たず。其の所作を究竟せざれば。』と、
斯の眞誓言を發す。天龍悉く歡喜し、清涼なる微風は起り。
草木、條を鳴さず、一切の諸の禽獸は　寂靜にして聲無し。
斯は皆是れ菩薩の　必ず覺道を成ずる相なり。

[一二二]破魔品第十三

[一二三]仙王族の大仙は　菩提樹下に於て　堅固の誓を建立し、
要つて解脱道を成ぜんとす。鬼・龍・諸天衆は　悉く皆大に歡喜せり。
[一二四]法怨魔天王は　獨り憂えて悦ばず。五欲自在王は
諸の闘戰藝を具して　解脱を憎嫉する者にて、故に名けて[一二五]波旬と爲す。

---

saṃjñitā は想たる狀態。即ち所謂「非想非々想處」。之は禪定中無色界第四非想非々想處(Naivasaṃjñānāsaṃjñāyatana)に相當するか。

【一〇三】迦耶(Gāyā)。佛成道後、此處を佛陀伽耶(Buddhagāyā)と言ふ。他傳は伽耶山の對岸尼連禪河の東岸の鉢羅笈菩提山 Prāg-bodhi。(元は伽闍尸梨沙)に登り、優婁頻螺村で苦行したと傳ふ。

【一〇四】ナーガリーと名くる苦行林(Nāgarī-saṃjña-āśrama)

【一〇五】憍陳如等の五比丘(佛成道後鹿野園にて教化され、最初の弟子となる。)大臣が太子の行動を監視する爲發した釋迦族の使者(九・七二)に解し得る餘地がある。

【一〇六】尼連禪河(Nairañjanā)。伽耶山の麓を流れる河。

【一〇七】梵本棗の實(Kola)。學名Zizyphus jujuba の食用果。

【一〇八】鳩牟頭華(Kumuda)蓮華のこと。

【一〇九】第四品を看よ。この閻浮樹下入定の記事がある。閻浮樹(Jambu) 學名Eugenia jambolana。

【一一〇】筌。魚を捕ふる竹器。ふせご、うへ、やな。

【一一一】禪(Dhyāna)。靜慮瞑想を言ふ。

苦形は枯木の如く、　六年を垂滿せり。　生死の苦を怖畏し、
專ら正覺の因を求む。　自ら惟ふに、『此に由つては　離欲寂觀は生せず。
未だ、我、先の時　[一〇九]閻浮樹下に於て　得し所の未曾有なるに若かず。
當に知るべし、彼は是の道なり、　道は羸身にて得らるゝものに非ず、
要つて須らく身力にて求むべし。　飲食は諸根を充し、　根悅べば心安からしむ。
心安ければ寂靜に順す。　靜かなれば禪定の　[一一〇]筌と爲る。　[一一一]禪に由つて聖法を知り、
法力にて得難きを得る。　寂靜にて老死を離れ、　第一に諸垢を離る、
是の如き等の妙法は　[一一二]悉く飲食に由つて生ず。』　斯の義を思惟し已り、
尼連濱に澡浴せり。　浴し已つて池を出でんと欲し、　羸劣にして能く起きる莫し。
天神は樹枝を按じ、　手を擧げ攀じて出ず。　時に彼の山林の側に
一牧牛長有り、　長女は　[一一三]難陀と名く。　淨居天來りて告ぐ。
『菩薩、林中に在り。　汝應に往いて供養すべし。』　難陀婆羅闍は
歡喜して其の所に到り、　手に白　[一一四]珂釧を貫き、　身に青染衣を服し、
青白相ひ映發し、　水淨く、華鬘を沈むる如し。　信心は踊躍を增し、
菩薩の足に稽首し、　[一一五]香・乳・糜を敬奉し、　惟、哀愍を垂れて受く。
菩薩受けて食し、　彼に現法の果を得しむ。　食し已つて諸根悅び、
菩提を受くるに堪ゆ。　身體は光澤を蒙り、　德問轉崇高に
百川の海を增し、　初の月日の增明する如し、　五比丘見已り、
驚いて嫌怪想を起し、　其の道心退けりと謂ひ、　捨てゝ善居を擇ぶ。
人の解脱を得れば、　[一一六]五大悉く遠離する如し。　菩薩獨り遊行し、

論難を意味する。數論の「我」の「獨存」を解脱とするに滿足せず、太子は無我論に立ち、我ある限り絶對の捨離でなく、流轉あり、繫縛ありとする。(七七頌)

【九四】數(Sāṁkhya)。これから數論(Sāṁkhya)の名起る。

【九五】求那(Guṇa)。性質の意。自性(Prakṛti)の成分。凡ての存在物の主な性・質、即ち明性・動性・闇性。但し一般の意としては五大の屬性。

【九六】末尼。性質を有するもの。物體の意。譯文の意味は「物質と性質とを引離し得ない」の意。

【九七】即ち性質と物質とは同時にある。

【九八】知因は知田(Kṣetrajña)即ち我の誤りか。

【九九】所知(Jñeya)。即ち知らる可きもの。

【一〇〇】本文には太子は阿羅藍仙を問ひ、直ちに去つた如くであるが、事實としてはさうでなく、數日數ケ月又は數年留り、攻究修道したのであらう。

【一〇一】鬱陀(Udraka)仙。鬱陀は羅摩(Rāma)の子と傳へられる。

【一〇二】「想もなく、非想もない」nāsaṁjñitvam nasaṁjñitā asaṁjñitva は非想たる狀態。

具に其の精麁を知り、麁に背いて微を崇ぶ。若し能く一切を捨てれば、
所作は則ち畢竟る。』[100]阿羅藍說に於て　其の心を悦ばす能はず、
一切智に非るを知り、應に行いて更に勝を求むべしとなし、[101]鬱陀仙に往詣す。
彼は亦、有我を計る。細微境を觀ずると雖も、想と不想の過を見、
[102]想と非想を離れて住し、更に出塗有る無し。然れども衆生は彼に至るを以て、
必ず當に還つて退轉すべし。菩薩は出ずるを求むる故に、復た鬱陀仙を捨つ
更に勝妙道を求め、進んで[103]伽闍山に登る。[104]城と名くる苦行林に
[105]五比丘先に住めり。彼の五比丘を見るに、善く諸情根を攝し、
戒を持して苦行を修め、彼の苦行林に居る。[106]尼連禪河の側は
寂靜にして甚だ樂しむべし。菩薩は卽ち彼に於て　一處にて靜かに思惟せり。
五比丘は彼が精心にて　解脫を求むるを知り、心を盡して供養を加へ、
自在天を敬ふ如し。謙卑して師事し、進止、常に離れず。
猶ほ修行者の　諸根は心に隨つて轉ずる如し。菩薩は勤方便して
當に老・病・死を度すべし。專心、苦行を修め、身を節して餐を忘る。
淨心にて齋戒を守り、行人の堪へざる所。寂默して禪思し、
遂に六年を經歷したり。日に[107]一麻米を食し、形體は極めて消羸し、
未度を度らんと欲求するも、重く惑ひ、逾んとして更に沈む。道は慧解に由り成り、
不食は其の因に非ず、四體は微劣と雖も、慧心は轉增明せり。
神は虛に、體は輕微に、名德普く流聞し、猶ほ月の初めて生じ、
[109]鳩牟頭華の敷くが如し。國に溢れて勝名流れ、士女は競ふて來觀せり。

ṇa)。とは禪定中三、無色界の第一、空處を言ふか?。

【八八】無所有(Akiñcanya)。無所有處(Akiñcanyāyatana)とは禪定中無色界第三に位する。

【八九】文闍草(Muñja)又は「僴叉」。藺の一種又は菅(スゲ)の如き草。

【九〇】梵本十二・六五「これこそ無標で金剛、不滅である。最上の梵である」。(「佛陀の生涯」二一六〇頁)。上婆羅門は最上の婆羅門(Parama-brahma)の誤譯か。

【九一】解脫(Mokṣa)。

【九二】林祇沙(Jaigīṣavya)。閣那迦(Janaka)。波羅沙(Parāśara)。これらはマハーバーラタ(Mbh.)十二、三一八、五八―六に他の數論々師と共に出る。林祇沙は後世の書には出るが、佛所行讃・摩訶婆羅多以前の書には出ない。馬鳴は之等の人名を解脫法品(Mbh. XII)から引用したか。平等「馬鳴と解脫法品との關係に就いて」參照。「毘陀」は漢譯は固有名詞の如く譯すも、梵本十二・六七では Vṛddha(年老へる)で、波羅沙に對する形容詞と考へられる。

【九三】以下の數論說に對する太子の批評(或ひは馬鳴の)はそのまゝ佛敎の數論說への

太子、彼の說くを聞き、
復た重ねて請問せり。
知因に於て捨てざれば、
說いて解脫なりと言ふ者あるとも、
汝、我は清淨なれば、
則ち應に還つて復た縛さるべし。
離散して生の理に乖くも、
捨てれば則ち解脫者と名く。
處々に三種を捨てゝ、
彼は則ち微細にて隨ふ、
壽命は長久を得る。
離れゝば則ち有無し。
是の故に九五求那有れば、
義は異るも體は一なり。
暖と色とは火を離れて、
則ち身有る者無きが如し。
是故に解脫し、
或ひは知か、或ひは無知なり。
若し所知あらば、
我は則ち所用無し。

其の義の趣を思惟し、
九三「汝の勝れし智慧と
則ち究竟道に非らず。
我、是の生法を觀て、
則ち是れ眞解脫なりと謂ふも、
猶ほ彼の種子の如し。
緣に遇へば種復た生ず、
我を存すれば、諸衆生は
而も復た三勝を得る。
微細の過が隨ふ故に
汝、眞解脫と謂ふ。
九四衆數旣に離れず。
・當に知るべし、解脫に非ずと。
若し兩者相離ると言ふ者あるとも、
別の火に得可からず。
九七是の如く求那の前にも、
然る後に身の縛と爲る。
若し知有りと言ふならば、
則ち解脫と爲さず。
我を離れて知有れば、

其の先の宿緣を發して、
微妙深細なる義とを聞けり。
自性・轉變とより離れし知因を
亦種子法と爲す、
若し因緣に會ふに遇へば、
時に地・水・火・風にて
無知業と因と愛とを
畢竟の解脫無し。
我常に有るを以ての故に、
心は則ち方便を離れ、
汝、我所を離ると言ふも、
云何ぞ求那を離れん。
九六求尼と求那とは、
終に是の處有る無し。
譬へば身の前なれば、
亦求尼有る無し。
又九八知因、身を離れば、
則ち應に九九所知有るべし。
若し無知と言ふならば、
我は卽ち木石と同じ。

【七三】疑(Saṁdeha)。
【七四】總遍(Abhiṣaṁplava)。
【七五】不別(Aviśeṣa)。
【七六】無方便(Anupāya)。
【七七】愛著(Saṅga)。
【七八】攝受(Abhyavapāta?)。
【七九】梵本一二・三三、「そして二種の闇黒が考へられる」。(「佛陀の生涯」一五四頁)この方正し。數論頌の疑倒(Viparyaya)の內容に一致す。
【八〇】黠慧(Pratibuddha)。愚闇(Apratibuddha)。顯現(Vyakta)。不顯現(Avyakta)。
【八一】初覺觀禪(Vitarkavatpūrvadhyāna)。梵本には觀の字無し。
【八二】梵天界(Brahmaloka)。梵天界ならば、色界全部を言ふ。大梵天界(Mahābrahmaloka)の意ならば、色界中初禪第三に位する。後者の意であらう。
【八三】覺(Vitarka)。古譯。新譯は尋。
【八四】光音天(Ābhāsura-deva)。色界中第二禪第三位に位する天。
【八五】遍淨天(Śubhakṛtsna Daivata)。色界中第三禪の第三に位する天。
【八六】廣果天(Vṛhatphala Deva)。色界中第四禪の第三位に位する。
【八七】梵本「空なる所」(Ākā-

遠離して喜樂を生じ、　[八一]初覺觀禪を得。　既に初禪樂及び
覺觀心を得て、　奇特想を生じ、　愚癡心樂著す。
心は遠離樂に依り、　命終つて[八三]梵天に生ず。　慧者は能く自ら知り、
方便して[八二]覺禪を止め、　精勤して上進を求め、　第二禪に相應す。
彼の喜樂に味著し　[八四]光音天に生ずるを得。　方便して喜樂を離れ、
第三禪を增修し、　安樂にして勝を求めず、　[八五]遍淨天に生ず。
彼の意の樂を捨つる者は　第四禪を逮得す。　苦樂已に俱に息み、
或は解脫想を生ず。　彼の四禪の報に住し、　[八六]廣果天に生ずるを得。
彼は久壽なるを以ての故に　之を名けて廣果と爲す。　彼の禪定に於て起ち、
有身は過を爲すを見て、　增進して智慧を修め、　第四禪を厭離す。
決定して增進して求め、　方便して色欲を除く。　始めて自身の諸竅は
漸次に虛解を修し、　終れば則ち堅固分となり、　悉く[八七]空觀を成ず。
空觀の境界を略し、　進んで無量識を觀じ、　内に寂靜を善くし、
我及び我所を離れ、　[八八]無所有を觀察して、　是を無所有處となす。
[八九]文闍草の皮骨離れ、　野鳥が樊籠を離る、　境界を遠離し、
解脫するも、亦復た然り。　是の[九〇]上婆羅門は　形を離れて常に不盡なり。
慧者は應當に知るべし。　是は眞[九一]解脫と爲す。　汝の問ふ所の方便
及び解脫を求むる者は、　我、上に說く所の如し。　深く信ずる者は當に學ぶべし。
[九二]林祇沙仙人　及び闍那迦　毘陀・波羅沙
及び餘の求道者は　悉く此の道に從つて　眞解脫を得たり。』

は眼・耳・鼻・舌・身を言ふ。
【六四】知因者は知田者（Kṣetrajña）の誤りか？「知田者」は「我」の意である。因は田（Kṣetra）の誤。我（Ātman）。神我と同意である。數論にいふ根本の精神的原理で、自性清淨・獨存常恒・觀者卽ち純主觀性で、無活動力の非作者である。常恒の解脫である。
【六五】迦毘羅（Kapila）。數論の神話的開祖。
【六六】波闍波提（Prajāpati）。は金胎（Hiraṇyagarbha）の意と思はれる。金胎神を人格化して金胎の色に關係のある黃赤の名を取つてカピラ（Kapila 黃赤）仙と立てたらしい。
【六七】梵本一二・二二「生れ老い、また繫縛され、死ぬ者は—」。（「佛陀の生涯」一五一頁）。
【六八】業（Karma）は、文字通りには動作であるが、字義は現在の性格動作は過去の行動思惟の總體的結果で、現在の業は未來の動作・人格を作り出す輪廻的の意味の「業」である。
【六九】「流轉の因」の意味。
【七〇】梵本一二・二三、「眞實在に達せず。」（佛陀の生涯、一五三）、
【七一】不信（Vipratyaya）。
【七二】我作轉（Ahaṅkāra）。

諸世間の愚夫は
五節を攝受す。
闇と癡と大癡と
[七九]瞋恚と恐怖となり。
爛惰は名けて闇と爲す。
生死は名けて癡と爲す。
愛欲は大癡と名く。
大人も惑を生ずる故に。
懷恨は瞋恚と名く。
心は懼れて恐怖と名く。
此の愚癡なる凡夫は
五欲に計著す。
生死は大苦の本にて
五道の生を輪轉す。
轉生して「我は見る、聞く、
我は知り、我は所作す、」とす。
斯れ緣とし我を計るが故に、
生死の流に隨順す。
此の因は性に非れば、
果も亦有性に非らず。
謂く彼の正思惟者は
四法にて解脱に向ふ。
[八〇]黠慧と愚闇と
顯現と不顯現と
若し此の四法を知れば、
能く生・老・死を離る。
生・老・死既に盡れば、
無盡處を逮得す。
世間の婆羅門は
皆悉く此の義に依り
梵行を修行し、
亦人の爲に廣說せり。』
太子は斯の道を聞き、
復た阿羅藍に問ふ。
『云何に方便を爲し、
究竟は何所に至り、
何等の梵行を行ずるや、
復た應に幾時を齊るべく、
何故に梵行を修し、
法は應に何所に至るべきか
是の如き諸の要義を
我が爲に具足して說かれよ。』
時に彼の阿羅藍は
其の經論の如く說けり。
『自ら慧方便を以て
更に爲めに略して分別せり。
『初め俗を離れて出家し、
乞食に依倚し、
廣く諸威儀を集め、
正戒を奉持し、
少欲にて足るを知つて止り、
精麁、所得に任し、
樂んで獨り閑居を修し、
諸經論を勤習す。
貪欲の怖畏と
及び離欲の清涼とを見て、
諸根の聚を攝して落ち付き、
心を寂默に安んず。
欲惡・不善
欲界の諸煩惱を離れ、

と口と、肛門と生殖器と、また意であると知りなさい。(一九)」、十二・一八・九、「佛陀の生涯」、一五二頁)漢譯は五境(色・聲・香・味・觸)を說く。

【六一】　五大(Pañcabhūtāni)。とは空・風・火・水・地の五要素を言ふ。然しこゝでは後の數論說の五唯(Tanmātra)の性質をも含む五大である。

【六二】　我慢(Ahaṃkāra)。我執の機關で、これある爲自我意識を起す。身體上の作用を我がものゝ如く思ひ、愛憎の生ずるのも、之の司る所。覺(Buddhi)。心理機關の最上位にあり、推理判斷を掌り、他の十二具の經驗をまとめて判斷し、神我に傳へる。未開展(不顯現　Avyakta)。未だ開展も變化もせざる物質的原理を言ふ。自性(Prakṛti)を言ふ。開展又は顯現は之に對す。

【六三】　諸境(Viṣayān)。境は感覺の對照を言ふ。色・聲・香・味・觸を數ふ。諸根(Indriyāṇi)。感覺器官を言ふ。數論派は十一根を數ふ。手・足・口・肛門・生殖器は五作根(業根Karmendriya)である。意又は心(Manas)分別を司る機關で五知根と共同しては外界の知覺を營み、五作根と共同しては行爲を營む。五知根(覺根)と

六三 色・聲・香・味・觸、　是等は境界と名く。　手・足語二道の
是の五は業根と名く。　眼・耳・鼻・舌・身、　是は名けて覺根と爲す。
意根は二義を兼ね、　亦業、亦覺と名く。　自性轉變は因と爲す。
六四 知因者は我と爲す。　六五 迦毘羅仙人　及び弟子眷屬は
此の我の要義に於て　修學して解脫を得、　彼の迦毘羅は
六六 今波闍波提と言はる。　六七 生・老・死を覺知する者は　是は說いて名けて見(顯現)と爲す。
上と相違する者は　說いて名けて不見(不顯現)と爲す。　愚癡・六八 業・愛欲は
是は說いて 六九 轉輪と爲す。　若し此の三種に住すれば、　七〇 是の衆生は離脫せず。
不信・我慢・疑・濫　不別・無方便　境界に深く計著すること、
我所に纒綿することの爲に。　七一 不信は顚倒して轉じ、　異りて作り、亦異りて解す。
「我は說く。」「我は知覺す」　「我は去來す」「我は住す」　是等の如く計る我は
七二 是れ我作轉と名く。　諸性に於て猶豫し、　是非、實を得ず。
是の如き不決定は　是を說き名けて 七三 疑と爲す。　若し法は是れ我と說き、
彼(我)は卽ち是れ意なりと說き、　亦我は覺と業なりと說き、　諸數は復た我と說き、
是の如く分別せざれば、　是は說いて 七四 總濫と名く。　愚と黠、自性と變異等の差を
了解せざるは 七五 不差別と名く。　禮拜して諸典を誦し、　殺生して天祠を祀り、
水火等を淨と爲して　解脫想と作す、　是の如き種々の見は
是は 七六 無方便と名く。　愚癡は計著する所。　意・言語・覺・業
及び境界に計著するは　是は說き名けて 七七 愛著と爲す。　諸物は悉く我が所とするは、
是は名けて 七八 攝受と爲す。　此の如き八種の惑は　生死に彌く淪む。

不顯現とは之に對するものと言ふ。(二二頌)。而して流轉の因を無智・業・渴愛とする。(二三)次に不信我慢・疑惑・范藍・無差別・無方便・執著・墮落を説明する。無智の五重として闇・疑・大癡・二種の闇黑とする(疑倒 Viparyaya の內容と一致)。知田は黠慧と闇愚顯現と不顯現を分別し、老苦を捨てゝ不滅の處に達するといふ。本讃は又修行解脫の過程を詳述する。(四六―)。瑜伽思想を多く混ずる。本讃の數論說は佛敎文獻に傳ふる。この敎說の內、最も詳細のもので、佛本行集經・過去現在因果經に現れるものは、皆本讃の系統に屬し、之を敷延又は簡略にしたものに過ぎぬ。

【五八】 自性(Prakṛti)とは、數論にて物質的原理を現はすに用ふる術語。自性は物質の本源で、その組成要素たる三德が平均して未だ分化せぬ位で、常住唯一不分別・自主獨立の實在を言ふ。

【五九】 變異(Vikāra)。自性に對し、變化する現象界を言ふ。本讃漢譯は轉變と譯す。

【六〇】 以下數句梵本と異る。「五大と我慢と、覺と不顯現とは、まことに自性であると知りなさい。(一八)然し變異とは、諸境と諸根と、手と足

高聲に遙かに讃嘆し、
安慰して『善く來れり』と言へり。
合掌し交ゝ恭敬し、
安吉か不かを相問へり。
相に勞を問ひ畢り已つて、
庠序として坐に就けり。
梵志は太子を見るに、
容貌と[五六]審諦なる儀あり、
沐浴して其の德に伏し、
渴して甘露を飲むが如し。
手を擧げて太子に告げ、
『久しく汝の出家せるを知る。
親愛に纏る鎖を斷ち、
猶ほ象の羈を脫するが如し。
深き智あり、覺慧明かに、
能く斯の毒果を免かる。
古昔の明勝王は
位を捨てゝ其の子に付したり。
人の花鬘を佩び、
朽ちしが故に棄捨せるが如し。
然れど未だ汝盛年にして
聖王位を受けざるに若かず。
汝の深く固き志を觀るに、
正法の器と爲るに堪ゆ。
當に智慧舟に乘り、
生死の海を超度すべし。
凡そ人、誘來して學ぶに、
才を審して後に教ふ。
我今已に汝の
堅固にして決定の志あるを知る。
但し當に任つて學ぶべし。
終に子に隱くす無し。』
太子は其の教を聞いて、
歡喜して報じて言ふ。
『汝は平等心を以て
善く誨へて愛憎なし、
但く當に虛心にて受くべし。
所願便ち已に獲ん。
夜行くに炬火を得、
方に迷ふ者の導かれ、
海を度るに輕舟を得る、
我、今亦是の如し。
今已に哀許を蒙り、
敢て心の所疑を問はん。
生老・病・死の患を
云何にして免る可きか』
爾の時阿羅藍は
太子の所問を聞いて、
自ら諸經論を以て
略して其の解說を爲せり。
[五七]『汝は是れ機悟の士にて
聰中の第一なり。
今當に我の
生・老・起・滅の義を說くを聽くべし。
[五八]自性と [五九]變異と生・老・死の
此の五は衆生と爲す。
[六〇]自性は純淨と爲す、
轉變とは [六一]五大
[六二]我慢覺及び見(顯現)とにて、
隨つて境根は變異と名く。

外道說より卓越するのを現さんとする一の方便と見る可きであらう。

「五四」 甘庶の月光冑。甘庶(Ikṣuvāku)族は月種にあらずして日種族である。冑は子孫、後裔の意。

【五五】 阿羅藍(Arāḍa)。原始的數論教說の論師にされる。アラーダ・カーラーマ(Arāḍa-kālāma) を一仙とするもの(本讃・本行集經・大莊嚴經)と、二仙名とするもの(因果經・修行本起經)がある。住所も定說なく、王舍城附近、毘舍城への途中、毘舍離城附近の異說がある。

【五六】 審諦。つまびらか、明か。

【五七】 以下阿羅藍の論述する所は確かに原始的數論教義である。本讃では神我(Puruṣa)を說かぬが、我(Ātman)並びに知田(Kṣetrajña)は之に相當する。五唯(Pañcatanmātra)は表面に現れぬ。本讃によれば、薩埵(Sattva)とは自性(Prakṛiti) 變異(Vikāra) 諸根諸境・手足・口・肛門・生殖器・意(一八頌) 生・老・死であるとし、自性とは五大(Pañcabhūtāni)我慢(Ahaṃkāra)覺(Buddhi)不顯現(Avyakta)とする。(一九)。我は知田であり、顯現(又は開展)とは生・老・死する者、

三界の有爲の果は　悉く我が樂しむ所に非らず。　[五〇]諸趣は流動の法にて、
風水の草を漂すが如し。　是れが故に我は遠く來り、　眞解脫を求むるを爲す。
阿羅藍有りて　善く解脫道を說くを聞く。　今當に彼の
大仙牟尼の所に往詣すべし。　誠言にて苦を抑斷せられよ。　我今汝に[五一]誨謝す。
願はくは汝の國安穩なれ。　善く護つて帝釋の如くなれ。　慧は明に天下を照し、
猶ほ盛なる日光の如くなれ。　殊勝なる大地主にて　端心にて其の命を護れ。
正しく化して其の子を護れ。　法を以て天下に王たれ。　[五二]氷雪は水を怨と爲す。
火を緣とし烟幢起る。　烟幢は浮雲と成り、　浮雲は大雨を興す。
鳥有り、空中に於て　雨を飲んで身に雨らさず。　重怨を殺し、宅を爲し、
居宅の重怨を重ねて殺し、　重怨を殺す者有れば、　汝今應に彼を伏すべし。
其をして解脫を得しめ、　飲んで身に雨らさゞる如し。』　時に王は卽ち叉手し、
德を歎ふの心にて歡喜し、　『汝の求むる所の如く、　願はくは果を速かに成らしめよ。
汝速かに果を成し已れば、　當に還りて我を攝受すべし。』　菩薩は心內に許し、
『要つて汝の願に隨はしめん。』と。　辭を交して路に隨ひ、　阿羅藍の所に往詣せり。
王は諸の群屬と　合掌して自ら隨ひ送れり。　咸、奇特想を起して
王舍城に還れり。

[五三]阿羅藍欝頭藍品第十二

[五四]甘蔗族の月光冑は　彼の寂靜林に到り、　牟尼大仙[五五]阿羅藍を
敬詣せり。　迦藍玄族子は　遙く菩薩の來るを見て。

【五〇】趣は天・人・地獄・餓鬼・畜生等を言ふ。法は狀態、有樣の意。
【五一】誨謝。誨は教ふ、さとす、示す、導く。
【五二】梵文下の如し。「寒の敵の火焔から起つた椿事の中に、鳥は身を救ふ爲寒の敵の仇(水)に赴くやうに、御身は事起つた時に心を救ふ爲に、御身の家の敵を打仆すべき者に赴きなさい。」(十一・七一「佛陀の生涯」二四七頁)。「寒の敵」とは、火を言ふ。「寒の敵の仇」とは「火の仇」卽ち「水を言ふ」。鳥は火を止める爲に水の所に飛んで行く。そのやうに自分の敵を、その敵の力を借りて滅す。マヌ(Manu)七・一五八看よ。然しこゝでは自分の感情を己の反對のもの(理智の如き)によつて滅するのを意味してゐるやうである。「家」とは地上のものを言ふと同時に、天上のもの卽ち涅槃(Nirvāṇa)を指すのであらう。
【五三】(Arāḍadarśana-sarga) 佛傳て太子が二仙から外道教說を學び之を棄てたと記述するのは、諸傳に出ずる所である。然し多少外道教說を學んだとしても、當時に數論瑜伽思想があつた事は疑問であり、むしろ佛傳作者が佛說は之等

生・老・死を度らんと欲し、　身を節して乞食を行ず。　寡欲にして空閑を守り、
後世惡道を免る。　是は則ち二世安し。　汝、今我を哀れむ勿れ。
當に王爲る者を哀れむべし。　其の心は常に虚渇し、　今の世に安きを獲ず、
後世に苦報を受く。　汝、名勝族を以て　大丈夫の禮義にて
厚く懷いて我に處し、　同世の歡娯を樂しむ。　我も亦、應に德を報ずべし。
汝は我と利を同じうするを勸む。　若し[四八]三品樂を習ひ、　是を世の丈夫と名くるならば、
此れも亦、非義を爲す。　常に求むるも足る無き故に。　若し生・老・死無ければ、
乃ち大丈夫と名く。　汝、少壯は輕躁にして、　老ば則ち應に出家すべしと言ふ。
我、年耆たる者を見るに、　力劣へて堪ふる所無し。　盛壯時の志猛く、
心決定せるに如かず。　死賊は劍を執つて、　常に其の便を伺ひ求む。
豈に年老ゆるに至るを聽き、　志を遂げて出家せんや　無常は獵師と爲り、
老の弓と病の利箭にて　生死の曠野に於て　常に衆生の鹿を伺ひ、
便を得て其の命を斷つ。　孰れか年壽を終ふるを聽かんや　夫れ人の所爲は
若くは生じ若くは滅する事あり、　少長及び中年は　悉く應に勤方便すべし。
[四九]祠祀して大會を修む。　是れ皆愚癡の故なり。　應當に正法を崇むべし。
反りて殺して以て天を祠る。　生くるを害して福を求む。　此は則ち無慈悲の人なり。
生を害する果が常に有るとも、　猶ほ尚ほ應に殺すべからず。　況んや復た無常を求むるに、
生を害して祠祀せんや。　若し戒・聞・慧　修禪寂靜に果無きならば、
應に世間に從つて祠祀して　大會を設く可らず。　殺生して現樂を得るとも、
慧者は應に殺すべからず。　況んや復た衆生を殺して、　後世の福を求めんや

【四八】法財愛の婆羅門教の人生の三つの目的。太子の志す所は、王の言ふ三の目的ではない。

【四九】以下後半は佛陀の不殺生の思想を髣髴せしめる。この詩文は馬鳴によつて作られたが、太子は當時この思想の種子は既に有したらう。犧牲獸を殺して得られる幸が常住であつても、爲すべきでなく、無常ならば尚更である。他を苦しめて自利を計るは爲すべきでない。この思想は傳統的婆羅門教的思想・吠陀主義に對する、無殺生主義の偉大なる反對思想である。

皆苦を息むる爲の故なり。是の故に應當に知るべし。五欲は自在に非らず。
人の熱病を得て、諸冷治藥を求むるが如し。貪り求めて苦患を止む。
愚夫は自在と謂ふ。而して彼の資生の具も亦定めて苦を止むるに非ず。
又[四二]苦法を增さしむる故に、自在法に非ず。溫き衣も常に樂に非ず。
時過ぎれば亦苦を生ず。[四三]月光は夏なれば則ち涼し。多なれば則ち寒苦を增す。
乃至世の八法は悉く決定相に非らず。苦樂の相も定らずして、
[四四]奴隸も王も豈に間隔有らんや。敎令を衆の奉用するは王を以て勝と爲す者なり。
然れど敎令は卽ち是れ苦にして猶ほ擔ふて能く重きを任ふが如し。普く世の輕重を銓り、
衆苦、其の身に集る。王の爲に多く怨憎し、親しむと雖も或ひは患を成す。
親しみ無くして獨立す。此れ復た何ぞ歡び有らんや四天下に王たりと雖ども、
用ふるは皆一に過ぎず。[四五]萬事を營み求むるも、[四六]唐苦何ぞ身を益せんや
未だ貪り求むるを止むるに若かず。息事は大安と爲す。王位に居れば五欲樂あり、
王ならざれば、閑寂にして歡ぶ。歡樂は既に同等なり。何ぞ王位を用ひて爲さんや
汝、方便を作り、我を五欲に導く勿れ。我が情の願ふ所は清涼にて虛通なる道なり。
汝は相饒益し、我が求むる所を助成せんと欲す。[四七]我は怨家を畏れず、
生天の樂を求めず。心に俗利を懷かずして天冠を捨てたり。
是の故に汝の情に違ひ、來旨に從はず。毒蛇の口を免れしが如し。
豈に復、還りて執持せん。炬を執りて自ら燒く。何ぞ能く速かに捨てざる
目有り、盲人を羨む。已に縛を解かれ、復た縛を求む。富者にて貧窮を願ひ、
智者にて愚癡を習ふ、世に此の如き人有れば、則ち我、應に國を樂しむべし。

れて、近寄つて殺される。蛾は火の輝に誘はれて火の中に飛び込んで身を亡ぼす。

【四二】苦法。苦の狀態の意。法(Dharma)は正法の外に、「狀態」の意あり。

【四三】この頌は對句の照應は妙にして、韻律も面白い。

【四四】奴隸(Dāsa)。ダーサ(奴隸)とは征服族のアールヤン Aryan(貴きもの)に對し、被征服民族を言ふ。征服された時、奴隸にされた。

【四五】これ等の頌句は梵文は言辭的にマハーバーラタ Mbh)十二・三二〇・一三五―一四〇に一致す。この間に何等かの直接的關係あるを暗示す。或ひは解脫法品(Moksadharma, Mbh. XII.)が佛所行讃に影響したか。平等「馬鳴と解脫法品との關係」一・四を見よ。

【四六】唐苦。唐は大なり、至大なり。又は空し。

【四七】太子の甁沙王への出家理由の説明である。太子の目指す所は現在の快樂でも、天界の歡樂でもない。

悪子等も財を共にし、　亦臭[三八]段肉を　一聚鳥が争ふが如し。
貪と財とは亦是の如し。　智者の欣ばざる所。　財有る所、集る處は
多く怨憎を起す。　晝夜自ら守衛して　人の重怨を畏るゝが如し。
[三九]東市は標下を殺す。　人情の憎悪する所。　貪・恚・癡は長標にて
智者は常に遠離せり。　山林河海に入つて、　多く敗れて少しく安んず。
樹の高き條の果の如く、　貪り取つて多く墮ちて死す。　貪欲の境は是の如し。
見ると雖も取る可きは難し。　苦んで方便して財を求め、　集むるは難くして散ずるは易し。
猶ほ夢の所得の如し、　智者豈に保持せんや。　偽りて火坑を覆ふが如く、
踏む者は必ず陥ちて焼死せん。　貪欲の火は是の如し。　智者の遊ばざる所。
彼の[四〇]鳩羅歩　彌瑟膩・難陀　彌郁利・檀荼の滅びしが如く、
屠家の刀机の如し。　愛欲の形も亦然り。　智者の爲さゞる所。
束身、水火に投じ、　或ひは高巖に投じて、　天樂を求むるも、
徒らに苦んで利を獲ず。　[四一]孫陶・鉢孫陶の　阿修羅兄弟は
同じく生れて相愛念し、　欲の爲に相殘殺せり。　身死し、名倶に滅ぶ。
皆貪欲に由るの故に。　貪愛は人を賤しからしめ、　鞭、杖駈策の苦あり、
愛欲は卑しく、希望は　長夜形神を疲らす。　*麋鹿は貪聲にて死に誘はれ、
飛鳥も色貪に隨ひ、　淵魚は鉤餌を貪り、　悉く欲の爲に困る所となる。
資生の具を觀察するに、　自在法と爲さず。　食は以て飢患を療し、
渇を除く故に水を飲む。　衣を被るは風寒を却け、　臥は以て睡眠を治す。
行に疲るゝが故に乗を求め、　立に倦きて床座を求む。　垢を除く故に沐浴す。

【三八】 段。借る、借す。
【三九】 東市 標下 人情所憎悪。
【四〇】 鳩羅歩(Kuruva)。クル(Kuru)の子孫。クルは月種族で日の娘タパティー(Tapatī)によつて生れたサンヴァラナ(Samvaraṇa)の子。印度北西部を治め、その地はクルの地(Kuru-kṣetra)と呼ばれる。ドリタラーシュトラ(Dhṛtarāṣṭra)とパーンヅ(Pāṇḍu)の祖先。彌瑟膩(Vṛṣṇi)はヤヅ(Yadu)の子孫。ヴリシュニの子孫なので、クリシュナ(Kṛṣṇa)にはヴアールシュネーヤ(Vārṣṇeya)の名がある。Vṛṣnis(複數)とはマヅ(Madhu)の子ヴリシュニ(Vṛṣṇi)の子孫を言ふ。マヅの先祖はヤヅ(Yadu)の長子。難陀(Andhaka) クローシュトリ(Kroṣṭṛi)の孫にてユダージット(Yudhājit)の子、ヤダヴァ(Yadava)族に屬し、兄弟ヴリシュン(Vṛṣṇi)族の祖先。
【四一】 孫陶・鉢孫陶(Sunda-upasunda)阿修羅で、ニスンダ(Nisunda)の子である二神格で、二人を破滅せしめる爲に天女ティローツタマー(Tilottamā)が天から送られた。二人は彼女の爲に争ひ、互に殺された。
*麋鹿は獵師の鹿の眞似聲に誘は

國滅んで命終れり。
農沙より帝釋に歸す。
唯大力の居る所。
長髪は地に垂る丶如くにて、
終に欲の爲に壞つ所となる。
千臂大力王は
亦貪欲に由る故なり。
少味なる境界の欲にて
毒を欲して誰か服食せん
若し貪欲無き者は
貪欲を滅除す。
衆生の貪樂する所は
死して當に惡趣に墮つべし、
勸めずして自ら亡失す。
三七 智者は貪著せず。
非常離散の時、
智者の著せざる所。
終身長く苦を受け、
智者何ぞ出りて近かん。
徒らに自ら牙齒を困らす。

三六 波羅より大帝釋に、　大帝釋より農沙へ、
天主豈に常有らんや　國土は堅固ならず、
草衣を被服し、　果を食し、流泉を飲み、
寂默にして所求無し。　是の如く苦行を修し、
當に知るべし、五欲境は　行道者の怨家にて
勇健なりとも其を敵と爲し難し。　羅摩仙の人を殺せしも、
況んや我が刹帝利種は　欲の爲には牽かる丶所にあらず。
子息は長じて彌增すは　慧者の惡む所。
種々に苦んで利を求め、　悉く貪の使ふ所と爲る。
勸苦すれば再生せず、　慧者は苦の過を見て、
世間の謂つて善と爲すは、　卽ち皆是れ惡法なり。
諸の放逸の故を生ず。　放逸は反つて自ら傷け、
勸方便して得し所、　而して方便して護る所、
方便するも能く留むるにあらず。　猶ほ假借物の若きものに
貪欲は勸苦して求め、　得已つて愛著を增し、
益々復た苦惱を增す。　炬を執り還つて自ら燒く。
愚癡にて卑賤なる人は　慳貪にて毒燒心あり、
未だ嘗て安樂を得ず。　貪恚は蛇毒の如し。
勤苦して枯骨を嚙み、　無味にして充滿せず、
智者の訾めざる所。　王と賊、水と火とに同じく分たれ、

ルヴアシイーと樂んだ。
〔三六〕 波羅(Bali)。善良な德高きダイトヤ(Daitya)王ヴイローチヤナ(Virochana)の子。信仰と苦行の故にインドラを破り、諸神を卑み、三界への權威を廣めた。諸神はヴイシユヌに守護を祈り、ヴイシユヌはバリを抑制する爲一寸法師となり現れて、地を三步にて步む力を乞ひ得て、天地を二股ぎに步んだ。ヴイシユヌはバリに感謝して、彼をパーターラ(Pātāla)に止めたと。

〔三七〕 以下の數頌に、殆んど同樣の繰返しあり、梵本は韻律整ひ、技巧的である。蓋し之等の諸頌の韻律はよく、措辭は巧妙である。

是れ牢固藏と名く。
國財は非常の寶にて
散ずると雖も後に悔ゆる無し。
且く今所見を以て
眞解脱を求めんと欲す。
盛毒蛇、凍雹
流轉して我が心を勞す。
詐僞・虛・非實にして
況んや常に其中に處りては。
天樂も尙可ならず、
終に滿足するの時無し。
世間の諸非義は
樂著して覺らず。
王は四海內を領して
終に止り足る時無し。
四天下を王領して
圖らんと欲して命終を致せり。
欲を縱にして心高慢に
卽ち蟒蛇中に墮せり。
天女を取つて后と爲し、

守り惜んで己が利を封ずれば、
惠施するを福業と爲す。
既に汝の厚く懷くを知り、
率心して相告げん。
親を捨て、恩愛を離れ、
猛盛火を畏れず。
五欲は非常の賊にて
猶ほ幻化人の若し。
五欲は大礙を爲し、
況んや人間の欲に處るは。
猶ほ盛風猛火の
五欲境に過ぐるは莫し。
智者は五欲を畏れ、
猶ほ外に更に希求す。
[三二]曼陀轉輪王は
復た[三三]忉利天を希ひ、
[三四]農沙王は苦行を修し、
仙人に車を挽步せしめ、
[三五]罡羅轉輪王は
仙人の金を賦斂し、

是は必ず速に亡失す。
兼ねて善知識に施せば、
違逆の論を爲さず。
我、生・老・病・死を畏れ、
豈に還つて五欲を習はんや
唯五欲境を畏れ、
人の善珍寶を劫め、
暫く思ひても人をして惑はす。
永く寂滅法を障つ。
五欲は渴愛を生じ
薪を投じても亦足る無き如し。
衆生は愚貪の故に
非義に隨せず。
愛欲は大海の如く
普ねく天に黃金を雨らし、
帝釋の玉座の半座を分ち
三十三天に王となり、
斯の放逸行を緣とし、
忉利天に遊び、
仙人の念は呪の如く

【三二】曼陀轉輪王(Māndhātṛ)。前出、(第十品・三一)
【三三】忉利天(Trāyastriṃśa)。前出。
【三四】農沙王(Nahuṣa)。前出(第一品一一註を見よ。)
【三五】罡羅轉輪王(Aiḍa)。アイダはイダー(Iḍā)の子。プルーラヴアス(Purūravas)の事。プルーラヴアスはマヌの娘イラー(Ilā)から生れたブッダ(Buddha)の子で、月の孫。ウルヴアシイー(Urvaśī)はミトラ(Mitra)とヴアルナ(Varuṇa)の呪で、天から降つた女神である。二人は互に愛し、ウルヴアシイーは自分の二牡羊を盜まれぬ事と彼女に彼の裸體を見られぬ事を條件として結婚した。諸神は彼女が天に歸るのを望んで、ガンダルヴアは夜來て牡羊を盜み、ウルヴアシイーの叫聲で覺めて、プルーラヴアスは裸で之を追ひ、稻妻の光で彼女に裸體を見られる。ウルヴアシーは姿を消し、彼は探して天女と浴する彼女を見出し、一年に一夜會ふこととし、五子を得た。焔を三分するを得て、ガンダルヴアに列し、ウ

我、其の土を奉るを願ふ。[二五]小壯にて五欲を受け、中年にて用財を習ひ、
年耆い、諸根熟すれば、是れ乃ち法に順ふの時、壯年は法財を守るも
必ず欲の爲に壞つ所となる。老れば則ち氣虛微にして隨順して寂默を求む。
耆年は財欲を愧じ、行法を世を擧げて宗とす。壯年は心輕躁にして
五欲境を馳騁し、[二六]疇侶の契纒綿として情交相感じて深し。
年宿ければ[二七]綢繆寡く順法者の宗ぶ所にて、五欲悉く休廢し、
樂法心を增長す。具に王者の法を崇め、[二八]大會を行つて天神を奉じ、
當に神龍の背に乘り、樂を受けて天に上昇すべし。先勝の諸聖王は
身を寶瓔珞にて嚴にし、祠祀して大會を設け、終に歸つて天福を受けたり、』
是の如く瓶沙王は種々と方便して說けり。されど太子の志は堅固にして
動かざること須彌の如し。

[二九]答瓶沙王品第十一

瓶沙王、隨順し、安慰し勸請し已るや、太子は敬つて答謝し、
深く來言を感ぜり。『善く世間宜を得たり。所說、理に乖かず、
[三〇]訶棃名族冑にて人と爲り善知識にて、義を懷き、心虛に盡し、
法は應に是の如く說くべし。[三一]世間說は凡品にて仁義に處る能はず、
薄德にて近情に過ひ、豈に名勝事を違せんや先勝の宗を承習し、
崇禮し敬讓を修めたり。能く苦難の中に於て周く濟つて相棄てず。
是は則ち世間の眞善知識の相と爲す。善く友に財を通濟するは

【二二】羅。連ねる、まとふ。
【二三】三事(Trivarga)。婆羅門教の言ふ人生の究極の三つの目的、法財愛 (Dharmārthakāma)。
【二四】曼陀轉輪王(Māndhātṛ マーンダートリ)。日種の古代轉輪王。この句には轉輪王思想が高潮されてゐる。
【二五】以下婆羅門の人生の三目的の思想高潮される。
【二六】疇侶。疇は配遇のこと。即ち夫婦。
【二七】綢繆。もつれ合ふこと。
【二八】大なる祭式。
【二九】(Kāmavigarhaṇa-sarga)。この品の太子の愛慾・王位非難の論旨は太子の心境の如く明徹で、しかも辭句が美妙で、韻律が流麗である。而して太子は毅然として解脫の彼岸を凝視してゐる。
【三〇】訶梨名族冑(Haryaṅka-kula)。訶梨(Hari)は獅子のこと、卽ち獅子を標とする名族の意。瓶沙王の族を言ふ。
【三一】非婆羅門的。超世間的。求道者の思想・愛慾・王權の批判殊に鋭し。

盛徳は相ひ承襲し、　我との欽情は久しく蘊積せり。　今所疑を決せんと欲す。
[一六]日光の元宗にて　[一七]祚隆く、已に萬世にて　徳をして遺嗣を紹がしめ、
弘く廣く今に萃る。　爾、賢明にして年幼少にて　何が故にして出家せるや。
超世の聖王子　乞食して榮を存せず、　[一八]妙體應に香を塗るべく、
何が故に[一九]袈裟を服せるや　[二〇]手は宜しく天下を握るべきに、　反つて以て薄飡を受く。
[二一]若し父に代り禪を受け、　其の土を享けざれば、　吾今半國を分たん。
庶くは望んで少しく情を留めよ。　既に親嫌を免逼して、　時過ぎて所從に隨はれよ。
當に我が誠言を體し、　徳を貪つて良儔と爲るべし。　或ひは名勝族を恃み、
才徳容貌兼ね、　高節を降し屈下して　人恩を受くるを欲せざれば、
當に勇健なる士と　器杖と隨軍資とを給すべし。　自力にて廣く[二二]收羅すれば
天下孰れか推ざる　明人、時を知りて取れば、　法財五欲增す。
若し三利を獲ざれば　終始徒らに勞勤す。　法を崇べば財色を捨て、
財を得るには一世人爲れ。　富財を得るには法欲を捨てよ。　此くすれば則ち財資を保つ。
貧窶にして法を忘れゝば、　五欲孰れか能く歡ばん。　是の故に[二三]三事倶にして
徳流れて道宣し。　法財五欲備りて　世の大丈夫と名く。
圓相身をして徒勞にて　功無からしむる無れ。　[二四]曼陀轉輪王は
四天下を王領し、　帝釋天の半坐を分ちしも、　力、天に王たる能はず。
今汝は、膺長臂にして　人天の境を攬るに足る。　我、王力を恃みて、
强く相留めんと欲するにあらず。　汝、形を改め、好んで　出家の衣に愛著するを見る。
既に以て其の徳を敬ひ、　苦を矜み、其人を惜む。　今、行乞して求むるを見て、

---

nirmāṇa)。
【一三】摩醯首羅(Maheśvara)。シヴァ神(Śiva)のこと。梵本は自存者(Svayaṁbhū)とあり、然らば梵天(Brahmā)のこと。帝釋(Śakra)。
【一四】印度醫學では大(Dhātu):卽ち身體組成要素が調和する時健康、不調和の時は不健康であるとする。三大の場合は風・膽汁・粘液を擧げる。
【一五】以下婆羅門の一般思想に立つ王者の思想。
【一六】梵文太陽にて初る(Āditya-pūrvaṁ)にて、卽ち日種族に初まるの意。釋迦族は日種族甘庶族にて、名族と稱せられる。
【一七】祚。位。
【一八】塗香である。赤き栴檀又は白檀の粉末にて軟膏を作り、香料・顏料として身體に塗布する。香料の外、一は清涼劑として用ひられる。價高き故、貴人の外常用しない。
【一九】袈裟(Kaṣāya)。袈裟は屢捨場に捨てられた衣片で作られ、赤褐色をしてゐる。
【二〇】この句は王の屬性を示し、次の句は乞食の屬性を現はす。
【二一】自らの王國の半又は軍勢を受けよとの缾沙王の太子への勸告は、多くの傳が之を傳へる。

備さに何の因緣なるかを問ふ。彼は恭しく王の樓下に跪き、具に見聞する所を白す。
『昔聞く釋氏種に　奇特殊勝なる子あり、神慧、世表に超へ、
應に王たらば八方を領すべしと。【六】今出家して此に在り、衆人悉く奉迎せり。』
王は聞いて心に驚喜し、形は留るも神は已に馳す。使者に勅し、速に還り、
進趣宜を伺候せしむ。彼、敎を奉じて密かに隨從し、施爲する所を瞻察せり。
太子は澄靜なる端目にて視て、庠步して眞儀を顯し、里に入つて乞食を行じ、
諸の乞士の先を爲す。形を【七】斂して心亂れず、好惡、安ぜざる靡し。
精麁、【八】所得に隨ひ、鉢を持して閑林に歸り、食し訖つて清流に漱ぎ
靜を樂んで【九】白山に安んぜり。青林は高崖に列り、丹華は其の間に殖へ、
孔雀等の衆鳥は　翻飛して亂れ鳴けり。法服は明かに鮮明にして、
日の【一〇】扶桑を照すが如し、使は彼の安住するを見て、次第にして具さに上聞せり。
王は聞いて心馳せ敬ひ、即ち勅して駕を嚴にして行き、天冠にて花服を佩し、
師子王の遊步をなし、諸の宿重なる　安靜審諦士を簡擇し、
百千衆を導從し、雲の【一一】白山に騰昇する如し。菩薩の威儀を見るに、
諸情根を寂靜ならしめ、山の巖室に端坐し、月の青天を麗くするが如し。
妙色あり、淨く端嚴にして　猶ほ【一二】法の化身の若し。虔心肅然として發し、
恭しく步み、漸く親近せり。猶ほ帝釋の　【一三】摩醯首羅に詣でる如し。
容を斂し、禮儀を執り、彼の【一四】和安を敬問す。菩薩は詳にして動き、
隨順し反つて相酬ゆ。時に王は勞めて問ひ畢り、清淨なる石に端坐し、
瞻矚し神儀を瞻て、顏の和情に交々悅べり。【一五】『伏して聞く、爾は名高族にて

設さる。故に五山城の異名あり。

【五】自在幢。自在天(Īśvara)即ちシヴァ神(Śiva)の旗の意味。彼の旗は牡牛の標がある。

【六】眉間白毫相。指間縵綱相と共に妙相三十二相の一である。「聖王に應ずるの相」とは轉輪王として一國を統一するに相應しきを言ふ。太子は佛になるか或ひは轉輪王たるべしと相師に豫言された。

【七】歛は、欲す與ふ、貪るの意にて相應しからず、斂の誤字か。然らば取る、收む、聚むをさるるの意。

【八】乞食して與へられたものは美食でも惡食でも嫌はず受けるの意。

【九】白山。槃茶婆パーンダヴァ山(Pāṇḍava)のこと。パーンダヴァは「青白き」意。今耆那敎の洞穴があるサンパンダ山か?、他傳では二ル山とする。今は瀧がなく、岩山。元は林にて瀧があつたらしい。玄奘が行つた時には水が多く流れてゐたと。

【一〇】扶桑。東海の中にある神木をいふ。「樹長は數千丈、經三千圍、樹兩根を同して偶生し、更に相依倚す」と。

【一一】白山(Pāṇḍava)。

【一二】法の化身(Dharmakāya-

瓶沙王詣太子品第十[一]

太子は王師及び　正法大臣に辭して、　浪を冒して[二]恒河を濟り、
路、[三]靈鷲巖に出る。　根を五山に藏し、　特に秀で峙中亭し
林木花果茂り　流泉は溫涼に分れたる　彼の[四]五山城に入れり。
寂靜猶、天に昇りし如し、　國人は太子を見るに、　容德深く且つ明に、
少年の身は光澤あり、　無比の丈夫形にて、　悉く奇特想を起し、
[五]自在幢を見るが如し。　橫行する者は足を止むるを爲し、　後に隨ふ者は速かに馳せ、
先に進めるは悉く迴顧し、　目を瞻てゝ視て厭く無し。　四體諸相好を
隨見して目を移さず、　恭敬し來つて奉迎し、　合掌し禮して問訊せり。
咸皆大いに歡喜し、　宜に隨つて供養し、　尊勝顏を瞻仰し、
俯して種々の形を愧じたり。　素の輕躁儀を政め、　寂默し肅敬を加へ、
結恨心は永く解け、　慈和の情は頓に增せり。　士女は公私の業を
一時に悉く休廢し、　形を敬ひ、其の德を宗び、　觀に隨つて盡く歸るを忘れたり。
[六]眉間の白毫相と　脩高なる紺靑目とあり、　擧體は金光曜し、
淸淨なる網縵手あり、　出家形を爲すと雖も、　聖王に應ずるの相有り。
王舍城の士女は　長幼悉く安からず、　『此の人も尙出家せり。
我等何ぞ俗に歡ぶや。』　爾の時瓶沙王は　高觀上に處り、
彼の諸士女の　惶々として常儀に異るを見、　勅して一外人を召し、

【一】瓶沙王（Śreṇya 卽ち頻毘沙羅王）が赴いて太子に歸城し俗利に從ふべきを勸告した記事は經論に多い。最後のものは經集の出家品で、進める佛傳之に次ぎ、萍沙王五願經の如きものもある。十二遊經上には頻毘娑羅王は出獵し、太子の山澤の間を遊行するのを見、來訪したと記す。王の太子來詣はあり得ることで、この間の十・十一品の二人の問答は在家と出家との心境を對照し、家にある者の究極の理想と家を出たものゝ究竟の理想の對照である。

【二】恒河（Gaṅgā）。現在のガンヂィス（Ganges）河。雪山から發し、その山麓を流れ、大沃野を潤して、ベンガル灣に注ぐ。その流域にヴェナレス等の聖跡城市多く、佛教又之を中心として起り、王舍城佛陀伽耶等の佛跡がこの附近にある。

【三】靈鷲巖（Gṛdhra-kūṭa）。王舍城附近にある岩山。山頂鷲の形を爲す爲この名ありと。佛陀は成道後こゝに居られること多かつた。

【四】摩訶陀の都城王舍城は周圍に五山あり、その上に建

斯の要誓を表し已り、
猶ほ盛日光の如し。
相謂ひ計已に盡き
敢へて強く逼留せず。
中路を徘徊し、
審諦機悟の士を選擇し、

除ろに起ちて長辭す。
[一四九]王師及び大臣は
唯當に辭退して還るべし。
王命を敬奉する故に
行邁して顧みて遲々とし
身を隱し、密かに伺候せしめ、

太子の辯鋒は炎え、
言論能く勝る莫し。
深く太子を敬嘆して
敢へて速疾に還らず、
黠慧人にて
然る後に捨てゝ還れり。

佛所行讚卷第二

【一四九】他傳ではこの使者は五人にて、憍陳如・跋提・婆沙波・摩訶男・阿悅示（後の五比丘）であるとする。（又は五比丘の供奉は苦行林修行の時といふ）。或ひは西域記は五人とは家族三人、男二人、有部律は五人中三人は迦毘羅城の出、二人は拘利城の出であるといふ。

[一四七]婆私晝牟尼
久くして亦本國に歸れり。
悉く王の領國に還りて
正法にて化するは過ならず。』
常理を以て亂れず、
大臣に答ふ。
有無の說を作すも、
決定して我自ら知らん。
眞實の義有る無し。
信は豈に他に由つて生ぜんや。
夜の大闇中に於て
世間は疑惑を生ずるも、
寧ろ苦んで淨法を行じ、
一の決定相ある無し。
過れる虛僞の說を詐るは、
家を捨て、梵行を修し、
此等は隨行と爲す。
略ぼ其の要義を說けり。
我身は終に易らず。
義を以てせざれば畢りて

及び安低疊は
是の如き等の先勝は
燈の世間を照すが如くす。
太子は大臣の
無礙にして庠序とし、
[一四八]『有無等の猶豫は
我決定して取らず。
世間の猶豫の論は
此れ則ち我安せず。
猶ほ生盲人の
當に復た何の從ふ所あるべき
我は設ひ眞實を見ざるとも
樂んで不淨を行ずべからず。
眞言を虛心にて受け、
智者の言はざる所。
終に本國に歸還せるも、
智者は依らざる所なり。
「日月地に墜ち、
退いて非處に入るより、
本國に還歸し、

山林に梵行を修し、
正法と善名稱あり、
是の故に山林を捨て、
愛語と饒益の說を聞き、
固志安隱說にて
二心疑惑增して、
智を淨め、苦行を修し、
展轉して相傳習せるも、
明人は自ら眞僞を別つ。
盲人を以て導と爲すが如し。
淨不淨の法に於て
應に淸淨道を行ずべし。
彼の相承の說を觀るに、
永く諸過患を離る。
說の如く羅摩等は
五欲に服習する者は
我今當に汝の爲に
須彌雪山轉ずるとも
寧ろ身を盛火に投ぜん。
五欲火に入らず」。』

【一四五】惡魔ラーヴァナ(Rāvaṇa)が印度本土を騷したのをラーマが征伐したのを指すか。【一四六】婆樓婆(Śālva)。頭樓摩(Druvākṣa)。【一四七】婆私晝(Vaśiṣṭha)と安低疊(Antideva)との關係は大婆羅多詩(Mahābhārata)十二・三五九一に出る。【一四八】太子は大臣の說得に對し、後世の有無等は自分で解決すべく、中途歸國者は模範となり得ず、たゞ眞理を求め、求道すべしと宣言する。その眞劍・眞摯・決意の鞏固は後年の佛陀の面目が躍如としてゐる。

方便にて移す可きを言ふ。
（一三九）自性皆な決定す。
老・病・死等の苦は
火は水をして煎消せしむ。
人の胎中に處り、
誰か之を爲す者有らんや
及び種々の禽獸
（一四一）自在天の所爲なり、
若し由つて生ずる所有れば、
解脱を求めんや
由生無く方便を要めて、
祖宗に負はざる如く
この三の負ふ所無ければ、
此の三の解脱を求む。
汝、解脱を求めんと欲せば、
解脱道は須臾ならん。
昔　（一四四）奄婆梨王は久しく
家に還りて王位に居れり。
國風の俗離せるを聞き、
名けて※頭樓摩と曰ふ。

此れ則ち愚癡の説なり。
愛念と不念とは
誰が方便して然らしめしか
自性増して相壞れ、
手足と諸體分、
棘刺を誰か利からしめんや
欲して爾らしめし者無し。
及び餘の造化者の所爲なりと言ふ。
彼も亦能く滅せしむ。
（一四二）我が生ぜしめ、
而も滅ぶと言ふ有り。
仙人に遺典を學び
則ち名けて解脱と爲す。
若し餘の方便を以てするも、
唯上方便を習はれよ。
家を捨て山林に遊び、
苦行林に處り、
國王の子羅摩は
（一四五）還歸して正化を維ぐ。
父子山林に遊び、

諸根行境界は
（一四〇）自性が定むるとするも亦然り。
謂く水能く火を滅し
自性和して衆生を成す。
神識の自然に成るが如し。
此れ則ち性自ら然るなり。
諸有・生天者は
然らば自力の方便も効無し。
何ぞ自らの方便を須ひ
亦復た我が滅せしむと言ふ有り。
人は子を生育して
天に　（一四三）大祠祀を奉ず。
古今の所傳は
徒勞して實無し。
父王の憂悲は息み。
還歸するも亦、過ならず。
徒衆眷屬を捨て、
國を去つて山林に處り、
（一四六）婆樓婆國王
終に亦、倶に國に還れり。

【一三九】自性(Svabhāva)。自然の性質。
【一四〇】以下の數句殊に世界の出來を自性(Svabhāva)又は自在主(Īśvara)に歸するのは耆那教のスートラクリターンガ(Sūtrakṛtāṅga)一・一・三・五―九に酷似する。該書が馬鳴以前に存し彼はこの書を讀んだか。
【一四一】世界の創造は自在天其他に爲されたとする說である。自在天とは「主」の意で、シヴ神に對する尊號。
【一四二】我(ātman)。身體の內にあり、主宰し、常住なるもの。佛教以外の印度宗教は殆んど我を立てる。
【一四三】子を生てること、仙人に吠陀を、神々に犧牲を奉つて、人は三つの負債を返すと考へる、この三の人の負債は先ず梵書に言はれ、マヌ法典等にも出る。三つの負債から解脫すること即ち三つの負債を果す事が解脫であるの意。
【一四四】アムバリーシャ王(Ambarīṣa)。イクシュヴーク(Ikṣvāku)族第廿八番目のアヨードヤー(Ayodhyā)王。ラーマーヤナによれば、官僧の言によつてリチイーカ仙の次子スネーフシエーパスを購ひ、犧牲にしようとした傳說がある。

世に合燒かれ、　方便して馳走して出で、　須臾にして還つて復た入るが如し。
此れ豈に[135]黠夫と爲さんや。　生・老・死の過を見て、　患を厭つて出家し、
今當に還つて復た入る可し。　愚癡は彼と同じ。　宮に處つて解脫を修すれば、
則ち是の處有る無し。　解脫は寂靜に生ず。　王者は楚毒を加ふ。
寂靜は王威を廢し、　王位は正解脫に乖く。　動と靜は猶ほ水と火の如く
二理何ぞ俱なるを得ん。　決定して解脫を修するには、　亦王位に居らず。
若し王位に居り、　兼ねて解脫を修するならば、　此は則ち決定に非らず。
決定の解は然らず。　既に決定心非らざれば、　或ひは家を出でゝ還りて復た入らん。
我今已に決定し、　親屬の鉤餌を斷ち、　正方便して出家せり。
云何にして還りて復た入らん』　大臣は內に思惟し、　太子は大丈夫にして
深く識り德隨順し、　所說は因緣有りとす。　而して太子に告げて言ふ。
[136]『王子の所說の如く　法を求むるに法應に爾るべし。　但し今は是の時に非ず。
父王は衰暮の年にして、　子を念ひて憂悲增す。　樂解脫と曰ふと雖も
反りて更に非法と爲す。　樂出家と雖も慧無し。　深細なる理を思はず。
因を見ずして果を求め、　徒に現法の歡を捨つ。　[137]「後世有り」と言ふ有り、
又復た「無し」と言ふ有り。　有無既に判ぜず。　何の爲めに現樂を捨つるや。
若し當に後世有らば、　應に其の所得を任ふべし。　若し「後世無し」と言ふならば、
無は卽ち解脫と爲す。　「後世有り」と言ふ有るも、　解脫因を說かず。
地堅く、火は暖かに、　水は濕り、風飄動する如く、　後世亦復た然り。
此は則ち[138]自性の自ら爾るなり。　「淨不淨は各ゝ自性より　起る」と說く有り。

【一三五】黠夫。賢き者。
【一三六】以下大臣は多くの外道說—自生說、創造說等を擧げ、後世の有無に定說なく、修道は益なしと說き、修道を放棄して歸つた仙の名を引き、歸つて家國を救ふ可きを言ふ。世俗的功利說。こゝに出る外道說は何派のものか判明しないが、當時行はれてゐた一般的の婆羅門思想の如くである。
【一三七】後生 (Punarbhava)。卽ち未來世を言ふ。
【一三八】自性(Prakṛti)。數論では神我に對するもので、物質的原理を現すに用ひ、物質の本源で、その組成要素たる三德の平均して分化せぬ位。

常に合して常に散ず。散じ散じて何ぞ哀しむに足らん。胎に處つて漸々に變じ、
分れ分れて死して更に生ず。一切の時に死有り、山林に遊ぶに何ぞ非時あらん
時々に【一三二】五欲を受け、財を求むるの時も亦然り。一切の時に死ある故、
死法を除くに時ある無し。我をして王爲らしめんと欲するは、慈愛の法にて違け難し。
唯、病にして非藥を服するが如く、是故に我高位愚癡處にあり、
放逸にて愛憎に隨ふに堪へず。終身常に畏怖し、思慮に形神疲れ、
衆に順へば、心は法に違ふ。智者の爲さゞる所。【一三三】七寶の妙宮殿は
中に於て盛火然ゆ。天厨百味飯は中に於て雜毒有り。
蓮華清涼池は中に於て毒蟲多し。位高きも災宅と爲す。
慧者の居らざる所。古昔の先勝王は國に居るは【一三四】愆多く、
楚毒の衆生に加はるを見て、患を厭いて出家せり。故に王の正苦は
行法の安きに如かざるを知る。山林に寧處して草を食して禽獸に同じ。
深宮に處るに堪へず、黑蛇と共の穴を同じうす。王位と五欲を捨て、
苦に任へて山林に遊べり。此は則ち隨順と爲す。樂法は漸く增明す。
今閑靜林を棄て、家に還つて五欲を受ければ、日夜苦法增す。
此れ則ち所應に非らず。名族大丈夫は法を樂んで出家し、
永く名稱族に背き、大丈夫の志を建つ。形を毀ち、法服を被り、
法を樂んで山林に遊ぶ。今復た法服を棄てれば、慚愧心に違ふ有り。
天王の宮殿も尙、可ならず、況んや人の勝宅に歸るをや。已に貪・恚・癡を吐いて、
復た還つて其を服食す。人の反つて吐せしを食する如し。此の苦安ぞ堪ゆ可き、

---

rgava)である羅摩(Rāma)。羅摩(Rāma)、は父十車王の命によく從つて流罪に甘じた。

【一二七】鞠養。養ふこと。

【一二八】滿月を惡魔ラーフ(Rāhu)が禍する故蝕が生ずると考ふ。そのラーフと子ラーフラ(羅睺羅)とを掛けた、ラーフは日月を貪り呑み、日月の蝕を成す惡魔の名。

【一二九】以下、太子は明徹なる論旨と美しき辭句を以て、婆羅門敎の四時生活說を批判し無常なる世に於ける壯年出家を肯定し、王位と宮殿生活の修行に適さず、五欲の禍惡を知つた者が再び家に歸ることの不合理を論述する。

【一三〇】正使。正しく現起する煩惱の正體を言ふ。習氣に對す。

【一三一】倏忽。忽ちに。

【一三二】五欲。色・聲・香・味・觸の五境を言ふ。之等は人の欲心を起さす故に欲といふ。

【一三三】七寶。金(Suvarṇa)。銀(Rūpya)瑠璃(Vaidūrya)青色の寶石、產出する山に因み遠山石、須彌山石とも言ふ)、頗梨(Sphaṭika. 水精に當る紫・白・紅・碧の四色あり)硨磲(Musāragalva. 珊瑚の一種)、赤珠(Rohita-mukta)瑪瑙(Aśmagarbha)。

【一三四】愆。過失。

[一二五]毘林摩王子　[一二六]二羅彌跋祇は　父の勅恭命を聞けり。
汝、今亦應に然るべし。　慈母の[一二七]鞠養の恩は　壽を盡して報ずるも極り罔し。
牛の其の犢を失つて　悲み呼つて眠食を忘るるが如し。　汝、今應に速に還り、
其の生命を救ふべし。　孤鳥の群を離れて哀、　龍象の獨り遊ぶ苦、
憑依者の蔭を失ふ、　當に思ふて救護を爲すべし。　一子猶ほ幼にして孤、
苦に遭つて告ぐるを知る莫し。　彼の煢々の苦を免じて　人の[一二八]月蝕を救ふが如くせよ。
國を擧げて諸の士女は　別離の苦に熾然たり。　歎息の烟は天を衝き、
慧眼を熏らし闇からしむ。　唯汝の水、火を滅し、　目開明するを見んと求む。』
菩薩は父王の　切なる教に苦備はり至れるを聞き、　端坐して正思惟し
宜に隨つて遜順して答ふ。　[一二九]『我も亦父王の　慈念の心過重なるを知る。
唯生・老・病・死を畏れる故に　極り罔き恩を違ふ。　誰か所生を重ぜざらんや。
別離に絡るを以ての故に、　[一三〇]正使生ずれば相守り、　死至れば能く留むる莫し。
是が故に重き所を知つて、　長く辭して出家せり。　父王の憂悲を聞いて、
增戀は我が心を切にす。　但れど夢の暫くの會の如く　[一三一]倏忽として無常に歸す。
汝當に決定して知るべし。　衆生の性は同じからず。　憂苦の生ずる所は
必ずしも子と親とにあらず。　生離苦ある所以は　皆癡惑より生ず。
人の路に隨つて行き、　中道にて暫く相逢ひ、　須臾にして各、分析するが如し。
乖理は本自然なり。　合會し暫く親と成り、　隨緣の理にて自ら分る。
深く、親の假の合に達するとも、　應に憂悲を生ずべからず。　此の世に親愛と違れ、
他世に更に親を求む。　暫く親んで復た乖き離れ、　處々に親まざる無し。

ヤ・アーシャーダまたアンテイデーヴア毘提訶の王である闍那迦またパーカ・ヴルマさてはセエーナヂットキ。(一〇・二〇)

【一二五】毘林摩(Bhisma)。梵本には「恒河の胎より生じた」の修飾句あり、サーンタヌが女神恒河(Gangā)によつて擧げた子。父の希望により若い乙女サトヤヴアテイー(Satyavatī)を見出し、自らは王位をつがず、結婚せぬ約束で、父を結婚せしめた。妃に二人の子があつた。父死すや、その妃の長子を卽位せしめ、長子戰死すると弟を卽位させ、之を補佐し、カーシー(Kāśī)の二女を婚せしめた。サトヤヴアテイーの結婚前の子リリシユナ・ドヴアイパーヤナは子を産んだ。二人の子はパーンヅとドリタスーシユトラである。双方の子孫パーンダヴアとカウラヴアの戰の折、ドリタラーシユーラの子孫に味方し、將軍となつた、戰の恐れを和げる爲、アルジユナを攻擊するのを約したが、戰の十日目ドルヨーダナに責められ、戰ひ、アルジユナの矢に當つて死んだ。一生を自己否定・信奉・忠節に過した。

【一二六】二羅彌跋祇。梵本は羅摩(Rāma)。また毘求の子(Bhār-

「我、汝の樂法の情
悲戀、我が心を繞す。
望寬遠遊の情は
我が心の岸を崩壞せしむる勿れ。雲水草山への
憂悲は四患と爲す。
三〇　時至つて更に仙處に遊ばれよ。
此れ豈に慈悲は
在家も亦閑を脩す。
剃髮して染衣を服し
何ぞ學仙と名くるに足らん。
汝に冠するに天冠を以てし
三一　然る後に我出家せん。
跋闍羅婆休
那羅濕波羅
瓔珞を以て容を嚴かにし、
解脱因を違はざりき。
心に增上法を修し、
是の如き言を宣べしむ。
父王は汝に因るの故に
自らの開釋に出る無し。

決定して疑ふ所無きを知る。
汝若し法を念ずれば
以て我が懸心を慰む。
飄乾して心を燒壞す。
親戚をも顧みず、
一切を覆護すると名けんや、
覺悟と勤方便とは
自ら山藪の間に遊ぶは、
願くは一汝を抱き、
傘蓋の下に置き、
三二　頭留摩先王
毘跋羅　三三　安提
是の如き等の諸王は
手足に珠環を貫き、
汝今家に還り
地の增上主爲るべし。」
既に此の勅旨有り、
憂悲の海に汲溺せり。
汝當に船師と爲り、

唯非時にして林藪に入りし故、
應當に我を哀愍せよ。
憂悲の水をして
風日火雹の災の如し。
父母をも亦棄捐せり。
且く還りて土邑に食し、
法は必ずしも山林にあらず。
是れ則ち出家と名く。
此れ則ち畏怖を懷く。
水を以て其の頂に雨ふらし、
矚目して一汝を觀るを得て、
阿毟闍阿渉
三四　毘提訶王の那迦
悉く皆天冠を著け、
婇女衆と娛樂して
二事を崇習し、
王は涙を垂れて我に約勅し、
汝應に教を奉じて還るべし。
救無く所依無く。
安隱處に、度著せしむべし、

四時等の世俗的常識論を説く。(特に在家修行を説く。)太子の答言に對應し、世間的である。こゝに一種の行論(Nītiśāstra)を述べ、宮廷詩(Kāvya)の條件を滿す。
【三〇】婆羅門教の經論では若年には家居して、愛慾を樂しみ、財を求め、王なら王權を樂しみ、老年に至り、法を求め修行する。
【三一】凡て灌頂云々は卽位の儀式を行ふことである。天傘をかざすのは王の威儀の一、太子の卽位式の後に王自らが出家するのを望む意。
【三二】頭留摩(Dhruva)。
【三三】安提、アンティデーヴァ(Aṁtideva)か?
【三四】毘提訶闍那(Videhajanaka)。毘提訶(ヴィデーハ)の王で、シーターの父、深き知識とよき行爲で有名、彼は婆羅門教の教階制度に從ふのを拒絕し、僧の仲介なく犧牲を得、又淸淨な正しい生活の爲に婆羅門王仙の一人となつた、と。阿毟闍阿渉(Anujaṅa 又は Anuḍāṅa か)跋闍羅婆休(Vajrabāhu)毘跋羅(Vatajana)、那羅濕波羅(Naraśavara)梵本一〇・二〇を參考までに出せば左の如し。頭留摩の二人の弟であるバリと跋闍羅婆休ヴァイブラーヂ

即ち仙人に白して言ふ
二一甘蔗族の名勝冑にして
王は天帝釋の如く
出家して或ひは此に投ぜり、
答へて言ふ。『此の人有り、
生死の法に隨順するを 二三擇び
旣に定實を得已つて、
路を尋ねて馳進せり。
眞體猶ほ光曜して
執正法大臣とは
猶ほ王 二五婆摩曇
王子羅摩を見るが如し。
猶ほ 二六儵迦羅
天帝釋に奉事するが如し、
帝釋の儵迦、央耆羅を
王子の前に坐せしめたり。
王師及び大臣は
彼の闍延多に語るが如し、
荒迷して狂亂を發し、
流涙常に雨の如し。

『意、諸問する所有り。
我等は師臣と爲り、
子は 二二闍延多の如し。
我等彼の爲に來れり。
長臂大人相あり、
阿羅藍の許に往詣して、
王の速命に遵崇し、
太子の林に處るを見るに、
日の二四烏雲を出ずるが如し。
俗威儀を捨除し、
仙人婆私吒が
各其の本儀に隨つて
及び央耆羅の
王子も亦隨つて
安慰するが如し。
二七富那婆藪兩星の
王子に啓請せり。
二九『父王は太子を念ひ、
塵土中に臥し、
我に勅して所命有り。

淨稱淨飯王は
法教典要事を爲す、
彼は老・病・死を度らんと爲し、
惟を尊よ、應當に知らすべし。
我等の所行の
以て勝解脫を求む。』と。
敢て疲勞を計らず、
悉く俗の儀飾を捨つるも、
國奉天神師と
乘を下つて步進し、
山林中に往詣して
恭しく敬禮して問訊せり。
心を盡して恭敬を加へ、
王師及び大臣を敬せり。
即ち彼二人に命じて
月の傍に侍するが如し。
二八毘利波低の
利刺の心を貫けるが如し、
日夜悲思を增し
唯願くは心を留めて聽かれよ、

本讃に酷似する。本讃を要抄したものか。
【二一】甘蔗(Ikṣuvāku)。日種に屬する族名、釋迦族之に屬す。
【二二】闍延多(Jayanta)は、インドラの子。デヤヤ(Jaya)ともいふ。
【二三】擇とは、取る撰ぶにて、この場合適切ならず。
【二四】烏雲。烏の如く黑き雲。
【二五】婆摩曇(Vāmadeva)は十車王(Daśaratha)の大臣。婆私吒(Vaśiṣṭha)は前出。但し梵本はアウルヴアシエーヤ(Aurvaśeya)然らばウルヴアシー(Urvaśī)の子のアガステイヤ(Agastya)の異名。ラーマとシーター(Śītā)は配流中その隱處に在つた。
【二六】儵迦羅(Śukra)については前出(第一品註)。央耆羅(Aṅgiras)についても前出(同)。帝釋天(Śakra-deva)は因陀羅天のこと。
【二七】プナルヴアス(Punarvasu)。「貯藏せし財」の意。第五又は第七の月宿の名。現在の雙子座のA及びB星。
【二八】ヴリハスパテイ(Vṛhaspati)。前出。
【二九】以下の王師の言は王の傳言を傳へ、國情・王等眷屬の悲嘆を語り太子の還國をすゝめ、その內に婆羅門教人生

今我至つて虛渴し　子の水を得て復た失ふ。　及び我未だ命終らず。
速かに我子の處を語れ。　我をして渴死し　一〇三 餓鬼中に墮せしむる勿れ。
我素より志と力强し　動し難きこと大地の如し。　今は子を失ふの心に躁亂し
一〇四 昔の十車王の如し。』　王師多聞士と　大臣との智聰達せる
二人は勸めて王を諫め、　緩ならず亦切ならず　『願くは自ら情念を寛くし、
憂を以て自ら傷くる勿れ。　古昔の諸勝王は　國を棄つること散りし花の如し。
子今學道を行ふ。　何ぞ苦んで憂悲するに足らん。　當に 一〇五 阿私陀を憶ふべし。
理數自ら應に然るべし。　天樂も 一〇六 轉輪王も　一〇七 肅然として情に累らず、
豈に世界王も　能く彼の金玉の心を移すと曰はんや。　されど今當に我等をして
推求して其所に到らしむべし。　方便して苦諫諍し　以て我が丹誠を表はさん。
要望して其の志を降し、　以て王の憂悲を慰めん。』　王喜んで卽ち答へて言ふ。
『唯汝等速かに行け。　一〇八 舍君陀鳥の　子の爲に空中に旋る如く、
我今太子を念ひ、　便ち悁ふる心も亦然り。』　一〇九 二人は旣に命を受けて行く。
王と諸眷屬とは　其の心小しく淸涼となり、　氣宣ぎ飡飲通ぜり。

一一〇 推求太子品第九

王は正に憂悲を以て　王師・大臣を感切せしめ、　良馬を鞭策せる如し。
二人は馳駛して迅流の若く、　身疲れて勞を辭さず、　逕に苦行林に詣る。
俗の五儀飾を捨て、　善く諸情根を攝り、　梵志の精廬に入り、
彼の諸仙に敬禮せり、　諸仙は座に就くを請ふて　說法して之を安慰せり、

王の子とはダシヤラタ（十車 Daśaratha）王のこと、その子とはラーマ（Rāma）王子である。子のラーマ王子が配流になり森にある時、父王ダシヤラタは悲みの餘り死んだ。

【一〇三】一握の水は、死した父祖に子が祭詞として供養すべきもの、子孫なくて祭がなければ、父祖は餓鬼趣（Preta）に至り、餓死するとし、子孫の存續卽ち祭の存續を印度人は念願してゐる。今太子が出家すれば、祭の供養が絕たれる。

【一〇四】宮廷僧（Purohita）或ひは王師。宮廷内にあり、政務祭式の顧問として王等の精神的指導の任に當る婆羅門。

【一〇五】阿私陀（Asita）。前出。

【一〇六】轉輪王（Cakravartin-rāja）。輪を一度投ずることによつて、全世界を統一し、正義を行つて、國を政むるといふ理想王。

【一〇七】肅然。物淋しき貌。

【一〇八】舍君陀鳥は Śakuni にて普通名詞で、小鳥のこと。

【一〇九】大臣と王師とが太子を探し出して連れ歸る爲赴く說話は他傳にも出る（因果經等）。恐くは史的事實であらう。

【一一〇】（Kumārānveṣaṇa sarga）。この品の記述を出す傳は他にもあり、中に於て本讃は殊に思想的である。

或ひは瞪視し沈思し、　[九六]嗚咽して自ら勝へず、　[九七]愍々として氣殆んど盡き、
塵土中に臥せたり。　諸の餘の婇女衆は　見て悲痛心を生ぜり。
猶ほ盛なる蓮花の　風雹に摧かれ萎れしめしが如し。　[九八]父王は太子を失ひ、
晝夜心に悲戀せり。　齋戒して天神に求む。　『願くは子をして速かに還らしめよ。』
發願の祈請已り、　天祠の門を出ず。　諸の啼哭の聲を聞き、
驚怖心迷亂し　天の大雷電に　群象の亂れ奔馳する如し。
車匿と白馬を見て、　廣く問うて出家を知る。　身を擧げて地に投げ、
[九九]帝釋天の幢の崩れるが如し。　諸臣徐ろに扶け起し、　法を以て勸めて安ぜしむ。
久しくして心小しく醒め、　而して白馬に告げて言ふ。　『我數々汝に乘りて戰ひ、
毎に汝の功有るを念ふ。　今は汝を憎惡すること　愛念の時に倍す。
念ふ所の功德子を　汝輙ち運びて去らしめ、　山林中に擲著して
獨り自ら空しく來り歸れり。　汝速かに我を持して往け。　爾らざれば往つて將に還らんとす。
此の二を爲さざれば、　我が命は將に存せざらんとす。　更に餘方の治無し。
唯子を待つを藥と爲す。　[一〇〇]珊闍梵志の　子の死の爲に身を殺せし如く、
我れ行法の子を失へば　自ら殺して身を無らしめん。　[一〇一]魔兔衆生主も
亦常に子の爲に憂ふ。　況んや復た我は常人にて　子を失つて能く自ら安せん。
古昔　[一〇二]阿闍王は　愛子、山林に遊ぶ時　感じ思つて命終り、
卽時に生天を得たり。　吾今死する能はず、　長夜憂苦に住し、
合宮は吾子を念ひ、　虛渴して餓鬼の如し。　人の渇して水を探り
飮まんと欲して之を奪ふが如し。　渇を守りて命終れば、　必ず餓鬼趣に生ぜん。

分を嫉ひ、森に入りて苦行し、因陀羅の天に昇り、天女を得んとする」と邪推したのである。

【九四】該。嬰兒を言ふ。
【九五】泯沒。亡ぶこと。
【九六】哽咽。涙にむせぶこと。又啜り泣きすること。
【九七】愍々。憂ふる貌。
【九八】以下國嗣として依支とも命とも賴む太子を失つた國王の狂亂に近い悲嘆は最も切實にして、深刻である。
【九九】インドラの旗については前出(第一品)。
【一〇〇】珊闍(Sriñjaya)。
【一〇一】マヌ(Manu)に就いては、第二品の註を見よ。スヴーヤンブヴァ(Svayambhuva)卽ち第一マヌは十生主(Prajāpati)卽ち人類の祖先を生んだ。「十王族の創立者」とは之を言ふのか。然しヴイヴアスヴアット(Visvavat)の子であるヴアイスヴアタ(Vaisvata 日より生れた者)は現在の第七マヌである。マヌが愛子に別れたのは、女に變へられた彼の子スドユムナ(Sudyumna)を失つた(Viṣṇu pur. IV. 1)のを言ふのか。
【一〇二】漢譯は「阿闍王は」とあるも、「阿闍王の子」(梵本八・七九、佛陀の生涯、一〇八頁)であるべきである。アヂ(Aja)

白馬を嫌責する莫れ。　亦、我を恚る莫れ。　我等は悉く過無し。
[八七]天神の所爲なり。　我は極めて王法を畏れしも、　天神の駈せ逼る所となり、
速に馬を牽いて之に與へたり。　倶に去つて疾きこと飛ぶが如く、　氣を厭して聲無からしめ、
足も亦、地に觸れず。　城門は自然に開き　虛空は自然に明るし。
斯れ皆天神の力なり。　豈に我の所爲ならんや』　耶輸陀羅、彼の說くを聞き、
心、奇特想を生じたり。　天神の所爲ならば、　是れ斯等の咎にあらず。
嫌責の心消除し　熾然として大苦息めり。　地に躃れて怨歎を稱し、
雙の[八八]輪鳥の分れ乖く如し。　[八九]『我[九〇]今依怙を失へり。　同じく法を行つて離を生ず。
法を樂んで同行を捨つ。　[九一]何處に更に法を求めん　古昔の諸先勝
[九二]大快見王等は　斯は皆夫妻倶にして　道を學んで林野に遊べり。
而も彼は今我を捨つ。　何等の法を求めんと爲すや　梵志の祠祀典は
夫妻必ず同行す。　同じく行ずる法は因と爲り、　終には則ち同じく報を受く。
汝、何ぞ獨り法に慳にして　我を棄てゝ隻遊ぶや　或ひは我の嫉惡を見て、
更に嫉無き者を求めしや　或ひは當に我を嫌薄すべく、　更に淨き天女を求めしや
何の勝德の色を以て　苦行を修習せるや　我が薄命を以ての故に
[九三]夫妻生きて別離す。　羅睺羅は何の故に　膝下を蒙らざる
嗚呼、不吉の士よ。　貌柔くして心剛し。　勝族と盛なる光榮と
猶ほ宗仰する者をも怨憎す。　又子生れて未だ[九四]孩ならず　而も能く永く棄捨せり。
我も亦心腹無し。　夫は棄てゝ山林に遊ぶ時、　自ら[九五]泯沒する能はず。
此は則ち木石の人なり。』　言已りて心迷亂し　或ひは哭き或ひは狂ひて言ひ、

【八七】　美しい繰返し（リフレーン）である。梵本八・三三、四、五參照。

【八八】　輪鳥（Cakravāka）。Anas Casarca 鴛鴦のこと。彼地にても鴛鴦は夫婦の仲好きことの喩にさる。

【八九】　以下の耶輸陀羅妃の言葉は夫への怨言・自責・悲嘆・感泣を交へた絶望的詠嘆で、棄てられた女性の心理を盡し、人を動かし、測隱の情を抱かす。韻律哀調を帶び、辭句美妙、馬鳴の詩才を思はれる。尙この王妃の悲嘆はマハーバーラタ中のナラ王物語（Nalopākhyāna）のダマヤンティー（Damayantī）王女が王ナラ（Nala）に見棄てられた折の悲嘆と描寫に酷似する。八・六〇—六九はカーリダーサ著「軍神降誕（Kumārasaṁbhava）」等にも暗合するものがある。

【九〇】　依怙。より頼むところ。

【九一】　婆羅門教では、家主期を過ぎれば、子に相續せしめ法定の妻と共に出家し、森に退き、隱遁するのを慣とする。

【九二】　大快見王（Mahāsudarśana マハースダルシャナ）。マハースダッサナ（Mahāsudassana 巴利語）は本生話（Jātaka I, 95）に出る王の名。

【九三】　耶輸陀羅は「太子は自

時に耶輸陀羅は　深く車匿を責めて言ふ。　[八四]『生きて我が欲しむ所を亡くし、
今何所に在ると爲すや　人馬三、共に行き、　今唯二來り歸れり。
我が心極めて惶怖し、　戰慄して自ら安せず。　汝は是れ不正の人にて、
不眠にて善友に非ず。　不吉にて强暴を縱にし、　應に[八五]笑は啼くを用ひて爲すべし、
將に去つて啼いて還る。　反覆、相應しからず。　愛念には自ら伴在り、
欲に隨つて恣なる心作らる。　故に聖王子をして　一去つて復た歸らざらしむ。
寧ろ智慧ある怨を近づけ、　愚癡なる友に習まざれ。　假に名けて良き朋と爲すとも、
[八六]內實には怨結を懷けり。　今此の勝れし王家は　一旦悉く破壞されん。
此の諸の貴夫人は　憂悴して形好を毀てり。　涕泣して氣息絕へ、
面を涙横に流れ下れり。　夫主倘世に在れば、　依止して雪山の如く、
意を安ずること大地の如し。　今は無くして憂悲殆んど死に至る。　況んや此の窓牖の中にて
悲泣長叫する者に於てをや。　生れて其の所天を亡くす。　是の苦は何ぞ堪ゆ可き』
馬に告ぐ。『汝、義無くて　人心の重ずる所を奪ふ。　猶ほ闇冥の中にて
怨賊の珍寶を劫むが如し。　汝に乘りて戰鬪の時　刀・刄・鋒・利箭
一切に悉く能く堪ゆ。　今何ぞ忍ばざる有りて　一族の殊勝
我が心を强奪し去りしや　汝、是の弊惡なる蟲　諸の不正業を造れり。
今日大に鳴き呼ばゝり、　聲、王宮に滿つ。　先に我が所念を劫めし
爾の時何ぞ以て瘂なりし　若し爾の時聲有れば、　宮を擧げて悉く應に覺むべし。
爾の時若し覺むれば、　今苦惱を生ぜず。』　車匿は苦言を聞いて、
氣を飲んで息結ぼれ、　涙を收めて合掌して答ふ。　『願くは我れ自ら陳ぶるを聽かれよ。

意通ず。

【八二】末香。白檀等の粉末にて製せし軟膏を言ふか。香料。

【八三】標挺。著しく目立ちて拔出ずること。

【八四】以下。耶輸陀羅妃の言葉は叱問・怨言。皮肉を交へた銳い言葉で、棄てられた女の心理をよく現はす。車匿への激しい笞の亂打。辭句又美妙である。

【八五】笑が涙の下に隱れてゐる意。

【八六】以上數句は銳い皮肉を混へて車匿に恨を述べてゐる。友の美德を擧げて不實をなした車匿を修飾してゐる。

擧體は光耀無く、
狀、賊まれし形の如し。
感結ぼれて [七五]號咷し、
牛の其の道を失へる如し。
身を竦て自ら地に投げ、
[七六]芭蕉樹を摧くが如し。
[七七]※『右旋せる細軟なる髮は
平に住して地に灑ぐ。
膓臂師子歩にて
[七八]方臆にて [七九]梵音聲あり、
世間何ぞ福薄く
清淨なる蓮花の色あり、
深宮に生長し、
[八二]末香にて以て身に塗る。
華族の大丈夫にて
常に施して求むる所無し。
清淨なる寶床に臥し
草土を以て身に籍かんや』
侍人扶けて起さしめ、
憂苦して四體垂れ、

猶ほ細少の星の如し。
車匿・白馬の
猶ほ新に親を喪へる如し。
大愛瞿曇彌は
四體悉く傷き壞れたり。
又子の出家を聞いて、
一孔より一髮生じ、
何の意にて天冠を合し、
脩廣なる牛王の目あり、
是の上妙相を持ち、
斯の [八〇]聖地主を失ひし
土石刺棘の林を
溫衣・細軟衣をつけ、
今は則ち風露を冐す。
[八三]標挺して勝れ、多聞にて
云何にして忽ち一朝にして
奏樂にて以て悟を覺ます。
子を念ふの心に悲しみ痛み、
爲めに其の目の涙を拭けり。
內に感じ、心慘結し、

衣裳は壞れ [七四]繿縷となり、
涕泣し絕望し歸るを見て、
狂亂して搔擾し
太子の還らざるを聞き、
猶ほ狂風の、金色の
長歎して悲感を增せり。
黑淨にて鮮かに光澤あり、
剃りて草土中に著せんや。
身光は黃金炎にて
苦行林に入れり。
[八一]妙綱ある柔軟なる足あり、
云何にして踏む可き
沐浴するに香湯を以てし、
寒暑、安んぞ堪ふ可き
德備り、名稱高く、
乞食して以て身を活さん
豈に能く山樹の間
悶絕して地に躄れたり。
其の餘の諸夫人は
動かざること畫かれし人の如し。

【七四】繿縷。破れ衣、ぼろ。
【七五】咷。泣き叫ぶこと。
【七六】芭蕉(Kadala)、Musa Sapientum. 脆きものゝ喩にされる事は我々のよく知る所である。王妃が手を擴げて倒れるのを、その黃色の大きな葉の破れたのに喩へた。
【七七】以下の瞿曇彌の言葉は母としての愛情と愛惜の悲嘆をよく現はし、測々人に迫るものがある。
以下の王妃の悲嘆の言葉は、梵本では耶輸陀羅姫の車匿叱責と車匿の辯解の後に出る。卽ち順序梵・漢前後す。
※これらの頭髮の形容は隨好(佛又は轉輪王＝世界統一王の容姿の卓越を現はす、六十の種目)に相當する。こゝでは轉輪王の相好としてあぐ。
【七八】方臆。四角なる胸。
【七九】牛王の眼等は妙相に、獸王の威儀・雷の如き聲等は隨好に相當し、夫々轉輪王又は佛の容姿の立派を現はす種目である。
【八〇】地主とは、地の主卽ち國王を言ふ。
【八一】手足縵網。手足柔軟は轉輪王又は佛の妙相である。こゝでは轉輪王の妙相としてかゝげられる。漢譯は蓮花の色とあるも、梵本は「青蓮華のやうに軟く」とあり。この方

人有り、路傍に來り、
國を擧げての人の命。
車匿は悲心を抑へ、
王子を捨てず。
頭を剃り、法服を被り、
驚いて奇特想を起し、
各〻相告げて語る。
『悉く追つて隨ひ去るべし。
王子は是れ我が命、
彼在る彼の林は城郭邑なり。
城内の諸士女は
唯馬の空しく歸れるを見る。
車匿は歩んで馬を牽き、
怖懼の心を加增せり。
門を入れば涙は雨と下り、
白馬も亦悲鳴せり。
白馬の悲鳴するを聞き、
彼を見ずして聲を絕てり。
髪を亂し、面は萎黄し、
垢に穢れて身を浴さず、

身を傾けて車匿に問ふ。
汝輒ち盗みて將に去らんとす。
而して衆人に答へて言ふ。
王子、我を捐棄せり。
遂に苦行林に入れり。』
嗚咽して啼泣し、
『我等何の計を作さん』
人の命根壞れゝば、
命を失ひて、我豈に生きんや
此の城は威德を失ふ。
王子の還れりと虛傳し、
其の存亡を知る莫く、
[七一]歔欷し涙を垂れて還れり。
戰士の敵を破り
目に滿ちて見る所無し。
宮中の雜鳥獸
長く鳴いて之に應ず。
[七三]後宮の諸婇女は
形瘦せ、脣口は乾き、
悉く莊嚴具を捨て、

『王子は世の愛する所、
今何所に在りと爲すや』
『我が眷戀ひて追逐し、
幷びに俗威儀を捨て、
衆人、出家を聞き、
涕涙交〻流下し、
衆人咸議して言ふ。
身死し、形神離るゝ如し。
彼無き此の邑は丘林と成り、
[七〇]毘梨多を殺せし如し。』
奔馳して路上に出で、
悲泣するに種々の聲せり。
太子を失ひて憂悲し、
[七二]怨を執つて王前を送るが如し。
天を仰ぎて大に啼哭せり。
內廐の諸群馬は
謂ひて太子の還るを呼ばゝり、
馬鳥獸の鳴くを聞き、
弊衣は浣濯せず、
毀悴して鮮明ならず、

【六九】 羅摩太子が配流になり、太子を送つた人・車が歸つた時父王市民等はいたく悲んだ。

【七〇】 梵本によつて意を補へば、「毘梨多が殺された時にアルッの主の居ない天の如くに」（八・一三、「佛陀の生涯」九七頁）。因陀羅は惡龍ヴリトラを殺戮する爲、一時天から去つた事がある。ヴリトラは旱魃と惡い天候の惡魔で、インドラと戰ひ、常に敗れ、その結果雨が降る。

【七一】 歔欷。すゝり泣き歎くこと。

【七二】 梵本「馬の主が殺されたやうに」。（八・一六、佛陀の生涯」九七）。

【七三】 婇女の心情、容姿の描寫は第五品の婇女の醜體の容姿の描寫と共に、陰慘を極める。

我、汝の志の楽しむ所を觀るに、　恐らくは亦安ずる所に非らん。當に復た彼を捨てゝ遊び
更に餘の[六一]多聞を求めん。　爾は隆鼻にて廣く長き目あり、　丹き脣にて素き利齒あり、
薄き膚にて面に光澤あり、　朱き舌は長く軟薄なり。　是の如き衆の妙相は
悉く[六二]爾炎の水を飲まん。　當に測れざるの深さを度るべし。　世間に比有る無し。
[六三]耆舊の諸仙人の　得ざる者を當に得べし。』　菩薩、其の言を領し、
諸仙人と別れたり。　彼の諸仙人衆は　右繞し各ゝ辭し還れり。

[六四]合宮憂悲品第八

車匿は馬を牽いて還れり。　望絶へ、心は悲に塞り　路に隨つて號泣して行き、
自ら開割する能ざりき。　先に太子と倶にて　一宿の徑路にて
今は太子を捨てゝ還れば、　生、天蔭を奪はれし故に、　徘徊し心顧戀し
八日にて乃ち城に至る。　良馬は素より體駿にして　奮迅して威相有れど、
[六五]躑躅し顧みて瞻仰し、　太子の形を覩ず、　涙を流し四體垂れ
惟悴して光澤を失ひ、　旋轉し慟き悲鳴し、　日夜水草を忘る。
救世主を遺失して　迦毘羅城に還歸すれば、　國土は悉く[六六]廓然として
空しき聚落に入るが如し。　日、須彌山に隱れゝば、　世を擧げて悉く[六七]曛冥たる如し。
泉池は澄淸ならず、　華果は榮茂せず、　巷路の諸士女は
憂慼して歡容を失へり。　車匿は白馬と　[六八]悵怏として行いて前まず。
事を問はれて答ふる能はず。　遲遲として尸の若く行く。　衆は車匿の還るを見て、
釋迦王子を見ず、　聲を擧げて大に號泣し、　[六九]羅摩を棄てゝ還りし時の如し。

敎はこの山に起つたと傳へらる。數論論師自在里（Īśvarakṛṣṇa）なる山に居り、羅摩、配流中この山中に居つた。
【六〇】　阿羅藍（Arāḍa）。後出。
【六一】　多聞。卽ち學識ある者。
【六二】　爾炎（Jñeya）。卽ち所知、知らる可きものゝ意。ビールは爾炎水を英譯に於て"the water you give (glorious water" と譯す（SBE. XIX. p81）も、甚しき誤譯。
【六三】　耆舊。耆は年老いて長ぜし人。
【六四】　本章には、太子出城後の王・王妃の悲嘆・叱責・太子妃の怨恨・さては車匿白馬・夫人・市民の憂悲を細かに叙寫し、その光景を髣髴とし、その悲嘆は讀者の胸に迫る。一篇は宛然抒情詩をなし、印度文學中の珠玉たるに止らず、同期（紀元前後）の世界文學中に於ての白眉である。こゝに至つて馬鳴の天才は傾注され、遺憾なく宮延叙事詩（kāvya）の條件を滿す。
【六五】　躑躅。行きて進まず、又往來して去らざること。
【六六】　廓然。空しき貌。
【六七】　曛冥。日入りて暗きこと。
【六八】　悵は、望みを失ひ恨むこと、又嘆く、憂ふ。怏は、恨むこと。

汝等心質直にして　行法も亦寂默たり。　來賓[五二]に親念し
我が心實に愛樂し、　美說は人懷しさを感ぜしめ、　聞く者皆[五三]沐浴せり。
汝等の所說を聞いて、　我が[五四]法を樂しむの情を增せり。　汝等悉く我に歸して
以て法の良朋と爲す。　而して今汝を棄捨し　其の心甚だ[五五]悵然たり。
先に本親屬に違れ、　今汝等と乖く。　合會別離の苦
其の苦は等しくして異る無し。　我が心樂まざるに非ず、　亦、他の過をも見ず。
但し汝等の苦行は　悉く生天の樂を求む。　我は[五六]三有を滅するを求む。
形背いて心乖く。　汝等行ふ所の法は　自ら先師の業を習ふ。
我、諸集を滅するを爲し、　以て無集の法を求む。　是の故に此の林に於て
永く久しく停るの理無し。』　爾の時諸梵志は　菩薩の所說
眞實にて義有るの言にて　辭辯の理高勝なるを聞き、　其の心大に歡喜し、
倍〻深く宗敬を加へたり。　時に一梵志有り、　常に塵土中に臥し、
[五七]縈髮にて樹皮を衣とし、　黃眼にて脩高なる鼻あり。　而して菩薩に白して言ふ。
[五八]『志固く智慧明かに　決定して生の過を了し、　善く離生の安を知る。
祠祀し天神を祈ること　及び種々に苦行し　悉く生天の樂を求むるは、
未だ貪欲の境を離れず。　爾、能く貪欲と爭ひ、　志、眞解脫を求む。
此れ則ち丈夫、　決定の正覺士爲らん。　斯の處に留るに足らず、
當に[五九]頻陀山に至るべし。　彼に大牟尼有り、　名けて[六〇]阿羅藍と曰ふ。
唯彼のみ究竟なる　第一增勝眼を得たり。　汝當に彼に往詣すれば、
眞實の道を聞くを得べし。　能く心をして悅ばしむれば、　必ず當に其の法を行ずべし。

【五二】　來賓は賓客の意。
【五三】　沐浴(Snāta)は、梵行者が學行を修め卒業して家に歸る時、湯に浴するをいふ。こゝでは單に入浴後の清涼な氣持に解してもいゝ。
【五四】　法は、梵本(Dharma)。
【五五】　悵然。いたむ貌。
【五六】　三有。有は生死の境界をいふ。卽ち三有は三界の異名。一、欲有(Kāmabhava)卽ち欲界の生死、二、色有(Rūpabhava)色界の生死、三、無色有(Arūpabhava)無色界の生死をいふ。
【五七】　縈髮。まつはり結んだ髮。
【五八】　苦行林の一仙士が太子に阿羅藍仙の所に赴くべきを教へる說話は他傳にも出る。あり得ることで、事實であらう。
【五九】　頻陀山（Vindhyakoṣṭha）。ヴィンドヤ山は印度を橫切つて擴る山脈。この山によつて印度本土を南北卽ちヒンズスターンとダツキンとに分つ。昔この山と雪山と高さを競ふた話がある。この山は雪山に次いで尊ばれ、印度文明が南方に移るに從つて、文化史上重要な地位を占めるやうになり、佛陀伽耶・王舍城はこの山の北麓にあり、大乘佛

是の如くして日夜を竟る。　彼の所行を觀察するに、　眞實義を見ず。
則ち便ち捨て去らんと欲す。　時に彼の諸梵志は　悉く來り、留り住むを請ひ、
菩薩の德を[四六]眷仰して　勤めて勸請せざる無し。　『汝、非法處より來り
正法の林に至り、　而して復た棄捨せんと欲す。　是が故に留るを勸請す』と。
諸の長宿の梵志の　蓬髮にて草衣を服せる者　菩薩の後に追隨して
小しく[四七]神を留むるを願請す。　菩薩は諸老の　隨逐し身の疲勞せるを見て、
一樹下に止住し　安慰し遣して還らしむ。　梵志の諸長幼
圍繞して合掌して請ふ。　『汝忽ち此に來り至つて　園林は妙に充滿せり。
而して今棄捨し去れば　遂に丘、曠野と成らん。　人の壽命を愛し
其の身を捨てんと欲せざる如く、　我等も亦、是の如し。　唯願くは小しく留住されよ。
此處の諸梵志　[四八]王仙及天仙は　皆、此處に依る。
又雪山の側に隣し、　人の苦行を增長し　其の處、此に過ぐる莫し。
衆多の諸學士　此の路に由つて天に生ぜり。　福を求め仙に學ぶ者は、
皆此れより已北にあり、　正法を攝受せんとする　[四九]慧者は南に遊ばず。
若し汝、我等の　懈怠にして精進せず、　諸の不淨法を行ずるを見て、
而して住するを樂まざるならば、　我等悉く應に其を去るべし。　汝、此に留止す可し。
此の諸梵志等は　常に苦行の伴を求む。　汝は苦行の長たり。
云何ぞ相棄捨せん。　若し能く此に止住せば、　奉事すること帝釋の如くせん。
亦天の[五〇]毘梨訶鉢低に　奉事する如くせん。』と。　菩薩、梵志に向つて
己が心に期する所を說く。　[五一]『我、正方便を修し　唯諸有を滅せんと欲す。

【四六】 眷仰。眷は「顧る」、篤く思ふ、懇ろなること。

【四七】 神。心又は精神の意。

【四八】 王仙(Rājarṣi)は、王族出身の仙士、天仙(Devarṣi)は天界に住する仙士にて、ナラーダ(Narada)アトリ(Atri)の如き仙を言ふ。

【四九】 大意は北方の地は勝法を行ふに適し、大仙が住するので、賢者は南方へ一歩も行かうとしないの意。

【五〇】 ヴリハスパテイ。前出。梵本は異つて、帝釋天の如き汝と住むのはヴリハスパテイにさへ吉福を齎さうである。梵本の方よし。(七・四六、佛陀の生涯九二頁)。

【五一】 以下の太子の苦行仙人の別離の辭は切實にして眞情胸に迫るものあり。一種の深刻な哀愁が滿ちてゐる。馬鳴の詩才の大なるを思はす。

小苦を免るゝと雖も　終に大苦縛を爲す。　自ら其の形を[四〇]枯槁させ、
諸の苦行を修行して　而して[四一]受生を求む。　五欲因を増長し、
生死を觀ざるの故に、　苦を以て苦を求む。　一切の衆生の類は
心、常に死を畏る。　精勤して受生を求むるも　生れ已れば會ず當に死すべし。
復た苦を畏れると雖も　而も長く苦海に沒す。　此の生極めて疲勞し
將に生れて復た息まざらんとす。　苦に任めて現樂を求む。　生天を求めて亦勞す。
樂を求むるの心は下劣にして　倶に非義に墮す。　方に極鄙劣に於て
精勤すれば則ち勝と爲す。　未だ智慧を修するに若かず、　兩捨は永く無爲なり、
身を苦ますが是法ならば、　安樂は非法と爲る。　法を行じて後に樂むならば
因果の法は非法と爲る。　身の所行と起滅は　皆、心意の力に由る。
若し心意を離るゝならば　此の身は枯木の如し。　是の故に當に心を調ふべし。
心調へば形自ら正し、　淨を食するが福と爲るならば、　禽獸と貧窮子は
常に果葉を食する故に　[四二]斯等は應に福有るべし。　若し善心起る故
苦行を福因と爲すと言ふならば、　彼の諸の安樂の行は　何ぞ善心を起さゞるや
樂、善心を起すに非らず。　善も亦、苦因に非らず。　若し彼の諸の外道が
水を以て淨と爲すならば、　水居を樂しむ衆生は　惡業能く常に淨められん。
彼の本功德ある仙の　之に住止せし所の處は　功德仙の住せしが故に
普く世の重ずる所なり。　[四三]然れば彼の功德を尊ぶべし。　應に其の處を重ずべからず。」
是の如く廣く說法し　遂に日暮に至れり。　[四四]事火者有るを見るに
或ひは[四五]鑽し或ひは吹然し　或ひは酥油を灑ぐ有り　或ひは聲を擧げて呪願し、

考ふ。
【三八】兩足とは、人間をいふ、その中の尊賢士は太子を尊んで言つたのである。
【三九】以下太子は、苦行して生天せんとする苦行說を自家獨自の立場から批判する。後年の佛の中道說を思はせる。
【四〇】枯槁。槁は枯れること。
【四一】受生。天に生れること。
【四二】太子の(或ひは馬鳴の)深刻な苦行批評。
【四三】功德仙の住んだ處を尊ぶ所以は、仙の功德そのものを尊ぶので、その場所そのものを尊ぶのでない、意。
【四四】火に事へること卽ち火神アグニ(Agni)を祭ることは、修行者等の最も大切なる行事の一であつた。三迦葉の如きは歸佛前は事火派であつた。
【四五】鑽。すり合せ火を取ること。吹然の然は燃やすこと。

能く群乳牛に感じて　甜香乳を增し出せり。　彼の諸梵志等は
驚き喜んで傳へて相告げ、　[二九]八婆藪天と爲し　二[三〇]阿濕波と爲せり。
[三一]第六魔王と爲し　[三二]梵迦夷天と爲し　[三三]日月天子と爲し、
而して『彼等來り此に下れる耶』と。是を要するに敬に應ずる所とし　奔り競ひ來りて供養せり。
太子も亦謙み下り　敬辭にて以て問訊せり。　菩薩遍く林中の
諸梵志を觀察するに、　種々に福業を修むるも　悉く生天の樂を求む。
[三四]長宿の梵志に　所行眞實道を問ふ。　『今我初めて此に至る。
未だ何法を行ずるかを知らず。　事に隨つて請問す。　願くは我が爲めに解說されよ。』
爾の時彼の[三五]二生は　具に諸苦行及び　苦行果を以て
次第に事に隨つて答ふ。　[三六]『聚落所出に非る　清淨なる水生物
或ひは根莖葉を食し　或ひは復た華果を食し、　種々にして各道を異にし、
服食も亦同じからず、　或ひは鳥の生を習ひ　兩足にて鉗み取りて食す、
鹿に隨つて草を食する有り、　風を吸ふ[三七]蟒陀仙あり、　木石にて舂いて食さず
兩齒にて嚙みて痕を爲す。　或ひは常に水にて頭を沐し、　或ひは復た火に奉事す。
水に居りて魚仙を習ふ。　是の如き等の種々の法にて　梵志は苦行を修し
壽終りて生天を得、　苦行に因るを以ての故に　當に安樂果を得べし。』
[三八]兩足中の尊賢士は　此の諸の苦行を聞いて、　眞實義を見ず、
內心欣悅せざりき。　思惟して彼を哀念し　心口に自ら相告ぐ。
[三九]哀なる哉、大なる苦行にて　唯人天の報を求む。　輪廻して生死に向ひ、
苦多くして果少し。　親に違れ勝境を捨て　決定して天樂を求む。

【二九】ヴアス(Vasu)。神格で八人あり、因陀羅の侍者として知らせる。アディティ(Aditi　太陽神)の子とされる。
【三〇】アシュヴィン。乘馬者の意。二子神。日又は空の双子。彼等は常に若く美しく輝き、迅かで、多くの姿を持つてゐる。曉の神(ウシャス)の先驅として馬又は鳥に引かれる金の車に乘る。チヤヴアナ仙に若さを與へ、折れた馬の脚を鐵の脚にして治した。
【三一】第六魔王(Māra)。即ち第六天の魔王、欲界(Kāmaloka)の第六天を支配する魔王。
【三二】梵迦夷天(Brahmakāyika)。
【三三】日月天子(Sūryadeva; Candradeva)。
【三四】即ち年長。
【三五】二生(Dvija)。即ち婆羅門のこと。
【三六】以下に說明する苦行方法、種類、苦行說は當時一般に行はれてゐたものらしい。婆羅門教はその教理修行に必ず苦行を含む。
【三七】蟒陀仙。蟒は蛇の最大なるもの、うばはみ。蟒陀仙とは蛇類の如き生活を爲す仙士を言ふ。印度では蛇は空氣中の花粉を食して生活すると

車匿は目にて随ひ矚めて
漸くにして隠れて復、見えず。
『太子は父王
眷屬及び我が身を捨て
袈裟衣に愛著して
苦行林に入れり。』と
手を擧げ、仰いで天を呼ばはり
悶絶して地に躃れたり。
起きて白馬の頸を抱き、
望絶へて路に随つて歸れり。
徘徊し屢ゝ反顧し
形往つて心は反馳せり。
或ひは思を沈めて魂を失ひ
或ひは俯仰して身を垂れたり。
或ひは倒れて復、起き
悲泣して路に随つて還れり。

入苦行林品第七

太子、車匿を遣して
將に仙人處に入らんとす。
端嚴にして身光曜き
普く苦行林を照らし、
[二二]一切義を具足せる者は
義に随つて彼に之けり。
譬へば師子王の
群獸の中に入れるが如し。
俗容悉く已に捨て
唯、道の眞形を見たり。
彼の諸學仙士は
忽ち未曾有を覩て
懍然として心に驚喜し
合掌し端かに目にて矚せり。
男女は随つて事を執るものも
卽ち視めて儀を改めず。
天の帝釋を觀るが如くにて
瞪視して目瞬かず。
諸仙は足を移さず
瞪視すること亦復た然り。
任重く手に執作するとも
瞻敬して事を釋らず。
手、[二三]轅軛に在る如し。
形來つて心は依れり。
倶に神仙を學ぶ者は
咸、未曾有を說けり。
[二四]孔雀等の衆鳥は
聲を亂して翔び鳴けり。
鹿戒を持する[二五]梵志は
鹿に随つて山林に遊び、
[二六]麁性にて鹿の如く[二七]睒睗し
太子を見て端視せり。
鹿に随ふ諸梵志も
端視すること亦復た然り。
[二八]甘蔗の燈は重ねて明るく
猶ほ初日の光の如し。

【二二】具足一切義（Sarvārthasiddha）。卽ち太子の名薩婆悉達多の譯語。
【二三】轅軛。轅は「ながえ」、輈の左右より車の前面に出でたる材。軛は「くびき」、轅端の横木の牛馬の領に駕するもの。
【二四】孔雀は紺青の雲（雨雲）の上るのを見て、躍上つて喜び鳴くのは、印度文學に好んで描かれる。今もこの跡と思はれるトリヴエー苦行林附近に孔雀が多いと。
【二五】卽ち鹿行者（Mṛgacārin）。鹿の如く草を食ひ歩む苦行者。
【二六】性あらきこと。
【二七】睒睗。睒は暫く視る、窺ふこと。
【二八】甘蔗の燈とは、太子が甘蔗族（Ikṣvāku）。出身なので、彼を燈に喩へたのである。

『汝、憂悲を生ずる莫れ。
我今汝に懺謝せん。
良馬の勤勞は
其功今已に畢れり。
惡道に苦しみ長息し
妙果今に現れたり。』
衆寶にて莊嚴せし劍を
車匿は常に執つて隨へり。
太子は利劍を抜きたり。
龍の光明に曜くが如し。
寶冠にて籠める玄髮を
合せ剃つて空中に置けり。
凝虛境に上昇して
飄として鸞鳥の翔るが若し。
[一六]忉利諸天下りて
髮を執つて天宮に還れり。
常に足を奉事せんと欲す。
況んや今頂髮を得たり。
心を盡して供養を加へ
[一七]正法の盡くるに至る。
太子時に自ら念ふ。
『莊嚴の具は悉く除けり。
唯[一八]素繒衣有り
猶ほ出家の儀に非らず。』
時に淨居天子は
太子の心念を知り、
化して獵師の像と爲り
弓を持ち利箭を佩し、
身に[一九]袈裟衣を被り
徑いて太子の前に至る。
太子、此の衣を念ふに
染色淸淨服にて
仙人の上標飾にて
獵者の所應に非らず。
卽ち獵師を前に呼んで
軟語して告げて曰く
『汝、此の衣服に於て
貪愛深からざるに似たり。
我が身の上服を以て
汝と相ひ貿易せん。』
獵師、太子に白す。
『此の衣を惜まざるに非ず。
用ひて群鹿を謀り
引いて之を殺す。
苟も是れ汝の須ふる所ならば
今當に汝と交易せん。』
獵者既に衣を貿へれば
還つて自ら天身に復せり。
太子及び車匿は
見て奇特想を生ぜり。
『此れ無事の衣にて
定めし世人の服に非さらん。』
內心大に歡喜して
衣に於て倍と敬を增せり。
卽ち車匿と別れて
[二〇]袈裟衣を被著せり。
猶ほ[二一]青鋒雲の
日月輪を圍繞するが若し。
安庠として諦步し
仙人の窟に入れり。

【一六】 忉利天(Trāyastriṃśa)譯、三十三天、欲界六天中の第二、須彌山の頂、閻浮提の上、八萬由旬の處にあり、この天の有情身長一由旬、壽一千歲、城を喜見城と名け、帝釋こゝに住す。他四方の峯に夫々八天居り、三十二の諸天住ず。梵本は唯諸天が受けて供養したと傳ふ。(六・五八、佛陀の生涯八二)。

【一七】 他傳では太子が所願成就するなら天に留れ、とて毛髮を投げた時、天に留つた、と言ふ。毛髮は四天王の所に往つたとも、忉利天の亡母の許に行つたとも傳へる。毛髮が天で供養されるのは、遺物崇拜思想の一の現れである。

【一八】 素繒衣は、白絹の衣のこと。

【一九】 袈裟衣は、暗褐色又は暗紅色。袈裟はその色から來る。僧衣は華美の色を用ふるのは禁戒で、之を暗褐色に染めた故である。

【二〇】 太子は、偶然出會つた獵師と衣を交易したのであらうが、それを淨居天の衣身が太子に袈裟を與へたと後に考へ、信ぜられるに至つたのであらう。

【二一】 青鋒雲、青く曲れる雲のこと。

深く愛して棄捨するは
此れ則ち宿心に違ふ。
願くは思ひて宮に還り
以て我が愚誠を慰められよ。』
太子は車匿の
悲んで切に苦諫するの言を聞き、
心安に轉じて堅固にて
而して復た之を告げて曰く。
[三]『汝今我が爲の故にて
別離の苦を生ぜり。
當に此の悲念を捨て
且つ自ら其の心を慰むべし。
衆生の各々異趣に
乖き離るゝの理は自ら常なり。
縱令我今日
諸親族を捨てざるとも
死至れば形神乖き、
當に復た云何にして留るべき
慈母我を懷妊して
深く愛して常に苦を抱けり。
生已り、卽ち命終れば
竟に子の養を蒙らず。
存亡各々路を異にし
今何處に求むるを爲さん
曠野の茂れる高き樹に
衆鳥の群聚り栖み、
暮に集り旦に離散す。
世間の離も亦然り。
浮雲、高山に興り
四集して虛空に盈つ。
俄にして復た消散す。
人の理も亦復た然り。
世間は本自ら乖く。
しかも暫く會へば恩愛纏る。
夢中の聚散の如きものに
我が親を計るべからず。
譬へば春生ぜし
樹の漸く長ぜし [一四]柯葉茂り
秋霜ありて遂に零落す。
同體にして尙分離す。
況んや人暫く合會し
親戚豈に常に倶ならんや
汝且く憂苦を息めて
我が教に順つて歸れ。
歸意尙我に存すれば
且く歸りて後更に還れ。
迦毘羅衞の人にして
我が心の決定せるを聞き、
顧遺して我を念ふ者には
汝當に我が言を宣ぶ可し、
「生死の海を越度して
然る後當に來り還るべし。
情願若し果さゞれば
身、山林の間に滅せん。」と』
白馬、太子の
斯の眞實言を發するを聞き、
膝を屈して足を舐め
長息し、淚は流れ連り、
[一五]輪掌 綱縵手にて
白馬の頂を順摩し、

【三】以下の太子の言葉には佛教的傾向を示す、無常觀が强く底を流れ、太子は强き求道の決意を宣明してゐる。

【一四】柯葉。枝と葉。

【一五】綱手足とは綱相のことで手足の指間に水禽の水搔きのやうな薄膜のあること。（三十二相の一）。輻掌とは千輻輪相の事で手足の掌に車輪のやうな渦卷の標がある事（三十二相の一）。

金石も尙摧碎す。
少にして樂み身細軟なり。
初め我に命じて馬を索かしむ。
我を命じて速かに莊嚴せしむ。
迦毘羅衞人は
子を念ふの愛も亦深し。
邪見にて父母無ければ
乳哺して形枯乾せり。
嬰兒の[八]功德母は
此れ則ち勝人に非ず。
厥の年尙幼少にして
宗族親屬を違捨するとも、
我心、湯火を懷き
太子を棄てゝ歸れば
今、若し獨り宮に還れば
復た何の辭を以て答へん
[一一]牟尼の功德所を
舌も亦、言ふ能はず。
[一二]若し月光の熱きを言ひて
法行に非ざるを信ずる有らん。

何ぞ況んや人は哀情に溺れざらん。
身を刺棘林に投じ
我が情已に安らず。
我、何の意ありて太子をして
國を擧げて悲痛を生ぜん。
決定して家を捨て出ずるは
此れ則ち復た論ずる無し。
慈愛忘る可きは難し。
勝族の能く奉事するところ
耶輸陀羅の勝れし[九]子は
是れ亦應に捨つ可らず。
復た我を遺棄する勿れ。
獨り國に還るに堪えず。
則ち[一〇]須曼提の
王に白して當に何と言ふべき
太子は而して我に告げられぬ。
云何にして虛說せん。
設ひ使して所說有らんも
世間に信ずる者有らば
太子の心は柔軟にして

太子は深宮に長じ
苦行して安ぞ堪ゆ可けん
天神は我を驅逼して
決定して深宮を捨てしめん。
父王年已に老い
此れ則ち所應に非ず。
瞿曇彌は長く養ひ
背恩人と作る勿れ。
勝を得て復た棄つるは
國を嗣いで正法を掌らん。
已に父王及び
我要めて尊足を離れず。
今空野の中に於て
羅摩を棄捨するに同じ。
合宮の人に同じく責められ
方便に隨つて形に毀れと。
我深く慚愧するの故に
天下誰か復た信ぜん
腕つて太子の所行の
常に一切を慈悲す。

【八】 耶輸陀羅姬（Yaśodharā）を指す。

【九】 羅睺羅（Rāhula）を示す。

【一〇】 スミトラ（Sumitra）はスマントラ（Sumantra）の事。ダシャラタ（Daśaratha）王の主なる大臣で、王子ラーマ（Rāma）の友。ラーマはアヨードヤーに君臨した月種族の王、十車王の長子。ヴイシュヌの第七の化身で、トレーター（Tretā）卽ち第二期の終に現れる。ラーマの物語はマハーバーラタ（Mahābhārata）ヴアナ・バルヴアン（Vanaparvan）に語られ、ラーマーヤナ（Rāmāyaṇa）ではその主題となる。ラーマー追放の時、スマントラはラーマを森に殘し、一人城市に歸つた。

【一一】 牟尼（Muni）は、聖者を言ふ。

【一二】 月は柔和なもので、激しいものではない。月の激しさと言ふ不合理を語り、信ずるもの丈が太子に誤りがあると語り信ずるでせう、の意。

寶冠の頂の[四]摩尼は
光り明くして其身を照す。
即ち脫して掌中に置く。

日の須彌を曜すが如し。
『車匿よ、此の珠を持ち
父王の所に還歸せよ。

珠を持つて王足に禮し
以て我が虔心を表し、
我が爲に王に啓請せよ。

願くは愛戀の情を捨てられよ。
生・老・死・を脫する爲の故に
苦行林に入れり。

[五]亦生天を求めず
仰戀心無きに非らず、
亦結恨を懷かず

唯憂悲を捨てんと欲す。
長夜恩愛を集むるも
要つて當に別離あるべし。

常に離有るを以ての故に、
故に解脫の因を求む。
若し解脫を得し者は

永く親と離れるの期無し。
憂を斷つ爲に出家せり。
子の爲に憂を生ずる勿れ。

五欲は憂の根と爲す。
應に著欲者を憂むべし。
[六]乃祖の諸勝王は

堅固にして志移さず、
今我は餘の財
唯法を襲ひ、非宜を捨つ。

夫れ人、命終る時
財產は悉く子に遺す。
子は多く俗利を貪る。

而して我は法財を樂しむ。
若し年少壯にして
是れ遊樂の時に非ずとするならば

當に知るべし、正法を求むるに
時・非爲時無し。
無常にして定期無く

死怨常に隨ひ伺へり。
是故に我今日こそ
決定して法を求むる時なりとす。

上の如く諸の啓する所
汝悉く我が爲に宣へよ。
唯願くは父王をして

復た我を顧戀せざらしめよ。
若し形を以て我を毀るならば、
王をして愛を割く者たらしめよ。

汝其の言を惜む勿れ。
王の念をして絕へざらしめよ。』
車匿は敎勅を奉じ

悲に塞り情惛迷し
合掌して踟跪し
還りて太子に答へて言へり。

『[七]勅の如く具に宣言せば
恐くは更に王の憂悲を增さん。
憂悲は增轉して深く

象の深泥に溺るゝが如し。
決定して恩愛乖けば、
心有れば孰れか哀まざらん。

【四】摩尼(Maṇi)は、寶石のこと。

【五】普通の婆羅門修行者は天の安樂を享る爲に苦行する。

【六】乃祖は、已れの祖先、先祖と同じ。

【七】以下、車匿は太子國の情況、親族の愛情を說き、自らの信賴を吐露し、婆羅門思想の常識論から太子の歸城を勸める。

巻の第二

車匿還品第六

須臾にして夜已に過ぎ
[一]衆生の眼の光出で
林樹の間にある
[二]跋伽仙人處の
林流は極めて清曠に
禽獸の人に親附するを顧見して
太子は見て心に喜び、
形勢自然に息めり。
『此れ則ち祥瑞と爲す。
必ず未曾有を獲ん』
又彼の仙人を見て
『是れ應に供養すべき所なり』と。
并に自ら其の儀を護り
高慢の跡を滅除せり。
馬を下りて手にて頭を摩ぜ
『汝今已に我を度せり』。
慈目にて車匿を視る。
猶ほ清涼水にて洗ふが如し。
[三]『駿足、馳せること飛ぶが若く。
汝常に馬の後に係る。
汝深く敬ひ勤め
精勤して懈惓無し。
餘事計るに足らず
唯汝の眞心を取る。
心敬ひて形勤むるに堪ゆ。
此の二を今始めて見たり。
人、心に至誠あるも
身力堪ゆる所無し。
力堪ゆるも心至らず。
汝、今二倶に備れり。
何人か利に向はざらんや
利無ければ親戚も離る。
汝、今空しく我に隨ひ。
現世の報を求めず。
夫れ人の子を生育するは
以て宗嗣を紹がしめん爲なり。
父に奉敬する所以は
以て恩養を報ぜん爲なり。
一切皆利を求む。
汝獨り利に背きて遊べり。
多言するも何ぞ解する所あらん。
今當に略して汝に告ぐべし。
汝、我に事ふるに已に畢れり。
今は且く馬に乘りて還れ。
我長夜より來り
求むる所の處今は得たり。』
卽ち寶瓔珞を脫ぎ
以て車匿に授く。
『是を具持せよ、
汝に賜へん。
以て汝の憂悲を慰めよ。』

【一】衆生の眼(Jagatcakṣu 卽ち太陽の眼)とは、太陽を言ふ。

【二】跋伽(Bhārgava)は、毘求 Bhṛgu の子孫の意。ガンダキー河の向側(迦城より)に今も社と隱遁所(回教の)がある。上に三方より來る流が合流し、トリヴェーニー(Triveni)河と言ふ。山中に煉瓦が發見される。この邊にパールガヴァの隱處があつたか。川の向ふに跋伽仙の仙居を見て、車匿と馬に別れたのであらう。一說に藍摩城(迦城と拘利城の間)を過ぎ、阿伐彌(Avami)河畔の深林に至り、跋伽仙の隱處を見出したと。

【三】以下太子は、人馬に謝し、出城の理由と求道の決意とを述べる。

重き門、固き關鑰を　天神は自ら開かしむ。　敬重すること父に過ぐる無し。
愛深きこと子に踰ゆる莫し。　内外の諸眷屬の　恩愛も亦纏綿たり。
遺情、遺念無し。　飄然として城を超出せり。　泥中より生ぜし
清淨なる蓮花の目にて　父王の宮を顧瞻し　而して告離の篇を說く。
『生老死を度らずして　永く此に遊ぶの縁無し』　一切の諸天衆
虚空の龍鬼神は　隨喜して善哉と稱し　唯此は眞諦なりと言へり。
諸天龍神衆は　得難き心を得たるを慶び、　各、自力の光を以て
引導して其の明を助けたり。　人馬の心は倶に鋭く　奔逝して流星の若し。
東方猶未だ曉せざるに　已に三[一八七]由旬を進めり。

【一八八】四天王神を言ふ。

【一八七】由旬は、距離の名數。ある時は四・五哩に相當すると考へられ、又九哩或ひは二哩半とも言ふ。その實數は時代、地方によつても異る。

爾の時淨居天は
諸婇女の間を出ず。
『吾今心に渇仰して
不死の郷に至らんと欲す。
婇女本より端正にして
今已に悉く自ら開く、
車匿は內に思惟す。
復た應に深く罪責さるべし。』
平乘なる駿良馬は
局き背あり、短い毛と耳あり
龍咽にて　[一八三]臆臆方に
身を摩して告げて言ふ。
吾今相依りて
榮樂にては伴遊は多く
然れど苦に遭ひては良友得難く
終に吉安を獲ん。
汝今自ら利し
長驅して疲惓する勿れ。』
人の狀は日殿の流るゝ如く
氣を屛ひて噴鳴せず。

來り下つて爲めに門を開く、
[一七七]內閤に　[一七八]踟蹰して
甘露泉を飲まんと欲す。
自ら知つて心決定し
今悉く醜形を見たり。
此の諸瑞相を觀るに
『應に太子の敎を奉ずべし。
諸天、神力を加へて
衆寶を鏤め乘具あり
鹿腹にして鵝王の頸あり
[一八四]驎驥の相を具足せり。
『父王常に汝に乘り
遠く　[一八五]甘露津を涉らんと欲す。
商人の珍寶を求むるには
法を求むるには必ず朋寡し。
吾今出遊し
兼ねて諸群萠を濟はんと欲す。
勸め已りて徐ろに馬に跨り
馬は白雲の浮ぶが如し。
[一八六]四神來つて足を捧げ

太子時に徐に起ち、
而して　[一七九]車匿に告げて言ふ。
馬に被せて速かに牽き來れ。
堅固にして誓莊嚴なり。
門戸先に關閉ぢ
第一義の　[一八〇]筌なり。
脫れて父王をして知らしめば、
覺へず馬を牽いて來らしむ。
[一八一]高翠にて長き　[一八二]髦と尾あり
額廣く圓瓠鼻あり
太子は馬頸を撫せて
敵に臨んで輒ち怨に勝てり。
戰鬪にては衆旅は多く
樂從者亦衆し。
此のこの友に堪ゆる者は
苦める衆生を度するを爲さんと欲す。
宜しく當に其の力を竭す可し。
轡を理めて條ち晨に征す。
身を束ねて奮迅せず
潜密にして寂として聲無し。

淨居天とす。【一七四】厭は、匿の誤寫か。梵本は壓の意。
【一七五】以下の婇女の睡態は描寫は精緻にて、その光景を讀者の面前に髣髴せしむ。その描寫のあるものは叙事詩ラーマーヤナ（Rāmāyaṇa V, 10. 34—49）に似て、その影響を受けたらしい。（『佛陀の生涯』五、四八—六一、頁六五—六とその註頁を見よ。）
【一七六】迦尼華（Karṇikāra）學名 Pterospermum Acerifolium この木は純白な花を開く。
【一七七】內閤。閤は御殿。
【一七八】踟蹰。行きて進まず、たちもとほる、ためらふ。
【一七九】車匿（Chandaka）四門出遊の折にも隨行した馬丁。印度では馬丁とか御者とかは主人を守る爲め撰ばれた武人である。佛成道後、敎化され、出家す。
【一八〇】筌。魚を捕ふる竹器、ふせご、やな。
【一八一】翠。綠色。
【一八二】髦。馬鬣（たてがみ）。
【一八三】臆臆方。臆は胸。方は四角なこと。
【一八四】驎は斑文ある馬、黑き脣ある馬。驥は千里の馬。
【一八五】甘露津。甘露は不死（Amṛta）を言ふ。

光明甚だ輝耀し
日の[一七〇]須彌山を照すが如し。
[一七一]七寶の座に坐し

薫ずるに妙*栴檀を以てし
婇女衆は圍遶して
犍撻婆の音を奏し

[一七二]毘沙門子の
衆の妙なる天樂の聲の如し。
太子の心の念ずる所は

第一の遠離樂にて
衆の妙音を作ると雖も
亦其の本懷に在らず。

時に[一七三]淨居天子は
太子に時至り
決定して應に出家すべきを知り、

忽然として化し來り下り
諸伎女衆を[一七四]厭し
悉く皆睡眠せしむ。

[一七五]容儀斂攝せず
委らかに醜形を縱露し
惛睡して互に低仰し

樂器を縱横に亂し
傍に倚り或ひは反側し
或ひは復た淵に投げしに似たり

瓔珞を鎖を曳く如くし
衣裳は身を絞縛し
琴を抱いて地に偃り

猶ほ受苦人の如し。
黄綠衣は流散し
[一七六]迦尼華を摧くが如し。

體を縱にし壁に倚つて眠り
狀角弓を懸けしが若し。
或ひは手は窓牖を攀じ

絞死尸に如似す。
頻りに呻き長く欠呿し
魘れ呼ばり涕し流涎す。

蓬頭、醜形を露し
見、顚狂人の若し。
華鬘は垂れて面を覆ひ、

或ひは面を以て地を掩ひ
或は身を擧げて戰掉し
猶ほ獨搖鳥の如し。

身を委ねて更に相枕し
手足互に相加へ
或ひは顰蹙し眉に皺よせ

或ひは眼を合して口を開き
種々に身は散亂し
狼藉して猶ほ横屍の如し。

時に太子端坐して
諸婇女を觀察するに
先に皆極めて端嚴にして

言笑し心に諂黠し
妖豔にして姿媚に巧みなりき。
而して今は悉く醜穢なり。

『女人の性是の如し。
云何にして親近すべき
沐浴して莊飾を假り

男子の心を誑惑す。
我今已に覺了す。
決定して出ずること疑なし。』

【一七〇】須彌山(Meru)。譯妙高。地球の中央にある神話的の山丘。その上に因陀羅(Indra)の天があり、諸神の町がある。地上では雪山(Himālaya)の北にある山であるとされてゐる。

【一七一】七寶とは、異說が多いが、金 Suvarṇa 銀 Rūpya 瑠璃 Vaiḍūrya 玻瓈 Sphaṭika 硨磲 Musālagalva 赤珠 Rohitamukta 瑪瑙 Aśmagarbha。

※栴檀(Candana)、高價なる香料。香として薫ずる外、粉末として身に塗り、身を冷し香らすに用ふ。

【一七二】毘沙門とは、富神クヴェーラ(Kuvera)を言ひ、その子とは那羅鳩婆(ナラクーヴァラ Nalakūvara)を言ふ。富神の宮殿は雪山中アラカー(Alakā)又はカイラーサ(雲頂)山にあり、そこに音樂の神犍撻婆(Gandharva)天女アプサラス(Apsaras)侍いて樂しみあり。

【一七三】梵本は阿迦尼吒天(Akaniṣṭha-sūra)とす。然らば婆羅門教では「最も若い者」の意の神。こゝでは佛教神格の一で、色究竟と譯す。色界十八天中第十八天第四禪第九の最上天の名。この天は色界の究竟である故、かく名くと。本行經・普曜經は漢譯と共に

安じて樂み善名聞えて　然る後に出家すべし。』　太子は恭遜なる辭にて
復た父王に啓す。　『惟[一六八]四事を保するを爲せば　當に出家心を息むべし。
子の命を保ちて常に存し　無病にて衰老せず　衆具損減せざれば、
命を奉じて出家を停めん。』　父王、太子に告ぐ。　『汝此の言を說く勿れ。
此の如き四事は　誰か能く保ちて無からしめん。　汝、此の四願を求むれば
正に人の爲に笑はるゝ所とならん。　且く出家心を停め　五欲を服習せよ』
太子復た王に啓す。　『四願保つ可らざれば、　應に子の出家を聽く可し。
願くは留難を爲さゞらんことを。　子焼かるゝ舍に在り　如何にして出ずるを聽かざる
分析は當理と爲す。　孰れか能く聽き求めざる　脱すれば當に自ら磨滅すべし。
法を以て離れるに如かず。　若し法を以て離れざれば　死至りて孰れか能く持さん』
父王は子の心　決定して轉ず可らざるを知る。　但し當に力を盡して留むべし。
何ぞ復た多言を須ん。　更に諸婇女　上妙五欲樂を増し
晝夜苦んで[一六九]防衞し　要へて出家せしめず。　國中の諸群臣は
太子の所に來詣し　廣く諸禮律を引き　勸めて王命に順はしめんとす。
太子は父王の　悲しみ感泣し涙を流すを見て、　且く本宮中に還り
端坐し默して思惟せり。　宮中の諸婇女は　親近して圍遶して侍し
伺候して顏色を瞻て　矚目して暫くは瞬きせず　猶ほ秋林の鹿の
彼の獵師を端視するが若し。　太子の正しき容貌は　猶ほ眞金山の若く、
伎女共に瞻察し　敎を聽いて音顏に候し、　敬畏して其の心を察し
猶ほ彼の林中の鹿の如し。　漸くにて已み日暮に至る。　太子は幽夜に處り、

---

carin)は學習時代で未だ結婚せず、梵師に就く。第二期は家長時代で(Gṛhastha)婚姻し家庭生活を營み、財又は愛を目的とする。第三期は隱遁苦行の時代(Vānaprastha)で林棲修行する。第四は思辨遊行時代(Sannyāsin)自らの齡に不相應な時期の生活をするのを非時の生活とする。

【一六八】この不死・健康・不老・幸福の四事の願を梵文傳記は多く說く。惑ひは四事が成らなくても、一願し後身を受けない事が達すればよいと附加する、普曜經は大乘的。

【一六九】防衞とは、太子の祕かに出家するを恐れ、太子の周圍・城門に監視人を置いた事を語るのであらう。快樂を置いたのは、太子に愛慾榮華に執著せしめる爲であらう。普曜經出家品等は具體的に詳細に記述する。

形は路に隨つて歸ると雖も　心は實に山林に留れり。　猶ほ繫れし狂象の
常に曠野に遊ぶを念ふ如し。　太子時に城に入れば　士女路を挾んで迎ふ。
老者は彼の子爲らんを願ひ　少は夫妻と爲らんと願ひ、　或は兄弟と爲らんと願ふ。
諸親內眷屬は　若し當に所願に從へば　諸集悕望斷つ。
太子の心は歡喜し　忽ち斷集の聲を聞きぬ。　『若し當に所願に從へば
斯の願は要に當に成すべし。』　深く斷集の樂を思ひ　一六四涅槃心を增長せり。
一六五身は金山峰の如く　臑臂は象手の如く　其の音は春雷の如く
紺眼は牛王に譬ふ。　無盡法を心と爲し　面は滿月光の如く
師子王の遊步をし　徐ろに本宮に入れり。　猶ほ一六六帝釋の子の如く
心に敬ひ形も亦恭しく　父王の所に往詣し　稽首して和安を問ひ
幷びに生死の畏を啓し　哀請して出家を求む。　『一切の諸世間は
合會すれば要つて別離す。　是故に願くは出家し　眞解脫を求めんと欲す。』
父王は出家を聞き　心卽ち大に戰き懼へ　猶ほ大狂象の
小樹枝を動搖するが如し。　前んで太子の手を執り　淚を流して告げて言ふ。
一六七『且く此の所說を止めよ。　未だ是れ法に依るの時にあらず。　少壯の心は動搖し
行法は多く過を生ず。　奇特なる五欲境を　心尙未だ厭離せず
出家し苦行を修するも　未だ心を決定する能はず。　空閑なる曠野の中にて
其の心未だ寂滅せず。　汝の心法を樂むと雖も　未だ我の是の時に若かず。
汝應に國事を領し　我をして先ず出家せしむべし。　父を棄て宗嗣を絕やすは
此れ則ち非法と爲す。　當に出家心を息め　世間法を受習すべし。

回の如くに會ふとする。有部律は本讚と同樣の次第にて記す。

【一六四】梵本五・二四、五によれば、「樂し（又は惠みある）」(Nirvṛta)から涅槃（Parinirvāṇa）を聯想したと言ふ、或ひは佛傳作者の言葉の技巧であらうか。因緣譚にはこの語をキサーゴータミー（Kisāgotami）が言ったとする。尙五分律・有部律・本行集經にもこの事がある。「涅槃は樂し」とは佛敎の常套語である。

【一六五】これは佛の妙相又は印度思想の容相である。詩的技巧多い句である。

【一六六】帝釋天子とはサナトクマーラ(Sanat-kumāra)卽ちスカンダ（Skanda）別名カールテイケーヤを言ひ、軍神。太子が大臣等に圍まれた父王の所へ行く樣を、阿修羅と戰ふ爲因陀羅が首長としてマルツ等と會議した席にサナトクマーラが進むに喩へた。

【一六七】この王の言葉は婆羅門の人生の四期思想に立脚してゐる。第一梵志期（Brahma-

有覺にして亦有觀なる　一五六 初無漏禪に入る。　欲を離れ喜樂を生じ
正受三摩提に入る。　『世間は甚だ辛苦し　老・病・死の壞つ所となり
終身大苦を受け　而して自ら覺知せず　他人の老・病・死を厭ふ
此れ則ち大患と爲す。　我今勝法を求む　世間を同して
自ら老・病・死を嬰りて　而して反つて他人を惡むべからず。　是の如き眞實觀あり。
少壯・色・力・壽は　新に新にと暫くも停らず　終に磨滅法に歸す』と。
喜はず亦憂へず　疑はず亦亂れず　眠らず欲に著せず
壞れず彼を嫌はず　寂靜にて 一五七 諸蓋を離れ　一五八 慧光轉た增明せり。
爾の時、淨居天は　化して 一五九 比丘形と爲り、　太子の所に來詣せり。
太子は敬ひ起ちて迎へ、　問うて言ふ。『汝は何人ぞ』　答へて言く。『是れ 一六〇 沙門なり。
老・病・死を畏厭して　出家し解脱を求む。　衆生は老・病・死に
變へ壞たれて暫くも停る無し。　故に我れ常樂　無滅亦無生を求め
怨親に平等心を抱き　財色を務めず　安ずる所は唯山林にて
空寂として營む所無く　塵想既に已み息み　蕭條として空閑に倚る。
精麁擇ぶ所無く　乞求して以て身を支ふ。』　即ち太子の前に於て
一六一 輕く擧り虛に騰つて逝けり。　太子の心は歡喜し　過去佛を惟ひ念ひ、
此の威儀を建立し　一六二 遺像を今に見たり。　端坐して正思惟し
即ち 一六三『正法』の念を得たり。　當に何の方便を作り　心を遂げて長く出家すべき
情を斂へ、諸根を抑へ　徐ろに起きて還りて城に入れり。　眷屬悉く隨從し
謂止りて遠く逝かず。　內密に愍念を興し　方に世表を超へんと欲す。

・がる。塵つもる。
【一五五】 閻浮樹。(Jambu)。
【一五六】 有覺有觀初無漏禪(Savitarka-vicāram prathamam anāśravam dhyānam) 無漏とは、煩惱(欲望)の無いこと。有覺有觀の第一禪定とは定心に覺觀共に有るもの。初禪天の根本定及び其の末至定(初禪の加行定)を言ふ。覺(Tarka)とは新譯では尋と言ひ、所對の境を觀察する麁想を言ひ、其の細想を觀(Vicāra)と言ひ、新譯には伺と言ふ。
【一五七】 蓋は、煩惱の異名。覆蓋の意。行者の心を覆ひて善心を開發せざらしむるものゝ故にかく言ふ。
【一五八】 第二禪定を得て、喜樂を斷つたのである。この境地で心理的に沙門の姿が現れたのであらう。
【一五九】 比丘(Bhikṣu)、「乞子者」の意。出家沙門を言ふ。
【一六〇】 沙門(Śramaṇa)。
【一六一】 印度思想では仙士は空を飛ぶとする。最上の仙を空飛ぶ白鳥に好んで喩へる。
【一六二】 過去佛思想と太子の過去修行思想あり。
【一六三】 正法(Dharma)とは如何なるものかを知り、それを實現する爲に出家を思つたのである。普通佛傳は沙門には第四回出遊の折王途上に前三

出城品第五

王は復た種々の　勝妙なる五欲の具を増せり。　晝夜、娛樂を以て
太子の心を悦ばさんと冀ふ。　太子は深く厭離し終りて　愛樂の情無く
但生死の苦を思ふ。　箭を被りし師子の如し。　王は諸大臣貴族の
名子弟にして　年少にて勝れし姿顔あり　聰慧にして禮儀を執るものをして
晝夜同じく遊止し　以て太子の心を取らしむ。[一五〇]　是の如くして未だ幾時もあらずして
王に啓して復出遊せり。　駿足馬の　衆の寶具にて莊嚴されしに服乘し
諸貴族子と　圍遶されて倶に城を出でたり。　譬へば四種華の
日照りて悉く開き敷く如し。　太子は神景を耀かし　[一五一]羽從つて悉く光を蒙れり。
城を出でゝ園林に遊ぶに　修路廣く且平に　樹木は花果茂り
心樂んで遂に歸るを忘る。　[一五二]路傍に耕人の　壤を墾し諸虫を殺すを見て、
其の心に悲惻生じ　[一五三]痛は心を刺貫されしに踰えたり。　又彼の農夫を見るに、
勤苦して形枯悴し　蓬髮にして流汗し　塵土は其の身を[一五四]坌せり。
耕牛も亦疲困し　舌を吐いて急喘せり。　太子は性慈悲深く
極めて憐愍心を生ぜり。　慨然として長歎を興し　身を降して地に委ねて坐せり。
此の衆苦を觀察し　生滅の法を思惟せり。　『嗚呼、諸世間は
愚癡にして能く覺る莫し。』　諸人衆を安慰して　各處に隨つて坐せしむ。
自らは蔭らし　[一五五]閻浮樹下に　端坐して正思惟せり。　諸の生死・起滅、
無常變を觀察せり。　心定り安じて動かす　五欲の廓雲は消へ

【一四五】五欲境。色・聲・香・味・觸の五境卽ち眼等の五根に對するもの。之は人間の欲想を起すもの故欲と名ける。
※肝膽。眞心。
【一四六】儽劣。儽は困弱すること、苦しみ弱ること。
【一四七】非常想。非常は無常(Anitya)と同じ。
【一四八】俛仰。ふしたり仰いだりする義。
【一四九】利刺。鋭き棘又は針。
【一五〇】第四回外遊他傳はこの時出る門を北門とする。この時沙門に會つて解脫への唯一の道を知る。
【一五一】左右補佐者の意か。
【一五二】多くの傳は農事視察・閻浮樹下の入定を四門出遊前十六、七歲頃の出來事としてゐる。(因果經二、本行集經十二、普曜經二)。有部律は四門出遊向とする。ルンビニー園に近く小高い丘があり、そこが太子が農業を見た所であると傳へる。
【一五三】小動物の死への憐憫は後年の佛教の不殺生の思想を暗示する。不殺生は婆羅門教に對する佛教の一大特長であつて大小乘に共通し、殊に大乘に著しいものがある。「慈悲」は智慧と共に佛教の大きな特色。
【一五四】坌。塵。あつまる。け

又彼の勝士は　五欲境に樂著せりと稱せるも　亦復同じく磨滅せり。
當に知るべし。彼は勝に非ざるを。　若し假に方便にて　隨順習近する者を言ひしも
習へば則ち眞に染著す。　何ぞ名けて方便と爲さん。　虛誑と僞りの隨順とは
是事我爲さず。　眞實に隨順する者は　是れ則ち非法と爲す。
此の心は裁抑し難し。　事に隨へば卽ち著を生ず。　著すれば則ち過を見ず。
如何に方便なりとも隨せんや。　虛りて順ひて心は乖く。　此れ理なりと我は見ず。
是の如く老・病・死は　大苦の積聚なり。　我をして其の中に墜ちしむるは
此れ知識の說に非らず。　嗚呼優陀夷は　眞に　*大肝膽を爲す。
生・老・病・死の患　此の苦は甚だ畏る可し。　然も人は悉く朽壞するを見て、
而も猶ほ樂を追逐す。　今我　[一四七]儕劣に至り　其の心亦狹少にて
老・病・死の卒に至り　預期すべからざるを思惟し、　晝夜睡眠を忘れ。
何に出つて五欲を習はんや　老・病・死は熾然として　決定して至つて疑無きに、
猶ほ憂慼を知らざるは　眞に木石の心と爲す。』　太子優陀夷の爲に
種々の巧なる方便にて　欲は深患と爲すを說き　日暮に至るを覺えず。
時に諸婇女衆は　伎樂莊嚴の具　一切悉く用無く
慚愧して還つて城に入れり。　太子は園林の　莊嚴悉く休癈し
伎女盡く還歸し　其の處悉く虛寂なるを見て、　[一四八]非常想を倍增し、
[一四九]俛仰して本宮に還れり。　父王は太子の心　五欲を絕てるを聞き、
極めて大憂苦を生じ　[一四九]利刺にて心を貫かれしが如し。　卽ち諸群臣を召し
問うて方便を設けんと欲す。　咸言ふ『五欲は能く　其の心を留むる所に非ず』と。

---

rmnā)は供物捧げたヴリハスパティの妻によつて性聖いブダを生んだ。スパティの妻の名はターラー（Tārā）であつたと。（プラーナ）（同）

【一四一】梵本四・七六によれば、婆羅舍は情慾に驅られ、水の子（リアグニ）の娘である處女カーリー（Kāli）とヤムナー（Yamunā）の岸で臥した。パラーシャラは教養高き仙士。（同）

【一四二】梵本四・七七によれば、人物少しく異る。卽ちヴアシシュタ（Vasiṣṭha）は愛慾から、卑められてゐる旃陀羅の女アクシャマーラーによつて、子カピンヂャラーヂャ(Kapiñjalāda)を生んだ。ヴアシシュタは多くの讃歌を作つた吠陀。仙多くの欲望を滿す手を持つ「富者」。婆羅門出身。彼と剎帝利出身のヴイシユヴーミトラとの間に激しい爭があつた。この頌の事跡はマヌ法典(Manu IX. 23)に出る。梵本の記述の方正し。（參照「佛陀の生涯」七七。）

【一四三】梵本はこの外、王仙ヤヤーテイの享樂（四・七八）、カウスヴア王パーンヅの快樂（四・七九）、カラーラヂャナカ仙の戀の傳說を記す。（「佛陀の生涯」五二二頁同註釋參照）

【一四四】甜辭。甘き言葉。

順は女心の樂と爲り、　順は莊嚴具爲り。　若し人、順を離れゝば
樹の花果無きが如し、　何故に應に隨順すべきか　其事を攝受するが故に。
已に得難き境を得たり。　其に輕易想を起す勿れ。　欲は最第一と爲す。
天も猶ほ忘るゝ能はず。　帝釋も尚　[一三七]瞿曇仙人の妻と私通せり。
[一三八]阿伽陀仙人は　長夜苦行を修し　以て天后を求めんと爲し、
而して遂に願は果さず。　[一三九]婆羅墮仙人　及び　[一四〇]月天子と
[一四一]婆羅舍仙人と　[一四二]迦賓闍羅と　[一四三]是の如き比衆の多くは
悉く女人の爲に壊されたり。　況んや今其は自らの境界にあり　而して娛樂する能はざらんや。
宿世、德本を殖ゑ　今此の妙衆具を得。　世間の人は皆樂著し
而して心なつて珍とせざらんや』　爾の時王太子は　友優陀夷の
[一四四]甜辭利口辯にて　善く世間相を說くを聞き、　答へて言ふ。『優陀夷よ
汝の誠心にて說くを感ず。　我今當に汝に語るべし。　且つ復た心を留めて聽け。
我妙境界を薄ぜず　亦世人の樂しむを知る。　但し無常想を見るが故に
患累心を生ぜり。　若し此法常存にして　老・病・死・苦無きならば
我亦應に樂を受け　終に厭離心無かるべし。　若し諸女色の
竟に至りて衰變無くんば、　愛欲を過と爲すと雖ども　猶ほ人の情を留むべし。
人、老病死有り　彼も應に自ら樂ざるべし。　何ぞ況んや他人に於てをや。
而も染著心を生ず。　常住ならざる　[一四五]五欲境には　自身も俱に亦然り。
而も愛樂心を生ず。　此れ則ち禽獸に同じ。　汝の引く所の諸仙は
五欲に習著する者にて　彼は卽ち厭患すべし。　欲を習ふが故に磨滅せり。

【一三六】隨順は、梵本(Anuvṛtti)(四・六八)尊敬に當る。
【一三七】帝釋天卽ち因陀羅天はガウタマ(Gautama)の妻アハルヤー(Ahalyā)にいどみ、仙の呪で彼の上に千の陰門の標を印され、以後「陰門を持つ者」(Sa-yoni)と呼ばれるに至り、後それは目に代り、ネートラ・ヨーニ(Netra-yoni)(目陰門)又は具千眼者(Sahasrākṣa)と呼ばれるに至つた。
【一三八】阿迦陀(Agastya)は敎養の高い仙で、梨俱吠陀中に彼の作つた讃歌がある。彼はソーマ(月神)の妻であるローヒテイを戀し、得られず、彼女に似たローパームドラー(Lopamudrā)を妻として得た。
【一三九】梵本四・七四によれば、大苦行者、ウリパスパテイは、風神マルツの娘で、アリタトヤの妻であるママターによつて、ハラドヴアーヂヤを生んだ。(「佛陀の生涯」五一一頁)ヴリハスパテイに就いては前出。ママター(Mamatā)は夫アウタトヤ(Autathya)によつてデイールガ・タマス(Dirghatamas)を、ウリハスハテイによつてパラドヴアーヂヤ(Bharadvāja)を産んだ。
【一四〇】梵本四・七五によれば、最もよい供一養者月(Cand-

或ひは世俗の調戯をなし
以て其の心を動かさんと規せり。
諸の婇女の說を聞いて、
此を嘆じて奇怪と爲す。
『少壯色は俄頃にして
愚癡に其の心を覆れしは。
鋒刄其の頸に臨むに
自ら觀察するを知らず。
空野の雙樹が
第二は怖れを知らざる如し。
爾の時優陀夷は
心に五欲想無きを見て、
子の爲に良友と爲す。
能く不饒益を除き、
我旣に善友と名けられて
何を名けて三益と爲さん
年、盛時に在り
斯は勝人の體に非ず。
當に [一三五]輭下心を生ずべし。
女人に過ぐるは無し、

或ひは衆の欲事を說き、
菩薩の心は清淨に
憂へず亦喜ばず。
始めて諸の女人の
老死の壞つを知らず
當に老・病・死を思へば
如何にして猶嬉笑せんや。
是れ則ち泥木の人
華葉倶に茂り盛にして
此等の諸人輩の
太子の所に來り至つて、
卽ち太子に白して言く
今當に誠言を奉ずべし。
人の饒益する事と成り、
丈夫の義を棄捨し
今故に眞言を說き
容色、充備を得。
正使、實心無し。
[一三六]隨順は其の意を取り、
且今心には背くと雖も、

或ひは諸欲形を作し
堅固にして轉すべきは難し。
倍 厭思惟を生じ
欲心盛なること是の如きを知れり。
哀なる哉、此の大惑
晝夜勤めて [一三二]勗勵すべし。
他の老・病・死するを見て
當に何の心に慮ること有るべきや。
一は已に斬伐せられて
無心なるも亦是の如し。
彼の [一三三]宴默禪思して
『大王先に勅せられ
朋友に三種有り、
[一三四]難に遭つて遺棄せず。
言・所・懐を盡さゞれば
以て我が丹誠を表さん。
女人を重ぜざれば
宜しく方便して納るべし。
愛欲は憍慢を增すこと
法により應に方便にて隨ふべし。

【一二八】毘尸婆(Viśvāmitra)は刹帝利族に生れ、苦行によつて婆羅門族に上つた大仙。駒尸(クシカ Kuśika)王子はガーディ(Gādhi)王の子。天后とはブリターチイー(Ghṛtācī)のこと。彼女は天女で仙女との情事が多い。この頌と同じ說話がラーマーヤナ(Rāmāyaṇa IV. 35. 7)にある。

【一二九】以下の詩句は自然描寫抒情共に美しく細やかにて官能的である。

【一三〇】眄睞は、眄は流し眼を使ふこと。睞は横眼を使ふこと。

【一三一】媟は、狎れること。

【一三二】勗は、事を勵み爲す。勸む。

【一三三】宴は、靜かなり、安し、間暇なり。

【一三四】友情の三德、法典に出るものとは一致しない。優陀夷の言として馬鳴のまとめたものか。

【一三五】輭下心は、梵本(Sa-ṃnati)(四・六八)謙遜慇懃に當るか。

今此の王太子
女人の力には勝へず
愛欲を習はしめて
亦天后の壞す所と爲る。
二二八毘尸婆梵仙は
一日にて頓に破壞せり。
況んや汝等の技術は
王嗣を絕えしむる勿かるべし。
何ぞ其の術を盡して
慶んで優陀の說を聞き、
二二九太子の前に往き到りて
眉を揚げ、白齒を露し、
妖搖して徐ろに歩みし
兼ねて大王の旨を奉じ、
太子の心は堅固にして
群象衆に圍遶せられ、
猶ほ天帝釋の
圍遶さるゝも亦是の如し。
或ひは香を以て身を塗り、
或ひは身を扶抱する有り。

心を持すること堅固にして
古昔二二五孫陀利は
足を以て其の頂を蹈めり。
二二七勝渠仙人の子は
修道十千歲なりしかど
彼の諸美女の如きも
王子を感ずる能はざらんや。
女人の性は賤しと雖も
彼に染心を生ぜしめざるや』
其の踊悅心を增し、
各々種々の術を進む。
美目相二三〇眄睞し
詐り親んで漸く習近せり。
慢形二三一嫫隱陋
傲然として容を改めず、
その心を亂され能はざる如し。
諸天女に圍遶さるゝが如し。
或ひは爲に衣服を整へ
或ひは華を以て嚴飾せり、
或ひは爲めに枕席を安じ

清淨の德專ら備ると雖も
能く大仙人を壞ち、
長く苦行せし二二六瞿曇も
欲を習つて隨つて治流せり。
深く天后に著して
力、諸梵行に勝れり。
更に勤方便して
尊榮、勝天に隨ふ。
爾の時婇女衆は
良馬を鞭策するが如し。
歌舞し或ひは言笑し
輕衣にて素身を現はし、
情欲其の心に實り
其の慚愧の情を忘れたり。
猶ほ大龍象の
衆と處るも閑居の若し。
太子園林に在り
或ひは爲に手足を洗ひ
或ひは爲めに瓔珞を貫き、
或ひは身を傾けて密語し

【二二四】愛慾。情愛等に關する知識方法等を言ふか?。
【二二五】孫陀利(Sundari)、迦尸の一遊女を言ふ。傳說によると、仙首の上に遊女が跛つたとする。この說話は初め一角仙人の話と別であつたが、後に一緖になつた。
【二二六】瞿曇(Gautama)。梵本によれば最も尊い仙であるマンターラガウタマ(Manthāla-gautama)比丘は遊女ヂャンガー(Jaṃghā)に誘惑され彼女の爲に、最も卑しい仕事である死體運搬を爲したと。
【二二七】リシュヤシュリンガ(Ṛṣyaśṛṅga)カシュヤパ(Kaśyapa)子孫のヴイバーンダガ(Vibhāṇḍaka)の子で、仙士。マハーバーラタではリシュヤシュリンガ(Ṛṣyaśṛṅga)男鹿の仙人で、鹿の子)の子で、額に一角あり、森にあつた。アンガ(Aṅga)國に旱魃があり、ローマパーダ(Lomapāda)王の招で雨を降らし、娘シャーンター(Śāntā)と結婚した。シャーンターは王の養女で、シャーンターの實父は十車王(ダシャラタ Daśaratha)でリシュヤシュリンガは十車王の爲祭式を行ひ、ラーマ(Rāma)を生ました。

公に身の磨滅を見
猶ほ倘放逸生ず。
心、枯木石に非ざるも
曾て無常を慮らず。』
即ち勅して『車を迴して還れ。
復遊戯の時に非ず。
命絶へ死期する無し。
如何にして心を縦にして遊ばんや』
御者、王勅を奉じ
畏怖して敢て旋らず
正しく御し疾く驅馳し
徑に往いて彼の園に至る。
林流は滿ちて清淨に
嘉木悉く敷き榮え、
靈禽と雜奇獸
飛走し欣び和して鳴き、
光耀いて耳目を悅ばすこと
猶天の[二〇]難陀園の如し。

離欲品第四

[二一]太子園林に入れば
衆女來つて奉迎し、
並びに希遇想を生じ
媚を競ふて幽誠を進め
各ゝ妖なる姿態を盡し
供侍して所宜に隨へり。
或ひは手足を執る有り
或ひは遍つて其身を摩せり。
或ひは復對へて言笑し、
或ひは憂慼の容を現し、
以て太子を悅ばし、
愛樂の心を生ぜしめんと規す。
衆女は太子の
光顔にて狀天身の如く
諸飾好を假らずして
素體は莊嚴を踰ゆるを見て、
一切皆瞻仰して
[二二]月天子來れりと謂へり。
種々方便を設けて
菩薩心を動し得ずして
更に互に相顧視して
愧を抱いて寂として言無し。
婆羅門子有り
名けて[二三]優陀夷と曰ふ。
諸婇女に謂つて曰く
『汝等悉く端正にして
聰明にして技術多し。
色力も亦常ならず、
兼ねて諸の世間の
[二四]隱祕隨欲方を解す。
容色は世に希有にして
狀、王女の形の如し。
天も見て妃后を捨て
神仙も之が爲に傾かん。
如何にして人王の子は
其の情を感ずる能はさらんや

【一九】車軾は、軾は車前、伏して以て式敬する所のもの。

【二〇】難陀園（Nandana-vana）。須彌山の北にある因陀羅(Indra)の森。

【二一】以下描寫は他の佛傳に全然類無く美しい。馬鳴の詩才と宮廷詩の様式による。

【二二】月。チャンドラマー(Candramā)を言ふ。甘露(不死）の光を持つてゐると考へられる。

【二三】優陀夷(Udāyin)。他傳によれば、優陀夷は父王に撰ばれた太子の學藝の友。太子成道後父王に命ぜられて、釋尊の還國を願ひに遂られ、自らも出家し、弟子となつた。

是に於て車を廻して還り、　愁へ憂えて病苦を念ふ。　人の打害を被り、
身を捲げ杖の至るを待つ如し。　息を閑宮に靜めて　專ら反世の樂を求む。
王復た太子の還るを聞き　勅して何の因緣なるかを問ふ。　對へて曰く『病人を見たり。』
王怖れて猶ほ身を失ふ如し。　深く治路者を責むるも　心結ばれて口に言はず。
復た伎女衆を增し　音樂前に信勝す。　此を以て視聽を悅ばし
俗を樂しみ家を厭はざらしむ。　晝夜〔二二〕聲色を進め　其心未だ始めて歡ばず。
〔二一〕王自ら出でゝ遊歷し　更に勝妙園を求め、　諸婇女の美艶にして
極めて恣なる顏をなし　〔二三〕諂黠にして能く奉事し　容媚能く人を惑するを〔二四〕簡擇す。
王の御道を增修し　諸不淨を防制し　幷びに善御者に勅し
瞻察して路を擇んで行かしむ。　時に彼の淨居天　復た化して死人と爲り
四人共に輿を持して　菩薩の前に現る。　餘人悉く覺えず
菩薩と御者のみ見る。　問ふ『此は何等の輿ぞ　幡と花とを雜へて莊嚴し
從者悉く憂慼し　髮を散して號哭して隨ふ。』　天神、御者に敎へて
對へて曰く〔二五〕『死人と爲す。　〔二六〕諸根壞れ命斷ち　心散じ念識離れ
神逝き形乾燥し　〔二七〕挺直して枯木の如し。　親戚諸朋友の
恩愛素より纏綿するも　今は悉く喜んで見ず　遠く空塚の間に棄てらる。』
太子、死の聲を聞き　悲痛の心交ゝ結ぼりて　問ふ『唯此の人のみ死するや
天下亦倶に然るや』　對へて曰く『普く皆爾り。　夫れ始あれば必ず終有り。
長幼及び中年　身有れば壞れざる莫し。』　太子心に〔二八〕驚怛し
身、〔二九〕車軾の前に垂れ、　息殆んど絶へて嘆く。　『世人一何ぞ誤る。』

【二二】聲色。音樂と愛慾と。
【二三】第三回出遊。人生苦中「死」に出會ふ、他傳はこの時出る門を西門とする。
【二三】諂黠は、へつらひ、惡賢しきこと。
【二四】簡擇は、撰ぶこと。
【二五】死人(Gataśu)。
【二六】根(Indriya)。感官・器官を言ふ。眼・耳・鼻・舌・身即ち五根に意を加へ、普通六根を數ふ。
【二七】挺は、拔んで出る。直し。
【二八】驚怛は、驚きをどろく。

衰老の苦を説くを聞き、　戰慄して身を竪てり、　雷霆霹靂の聲に
群獣怖れて奔走す。　菩薩も亦是の如し。　震へ怖れて長く噓息す。
心に老苦繫り　頭を傾れて瞪矓し、　此の衰老の苦を念ふ。
『世人は何ぞ愛樂するや　世人は老相の壞つ所となり　觸るゝ種類は擇ぶ所無し。
壯・色・力有ると雖も　一として遷變せざる無し。　目前に證相を見て、
如何にして厭離せざるや』　菩薩、御者に謂へらく、　『宜しく速かに車を迴して還るべし。
念々にして衰老至る。　園林何ぞ歡ぶに足らんや』　御者、命を受けて卽ち風の如く馳せ、
車輪を飛ばして本宮に旋れり。　太子は心、朽暮境に存し、　空塚の間に歸るが如し。
事に觸れて情を留めず、　所居、暫くも安き無し。　[一〇三]王、子の歡ばざるを聞いて、
勸めて重ねて出遊せしむ。　卽ち諸群臣に勅して　莊嚴すること復た前に勝る。
[一〇四]天復た[一〇五]病人に化して　命を守つて路傍に在り。　身痩せて腹大に
呼吸長くして喘息す。　手脚攣り枯燥し。　悲泣して呻吟す。
太子、御者に問ふ。　『此れ復た何等の人ぞ』　對へて曰く「是は[一〇六]病者にて
[一〇七]四大倶に錯亂し　羸劣にして堪ふる所無し。　轉側して人を[一〇八]恃仰す。
太子所説を聞いて、　卽ち哀愍の心を生ず。　問うて『唯此の人病むや
餘も亦復爾るべきか』　對へて曰く『此は世間一切　倶に亦然り。
身有れば必ず患有り。　[一〇九]然も愚癡なるは朝の歡を樂む』　太子、其説を聞いて
卽ち大なる恐怖を生じて　身心悉く戰き動く。　譬へば[一一〇]揚波月の如し。
『斯の大苦器に處り　云何ぞ能く自ら安ずるや　嗚呼、世間の人は
愚にして惑ひ、癡の闇に障らる。　病賊至るに期無し。　而も喜樂の心を生ず。』

【一〇三】第二回出門。人生苦中「病」に出會ふ。他傳はこの時出る門を南門とする。
【一〇四】天は淨居天を指す。
【一〇五】病人、(Vyadhiparita-deha)(病に捉はれし身體)
【一〇六】病(Roga)。
【一〇七】印度では、病は大(Dhātu)。卽ち身體形成の要素の不調和から生ずると言ふ。大を普通五卽ち空・風・光・水・地又は三卽ち痰・風・膽汁と數へる。四大とするのは普通でない。
【一〇八】恃は、賴む。依る。
【一〇九】一時の歡樂を樂しむ意。
【一一〇】水波に宿る月の意。

側身して容目を競ひ　瞪矚して觀て厭くる無し。　高くにて觀るは地に投ぜんとすると謂つべく、
[九四]歩者は虛に乘ぜんとすると謂つべし。　意專らにして自ら覺えず、　[九五]形神、雙ながら飛ぶが若し、
虔々たる恭しき形觀にて　[九六]放逸心を生せず。　『圓體臆支節にて
色は蓮花の敷くが若し。　今出でゝ園林に處る、　[九七]願くは聖法仙と成らんことを、
太子は修塗を見、　莊嚴、人衆に從ひ　服乘に鮮やかなる光澤あるを見て、
欣然として心は歡び悅ぶ。　國人の太子の　嚴儀・勝羽從ふを瞻ること
亦諸天衆の　天太子の生れるを見る如し。　時に　[九八]淨居天王は
忽然として道側に在り、　形を變じ、衰老相を現はし、　厭離心を生ずるを勸む、
太子は　[九九]老人を見て、　驚怪して御者に問ふ、　『此是は何等の人ぞ、
頭白くして背僂る　目は冥し、身戰慄し　杖に任して羸歩す。
是の身卒に變ぜしと爲すや。　受性自ら爾りと爲すや』　御者は心に躊躇し
敢て實を以て答へず。　淨居天、神力を加へ　其をして眞言を表せしむ。
『色變じ氣虛に微に　憂多くして歡樂少し。　喜忘れ諸根羸し。
是を　[一〇〇]衰老相と名く。　此れ本嬰兒爲り、　長く母乳に養はれたり。
童子たるに及び嬉遊し　壯年となり端正にして五欲を恣にす。　年逝いて形枯朽し
今老の壞つ所と爲る。　太子長く歎息し、　而して御者に問うて言ふ
『但し彼獨り衰老するや　吾等亦當に然るべきや』　御者又答へて言ふ。
[一〇一]『尊にも亦此の分(限)有り、　時移れば形自ら變り　必ず至ること所疑なし。
少壯なるとも老いざるなし。　そを世を擧げて知りて而も求む。』　菩薩久しく淸淨なる
智慧業を修習し、　廣く諸の德本を殖え、　[一〇二]今世に果華するを願ふ。

こと。
【八九】眼は、印度詩歌にては好んで靑い蓮華に喩へらる。
【九〇】宿王は、星宿の王卽ち月を言ふ。
【九一】塘は、土を築きて水を遏むるもの。土手、堤。
【九二】牖は、壁を穿ちて風日を引く所。窓。
【九三】衢は、町。
【九四】高觀謂投地、步者謂乘虛。梵本三、二二、「かの道に太子を眺めて女達は地に落ちやうと欲するやうに見え顏仰向いて彼を凝視めて、男達は天に上らうと欲するやうに思はれた。」により意譯す。
【九五】身體と心靈と。形と心。
【九六】規矩も守らず、恣いまなること。
【九七】梵本ではこの句を市民の言葉とす。(三、二四、「佛陀の生涯」三一頁。)
【九八】淨居天　(Śuddhādhivāsa viśuddhasattva)、前出。
【九九】老人(Jirṇa-nara)。
【一〇〇】衰老相(Jarā)。
【一〇一】尊は、御身の意。
【一〇二】菩薩の前世修業思想現はる。

水陸四種の花は　炎色[七九]にして妙香を流がす。　伎女は因りて奏樂し
絃歌ば太子に告ぐ。　太子は音樂を聞き、　彼の園林を歎美し、
內懷に甚だ踊悅し　出遊觀を思樂す。　猶ほ繫がれし狂象の
常に閑曠野を慕ふ如し、　父王は太子の樂んで　彼の園に出で遊ばんとするを聞き、
即ち諸群臣に勅して　嚴飾して羽儀[八〇]を備ふ。　王の正道を平治して
幷びに諸の醜穢　老・病・形殘類　羸劣・貧窮・苦めるを除き、
少樂子の見て　厭惡心を起すを無からしむ。　莊嚴悉く備り已りて
啓請して拜辭を求む。　王は太子の至るを見て　頭を摩て顏色を瞻る。
悲喜の情交ゝ結ぼり　口に許して心にては留む。　[八一]衆寶、軒[八二]飾車に
駿にて平流なる駟[八三]を結び　賢良にて術藝を善くし　年少にて美しき姿容あり、
妙淨にて鮮なる華服をつけたるが　同車して執御と爲る。　[八四]街巷に衆華を散じ、
寶縵にて路傍を蔽ひ、　垣樹は道側に列り、　寶器を以て莊嚴し、
[八五]繒蓋と諸[八六]幢幡とは　[八七]繽紛として風に隨つて揚る。　觀者は長路を挾み、
側身し目は連りて光り、　[八八]瞪矚して瞬かず　[八九]青蓮花の並ぶが如し。
臣民悉く扈從して　星の[九〇]宿王に隨ふ如し。　異口同聲に歎じて
世に希有なりと稱慶す。　貴賤及び貧富　長幼及び中年
悉く皆恭敬して禮し　唯吉祥ならしめんと願ふ。　郭邑及び田里の庶民
太子の當に出すべきを聞き、　尊卑も辭を待たず　寤寐に相告げず
六畜收むるに遑あらず、　錢財斂るに及ばず、　門戶閉ずるを容さず、
奔馳して路傍に走る。　樓閣・堤[九一]塘樹　窓[九二]・牖・[九三]衢巷の間

【七九】炎色は、炎は美しく盛なる貌。
【八〇】羽儀は、天子の車前に羽を負ひて侍衞すること。即ち天子の行列。
【八一】第一回出遊。他佛傳ではその時出ずる門を東門とする。先ず人生苦中「老」に出會ふ。以下の太子行列に集ふ市民殊に女達の描寫は非常に優れて、詩美に豐かである。之等は叙事詩で抒情詩である。このやうな細かな描寫は佛教では初めてゞある。この頌句のあるものは詩聖カーリダーサの「軍神降誕」(Kumārasambhava)に類似し、之に影響を與へたと思はれる。(平等「佛陀の生涯」頁六、九參照。
【八二】軒。高し、輕しと訓し、車の前むに前輕くして高きを言ふ。
【八三】駟。一乘の車に四頭つけたる馬。
【八四】以下印度王侯の行列の華やかさを示す。
【八五】繒蓋は、繒はきぬ。蓋はかさ。
【八六】幢幡は、幢は儀衞、又は指麾に用ふる旌旗、幡は旗、幟。
【八七】繽紛は、入り混つて盛なる貌。
【八八】瞪矚は、共に見詰める

『太子已に子を生む　歴世の相繼嗣　正に化して終極無し。
太子既に子を生めり。　子を愛すること我と同じ。　復た出家を慮らずして
但し力めて善を修すべし。　我今心大に安じて　天に生るゝの樂に異るなし。』
猶ほ[七七]劫初の時の　仙王の住する所の道の若く　清淨の業を愛行し
祠祀して生物を害せず、　熾然として勝業を修し、　王勝れ梵行勝れ、
宗族財寶勝れ、　勇健にして伎藝勝れ、　明に顯れて世間を照し
日の千光の耀ふ如し。　王者爲るの所以は　將に其子を顯す爲なり。
子を顯すは宗族の爲なり。　族を榮しむるに名聞を以てし　名高ければ生天を得。
生天は樂の爲のみ。　已に樂めば智慧增し　道を悟りて正法を弘め、
先勝　名聞所　衆の妙道を受行し　唯太子の子を愛し
家を捨てざらしめんと願ふ。　一切の諸國王は　生子年尙少なれば
王の國土をして　其心の放逸なるを慮らしめず　情を縱にして世樂に著し
王種を紹ぐ能はず　今王は太子を生み　心に隨つて五欲を恣にし
唯世榮を樂むを願ひ　道を學ばしめんと欲せず、　過去の菩薩王は
其道は深固なりと雖も　要は世榮の樂を習ひ　生子が宗嗣を繼ぎて
然る後に山林に入り　寂默の道を修行せり。

厭患品第三

外に諸の園林有り　流泉と淸涼池とあり　衆雜の華果樹は
行列して[七八]玄蔭を垂る。　異類の諸奇鳥は　奮ひ飛んで其の中に戯る。

羅は父成道後歸國の際に他の王族と共に出家し、羅漢となり、十大弟子の一人と數へらる。

【七七】「劫初の時の仙王の住する所の道」とはマヌ達を指すか。

【七八】玄蔭は、暗き又は靜なる蔭。

靜居して純德を修め、仁慈にして正法にて化し、賢に親しみ惡友を遠ざけ、
心恩愛に染まず。欲に於て毒想を起し、情を攝して諸根を撿ね、
輕燥の意を滅除し、和顏にて善く訟を聽き、慈しみ教へて衆心を厭し、
諸外道を宣化し諸の謀逆の術を斷じ、學を教へて世方を濟ひ
萬民は安樂を得。我子を安からしむる如く、萬民、亦是の如し。
[七二]火に事へて諸神を奉じ[七三]叉手して月光を飲む。[七四]恒に水にて身を沐浴し
法水にて其の心を澡し、祈福已に存するに非ずして唯だ子及び萬民に存す。
愛を言ふとも義無きにあらず。義を言ふも不愛にあらず。愛を言ふも不實に非ず。
實を言ふも不愛にあらず。慚愧有るを以ての故に如實に說く能はざりき。
愛不愛の事に於ても貪恚想に依らず志寂默に存して
平正にして諍訟を止め、[七五]祠天會を以てせずして斷事の福に勝る。
彼の多求の衆を見て豐かに施して其望に過ぎ、心に戰爭の想無く
德を以て怨敵を降せり。一を調へて七を護り七を離れて五を防制し
三を得て三を覺了し、二を知つて二を捨たり。情を求めて其の罪を得
死に應ずる者に仁恕を垂れ、麁惡の言を加へず軟く語つて敎勅し、
務め施すに財物を以てし資生の路を指受せり。神仙道を受學し
怨恚の心を滅除せり。名德は普く流聞し世間は永く消亡し
主匠、は明德を修めれば率土皆承習す。人心安靜なれば
四體の諸根從ふ如し。時に白淨王の太子の賢妃耶輸陀は
年並に漸く長大に[七六]羅睺羅を孕生せり。白淨王自ら念へらく

ラス(Apsaras)、を指し、同じく宮神の宮の美しき音樂歌舞の女神を言ふ。

【七二】火とは、火神アグニ(Agni)神を言ふか。アグニ神は印度の人の崇拜する最も古い最も神聖な神。天では日、中空では稻妻、地では火として現れる。七の舌を持つ。八世界の一の支配者で、アンギラスの子とも傳へらる。

【七三】蘇摩(Soma)。酒を言ふか。月と蘇摩酒とよく混同さる。ソーマ酒はある蔓草(Asclepias Acida)、から搾取され、醱酵さした液汁で、飮物として神々に捧げられ、婆羅門其他に好んで飮まれる。

【七四】恒水沐浴身。或ひは「恒水にて」か。然し、恒河の水は神聖にされ、之にて沐浴するも、迦毘羅城は恒河には遠し。梵本は「靈場の水また功德の水にて沐浴せり。」

【七五】天を祭るのに犧牲を用ひずして、殺生した以上の福德を得た意。

【七六】羅睺羅。子の出生は太子四門出遊後又は出家後とするものもある。然し、出遊前とするのが正しからう。薩睺

太子天童の如く
德貌世に奇挺にして
旣に生母命終れるを見て
愛育すること其の子の如し。
子敬ふこと亦母の如し。
日月の火光は
微より照して漸く廣くなる如く
太子は長ずること日に新に
德貌も亦爾り。
無價き 六三栴檀香
六四閻浮檀の名寶
護身の神仙藥
瓔珞にて身を莊嚴せり。
附庸の諸隣國は
王の太子を生めるを聞いて
太子に諸の嚴飾
嬰童の玩好物有りと雖も。
諸の珍異なる
牛羊鹿馬の車
寶器莊嚴具を奉獻して
太子の心を助悅せり。
太子の性は安重にして
形少にして心宿し
心は高勝境に栖み
榮華に染まず。
六五諸の術藝を修學して
一たび聞いて師匠に超ゆ。
父王は彼の聰達にして
深慮の世表に踰ゆるを見て
廣く名豪族にて
風敎禮義の門を訪ひ、
容姿端正なる女
六六耶輸陀羅と名くるを
太子の妃に聘し
誘導して其の心を留らせんとす。
太子の志は高遠にして
德盛に貌は清明に
猶ほ梵天の長子
六七舍那鳩摩羅の如し。
賢妃の美しき容貌
六八窈窕淑妙たる姿は
瓌艶なること天后の如く
同じく處つて日夜歡べり。
太子の爲に淸淨宮を立て
宏麗にて極めて莊嚴に
高く峙へて虛空に在り、
六九迢遰として秋雲の若し。
溫涼四時に適し
隨時に善居を擇び
七〇妓女衆は圍遶し
天の樂音を奏合し
穢れし聲色に隣り
厭世想を生ぜざらしむ。
七一天の犍撻婆の
自然の寶宮殿に
樂女が天音を奏し
聲色にて心目を耀かすが如し。
菩薩の高宮に處るや
音樂亦是の如し。
父王は太子の爲に

【六三】 栴檀の練香(Candana)。は白檀から作つた黃色の軟香で、身に塗る。熱い時身を涼しく感ぜしむる。

【六四】 閻浮檀(Jambudvipa)は、印度の事を言ふ。

【六五】 他傳では太子は七、八歲で文武の師につき、習はずして六十四種の書を知り、二十九種の武技に達し、諸師を驚かした。と婆羅門の慣に從つて五明四吠陀を中心としたか。

【六六】 耶輸陀羅(Yaśodharā)。とは『榮譽(Yaśas)を持つもの』の意。善覺長者又は大臣執杖又は大名の子とされる。妻はこの外瞿夷(Gopā)、善賢(Subhadrā)、等の異說もある。太子の結婚年齡は十七歲又は廿歲とも言ふ。

【六七】 舍那鳩摩羅は、梵天の心から生れた四子の隨一。常に淸淨無垢であつた。

【六八】 窈窕。淑かなること。

【六九】 迢遰。共にはるかなること。

【七〇】 他傳は王が太子の爲三時春夏秋の殿を建て、妓女娛樂の具を備へたと。

【七一】 犍撻婆(Gandharva)。は宮神クヴエーラのアラカーの宮殿に仕へる音樂の男の神々を言ふ。樂女は女神アプサ

形體極めて端嚴に
又野の生する所のものも
肥壯にして形端正にて
怨憎の者は心平かに
亂逆なるは悉く消除せり。
種殖は時を待たざるも
輕軟にして消化し易し。
四聖種を受くるを除き
他に求むるの想あることなし。
一切の諸士女
園林と井泉と池と
合境飢餓なく
親族相愛敬し
義を以て財物を求め
反報を求むる想なし。
過去の〔五九〕摩菟王
衆惡一時に息めり。
衆德を備ふる義を以て
其生む所の子の
過ぎし喜びに自ら勝へず

朱髦にて纖長の尾ありて
時に應じて自然に至る。
平歩せる淳香乳あるも
中平なるは益ゝ淳厚なり。
微風ありて時に隨つて雨降り
實を收ること倍豐積なり。
諸有の懷孕せる者は
諸の餘の世間の人は
慢なく慳嫉なく
玄にして劫初の人に同じ。
一切天物の如く
刀兵疾疫息む。
法愛を以て相娛樂し
貪利の心あることなし。
四梵行を修習して
日光太子を生みしに
今王、太子を生み
〔六〇〕悉達羅他と名く。
端正にして天童の如く
〔六一〕命終つて天上に生れぬ。

超騰するに駛きこと飛ぶが若きも、
純色にて調されたる善牛にて
時に應じて悉く雲集せり。
素より篤きは親密を增し
雷霆は震裂せず。
五穀は鮮香美に
身安かに體和適なり。
資生各自如して
亦恚害の心なし。
天廟と諸寺舍
國中の諸人民
時に應じて自然に生ず。
染汚の欲を生ぜず。
法の爲め惠施を行じ
恚害の心を滅除せり。
擧國吉祥を豪り
其德亦復爾り。
時に摩耶夫人
衆の美悉く備はり足るを見て
〔六二〕大愛瞿曇彌は

【五九】摩菟（Manu）は、人類と王との十四人の神話的先祖の名。その內最初の王は「自存者の子」スヴアーヤン・バヴアで十人の生主を生んだ。マヌの法典とマヌ經の作者と傳へられる。現時のマヌはヴイヴアスヴツト（Vivasvat）の子のヴアイスヴアタ（Vaisvata日生）で、刹帝利の出である。この子が甘蔗(Ikṣvāku)、等である。

【六〇】悉達羅他(Siddhārtha)。梵本はSarvārthasiddha即ち「凡ての事が成就する」（一切義成就）の意である。

【六一】他傳は母后は七日で歿し、忉利天に上昇し、不死となり、天上の快樂榮華を受けたと。

【六二】大愛瞿曇彌又は摩訶波闍波提瞿曇彌(Mahāprajāpatī-gotamī)、摩那夫人の妹、難陀の母にて、佛陀の養母、后に比丘尼教團の指導者となる。

普く諸天神を祠つて　廣く有道に施し、　沙門婆羅門は
呪願して吉福を祈る。　諸群臣及び國中の貧乏に　嚫施し
村城姝女衆に　牛・馬・象・錢財を　各、彼の所須に隨ひて
一切皆給與せり　選良時を卜擇して　子を遷して本宮に還る。
二飯の白淨の牙と　七寶にて莊嚴したる輿　雜色の珠にて[五二]絞絡され
明艶にして極て光澤あり。　夫人、太子を抱いて　周匝して天神を禮し、
然る後寶輿に昇り　姝女衆隨侍せり。　王は諸の臣民と
一切俱に導從せり。　猶ほ天帝釋を　諸天衆の圍遶せる如し。
[五三]摩醯首羅忽として　[五四]六面子を生める如く。　種々の衆具を設けて
供給し及び請福しぬ。　今王、太子を生みて　衆具を設くるも亦然り。
[五五]毘沙門天王の　[五六]那羅鳩婆を生むや　一切諸天衆
皆悉く大に歡喜せり。　今王、太子を生みて　迦毘羅衛國の
一切の諸人民も　歡喜すること亦是の如し。

處宮品第二

[五七]時に白淨王家は　聖子を生めるを以ての故に　親族名子弟
群臣悉く忠良に、　象・馬・寶車輿　國財七寶の器
日々轉たゝ增勝し　應に隨つて集生す。　無量の[五八]諸伏藏は
自然に地より出て　清淨なる雪山中の　凶狂なる群白象は
呼ばずして自然に至り　御せずして自ら調伏す。　種々雜色の馬にて

【五二】絞絡。結びまとふ。
【五三】摩醯首羅(Maheśvara)。梵本はバヴア(Bhava)あり。同神異名。ルドラ(Rudra)又はシヴア(Śiva)のこと。藥で癒やす犧牲の主、生物に富と幸福を與へる最善寬仁なる神。
【五四】六面子(Ṣaṇmukha)は軍神カールティケーヤ(Kārttikeya)の事。韋駄天(Skanda)と同じ。
【五五】毘沙門天は、富神クヴエーラ(Kuvera)のこと。雪山山頂のアラカーに宮殿を持つ、富の神で、財を司配する。
【五六】那羅鳩婆(Nalakūvara)、は富神クヴエーラの子。
【五七】以下太子が生れた王國の吉福と王の威嚴を語る。この中に轉輪王(世界統一の理想王)の七寶卽ち輪寶・象寶・馬寶・珠寶・玉女寶・主藏臣寶・典兵寶の思想がある。
【五八】伏藏(Nidhi)とは地下に埋伏して隱した寶藏を言ふ。

菩薩、世間に出るは　解脫道を通ぜんが爲なり。　世間貪欲の火
境界の薪、熾然たり。　大悲の雲を興發して　[四七]法雨の雨にて滅せしむ。
癡闇は門の重扉にして　貪欲を[四八]關鑰となし　諸の群生を閉塞す。
出要の解脫の門は　金剛の智慧を[四九]鑷とし　恩愛の[五〇]逆鑽を拔く。
愚癡の網、自ら纏ふて　窮苦して所依なし。　法王、世間に出でゝ
能く衆生の縛を解くべし。　王、此子を以て自ら　憂悲の患を生ずる莫れ。
當に彼の衆生が欲に著して　正法に違ふを憂ふべし。　我今老死に壞され
聖功德を遠離す。　諸禪定を得ると雖も　而も其の利を獲ず。
此の菩薩所に於て　竟に正法を聞かず。　身壞し命終るの後
必ず[五一]三難天に生ぜむ。』と。　王及び諸眷屬　彼の仙人の說を聞き、
其の自らの憂歎を知り　恐怖悉く以て除く。　此の奇特の子を生み
我が心、大安を得たり。　出家して世榮を捨て、　仙人の道を修習し、
遂に國位を紹がず、　復た我をして悅ばざらしむ。』　爾時、彼の仙人
王に向つて眞實を說く。　『必ず王の所慮の如く　正覺道を成ずべし。』と。
王眷屬の中に於て　衆心を安慰し已つて　自ら己れの神力を以て
空に騰つて遠く逝けり。　爾の時、白淨王　子の奇特の想を見、
又阿私陀の決定せる　眞實の說を聞き、　子に於て心敬重して
珍護し兼ねて常念せり。　天下に大赦して　牢獄悉く解脫せり。
世人、生子の法　宜しきに隨つて事を取捨し。　諸經方論に依り
一切悉く爲せり。　生子、滿十日　安穩にして心已に泰けし。

【四七】熱い乾燥期の後に、雨期が來て、生物が蘇生するに喩ふ。
【四八】關鑰。閂と錠のこと。門戶のしまりを言ふ。
【四九】鑷。釘拔きを言ふ。
【五〇】逆鑽。鑽は矛先、刄、矢尻のこと。
【五一】三難天は、(Tridiva)の譯。至高の天を言ふ。

汝は言ふ、人中の上なりと。　何故憂悲を生ずる乎。　短壽の子にして
我、憂悲を生ずるに非ずや。　久しく渴して甘露を得　而も反つて復失ふ耶。
財寶を失ひ家を喪ひ　國を亡ぼすに非ずや。　若し勝れし子の存する有り
國嗣、所寄あらば、　我死する時心悅び、　安樂にして他世に生ぜん。
猶、人の兩目にして　一は眠り而も一は覺めたる如し。　秋霜の花、敷くと雖も
而も實無きが如くなる莫れ。　人、親族の中に於て　愛深きは子に過ぐるなし。
宜しき時に爲に記說して　我をして蘇息を得しめよ。』　仙人は父王の心の
大なる憂懼を懷くを知り、　即ち大王に告げて言く　『王、今恐怖する勿れ。
前に已に大王に語りき。　愼んで自ら疑を生ずる勿れと。　今の相、猶ほ前の如く
異想を懷くべからず。　唯自ら我年の暮るゝを惟ふて：　悲慨し泣歎する耳。
今我臨終の時　此子世に生るゝに應じ　生を盡さん故に生る。
斯人、遇ふを得難し。　[四四]當さに聖王位を捨て　五欲の境に著せず
精勤して苦行を修し　開覺を開いて眞實を得て　常に諸群生の爲めに
[四五]癡の冥障を滅除し。　世に於て永く熾燃して　智慧日の光明たらん。
衆生、苦海に沒して　衆病を聚沫となし、　衰老を巨浪となし
死を海の洪濤と爲す。　彼は輕き智慧の舟に乘りて　此の衆流の難を渡らしめん。
智慧にて泝る流れは　淨戒を傍岸となし、　[四六]三昧は清涼地にして
正受の衆の奇鳥あり　此の如く甚だ深廣なる　正法の大河は
渴愛の諸の群生　之を飲んで以て蘇息せん。　五欲の境に染著して
衆苦の驅迫する所となり、　生死の曠野に迷ひて　歸趣する所を知る莫し。

【四一】 安低牒(Antideva)。

【四二】 波尸吒(Vaśiṣṭha)。

【四三】 手足千輻輪相は、手足の裏に車輻の相があること。手足縵網相は、手足の指間に水鳥の水掻きの樣な縵があること。眉間白毫相は、眉間に渦卷をした白い毛があること。馬(象)陰藏相は、馬象の如く陽根が腹中に藏れてゐるのを言ふ。皆佛又は轉輪王の妙相三十二相に屬す。

【四四】 以下の阿私陀仙の太子の未來に對する豫言は、甚だ美しい詩句で、阿含等に現れる比喩及び佛教術語を梵詩宮延詩調の中に取り入れ、驅使してゐる。(梵本一・七四―八〇、平等「佛陀の生涯」一三―四頁。)

【四五】 Moha-tama　即ち愚癡迷妄の暗闇。

【四六】 三昧(Samādhi)。禪定又は定、即ち瞑想。

時に王大に歡喜し　即ち請ふて宮內に入れしめ　恭敬して供養を設く。
將に內宮の中に入り　唯だ王子を見るを樂む。　婇女衆有りと雖も
空閑林に在るが如し。　正法座に安處して　敬尊奉事を加ふ。
[四一]安低牒王が　[四二]波尸吒に奉事せる如く。　時に王は仙人に白さく
『我今大利を得たり。　大仙人を勞屈して　辱なくも來つて我を攝受せられたり。
諸有の爲すべき所あらん。　唯願はくは教勅を垂れんことを願ふ。』と。
是の如く勸請し已れば、　仙人は大に歡喜し、　『善い哉常勝王よ、
汝、衆德悉く皆な備り、　愛樂して來り求むる者に　惠施して、正法を崇む。
仁智にして殊勝なる族にて　謙恭にして善く隨順せり。　宿しく衆の妙因を殖へ、
勝果今に現はる。　汝當さに我れ今來れる　因緣を說くを聽かるべし。
我、日道より來れり。　空中の天の說くを聞く。　言く「王太子を生めり。
當さに正覺道を成すべし」と。　幷びに先の瑞相を見て　今故らに此に來到して
釋迦王正法の幢を　建立するを觀んと欲すと。』　王、仙人の說を聞き、
決定して疑網を離れ、　命じて太子を持し出でしめ、　以て仙人に示す。
仙人、太子を觀ずるに　[四三]足下には千輻輪あり。　手足には網縵の指あり、
眉間には白毫峙え、　馬藏の隱密相あり、　容色に炎たる光明あり。
見て未曾想を生じ　淚を流して長歎息す。　王、仙人の泣くを見て
子を念ふて心戰慄し　氣結んで心胸に盈つ。　驚悖して自ら安んぜず、
覺えず座より起ち、　仙人の足を稽首し、　而して仙人に白して言く、
『此子、生れて奇特　容貌極めて端嚴なり。　天人と殆んど異ならず。

れる。

【三四】 阿低利(Atri)。「食者」梵志、多くの讚歌の作者。七仙の一人。阿低離(Ātreya)、アトリの子。醫書遮羅迦書(Caraka-Saṃhitā)の宣述者と言はる。

【三五】 駒尸迦(Kuśika)。王で、同族の祖。伽提那(Gādhi)はその子孫。

【三六】 甘庶(Ikṣuvāku)。日のマヌ、ヴイヴアスヴアツトの子。日種王族の始祖。百子あり、アヨドヤーの王。

【三七】 娑伽羅(Sagara)、日種族で、アヨードヤーの王。父王の代に追はれた王國を塞族(Śaka)より回復した。

【三八】 閣那迦(Janaka)は、英王で王族であるが、深き知識・良著、神聖にて知らる。婆羅門の教權制度の理由を否定し、僧の仲介なく祭式を行ふ權利を得たと。彼は純正な生活によつて婆羅門主仙となつた。

【三九】 阿私陀。雪山に隱棲した老仙で、瑞相によつて太子の出生を知つて來て、佛陀となるのを豫言したと傳へる。

【四〇】 「梵天應苦行樂正法此二相俱現。」梵本『梵知の美と苦行の美で輝いてゐる彼を、梵知者中の梵知者である王の僧侶は……』

各殊勝子を生めり。　二人の息毘利訶鉢低　及び[三〇]儵迦羅は
能く帝王論を造りしも　先族より來らず。　[三一]薩羅薩仙人は
經論久しく斷絕せるも　而も婆羅婆を生んで　續いて復た經論を明にせり。
現在知見の生ずるは　必ずしも先胄に出らず。　[三二]毘耶娑仙人は
婆戸陀の編さゞる多く諸經論を造り、[三三]チャヴァナの末の後胤跋彌は　廣く偈章句を集めたり。
[三四]阿低利仙人は　醫方論を解せざりしも、　後に生れし阿低離は
能く百病を治せり。　二生　[三五]駒尸仙は　外道論を閑はざりしも、
後の伽提那王は　悉く外道の法を解せり。　[三六]甘庶王始族は
海潮を制する能はざりしも、　[三七]婆伽羅王に至りて　千の王子を生育して
能く大海潮を制して　常限を越えざらしむ。　[三八]闍那迦仙人は
師無くして禪道を得たり。　凡そ名稱を得る者は　皆自力より生ず。
或は先は勝れ後は劣り、　或は先は劣り後は勝れ、　帝王諸神仙
必ずしも本族を承けず。　是の故に諸の世間は　先後を顧るべからず。
大王今是の如し。　應さに歡喜心を生ずべし。　心歡喜を以ての故に
永く疑惑を離れん。』と。　王は仙人の說を聞いて　歡喜して供養を增せり。
『我今勝子を生む。　當に轉輪王の位を紹ぐべし。　我が年已に朽邁す。
出家して梵行を修さん。　聖王子をして世を捨て、　山林に遊ばしむる無れ。
時に近き處の園中に　苦行仙人あり。　名けて　[三九]阿私陀と曰ふ。
善く相法を解し、　王の宮門に來詣す。　王謂へらく『[四〇]梵天に應ずると
苦行して正法を樂しむ」と、　此の二相倶に現れ、　梵行の相具足せり』と。

【三〇】儵迦羅(Sukra)は毘求(Bhrgu)の子で、聖仙で詩人、法典(Sukraniti 儵迦羅行論)の作者。毘利訶鉢底(Bhrhaspati)は人を惡人より守る助力者。僧の最初。諸神の父とも言はれ、大創造力あり、後世梵士となる。アンギラス仙の子。古法典の作者とされる。后の二人は共に父の爲さぬ王論を造つた。

【三一】薩羅薩(Sarasvata)は、サラスヴアテイー(Sarasvati)の子。ヴアシシユタ(Vasistha)が第八時に吠陀を編纂したやうに、第九時に吠陀を編纂したと。婆羅婆は不明。漢譯は梵本と異り、意味通ぜず。

【三二】毘耶娑(Vyasa)。は吠陀の編纂者で、傳說的には摩訶婆羅多詩(Mahabharata)の、編者。パラーシヤラとサトヤヴアテイーの私生兒。ヴアシシユタは多くの讚歌を作つた吠陀仙。「最も富める者」と言はれる。

【三三】チヤヴアナ(Cyavana)。仙士、毘求の子。諸讚歌の作者。老いた時、アシユヴインにより青春を取り戾したと。跋彌(Valmiki)は、敍事詩羅摩耶奈(Ramayana)の作者。同書の中には彼自身も現れる。頌(Sloka シユローカ)と言はれる。詩體の發見者と言は

王に白すに眞實を以てす。
王今滿月の如し。
必ず光宗族に顯れん。
靈祥は家國に集り
必ず世間の救とならん。
是の如き殊勝の相は
必ず[二六]轉輪王と作つて
王として四天下を領して
日光を最勝と爲すが如し。
實智慧を成就して
普く諸山の王と爲し、
諸星宿にては月を最と爲し、
上下の瞬と長き睫あり
此の相云何ぞ非ならむ。
『若し汝の所說の如くならば
先王に應ぜず、
『是の如く說くべからず。
是の如き四事は
各〻因緣に從つて起る。
[二九]毘求と央耆羅との

『人世間に生れては
大歡喜を生ずべし。
心を安じて自ら欣慶し、
今より轉た興盛となり、
惟ふに此の上士の身は、
必ず等正覺を成ぜん。
普く大地の主となり、
一切の王を統御せむ。
若も山林に處りて
普く世間を照さん。
衆寶にては金を最と爲し、
諸明にては日を最と爲す如し。
[二七]瞪矚は紺青色にして、
平等殊勝の目なり。』
此の如き奇特の相
乃ち我が世に現はるゝや。』
多聞と智慧と
先後を顧るべからず。
今當に諸の譬を說くべし。
此の二仙人族は

唯殊勝なる子を求む。
今奇特の子を生み、
餘の疑慮を生ずる莫れ。
生るゝ所の殊勝の子は
金色妙光明なり。
若し世間に習樂せば、
勇猛にして正法にて治め
猶ほ世の光明の內
專心に解脫を求めなば
譬へば須彌山を
衆流にては海を最と爲し、
淨目は脩く且つ廣く
明煥として半月の形なり。
時に王は[二八]二生に告ぐ。
何の因緣を以ての故に
婆羅門、王に白さく
名稱及び事業と
物性の所生は
王今且らく諦聽されよ。
久遠世を經歷して

多く用ひ、精靈に當る。固有名詞にあらず。

【二二】雷を比喩的に言ふ。

【二三】以下四一行は梵本に無し。然れども之ある方筋が通る故、梵本はこの部分失はれたるか。

【二四】怵惕。「怵」は怨む。「惕」は憂ふ、恐る。

【二五】人相を見て運命吉凶を占ふ婆羅門。印度では子生れれば、占相するのが慣であつた。

【二六】轉輪王(Cakrapravartin rāja)。世界統一王にて、輪を武器とし、之を投擲して世界を統一すること。

【二七】瞪矚。共に見詰める意。こゝでは「ひとみ」の謂か。

【二八】二生(Dvija)。婆羅門のこと。婆羅門は二度生れる故かく言ふ。

【二九】毘求(Bhṛgu)は、吠陀仙で、跋伽族(Bhārgava)の創始者である。央耆羅(Aṅgiras)、は梨俱吠陀の多くの讃歌の作者で、七大仙の一人である。天文學につき書あり。毘利訶鉢底(Bhṛhaspati)、はその子の一人。

繽紛として亂れ墜つ。
日月は常度の如くなれど
薪なくして自ら炎熾し
中宮の婇女の衆は
皆安樂の想を起せり。
藍毘尼園に於て
時に非ずして敷榮せり。
世間の諸疾病は
恬默して寂として聲無し。
空中に雲翳なく
悉く安穩の樂を得たり。
菩薩の生るゝ所以は
震動して大に憂惱せり。
王は素性安重なりと雖も、
一は喜びにて、復一は懼れなり。
女人の性怯弱にして
反つて更に憂怖を生ず。
各〻常所事を請ふて
知相の 二五婆羅門あり、
相を見て心歡喜し

天衣は空より下り
光耀は倍す增明せり。
二〇淨水は清涼の井に
怪んで未曾有を歎じ、
無量の 二一部多天は
林樹の間に遍滿し、
凶暴なる衆生ゝ類も
療せずして自然に除き、
萬川皆流を停め、
二二天鼓自然に鳴る。
猶ほ荒難の國の
世の衆苦を濟はん爲なり。
父王生れたる子を見るに、
驚駭して常容を改め、
夫人は其の子の
二四怵惕して氷炭を懷き、
長宿の諸母人
願ふて太子を安からしむ。
威儀ありて、多聞を具し、
踊躍すること未曾有なり。

身に觸れて妙樂を生ず。
世界の諸の火光は
前後して自然に生じ、
競ひ赴きて飲み浴して
法を樂んで悉く雲集し、
奇特なる衆の妙花
一時に慈心を生じ、
亂れ鳴く諸禽鳥獸は
濁水は悉く澄清せり。
一切の諸の世間
忽ちにして賢明なる主を得たる如し。
二三唯彼の魔天王は
奇特にして未曾有なり。
二息は交も胸に起りぬ。
常道に由て生ぜざるを見、
吉凶の相をも別たず
互に(心)亂れて神明に祈り、
時に彼林中に
才辯と高き名稱あり。
王の心驚怖せるを知つて

め子なく、子を産む式を行ひ、その水を飲んだ所、右脇より子が生れたと。

【一三】 生門。嬰兒の普通の生所。

【一四】 佛陀妙相好の一。足の裏の平なこと。

【一五】 Urga Major。星座の七星。

【一六】 降誕宣言。巴利語所傳(大本經等)は「我は世の第一人者なり、我は世の最優者なり、我は世の最老者なり」で、「天上天下唯我獨尊」と言ふに至つたのは後世である。

【一七】 曼陀羅(Mandhāra)は、天の五樹の一で、目出度い木。

【一八】 淨居天(Suddhādhivāsa-visuddhasattva-deva 直譯は淨居淨性の天)。諸天中高位の神とさる。佛教的の神格で、佛傳作家が佛傳を修飾する方法として活動させた。

【一九】 須彌(Meru)。世界の中央にあるとされる傳說的の高山で、日月星辰はこの周圍を巡り、爲に晝夜があるとさる。山王は須彌山を言ふ。大地は須彌山が堅く保持する故動搖せぬと考へらる。

【二〇】 この跡と稱する井戸が現存すると。

【二一】 部多は(Bhūta)の音譯。天の意。Deva (天神) よりも低き神に言ひ、樹神・水神等に

[一三]生門には由らず。德を修むること無量劫にて
自ら生の不死を知り
安諦にして傾動せず
明顯にして妙に端嚴なり。
晃然として胎より現れ
猶ほ日の初めて昇るが如し。
觀察極めて明耀にして
而も眼根を害さず
縱視して而も耀かざること
空中の月を觀るが如く
自身の光は照耀として
日の燈明を奪ふが如く
菩薩の眞金身の
普く照すこと亦是の如し。
正眞心にして亂れず
安庠にして七步を行き、
[一四]足下は安平趾にして
炳徹として猶ほ[一五]七星のごとく
獸王師子の步をなして
四方を觀察し
眞實義に通達して
能く是の如き說に堪ふ。
[一六]『此の生を佛生となす。
則ち後邊の生となす。
我は唯此一生にして
一切を度すべし』と。
時に應じて虛空の中より
淨水の雙流下り
一は溫、一は清涼にして
灌頂して身を樂しましむ。
安らかに寶宮殿に處つて
琉璃床に臥せめ
天王は金華を手にして
床の四足を捧持せり。
諸天は空中に於て
寶蓋を執持して侍し
威神を承けて讃嘆し
成佛道を勸發しぬ。
諸龍王は歡喜し
殊勝の法を渴仰せり。
そは曾て過去佛に奉じ、
今菩薩に値ふを得て、
[一七]曼陀羅花を散らし
專心に供養を樂めり。
如來世に出で興りて
[一八]淨居天は歡喜も
已に愛欲の歡を除きたれど、
法の爲に而も欣悅せり。
衆生苦海に沒せるを
佛が解脫を得しむる故なり。
[一九]須彌寶山王は
此の大地を堅く持すれど
菩薩世に出興する
功德の風の飄ふ所となつて
地は普く皆大震動して
風浪の舟を鼓す如し。
栴檀の細末香
衆寶蓮花藏は
風吹いて空に隨つて流れ

城との間にあつた。法顯は論尼、玄奘は臘伐尼と言ひ、共に池のある事を述べ、玄奘は「水清澄で、鏡の如く、色々の華が咲き亂れる」と言つてゐる。

【八】佛誕生時代は佛滅を大體西暦前四八〇年とする一般說に從へば、佛生涯を八〇年とし、西暦前五六〇年。佛滅を同三八六年とする宇井氏說に從へば、西暦前四六六年となる。生月日を漢譯は四月八日と記述するが、梵藏本は記さない。西域記は吠舍佉月後半八日(卽ち三月八日)或ひは後半十五日(三月十五日)とする。

【九】菩薩(Bodhisattva)。佛道の修行者の意。出家前の太子に菩薩の名を與へるのは.大乘的。

【一〇】優留王(Aurva)。梵士ウルヴァの子、ある王族が怒つて、胎子を殺さうとしたので、婦人は之を股に隱した、彼等が殺さうとすると、股より出て光を放ち、人々を盲目とした。

【一一】畀偷王(Pṛthu)、ヴェーナ(Vena)王の子、婆羅門が王の右腕を擦るとプリツが生れたと。

【一二】曼陀王(Māndhātṛ)、轉輪王として有名。父王は初

佛所行讚

巻の第一

馬鳴菩薩造

生品第一

(一)(二)甘蔗の苗裔なる　釋迦無勝王は　淨財あり、徳と純ら備れり。
故に名けて淨飯と曰ふ。　群生は樂んで瞻仰すること。　猶ほ初生の月の如し。
王は(三)天帝釋の如く　夫人は猶ほ(四)舍脂の如し。　執志の安きこと地の如く
心の淨きこと蓮花の若し。　假に譬へて(五)摩耶と名く。　其れ實に倫比あるなし。
(六)彼の象は天后に於て　神を降して而して胎に處る。　母は悉く憂患を離れ
幻僞の心を生ぜず。　彼の諠俗を厭惡し　空閑の林に樂んで處る。
(七)藍毘尼の勝園は　流泉あり、花果茂り、　寂靜にして禪思に順ふ。
王に啓して彼に遊ばんと請ふ。　王は其の志願を知り、　而も奇特の想を生じ、
内外の眷屬に勅して　俱に彼の園林に詣でしむ。　爾の時摩耶后は
自ら產時の至れるを知り、　安勝の床に偃寢し、　百千の婇女は侍きぬ。
(八)時は四月八日　清和の氣調適す。　齊戒して淨德を修し
(九)菩薩は右脇より生れぬ。　大悲、世間を救ひ、　母をして苦惱せしめず。
(一〇)優留王は股より生れ、　(一一)畀偸王は手より生れ、　(一二)曼陀王は頂より生れ、
伽叉王は腋より生れたり。　菩薩も亦是の如く　誕して右脇より生れたり。
漸々に胎より出ずれば　光明普く照曜し　虛空より墮つる如くして

【一】　梵本は、この淨飯王記述の前に、序詞と迦毘羅城の美しき記述(一－八頌)あり、漢譯は之を缺く。(參照平等譯「佛陀の生涯」一　二頁)
【二】　甘蔗(Ikṣuvāku)釋迦(Śākya)淨飯王(Śuddhodana)シュッドーダナ(清淨なる食物の意)は、名族にて甘蔗王由來する甘蔗族に屬し、釋迦族の出であつた。尙梵本は王は日種(Arkabandhu)に屬すると言ふ。(印度では種族の大別として、日種族と月種族がある。)
【三】　帝釋天(Śakra)は、詳しくは釋提桓因(Śakra-devānāmindra)とも言ひ、因陀羅(Indra)神のことで、高位の神で、電の神格化で、力强く、風神マルツ(Maruts)の助けで阿修羅と戰ひ、その主ヴアラ(Vala)を殺し、雨を降らす。佛教に取入れられて佛教の守護神と考へられるに至つた。
【四】　舍脂(Śaci)は、彼の妃である。
【五】　摩耶(Māyā)。「幻」の意。
【六】　於彼象天后、降神而處胎。菩薩が兜率天(Tuṣita)から象の形で降つて、母の胎内に入つたのを言ふ。
【七】　藍毘尼(Lumbinī)。迦毘羅城の東十五英里で、拘利

る。「意明かにして、字少くして義を攝する能く多し。復た讀者をして心悅び倦くを忘れ使む。又復、聖教を纂持し能く福利を生ず。」[三]かくて我々は「佛所行讚」に於て宗教と藝術との渾然たる融合を見出す。

【一】 Winternitz: Geschichte der Indischen Litteratur, IIBd, S. 205.

【二】 Winternitz: G.I.L. II. Bd. S. 204.

【三】 義淨、南海寄歸內法傳第四、至七、八七a。

七、漢譯「佛所行讚」の國譯に就いて

漢譯は五字一聯より成る偈文より成つてゐる。普通その四聯を以て梵本の四詩句(pada)よりなる一頌を譯してゐる。然に漢譯には甚しく增減がある。この漢譯の國譯に當つては梵語原本西藏語譯(十七品迄)を對照し、譯出に助を得ること甚だ多かつた。漢譯の原語は十四品迄は全部梵本によつた。梵本現存の部分に於ては略、正鵠を得たと思ふ。然しながら非常に難解な偈文の爲に、有體に申せば、譯者の自分にも解し難い所は一、二に止らなかつた。且又讀者諸氏が國譯通讀に當つて、理解し難い個所讀みづらい處が多々あらうと思ふ。然し之も一半は漢譯の簡潔と梵語抄譯の爲であつて、必ずしも譯者の未熟拙文にのみ原因するのでないことも前言したいのである。終りに漢譯「佛所行讚」國譯に當つて常盤教授の御指導教示に益されたこと甚だ多かつたのを記して、深く感謝する次第である。(佛生二四九五・六・一五)

* * * *

昭和四年六月二十日

譯者 平等通昭識

無言で德と功德との武器で寂靜の内に應戰し、遂に善神援護の下に立派な勝利を得、魔軍は退散した。こゝでは武人と武人との血肉の戰と菩薩の惡魔との靈の法戰とに數々の興深い對比を見る事が出來、一篇の象徵詩である。

「佛所行讚」(「佛陀の生涯」)は宮廷敍事詩の條件を滿足させてゐると共に、他の修辭的詩容も殆んど備へ、殊に韻律がよい。その表現は修飾調(Alaṁkāra)に中庸を得、詩語・詩調のみでなく、奇蹟を述べるにも徒らな誇張はなく、材料は整頓され、藝術的に統一を得てゐる。その用語はカーリダーサに比すれば、未だ多少粗朴ではあるが、反つて其處に荒彫りの彫刻に見る生々しい太い線の美しさが見られる。洗練された纖細ではなからうが、雄渾な筆致がある。爛熟の落日の麗しさでなく、暗闇を破る黎明の若い日の輝きである。その韻律は時に雄渾・莊重・輕快・華麗或ひは沈潜・逡巡・悲調・哀愁を含み、よく內容と調和し、妙に流暢に歌ひ出てゐる。梵文學史上の最も卓越した逸作の一であることは否まれない。

【一】吠陀は印度の古代詩聖に歌はれた、自然神に供げられ、又自然現象を歌つた讚歌で、四種(梨俱吠陀 Ṛgveda, 沙磨吠陀 Sāmaveda, 夜柔吠陀 Yajur V. 阿闥婆吠陀 Atharva V.)がある。

【二】パーンヅ(Paṇḍu 月種バーラタ族の王)の五子と持國王(Dhṛitarāṣṭra)の百子との間に行はれた大戰爭譚を中心として書いた長大な敍事詩、その內に美しき挿話・哲學詩等をも含む。

【三】詩人跋彌(Vālmiki)の作つた敍事詩、ラグの子ラーマ(Rāma)が國を追はれ、流刑中惡魔等を打ち、妻シーター(Sītā)を奪ひ去つた惡魔ラーヴアナを攻めて妻を奪ひ取り、王位に卽く說話を中心とする。

【四】ダンディンの詩鑑は比較的古くて(五世紀)、宮廷詩の條件を記し、本詩の修辭を印度修辭法から批評する標準としてよい。その出版及び譯は
Böhtlingk: Daṇḍin's Poetik, 1890, Leipzig. Belvalkar: Kāvyadarśa of Daṇḍin, Poona, 1924.

六、宗敎藝術としての「佛所行讚」

分けて「佛所行讚」の秀でた所は、「古い熟知された傳說に纏ふのに新しい詩の衣を以てし、佛敎の經典中の世に知れ渡つた敎義を表現するのに自己の獨創の麗辭を以てした」[一]ことである。實に馬鳴は自分の宗敎の眞髓—佛敎思想と藝術の本質とを渾然と融け合しめて、それを聲高らかに朗らかに歌ひ出で、以て佛陀を讚嘆したのである。我々は馬鳴の心內に宗敎と藝術との一致の境地を見、「佛所行讚」に於て宗敎と藝術との渾然たる融合を見る。我々は實にこの「佛所行讚」に於て初めて、ウインテルニッツ敎授の言ふ如く「佛陀の人格を衷心より憧憬し、恭敬し、佛陀の敎義の眞髓に徹し、その生涯と敎義とを極めて氣高い藝術味に富んだ、而も何等虛飾に陷入らない言葉で朗らかに歌ひ出でた眞の佛陀の敍事詩を見ることが出來る。」[二]誠に「佛所行讚」(佛陀の生涯)に就いて義淨の言ふことは正鵠を得てゐ

四)は廿八である。この描寫の內には詩鑑(一・四〇—九四)に尊ばれるヴァイダルバヴァ(Vaidarbha)作法の十德緊縮・明晰・平靜・甘味・柔易・意味の明瞭・含蓄・華美・典雅・移動を悉く適當に備へてゐる。詩鑑の教示(一・一四)のやうに、本讚には第一章冠頭に一切智者に歸命し、第一頌に阿羅漢を頂禮してゐる。大宮廷詩は歷史物語(Itihāsa)又は事實物語(Kathā)に基かねばならないが、本讚の人物は過去の歷史上の實在人物で、僧團の長い傳承に屬する教祖である。人生の四目的の成就も記し、主人公は賢明で高貴である。又宮廷詩としては城市・海洋・山岳・季節や日月の出の記述、又は園林・水中の遊戯、酒宴・戀愛で飾られねばならない(一・一六)。その內の自然描寫は本詩には一・二—八に纒つて出で、雪頂山(カイラーサ)に比すべき莊麗な城市・蓮華より麗しい宮殿を描いてゐる。又作者は麗筆を揮つて、第二章に耶輸陀羅姫の淑やかに麗しい容色を描き、太子との蜜のやうに甘い戀愛生活を寫し(二・二六—七)、宏麗莊嚴な宮廷に伎女が太子を圍繞して天樂を奏する樣を書き(二・二八—三二)、四・二四—五四頁には城外の樂園での美しい婇女の嬌態・喋々たる蜜語とその誘惑を描いて、韻律の妙と辭句の美とを伴ふて歌舞劇のやうに美しい。又第五章(四七—六二)では太子に踰城の決意を催さし、反つて戀情を失はしめた嬪室の夜の光景を細かに叙し、凄艷な美を描いて、夫々宮廷詩の要求に應じてゐる。別離の場の愛情と結婚の記述(一・二七)としては、太子の貞淑に麗しい耶輸陀羅(ヤシヨーダラー)との結婚と結婚生活を書き、(二・二六—七)、太子出家後の婇女の身もあらぬ悲嘆と、姫や母后の悲痛・嫉妬・怨言を細かに述してゐる(八・二〇—三〇)。又宮廷詩の條件に從つて、太子の誕生と成長を華やかに述べ、四・一〇三には太子の出家を止める爲、八・八〇—八七には出家した太子を連れ歸る爲「協議」をなし、第九章では使節が派遣されてゐる。欽定詩人は道義經倫の學(Nīti-śāstra)に通曉し、之を語らなければならないが、その爲に馬鳴は第四章離欲(六二—八二)で愛慾から離れようとする太子の考慮觀察を他に轉じさせる爲にこの教訓忠言をなし、第九章推求太子(一三—一三と四二—六二)に王師大臣が太子の出家を留め、還國を勸める折に之を語り、第十章缾沙王詣太子(二二—四〇)には缾沙王に太子の還國即位を勸めさせて、この思想を語つてゐる。最後に戰爭の描寫と主人公の勝利は宮廷詩として缺くことの出來ないものであるが、この詩も第十三章降魔全章を擧げて完全にこの條件を滿し、佛陀と魔王並びにその魔下との激しい聖戰を生々と描いて、目前に髣髴させてゐる。魔王魔軍は取り取りの姿容で菩薩に襲ひかゝり、佛は無作

其他の諸傑作の作者として著名なカーリダーサ(Kālidāsa)である。我々は之等の諸作諸詩人の間に事實密接な關係を指摘し得られる。

叙事詩羅摩耶奈にある猿王ハヌマット(Hanumat)が忍び込んで見たラーヴアナ(Rāvaṇa)の嬪室の婇女の寢姿の記述(ボンベイ版五・一〇・三四—四九)は「佛所行讃」(五—四八—六二)の太子が出家當夜見た内宮の婇女の寢姿の描寫と酷似し殊に「佛所行讃」五・五〇・五五の二頌は羅摩耶奈詩から引用したかの觀がある。羅摩神話も「佛所行讃」六・三六、八・八、九・九、九・五九に明かに生々と出てゐる。摩訶婆羅多詩殊に解脱法品と「佛所行讃」との間には神話・數論々師名・辭句・思想等に甚だ一致するものがあり、「佛所行讃」は少くとも大部分は既に成立してゐた摩訶婆羅多詩殊に解脱法品に影響されたと思はれる。カーリダーサと馬鳴との關係に就いては彼の叙事詩「ラグ族物語」(Raghu-vaṃśa 七・五—一二)のアヂヤ(Aja)皇子の歸りを見ようと窓に群る町の婦人達の記述と「佛所行讃」(三・一三—二四)の太子外遊を見ようと競ふ婦人達の描寫がぴつたりと一致し、その中でカーリダーサは馬鳴の三・一九を直ちに用ひ、技巧的に敷衍してゐる。帝釋天の祭禮の法幡の記述がカーリダーサの「ラグ族物語」四・三と「佛所行讃」一・六三と八・七三とにあり、一致してゐる。「佛所行讃」第十三品降魔で佛陀が摩羅(マーラ)(愛神カーマ Kāma の異名)と彼の三女の誘惑を受ける記事(一三・一一、一二)とカーリダーサの叙事詩「軍神降誕」(Kumārasambhava)の愛神(カーマ)が濕婆(Śiva)に矢を放つ記述とが酷似してゐる。「佛所行讃」一三・七、八頌は「軍神降誕」三・六四と極めて類似してゐる。又吠陀・婆羅門書・富羅那(プラーナ)等の神話・故事も本讃に多く引用される。

まことに「佛所行讃」の作者馬鳴は叙事詩の作者として羅摩耶奈(ラーマーヤナ)の作者跋彌(ヴァールミーキ)を承繼し、摩訶婆羅多詩に影響され、之を「ラグ族物語」「軍神降誕」の作者カーリダーサに傳へた。跋彌(ヴァールミーキ)並びにその直弟は馬鳴の先驅者であり、馬鳴は又カーリダーサの先驅者であつた。卽ち「佛所行讃」は欽定詩(カーヴィヤ)(宮廷詩)として羅摩耶奈を受け繼ぎ、「ラグーヴアンシヤ」等に發展したことゝなる。こゝに馬鳴及び「佛所行讃」(佛陀の生涯)は印度文化の主流に棹さすものとして、梵(印度)文學史上極めて重要な地位を占めるものである。

「佛所行讃」(佛陀の生涯)は作者自ら大(マ)宮廷(ハーカーヴィヤ)詩と號してゐるが、又事實宮廷詩(カーヴィヤ)の體型をなし、印度修辭法の敎說に一致し、普通の詩容・直喩(Upamā)・陰喩(Rūpaka)・詩的着想(Utprekṣā)等は各所に現れてゐる。大宮廷詩としての章(品)の結構(Sargabandha ダンディン著詩鑑一・一

説は神我を說かないが、我(ātman)と知田(kṣetrajña)が之に相當し、衆生とは自性(Prakṛti)・變異(vikāra)諸根・諸境・手足・口・肛門・生殖器・意)・生・老・死からなるとし、自性とは五大(Pañcabhūtāni)・我慢(ahaṃkāra)・覺(buddhi)・不顯現(avyakta)とする。顯現は生・老・死するもの、不顯現は之に反するものである。そして流轉する因を無智・業・渇愛とする。知田は黠慧と暗愚・顯現と不顯現を分別し、老苦を捨てゝ不滅の處に達するとする。五唯(Pañcatanmātra)を說かない。この數論瑜伽思想は醫書の遮羅迦本典(Caraka-saṃhitā)のそれと酷似して、關係があるらしい。又本書は摩訶婆羅多詩中の解脱法品(Mokṣadharma)と密接な關係があり、馬鳴は之を知つて影響されたらしく、この結果各方面に重大關係を及ぼすことゝならう。[二]

他の佛傳中、「佛本行經」は「佛所行讚」と酷似し、その異譯かとさへ言はれてゐるが、勿論逐字的に一致せず、品の分け方も異る。「過去現在因果經」は記述事項が同じく本讚に類似するので、之を散文の形にして略して書いたものかと思はれる。「普曜經」は全く大乘の佛傳で、記述も大乘的で、修飾は華美誇大である。「佛本行集經」は尨大な大乘的な佛傳であるが、「佛所行讚」の頌句をそのまゝ引用する所が多くある。

【一】「宗教研究」新五卷六號、五三－七五頁、「佛傳の文獻に現れた數論瑜伽思想に就いて」。

【二】「宗教研究」新四卷六號、六九－九〇頁、T. Byodo : Aśvaghosha's Acquaintance wih the Mokṣadharma of the Mahābhārata, Proceedings of the Imperial Academy, IV, (1928), No. 96.

五、「佛所行讚」の表現

印度文學の源泉に於ては、吠陀(Veda)文學は自然と自然現象の人格化である諸神を讃嘆し、素朴直徑で流麗であつた。次に梵書(Brahmaṇa)・奥義書(Upanishad)文學では簡潔の內に深淵な哲學・宗教思想を藏し、富羅那(Purāṇa)・今昔物語(Itihāsa)等は古傳承として豐富な史話・譚話を內に持つてゐる。之等の前代文學に培はれた詩藻豐かに叡智深い印度人の心情は遂に二大叙事詩摩訶婆羅多と跋彌作羅摩耶那詩[三]を創り出した。前者は婆羅多一族の大戰爭譚で、それに譚歌・挿話・思藻が美しく織込まれ、後者には王族の盛榮を背景として羅摩太子と私陀姬との美德善行が聲高く歌はれてゐる。そしてこの物語詩(Ākhyāna)・聖聞(Śruti)としての大婆羅多詩の後を受け、宮廷叙事詩としての羅摩耶那の作者跋彌(Vālmīki)の後繼者として生れ出たのが馬鳴の大宮廷叙事詩「佛所行讚」(佛陀の生涯)である。そして馬鳴の後に來つて、梵文學の精美を完成したのは、叙事詩「ラグ族物語」(Raghuvaṃśa)・戲曲「シャクンタラー姬」(Śakuntalā)・抒情詩「雲の使」(Meghadūta)

諸人教化・迦毘羅城還國・王族の歸依出家・入滅・佛舍利分配を含み、佛全傳である。その記述は普曜經・佛本行集經・大事(マハーヴアスツ)等の如く誇張的でなく、誇張修飾が少く、歴史的事實に近いと思はれる。又阿含中の佛傳記述の如く斷片的で簡單でなく、佛生涯の事件を詳細に系統的に記述してゐる。徒らに捉はれることなく、古代の聖典によく通曉して而もそれを自由に取捨し、尙も多くの古傳を含んでゐる。從つて他の佛傳文獻と對照比較研究して、事實としての佛陀傳記を推定するのに役立つことが多い。佛陀生涯の記述の內に巧みに佛教々義が織り込まれ、釋尊の言行が生々と麗しく詩的に表現されてゐるので、釋尊の惱み歩んだ道、自覺者として他の爲め生きた道が如實にまざまざと示され、他の佛傳と比べられない程、切々と讀者の胸を打つものがある。

このやうに佛傳として貴重な文獻であるのに止らないで、その思想は原始的佛教をさして多く出でないにしても、佛教の眞髓要諦を悉く簡潔にその內に藏め、それを麗しい言葉によつて飾つて、珠玉のやうな光を發つてゐる。佛陀は人生の無常を感じて、再生流轉のない境地を求め、快樂を捨て、婆羅門教の道義經倫の學を斥け(第四・九・十一章)、苦行說・數論の解脫論を排して(第七・第十二章)、中道によつて成覺した。第十五章初轉法輪には苦行・快樂何れにも偏しない中道・世界の狀態である苦(duḥkha)とその因である集、苦の解脫で究極の目的である滅(涅槃 nirvāṇa)とそれに至る道(Mārga)との四聖諦、涅槃に到達すべき八の道の正見・正思惟・正語・正業・正精進・正命・正念・正定の八正道、無明(Avidyā)・行(Saṃskāra)・識(Vijñāna)・名色(Nāmarūpa)・六處(Ṣaḍāyatana)・觸(Sparśa)・受(Vedanā)・愛(Tṛṣṇā)・取(Upādāna)・有(Bhava)・生(Jāti)・老死(Jarā-mṛtyu)「世間現象の因果的說明で、無明を斷ずることにより順次生・老・死もなく、輪廻も無くなる」の詳しい說明がある。又有我說の非難・無我の說明・煩惱・惡業の排斥と善業諸德の獎勵、智慧・忍辱・精進・三昧・布施・持戒等の波羅蜜を中心とする倫理修道觀・色・法二身殊に法身の常住を中心とする佛身觀等が記述され、殆んど佛教思想を網羅してゐる。「佛所行讃」はさながら佛教の要說の觀があり、之に實證的に行爲が記されてゐるので、讀者をしてよく佛教を理解せしめる。

而も本書には原始的數論瑜伽思想(第十二品)・道義經倫の學(第四・九・十一章)等の外道哲學思想・神話傳說等を記述するので、本讃の內容を多樣豐富にさせ、他の諸書と關係を附けさせ、その研究に役立つことが多く、印度哲學史上不明な箇所に材料を補ひ、貢獻する所が多い。殊に最近の私の考證によれば、本書の數論

歴史的人物にせよ、何等かの意味で宗祖を有つてゐる。そして宗祖は宗教の中心として、教義の淵源として、人格的感化の原動力として、或ひは信仰の對象として、重要な地位を占めてゐる。佛教基督教のやうにその教祖が史的實在の人物である場合には、殊にさうである。それ故各宗教は宗祖の人格を重く論ずるが、その人格の信仰に於ては一方直接的經驗によつて宗祖に接しようとすると共に、他方に宗祖の歴史的人格なのを要求する。こゝに双方の一致の努力は宗祖の傳記となつて現はれる。そして宗祖の傳記に於てはその目的として傳記を記錄し、人々に傳へて人格的感化を及ぼさうとする故、必然的に事實を理想化するやうになる。

佛教に於ては、その教祖釋尊は佛教の理想である菩提の體得者として、僧團の指導者として最も重要であつて、その教義も教祖である釋尊の人格と自覺とを基礎としてゐる。從つて佛陀の傳記は佛弟子達によつて修道上其他に極めて重要であるべき筈であつた。然し滅後間もない頃には纒つた佛傳のやうなものはなく、僅かに大品（Mahāvagga）・漢譯の四分律・五分律・有部律等の律藏中の斷片的記述・長阿含の大本經（Mahāpadāna-suttanta）・大般涅槃經（Mahāparinibbāna-suttanta 漢譯遊行經）・經集(Suttanipāta)中の出家經・精勤經・那羅迦經等を有するに過ぎない。之は滅後間もない時代は佛陀に對する記憶が新で、法に注意せよとの佛の遺誡に從つて、法の記錄に急で、佛傳の如きを顧る暇がなかつた爲の現象であらう。然し、佛陀を去るに遠く、佛陀に親しく接した弟子も歿し、教祖を慕ふ風が盛になると共に、ある程度の纒つた佛傳を欲するやうになり、遂には聖典に傳はる口碑自己の理解する佛陀觀を加味し、こゝに佛陀傳が成立した。即ち現存する本生譚（Jātaka）・行藏（Cariyā-Piṭaka）・因緣譚（Nidānakathā）・修行本起經・太子瑞應經・過去現在因果經・大事譬喩譚（Mahāvastu-avadāna）・佛本行集經・佛所行讚（「佛陀の生涯」）・佛本行經・普曜經（Lalitavistara）等の佛傳文學が之である。（佛所行讚・佛本行經の佛全傳たる外悉く佛部分傳で、多く迦葉・目連・舍利弗教化位迄に止る。）

此等の中で「佛陀の生涯」は數少い佛全傳中の逸作であり、在來の材料に基きつゝ事實を重じ、適度の理想化を加へて、美しい韻文で佛陀の生涯とその教義を朗らかに歌ひ出で、その人格を讚へて、人格的感化を人々の胸に引き起さうとしてゐる。內容は釋迦王族の系譜・父王母后・佛陀の誕生・宮廷生活・出門遊觀・踰城出家・入苦行林・苦行仙・阿羅藍仙訪問・降魔成道・初轉法輪・迦葉・舍利弗・目連・大迦葉等の諸弟子教化・缾沙王・波斯匿王等の

即ち四五四年まで飜譯に從つた。[二]四十二年も飜譯に從つた彼の譯著は十分信頼して可なりである。

漢譯「佛所行讚」は五卷廿八品、生品より分舍利品に至り、佛全傳に渡つてゐる。譯文は美しき韻文より成り、その調崇嚴、その詞婉麗、自由に漢語と漢詩の韻律とを驅使し、飜譯と言ふ以外に、一個の獨立せる立派な文學を成してゐる。唯それ丈に原典に忠實でない缺陷もある。漢譯では現存梵本に比較すると、大體に於て逐字的に譯してゐるが、時に原文を消略し削除し、又は概要を摘み、或ひは敷衍增補してゐる點が相當多くある。恐らく譯者が原典を誤解し、又ある時は支那讀者に解し難く、興味なき個所は故意に除外し、省略し、敷衍增補し、以て譯文として獨立の立派な經文になさうとした爲めであらう。思想に於ても梵本に無き後代思想を附加した所もないではない。その行文は簡潔で、その難解なことは既に定評がある。

西藏語譯はサーワンザンボとロチエーヂヤルポの二人の共譯と卷末に記し、その飜譯年代は不明であるが、七・八世紀の譯であらう。西藏語譯は梵本に殆んど逐字的に一致し、梵本の落脫遺漏をこの譯によつて訂正し得る便さへあり、漢譯より寧ろ貴重な譯書である。

梵本はシルヴアン・レヴイ(Sylvain Lévi)教授によつて一八九二年第一章の出版と佛譯が初めて Le Buddhacarita d'Aśvaghoṣa として公にされ、(Journal Asiatique, no2 1892, Paris)、その梵文の端麗に學界を驚かし、次いでカウエル(E. B. Cowell)教授によつて一八九三年良校訂本 The Buddhacarita of Aśvaghoṣa (oxford) が、一八九四年その英譯 The Buddhacarita of Aśvaghoṣa (SBE. vol XLIX. oxford)が出版され、最近リヒアルト・シユミツト(Richard Schmidt)によつてその獨逸譯 ,,Buddhas Leben'' (Hannover)が公にされた。兩譯共に立派な良譯ではあるが、前者には僅少の意譯增補があり、後者はより逐字的で、最近の學者の誤謬訂正を採用してゐる。漢譯はビール(S. Beal)によつて Fo-sho-hing-tsan-king (S.B.E. XIX. oxford)として一八八三年英譯された。西藏語譯は寺本婉雅氏によつて大正十三年邦譯された。(西藏傳譯「佛所行讚」、東京)。同じくウエラー(weller)によつて ,,Das Leben des Buddha'' (Leipzig)として校訂西藏語原典並びに飜譯が八品までは一九二六年に、以下十七品までは一九二八年に公にされた。

【一】南海寄歸內法傳、致七、八七a。
【二】出三藏記集一四、高僧傳二による。

四、「佛所行讚」の思想

如何な宗教でも、神話的人物にせよ、

入滅までを含む譯で、一方漢譯・西藏譯は共に廿八章で、生品から初つて分舍利品に終り、佛生涯を記述してゐる。それ故十七章から成る現存梵本は前半に止り、然もその內、馬鳴眞作のものは最初の十三章だけで、後の四章は思想が後代のもので、表現も拙劣であるから、寫字生アムリターナンダ (Amṛtān nda) が自白してゐるやうに、後世の附加竄入であらう。

今次に「佛所行讃」の梵本・漢譯・西藏譯の各章名を對照して見よう。

(品數)	(梵　本)	(漢譯)	(西藏譯)
1.	Bhagavatprasūti(世尊の降誕)	生	童子誕生
2.	Antaḥpuravihāra(宮廷生活)	處宮	住王妃侍中
3.	Saṁvegotpatti(悲嘆の發生)	厭患	憂心生
4.	Strīvighātana(婦人の障碍)	離欲	婦人障碍
5.	Abhiniṣkramaṇa(出家)	出城	外出
6.	Chandakanivartana(車匿の歸還)	車匿還	犍陀迦還退
7.	Tapovanaprawveśa(入苦行林)	入苦行林	入苦行林
8.	Antaḥpuravilāpa(內宮の悲歎)	合宮憂悲	王族眷屬悲歎
9.	Kumārānveṣaṇa(太子推求)	推求太子	隨求青年
10.	Śreṇyābhigamaṇa(瓶沙王の來詣)	瓶沙王詣太子	瓶沙王詣太子
11.	Kāmavigarhaṇa(愛慾の非難)	答瓶沙王	答請瓶沙王
12.	Arāḍadarśana(阿羅藍訪問)	阿羅藍鬱頭藍	訪阿羅鬱藍頭藍
13.	Māravijaya(破魔)	破魔	降魔
14.	Abhisaṁbodhanasaṁstavana(等正覺讃嘆)	阿惟三菩提	現成菩提
15.	Dharmacakrapravartanādhyeṣaṇa	轉法輪	轉法輪
16.	Dhamacakrapravartana	瓶沙王諸弟子	瓶沙王諸弟子
17.	Lumbinīyātrika	大弟子出家	大聲聞出家
18.		化給孤獨	化給孤獨長者
19.		父子相見	父子相會
20.		受祇桓精舍	受祇桓精舍
21.		守財醉象調伏	業用讀
22.		菴摩羅見佛	觀菴摩羅女林
23.		神力住壽	身壽想攝受
24.		離車辭別	哀愍離車毘族
25.		涅槃	入涅槃
26.		大般涅槃	大般涅槃
27.		歎涅槃	讚涅槃
28.		分舍利	分舍利

現存梵本十四章後半から十七章迄は漢藏譯に一致せず、兩譯は互に大體一致し、寧ろ漢藏譯が原作に近い。

漢譯「佛所行讃」は北涼の曇無讖(Dharmaraksha 法豐)によつて紀元四一二年から四二一年間に譯された。曇無讖は傳說によれば中印度の人で、六歲にて出家し、日々經典の一萬語を暗誦したと言ふ。初め小乘部派に屬し、五明(vidyā)に通じてゐた。後に大乘佛敎徒となつた。紀元四一二年に支那に來て、河西の沮渠蒙遜に迎へられ、文藻に富み、梵語をよくし、「大涅槃經」・「菩薩戒經」・「菩薩戒本」を譯した。北魏武帝に求められ、誤解され蒙遜に宋元嘉十年四十九歲で殺されるまで

彼は藝術的才能に勝れ、又卓越した音樂家でもあつて、付法藏因緣傳第五[八]によれば、「彼は妙伎樂嚩吒啝羅を作り、其音淸雅調暢にして苦・空・無我の法を宣說し、伎人は解すること能はず、曲音節悉く乖錯する時、馬鳴は白氈を著け、衆伎人中に入り、自ら鐘鼓を擊ち、琴瑟を調和した。音節哀婉・曲調成就し、諸法の苦・空・無我を演宣し、城中の五百王子開悟し、王業廢壞するを恐れ、その樂を禁制したといふ。之によつても彼の天分が如何に優れ、彼が如何に迎へられたかゞ知られる。

最近の研究の結果、彼が從來大乘家として佛教思想史上に占めてゐた顯要な地位を放棄しなければならなくなつたが、彼が梵文學史上、佛教史上として輝しい地位を獲得することを闡明し得たことは滿足することが出來よう。

【一】 Cowell: The Buddhacarita of Aśvaghoṣa(Text), p.85, 94, 107, 116.

【二】 南海寄歸內法傳第四、致七、八七a。
【三】 大莊嚴論經三、大正藏經四、二四二頁A、六卷、同二八七A。
【四】 付法藏因緣傳第五には栴檀罽昵吒王が東征の折馬鳴を連れ歸つたとする。(藏九、一〇五b)。馬鳴菩薩傳には北天竺小月氏王が中國侵入の折馬鳴を連れ歸つたといふ。(同、一一二a)。
【五】 婆藪槃豆法師傳では婆枳多とあり、然らば Bhāsita である。藏九、一一六b。
【六】 Johnston: The Saundara-Nanda of Aśvaghoṣa. p. 142,
【七】 四皮陀(Veda)とは梨俱吠陀(Ṛgveda)夜柔吠陀(Yajurveda)・娑磨吠陀(Sāmaveda)・阿闥婆吠陀(Atharvaveda)。六論は數論(Sāṅkhya)・瑜伽(Yoga)・論理(Nyāya)・勝論(Vaiśeṣika)・吠檀多(Vedānta)・彌論(Mīmāṃsā)の印度六派哲學・六分毘伽羅論とは波儞尼大仙(Pāṇini)の八部の文典、十八部とは佛教小乘の十八部派を言ふ。
【八】 付法藏因緣傳第五(藏九、一〇五b)・馬鳴菩薩傳(藏九、一一二a)、前書には彼は王の三重臣の一人で、大臣摩吒羅(Māṭra)醫者遮羅迦(Caraka)と共に王の信任を得て、之を補佐してゐたと。
【九】 付法藏因緣傳第五、(藏九、一〇四以下)
【一〇】 白象入胎說(梵本、一・一九、「佛陀の生涯」四頁)。
【一一】 玄奘は馬鳴(Aśvaghoṣa)・提婆(Deva)龍樹(Nāgārjuna)・鳩摩羅馱(Kumāralabdha)を「世界を照らす四陽」とも言つてゐる。
【一二】 Harapraśādaśāstri: Saundara-nandaṃ Kāvyaṃ, Calcutta. E.H. Johnston: The Saundara-nanda of Aśvaghoṣa, Oxford, 1928. p.141.
【一三】 孫陀羅難陀詩に就いて詳しくは平等「佛陀の生涯」解說九頁以下參照。
【一四】 Lüders: Brüchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta, Leipzig, 1926.
【一五】 大莊嚴論經に就き詳しくは「佛陀の生涯」解說一〇頁以下參照。
【一六】 A. Weber: Vajrasūci des Aśvaghoṣa, Berlin, 1860. 其他一、二出版あり。
【一七】 Lüders: Śāriputraprakaraṇa (SBA. 1911. S. 388f). Lüders: Brüchstücke Buddhistischer Dramen, Berlin, 1911.
【一八】 付法藏因緣傳第五、藏九、一〇五a)。

三、「佛所行讃」の結構

現存梵文「佛所行讃(ブッダチャクタ)」は十七章から成り、佛陀誕生に初つて還國に終つてゐる。然し義淨の言葉によると、本詩は『若し譯せば十餘卷有り、意如來の始め王宮より雙樹に終る一代佛法を述ぶ』とあり。

は各時代に一人か二人しかなく、之を古代に求めれば龍樹(Nāgārjuna)・提婆(Deva)及び馬鳴である、と言つてゐる。同じく義淨は印度滯在中に佛教會堂其他で馬鳴に歸せられる神聖な編纂が讀まれたと言つてゐる。[一一]

馬鳴の著作として確實なものは、「佛所行讚」(「佛陀の生涯」)と孫陀羅難陀詩(Saundarananda-kāvya)である。[一二] 孫陀羅難陀詩は「佛所行讚」と同じく宮廷詩で十八章から成り、各頌句は美しい韻律を以て書かれてゐる。之も佛傳に關係し、「佛所行讚」では簡單であつたり全く無かつた場面や挿話を特に描いてゐる。詩の主題は佛陀の異母弟で自分の意志に反して佛陀の爲に比丘とされた難陀の求道物語である。[一三] 大莊嚴論經(Sūtrālaṁkāra-śāstra? 原典失、鳩摩羅什四〇五年譯)は從來馬鳴の著作と信じられて來たが、リユ、ダース教授は之は鳩摩羅駄(Kumāralāta lubdha の誤か？)著の Kalpanāmaṇḍitikā の譯であるとしてゐる。[一四] 然し思想・表現・記述事項が馬鳴の他の眞著作と一致類似してゐるので、略、彼の著作であることは確かであらう。大莊嚴論經は本生話や譬喩譚に傚つて敬虔な傳說を集錄したもので、小乘の見地に立つた凡そ八十章の物語を含み、散文韻文共に藝術的詩調に成つてゐる。冒頭に訓誡を揭げ、古今の事實を執へて來、物語體で敍述して訓誡を說明し、讀者に邪を棄て正に歸せしめやうとしてゐる。「佛所行讚」をも引用してゐる。[一五] 金剛針論(Vajrasūci)[一六]は印度では馬鳴作としてゐるが、支那では法稱造とされてゐる。然し婆羅門の特權墮落を非難する記述事項が「佛陀の生涯」の記述と一致するので、或ひは馬鳴の作かも知れない。然し其他の馬鳴作と傳へられる書は、彼の著であるのは殆んど疑はしい。殊に從來馬鳴著と傳へられた大乘起信論は更に何等かの文獻の發見されない限り、現在に於ては思想文體上馬鳴著作と考へ難い。

最近中央亞細亞から馬鳴作と思はれる戲曲斷片「舍利弗劇」(Śāriputraprakaraṇa)[一七]其他二作が發見された。前者は舍利弗目連の歸佛を主題とし、他は諷喩劇と教化劇で、梵語・混淆梵語で書かれ、印度戲曲及び言語發達史上極めて重要な資料で、馬鳴をして初期印度戲曲家としての地位を占めさせた。

馬鳴は從來大乘佛教徒として喧傳崇拜されて來たが、今後は寧ろより多く佛教詩人・文藝家として注目讚仰さるべきである。彼は最近敍事詩人・抒情詩人として印度文學史上に最も優れた詩人の一人として顯著な重要な地位を占めるに至つた。彼は佛教的思想を純藝術的表現によつて歌ひ出で、實に羅摩耶奈詩の作者蟻垤(Vālmīki)の後繼者であり、かの有名なカーリダーサ(Kālidāsa)の先驅者である。

罽尼吒王又は眞檀迦膩吒（Kaniṣka）の名が、馬鳴の著とされる大莊嚴論經三卷、六卷にも出で[三]、他書には馬鳴と交渉があつたと傳へられてゐるが、[四]この王は紀元後一・二世紀在位が略々定説になつてゐる迦膩色迦王（Kaniṣka）と同一人らしい。又一方佛教の法燈傳承の歴史の方からも、馬鳴の師と傳へられてゐる脇尊者は一世紀の人である。其故、馬鳴は一・二世紀在位の人と考へるのが最も妥當と思はれる。そして紀元前にも紀元二世紀以後にも置くことは出來ないと思はれる。

彼の生地は一般に舍衞國娑枳多（Sāketa-Ayodhyā 今日の Oudh）[五]とされ、或ひは婆羅捺斯（バーラーナーシイー）（Vārāṇasī 佛祖通載）又は巴蓮弗城（Pāṭaliputra）とも言はれてゐる。彼の著「孫陀羅難陀詩」と[六]西藏譯「佛所行讚」の題號（コロフォン）にはサーケータ生れ（Sāketa）と自稱してゐる。何れにしても彼の中印度の生れなのは確かであらう。母はスヴアルナークシイー（金色眼 Suvarṇākṣī）と言つた。婆羅門族の出身で、深い婆羅門教育を受け、婆藪槃豆（世親）法師傳の傳說によれば、八分毘枷羅論・四皮陀・六論に通じ、（十八部を解し）[七]たと言はれてゐる。智慧深く識見高く、辯舌論議に巧で、如何なる問題も彼の論破し得ざるものなく、論敵を壓倒すること恰も猛風が朽木を吹き拔く如くで、彼に並ぶものなく、有我思想を稱へて佛教に反對し、佛僧を論破して中印度では彼に勝つ者がなく、憍慢心を抱くに至つた。その時北方から「馬鳴菩薩傳」によれば脇尊者（Pārśva）、「付法藏因緣傳」によれば富那奢（Puṇyayaśas）尊者が來て、彼と論義して論破し、馬鳴は彼の弟子となり、教化されて佛教に歸依し、修道に勵み、教義の宣揚に努めた。傳說によれば、その後東征の罽昵吒王に連れ歸られ、北印度に赴いて、王を補佐教化したと言はれるが、[八]その眞僞は未だ斷定し難い。馬鳴は佛教傳燈史では第十一世とされ、菩薩尊者（Ārya）・阿闍梨（Ācārya）の稱號を與へられ、脇比丘又は富那奢比丘から法燈を受け、達摩密多比丘に傳へたと言はれて[九]ゐる。

馬鳴の佛教思想は大體小乘の一切有部に屬して原始佛教を多く出でゝゐないが、大衆部等の進步思想を多少取り入れ[一〇]、又文體氣分能度等から、自由思想の佛教詩人として分別部又は分別部的行き方を取つた進んだ人のやうに思はれる。大乘思想家ではないが、佛陀の崇拜讃嘆に力を入れる內、心內に大乘の萠芽を藏するに至つたが、それは十分に芽生えなかつたらしい。西暦六七一年から六九五年迄印度に滯在して居た支那の求法僧義淨は、異教徒と好んで論議をなし、佛教の教義を宣揚して、此世で人天以上の尊敬を拂はれた學僧について『かゝる大人物

佛所行讃解題

一、序言

「佛所行讃」(梵本 Mahākāvya Buddhacarita) 和譯「佛陀の生涯」は紀元一世紀頃の佛教詩人馬鳴 (Aśvaghoṣa) の創作した佛陀生涯の宮廷叙事詩である。從來の佛教著作は稍ゝもすれば乾燥無味で記述が冗長拙劣であつたのであるが、この「佛所行讃」(「佛陀の生涯」) に至つて創めて佛傳文學史上印度純文學の諸傑作に比肩し得られる純藝術的一傑作を有するに至つた。又從來の佛陀の傳記は粗朴であつて首尾のない斷片的な部分傳であつたが、この佛所行讃(「佛陀の生涯」)に至つて初めて佛傳文獻史上稍々正鵠に近いと思はれる佛陀の全傳を見出すに至つた。實に吠陀(Veda)の讃歌摩訶婆羅多詩(Mahābhārata)羅摩耶奈詩(Rāmāyaṇa) の二大叙事詩等に榮えた印度文學と、阿含聖典以後に育まれた佛教思想殊に佛陀觀とが、印度文化に培はれた天才馬鳴の心靈の坩堝に溶し合され、此處に創り出されたのが、大宮廷詩「佛所行讃」(「佛陀の生涯」)であつたのである。「佛所行讃」の中には崇高な佛陀の人格言行と深淵な佛教思想・印度思想が印度文學の優れた修辭によつて麗しく生々と表現されてゐる。まことに佛所行讃(「佛陀の生涯」)は印度文化の花園の中に爛漫と咲き亂れて、他の純文學著作と艶を競ふ蓮華であり、光明るい佛教の摩尼の中でも分けて光り燦然とした珠玉である。

次に作者馬鳴と其の著述「佛所行讃」の思想表現を簡潔に記して、紹介解題としよう。

【一】梵本出版 Cowell: the Buddhacarita of Aśvaghoṣa, oxford, 1893, 漢譯佛所行讃、大正藏經四、一頁以下縮藏七、四三以下、和譯平等通昭譯「梵詩邦譯「佛陀の生涯」(印度學研究所版) 外に西藏語譯あり。

二、作者馬鳴と其の著作

「佛所行讃」(Buddhacarita 和譯「佛陀の生涯」) の作者が馬鳴(Aśvaghoṣa)であることは、確かである。梵文「佛所行讃」の章末の題號には數箇所に「馬鳴作」と記してあるし、義淨も南海寄歸內法傳第四に馬鳴作としてゐる。

馬鳴は不世出の佛教詩人である。深遠な思想を蓄へた史上須要な佛教思想家であると同時に、才氣喚發たる天才的詩宗である。

馬鳴に就いては現在の學界の研究は未だ確定的なものを出すに至つてゐない。私は彼の年代は西暦紀元後一世紀後半から二世紀前半にかゝるものと思ふ。梅檀

めず、縁を觀じ、理を究めて、獨覺の菩提を證す』と。王卽ち「善し」と稱へ放して出家せしめぬ。後道果を證し、來りて王の前に至り、虛空中に於て、神變の相を現したれば、王是の事を視て、深く歸信を生じ、五體を地に投じ、以て敬禮を伸べ、卽ち伽陀を說きて曰く

善き哉、智慧の人、　惡業の能く繫ぐ(所)に非ず。　寂靜を求めて修行し、　獨覺の菩提を證しぬ。

伽陀を說き已りて、又復、言うて云く『若し諸の摩拏嚩迦あり、出家して道を求むれば、我れ卽ち隨喜せむ』と。時に近臣の[二七]殑伽波羅と名くるあり、此の偈を聞き已りて忻樂すること常に非ず、記憶して心にあり、其の貪愛を誡め、王も此に因つて後亦、自ら勗勵し、乃ち宮室を踈んじ、多く寂靜を樂ひぬ。殑伽波羅、後に王の喜びに接して遂に出家せんことを求め、王旣に允許するや、拜辭して出で、卽ち深山に詣り、苦行の仙人に逢ひ、便ち隨ひて道を學び、精勤し策勵して、亦た五通を得、徑りて王の前に來り、其の神變を現はしぬ。王乃ち問うて曰く『汝、是の如き功德を得たり耶』と。答へて曰く『我れ證したり』と。王『聖を證せり』と謂ひ、便ち其の足を禮し、頭纔かに地に至るや、地卽ち震動せり。是の時、王の母此の眞に非るを察し、乃ち殑伽波羅の爲に伽陀を說きて曰く

若し根本の出家ならば、　沙門を禮事せん。　寂默し、及つ精進し　苦行して緣覺を成ぜり
一切の罪、永く滅し　一切の福業生じたれば　後ち諸の世間に於て、　廣く衆生を利樂せん。

佛、諸の苾芻に告ぐらく『昔の梵壽王は、今の賢王是れなり、殑伽波羅は、烏波梨是れなり。往昔禮拜して地已に震動せり、今日禮を致すこと本と殊なること無し。諸の苾芻よ、此の過去現在の種々の事、今汝等の爲に再び分別して說けり、汝等聞く者宜しく其れ諦かに信ずべし』と。時に諸の苾芻此の說を聞き已り、歡喜し踊躍し、佛を禮して退きぬ。

衆許摩訶帝經卷第十三(終)

【二七】殑伽波羅(Gaṅgapāla)(大事所出)。

して尋求せしめ、見已るや呼び來り、乃ち之に謂うて曰く『日光の下照すること、火の腦を燒かんが如し、云何が歌唱して、都て苦しむ所なきや』と。(孫那囉摩拏嚩迦)即ち伽陀を以て對へて曰く、

我が心、迷ふが故なり、　日、照らさゞるに非ず。[二六]事を爲さんとして、少くるあり　故に、苦を知らさるなり。

時に王、思惟すらく『此の花を採る人、言を能くす』とて、乃ち留めて與に語りぬ。王曰く『我、出でゝ熱に値ひ、此に來りて涼を求む、汝、言を以て我が熱惱を解く可し』と。孫那囉摩拏嚩迦、本より智慧あれば、言ふ所、旨に稱ひ、乃ち征伐の利を說きて、王の心機に投ぜり。王聞きて奇なるを歎じ、即ち熱惱を忘れ、宣して大臣に問うらく『刹帝利の灌頂王の所に於て、身命の難に(力を)假す者あらば、最上の賜は國に何なる典ありや』と。大臣對へて曰く『儲君を與ふ可し』と。即ち大臣に勅し、冊して其の位に居き、內外に告報し、式に准じ、儀を備へ、禮して春宮に赴かしめぬ。尊さ、儲貳に處り、凡そ日の受用、珍寶に非るは無く、寢臥の所、茵褥、異常なり。孫那囉摩拏嚩迦私かに自ら惟うて曰く『儲君此の若ければ、尊極知る可し』とて、便ち貪心を起し、大寶を謀らむと欲したれども、纔かに斯の念を起すや、便ち自ら覺知し『我、若し斯の如くんば、報を來かんと云ふ堪し』と。是れに由て追悔し、寢るも安處せず、乃ち麤席を施き、地上に臥せり、明旦に至り已るや、王即ち使を遣はして、其の動止を觀しむるに、乃ち孫那囉摩拏嚩迦の地上に臥せるを見『此れ儲君に非ず、乃ち賤人爾』と(白せば)、王曰く『何んか知るや』と。事を具して上聞するに、王曰く此の大智人は是れ賤士に非ず』とて、乃ち詔して來らしめ、其の故を詢問せり。王曰く『夜、床に寢ねず、地に臥するは、何なる意なりや』と。對へて曰く『貴きは究竟に非ず、故に樂はず』と。王曰く『汝の意は如何』と。『今出家せんと欲す』と。王復た言うて曰く『未だ此の事の云何を知らず、出家せば何の功德かあるや』と。答へて言く『寂靜の處に於て、苦節修行し、亦、聖師なく、亦た侶を求

【二六】爲事有少。故不知苦。

かりき。諸の苾芻等各〻、心に疑ふらく『今、賢王の禮拜するや、地六種に動けり、何の因緣か有る。唯、願くは世尊、諸の疑網を解きたまへ』と。

七十五、烏波梨本生

佛[20]言く『過去の世の時、此の閻浮提の波羅奈國に王ありて統御し、名けて[21]梵壽と曰ひ、國界は富盛にして、人民は快樂しき。時の彼の城中に、一の娼女の[22]跋捺囉と名くる有り、色相、端嚴にして、人の愛羨する所なりしが、一の男子あり、[23]孫那囉摩拏嚩迦と名け、彼の女の處に往いて言く『意相ひ慕ふ』と。女即ち報へて云く『五百金の錢を備へて、來り相ひ見ゆべし』と。是の人貧匱にして、言ふ所に副ふこと莫ければ、別に方便を以て、之に親附し、遂に居を移して、相隣り、時花果を奉げたり。後、節序に因りて男女樂を作し、身を嚴り、花を戴きて、各〻其の美を衒ふ。時に跋捺囉思念を起して曰く『孫那囉摩拏嚩迦、彼の人若し來らば共に喜樂を作さん』と。須臾にして來至せしかば、女即ち喜びて曰く『花を取りて來る可し、汝と樂を作さむ』と。孫那囉摩拏嚩迦、此の日、事あり、心極めて煩惱して、通宵睡ることなく、天の將に曉けなむとするに及び、熟寐して覺めざりしかば、衆くの人、花を取り、好き者已に盡きぬ。乃ち[24]尸利沙花を得、將て彼の女に與へたれども、彼の女悅ばず、即ち偈を說きて言く

[25]戒《花》は不精進の業によれり。　怠墮して、睡眠を重ねたれば、　衆、好き花を採りて去り、
尸利沙の花を得たるなり。

又復、告げて言く『汝、別の花を求めよ』と。時に初秋の月にして、暑氣猶、鬱なりしに、乃ち再び去りて花を尋ね、以て中午に至るも花を採り、歌を唱ひて都て熱きことを覺らざりき。《時に》梵壽王の草に入り、林に詣りて熱さを避けんとせるに値ひければ、《王》忽ち、歌唱するを聞きて、人を

【二〇】 此の烏波梨の本生譚は「大事」梵 にも見えたり。然れども孫那囉摩拏嚩迦をUpaka(māṇavaka)となし對跋捺羅の事は出さず。巴利文 Jātaka には未だ之を見ず。

【二一】 梵壽(Brahmadatta)。

【二二】 跋捺囉(Bhadrā?)。

【二三】 孫那囉摩拏嚩迦(Sundaramāṇavaka?)。

【二四】 尸利沙花(Śirīṣa)。樹名なり。花咲けども美しからぬものならむ。

【二五】 戒不精進業　怠墮重睡眠

戒云々と言へるは尸利沙(Śirīṣa)は戒の梵語尸羅(Śīla)と相似たればなり。今ま戒花として譯せり。

成りぬ。時に烏波梨即ち髮を剃り、釋衆の各ゝ、年少にして其の富貴を捨つるを覩るに及びて『我れ今、卑族なり、何の戀ふ所ぞや、宜しく彼の恩愛を棄てゝ煩惱を去離し、其の輪迴生滅の患ひを免る可し』と。是に於て、頭を搘へて再三忖度しぬ。爾の時、舍利弗見て問うて曰く『汝何ぞ頭を搘ふる。樂まざることあるに似たり』と。答へて言く『是れ樂しまざるに非ず、思念する所あり』とて、具さに情の實を以て、舍利弗に告ぐ。舍利弗謂うて曰く『世尊の度脫したまふこと、尊卑を問ふに非ず。今正に是の時なり。宜しく其れ猛利なるべし』と。世尊預め知りたまひて、專ら根の熟するを期てり。舍利弗、烏波梨を將ゐ來りて佛の前に至り、五體を地に投じて、其の禮敬を伸べ、白して言く『世尊、今、烏波梨、正法に於て出家せんと欲す。願くは佛、哀愍じたまへ』と。佛、烏波梨に告げて言く『汝梵行を得む』と。世尊の言訖るや、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きぬ。後、七日の中に鬚髮再び出で、威儀、庠序として、[一九]百臘の苾芻の如し。自ら伽陀を說きて曰く、

我れ今如來の正法に於て、　出家せんことを求めたるに、　佛、梵行を得むと言ひたまへば
鬚髮は、尋いで自ら落ち、　袈裟も亦、身に著きぬ。　此れ即ち善本の、今日、方に、成熟
せるに從りての故に、　我れ、苾芻と爲れるなり。

爾の時、世尊大衆に告げて言く『今出家は、夏臘の次第に依りて、其の尊卑を守る可し、乃至未來にも禮は闕くことを得ず』と。是に於て、烏波梨、諸釋を平視せり。時に彼の賢王、次第に衆を禮し、烏波梨の前に至るや、禮拜することを肯んぜず、來りて世尊に白すらく『今、烏波梨は是れ承事の人なれば、今、我れ禮せんは是れ順ならざるなり』と。佛言く『汝既に出家せり、當に我相を除くべし、彼は是れ上臘なれば、宜しく禮敬を伸ぶべし』と。賢王、纔かに禮するや、地、六(種)に震動しぬ。次に提婆達多、亦、禮することを肯んぜず、又來りて佛に白せば、佛言く『出家の人は當に我相を除くべし。彼は是れ上臘なれば、宜しく足を禮すべし』と。是に於て諸釋禮せざる者な

【一九】臘とは、僧の出家後の年數。夏の安居に一歲づゝを重ぬるが故に又夏臘といふ。

らく『此れ若し出家すれば、必ず聖道を證せん』と。阿儞嚕駄、次いで行いて城を出づれば、相師亦云く『聖を得むこと久しきに非ざらむ』と。提婆達多出でゝ城門に至れば、頭上の寶冠忽然として地に墮ち、相師見已るや『此の惡業の人、定ず地獄に入らん』と。又、不善の人——名けて[一六]海壽と曰ふ——纔かに門の側らに到るや、驢、惡聲を作しければ、相師之を知り『此れ口業に會て聲聞を謗れることあり、當來に果、熟すれば定ず惡趣に墮ちむ』と。[一七]烏波難陀、次に出で、象に乘りて、方に門首に至れば、瓔珞地に墮ち、乃ち自ら象を下りて親しく手ら收取す、相師言うて曰く『此の鄙悋の人、當に地獄に入るべし』と。是の如く五百の釋種各ゝ出で已るや、相師皆見て咸く善惡を以て具さに父母に告げぬ。

七十四、烏波梨出家

時に釋衆等、迦毘羅城を出で、復た園苑に遊び、次に佛の處に至り、各ゝ佛に白して云く『出家を求めむ』と。世尊思惟すらく『今、此の釋衆、出家せむことを求むと雖も、志、樂ふ者あり、樂はざる者あり』と。佛、*四法を以て、度して苾芻と爲したまひぬ。時に淨飯王に承事人の[一八]烏波梨と名くるあり、善く剃髮を能くせしかば、王卽ち遣はして釋衆の與に剃髮せしめたるに、旣に彼處に至れば、與に剃ることを肯んぜず、乃ち色を作して煩惱し、又復、悲泣しぬ。賢王問うて言く『何を以て是の如きや』と。烏波梨曰く『我れ一人に奉ず、衆に使はるゝに非ず。寧ろ命を捨つ可けんも、髮は剃ること能はず』と。賢王諫めて曰く『是の言を作す勿れ、汝王命を奉く、衆の使ふ可きに非ず。此れに善利あらん、請ふ、煩惱すること勿れ』と。賢王復方便を以て釋衆に告げて曰く『汝等出家すれば寶冠、妙衣及び莊嚴具は、今日已去(以後)咸く用ふる所無けむ。都て一處に置きて、烏波梨に與へよ。彼れ得むことを聞かば、或は歡喜す可し』と。衣冠旣に集まりて乃ち大聚と

【一六】海壽(Sigrundatta)。(ロック・ヒル)。

【一七】烏波難陀(Upananda)。

※四法とは、前に屢ゝ出でたる四法印、卽ち無常・苦・空・無我を云ふ。

【一八】烏波梨(Upali)。佛涅槃後、結集に際して律を誦せりと言はるゝ優波離は之れなり。

とを得たりや否や』と。報へて言く『安睡することを得ざりき』と。又問うらく『何故に是の如かりし』と。對へて曰く『床、鋪く所の者は病觸の衣なり、是を以て我れをして安寢することを獲ざらしめたり』と。賢王卽ち司る所の侍人を喚び其の緣由を問ふ『何より得たるや』と。對へて曰く『王、初め生れたまふ時、敷設せるもの、餘長にして、後、疾患に因り曾つて已に受用したまへり』と。賢王歎じて曰く『善き哉、釋族、此の異子を生めり』と。又言く『我れ出家すれば、提婆達多次に王位に當る』とて、乃ち左右をして提婆達多を呼ばしめ、到り已れば、問うて言く『我等勅を奉け咸く去りて出家せん、未だ汝今、當に何に所作すべきやを委らかにせず』と。時に提婆達多、私かに自ら念うて曰く『若し或は我れ出家せずと言はゞ、卽ち賢王をして亦た出家せざらしめむ』と。便ち誑言を以てすらく『我れも亦、出家せむ』と。時に、彼の賢王速かに公文を以て淨飯王に奏すれば、王乃ち勅を下して、內外に告示すらく、『今、賢王、阿偏嚕駄及び提婆達多等の釋種五百人出家せむ。咸く知悉すべし』と。勅出づるの後、中外歡喜せるも、唯、提婆達多のみ獨り自ら苦惱し、意に云く『本、方便を作し、賢王をして出家せしめんと欲してなりしも、今、或は言に違はゞ、妄語の過ちあり、我れをして將來、王位を得ざらしめん』と。是に於て剛忍し衆に隨ひて出家せり。

七十三、釋種出家者に關する相師の占相

時に、淨飯王、後代をして族の尊貴を知らしめんと欲し、內外に宣告すらく『凡そ是れ街衢より城隍に迨及ぶまで一切を嚴飾して皆、殊勝ならしめ、布くに淨き土を以てし、灑ぐに香水を以てし、復、幢幡、傘蓋を排べ、花を散き、香を燒き、以て賢王等五百の釋種、出家の經過に擬てよ。彼の釋種等各ゝの父母は、衢路の側ら及び城門の首に於て、敷設して觀看せよ』と。亦、相師に命じて、各其の子の誰か出家すべく、誰か當に不可なるべきやを相せしめぬ。賢王先づ出づれば、相師稱歎す

示し『汝、看よ。此の食は是れ彼の化出なり。彼の阿儞嚕駄は人皆、愛樂す。我れ、大福にして汝の力を等しふする(所)に非ずと言へり。汝初め信ぜざりしも、今已に驗知せり』と。摩賀曩摩、父母に白して言く『彼れ既に大福なれば、出家せしむ可し。我れは今、福無ければ出家者に非ず』と。父母卽ち阿儞嚕駄に謂うて曰く『王今勅したまふあり、汝、出家するや否や』と。對へて曰く『出家に何の利益かある、在家に何の過失かある』と。父母言く『出家の人は當に涅槃を證すべく、天上、人間の第一の供養を受く可し。[一三]若し人の在家なるもの、出家の(如く)眞實に欲を離るれば、亦、天上人間の供養を得む。若し是れ在家にして妄りに出家と稱すれば、當に三惡道の報を感ずべし』と。對へて曰く『出家、在家の利を得、利を失ふこと、我已に曉了せり。今、出家して上、王命に副はんと欲す』と。父母告げて曰く『汝の言大いに善し』と。

【3 賢王、提婆、出家の緣】 時に阿儞嚕駄に、一の同年にして名を[一四]賢王と曰ふもの有り、最も相ひ知見せしかば、乃ち彼處に往いて相ひ告白せんと、賢王の門に至れば[一五]方に琴を品ぶるを聞き、又、絃、斷ちて五音、足らざるに値へり。阿儞嚕駄、擅琴の聲止むや、立ちて進まず、其の品を調ふるを待ちて、人をして入りて報ぜしめば、賢王、入らんことを請ひ、阿儞嚕駄に謂うて曰く『汝來りしは何れの時なりや』と。答へて曰く『琴の絃初め斷てる(時)、我れ已に門に至り、其の品を調ふるを待ちて、方に入りて報ぜしめぬ』と。賢王、「善し」と稱へ、手を執りて、坐したまへと請ひ、『汝今、何ぞ來るや』と。對へて曰く『淨飯王、勅あり、釋族をして出家せしむ、意に眷屬をして佛の左右に侍らせんと欲したまひてなり。汝、善を慕ふを以ての故に、來り相ひ報ずるなり』と。賢王曰く『勅旨纔かに下るや、尋いで亦、便ち知りぬ。汝既に出家すれば、我れも亦、同に往かむ。汝今夜、我が舍に宿る可し』と。阿儞嚕駄、言に隨ひて卽ち止まり、賢王、人をして爲に臥處を敷かしめぬ。夜に至るも、眠睡に少かなる安樂もなく、明晨、相見えしに、賢王問うて言く『安睡するこ

【一三】若人在家出家、眞實離慾亦得天上人間供養。
【一四】賢王(Bhadrika)(ロック・ヒル)。
【一五】方聞品琴。

尊に侍奉せんには未だ允當ならず。[二]釋族に於て、其の年少にして賢善ある者を選び、便ち出家して佛の左右に侍らしむ可し。貴くは相ひ稱ふことを得む』と。時に淨飯王、勅して親族、内外の臣佐に下すらく『今、一切義成、轉輪王の位を捨て、苦行し修習して、大法王と爲りたまひぬ。宜しく各其の賢子を選び、捨てゝ出家せしめ、世尊に侍從して、以て其の美を成げしめ(奉る)べし』と。

【2 阿儞嚕駄出家の縁】 時に斛飯王に[三]二子あり、一は阿儞嚕駄と名け、二は摩賀曩摩と名けぬ。彼の摩賀曩摩能く王務を理むるも、然も財利を貪り、阿儞嚕駄は常に宮中に處り、意の随に樂しみを受けたり。時に斛飯王、勅旨、宣下せるを以て、乃ち摩賀曩摩を呼び『汝、出家し以て王の命を奉く可し』と。子の曰く『我れ出家せず、彼の阿儞嚕駄は常に宮中に在りて、其の快樂を受く。出家せしむ可し』と。父言く『彼の子は福徳なり、汝、指陳すること勿れ』と。子曰く『此は是れ、父母の愛憐の許す所のみ。若し實に福あらば、當に試驗す可し』と。父曰く『當に何にして試驗すべきや』と。子曰く『常式、食を送る。今、盤を空にして、之を送る可し、若し其れ福あらば、食、自然に出でん』と。父卽ち對面り封ずるに空盤を以てし、宮嬪をして之を送らしめ、誡めて曰く『若し何なる食ぞ』と問はゞ、但だ「種々内に在り」と答へよ。時に、天帝釋、此の事を觀知し、『阿儞嚕駄、昔し曾て、食を以て辟支佛に供へ(奉れ)り。今日、云何が其をして食なからしめんや』とて、乃ち種々の珍味の品饌を化りて、彼の空盤に滿たしぬ。女の使彼に至れば、阿儞嚕駄問うて言く、『何なる物なりや』と。宮嬪、心嗔りて、誡勅に依らず答へて言く『物なし』と。阿儞嚕駄卽ち思念して曰く『父母、云何が空盤を送りたまふや』と。乃ち封を開きて、之を視るに、異饌、中に滿ち、人の罕に見る所にして、馨香、馚馥として、園苑に皆滿てり。阿儞嚕駄、意に亦深く怪しみ、彼の女に問うて言く『本より食ありしや、本、空盤なりしや』と。女曰く『空盤なりき』と。遂に却りて此の食を以て、父母に奉上せば、父母、食を見て亦、大いに驚き怪しみ、又、此の食を以て、摩賀曩摩に

【二】可於釋族選其年少有賢善者便令出家侍佛左右貴得相稱。

【三】二子。
1 阿儞嚕駄 Aniruddha (重出)。
2 摩賀曩摩 Mahānāma (重出)。

に畢りぬ。

七十一、王の供養と精舍奉獻

淨飯王曰く『速かに所司をして種々の珍饌、飮食を辦造せしめて香美を極めしめよ』と。又勅すらく『內外を潔淨にし、葷穢を除去し、正殿の上に於て、當に淸淨なる茵褥及び上妙の衣を以て敷き、如來及び聖衆の坐位を置き、復た香花及び淨水瓶を設けて、備へを闕かしむること無かるべし』と。既に來晨に至れば、使を遣はして、佛に白さしむ、『今、食已に辦はりぬ、請ふらくは、佛及び衆の同に降臨を賜はらんことを』と。

爾の時、世尊、諸の聖衆の與に前後を圍繞せられ、行いて王宮に詣り、食の供養を受けたまふ。佛、宮門に至れば、王、眷屬と爐を執り、香を焚き、世尊を引きて入れ(奉り)、佛、座に昇り已れば、諸の聖衆等、次第に坐に就きぬ。時に、淨飯王、諸の眷屬と禮拜し、問訊し、讃歎し訖り、卽ち親しく手ら種々の飮食を奉上して供養を伸べ、食畢りて澡漱したまへば、供心、圓滿せり。時に淨飯王卽ち金の瓶を取りて、世尊の手に灌ぎ、白して言く『儞也誐嚕駄林精舍を奉施し(奉る)。願くは佛、意に隨ひたまへ』と。瓶の水、出づる時、五功德の聲ありき。佛、亦、願を施して言く『施す所の福を以て、王及び釋族の、一切求むる所、意の隨に獲得せんことを』と。王及び眷屬是の語を聞き已るや、歡喜し、踊躍し、佛を禮して退き、佛及び聖衆は精舍に迴還せり。

七十二、賢王等五百釋種出家

【一侍者選定の議】 後、一日に於て、世尊又、王宮に在して、食を受けたまひき。王の眷屬、互相に謂うて曰く『今、世尊の左右は皆、是れ耆年にして、善相、威儀、誠に仰重するに堪へたり、然れども世

非ず、父に非ず、母に非ず、亦、親愛なる一切の眷屬の獲得する所にも非ず、當に如來の慈孝の致したまふ所に從るべし』と。又復、思惟すらく『我れ過去に於て、生死に輪廻し、骨、聚りて山の如く、血涙れて海を成し、或は復た諸の惡趣の中に墮落したりき。今日乃ち解脱の門に入り、聖道に預る』と。又復、言うて云く『善き哉、世尊の往昔、無數の苦行を修行して、身命を顧みたまはざりしは、衆生を利したまはんが爲なりき。我れ今、更に殊勝の天報を求めむ』と。佛卽ち王を悲念したまはく『今、云何が斯の報を求むるや』と。時に、淨飯王卽ち座より起ち、合掌し頂禮して、世尊に白して言く『今、佛及び諸の聖衆に、我が宮中に於て、來晨食を受けたまはむことを請はむと欲す。唯、願くは、大慈もて咸く降赴を垂れたまはんことを』と。佛卽ち默然たり。王、許したまへることを知り已りて、禮謝して歸りぬ。

七十、王位禪讓の議

纔かに宮中に至るや、白淨飯王に詔し、告げて言うて曰く『我れ已に道を證したれば、王位を樂はず、汝灌頂を受け、我に代りて國を理めよ』と。白淨飯王問うらく『何の時に、證せる耶』と。答へて曰く『適、儞也誐嚕駄林に於て、法を聞き、證を得たり』と。白淨飯王曰く『世尊、初め彼の林に到りたまふや、我れ已に證を得たり、王の云ふ位に代ることとは、我れ實に能はず』と。又、斛飯王に詔して曰く『汝、灌頂して我に代りて國を理む可し』と。對へて曰く『我れ梵現林の中に於て、法を聞き、果を證せり。言ふ所の位に代ることは、誠に樂はず』と。又甘露飯王に謂うて曰く『汝灌頂を受け、我に代りて國を理めよ』と。對へて曰く『我れ嚕呬多迦林に於て、法を聞き、果を證せり。今亦、王位に處るを樂はず』と。淨飯王曰く『若し是の如くば、當に何人をして、宗社を守らしむべき也』と。諸王咸言く『釋族の中、賢德ある者をして、之を守らしむ可し』と。議する事已

南門に至れば、復、入ることを得ず。王乃ち問うて言く『何故に是の如きや』と。對へて曰く『佛、淨光の諸天の爲に法を說きたまへば、凡人會に預ることを得ず』と。又た問うらく『汝何なる賢聖にして、此に居り門を守るや』と。守門對へて曰く『我れは卽ち增長天王なり、故に南門を守る』と。王思惟して曰く『我れ西門に去かば、應に恐らくは入ることを得べし』と。旣に彼に至れば、亦、入ることを得ず、王又、審りて問うらく『何故に是の如きや』と。對ふること復、前の如し、又、問うらく『汝、何なる賢聖なりや』と。答へて曰く『我れは是れ廣目天王なり』と。淨飯王、長息して歎きて曰く『聖凡、相ひ隔たること、近しと雖も、至つて遠し』と。旣に心、切りに佛に見え(奉ら)んとし、更に北門に往き、彼に至れば、前に同じく止めて入らしめず、王卽ち聲を勵まし守門者に謂うて曰く『賢聖は是れ、北方の天王には勿ずや否や』と。對へて曰く『我は卽ち毘沙門なり』と。時に淨飯王、此の語を聞き已るや、將に悶絕せんとするに迨り、又復、思惟すらく『我れ至親なりと雖も、今は則ち疎遠なり』と。「我れは親なり」の分別、此に從ひて泯滅しぬ。是に於て、世尊、分別なきことを知り、又情極まれるを察し、若し不時に見ゆれば、恐らく無常を致さんとて、佛、神力を以て、樓臺、殿閣乃至、垣牆を變じて、悉く玻瓈と成し、淸淨映徹して、內外、相ひ視るに障礙する所なから(しめ)たれば、王、世尊を見(奉る)を得て、心、歡喜を極め、卽便ち禮拜して、一面に於て坐しぬ。

六十九、淨飯王得果

爾の時、世尊、種々に方便して、我心無く及つ分別を除かしめ、卽ち爲に苦・集・滅・道の四聖諦の法を廣說したまへば、王聞くことを得已りて、所有る身見、二十山峯の如く、金剛智を以て破滅して餘すことなく、便ち須陀洹果を證しぬ。王、思念して曰く『我れ今、證せる所は、天に非ず、仙に

なれば、我の如きは多し。
時に、淨飯王、初め世尊のみ獨り是の事ありと謂ひ、心中常に我執の相を存せしも、大目犍連の神變を現はし已るに及びて、乃ち弟子も亦、斯の證あることを知り、王の我心、此れに由て滅することを得たり。

六十八、佛、王の分別心を除く（諸天說法）

是に於て、世尊卽ち方便を以て、世間心を作し、『云何せば、梵王、帝釋及び淨光天、來り、我れ爲に法を說くことを得むや』と。——意に於て云何、如來の心は、聲聞菩薩の能く知る所に非ず。然る所以は、世間の心は、下、蟻子に至るまで、尙、知ることを得しむ、何に況んや諸天をや。——是に於て、帝釋、毘首羯磨天子に告げて言く『汝、偏也識嚕駄林を化して、大法會を作り、其の中、臺殿、樓閣に悉く師子の座を安き、咸、衆寶を以て嚴飾を爲し、復、四門を開き、各四寶を以て莊餃し、復、四天の大王をして之を守護せしめよ』と。時に、毘首羯磨天子、帝釋の命を承け、大法會に變へて、種々に嚴飾すること、帝釋の敎の如く、仍四王をして守門者と爲し、變化を作し已るや、世尊に白すらく『法の會已に成りぬ、請ふ、佛、彼に往きたまへ』と。是の時、世尊、自らの眷屬、及び梵王、帝釋、淨光天等の無數百千の衆と、偏也識嚕駄林に還りたまひ、佛、旣に到り已れば、寶殿に入り、師子座に昇り、卽ち妙法を說きたまひぬ。時に尊者大目犍連、淨飯王と同に佛の所に詣らんとし、法會の門に至れば、尊者直ちに入り、王は卽ち止住(せしめらる)。王曰く『何故に我を障るや』と。對へて曰く『佛、淨光天等の爲に法を說きたまへば、凡人、會に預るを得ず』と。王曰く『汝、何なる賢聖にして此に居り門を守るや』と。對へて曰く『我は是れ持國天王なり』と。時に王乃ち問ふらく『東門は卽ち爾らば、南門は可きや否や』と。對へて曰く『知らず』と。旣に

多に告げて言く『汝、世尊、大丈夫の所に於て、是の如き悪言を發する勿れ』と。提婆達多辱いで便ち默然たり。

六十七、目連淨飯王の我心を滅す

時に、淨飯王、心を起し思惟すらく『昔者天人阿修羅は世間の供養爲りき、今は佛、世に出でたまへば眞に是れ世間の恭敬にして供養たり』と。釋の童子あり偈を説きて、佛を讃へて曰く

釋種の大仙なる大丈夫は、　能く妙法の甘露の雨を降らし、　黑闇に墮落する者を救濟し、
解脱の門を開きて、引導を爲したまふ。

爾の時、淨飯王、此の童子の偈を説きて佛を讃ふるを聞きて、深心に歡喜せり。然れども眞實に於て未だ諦を見ず、唯、言ふらく『世尊は是れ大丈夫にして大なる威德を具したまふ。誰か聖子を有ちて我れに同じき耶』と。世尊思惟すらく『父淨飯王、眞實を見ざるは、乃ち二事の爲なり、一には我心、二には分別心。若し能く此を離るれば、眞實を見る可し』と。佛、〔一〕大目虔連の淨飯王に於て宿因あるを觀じ、佛、大目虔連に謂うて曰く『汝、方便を以て淨飯王を化し我執を離れしめよ』と。是に於て、大目虔連卽ち王の處に詣れば、王、尊者を見て、心便ち歡喜しぬ。尊者時に應じて三摩地に入り、王前に於て隱れて乃ち東方虛空の中に出で行・立・坐・臥の四威儀の相を現はし、又復、身中、五色の光を放ち、猶、玻瓈の互相に映徹するが如く、或は身の上、水を出し、身の下、火を出し、或は身の上、火を出し、身の下、水を出し、是の如く種々に神變を現はす。東方此の如く、南・西・北方亦復、是の如く、神變を作し已るや、虛空に沒して、彈指の如き頃に已に王の前に在りき。王曰く『佛の弟子中、更に尊者の如きありや否や』と。時に大目虔連卽ち偈を説きて曰く

世尊の弟子は大威德あり　三明六通、皆、自在なり　三界を解脱せる阿羅漢にして　聲聞、牟尼

【一】虔は犍と同音なれば音譯としては差支なからんも他經に未だ此の例を見ず、因みに明本は此の所及び後に、一二回犍としあるも尙ほそのままの所あれば、明本に於ての作爲ならん。

樂すべし。

爾の時　淨飯王是の語を聞き已りて、歡喜すること量なく讃へて言く『善生釋の族、[六]世の八法に於て皆染れず』と。復、頭面を以て、如來の足を禮し、又復、思惟すらく『我れ善利を得たり、我が子乃ち是の如き功德を證したまへばなり』と。王、眷屬と、世尊を送り(奉り)て、偏也識嚕駄林の精舍に入れたまふ。

六十六、白飯等三王、諸釋衆得果（提婆の誹謗）

爾の時、世尊既に精舍に至り、法座に登り已るや、王及び大臣乃至士庶圍繞して瞻仰し、虛空の諸天も歡喜し讃歎せば、佛は會衆各々の心意及與根性を觀じ、如實に知りて、廣く爲に四聖諦の法を解說したまひぬ。時に[七]白淨飯王及び釋衆等七十七千人、皆、須陀洹果を證せり。世尊又何處に緣、熟せるやを觀じたまふに、彼の梵現林は時も法を說く可しとて、佛、大衆と悉く彼處に詣りたまへば、無量の人衆、相隨ひて法を聽きぬ。世尊廣く四諦の行相を說きたまへば、彼の斛飯王迨び釋衆乃至人天七十六千人あり、又、須陀洹果を證せり。世尊復、[八]嚕呬怛迦林に詣りたまへば、亦、無量の天人、釋衆・眷屬・人民・士庶、佛に隨ひて法を聽きぬ。世尊前に同じく、廣く四諦を演べたまひ、甘露飯王及び釋衆等乃至人天七十五千人あり、須陀洹果を證し、餘に、斯陀含果を證する者あり、阿那含果を證する者あり、阿羅漢果を證する者あり、聲聞菩提の心を發す者あり、辟支菩提の心を發す者あり、無上菩提の心を發す者あり、亦、出家して諸の煩惱を斷ち、後ち阿羅漢果を證する者あり、乃至三歸心を發す者ありき。時に提婆達多既に世尊の神變を現はし、妙法を說きたまへるを見て、自ら證する所も無く、乃ち妬心を生じ、不善の言を發して釋衆に謂うて曰く『一切の盲人、斯る幻化を樂ぶ、此の幻化の事は一切、能く作さむ』と。一釋衆の[九]鉢囉摩拏野と名くるあり、提婆達

【六】世の八法(Aṣṭau lokadharmāḥ)。
1 利(Lābha)。
2 衰(Alābha)。
3 稱(Yaśa)。
4 譏(Ayaśa)。
5 毀(Nindā)。
6 譽(Praśaṃsā)。
7 樂(Sukha)。
8 苦(Duḥkha)。
又た八風ともいふ。

【七】本經先には白飯王と出せり。梵語よりするに普通の如く白飯王とあるを可とす。

【八】嚕呬怛迦林(Rohitakavana?)。

【九】鉢囉摩拏野。ロック・ヒル出さず。

答へて曰く
已に煩惱の本を斷てば　諸の怖畏は生ぜず　極く微かにも我れ亦、無ければ　處に隨ひて安住す。
王曰く
清淨にして妙なる香水もて　昔時は恒に沐浴したり。　今獨り山野の中に　誰か牟尼王を浴《せしむ》るや。
答へて曰く
戒の香りに漬める法の水もて　德ある人は恒に浴みす　身を潔めて彼岸に到るとは　無量の聖の說き給へる所なり。
王曰く
昔は妙香を身に塗り　及つ[四]迦釋の衣を著け　恒に內宮の殿に處たるに　彼を離れては、相稱ふに非ず。
答へて曰く
戒の香は最も馚馥たれば　用て身に塗りて莊嚴す　我れ今や愚迷に非ざれば　寶衣の嚴飾を離れたり。
王曰く
何處に輕慢を得む。　何處に怖畏す可き。　[五]無事及び有事、　今問はん、願くば應に說くべし。
答へて曰く
老・病・死の三法は　怖る可し、輕慢する勿れ、　當に適悅の境を求むべし。　無事は、應に愛

【四】迦釋。迦釋迦に同じ。

【五】無事及有事　今問願應說　有事、無事は、有爲・無爲の異名なり。事は因の義にして、因の有無に依り、之を區分すべきが故に、この名あり。

王曰く

〔二〕迦釋迦の妙なる衣は　身を嚴りて、昔、自在なりき　今の袈裟は麤衣なれば　云何が忍びて被服するや。

答へて曰く

〔三〕僧伽梨の麤衣は　牟尼の山中の服なり、　著け已らば善相生じ　見る者、皆深く悦ばむ。

王曰く

金寶の器の中の食は、　恒に食して最上の味なりき。　今、自ら應器を持ち、　食する所、云何とや知る。

答へて曰く

等引の法味は最たり、　之を食すれば、出離を得む　已に世間の受を斷ちたれども、　世を愍れむが故に行化するなり。

王曰く

乳糖の水は甘美なれば　之を飲めば、昔厭くこと無かりき。　今、飲む所の冷、熱や　清濁をば、云何とや知る。

答へて曰く

王の貴盛の水は　世間の人は爭ひて飲まむも　飲み已れば、或は染を増さむのみ　我れの如きは愛樂することなし。

王曰く

寶殿及び樓閣に　昔は心の隨に住したるに。　今は獨り山林に處り　云何が怖れなきを得るや。

【二】迦釋迦（Kāśika-sūkṣma）（重出）。

【三】僧伽梨(Saṅghāṭī)（重出）。

卷の第十三

六十五、王と佛との今昔問答

爾の時、淨飯王、是の語を說き已りて、心に思ふ所あり、忽然として涙下り、復、伽陀を說きて、世尊に問うて曰く

往昔、宮中に住したまひ、　多くの人、同に衞護し《奉り》ぬ。　山野の中には怖畏あり、　一身、云何が住せる。

世尊答へて曰く

聖者に、[一]十種の住あり　我れ悉く已に安處しぬ。　牢繫、今や解脫せり　人王の宮に住するに非ず。

王曰く

象床の金寶もて飾れるは　昔し、汝の寢れる所たりき。　山野は唯、草木のみ　云何が、安眠することを得る。

答へて曰く

解脫の臥具を　菩提分もて莊嚴すれば　眠睡、甚だ適悅にして、　一切の熱惱なし。

王曰く

象、馬及び輦輿は　昔し出入に乘る所なりき。　一切の棘刺の地をば　今、云何が行くべき。

答へて曰く

我れに、神足の車あり　精勤に乘りて往復す　一切の地を行くと雖も　煩惱の刺に礙げられず。

【一】菩薩十地の位を言ふ。外に菩薩五十二位中十住の位あれども、十住毘婆沙論第一卷に十地を住處の義を以て解し十住と名けたれば恰も茲の意に當る。

て、孰か弟子たるかを辯認せざりしが、時に烏那曳囊、淨飯王を引き、世尊の前に至らせ(奉る)に、王、世尊を見て、尙ほ子の想を存せり。烏那曳囊乃ち王に謂うて曰く『如來は煩惱の習を斷ち、心、自在を得たまふこと、日の世を照して、虛空に住まるが如し。〔三二〕眞如の乘に乘り、最上覺を證し、十力を圓滿し、一切の智を具し、相好・光明・淸淨にして物を照し、法に於て自在にして、利益したまふこと無邊なり。請ひたまはくは、王、歸仰して、當に聖道を求むべし』と。時に淨飯王、此の語を聞き已りて、惺悟し、諦かに信じ、五體を地に投じて、佛の雙足を禮し伽陀を說きて曰く、

　生れたまひし時、大地皆、震動せり。　樹影は、身を覆ひて、日に隨はざりき。　復、普眼を以て、
　衆生を觀じたまふ　是の故に、我れ最尊の足を禮し(奉る)。

時に、諸の釋衆、淨飯王の佛の足を禮せるを見已りて、卽ち言ふありて曰く『世尊、云何が世法に背きて、衆生を化したまはんや』と。王、衆の議するを聞き、告げて言うて曰く『汝、豈聞かざりしや、悉達、生るゝ時、大地咸く皆、六種に震動し、一切の世間に光明普く照し、所有る黑闇——日も到らざる處、諸の威德の光も亦及ばざる所——をも、是の時、光明は皆悉く照耀したまへり。彼の黑闇の處の所有る衆生も——皆な惡業を以て中に墮ちたり——忽ち光に因て照され、互に相見ることを得て、各ゝ言ふあり『此の中に何の時か、更に衆生を生じたる』と。此の時に於て、我れ已に最尊の足を頂禮せり。是の悉達多の未だ出家せざりし時、行いて瞻部樹の下に詣りて坐したまひ、淸淨にして、欲無く、不善の法を離れ、已に一切の分別疑惑を斷ち、〔三三〕無諍、寂靜の定に樂住したまひけるに、一切の林の樹影、日に隨ひて轉ずるも、瞻部樹の影は身を蔭ひて移らざりき。我れ旣に見るを得て、驚き怪しむこと常に非ず、乃ち此の時に於て、又た尊足を禮せり。我れ今禮する所は方に第三に在り』と。

衆許摩訶帝經卷第十二

〔三二〕眞如(Tathatā)。諸法の體性虛妄を離れて寂靜不變なるに名く萬有本然の理なり。

〔三三〕無諍定・滅盡定の名あれども茲は諍ひなく寂靜を極めたる禪定の意と解して可ならん。

若しは男、若しは女——各〻殊妙の香花を執持して、路次に立ちて世尊を供養し、是の彼の人衆、咸く謂ふらく『世尊、昔、太子たりしが、今、成佛するを得たまへり、歡喜踊躍して儀範を覲（奉ら）むと欲す』と。又念を起すあり『父子相見えたまふに、其の禮云何。若し子、父を拜すれば、世と殊ること無し。若し父、子を拜すれば、國の禮未だ可からず。太子道を修め、苦行して佛を成じたまへば、必ず應に世と別異あるべし』と。人衆、路を塡噎して間隙なかりき。

【5佛羅漢の神通】 佛、聖衆と將に河に至らんとする次、王の眷屬の悉く彼處に在るを知り、乃ち自ら思惟したまはく『今、迦毘羅城の父王の眷屬及び人民等、各〻念じて言く「太子去りたまひし時、百千の天人、前後に圍繞し、空に乘りて雪山に去り、修行したまへり」と。又云く「已に正覺を成じ、衆を領ゐて化導したまふに、今、徒歩にて歸國したまはゞ、何の奇特か有らむ」と。我れ今宜しく應に其の神足を現はし、父王をして見しめ、及つ人民をして異を歎じ歡喜せしむべし』と。王及び眷屬、目り大衆を見、方に奔趨して世尊を迎接せんと欲しぬ。佛、是の時に於て、三摩地に入り、東方の虛空の中に出で、[三〇]行・立・坐・臥の四威儀の相を現はし、或は身の上、水を出し、身の下に火を出し、或は身の上、火を出し、身の下、水を出し、復、身中に大光明を放ち——或は青、或は黃、或は赤、或は白、及與紅等——諸の色、間雜して猶玻璃の互相に映徹するが如く、乃至南・西・北方亦復・是の如し。又、諸の苾芻各〻通を現し、身を踊らして上昇すること、高さ[三一]七多羅樹なり、世尊、中に於て亦一身を現はし、諸の苾芻衆、通を現はすこと等しからず——或は六多羅樹、或は五、或は四、或は三、二、一なり——佛は恒に高く出でゝ、衆と異なるあり。是の如く現し已るや、佛、聖衆と忽然として隱沒し、彈指の如き頃に、已に本處に在しき。王及び眷屬倍信仰を生じ、既に前みて迎接し（奉り）ぬ。

【6淨飯王の禮佛】 王、大衆の皆な袈裟を被て、儀相、相ひ似たるを見て、初め誰か是れ世尊にし

【三〇】立は、前にありしが如く普通住の字を用ふ。

【三一】空中の高さを多羅樹の高さを以て表はすことは屢々用ゐらる。

【4佛、羅漢に圍繞せられて出發】 爾の時、世尊至らんとしたまふ時、大目犍連を遣はし『汝、遍く諸の苾芻衆に告ぐ可し「我れ今迦毘羅城に往かんと欲す。宜しく各袈裟・應器を受持すべし、[二八]或は父母宗親に見ゆと爲うて、化利を行ふ可し」と』。大目犍連、佛の教勅を奉け、具さに佛の言を以て、遍く一切の阿羅漢等に告げ已るや、佛大衆を領ゐて、給孤精舍を出で、往いて迦毘羅城の父王の請に赴き、諸の阿羅漢、前後に圍繞し(奉り)ぬ。佛卽ち瞻顧して阿羅漢等に謂うて曰く『我が此の眷屬は是れ調伏なり、是れ離欲なり、是れ善解脫なり、是れ阿羅漢なり、是れ佛の眷屬なり。譬へば牛王の衆群に處るが如く、亦、象王の衆象に圍繞せられ、師子王の師子に圍繞せられ、鵝王の衆鵝に圍繞せられ、金翅王の金翅に圍繞せらるゝが如く、又、衆學の師に隨ひ、衆病の醫を求め、衆兵の將を輔け、衆商の主に依るが如く又、轉輪聖王の千子に圍繞せられ、持國天王の樂神に圍繞せられ、增長天王の鳩盤荼鬼に圍繞せられ、廣目天王の龍衆に圍繞せられ、多聞天王の夜叉に圍繞せられ、日天の千光に圍繞せられ、月天の衆星に圍繞せられ、帝釋の天衆に圍繞せられ、梵王の梵衆に圍繞せらるゝが如く、乃至復、悉帝彌魚の海中に處るが如く、亦、海神の衆水を攝め聚むるが如し。如來の身は三十二相、八十種好、具足圓滿して、光明、莊嚴すること、千の日の光の一切を照耀するが如く、行步魏々として寶山の如く、大悲・十力・四無所畏等一切の諸法を具足したまへり』と。

爾の時、世尊、是の眷屬と路に隨ひて去り、次第に遊化したまひぬ。迦毘羅城に至ること遠からざるに嚕賀迦河あり、時に淨飯王、諸の眷屬及び大小の臣と同に河邊に在り、預め寶蓋・幢幡・[二九]擊鈸・吹貝を嚴りて廣く妓樂を設け、香を焚き、花を散き、顒ぎて世尊を望み(奉り)、又復、嚕賀迦河より儞也誐嚕駄林に至るまで、乃至城中及與郭外は、王、士庶に勅して、預め嚴潔せしめ、丘墟・砂礫は除去せしめ、布くに淨き土を以てし、灑ぐに香水を以てせしめ、其の遠近を量りて、各香爐を置き、佛の經過したまふを俟ちて、香を焚き供養せしめぬ。時に、迦毘羅城の士庶、長者——

【二八】或可爲見父母宗親而行化利。

【二九】鈸字は明本、鼓とするも今ま多本に依りその儘とす。鈸は鐃鈸の事、銅鈸ともいひ、兩片を合して擊ち鳴らすなり。吹貝は法螺貝なり。

淨飯、纔かに見るや、怪みて問うて曰く『烏那曳囊よ、汝出家せるや』と。答へて言く『出家せり』と。王曰く『汝、去る時に當りて、何なる言もて、我れに奏せるや』と。答へて言く『命を奉くること即ち爾れば、本より出家せざりしも、世尊の威神、方便もて開化したまふ、佛の世は値ひ難く、正法は聞き難し、皇子尚ほ至尊を捨てたまふに、小臣何ぞ固執すべき』と。王の言、責むるに似たれども、心、實は瞋らず、又、儀相、常に非るを以て、舊臣を以て見待せず、即ち命じて殿に上らしめ、手を執りて慰勞し、乃ち近臣をして座を敷き、盥淨せしめ、湯藥及果實等を奉上せしめぬ。烏那曳囊、威儀は非凡にして、擧止は則あり。言必ず詳審にして、情極めて和暢なり。王初め烏那曳囊の髮を剃り、服を易へたるを覩たるを以て、言論、之を久しうして、全く佛を問うことを忘れたりしが、此に至るに及びて、復、問うて言く『我が子、一切義成の善相、威儀、亦、此の如き耶』と。答へて言く『我れを以て佛に喩へんは、芥子[26]を將て須彌山に等ぶるが如く、又、牛跡を大海に比し、乃至爝爝の明を彼の日光と同にするが如し』と。王、是の語を聞き、太子を思念し、覺えず悶絶して地上に仆れ、近臣、水を以て面に灑げば方に蘇へり、良久して復、問うらく『我が子來る耶』と。答ふらく『來りたまはむ』と。又曰く『何の時に到來するや』と。『後、七日に當る』と。王即ち勅を下し『內宮を潔淨し、殿宇を嚴飾し、以て世尊及び聖衆の至りたまふに備へよ』と。烏那曳囊大王に白して言く『世尊若し來りたまふも、宮內には住まりたまはず』と。王曰く『何處にか住まることを樂ふや』と。『若し林野に非れば、即ち精舍に住したまふ』と。王曰く『何をか精舍と名くるや』と。烏那曳囊即ち精舍の次第を以て王に白して曰く『十六の殿堂と六十の小堂とにして、世尊は中に居し、聖衆は四布し、諸の受用の具、悉く備足せしむ』と。王、說くを聞き已るや、使を遣して速かに　儞也誐嚕馱林[27]に往かしめ日を剋し、工を併して、給孤精舍の次第の如く建立せしめ、珍寶を倍持して之を嚴飾せしめぬ。

【二六】芥子須彌以下の三譬、甚しき懸隔ありて比し難きに常に用ゐらる。第三の牛跡とは牛の足跡の窪みにたまれる少量の水を言ふ。

【二七】儞也誐嚕馱林　Nyag-rodha°(ārāma)(重出)

の意は云何に(在す)や』と。佛言く『汝を出家せしめんと欲す』と。又曰く『我れ本より、來る時、王と約あり、若し是れ佛に見え(奉ら)ば、定ず須く廻還すべし』と。佛言く『汝違約する勿れ、去る要し、去る可し。但、髮を剃り、衣を染めんも、斯れ亦礙なからむ』と。烏那曳囊言く世尊は菩薩たりし時、尙ほ父母師長の敎授する所に依りたまへり。我れ今、何ぞ敢て敎に依らざらんや。今出家を求めん、願くは佛、濟度したまへ』と。佛、卽ち時に應じて、度して沙門と爲したまひ、佛便ち告げて言く『烏那曳囊よ、汝、今往く可し。若し本國に到り、宮城の門に至るも、便ちに入ることを得ず、但、門外に立ちて、王に報ぜんことを請へ、或は何なる名なりやと問はゞ、釋迦苾芻なりと稱へ、王或は呼召したまはゞ、乃ち前進すべし。又、若し問うて、「汝は實に是れ、釋迦苾芻なりや否や」と言はゞ、卽ち「是れ實なり」と答へ、若し「一切義成も亦、是の如き像なり耶」と問はゞ、答へて「亦、爾なり」と言へ。又「一切義成、來るや否や」と問はゞ、「來らん」と言ひ「當に何の時に在るべきや」と(問はゞ)、便ち「後、七日に當る」と言へ。言ひ訖らば、便ち出でよ、若し留むるも、亦、住することを得ず。王「一切義成若し來らば、宮內に住するや否や」と曰はゞ、答へて「住せず」と言ひ、王「何處に住することを樂ふや」と曰はゞ、答へて「林野に或は精舍に住す」と言へ。若し「何をか精舍と名くるや」と問はゞ、便ち祇樹給孤精舍の如きを具さに以て聞奏す可し』と。

【3烏那曳囊歸城復命】 佛、敎示し已りて、烏那曳囊、行かんと欲するや、佛又、告げて言く『王者の一言は便ち富貴を成げ、天、心念を起せば、一切皆、得らる。一切の聖人も亦復、是の如し』と。佛卽ち神力を烏那曳囊に借したまへば、刹那の頃に於て迦毘羅城に到り、佛の敎へたまふ所の如く、心、正念に住して、宮城の門に到りて、住立して進まず、閽吏に謂うて曰く『汝、奏聞す可し、釋迦苾芻あり、門に詣りて進まず』と。王呼び入れしめぬ。時に烏那曳囊、召を蒙りて卽ち入れば、

國を棄て、家を出でたるは、無上正等正覺を求めむが爲なりき。已に、道を成じて衆生を敎化すと聞き、思念の心、日に時に相ひ續く。今、他人は樂を得れども、唯我のみ苦惱す。譬へば大樹、地に因て生じ、旣に根苗あれども、終には果實を望むが如し。汝の心、已に遂げたれば宜しく往の願を憶ふべし。昔者言へる所は「若し無上菩提の寂靜の道を證せざれば、誓て再び迦毘羅城に入らじ」(とのこと)なりき。大行已に成じぬ。宜しく應に我れ及び眷屬等を愍れむべし』と。烏那曳囊、王より書を受け、速かに舍衞に至り、行いて精舍に詣り、旣に佛の所に至れば、白して言く『世尊、父王淨飯。書を佛に致したまふ』と。言訖りて捧上しぬ。佛乃ち親ら受け、封を開きて披讀したまひ、須臾默然たりき。時に烏那曳囊又、佛に白して言く『今請ひ(奉ら)くは、世尊、迦毘羅城に去りたまへ』と。佛言く『我去らむ』と。烏那曳囊卽ち五體を地に投じ、方に禮敬を伸べ、禮し已りて、再び禮し以て[24]極に至り、又、佛に白して言く『世尊、若し去りたまはゞ、斯に亦た言なし。或は去りたまはずば、必ず堅く去りたまはんことを請はん』と。

〔2 烏那曳囊の出家〕　爾の時、世尊烏那曳囊の爲に伽陀を說きて曰く、

佛眼、淨くして、能く　著する所無きの者を見る、　見ること無邊なれば、往かず　汝、何ぞ能く、將に往かんとはする。　佛眼、見ること無邊なり　貪愛に著せざる者は、　精進力ありて、往くこと無し。　汝、何ぞ能く、將に往かんとはする。　若し人、心亂れざれば、　彼れ亦、降伏さるゝこと無し。　無邊の智は、歩むことなし、　汝、何ぞ能く堅く往かんとはする。　若し人、降伏さるゝ無きことを得る有らば、　彼れ亦、降伏せざるもの有ること無けむ。　佛の[25]進力の如きは、歩み無邊なり。　汝、何なる歩みを以て、能く堅く往かむとはする。

時に烏那曳囊、世尊に白して言く『我れ此の說きたまふ所の偈頌を持ちて、淨飯王に聞さんとす』と。佛、烏那曳囊に告げたまはく『我が意は爾らず』と。(烏那曳囊)又曰く『若し爾らざれば、其

【二四】　三度禮するを儀とすれば、極に至るとは三度目の禮を終ることなり。

【二五】　進力は、精進力なり。

世の人、慧なくして凡聖を辯ぜず、阿羅漢に遇うて輒ち毀辱を起さば、獲る所の罪報〔三〕多羅樹の頭を斷てば、再び生ずるを得ざるが如く、懺謝を勸むと雖も、亦、除滅せず。時に勝軍王、如來の此の四法を說きたまふを聞くことを得て、深心に信受して、言の過を追悔し、卽ち頭面を以て、佛の雙足を禮し、懺謝し、旋繞し、歡喜して退きぬ。

六十四、迦毘羅城歸還

〔一 烏那曳曩の勸請〕爾の時、世尊舍衞國に於て、化利することを畢已りて、彼の迦毘羅城に往かむことを思欲したまひぬ。時に勝軍王、佛の化導を承け（奉り）て、心堅く歸向し、遂に使を發し、書を奉げて淨飯王に上らしぬ『汝の皇太子悉達多、無上の甘露の法味を證得したまひ、世（と）出世間に於て、咸く濟度を蒙る』と。淨飯王聞き已りて遽かに卽ち思慮すらく『我が子、已に正覺を成ぜしことを喜ぶと雖も、今、若し使を遣さば定ず化して出家（せしめむ）』と。手を以て頤を搘へ、再三詳審しぬ。時に大臣の〔二〕烏那曳曩と名くるあり、王の是の如きを見て、問を發して言く『大王、云何が頤を搘へて樂まざる』と。王卽ち報へて言く『我れ樂まざるに非ず、思ふ所の事あり。勝軍大王、書して我れに報ふるあり。悉達太子已に正覺を成じ、舍衞國の給孤精舍に在し、千の弟子あり、皆な阿羅漢なりと。我れ昔、彼の苦行の爲に去りし時、人を發して尋ね求めしむるも、今に至つて廻らず。今、若し使を遣さば、定ず是れ復らざらむ。――云何が是の如きことあるを知る可きや。彼の悉達多、聰明にして、智慧咸悉く人に過ぐれば、凡そ言ふ所の說、誰れか諦信せざらむ。――我れ此の事を以て、之を思慮せり』と。烏那曳曩卽ち王に白して言く『臣、今ま行かんことを請ひ（奉る）。願くは慮を爲したまふ勿れ』と。王曰く『唯だ汝一人は我れ常に念に在り、若し能く爾らば誠に大善と爲す』と。王卽ち親しく手ら書を修りて曰く『汝一切義成は是れ我と親子たり、旣に煩惱を厭ひ、

〔三〕多羅樹は、幹を中斷すれば再び生ぜず。以て譬となす。

〔二〕烏那曳曩（Udāyin）。ロック・ヒル此れ先に龍を殺して Kalodāyin と呼ばるゝに至りし者と同人とす。

精舍に住したまふことを聞き、歡喜し、踊躍して、佛の所に詣り、種々の語を以て、世尊を讃歎し、禮拜し、旋繞して、却きて一面に坐し、是の言を作して曰く『我れ聞き(奉ら)くは、瞿曇沙門は自心の相を知り、阿耨多羅三藐三菩提を證得したまへり。瞿曇沙門は法に依て、喜びて論說すらく、彼の所有る心は、亦、邪と名くるを得、亦、正と名くるを得。亦、善と作すべく、亦、惡と作すべし、而かも此の心相、去來あるなし。知る可からず說く可からずと。是の甚深の法、云何が知る可き』と。佛言く『王の說く所は眞實なり。彼の心は亦た邪と名くることを得、亦、正と名くることを得。而も此の心相は去來あるなし。知る可からず、說く可からず。是れ甚深の法にして、我れ此の心を知り、無上の正等正覺を證得せり』と。王言く『云何が乃ち是の如きの說を作したまふや。彼に、[三]耆舊迦葉・麼蹉梨娛舍利子・散惹曳尾囉致子・阿嚩多計舍劍末羅・迦俱那迦旦也野・襄禰識囉陀倪也帝子あり、彼等も亦、心相を知るも、尙ほ無上正等正覺を證せず。云何が沙門は少年にして始めて新に出家して、無上正等正覺を證せりと言ひたまふや』と。佛言く『大王よ、是の說を作す勿れ。世に四事の輕慢するを得ざるものあり、何者をか四と爲す。一には王子は輕慢するを得ず、二には龍、小なりとも輕慢するを得ず、三には、火、小なりとも輕慢するを得ず、四には僧、小なりとも輕慢するを得ず。何を以ての故に。而も彼の王子は刹利種に生れ、王の相を具足して、大福德あり、後に於て成長すれば、必ず尊位を紹がむ。愚人無智にして、小なれば慢る可しと謂はゞ、彼れ寶位に處きて、罪を獲るも悔いること無からむ。又復、龍は稟性毒惡にして變現、恒ならず、或は大身を隱して小なる形質を作せるに、愚人識らず、輕慢して、惱に觸るれば、須臾にして恚怒し、齧りて傷害を被らむ。又復、火は能く一切を燒き、或は微少と見ゆるも輕慢することを得ず、人若し輕んずれば、後ち必ず蔓延し、聚落、山林皆、悉く燒き壞さむ。又復、僧は清淨にして自ら守る。此れ年少と雖も輕慢するを得ず、道を見、果を證するは老幼に止まるに非ず、亦復、久近、貴賤を擇ばず。

【三】六師外道。第二卷末に註せり。音を寫すこと前と可なりに相違す。

へる者は自ら安く、相ひ憎む者は和解し、禁縛者は解脱し、懐妊者は生むことを得、乃至貧者は豊かなる資財を得、――世尊城に入りたまへるの時、乃ち是の如き百千の吉祥・瑞應・利益の事ありき。

〔8精舎の嘉納〕 長者の宅に至り、佛、大衆と次第に坐したまへば、長者の所有る――若しは親、若しは疎なる――一切の眷屬、皆、來りて、香を焚き、花を散き、禮拜し、供養し、種々なる(こと)畢已るや、給孤長者、爐を執り、香を焚き、佛世尊を引き、精舎に入れ(奉り)、佛は寶座に昇りたまひ、諸の阿羅漢亦、皆な坐に就きぬ。時に給孤長者即ち金の瓶を取り、世尊の網鞔の手に灌ぎ(奉ら)んと欲すれども、瀉水出でざりしかば、長者思惟すらく『我れ昔、不善の業あること莫き耶、乃ち今日に於て、斯の事あるを致せるならむ』と。佛、長者に告げたまはく『不善業なし、但、此の地は汝過去の正等正覺に於て、已に曾つて捨施し、修めて精舎を爲れり。住心を作して、今、能く施すと爲ふ勿れ。若し此れを離るれば、水必ず流れ出でむ』と。長者對へて曰く『佛の說きたまふ所の如し』と。是の語を作し已るや、瓶水聲を出して五の功德を具しぬ。佛の手に灌ぎ已りて『願くは、佛、意に隨ひ[illegible]まへ』と。又復、白して言く『請ふ、爲に名を立てたまへ』と。時に祇陀童子亦、佛會に在り、是の念を作して曰く『佛、若し知りたまはゞ、先づ我が名を說きたまへ』と。佛、思ふ所に應じて、精舎の名を立て、[一九]祇樹給孤獨園と號けぬ。祇陀童子是を聞くことを得已りて、乃ち如來に於て、轉倍、心を發し、歡喜し愛樂し、更に四寶を以て其の門を莊嚴しぬ。祇樹給孤精舎の名は此れに因て立つる所なり。

六十三、勝軍王調伏(不輕慢四法)

爾の時、舍衛國の主、[二〇]勝軍大王、佛の遊化して來り、其の國に入り、給孤長者の請を受けて、

【一九】 祇樹給孤獨園(Jetavana-anāthapiṇḍada(ārāma))。

【二〇】 勝軍大王(Prasenajit)第三卷に音譯して鉢囉洗嚢喩那と言へる王に同じ。

孤の請に赴く可し』と。佛、大衆を將ゐ、前後に圍繞せられて、王舍城を離れ、舍衞國に詣らんとし、左右を瞻顧して、羅漢等に告げ給はく『我が此の眷屬は是れ調伏なり、是れ離欲なり、是れ善解脫なり、是れ阿羅漢なり、是れ佛の眷屬なり。譬へば牛王の衆群に處るが如く、亦、象王の衆象に圍繞せられ、師子王の師子に圍繞せられ、鵝王の鵝衆に圍繞せられ、金翅王の金翅に圍繞せらるるが如く、亦、衆學の師に隨ひ、衆病の醫を求め、衆兵の將を輔け、衆商の主に依るが如く、又、轉輪聖王の千子に圍繞せられ、[一三]持國天王の[一四]樂神に圍繞せられ、增長天王の[一五]鳩盤茶鬼に圍繞せられ、廣目天王の龍衆に圍繞せられ、多聞天王の夜叉に圍繞せられ、日天の千光に圍繞せられ、月天の星宿に圍繞せられ、帝釋の天衆に圍繞せられ、梵王の梵衆に圍繞せらるゝが如く、乃至復[一六]悉帝彌魚の海中に處るが如く、亦、海神の衆水を攝め聚むるが如し。如來の身は三十二相、[一七]八十種好、具足圓滿して、光明莊嚴すること、千の日の光の一切を照耀するが如く、行步巍々として猶ほ寶山の如く、大悲・十力、四無畏等の一切の諸法を具足せり』と。

爾の時、世尊是の如き、殊勝なる威德・解脫・眷屬を成就し、次第に行化して舍衞國に至りたまひぬ。時に給孤長者、其の眷屬と與に諸の侍人を將ゐ、——各〻、幢幡・寶蓋、及び妙なる香花を執持して——舍衞城を出で、遠く世尊及び大聖衆を迎へ、復た國中の長者、士庶の——若しは男、若しは女——百千の人衆あり、亦、來りて迎接し、又、無數の諸天あり、虛空中に在りて、隨喜し、讚歎しぬ。爾の時、世尊城門に入る時、即ち右足を以て其の門閫を蹈みたまへば、是に於て、大地六種に震動し、大光明を放ちて世間を照耀し、天鼓自ら鳴り、衆くの天花——所謂る優鉢羅花・鉢捺摩花・俱母那花・奔拏里迦花乃至[一八]曼陀羅劫樹等の花を——雨らし、又、沈檀及び多摩羅等の衆く妙なる香粖を降らし、又復、舍中の種々の音樂鼓たざるに自ら鳴り、盲者は視ることを得、聾者は聲を聞き、啞者は能く言ひ、完具せざる者は、皆な完具することを得、迷醉者は醒むることを得、毒を食

【一三】持國天以下護世四天王。其の原語は先に出せり。
【一四】樂神は、犍達婆(Gandharva)。なるべし。
【一五】鳩盤茶鬼 (Kumbhaṇḍa)。南方增長天王の領鬼にして人の精氣を食ふと。
【一六】悉帝彌魚は Śiśumāra(鰐魚)なるべし。
【一七】八十種好(Āśity-anvyañjanāni)。八十隨形好ともいひ、三十二相の外に佛に存する美妙なる相好なり。
【一八】前の曼陀羅華に同じ。

一頭を執らしめ、中に於て十六殿堂、六十小堂を分擘せしめたれば、佛僧の住處各〻已に定まり、彼の金の宮殿、寶莊嚴に變じぬ。尊者、通を借して、復た觀見せしむれば、長者歡喜して乃ち自ら歎じて曰く『我が此の所作、當に是の如き福德の利を感ずべし』と。長者自ら當來の福報、重々にして異あるを見て、復、更に事に於て、轉精勤を倍し、殿堂を擘き已り、及つ其の中に一切の受用を備へ、精舍の事畢るや、復、尊者に白すらく『世尊の行住、其の量云何』と。尊者報へて言く『輪王の儀を用ゐたまふ』と。是に於て、長者舍衞國より王舍城に至るまで[二]十俱嚧舍每に、各一宮を造り、以て如來止宿の地に備へ、及つ庫藏を置きて、一切受用したまふ所の物を收貯し[三]、復た主者をして恒に守護せしめ、白檀水を以て日々に灑ぎ淨め、如來を伺候して、其れをして香潔ならしめ、處々是の如く嚴備せしめぬ。事を辦じ畢已りて、卽ち一人を發てゝ、王舍城に詣り、佛及び衆に請はせ〔奉ら〕んとし、去く所の人に謂ふらく『汝、彼に到らば、我が詞を代つて曰へ、給孤長者、雙足を稽首して、世尊に白す。病少きや、惱少きや、起居輕利にして、安樂に行じたまふや否や。立つる所の精舍今、已に嚴備せり。願くは、佛及び衆、愍念して降臨したまへ。當に此の生を盡すまで、僧伽梨・飮食・湯藥幷びに臥具の種々の受用、乏少せしめざるべし。佛、正遍知、願くは虔切を鑒らしたまへ』と。去く人、意を領して、佛の所に到り、長者の言を以て、具さに世尊に白し、復、虔心を倍して告請を伸べ、意を傳ふること已に畢るや、五體を地に著け、佛の雙足を禮し、旋繞すること三匝り、顒ぎて、佛の前に住しぬ。佛、利樂の故に、默然之を許したまへば、去ける人、佛の決定して請に赴きたまはんことを知り、速かに舍衞に還りて、長者に見え、言を白して云く『世尊默然たれば、必ず來り降赴したまはむ』と。長者、歡喜し、是に於て、傘蓋・幢幡・名香・妙花を陳列して、處々に迎接しぬ。

〔7佛の眷屬、威德並びに瑞應〕爾の時、世尊、諸の大衆に告げたまはく『阿羅漢等、共に往いて給

【二】俱嚧舍(Krośa)。里程、由旬の四分の一或は八分の一。
【三】收の字を牧となす版あれども、今ま宋・元・明三本に依り收を採れり。

て、工夫中に於て、便ち首領と爲し、尊者、後に於て、根の熟せるを觀知して、彼の役所に來り、一樹の下に就き、安詳として坐しぬ。時に彼の外道初めて便を得たりと爲し、各〻心喜び、來りて親近せんとすれども、彼の首領、杖を執りて驅策し、前進すること能はず、役既に疲苦し、乃ち聲を發して言く『聖なる大尊者、我れを救ひたまへ、我れを救ひたまへ』と。舍利弗曰く『汝等の疲勞、自ら歇息す可し』と。諸の外道〔九〕言く『此の大尊者、我が殺心を發して其の命を謀らむと欲せる(を知り)、今亦、我れを知りて止息せしむ。實に自ら慚懼して、以て再言する無し』と。時に、舍利弗、其の追悔せるを察し、又た根性の成熟せる時分なるを知り、乃ち呼びて、前に近づけ、與に法を說き、卽ち爲に苦・集・滅・道の四聖諦の法を演說しぬ。外道聞き已りて、所有る身見、〔一〇〕二十山峰の如く、金剛の智を以て悉く破れて餘すこと無く、時に應じて、須陀洹果を獲得し、復言く『尊者、正法に於て出家して僧と爲らんと欲す』と。舍利弗攝受して度して沙門と爲せば、漸々に進修して、梵行を精持し、輪廻を見て、其の究竟に趣き、煩惱を斷ち盡し、阿羅漢果を證し、其の心は平等にして、虛空の如く、彼の金土の兩物を觀ること異らず、世の利を棄捨して、大清涼を得、當に帝釋諸天の一切の供養を受くべし。

〔6 精舍の營構成る〕 爾の時、舍利弗、外道を化し已りて、卽ち給孤長者と共に、一の繩を持ちて各其の頭を執り、精舍を量度して、大界至を都め、界至已に定まるや、給孤長者の感ずる所の果報、兜率天に於て金の宮殿を現はせども、給孤長者聖意に達せず、舍利弗に謂うて曰く『今、此の精舍は獨り只に諸の阿羅漢の爲のみならず、我れ、如來、應・正等覺の爲にしたまふなり』と。舍利弗曰く『我れ本より作す所、正に如來及び阿羅漢の爲なり』と。又長者に謂うて曰く『汝の此の地を封けること、天の報已に現れたり』と。卽ち天眼を借して其を自ら見しめたれば、長者見已りて驚喜すること量無く、是に於て復た上上品の心を發しぬ。舍利弗又自ら繩の一頭を持ち、長者をして還

【九】 言の一字、明本のみあれども、意に依り、今ま之を採れり。

【一〇】 二十山峰。(Viṃśati-śikhara-samudgataḥ satkāya-dṛṣṭiśailaḥ)。二十峰高出薩迦耶見山の事なり(名義集) satkāya-dṛṣṭi 卽ち薩迦耶見とは外道の我ありと執する邪見をいふ。その說を固執して動かざること山嶽の如ければ山に譬へたるなり。而して此れに二十種の見あれども今ま擧げず。(荻原雲來博士梵語辭典、榊亮三郎博士纂譯名義集に名目を擧げたり)

羅刹怖畏の難を脫るゝことを得、又復、本修習する所は、是れ正行に非ざりしことを覺知し、舍利弗に告げて曰く『願くは尊者の正法に於て、出家して沙門と爲らむ。尊者、大慈もて哀愍して聽許したまへ』と。舍利弗卽ち與に攝受し、度して沙門と爲したれば、後に梵行を修し、煩惱を斷ち盡し、三界に居ると雖も、貪毒を離れ、其の心平等にして、猶、虛空の如く、金を觀ること土の如くして別異なかりき。後に於て修習して三明六通を得、阿羅漢の果を證し、(五)乃ち帝釋諸天の來りて供養するにも得へたり。

時に、大衆、驚き怪しみ、目、注まり、心、凝り、異口同聲に舍利弗を讚ふらく『是の論議師、人の能く敵するものなく、猶、牛王の、衆群に處り、一切瞻迎して厭足あること無きが如し』と。時に舍利弗、衆の心意及び其の種性を知り・卽ち爲に・苦・集・滅・道の四聖諦の法を廣說したれば、是の會の大衆、三歸心を發す者あり、(六)聲聞菩提の心を發す者あり、(七)辟支菩提の心を發す者あり、無上菩提の心を發す者あり、亦た出家して(八)(イ)須陀洹果を證得するあり、(ロ)斯陀含果を證するあり、(ハ)阿那含果を證するあり、(ニ)阿羅漢果を證するありき。論議畢已りて、會衆皆散りたるに、諸の外道中、執性なる者あり、其の論義勝たず、屈伏せむことを耻ぢ、潜かに共に計議して、不軌を謀らむと欲し『長者に投じ、請うて工人と作る可し。或は便の時に彼の尊者を殺すことを得む』と。計を設くること已に定まり、長者に白して言く『汝已に我が一切の利養を斷ちたれば、今は歸趣する所無し。仰ぎて願はくは、相愍れみ、收めて工人と作せ。或は卑心を察しなば、且く鄕土に住せん。或は從允せざれば、各ゝ他邦に去らん』と。哀告すること再三にして、傍ら聽くに忍びず。長者是に於て具さに彼の意を述べ、舍利弗に白すらく『仁、思察したまふべし。理に於て如何』と。舍利弗卽ち三昧に入り、彼の根緣、道を證するに遙かに非るを觀じ、遽かに云く『何を患ふや』と。長者卽ち退きて其の姓名を錄し、遣して工夫と作らしめ、例めて其の直を與ふ。時に舍利弗、一人を化出し

【五】乃得帝釋諸天而來供養。

【六】以下次第に三菩提心を發す者とは各ゝ聲聞・緣覺・佛たらんとの志を立つるの意なり。

【七】辟支菩提(Pratyekabodhi)。辟支は前の辟支迦に同じ。

【八】聲聞について四果の別あり須陀洹以下順序に別譯を添へて示さん。
(イ)預流果 (Srotapanna-phala)。
(ロ)一來果 (Sakṛdagāmi-phala)。
(ハ)不還果(Anāgāmi-phala)。
(ニ)阿羅漢果 (Arhat-phala)。

七日に當る』と。『至る時、相ひ報へよ、必ず來りて汝を助けむ』と。然れども婆羅門、其の[二]墮負せんことを憂ひ、心甚だ煩惱し、信を諸處に發して朋黨に求告しぬ。七日滿ち已りて、給孤長者 寬靜の處に就き、權りに論場を立て、卽ち舍利弗尊者の爲には師子座を排き、彼の外道の爲には、對して高座を排き、座を列ぬること旣に畢るや、遠近 咸く集まり、若しは公、若しは私、少長に迨及び百千の人ありて、彼の論處に集まり、亦、別の國の外道婆羅門ありて亦た會所に來れり。給孤長者、手に香爐を執り、焚くに妙香を以てし、眷屬等の同に擁從を爲すものと與に、舍利弗を迎へて師子座に上せ、尊者の坐定るや、一切、瞻迎して其の威容を覩、悉く皆讚歎しぬ。時に彼の外道、衆の與に相隨はれ、亦、高座に昇り、安坐すること已に定れば、尊者告げて言く『汝、何をか作さんと欲するや』と。外道言く『我れ神通を現はさむ。我、旣に現はし已らば、汝當に亦、現はすべし』と。尊者報へて言く『我が作す所は、天上人間も作す能はざる所なり、云何が汝、我と同じく作さんと言ふや』と。尊者又言く『赤眼婆羅門よ、汝の作す所は、我れ悉く能く破らん』と。赤眼婆羅門、花樹の實の如く、芳葩、豔冶にして衆を動かすものを化作せば、尊者神力もて、微少の風を出し、其の化の根苗を異處に吹き散らし、《外道》又一池の、水滿ちて澄湛し、蓮花遍く發きて、人、異常を讚ふるものを化すれば、尊者は、大象の膚體、端正なるを化出して、池に入り蹂踐し、須臾にして狼藉せしむ、外道又、一龍の、七首あり、鱗を張り、目を努らし、惡を奮うて空を拏むものを化すれば、尊者は[三]金翅王を化し、空より飛び下りて龍の首に坐せしむるに、龍自ら降伏しぬ。時に彼の外道乃ち最後に於て、[四]羅刹の身を化し、立ちて衆の前に在らしむるに、醜惡なること異常にして、人見て恐怖せり。尊者呪を持ち神力もて之を縛るに、羅刹、苦惱して、飜りて瞋怒を生じたれば、外道、驚怖して身毛皆竪ち、自らを惡みて傷けんことを恐れ、發言して救ひを求め、尊者に告げて曰く『我れ今歸依せむ、願くは救護を賜へ』と。尊者呪を解けば、羅刹の怒り息みぬ。時に赤眼婆羅門、

【二】墮負(Nigraha)は、印度論理學の用語にして議論に敗るゝことを言ふ。

【三】金翅王(Garuḍa-rājan)

【四】羅刹(Rākṣasa)。惡鬼の總名にして人を食ひ暴惡にして怖るべしと。

巻の第十二

六十二、給孤獨長者祇園精舍奉獻(下)

〔5舍利弗、外道の調伏〕 爾の時、世尊、寒林に在し、給孤長者の請を受けたまひて、預め、舍衞國の中、諸の外道の各ゝ苦行し、又復、聰明にして、修習を勤むと雖も、解脱を得ざるものあり、根縁已に受化するに熟せるを知りたまひぬ。是の時、世尊、又、誰か彼に往く可きやを觀じ『唯だ舍利弗は乃ち宿因あれば、此れ若し先に行かば、必ず大利有らむ』と。是に於て、世尊、舍利弗を喚び、先に彼の舍衞の大城に往き、給孤獨の精舍を建立するを助けしめたまへば、尊者命を受けて舍衞城に往き、長者の所に詣り、事皆、參議せり。給孤長者、外道の意を承け、來りて尊者に白すらく『彼れ論議せんと欲す、理に於て如何』と。又云く『此の國の人、素より未だ佛を知らず、法の勝劣に於て、宜しく共れ宣揚したまふべし』と。舍利弗曰く『善き哉、善き哉、斯の言、誠に諦かなり』と。尊者是に於て、定に入り、諸の外道の輩、及び舍衞國の人、根縁成熟するに幾の時分有りやを觀察して、彼の人衆、唯七日を餘すことを見て、尊者定より出で、長者に告げて曰く『請ふ、外道に語れ。七日を過ぎ已らば、來りて論議すべし。』と長者具さに告ぐれば、外道思惟すらく『七日の限を立つるは、斯れに二事あり、一には已れ勝つに非ることを知り、計を設けて私かに逃げん。二には或は本の朋に、來りて、共に商攉せんことを求めん』と。是の如く思ひ已り『我れ今、云何が朋侶を求めざらんや』と、是に由つて、諸處に親しく自ら訪尋するに、乃ち一人の〔一〕赤眼婆羅門と名くるを得て、之に告げて曰く『彼の瞿曇沙門に、大弟子あり、我れに論義を索む。汝、婆羅門、應に宜しく相助くべし。何を以ての故に、若し自ら勝つことを得ば、利養猶ほ存せんも、彼れ或は勝たん時、我等何にか往かん』。彼即ち問うて言く『何の時に論義するや』と。報へて曰く『後ち

【一】 赤眼婆羅門(Raktaksa) ロック・ヒル、彼を外道(tirthika)の首領なりといふ。赤眼は、raktaksaの意譯なり。

長者卽ち怒り、外道に報へて曰く『此の舍衞城は汝の所有に非ず、何ぞ汝の事に關はらん』と。外道聞き已りて、心に從はざるを知り、復た王に詣りしも、王も亦、允さゞりき。諸の外道の輩、面慚ぢて色無く、心、煩惱を極め、復、長者に詣りて、告言して曰く『我れ先に說く所、園苑の爲なるにあらず、但だ彼の衆、我と同じく修するに非るを以てなり。長者今日、若し是れ堅く執すれば、斯に報ふる所あり、請ふ、相違せざれ。我れ聞くならく、瞿曇に大弟子ありと、先に已に此に到らば、與に論議して卽ち勝劣を辯ずべし。如し彼れ勝つことを得ば、精舍、爲る可し。若し其れ勝たざれば、何ぞ迎請するを用ゐん。我が此の所說、君の見ること如何』と。長者告げて言く『此の說、甚だ善し、[三〇]若し勝劣を定むれば、相依るを得、淸濁要かに分れ眞僞斯に辯ずるに足らむ』と。

衆許摩訶帝經卷第十一

【三〇】若定勝劣足得相依、淸濁要分眞僞斯辯。

遙かに斯の事を知り、『佛今ま世に出でたまひて、舍衞城中の給孤長者、祇陀の園を買ひ、精舍を造立せんとして、兩人商議し、正を市官に取めんとす。我れ今ま身を變へ、與に其の事を成げむ』とて、天王、身を變へて市官と作り已り、市肆[二九]に來りて、顒いで給孤と童子の至るを望みぬ。二人至り已りて、給孤先づ言く『我れ彼の園を買ひ、精舍を造らむと欲せるに、黃金を以て布き、其の地に遍ねからしめよ、若し爾らば卽ち相ひ與ふ可しと。今、來りて正を取む、此の價は云何なりや』と。市官言うて曰く『二人の心、可否を得たるや、未だなりや』と。對へて言く『已に定まりぬ』と。市官言うて曰く『善き哉、善き哉、童子は金を收め、長者は園を得よ』と。童子默然として更に違諍すること無し。長者、卽日速かに車乘象馬の類、乃至、僮僕を以て、黃金を搬運し、處々に布き訖り、唯前面、少許に、未だ周足せざれば、長者、何れの藏の金を取りて、此の地に遍たす可きやを籌量しぬ。是の如きの際に童子告げて言く『汝已に意を廻さば、便ち金を收むべし』と。長者報へて言く『我が意、廻らず、何れの藏の金もて、此の地に遍つ可きかを思ひ、斯の事を以ての故に、籌量すること少時なりしなり』と。童子思惟すらく『奇しき哉、長者能く是の如き大財を捨て、佛及び僧の爲に精舍を造立せんとす』と。又復、思惟すらく『我れ曾つて說けるを聞けり。若し正覺、世間に出でたまふに非れば、一切の衆生、正法を聞かざらむと。斯に施を助く可し。理まば必ず相容れん』と。卽ち長者に謂ふ『更に金を取す勿れ、此の地を廻し、我れ施して門を作らんと欲す。美は共に成す可し、功亦、圓滿せん』と。長者報へて言く『我れ金、無きには非れども、童子若し爾らば、誠に甚善と爲す』と。

【4 外道の惑亂】 金を布くこと纔かに畢るや、方に工を命ぜんと欲せるに、外道悉く知り、速かに來りて惑亂し、長者に謂うて曰く『瞿曇沙門、今、摩竭陀國の王舍城の居に在り、此の舍衞城は、地貴く名高くして、彼の住する所に非ざれば、精舍を立つる勿れ、迎請することを得る勿れ』と。

【二九】市肆とは、茲では市官の役所のこと。

【3 祇園寶買の由來】 是に於て、長者、王舍城に入りて營搆の事畢り、將に家に還らんと欲して、再び寒林に詣り、佛及び衆に請ひ『精舍を慮りたまふ勿れ、願くは早く、降を垂れたまはんことを』と。言ひ已りて、家に還り、此の日より後、一切皆な停めて、舍衞城の周遍、內外に於て、殊勝清淨の地を求覓し、精舍を建てゝ、佛及び僧を安かんと欲して（思念すらく）、『唯だ[二五]祇陀童子の園苑ありて最も勝れたり。何を以ての故に。此の童子の園は其の地、寬廣にして諸の穢惡なし、[二六]竹樹蓊欝として、泉池、清淨に、寒風暑氣、倶に侵すこと能はず、又、蚊虻、含毒の蟲なくして、唯吉祥なる[二七]飛走の類あり、又復、王城に遠からず、近からざれば、法を求むる人、此に到ること能はざるに非ず。若し精舍を建立すれば、斯れを最も勝れたりと爲む』と。思念已に竟りて、即ち園主祇陀童子に詣り、之に告げて曰く『童子よ、我れを怪しみたまふ勿れ、勝れたる事あり、以て上聞せんと欲す。童子よ、容す可くば、方に敢へて陳說せん』と。童子告げて言く『事あらば、說く可し』と。長者起立して、童子に謂うて言く『玆の園を買はんと欲す。當に世尊及び千の聖衆の爲に、精舍を造立して安住したまはんことを請ふべし。尊、若し容允したまはゞ、價は即ち言を禀けん』と。祇陀童子、長者に告げて曰く『一切は得べけんも、唯だ園のみは言ふ勿れ』と。長者又曰く、『我れ佛の言ふを聞くに、一切は無常にして、主ある者無しと。堅からざるの法を以て、宜しく堅牢に易ふべし』と。童子報へて言く『我れの知る所に非ず、復、更に說く勿れ』と。長者又、曰く『佛は値ひ難く、園は即ち求め易し。今、或は遲疑したまはんか、後に施さんも及ぶこと無けむ』と。祇陀童子、此の說を聞くと雖も、心、未だ能く捨てず、乃ち要言を以て、彼の長者を阨さんとし『君、能く金を以て布き、其の地に滿せば、我れ即ち汝に與へ、自らの爲す所に任さむ』と。長者審かに知り、未だ誠信ならざるを恐れ、報へて言うて曰く『童子よ、若し爾らば[二八]市官に聞き、當に兩情の執をして反覆すること無からしむ可し』と。童子俛仰して、共に市官に聞かんとす。時に四天王

【二五】祇陀(Jeta)。

【二六】竹は、宋・元・明三本、之を行とすれども今は高麗本等に依る。

【二七】飛走の類。飛禽走獸なり。

【二八】市官とは、城官(Nagarapati)或は邑官(Gramapati)と町の大小に依つて名けらるるもの、町の長にして裁判事務をも司りしなり。

得、安睡を得む。

爾の時、世尊、伽陀を說き已りて、給孤長者と同に林の中に入り、佛、本の座に還りたまへば、長者卽ち前みて、佛の雙足を禮し、一面に於て坐し、法を聞かむと樂欲すれば、佛は乃ち勸發して、心をして歡喜せしめたまひぬ。爾の時、世尊は長者に告げて言く『布施・持戒は天上に生るゝことを得、五欲自在なりと雖も、究竟たるに非ず。輪廻を免れんと欲すれば、當に煩惱を斷ち、善惡の法に於て、廣く分別を爲すべし』と。是の時、長者、是の法を聞くことを得て、宿善の力を以て、深心に思惟し、蓋障卽ち除こりて、心喜ぶこと量なかりければ、佛、是れを知り已りて、卽ち爲に苦・集・滅・道の四聖諦の法を廣說したまひぬ。是の時、長者座を起たずして、四諦の理を證すること、潔白の衣の其の色を染め易く、彼の染むる所に隨て、皆な上妙と成るが如く、長者、法の知見を得て、永く疑惑を斷ち、佛・法・僧に於て、深信、堅固なりき。卽ち座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、合掌し頂禮して白して言く『世尊、我れ今、佛、法、及び苾芻衆に歸依し(奉り)、近事戒を持ちて、永く殺生せざらむ』と。

爾の時。世尊、長者に問ひて言く『汝何なる名字なりや』と。長者答へて曰く『我れ國の中に於て、少しく資產あり、或は是の貧匱孤獨の人、來りて丐ひ求めば、我れ飲食及び彼の資具を施したれば、國の人、我れを名けて給孤獨と爲す』と。『汝の國は何なる名なりや』と。對へて曰く『舍衞〔四〕なり。願くは佛及び衆、我が國に來降したまへ。當に衣服・飲食・臥具・湯藥の一切の受用を以て、畢生、施を奉げむ』と。佛言く『長者よ、我れ、苾芻と數、千人を踰えたり。彼に精舍なければ、何を以てか、安住せむ』と。長者對へて曰く『佛若し降臨したまはゞ、速かに當に建立すべし。唯願くは、大慈もて我が請に違ひたまはざれ』と。佛卽ち默然たり。給孤長者、佛の默然たるを見て、已に請を受けたまへるを知りて、歡喜し踊躍し、頭面に足を禮し、旋繞して、退きぬ。

【四】　舍衞(Śrāvastī)(重出)。

き――衆生の見む者をして愛樂せしむべけんも――斯る布施を以てするも、佛に向ひて前進する一歩の十六分の一分の功德だに如かず』と。又復、告げて言く『長者よ、但去きて退心を得ること勿れ。唯吉祥あり惱亂の事なからむ。意に於て云何。譬へば一百の金象の衆寶もて莊嚴せるが如き――斯る布施を以てするも、佛に向て前進する一歩の十六分の一分の功德だに如かず。長者よ、乃至百の童女の眞珠瓔珞の衆寶を以て身を嚴るが如き――斯る布施を以てするも、亦復、佛に向ふ一歩の十六分の一分だに及ばず』と。時に彼の天人卽ち身光を發して、途路を照耀したれば、彼の門の所より直ちに寒林に至ること、月の盛明の如きに等しくして異あることなし。給孤長者乃ち天に問うて曰く『是れ何なる聖賢にして、能く斯の事を作したまふや』と。天人告げて曰く『我れは昔、曾つて[三]舍利子の母たり、捺誐囉也と名け、命終の後、四天王界に生れ、今、摩度娑健駄摩拏嚩迦と名け、此の門を見守れり。願くは疑慮する勿れ。長者去く可し、必ず吉祥を獲む』と。給孤長者、是の語を聞き已りて讃へて言く『善き哉。斯る事あるは稀なり、我れ今定ず去かば、佛を見(奉ら)むこと疑なけむ』と。給孤長者又復、思惟すらく『若し正覺世間に出でたまふことなければ、最上の妙法を聞き得るの由なけむ』と。是に於て長者、其の光明を得て障礙する所なく、直ちに寒林の世尊の住處に至りぬ。

【2長者の入信】 爾の時、世尊寒林の外に在して經行したまひぬ。時に長者、佛の威德、相好、常の人に異るを見(奉り)て、卽便ち合掌し、問を發して言く『是れ世尊なりや否や』と。佛答へて言く『是り』と。長者、身心歡喜すること量なく、又復、問うて言く、『世に何人ありて安睡を得るや』と。佛、伽陀を說きて之に答へて曰く

若し人、心寂靜ならば、　一切、安睡を得む。　若し人、染欲に繋がるれば、　熱惱の心、止まざらむ　染欲、熱惱、除これば、　解脫して繋がるゝ所無けむ。　心意、調伏し已らば、　息を

【三】 舍利子(Sāriputra)。普通全體を意譯して後に出づるが如く舍利弗といひ、目犍連と並びて佛の二大弟子なり。捺誐囉也(母の名)はロック・ヒル Sāradvatī と出すのみにして、四天王界誕生後の名は出さず。

其の長者の家中、老幼皆、寢寐せずして、飲食珍饌の類を辦造するを見て、怪しみて問うて曰く『長者の家、老幼寐らずして飲食を辦造するは當に何の用ゐる所なるべき。王を請かんが爲なり耶、大臣を請かんが爲なりや、姻親の爲に聚會あること莫きや』と。長者報へて言く『我れ王及び大臣等を請かず、亦姻親聚會の事も無し、今、佛あり世間に出で、一千の聖衆を將ゐて此の國に遊化したまひ、王及び眷屬、大臣士庶悉く皆、歸向して、次第に供養し、我れも彼の佛及與聖衆の爲に來晨齋を設けむが爲なり。是の(故に)寢寐せず』と。給孤長者、此の語を聞き已りて異を歎ずること非常にして、又復、問うて言く『云何が佛と名く』と。對へて曰く『彼の釋族の中、王、淨飯あり、一の童子を生み悉達多と號け、輪王の相を具するも棄捨して出家し、苦行修習して、阿耨多羅三藐三菩提を證得したまへり。斯れ即ち佛なり』と。又復、問うて言く『云何が聖衆なる』と。對へて曰く『[二二]刹利族、或は婆羅門族乃至毘舍、輸陀あり、是の如きの族の善男子の輩、佛に投じて出家し、鬚髮を剃除し、袈裟衣を被、正信もて修行し、法を聞きて悟解し、悉く皆、阿羅漢道を證得せり。此れは是れ佛に隨ふ一千の聖衆たり。我れ供養する所は、正に此れが爲なり』と。給孤長者、是の說を聞き已るや、身毛皆豎ち、歡喜し踊躍して、又復、問うて言く『如し我は、云何が彼の佛及與聖衆を見(奉)るを得む』と。對へて曰く『明旦咸く我が舍に來り食を受けたまはむ』と。給孤長者、是の語を聞くと雖も、心狂へる若きもの有り、天曉を待たず佛の所に往かむと欲しぬ。時方に半夜、月の明朗なるに値ひ、卽便ち門を出で、行いて寒林に詣らんとし、未だ中途に至らずして月忽ちに雲に蔽はれ、又、一門に至れば、敢へて前進せず、給孤長者、天、陰黑なるを以て、便ち怕怖を生じ、佇立して思量すらく『[二三]非人の類、來りて我れを惱ますこと無きを得ん耶』と。心、退還せんと欲し、足、前進せざりき。時に天人あり聲を發して告げて曰く『長者よ、但去きて、退心を得ること勿れ。唯吉祥あり、定ず惱亂なからむ。意に於て云何。譬へば百車、百馬の種々に莊嚴せるが如

【二二】 此の四姓、用ゐるに異字を以てするも前と同じ。

【二三】 非人の類。Amanuṣa. の直譯なるべし。故に非人は超人間的の力あるものゝ意に解すべし。

衆、我が宮內に於て、來晨、食を受けたまへ。唯だ願くは慈悲もて哀愍し聽許したまへ』と。佛卽ち默然たり。爾の時、大王、佛の默然たるを見、已に請を受けたまへるを知り、歡喜し踊躍し、禮拜して歸り、卽ち是の夜に於て、疾速に種々の飲食及與香花を備辦し、皆常に倍して美妙清淨ならしめ、復、勅して宮城の內外乃至四衢道巷の中、悉く嚴潔ならしめ、纔かに明旦に至るや、卽ちに使人を遣はして世尊に白さしむ『[一八]飯食已に辦はりぬ。請ふ、佛、降臨したまへ』と。是に於て世尊、千阿羅漢の、衣を著け、鉢を持ちたるに前後圍繞せられて、行いて王宮に詣りたまへば、王、門首に於て爐を執り、香を焚き、世尊の至るを待ち(奉り)、佛既に到り已るや、迎へ入れて、座に就かしめ(奉り)、諸の聖衆等も亦、各坐に就きぬ。王、眷屬と瞻禮し畢已り、飲食を奉上し、香を焚き花を散き歡喜して供養しぬ。佛、聖衆と食し畢りて手を澡ぎたまふに、王及び眷屬法を聽かんことを樂欲せしかば、佛、爲に法を說きたまひ、各〻、諦かに聽き、歡喜して信受しぬ。王復、座を離れ、合掌して佛に白すらく『我れ今、迦蘭那迦王林を以て佛の精舍を作り(奉らん)』と欲す。願くは佛、納受したまへ』と。世尊默然たり、王、佛の許したまへるを知り、卽ち金の瓶を取りて佛の手に灌ぎ、『施を奉げ畢已んぬ、願くは佛、意に隨ひたまへ』と、卽ち世尊の爲に廣く嚴飾を作し、佛、聖衆と意に隨つて住しぬ。迦蘭那迦竹林精舍は玆に因りて立ちたる所なり。

六十一、給孤獨長者祇園精舍奉献(上)

【一長者の佛所參詣】 爾の時、世尊、後一時に於て利樂せむ爲の故に、諸の聖衆と迦蘭那迦竹林精舍を離れて、[一九]寒林中に往いて經行し宴坐しぬ。時に王舍城に一の長者あり、佛及び衆に來晨、供養せむことを請ひ、乃ち是の夜に於て、諸の眷屬及び僮僕、侍人と共に飲食香花等の事を辦ひぬ。時に[二〇]給孤獨長者、事あるに因つての故に、王舍城に到り、彼の家を經過し、遇、夜、止宿するに、

【一八】飯食とあれども恐らく飲食なるべし。他は凡て飲食とあればなり。

【一九】寒林(Sītavana)。前に尸陀林或は尸林と譯せる林と同じ。

【二〇】給孤獨長者 (Anāthapiṇḍada)(ロック・ヒル)一名Sudatta(善施)と言へりと。

不虞を防げり。時に飛禽あり[15]迦蘭那迦と名け、翺翔を飲啄して常に園內に在り、忽ち蛇の出づるを見て相呼び鳴き噪ぎしかば、執劍の內侍、蛇の出づるを見已るや卽ちに其の命を斷てり。禽衆極めて噪ぎければ、王亦、驚き寤め、執劍の者に問ふ『何に緣りて喧擾なる』と。執劍の者曰く『適毒蛇あり、來りて王を螫さんと欲し、迦蘭那迦、相呼びて驚き噪ぎしかば、我れ旣に目り見て、已に蛇の命を斷ちたり』と。王、是の語を聞き已るや、心驚き、毛豎ち、太子及び諸の大臣に詔して共に斯の事を議らしめぬ『古の[16]刹帝利の灌頂大王、或は身命に於て危害を致さんと欲するに、能く忠の力もて其の難を濟ふ者あらば、當に何をか賞賜すべき』と。大臣對へて曰く『能く身命に於て其の難を脫れしめし者は、半國を分ち以て其の功を賞す可し』と。王乃ち允從し『其の半國を分つて迦蘭那迦に與へ、用て其の功を賞せよ』と。大臣對へて曰く『彼の迦蘭那迦は飛禽の類なれば、國の境土を與ふるも、當に何の用ゐる所かあるべき』と。王、大臣に謂く『此の事如何』と。大臣對へて曰く『窠巢を就り、多く竹木を植ゑて、其れをして性を遂げしむ可し、斯の如ければ、可からむも、餘は爲すこと能はず』と。王聞きて曰く『善し』と。遂に其の奏するに從ひ、乃ち園外に於て別に一處を擇び廣く竹樹を種ゑて迦蘭那迦を安き、人をして之を守り、傷害することを得ざらしめぬ。王に親舅あり、本より仙道に事へ、常に淨處を求めて、其の修習を進めたれば、王[17]迦蘭那迦竹林を以て諸の雜穢なからしめ、權りに安處せしめたり。世尊、諸の苾芻を將ゐて城に近き樹下の露地に宴息したまふを見るに及びて、彼を捨てゝ、精舍を造立せんと思欲し、王乃ち駕を嚴り、自ら佛の所に詣り、雙足を禮し已り、却きて一面に住しぬ。

爾の時、世尊、王の爲に法を說きたまひ、種々の方便を以て、化して歡喜せしめ、復、精進して、當に最上の寂靜の快樂を求むべきことを勸めたまへり。時に王、法を聞き歡喜し頂受し、卽ち座より起ちて偏に右肩を袒ぎ、合掌し頂禮して白して言く『世尊、我れ今請ひ(奉ら)くは、佛及び諸の聖

【一五】迦蘭那迦(Kalaṇḍaka)。又た迦蘭駄と譯し又た好聲鳥と意譯す、形、鵲に似て、多く竹林に群棲すと。

【一六】刹帝利の灌頂大王(Rājā kṣatriyo mūrdhābhi-ṣiktaḥ)(nom. 名義集)。此の Mūrdha-abhiṣikta は灌頂と譯せる梵語であるが印度の王は此の灌頂の儀式に依つて廣く王たるを告示するなり。密教に於て灌頂を行ふの起原は茲にありて存す。

【一七】迦蘭那迦竹林(Kalaṇḍakanivāsa Veluvana)ロツク・ヒルに依る、Lalita vistara 梵本は nivāsa を nivāpa とす。

曩提識耶の化し易かりしは、亦、往昔檀施の時、心、本より清淨にして始終異ること無かりしに由る、諸の苾芻よ、是の故に烏嚕尾螺及び曩提、識耶、復た兄弟と爲り、迦葉の姓を得、又、我に値うて法を開き道を證したり。此の往昔の事は、汝等、諦かに信ぜよ』と。

六十、民彌王、竹林精舍奉獻

爾の時、世尊是の迦葉の往昔の事を說き已るや、枚林塔を離れて、[一一]王舍城に遠からざる一樹の下に於て、千苾芻衆の與に圍繞せられて住したまひぬ。時に民彌娑囉王、佛近くに住したまふを以て、[一二]精舍を立て佛及び僧を安き、久しく住止せしめむと欲したり。民彌沙囉王、太子たりし時、常に城外に出でゝ遊戲を爲せしが、城を去ること至て近くに一の園苑あり、林樹、蓊欝として、泉池清淨たり、[一三]四序を復すと雖も花竹、恒に茂れば、太子愛樂して求め買はむと欲すれども、園主の長者、自ら耆耄にして兼ねて亦、家富めるを恃み、太子逼取するも終に允從せず、言を出すこと悖慢にして、太子に聞えぬ『我れ寧ろ此の國を離るとも、此の園は捨てず』と。太子聞き已り、左右に謂うて曰く『今此の耆耄の言甚だ不遜なり、我れ若し位を紹がば、忘るゝことを得る無けむ』と。後に於て、父王[一四]摩賀鉢納摩崩じ已り、卽ち灌頂して寶號を傳へぬ。民彌沙囉王既に其の位を紹ぐや、卽ち前の事を憶うて令を所司に下し、使を發して奪ひ取らしめたり。時に彼の長者速かに心病を得て便ち無常に趣き、命終の後、其の憤怨を以て毒惡を積聚し、乃ち園內に於て、蛇趣の中に生れ、毒を含み隙を伺うて、前の恨を酬ひんと欲せり。後、一日に於て、王、春節なるに因りて、諸の嬪綵を將ゐて、彼の園に遊幸し、盡く歡娯を極め以て其の意を肆にしたれば、王、方に疲困して園中に寢息しぬ。時に彼の毒蛇、其の便を得たりと謂ひ、疾かに窟穴を出で、來りて王を螫さむと欲せり。時に諸の嬪嬙、散れ行いて遊冶し、王には親近の內侍一人あり、劍を執りて侍衞し其の

【一一】王舍城(Rājagṛha)(重出)。

【一二】精舍(Vihāra)毘訶羅と譯し又た僧房・寺・住處等と譯す。佛及び聖衆の居住處なり。

【一三】四序は、春・夏・秋・冬の四季。

【一四】摩賀鉢納摩(Mahāpadma)。(重出)第三卷に摩訶鉢那王とあるに同じ。

將に問を發せむと欲せば、佛卽ち告げて言く『因を修めて果を感ずるは定ず虛爾ならず。諸の苾芻よ、過去の劫中、人壽二萬歲の時、佛の世に出でたまふあり、名けて迦葉如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ひ、彼の佛亦、波羅奈國の鹿野苑の中に在して、大なる佛事を作し、化利し畢已りて、卽ち涅槃に入りたまひぬ。時に世に王あり羯里計と名け、常に彼の佛に於て恭敬し供養し、佛既に入滅したまふや、王、種々の香木を以て世尊を荼毘し[七](奉り、)復た乳汁を以て灑ぎて餘火を滅し、卽ち舍利[八]を收めて四寶の瓶に貯へ、又た勝地を選びて、大なる寶塔を起て——其の塔高く聳え、量一由旬なり——王及び人民常に供養を作せり。時に彼の國の中、一の長者あり、家中の巨富、毘沙門天に等しく、眷屬・衆多にして、自在に快樂し、先に別族の長者と朋友と爲り、常に佛の塔に於て、廣く供養を興せるが、後に其の門を娶り以て姻戚と爲り、歲月縣久にして乃ち三子を生み、後に於て長者年耄いて疾あり、藥を服するも差えず漸々に羸困し、乃ち無常に趣きければ、三子、禮を以て尸林[九]に葬りぬ。是の時、三子、訓誨を思憶して、旦暮啼泣し、又、家の富まんことを念じて、共に追福を議りたるに、長兄慳悋にして先に未だ善を知らざりければ、忽ち施さんと欲すと聞き、初め卽ち遲疑せるも、孝、心に存したるを以て、尋いで便ち允可し、長兄言うて曰く「布施の外の分は受用に充てん」と。二弟應諾し、卽ち金銀の種々なる財物を持ち、塔の所に詣り、最上の供養を作し、是の如く施し已りて、同に誓言を發すらく「願くは善根生む所の果報を以て、當來の世に於て、今の正等正覺迦葉の稱を以て其の姓氏と爲し、佛世間に出でたまひて亦、値遇を得、法を聞き、信解して、菩提を證せむことを」と。誓願を發し已りて、禮拜し、旋繞し、歡喜して歸りぬ。是の故に迦葉今、此の姓を得、我に値遇して沙門と爲り、復、正法を聞き、無學の果を證せり。諸の苾芻よ、烏嚕尾螺の初め化し難かりしは、彼れ宿世に檀[一〇]施せんと欲せる時、心に遲疑有りしを以て、是の故に我れ種々の神變を現はして、方に省悟を得、

【七】荼毘(Jhāpita)。又た闍維と譯し火葬の事なり。
【八】舍利(Śarīra)。室利羅とも譯し一般に死屍をいふも又た特に佛の身骨をかく名く。之を安置せる塔を舍利塔(Śarīra-stūpa)といふ。
【九】尸林。前出の尸陀林(Śītavana)。
【一〇】檀施。Dāna は檀那或は單に檀と音譯し、又た布施或は施と意譯す檀施は此の兩種の譯を合せたるなり。

於て塔の上を經過せるに、虚空の神あり其の輪寶を捉へて、空に住めて進ましめず、時に羯里計王是の事を思惟すらく『今、我れ方に行かむとせるも輪寶自ら住まりぬ。恐らくは是れ福盡きて、感應斯に現はれたるならむ』と。彼の虚空の神乃ち之に告げて曰く『大王よ、汝、福盡きたるに非ず、下に阿羅※囊毘佛の舍利塔あり、(塔)端、輪寶を指せば、直進することを得ず』と。時に羯里計王、十八倶胝の、空を飛ぶ兵衆と同時に降下して、塔の所に詣り、王及び眷屬各妙衣を以て共に佛の塔を拭ひ、清淨にし得已り、諸の妙花を散き及つ寶香を焚き、又、種々の音樂を作して供養を爲し、頭面を以て禮し、其の誓願を發すらく「我れ今日、佛に師事し、設くる所の供養を以て、種々の功德、果報虚しからず當來に獲得せむことを」と。諸の苾芻、意に於て云何。彼の羯里計轉輪聖王並びに諸の眷屬は、即ち民彌娑囉王及び眷屬等是れなり。諸の苾芻よ、彼れ阿囉囊毘正覺の塔に供養せるを以て、種々の功德、當に無數百千倶胝劫に感じて、天上、人間の最上の快樂を受くべく、本願の力を以て、今、我に値ひ、復、供養を作せり。獲む所の功德は乃ち阿囉囊毘正等正覺と平等にして異ること無けむ。諸の苾芻よ、一切の衆生の黑業を作さむ者は、黑業相續し、白業を作さむ者は白業斷へず、或は[六]雜業を作さむも亦復、是の如からむ。諸の苾芻よ、獲る所の果報は悉く因果に從ふ。汝等當に知りて、廣く人の爲に說くべし」と。

五十九、三迦葉本生

爾の時、會中の諸の苾芻、民彌娑囉王の佛を見(奉り)て法を聞き。塵を遠り垢を離れ、又彼の往昔の事を說きたまふを聞けるを以て、乃ち烏嚕尾螺に於て疑心を起すらく『云何が世尊爲に神通を現はし、種々に教化して方に(烏嚕尾螺を)廻心せしむるを得、曩提、誐耶は言の隨に化を受けたりや。佛大慈悲あり、一切智を具したまへば、必ず能く我等の疑惑を斷除したまはむ』と。是の念を作し已り、

※羅は、囉の誤りなるべし。

【六】雜業。善惡を雜へたる業。

へ。願くは、形壽を盡すまで、衣服・飲食・臥具・湯藥を奉上し、常に乏少すること無からしめむ、乃至聖衆にも生を盡すまで供養せむ』と。佛卽ち默然たり、時に王、佛の默然として請を受けたまふを見て、歡喜し、踊躍すること自ら勝へず、卽ち頭面を以て、佛の雙足を禮し、旋繞し畢已り、辭別して退きぬ。

五十八、民彌王本生

爾の時、諸の苾芻衆、民彌娑囉王の、佛世尊が、爲に妙法を說きたまふを蒙り、座を起たずして、塵を遠り、垢を離れ、法眼淨を得たるを見て、心に皆な疑を生じぬ。『此の王、云何が、佛世尊に遇ひ(奉り)、便ち法を聞くことを得て、法眼淨を證し、塵垢を除去せるや』と。是の念を作し已るや、佛卽ち玄知し、告げて言うて曰く『諸の苾芻よ、此の民彌娑囉王は乃ち過去に於て、大善業を作したれば、所作、決定して、果報差ふことなく、今、人王と爲り、大福德を具せり。乃ち宿世の因の、果を感ずること是の如し。諸の苾芻よ、地・水・火・風の外界熟する時、[三]蘊界の六根、一切の好醜、其の作す所の善惡の業に隨ひて、悉く皆、果報を獲得して虛しからず』と。

爾の時、世尊卽ち偈を說きて言く

衆生の作す所の　善惡は、百劫を經れども　因業、壞つべからず、　果報、終に自ら得む

『諸の苾芻よ、過去世の時、佛の出世あり、[四]阿囉嚢毘と名け、十號具足し、人天の師たりき。時に佛世尊、諸の衆生の爲に種々の法を說き、化利畢已りて、卽ち涅槃に入りたまへば、彼の諸の弟子、其の舍利を收め、淸淨の地を擇びて、妙塔を建立し、復、種々の香花を以て恒に供養せり。是れを過ぎ已りて後、久しく年歲を歷て、轉輪王あり、世間に出で　[五]羯里計と名け、時に兵衆十八俱胝ありければ、常に是の衆を領ゐて空を飛びて巡幸し、復、七寶あり常に先導を爲せり。後ち一日に

【三】蘊界は衆生の意と見て可なり。外界に對して言へる語なればなり。

【四】阿囉嚢毘(Aranemi?)。ロツク・ヒル出さず。

【五】羯里計(Krkin)。第二卷訖里吉とあると同王なり。

卷の第十一

五十七、民彌王等入信

爾の時、世尊復た民彌娑囉王に謂うて曰く『汝、色を觀ずるに是れ常なりや、〔一〕常に非る耶』と。王曰く『常に非ず』と。佛言く『是れ苦なりや、苦に非る耶』と。對へて曰く『是れ苦なり』と。世尊又言く『受・想・行・識是れ常なりや常に非る耶』と。對へて曰く『常に非ず』と。又曰く『是れ苦なりや、苦に非る耶』と。對へて曰く『是れ苦なり』と。佛言く『色・受・想・行・識、悉く是れ常に非ず、是れ苦なり。是の顚倒法は一切、我なし』と。佛又、告げて言く『大王よ、當に正智・正慧を以て其の眞實を觀ずべし。彼の色・受・想・行・識に、過去・現在・未來あり耶、內外・麁細・貴賤・遠近あり耶』と。對へて曰く『色・受・想・行・識、過去・現在・未來に非ず、亦、內外・麁細・貴賤・遠近等に非ず』と。佛言く『善き哉、大王。若し能く此の五蘊に於て如實に了知すれば、是れ非常・苦・空・無我の法なり。復、正智を以て、其の眞實を觀ずれば、過去・現在、及以、未來乃至內外・麁細・貴賤・遠近等に非るを知らむ。又能く著せず、捨せざれば、斯れ眞の解脫なり。大王よ、斯の解脫を得ば、是れ〔二〕智解脫にして、梵行已に立ち、所作已に辦じ、我が生、已に盡き、永く復、輪廻の道に趣むかざらむ』と。

爾の時、世尊、是の法を說きたまふ時、民彌娑囉王及び八萬の天人、塵垢を遠離し、法眼淨を得及つ婆羅門・長者・士庶等百千の人衆、亦、塵垢を離れ、法眼淨を得たり。是に於て、民彌娑囉王、法の知見を得已り、法に於て堅固に、其の貪愛を斷ち、疑惑を除去し、正信、退かず、卽ち座より起ち、偏に右肩を袒ぎて、合掌し佛に向ひ、白して言く『世尊、我が心、柔順に、佛・法及以僧伽に歸依し〔奉る〕。近事戒を持して、永く殺生せざらむ。今、請ふらくは、世尊常に我が國に住したま

〔一〕前には、無常とありしに茲より下は凡て非常となせるも、無常と言ふを普通とす。

〔二〕智解脫（Prajñā-vimukti）、先に心解脫に對して言へる慧解脫と同じ。

なる有爲因果の法は因に從て發生し、因に從て滅することを得む。所謂る無明の緣に因つて行を生じ、行の緣、識を生じ、識の緣、名色を生じ、名色の緣、六入を生じ、六入の緣、觸を生じ、觸の緣、受を生じ、受の緣、愛を生じ、愛の緣、取を生じ、取の緣、有を生じ、有の緣、生を生じ、生の緣、老・死・憂・悲・苦・惱を生じ、是の因緣を以て、一の大苦蘊生ずることを得。諸の苾芻よ、若し其の因を滅すれば、一切皆、滅せむ、所謂る無明、滅すれば、則ち行、滅し、行、滅すれば則ち識、滅し、識、滅すれば則ち名色、滅し、名色、滅すれば則ち六入、滅し、六入、滅すれば則ち觸、滅し、觸、滅すれば則ち、受、滅し、受、滅すれば則ち愛、滅し、愛、滅すれば則ち取、滅し、取滅すれば則ち有、滅し、有、滅すれば則ち生、滅し、生、滅すれば、則ち老死・憂・悲・苦・惱、滅し、是の如ければ則ち一の大苦蘊滅せむ。諸の苾芻よ、集の因、滅するが故に、苦、自然に滅し、若し苦、止息すれば、涅槃の樂を得む。又復、我の相、永く斷てば、正しく滅して、轉ずるに非ず。苦、滅あるに非ることを了すれば、云何が滅せむ。是れ止息を得、是れ清涼を得、一切の句を離るれば、是れ則ち涅槃なり』と。

かくてこの有爲因果の一切の法はその作せる業(本文、種といふは業の意)に從ひ、此の生を終り、又た他の世界に生れ出で、遂に苦の三界を出づることなしと。

【三七】　身業以下、身・口・意の三業といひ以て一切の業を攝む即ち

身業(Kāya-karman)
口業(Vāk-karman)
意業(Manas-karman)

【三八】　正見。正業に對する邪見(Mitkyā-dṛṣti)邪業(Mithyā-karman)なり。

【三九】　惡趣(Durgati)。

【四〇】　前の惡趣に對して善趣(Sugati)あり。茲に善逝天とあれば、梵語は Sugata となるべけんも恐らく前の惡趣に對して善趣即ち Sugati とありしを誤まり譯せるにはあらざるや。

無來に任せざれ。大王若し此の法に於て、如實に知り已らば、即ち無數阿僧祇の寂滅の法を得む』と。

五十六、會衆の疑念

時に彼の會衆の一切の婆羅門・長者・士庶の中に、疑念を生ずる者あり『世尊今、色・受・想・行・識、本より無しと說かば、云何が[二五]我相・人相・衆生相・壽者相・布捺識羅相・摩拏嚩迦相・主宰・承事等の相有らんや。若し此の我・人・衆生、壽者等の相、亦た實に無ければ、云何が彼の衆生、作す所の善・不善業の二種の因果、此の蘊を捨て已りて、復、他の蘊に趣くことを知らんや』と。爾の時、世尊、彼の衆の中に心念を起せることを知り已り、即ち迦葉等に謂ひて曰く『諸の苾芻よ、所有る我・人・衆生・壽者等の見は、乃ち是れ凡夫、愚人たり。若し是の見あらば、當に其の苦を感ずべし。若し苦の生ずるを知らば、當に苦の滅せんことを求むべし。諸の苾芻よ、種々の[二六]有爲因果の法は、乃ち種に從ひて寂び轉生するが故に、我れ自ら知り已りて、衆生をして、生滅の法に於て亦、我と同じく知らしめんと欲す。佛の眼は清淨にして、天等に過ぎたれば、所有る衆生の好相、惡相及び生の貴賤・善願・惡願は衆生の業に隨ふこと、我れ今、一一如實に了知せり——衆生の[二七]身業、是の如き事を具し、口業、是の如き事を具し、意業是の如き事を具すと。——略して、衆生の[二八]邪見の邪業より起ることを說かば、或は佛の法に於て、毀謗を生じ、斯の業に由るが故に、命終の後、[二九]惡趣に墮ち、備さに衆くの苦を受く。諸の苾芻よ、若し衆生あり、其の身口に於て、諸の善業を作し、正見・正行・正業を具して、佛法に於て、常に欣び、讃譽すれば、斯の善に由るが故に、命終の後、[三〇]善逝天に生る。諸の苾芻よ、我れ是の如き知見あれば、我相・人相・衆生相・壽者相・布捺識羅相・摩拏嚩迦相乃至主宰承事等の相、或は諸の作す所の善惡の因果にて、此の蘊を捨て已りて、復た他蘊に趣くことを知る能はざるに非ざるも、是の如き等の事亦、有る所無し。我れ先に已に說けり、種々

【二五】佛教が無我をモットウとして新旗幟を飜へしたれば、我ありと極力主張する外道は諸種の名を立てゝ我の相を示し、以て有我を立證せんとせることは論を俟たず。我相以下は即ち我の諸種の名なり。今ま「名義集」を基礎として、梵語を左に擧ぐべし。
我(atmā)
人(puruṣa)
衆生(sattva)
壽者(jīva)
布捺識曪(pudgala)
摩拏嚩迦(māṇava)
主宰(kārāpaka)
承事(kāraka)
等の相といふは此の外に jantu, manuja, vedaka, jānaka-paśyaka, utthāpaka, samutthāpaka 等あればなり。外道說を立てゝ此等の相あるに、尙ほ我なしといふやと詰問するなり。

【二六】有爲(Saṃskṛta)は無爲(Asaṃskṛta)に對し、生滅變化に亘る法なり。而も其の生滅變化は因果の法則に依る。故に有爲法は同時に因果法の束縛を離るゝ能はず。

佛、大慈悲もて、來りて濟度したまひ、火を制して、然えざらしめ、又、滅せざらしむ初め、我に同じく亦、火に事ふと謂へるに、言く『求むる所なし、事火、何の用ぞ、天上も、人間も、愛戀する所なし』と。我れ、法會を設け、利養を求むるが爲に、[二三]來と不來とを欲すれば、皆、我が意を知りたまふ。又四洲及び、彼の天界に於て果及び飲を取り、悉く、我に與へて食せしめたまふ。我れ、事火に執し、正行に迷へること猶、盲ひたる者の如く、復、死せる人の如く。見知あること無ければ、定ず墜墮に趣きたらむ。摩訶牟尼、猶、大なる龍の如く、精進の雲を布げ、甘露の雨を灑ぎ一切の有情と無情とを利益したまへり。我れ、出離せんと欲し、沙門と作らんことを求むれば佛、大慈悲もて、淸淨の法を說き、最上の句に於て、知覺せしめたまふを蒙り、我れ今、實に、阿羅漢の果を證したり。佛は我が師たり、我は是れ弟子たり。諸の人、當に知りて、疑念を生ずること勿るべし此れ、誠實の言なれば、宜しく應に諦かに信ずべし。

爾の時、迦葉、伽陀を說き已るや、佛の足を頂禮し、還りて本の座に復しぬ。時に會の大衆、王及人民、實に迦葉は是れ佛の弟子たるを知りたれば、佛、衆會の疑心、已に息めるを知り、乃ち王に謂うて曰く『我れ今、汝の爲に法の要を演說せむ、汝、當に諦かに聽き、善く之を思念せよ』と。王及び衆會、敎を受けて聽きぬ。佛言く『大王よ、汝今、當に知るべし、[二四]如し、王身の色、生あり滅あらば、當に審かに生滅の二相を觀察して、實に了知せしむべし。復た受・想・行・識を觀ずるも、亦、色に同じ。善男子よ、若し能く此に於て、如實に、是れ生滅なることを知り已らば、當に復、是れ生滅に非ずと觀察すべし。若し能く色は生滅に非ずと了知すれば、卽ち受・想・行・識も亦、生滅に非ずと知る。善男子よ、色・受・想・行・識、本より生滅に非ず、去ること無く、來ること無し。若し能く如實に本より生滅に非ず、去ること無く、來ること無きを了知すれば、亦復、非生・非滅・無去・

【二三】欲來不來。

【二四】以下三段の說先づ五蘊の生滅なることを知らしめ、次にその非生滅なることを明し、最後にその非生滅にさへも拘はる勿れと勸むる所は前にも言へるが如く可なり發達せる後世佛敎の思想を有すること明かなり。

至るや、偏に右肩を袒ぎ、合掌し、佛に向ひて、三び自ら稱して言く『我は是れ民彌娑囉王なり』と。佛も亦三び『是の如し是の如し』と印したまひぬ。王即ち五朶の花を以て、佛に奉上し、然る後、頭面を地に著けて、其の雙足を禮し、又、種々の言辭を以て、讃歎を伸ぶれば、佛即ち報へて言く『請ふ、王よ坐に就きたまへ』と。王、座に昇り已るや、其の王の眷屬及び婆羅門、長者、士庶等、次第に佛を禮し、歡喜し踊躍して、各々、偈を以て世尊を讃へ、讃詠畢已るや却きて、一面に住しぬ。

五十五、民彌王等の疑念

時に烏嚕尾螺迦葉は、是れより先、王及び大臣、一國の士庶の尊重する所の者にして、今沙門と爲り、佛の側らに侍立せしかば、王及び人民、疑ひ怪しまざるは莫く、咸く念を起して曰く『耆年の迦葉は、火に事へ修行して勤苦すること彌だ久しく、智慧・道德皆、人の右に出でたるに、今、衆會に在りて、我等の疑を生ぜしむ。是れ如來、迦葉の教を奉じたまふと爲ん耶、是れ迦葉、如來の教を奉ずと爲ん耶』と。此の念を作す時、佛即ち玄鑒し、乃ち迦葉に謂うて曰く『汝自ら知らむ』と。時に迦葉、佛の聖旨を承け、座を起たずして、三摩地に入り、本の座に於て沒して、東方に現はれ、行・住・坐・臥の四威儀の相を作し、又復、身光明を放ちて五色あり――所謂る靑・黃・赤・白・紅たり――其の色、間雜して、猶ほ玻璃の如く、又復、身の上、水を出し、身の下、火を出し、身の上、火を出し、身の下、水を出し、南方、西方、乃至北方、皆、亦是の如かりき。神變を現はし已りて、忽然の間に、衆會に還來し、合掌して佛に向ひ、伽陀を說きて曰く、

　我れ本修行し、　火に奉事すること　彌しく年歲を歷たり。　謀りて勤勞を設け　心、常に自ら已に羅漢を、　證したりと謂へるも、　我の相に執著して、　解脫すること能はざりき。

隍乃至四衢を嚴潔して、悉く清淨ならしめ、復、種々の名香妙花を設ね、以て迎接に備ふ可し』と。爾の時、世尊、耆舊の迦葉及び千の阿羅漢と、誐耶山を離れ、王城に詣らむとし、城を去ること遠からず〔二〇〕杖林塔あれば、佛、大衆と塔に至りて住まりたまひぬ。時に民彌娑囉王、世尊の諸の聖衆と、杖林塔に至り、安住已に定まれるを聞くことを得、卽ち所司に令して車駕を嚴整して前後に導從せしめ、自ら眷屬及び諸の群臣と城を出でゝ、杖林塔の所に詣らむと欲し、宮を出づること未だ遠からず、王乘る所の車、――地忽ちに坑あり、――輪陷ちて進まざりき。王自ら思念すらく『我れ必ず往昔曾て不善を造り、今日に於て斯の事あるを致せるならむ』と。纔かに是の念を起すや、卽ち空中に聲あるを聞く、告げて曰く『汝、往昔に於て、不善の業なし、但〔二一〕現在、諸の牢獄の中に多く禁繫（さるゝもの）有るが爲にして、車輪の陷ちたるは、正に此れが爲なり』と。王、空の言を聞き、定ず、賢聖、既に指諭を蒙らせたることを知り心極めて重きを感じ、卽ちに使人を遣し、散れて諸の獄に詣り、罪の輕重、等第を以て、之を赦さしめぬ。車駕前進して城門に至るに、王の寶冠又た忽ちに破壞せしかば、復、思念して言く『我れ定ず往昔曾て不善を作したれば、乃ち今日に於て、疊ねて不祥あらむ』と。王、是の意を發すや、空中の賢聖又復、告げて言く『天子よ、汝、往昔に於て、不善の業なし。但前來放つ所の禁繫の人、輕き者は已に放ちしも、重き者は活くと雖も、猶、別處に繫がるゝに緣る。冠、破るゝの祥は乃ち此が爲なり』と。王、賢聖の空中の語を聞き已り、便ち使人をして諸處に詔して喚び、咸、車前に到らしめて、悉く之を赦宥せしかば、罪人免るゝを獲、歡喜し、踊躍して、王の德を稱へぬ。時に王の部從及び諸眷屬、乘る所の車一萬八千あり、復た國中の婆羅門、長者、及び諸の人民ありて亦百千の車あり、同に城門を出でゝ、世尊の所に詣れり。時に王、杖林塔に至り、近苑の內に於て、〔二二〕迦俱那花、五朶を取り、自手もて執持して、佛の所に詣り、佛を去ること遠からず、車を下りて徒歩し、傘蓋劍仗の類の相隨はしむるを免去し、既に佛の所に

【二〇】　杖林（Yaṣṭivana）。

【二一】　諸本皆な見在なれども讀み易からしめんが爲に暫く明本を採れり。

【二二】　迦俱那（Kaṅguni ?）。

け已りて稟持せんことを』と。方に斯の事を念じ、忽ち大臣の議を計るの言を聞き、傷嘆すること良久して、報へて曰く『汝は實に愚人なり、如來に於て極惡の心を起さんと欲す。是れ大なる愚癡なり、汝、速かに去る可し、更に發言すること勿れ』と。時に大臣、是の語を聞き已りて、(王の)聽從せざるを知り、慚懼して退きぬ。

爾の時、民彌娑囉王、卽ち、左右の親位の大臣の福相圓滿にして、智慧ある者を顧みて、之に告げて曰く『汝、去りて、彼の識耶山頂、世尊の所に往き、我に代り恭敬して、世尊に請ふこと、我が辭の如かれ、曰く「民彌娑囉王、雙足を稽首し、恭肅すること量なく、世尊に問訊し(奉る)、病、少きや、惱、少きや、起居、輕利にして、安樂に行じたまふや否や。今請ふらくは、世尊、宮城に降臨し、微ながら供養を受け、當に我れ及び彼の人民をして、大利樂を獲しめたまへ。唯願くは世尊、及與、聖衆たる耆舊の大德、皆、悉く降臨したまへ。當に此の生を盡すまで、奉ぐるに飲食、湯藥乃至臥具、及び僧伽梨等を以てし、一切供給して乏少せしめざるべし。願くは、大慈悲もて、勞屈を辭したまふ勿れ』と。[一九]是の如く說き已りて、佛の足を頂禮し、顒いで聖旨を聽きたまへば、佛卽ち默然たり。時に、彼の使人、佛の請を受けたまへるを知り、禮を作して旋繞し、辭し已りて還りぬ。

五十四、民彌王杖林塔の佛所參詣

爾の時、民彌娑囉王、使の廻旋せるを聞き、速かに前殿に御して、使の朝拜を受け、君臣、禮し畢るや遽かに問を發して言く『世尊來りたまふ耶』と。使人近づき前み、王に奏して曰く『臣、王の旨を奉じて識耶山に詣り、佛及び衆に請ひ、具に王の旨を以て、世尊に白せしに、佛已に默然たれば、必ず來降して赴きたまはむ』と。時に王、勅を左右の大臣に降すらく『便ちに、宮殿及與城

5不兩舌　6不惡口
7不倚語　8不貪欲
9不瞋恚　10不邪見
轉輪王の治下には民皆な十善を行ふ。而して十善の果報としては後世天子に生る。十善の天子といふは之が爲なり。

【一九】使人、聖旨を承け、佛の所に詣りて、王に代り是の如く請ひ奉れることを略せり。

病・死・憂・悲・苦・惱に輪廻す。諸の苾芻よ、[一二]三火の熾盛なるは、我を本と爲すに由る。三火を滅せんと欲すれば、當に我の本を斷つべし。我の本若し斷てば、三火自ら息まん。是に於て、三界の輪廻、一切、諸の苦、自然に斷絶せむ』と。時に三迦葉及び千の苾芻、又世尊の神變の相を現はし、及つ正法を說きたまふを蒙りて、諸の漏、盡くることを得、[一三]心解脫を得、[一四]所作已に辦じ、諸の重擔を捨て、正しく己れの利を得、輪廻を斷たむことを求めて、悉く皆、阿羅漢の道を證得したり。

爾の時、世尊、識耶山頂に於て、三迦葉及び弟子千人を度し、皆、阿羅漢道を證(せしめ)已れる時、[一五]民彌娑羅王、及び輔相、大臣乃至士庶、悉く、世尊の識耶山頂に在し、弟子衆の數、千人に滿つるものあるを知りぬ。一の大臣あり、王に告げて曰く『我れ、國人の近ろ言論するあるを聞けり、彼の釋族の中、一の童子を生みたるに、初生の時、[一六]雪邊、[一七]娑儗囉體河の岸なる往昔の迦毘羅仙の住處に有りて、一の善相の婆羅門あり、相して言うて曰く「今、此の童子、相好具足し、福慧圓滿したれば、必ず金輪聖王と爲り、四天下に王として、大海の際を盡すまで、悉く統御に在り、正法もて世を理め、民、[一八]十善を行ひ、復、輪寶・摩尼寶・女寶・主兵寶・主藏寶・象寶・馬寶あり、是の如き諸の寶、自然に出現し、恒常に隨逐し、又、千子の色相第一なるあり、大勇猛を具して、寃敵を破り、四洲、威に畏れて、悉く皆降伏せむ。然れども、或は出家して、鬚髮を剃除し、袈裟衣を著くれば、正心に修行して、必ず無上の正等正覺を成ぜん』と。具さに上の事を以て、悉く王に白し『請ふ。早く圖謀して後悔せしむる勿れ、如し能く殺さば、國を保つこと、終に吉からむ』と。時に民彌娑羅王、正殿の上に在り、獨り坐して思惟すらく『常に五種の事を念ず、一には常に願くは、如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊、世間に出でたまはんことを。二には早く彼に往いて、瞻禮し隨喜するを得んことを。三には、到り已りて便ち法を聞くを得んことを。四には、所說の法の如く、悉く能く、了知せんことを。五には、我が爲に戒を受け、受

【一〇】眼識以下六識といふ。
(1)眼識(Cakṣur-vijñāna)。
(2)耳識(Śrotra-v.)。
(3)鼻識(Ghrāṇa-v.)。
(4)舌識(Jihvā-v.)。
(5)身識(Kāya-v.)。
(6)意識(Mano-v.)。

【一一】苦以下、五蘊中第二の受蘊の三受なり。
(1)苦(Duḥkha)。
(2)樂(Sukha)。
(3)非苦・非樂(Aduḥkha-asukha)。又は捨(upekṣā)

【一二】玆に三火とは、貪・瞋・癡の三毒。

【一三】心解脫(Citta-vimukti)は、慧解脫(prajñā-vimukti)と共に二種の解脫と言はれ、前者は心に貪愛を離るを言ひ、後者は慧に無明を離るを言ふ。

【一四】此の句第七卷に羅漢の德を述べたる句と同じき性質のものなれども字句異る。

【一五】民彌娑羅(Bimbisāra)(重出)。

【一六】雪邊は、雪山の邊の意。

【一七】娑は婆の誤りなるべし。先に婆儗囉(底)とあるに同じければなり。

【一八】十善とは、十惡業に對して言はる十善業なり、十惡の各〻の頭に不の一字を冠す。即ち
1不殺生　2不偸盜
3不邪淫　4不妄語

迦葉、各弟子を領ゐて同に佛の所に至り、佛の會に至り已るや、佛の足を頂禮し、退きて一面に住しぬ。爾の時、世尊、迦葉に告げて言く『汝等、來れる耶』と。時に二迦葉答へて言く『已に來れり』と。又、佛に白して言く『我等各々、諸の弟子を將ゐて同に來りて、佛に投ぜり。正法の中に於て、願くは出家することを得む、尸羅[六]を稟受し、梵行を修持せん。願くは佛、大慈もて哀愍し、聽許したまへ』と。佛卽ち攝受し、度して沙門と爲し、佛又た報へて言く『汝等は、今朝、是れ眞の出家なり、是れ眞の梵行なり』と。時に、迦葉等、是の語を聞き已り、歡喜し踊躍して、自ら勝ゆる能はず、各々、佛を禮して、旋繞し畢已り、瞻仰して住しぬ。

五十三、誐耶山頂說法

爾の時、世尊、迦葉等の千苾芻を度し已り、卽ち適悅の地を離れ、耆年の迦葉等一千の苾芻を將ゐ、[七]誐耶山頂の塔處に往きたまひ、誐耶に到り已るや、佛、諸の苾芻等の爲に、三種の事を現はしたまふ――[八]一は神通、二は說法、三は調伏。是に於て、世尊、三摩地に入り、神變の相を現はし、本の座に於て沒して、東方虛空の中に於て、行・住・坐・臥の四威儀の事を現はし、又、身の上に於て、五色の光――所謂る靑・黃・赤・白及與紅の色――を出し、又復、身の上、水を出し、身の下、火を出し、身の上、火を出し、身の下、水を出し、乃至南・西・北の方、皆、是の相を現はし、神變を見し已るや、剎那の間に於て、還本の座に復りたまひぬ。爾の時、世尊又與に說法して謂く『諸の苾芻よ、汝[九]心・意・識、等の諸法の中に於て――有疑・無疑・有念・無念・可滅・不滅――斯の諸の法に於て汝、決定して行ずるや』と。又復、告げて曰く『汝等當に知るべし、[一〇]眼識を緣と爲して、諸の色を貪り、色、觸るゝに因つての故に、內心、發生し、卽ち苦・樂、或は非苦・非樂あり、乃至耳・鼻・舌・身・意も亦復是の如し。諸の苾芻よ、貪火旣に爾り、瞋・癡も亦然り、是に由て、生、老

【六】尸羅(Śīla)。意譯して戒といひ定慧と共に三學といふ。

【七】誐耶山頂(Gayāśīrṣa)。又羯闍尸利沙とも譯し象頭山とも譯す。印度古代より靈山として尊崇さるゝ山なり。

【八】玆に三種の事とあるも第三の調伏の事は出さず。但し次卷に亘る民彌娑羅王の輕慢心を調伏せることを第三と見得ざるにはあらず。

【九】心・意・識の三は詮はす所各々異るも其の體は一なりとは一般の通說なり。而して心は集起の義、意は思量の義、識は了別の義なりと、次に有疑・無疑といひ、有念・無念といひ、可滅不滅といふ三重の分類は各々精神作用の一切を網羅せるものなり。要するに心・意・識等以下の文を以て精神作用の一切を表はすものと見て可ならん。

り、乃ち兄に謂うて言く『我れ本より修行するは、兄の教授に因れり。兄、今棄捨すれば、我も亦願くは隨はむ』と。又復、言うて曰く『佛の出世なくば、寧んぞ正法を聞かむ。老耄に止ると雖も、亦、出離を希ふ』と。烏嚕尾螺告げて言く『善き哉、善き哉、今、正に是の時なり』と。那提迦葉・識耶迦葉、卽ち前みて佛に詣り、頭面を地に著け、雙足を禮し已り、退きて一面に住し、白して言く『世尊、我が兄烏嚕尾螺は先に是れ本師たりしに、今者出家して、已に沙門と爲りぬ。我も今、亦、出家せむと欲す。願くは濟度を賜へ』と。佛、默して許したまふと雖も、還、彼の徒衆を導かしめんとし、之に告げて曰く『汝等の弟子悉く知り已るや否や』と。二迦葉言く『未だ知らず』と。佛言く『汝、知らしむべし、還り來らば、汝を度せむ』と。時に二迦葉、佛の教勅を承けて、所住に還歸し、各弟子を集め告げて言うて曰く『摩挐嚩迦、汝還知れるや否や、大沙門あり、其の名を佛と曰ひ、來りて我が師迦葉に近く止住し、累に神通を以て異相を顯現し、皆我が師をして一一、目覩せしめ、又法力を以て其の所作を制したまへしかば、我が師、省悟して法の如かざるを知り、諸の學衆を將ゐて彼に投じて出家しぬ。我れ、其の棄つる所の受用の(物)、水に隨ひて流下するを見たるに因りて、乃ち自ら訪尋して其の緣由を委かにせんとし、彼に到るに及んで、已に我が師迦葉及び五百の弟子の、悉く袈裟を著け沙門の相を成し、會に在りて、坐し、其の說法を聽けるを見ぬ。我れ是の事を見、初め大いに驚き怪しみて、前進すること能はざりしが、我が師迦葉は席を離れて來り迎へ、具さに前の事を說けり。我れ殊勝を聞き、亦、出家を願へるも、輒ち汝曹を念ひ、迴り來りて相報ふるなり。吾が意、此の如し、汝等之を思ひ、信實の心を以て各我に報へよ』と。彼の二迦葉、是の語を說き已れる時、摩挐嚩迦弟子の衆、迦葉に白して曰く『我等の學を修むるは、師より受くる所たり。師、勝劣を辯じたまふに、弟子寧んぞ知らむ。師、倘、彼に投じて出家せば、我等云何が執守せむ。如し或は決定したまはゞ、亦、願くは相隨はん』と。是に於て曩提迦葉・識耶

足、進むこと能はざるを見、卽ち烏嚕尾螺を遣て自ら起ちて、迎接せしめたまふ。時に二迦葉、既に其の兄の席を離れて迎接するを覩、卽ち趨りて前に進み、來りて足を禮し問訊しぬ。二迦葉言く『我が兄、耆年にして德あり、久しく已に修行し、博學、該通にして、世に等ぶ者無く、國王及び大臣乃至士庶、皆、我が兄、阿羅漢道を證したりと謂ひ、常に種々の香花、飮食、上妙の衣服、及以珍寶を持ちて來り、供養し、凡そ言說あれば、諦信せざるは莫し。如何が今日忽ちに已が道を棄てゝ便ち他の教に隨ふや。我れ本より修行するは、兄の指授に依れり、乃至弟子咸く異轍なからむ。兄、今、本より修習する所を棄つれば、我等云何が更に進趣を堅めむ。大なる疑網に處る、願くば開解を賜へ』と。是の說を作し已り、顒いで一面に住しぬ。

時に、烏嚕尾螺迦葉、那提。誐耶等に告げて言く『往、世に佛無く、猶冥夜の若かりしかば、人に慧目なく、沈墮するを知らざりき。我れ是の際に於て、苦節、修行し、火に事へて功と爲し、每に聖證を祈り、復、此れを以て、轉じて汝曹を教へ、餘人の能く、我が道に過ぐるを得るものなければ、便卽ち自ら阿羅漢を證したりと謂へり。大沙門あり、佛、世尊と曰ひ、身長、丈六にして、金色晃耀し、相好具足して威德特に尊く、我を哀愍するが故に、近くに來りて、止住したまふ。凡そ動靜したまふ所、天悉く遙かに知り、四天の大王乃至[二]梵釋、咸く來りて法を聽き、又、[三]神足を現し、刹那の頃に於て四洲乃至天上に往復し、[四]酥陀味を取り、悉く皆、我に示し、又復、我れの實は未だ阿羅漢道を證得せざることを知りたまふ。[五]斯の事を以ての故に我が道如かず。宜しく誠慚を先にして、悔を後にすべきを省悟し、乃ち弟子と誠を投じて出家せしかば、我を哀愍したまふが故に、便ち救濟を垂れ、法服を著けしめ、度して僧伽と爲したまへり。先に汝に告げざりしは、吾の過なり』と。

時に那提迦葉・誐耶迦葉、根緣已に熟し、便ち信向を生じ、是の語を聞き已るや、悲喜、交至

【二】 梵天・帝釋。
【三】 神足(Riddhipada)。神境智證通の名の下に六神通の一とさるゝものなり。
【四】 酥陀(Ghrita)。又た酥油とも譯し、牛乳より精製したるものなり。
【五】 以斯事故我道不如省悟宜先誠慚後悔。

五十二、曩提誐耶二迦葉出家

爾の時、烏嚕尾螺迦葉に其の[一]二弟あり、一は曩提迦葉と名け、二は誐耶迦葉と名け、是の二迦葉に各 二百五十の學徒あり、悉く尼連河の下流の岸の側に在りて住し、各 師の法に於て、勤めて修習を加へたり。是の二迦葉、一日、尼連河の中に於て、忽ち烏嚕尾螺迦葉の祀火の具、護摩、杓等、及び鹿皮、樹皮の衣、乃至 淨瓶、拄杖、革履等の物、悉く尼連河の中より流れ下るを見て、乃ち驚き怪みて思念すらく『我が兄迦葉に、王難、無きを得ん耶、賊難、無きを得ん耶、乃至水火等の難《無きを得ん耶》、是の難に因るが故に、修行を退失せるならむ。若し爾らざれば、云何が祀火の具、種々の物、水中に棄てゝ、自ら流れ下るに任さむ。審かに知らば、今日必ず差異を見む』と。是に於て、二弟、思議すること再三、共に行いて兄を尋ぬ、其の的實を原ねんとして、兄の住處に至りしに、迦葉及び弟子の輩を見ず、唯だ所居の空寂なるを餘す而已。時に二迦葉倍、悽然を極め、即ち隣人に詣りて、其の所以を訪ぬれば、隣人報へて言く『烏嚕尾螺迦葉、仙道を捨棄し、諸の弟子を將ゐて沙門に歸せり、我等、諸人、其の事を知らず、請ふ、自ら彼に詣りて、其の因由を詢はれよ』と。時に二迦葉此の說を聞き已り、互相に謂うて曰く『我も亦、沙門ありて、近ろ此處に來り、凡そ諸の擧止、皆、常人と異ることを聞けり。儻し或は我が兄及與弟子、若し實に然らば、極めて稀しき事たり。今自ら彼に往いて虛實を觀る可し』とて、二人相將ゐて同に佛の所に到り、方に其の兄、烏嚕尾螺及與弟子の、袈裟衣を被て、沙門の相を成し、悉く佛の前に坐し、瞻仰して法を聽けるを見たり。時に二迦葉 目り斯の事を覩、其の實たることを知るに因つて、心驚き、毛竪ちて、足進むこと能はず、佛、那提。誐耶の來りて、其の兄を尋ぬるを見、又、曾の前に立ちて、

【一】 1. 曩提迦葉(Nadī Kāśyapa)。2. 誐耶迦葉 (Gayā Kāśyapa) 那提、伽耶となすを普通とす

し、[一七]神異、他心は衆人、目覩せり。我等の所業は悉く師より傳へたり。師既に未だ如かざれば、弟子何をか說かむ。師若し決定したまへば、我等皆隨はむ。師、若し彼の宗の源に達しなば、亦、願くば濟度を垂れたまへ。我等、已に決せり。衆、一心を共にして、今、或は行く可し、失ふべからざるなり』と。是に於て、迦葉、衆の誠願を知り、乃ち弟子をして、事火の具、護摩[一八]、杓等種々の器及び鹿皮衣・樹皮衣・淨瓶・拄杖・革屣等の物を取り、悉く尼連河の中に棄てしめ、以て不迴の相を示し、師徒相率ゐて同に佛の所に詣り、佛の足を頂禮し、退きて一面に立ちぬ。

爾の時、世尊、迦葉に謂ひて曰く『汝復、來れる耶』と。迦葉答へて言く『今、弟子と同に來り、大沙門の法の中に於て出家、修學せむと欲す』と。佛已に懸かに知りたまふも、乃ち更に審りて曰く『汝の諸の弟子、誠心なりや否や』と。迦葉答へて言く『我れ弟子と皆、悉く誠心なり。唯願くば、慈哀もて、咸く濟度を垂れたまへ』と。佛卽ち默して許し、度して沙門と爲し、又復報へて言く『汝等、今朝は是れ眞の出家なり、是れ眞の梵行なり、袈裟衣を披けて、實の沙門なり』と。

爾の時、烏嚕尾螺迦葉、身に袈裟衣を著けて、沙門の相と成り又、佛の「汝は今是れ眞の出家なり、是れ眞の梵行なり」と言へるを聞き、私かに自ら慶喜し、我心全く滅し、又復、思惟すらく『往昔、大仙嘗て、斯の事を說けり、「世、稀に佛ありて、世に出興したまひ、無上覺を得、一切智を具したまふ。是れ大聖人にして、天上、人間悉く能く利樂す」と。我れ前時に於て、夜出でゝ星を觀ぜるに、大火聚ありしかば、其の事火にして、我と同宗なりと謂へるに、乃ち是れ梵王、帝釋、四天王等の互ひに來りて法を聽きしなりき。今此の事を惟ふに、是れ大聖人なり、此れ大聖に非れば、孰をか聖と爲さむ』と。是に於て、迦葉、沙門の稱を易へ、佛を呼びて、世尊と爲し（奉り）ぬ。

衆許摩訶帝經卷第九

【一七】　神異は、神通一般を指し、他心は、六神通の一、他心通にして他人の心に思ふことを熟知する通力なり。梵語（Paracitta jñāna）。
【一八】　護摩（Homa）。又た燒供と譯す。

白して言く『若し離れむと欲すれば、當に自ら船に上るべし』と。佛、神力を以て、[一六]指を彈く如きの頃に、已に船の中に在し、跏趺して坐したまひぬ。迦葉、佛の已に坐せるを見るも、來る所、入る所を見ざりければ、迦葉歎じて言く『沙門は是れ大丈夫にして大威德あり、乃ち神通を有すること、能く是の如し』と。迦葉白して言く『我れ自らも亦、阿羅漢果を得たり。然れども、沙門の證する所の道に及ばず』と。佛、迦葉の決定、心を迴さむことを知りて、即便ち告げて言く『汝自ら阿羅漢を證せる者と言へども、實に證したるに非ず』と。迦葉、忽ち、世尊の是の如き語を發したまへるを聞き、身毛皆、竪ち、轉た、自ら尅責しぬ。『此の大沙門、悉く能く我が種々の事を知る。今宜しく之を師とし、以て其の道を進むべし』と、念を作すこと已に定まりて、佛に白して言く『大沙門、願くば、我が意を知りたまへ、今、大沙門の法の中に出家して、僧伽と爲り、敎勅を稟奉し、梵行を修持せむと欲す。唯願くば慈悲もて特に聽許を賜へ』と。

【12 五百弟子を率ゐて出家】 佛、迦葉の道を證するの時、至れることを知り、又、方便を以て彼の徒衆を化せむとしたまひ、乃ち迦葉に謂うて曰く『汝、吾が法の中に於て、出家し道を學び沙門と爲らむと欲するも、還曾つて諸の弟子をして悉く知らしめ已りしや否や』と。迦葉答へて言く『弟子は未だ知らず』と。佛言く『汝、人の師たり、卒暴なることを得ず。且く歸還して弟子と議るべし。若し然りと謂はゞ、再び來るべし。斯れ亦、未だ晩からず』と。迦葉、敎を奉じ、還りて住處に至り、乃ち摩拏縛迦等五百の弟子と同に一處に集り、告げて言うて曰く『彼の大沙門は、相好、異常にして神通及び難く、凡そ動止したまふ所、天悉く遙かに知り、或は座前に來りて、其の法を聽き、或は要用あれば、皆、能く給送し(奉る)——累りに神變を見はせば、我れ實に如かず。今、彼を師として出家し、以て其の道を進めむと欲す。吾已に決定せり、汝等、如何、細かに自ら籌量して、實を以て我に報へよ』と。摩拏縛迦、迦葉に白して言く『彼の火龍の暴惡を、先づ降伏せるを首めと

【一六】臂を展ばす(或は屈伸する)如き頃と同じく少時間に譬へて常に用ゐらる。

佛言く『石を要む』と。帝釋卽ち夜叉をして、大山の中に於て、石一塊を取らしめ、修めて平正ならしめ、復、光潔ならしめて、池の側に置きぬ。佛卽ち衣を洗ひ、洗ひ已りて、曬さむと欲したまへば、帝釋叉、夜叉をして別に一石を取らしめ、池の岸に置き、佛衣を洗ひ竟るや、石に就きて、之を曬したまひぬ。迦葉、來至して、叉池の岸に忽然として石あるを見、乃ち自ら驚き怪しみ『池の岸に先に無かりしに、今何より來る』とて、佛に白して言く『大沙門、池岸の石、何よりして有るや』と。佛卽ち報へて言く『我れ衣を洗はむと欲して、石なきが爲の故に、卽ち思念を起せば、彼の帝釋下り來りて、我が爲に安置せり。我れ叉、衣を曬すに處なきことを思念せしに、彼の天帝釋叉、一石を安きぬ。二石の來る所、皆、帝釋なり』と。迦葉大いに歎ずらく『此の大沙門、凡そ是れ作す所、世、之れ有るに非ず。必ず已に阿羅漢を證得したるならむ。然れども其の證する所、應に吾に超ゆること莫かるべし』と。迦葉の心、省悟あるに似たり。

【11 化水汎溢。迦葉廻心】世尊叉、方便を以て更に異相を現し、迦葉を敎化して、正道に入らしめむとしたまひぬ。佛卽ち彼の尼連河の水を化へて、忽然として汎溢せしめたれば、河の左右に居る人、多く漂溺し、枯涸せる陂池、處々皆、滿てり。佛の止まりたまふ所の處、正しく其の內に居るも、佛、神力を以て、水をして環遶し、四面に壁立せしめたれば、中心には塵起りぬ。迦葉是の時、河の汎溢すること、常よりも最だ盛んなるを見、卽ち思念して言く『彼の大沙門、漂溺せざるを得んや』と。是に由りて船に乘り、速かに佛の所に至り、乃ち世尊の樹下に經行し、歩々、塵の起れるを見、叉、環水、壁立して、船を下ること能はざるを以て、異を歎ずること常に倍し、遙かに相慰めて曰く『沙門、安きを否や。憂惱なきことを得たりや』と。佛言く『我れ、憂惱の、相論すことを勞はすものなし』と。復、思念して言く『此の大沙門、自ら神通あるに、何ぞ此を離れざる』とて、迦葉叉言く『船に乘りて、此を離れむと欲する莫きや』佛言く『離れむと欲す』と。此に於て迦葉

【10 帝釋天の奉侍及び非情の感動】 世尊、來日乃ち鉢を持ち、四天王の天に往き、直ちに忉利天に至り、天の酥味を敢り、所止に還來し、樹の下にて食したまひ、喫食既に畢り、水もて澡漱せむと思したまひぬ。帝釋天主、佛の水を思するを知り、臂を展ばす如き頃に來りて佛の所に至り、世尊に白し言く『水用せんと欲したまふ耶』と。佛言く『水を欲す』と。帝釋、卽ち近地を觀ずるに、先に涸池あり、手を以て、之を指せば、水卽ち涌出し、淸淨、香潔にして、與に等しき者なかりき。佛卽ち澡漱して意の隨に受用したまへば、帝釋天主、天宮に還歸しぬ。迦葉忽ち見て、驚き怪しむこと非常にして『此涸池、水、無かりしこと已に久しきに、今復、水滿つ、何より來りしかを知らず』とて、速かに、佛の所に至りて、佛に白して言く『大沙門、此の池、久しく涸れたりしに、水、何に因りてか有る』と。佛卽ち報へて言く『今日、食畢るも、水の澡漱するものなかりしに、帝釋遙かに知りて、乃ち天を下り、來りて、我が爲に水を出せり』と。迦葉歎じて言く『未曾有なり、食、天より取り、水、天をして出さしめ、能く感ずること是の如し。此れ必ず亦、阿羅漢を得たるなり』と。迦葉乃ち池の名を立てゝ之を[一四]播捉佉多と謂へり。

佛、後時に於て、池に入り澡浴したまひぬ。池岸の側ら、先より大樹あり、[一五]阿祖囉嚢と名けたり。佛、袈裟を以て樹の上に挂けたれば、迦葉來至して、佛の袈裟の樹の上に挂かれるを見、佛の澡浴したまふを知り、卽ち來りて瞻視しぬ。佛、旣に浴し訖り、水を出で、岸に上り、卽ち其の手を展ばして、樹の枝を攀かむと欲したまへば、時に阿祖囉嚢の枝、便ち低きに亞きぬ。迦葉乃ち見て還復、歎じて曰く『此の大沙門は實に不思議なり、無情の自然に低亞することを感得せり。沙門、亦阿羅漢を得たるなり』と。

世尊、後時に、衣を洗はむと思欲したまひ、『云何が石を得て、用と爲さむ耶』と。帝釋遙かに知り、尋いで佛の所に至り、白して言く『世尊、佛、衣を洗はむと欲して、石を用ゐたまふや』と。

【一四】 播捉佉多(Pāṇi-khāta) ロツク・ヒル出さざるも、同名の神聖なる沐浴場ありとモニエル・ウイリヤムスの梵語字典にあれば、本經播泥佉多といへるに當ること明なるべし。梵語 Pāṇi-khāta は手もて堀れるの意を有す。尙ほ大事梵本にはあり。茲に出せるに同じ。

【一五】 阿祖囉嚢 ロツク・ヒル此の名を出さず(asarā ?)

りし耶』と。佛言く『我れの來れるや久し』と。迦葉又言く『何の道より來れる』と。佛報へて言く『我れ住處より瞻部洲の界に行き、瞻部樹の果を取り、還りて此に來れり』と。迦葉言く『大沙門乃ち是の如き神通の迅速なるあり、少時の間に於て、能く彼に往き、果を取りて還り來れり。此の大沙門、亦、是れ阿羅漢なり』と。佛即ち果を以て之に示したまひ『迦葉、汝、曾つて見しや不や』と。迦葉言く『我れ未だ曾つて見ざりき』と。佛言く『汝食せむことを樂ふや不や』と。答へて言く『食せむことを樂ふ』と。佛言く『意の隨に』と。迦葉、果を食し、未曾有と歎じぬ。果を食すること已に竟り、即ち造れる所の種々の飲食を以て、自手もて奉上しぬ。佛、食を喫し已り、澡漱亦、畢りて、即ち迦葉の爲に偈を說き、祝願訖りて尋いで樹の下に廻りたまひぬ。

又、第二日に、佛に供を受けたまはんことを請へるに、佛即ち前の依に、三摩地に入り、[九]弗婆提に往いて、[一〇]菴摩羅果を取りて、先に迦葉の住處に至りたまひぬ。又、第三日に、佛に供を受けたまはむことを請へるに、佛、三摩地に入り、[一一]西衢陀洲に往いて、[一二]尾螺迦閉他果を得て還り、先に迦葉の住處に至りたまひぬ。第四日に至りて、佛に供を受けたまはむことを請へるに、佛、即ち三摩地に入り、臂を屈伸する如きの頃に、[一三]北俱盧洲に往いて、自然の米飯を取り、鉢の中に持ち來り、先に迦葉の住處に至りて、安坐したまひぬ。已に久しうして、迦葉方に來り、迦葉又、問うらく『何の道より來れるや』と。佛、答うらく『迦葉、我れ適彼の北俱盧洲に往いて、自然の米飯を取り、持ち來りて、此に至れり』と。迦葉歎じて曰く『此の大沙門、是の神通あり、必ず是れ亦、阿羅漢を得たるならむ』と。佛、還問ひて言く『北洲の飯、汝食せむことを樂ふや』と。答へて言く『食せむことを樂ふ』と。佛言く『意の隨に』と。迦葉、食し已りて未曾有と歎じ、是に於て自ら辦る所の種々の飲食を以て、佛に奉上し、佛は食を受け竟り、澡漱も亦畢り、即ち迦葉の爲に偈を說き、祝願し已りて、還、樹の下に歸りたまひぬ。

【九】弗婆提(Pūrvavideha)。又た東勝身洲と譯す世界四洲の內東方の國土なり。

【一〇】菴摩羅果(Āmra)。

【一一】西衢陀洲(Avaragodānika)(――nīya)。又た西牛貨洲と譯す四洲中西方の國土なり。

【一二】尾螺迦閉他果につきては、ロック・ヒル Vilva を出せども、然らば尾螺果とあるべきなり。外に Kapittha と稱する橙の一種あれども二果とも覺えず、要するに不明なり。

【一三】北俱盧洲(Uttarakuru)四洲中北方の國土なり。

念を作すらく『彼の大沙門は相好、端嚴にして、威徳殊勝なり。若し國中の士庶、若し殊勝なるを見れば、或は我を捨てゝ、彼に事へむことを恐る』と。斯の事を以ての故に、思念すること再三なりき。佛卽ち尋知したまひ、佛、七日に於て、他處に遊化し、近くに在して、住したまふと雖も、迦葉及び衆、七日の中に於て、世尊を見《奉ら》ざりき。時に彼の迦葉、七日の法を作し、國中の士庶、悉く香花及與財寶を持ちて、供養を作し、作法既に畢り、設會も亦終りぬ。却りて復思念すらく『彼の大沙門七日見えず、我れ今、會を設けて、多く餘長あり、沙門若し來らば甚しく供養あらむ』と。是の念を作し已るや、佛、其の意を知して卽便ち行いて迦葉の住處に詣りたまへるに、纔かに見るや、心卽ち歡喜し、『此の大沙門、我思へば、便ち至りぬ』とて、乃ち佛に白して言く『沙門來れり耶』と。佛言く『我れ來れり』と。又曰く『七日の中、何を以てか來らざる』と。佛言く『汝、是の念を作せり、「我れ七日の法會を設けむに、若し彼の沙門來らば、恐らく法、成らざらむ」と。我れ汝の意を知り、是れを以て來らざりき。今汝、思念すらく、「作法、既に畢りぬ。沙門若し來らば、甚しく供養あらむ」と。我れ亦、爾るを知り、是を以て此に來れり』と。迦葉思惟すらく『此の大沙門は是れ大聖者にして、悉く我が意を知れり。必定、亦、是れ阿羅漢なり』と。

【9 迦葉の供養と佛の神足】佛、迦葉と言論已に竟り、尋いで所止に還りたまひ、迦葉は、後に於て、虔潔の心を以て、諸の飲食を造り、極めて香、美しきこと、其の常の品と異ならしめ、待ちて來日に至るや、自ら佛の所に詣り白して言く『沙門、我れ專心を以て、食を備辦し竟りぬ。願くば我が舍を過れて、供養を受けたまへ』と。佛、請を受け已りて之に告げて曰く『汝但、先に去れ、吾、當に便ち至るべし』と。迦葉既に去るや世尊、三摩地に入り、猶、壯士の臂を屈伸する如き頃[八]に、贍部洲の界に於て、贍部樹の果を取り、鉢に盛滿し已り、迴還して先に迦葉の住處に至り、跏趺して坐したまひぬ。迦葉後れて至り、佛の先に至りたまへるを見、驚きて、言うて曰く『沙門來

【八】 少時間の意常に譬として用ゐらる。

答へて言く『然ゑんことを欲す』と。佛言く『但、去れ、火必ず自ら然ゑん』と。迦葉迴還するに火已に然ゑたり。火を用ゐるの事訖りて、其の火を滅せんと欲すれども、火又滅せず。又復、定に入りて、火をして滅せしめんと欲すれども、火終に滅せず。事免るゝを得ず、來りて佛に白して言く『火然ゆることを得たれども、今、又滅ぜず。必ず是れ沙門の力の制する所ならむ』と。佛言く『汝滅せんことを欲する耶』と。迦葉告げて言く『火をして滅せしめんと欲す』と。佛言く『但、去れ、火必ず自ら滅せん』と。至りて家に還るに及びて、火已に滅せり。火滅し已りて後、彼の餘炭を以て、一處に積みけるに、[七]時移るの後、其の炭自ら然ゑたれば、諸の弟子と同に其の火を滅せんとし、其の力分を盡せども、終に滅すること能はず、又來りて佛に白すらく『汝、大沙門、火、適、滅するを得たれども、今還自ら然ゑ、熾盛なること常に倍し、我れ滅すること能はず、此れ必ず沙門の力の制する所ならむ』と。佛言く『火又、然ゑたり耶』と。答へて言く『火然ゑたり』と『汝滅する能はざる耶』と。答へて言く『我れ滅すること能はず』と。佛即ち報へて言く『汝、但、迴り去れ、火自ら息滅せむ』と。迦葉即ち迴るや、火已に自ら滅しぬ。迦葉歎じて曰く『奇なる哉、沙門、斯の力あり。我れ火を然やさんと欲すれども火然やす能はず、告ぐれば以て然やすことを得、我れ火を滅せんと欲すれども、火滅する能はず、告ぐれば以て滅するを得、今ま火、再び著きて、再び滅する能はず、今火の滅するを得たるも亦、彼の力に由る。是の大沙門は大威德あり、此れ實に希有なり、必ず應に亦、是れ阿羅漢なるべし』と。

【8 他心智證通】 是の日を過ぎ已りて、烏嚕尾螺迦葉、外道の法を作し、七日の會を設け、彼の摩伽陀の國王、士庶皆、悉く聞き知りぬ。迦葉思惟すらく『今、大沙門、此の近くに在りて住まる。前に火祀する所、皆能く力もて制したれば、今作す所の法、復、制すること莫からむ耶。若し彼の沙門、七日來らざれば、我が法必ず成ぜむ。若し復、來らば、或ひは制せられむことを恐る』と。又是の

【七】 移レ時之後。（原文）

りたまふ可きや否や、我等、火を然さんとするも、火終に然えず。知らず、今日、何に因りてか此の若き』と。烏嚕尾螺迦葉、是の事を思惟して『彼の沙門、此の近くに在りて住せり、恐らくは彼の威力、制する所あらむ』とて、卽ち弟子と同に佛の所に詣り、佛に白して言く『汝大沙門、我れの弟子摩拏嚩迦(等)五百の人衆、常の式に火を用て火祀を爲す、今且、火を然やさんとするも、火終に著く能はず。我疑ふ、此の事定ず是れ沙門の威力の制する所ならむと』佛卽ち答へて言く『汝、火の然ゑんことを欲するや』と。迦葉答へて言く『然ゑんことを欲す』と。佛 言く『汝去れ、火當に自ら然ゆべし』と。迦葉家に還れば、火已に然ゑたり。時に彼の迦葉及與弟子、皆稱讃して曰く『此の大沙門、力あること是の如し、必ず應に亦、阿羅漢を得たるなるべし』と。火を用て祭り訖り、其の火を滅せむと欲すれども、火滅すること能はず、其彼の力を盡せども、終に滅する能はず、摩拏嚩迦、諸の弟子等疾かに烏嚕尾螺迦葉の所に詣り、白して言く『我が師知りたまふや否や、火然やすことを得たりと雖も、今滅することを得ず』と。迦葉答へて言く『此れ必ず還是れ沙門の爲す所ならむ』と。迦葉復、來りて、世尊の所に至り、白して言く『沙門、火然ゆることを得たりと雖も、今滅すること能はず、是れ、沙門の復た制する莫き也』と。佛卽ち報へて 言く『汝滅せむと欲する耶』と。迦葉告げて言く『火をして滅せしめむと欲す』と。佛 言く『汝、但還り去れ、必ず自ら滅せむ』と。迦葉廻還するに、火已に滅せり。又復、歎じて曰く『此の大沙門、是の神力あり、亦、阿羅漢なり』と。

【7 迦葉の神力を制す】 第六日に至るや、烏嚕尾螺迦葉自ら火を用て、其の火天を祭らむと欲すれども、火又、然ゑず、卽ち自ら定に入り、火をして然ゑしめんと欲すれども、火亦た然ゑず、來りて、佛の所に至り、佛に白して言く『我自ら火を用て常に式するに然やすことを得れども、今、然やすこと能はず、是れ沙門の力の制せる所莫き也』と。佛 言く『迦葉汝、火の然ゑんことを欲するや』と。

を見て、彼の迦葉、弟子に謂うて曰く『而も此の沙門定ず火に事ふ』と。天曉に至り已りて、諸の弟子と速かに佛の所に詣りて、佛に白して言く『汝、大沙門、我れ昨夜、出でゝ、星象を觀ずるに、又火聚の座の前に熾にして、火光、上騰すること日の初めて出づるが如きを見ぬ。我れ今定ず沙門の火に事ふることを知れり』と。佛即ち報へて言く『我れ火に事ふるに非ず、昨夜帝釋下り來りて法を聽きぬ。是れ彼の身光の照耀する所なり』と。迦葉歎じて曰く『奇なる哉、沙門大威德あり、此れ實に希有なり、我れ今定ず亦、阿羅漢果を得たらむことを知れり』と。

【5 梵天王の聽法】　第四日に至りて、烏嚕尾螺迦葉、門を出でゝ星を觀ずるに、又復、沙門の座前に、大火聚の光明照耀して、日の正に中するが如きを觀見しぬ。是の時、迦葉還た、弟子に告ぐらく『我れ今夜に於て、又星象を觀ずるに、復た沙門の座前に、火の、光明照耀して、前に轉倍すること、日の正に中するが如く、等しくして異あるなきを見たり。審かに是の相を察するに、定ず火に事ふる也』と。天曉に至り已るや、行いて佛の所に詣り、佛に白して言く『我れ夜、星を觀ずるに、亦、沙門の座前に、火あるを見たり。我れ知りぬ、沙門定ず火に事ふる也』と。佛言く『迦葉、我れ求むる所なし、何ぞ火を用ゐむ。昨夜の中、彼の娑婆世界の主、梵天王、下り來りて、法を聽き、我が前に在りて坐せり。汝の見る所の者は、是れ彼れの身光なり』と。時に彼の迦葉、還復歎じて曰く『此の大沙門乃ち是の如き大なる威德力あり、能く梵王の下り來りて法を聽くことを感ぜり。實に希有と爲す。我れ定ず亦、阿羅漢果を證したることを知り得ぬ』と。

【6 事火弟子の神力を制す】　第五日に至るや、時に烏嚕尾螺迦葉の、弟子摩拏嚩迦等、五百の人衆、俱に(六)三火に事へ、各三鑪あり、其の鑪、共に一千五百ありき。是の時、世尊彼の樹の下に在し、又、彼の衆の火を用て天を祭るに値へり。彼の五百人常の式に火を發さんとするに、火然やすこと能はざりければ、彼の弟子衆、即ち師に告げんとし、烏嚕尾螺の所に至りて、言を白して言く『師知

【六】　三火とは、次の如し。(1) 家主火 (Gārhapatya-agni)。(2) 供養火 (Āhavanīya-agni)。(3) 南火(Dakṣiṇa-agni)。又は 祖先祭火(Anvāharypacana)。

其の實を了知すべし』と。烏嚕尾螺迦葉、自ら耆年にして、德重く、苦を行じて、學優れたるを以て、凡そ見知する所、過つ者ある無く、及つ世尊は龍火も傷けず、又、能く降して鉢の內に置くを見、乃ち讃歎して曰く『奇なる哉、沙門、大威力あり、我が見聞する所、此の事あるは希なり。是れ大沙門たり、是れ大丈夫たり、亦、是れ阿羅漢なり』と。

【3四天王の聽法】 爾の時、世尊、毒龍を降し已り、第二日に至り、即ち、烏嚕尾螺迦葉の住處に遠からざるに於て、一樹の下に就きて、經行し、宴安したまふに、即ち是の夜に於て、四大天王あり、下り來りて法を聽きぬ。時に迦葉、夜出でゝ星象を觀ずるに、乃ち佛の前に四の大火聚あるを見、迦葉即ち諸の弟子に謂うて曰く『彼の大沙門、亦、火に事ふ』と。諸の弟子曰く『師、何に由りてか知りたまふ』と。迦葉告げて言く『我れ夜、星象を觀ずるに、乃ち大沙門の前に四の大火聚あるを見たり。我知りぬ、沙門の火に事ふること疑ひ無きを』と。時に烏嚕尾螺迦葉、纔く、天曉に至るや、速かに佛の所に詣り、佛に白して言く『汝、大沙門、亦、火に事ふる耶』と。佛即ち報へて言く『我は火に事へず』と。迦葉又、言く『我れ夜中に星を觀ぜるに、沙門の前に、四の大火聚あるを見たり、若し火に事へずば、此れ乃ち何の用ぞ』と。佛報へて言く『此は是れ火に非ず、是れ四大天王、下り來り、法を聽きたれば、是れ彼の四天の身光のみ』と。迦葉、驚きて曰く『奇なる哉、沙門、是の事ありや、此の大沙門、斯の威德あり、天王、俱に來りて法を聽くことを感得せり、此れ亦、是れ阿羅漢なり耶』と。

【4帝釋天の聽法】 第三日に至るや、帝釋天主、乃ち夜分に於て、來りて佛の所に至り、頭面に足を禮し、退きて一面に坐しぬ。佛、帝釋の爲に應ずる如く法を說きたまひ、帝釋天主、法を聞くことを得已りて、歡喜し踊躍して、天宮に還歸しぬ。時に烏嚕尾螺迦葉、夜、星象を觀ずるに、又、樹の下、世尊の前面に一の火聚の、極大、熾盛にして、光明照耀すること、日の初めて出づるが如き

佛卽ち告げて言く『今已に日、暮れぬ。我れ汝の舍に於て、寂靜の處あらば、一宿を寄せむと欲す』と。烏嚕尾螺迦葉白して言く『大沙門、我が諸の房舍は、眷屬、中に在り、唯一の靜處は、沙門の宿るに堪へむ、然れども此の靜處は毒龍、中に在り、悋惜せずと雖も、恐らくは損ふ所あらむ。請ふ自ら之を思へ』と。佛、烏嚕尾螺迦葉に告げて言く『但、願くは借ら見よ。必ず傷害なけむ』と。烏嚕尾螺迦葉告げて言く『若し能く爾らば、當に自ら意に隨ふべし』と。

【2毒龍降伏】是に於て世尊卽ち龍舍に詣りたまひぬ。佛、舍の外に於て足を洗ひ已りて、便ち龍舍に入り、自ら淨草を布き跏趺して坐し、佛卽便ち三摩地に入りたまひぬ。時に彼の毒龍、忽ち、世尊の舍中に在して坐したまへるを見、卽ち瞋怒を發して、乃ち煙霧を作り、舍の内外に遍ねからしめぬ。是に於て、世尊、神通力を以て、亦、煙霧を化れば、毒龍、轉怒りて、舍内に火を著け、佛、神力を以て亦、其の火を化り、佛と毒龍との二火、俱に熾なりき。時に彼の龍舍、内外に周遍して、大[五]火聚と成り、火焰上騰して遠近を明照しぬ。時に彼の迦葉、常に夜分に於て、出でゝ星象を觀しかば、乃ち復、龍舍の大火聚と成れるを觀見し、卽便ち傷嘆すらく『苦しき哉、苦しき哉、彼の端正の沙門、我が語を聽かざりしかば、龍火、熾盛にして常に百倍せり、惜む可し、沙門必ず傷害を被りしならむ』と。時に烏嚕尾螺迦葉、及與、眷屬皆大火の熾盛の相を見たり。時に彼の毒龍、世尊に於て損害すること能はざるを知り、又、自身亦、大いに疲乏せるを以て、乃ち惡毒を息めたれば、火便ち消滅し、世尊是の時亦、神力を攝め、毒龍降伏して鉢の內に收まりぬ。天曉の後、烏嚕尾螺迦葉、眷屬等と行いて龍舍に詣り、沙門を觀むとし、既に龍舍に到るに、佛の端然たるを見、佛に白して言く『汝、大沙門、宿夜、安かなりしや否や』と。佛言く『我れ安らかなりき』と。『汝、大沙門、鉢の中は、何物なりや』と。佛言く『此の舍の龍なり』と。佛又、告げて言く『汝言へり、「此の舍、是の毒龍ありて、人敢へて止まらず」と。我れ今、降伏して、鉢の中に收めぬ。汝審かに觀て、

【五】火聚(Agniskandha)。火蘊とも譯すべく火の集團なり。

ぬ。我れ今佛に歸し（奉り）、法に歸し（奉り）。僧伽に歸依し（奉る）。願くは[二]近事と爲りて、永く殺生せず』と。又佛に白して言く『食の時、已に至れり。願くは佛、大慈もて、我が供養を受けたまへ』と。佛卽ち默然たり。時に彼の難那並びに眷屬等、佛の默然たるを見て、已に請を受けたまへるを知り、種々の香花、飲食を持ちて、手自ら奉上し、世尊食し畢り、澡漱已に畢りたまひぬ。難那、眷屬復た卑き座に處り、法を聽かむことを樂欲せば、佛乃ち方便して種々に法を說きたまひ、難那眷屬、復た法を聞くことを得て歡喜し、踊躍し、佛を禮して退きぬ。

五十一、烏嚕尾螺迦葉化度

【一訪問】 爾の時、世尊、西囊野彌聚落に於て、難那等を化し已りて、卽ち復、思念したまはく『[三]摩伽陀國に詣り緣に隨て利樂せむと欲す。時に摩伽陀國に善相師、烏嚕尾螺迦葉あり、壽年三百歲、自ら、已に阿羅漢道を得たりと謂ひ、尼連河の側らに居り、弟子眷屬、五百人あり、[四]摩伽陀國王及び輔相、一切の民衆、皆、尊重し供養して、更に上あること無し。彼の摩伽陀國に、無量の人衆あるも、由盲冥の如く、黑暗に障蔽され、常に烏嚕尾螺に依りて、以て引導と爲す。彼の諸の人衆、化導を承くと雖も、出離するに由なし。我れ今、彼の烏嚕尾螺及び彼の人衆を化して、正道を見しめむ』と。既に思惟し已るや、行いて摩伽陀國尼連河の側ら烏嚕尾螺迦葉の住處に詣りたまひぬ。時に烏嚕尾螺迦葉、忽ち、世尊の、來りて、住處に至りたまへるを見、又、相好具足し、威德殊異なるを見て、卽ち前みて迎接し、復、恭敬を加へて、佛に謂うて言く『善來せり、大沙門、先には何處に住して、今忽ちに此に至るや』と。卽ち世尊の爲に座を敷き、坐したまはむことを請ひしかば、世尊坐に就きたまひ、彼の烏嚕尾螺迦葉亦、自ら坐に就き、卽ち種々の言辭を以て、世尊を慰問し、世尊亦、種々の方便を以て、開導、敎化したまひ、談論の未だ竟らざるに、日は、已に西に暮れぬ。

【二】 優婆塞・優婆夷、は意譯して近事男・近事女ともいふ。故に近事は此の二を含むもの、在家の三寶歸依者を總稱せり。

【三】 烏嚕尾螺迦葉（Uruvilvā Kāśyapa）（重出）。ロック・ヒル、年百二十歲とす。

【四】 摩伽陀（Magadha）（重出）。

卷の第九

五十、難那等入信

爾の時、世尊、彼の六十の賢衆を度し已りて、復、何人か先づ化を受く可きかを思ひ、乃ち西嚢野儞聚落の中、難那[1]及び長女幷びに眷屬等あり、先づ化を受くるに堪へたるを憶ひたまふ。『憶念するに、我れ昔し、苦行して去る時、彼の舍を經過せり。時に難那及び長女幷びに眷屬等、共に乳粥及び酥蜜等を持ち、來りて、我に獻げたり。今彼等を觀るに、根縁已に熟し、化度すべきに堪へたり』と。是の念を作し已りて、世尊、翌日、食時を伺候し、應器を執持して、西嚢野儞聚落の中に入り、次第に乞食して、難那の舍に至りたまひぬ。時に彼の難那及び長女等、佛の門に至れるを見、踊躍し歡喜して、即ち佛に謂うて曰く『善來せり、世尊、聖體安きや否や、世尊、大慈もて暫く我が舍を過れたまへ』と。佛、即ち門に入るや、難那幷びに女、佛の爲に座を敷き、世尊座に昇りたまふ。彼の難那及び女幷びに諸の眷屬即ち頭面を以て、佛の雙足を禮し、各々禮し已り、退きて、一面に坐しぬ。

爾の時、世尊即ち爲に法を說きたまふ。佛言く『難那、汝等諦かに聽け、布施、持戒は生天の因にして、欲樂を感ずと雖も、終に當に退失すべし。汝等、當に一切の煩惱を斷ち、以て出離を求むべし』と。又復、廣く、爲に、生滅の法を分別して了知せしめたまひぬ。佛是れを說きたまふ時、彼の難那等、根縁成熟し、蓋障即ち除こり、深心に思惟して歡喜すること量なかりき。佛即ち又爲に、苦・集・滅・道の四聖諦の法を廣說したまへば、時に難那幷びに女及び眷屬等即ち座上に於て、法の知見を得、四諦の理を證し、諸の疑惑を斷ち、貪愛永く除こり、一向に佛を信じ、即ち座より起ち、合掌、頂禮して、白して言く『世尊、我れ、世尊說きたまふ所の諸の法に於て、實に知見を得

【一】難那(Nanda ?)。第六巻には難那（Nandā）を以て二姉妹中の姉とせり。然るに今ま難那を父の名とせるは解せず。

殺生せず、身を畢るまで、[一八]優婆塞戒を奉持せむ」と。時に六十の賢衆、世尊の所に於て、法を聞くことを得已りて、佛の足を頂禮し、歡喜して退きぬ。

衆許摩訶帝經卷第八

六十賢衆入信

九五

【一八】優婆塞・優婆夷の戒は五戒なり(不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語、不飮酒)。

衆あり、西曩野儞の中に在り、諸の妓女及び彼の音樂を將て、日々樂を作し、停罷あることなかりき。忽ち一女あり、此の快樂に於て、心に厭離を生じ、衆を捨て、逃避し、至る所を知らざりき。時に六十の賢衆、善根成熟し、此の女を尋ぬるに因りて、迦囉波娑林に入り、忽ち樹下に於て、佛世尊を見、驚き訝ること非常にして、互相に謂うて曰く『今、此の沙門、身、金山の如く、光明、晃曜し、面目端正にして、諸相具足し、吉祥、尊貴にして、倫匹あることなし』と。嘆じて已むこと能はず、卽ち前行し、詣りて問を發して言く『沙門、此に止まりて、還た曾て一女人の來るを見たりや否や』と。佛言く『賢衆、此處は寂靜にして、女の遊ぶ所に非ず。汝、今此に來れるは、女人を尋ねんが爲なり。何ぞ自ら爲に其の身を尋ねざる耶』と。是の時、賢衆、佛の說きたまへる所を聞き、省悟するあり。乃ち前の非を知りて佛に答へて言く『我等、先に女人を尋ねたるは、誠に是れ過咎なりき。今、自ら身を尋ねむ。願くは指示を垂れたまへ』と。佛言く『賢衆、汝、既に是の如し、且く安坐すべし。我れ今、汝の爲に、法の要を說かむ』と。[一七]是の賢衆等、卽ち佛の足を禮し、退きて一面に坐しぬ。

佛言く『賢衆、布施・持戒は生天の因にして、復、快樂なりと雖も、究竟と爲すに非ず。若し出離を求むれば、當に煩惱を斷つべし』と。亦復、生滅の法を分別したまひぬ。時に彼の賢衆、纔かに是の說を聞き、蓋障卽ち除こり、心內に思惟して、歡喜すること量なかりき。佛、其の意を知り、卽ち爲に苦・集・滅・道の四聖諦の法を廣說したまへば、彼の賢衆等、潔白の衣の、衆色に染み易く、彼の染むる所に隨て、皆、鮮好を得るが如し。而して賢衆等、卽ち座上に於て、四聖諦の微妙の理を證し、既に諸法に於て、知見を得、貪愛、息滅し、疑惑永く斷ち、乃ち佛の法に於て四無畏を證し、卽ち座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、合掌し、佛に向ひて是の言を作すらく『唯、願くは世尊慈哀し、知察したまへ。我れ佛に歸依し(奉る)、法に歸依し(奉る)、僧に歸依し(奉る)。今より已去、永く

【一七】（原文）「是賢衆等」とありてかく譯せるも「是」の字の上に「於」の一字あるべし。然る時は「是に於て」と譯すべし。

すべし』と。言ひたまふ所未だ竟らず、時に彼の罪魔――[13]摩拏嚩迦と名く――即便ち遙かに、今日瞿曇沙門、諸の弟子と鹿野苑の中に在りて、共に商議し、謂うて『汝等、天上、人間の、繫縛を離るゝを得たれば、宜しく各縁に隨つて、利樂を行ふべし』と言ひたまへるを知りて、『我れ今若し、其をして惑亂せしめざれば、必定、世間の衆生を化し盡さむ』と(思惟せり)。時に彼の罪魔、摩拏嚩迦自ら其の身を變じて、世間の人と同じうし、[14]臂を展ばすが如き頃に、即ち佛の所に至り、佛の前に住立して伽陀を說きて曰く、

汝の解脫の相は、解脫に非ず、　此の解脫を得るも、沙門に非ず　汝、今、自ら、大なる繫縛に處りて、　當に何人をか解脫せしめんと欲すべきや。

爾の時、世尊、是れ罪魔、摩拏嚩迦來りて相惑亂するを知りたまひ、『徒らに自ら業を作るのみ、何ぞ能く我れを壞らむ』とて、即ち伽陀を說きて、罪魔に答へて曰く、

我れ、天上及び人間に於て、　已に能く、諸の繫縛を解脫せり。　乃至無學も、繫縛を離れたれば、　汝の罪魔も、破る能はず。

時に摩拏嚩迦、是の語を聞き已りて、即ち自ら思惟すらく『此の瞿曇沙門、他の心事を知れば、必ず亂すこと能はざらむ』と。唯自ら苦惱し、隱沒して退きぬ。爾の時、世尊、諸の苾芻に告げたまはく『我れ已に汝に語れり。汝等、已に天上、人間に於て、諸の繫縛を離れたれば、衆生を愍念して化導を行ふべし。汝等速かに去れ』と。時に諸の羅漢、佛の教勅を奉じ、禮辭して、去りぬ。

四十九、六十賢衆入信

爾の時、世尊、諸の羅漢と、皆、鹿苑の適悅の地を離れ、佛は即ち獨行して、西曩野儞聚落、烏魯尾螺池の邊り、[15]迦囉波娑林の下に往詣し、經行して、宴坐したまひぬ。時に聚落中に六十の[16]賢

【一三】摩拏嚩迦(Māṇavaka?)

【一四】極く小時間の間を譬へて常に用ゐる語。

【一五】迦囉波娑林(Karvāsika)。(ロック・ヒル)

【一六】Bhadravarga(ロック・ヒル)賢衆はその意譯なり。

り、忽ち倶梨迦の子耶舍及び布囉努等、佛に隨て出家し、道果を證せることを聞き、咸く是の念を作すらく『彼の長者の子耶舍及び布囉努等、種族、尊勝にして、巨富倫び難く、聰慧、人に過ぎて、端嚴匹ひ罕く、常に快樂を受けて、諸の苦惱なきに、猶、能く家を捨て道を學び、以て解脱を求めたり。我等云何が猶、顧戀するや』と。諸の長者の子、是の念を作し已りて、波羅國を出で同に佛の所に詣り、佛の所に至り已りて、佛の足を頂禮し、一面に住立し、諸の長者の子、同に佛に白して言く『我諸の長者の子、正に五十人、今、佛の法に於て、出家して沙門と爲らむと欲す。願くは佛、慈悲もて哀愍し聽許したまへ』と。佛、言く『善き哉、汝、長者の子、家を捨てゝ道を爲すは、今正に是の時なり』と。卽ち弟子をして與に鬚髮を剃り、袈裟衣を著けしめ、度して沙門と爲したまふ。是の時、世尊又與に法を說き勝果を求めしめ、佛、言く『汝、長者の子、各ゝ家を捨てゝ沙門と爲らば、當に一身を須て苦行を行ひ、心を攝めて亂れず、眞諦の法を求め、心をして無我ならしめ、諸法に於て、決定、了知し、生死の源を盡し、永く輪轉を斷ち、以て解脱に趣くべし』と。諸の長者の子、世尊の是の法を說きたまふを聞き已りて、正信、決定し、精勤に修習し、諸漏を盡し、[二]心に解脱を得、所作已に作し、梵行已に立ち、我が生、已に滅し、永く輪迴を斷ち、悉く皆、阿羅漢果を證得しければ、是に於て世間始めて、六十の大阿羅漢ありき。

四十八、六十弟子分遣傳道

爾の時、世尊、諸の弟子を觀て、之に告げて曰く『我れ、無數劫より來た、勤行し、精進し、乃ち今日に於て正覺を成ずるを得たり。正に一切衆生の爲に、諸の繫縛を解かしめむ。汝等今日悉く我が處に於て、正法を聞くを得て、漏盡き、解脱し、[三]三明、六通皆已に具足し、天上、人間にて、其の繫縛を離れたれば、衆生の與に、最たる福田と爲るべし。宜しく慈愍を行ひ、緣に隨つて利樂

【二】（原文）「心得解脱」とあるも前後の例の如く得ニ心解脱一なるべし。今は原文のままに譯せり。

【三】三明。羅漢の宿命明・天眼明・漏盡明の三をいへば六神通のうちの三通に外ならず。三明、佛にありては三達といふ。六通は六神通なり。

鹿野の仙人住處に還歸したまひぬ。

四十六、耶舍四兄弟出家

爾の時、倶梨迦に復[九]四子あり、一は布囉努と名け、二は尾摩羅と名け、三は識鑁鉢帝と名け、四は蘇摩斛と名け、彼の耶舍の佛に投じて出家し羅漢果を證したるを見、咸く斯の念を作すらく、『我等、云何が猶、貪愛を戀うて、解脱を求めざる』と。又復、思惟すらく『若し、世間に、最上覺なければ、復何人ありてか、最上の法を說かむ。我等輪迴して、能く斷絕するなし。今佛法に値へり。宜しく正信を生ずべし。當に共に家を捨て、彼の耶舍の如く、以て解脱を求むべし』と。是に於て、布囉努等の兄弟四人、波羅奈國を出で、同に佛の所に詣り、佛の足を頂禮し、却きて、一面に住し、佛に白して言く『我は倶梨迦の子にして、耶舍の弟なり、今來りて佛に投じ、沙門と爲らむと欲す。唯、願くは世尊、慈愍して聽許したまへ』と。

爾の時、世尊、卽ち弟子をして與に鬚髮を剃り、袈裟衣を著けしめぬ。既に沙門と爲すや、又與に法を說きたまひ、佛言く『布囉努、汝、當に苦行を行ひ、心を攝めて亂れず、眞諦の法を求め、心を無我ならしめ、諸法に於て決定、了知して、生死の源を盡し、永く輪轉を斷ち、以て解脱に趣くべし』と。時に布囉努等、佛世尊の此の法を說きたまふを聞き已りて、正信、決定し、精勤に修習して、諸の漏盡を得、心解脱を得、所作已に作し、梵行已に立ち、我が生已に滅し、永く輪迴を斷ちて、羅漢果を證しければ、是の時乃ち十の大[一〇]阿羅漢ありき。

四十七、耶舍朋友等出家

爾の時、波羅奈國の中に、復、大族なる諸長者の子あり、正に五十人、倶梨迦の子と常に朋友た

【九】四子。
1 布囉努 (Pūrṇa)。
2 尾摩羅(Vimala)。
3 識鑁鉢帝(Gavampati)。
4 蘇摩斛(Subāhu)。（ロツタ・ヒル）

【一〇】阿羅漢(Arhat)。佛の十號のうち應供と譯せると同じ梵語なり。略して羅漢ともいふ。

爾の時、世尊、卽ち爲に其の三歸を受けたまふや、三歸を受け竟りて、歡喜し踊躍し、佛に謝して、又白して言く『食の時、已に至りぬ』と。佛卽ち默然たり。是に於て、長者及び耶舍の母、辦ふる所の上妙、香美なる種々の飮食を持ち、自らの手もて、佛及び聖衆に奉上せば、佛、聖衆と食し畢り、澡盥して淸淨にしたまふこと已に竟りぬ。是の時、長者及び耶舍の母、卽ち佛の前に於て、各卑き座に坐し、佛に法を說きたまはむことを請ひ、佛は卽ち化利して、心をして歡喜せしめたまへり。是の時、俱梨迦長者、耶舍の母等と、復、佛に白して言く『我れ少しく疑あれば、問を伸啓せむと欲す、願くは、佛、開說し、我等の疑を斷ちたまへ。今、我が子耶舍、當に、何の因ありて、是の果を獲たる――乃ち家の中に於て、忽ち此の心を發し、會、世尊の、爲に妙法を說きたまふに遇ひて、法服を得て、其の身を莊嚴し、諸漏盡くるを得、羅漢の果を證したるや』と。

四十五、耶舍本生

爾の時、世尊、長者等に告げて曰く『〔八〕過去の世の時、波羅奈國に近からず、遠からず、一の仙人ありて、彼に於て住し、慈悲心ありて、衆生を利益し、恒に城の中に入り鉢を持ちて、乞食しぬ。時に彼の仙人、會、一日に於て、四衢の道に於て、一の死せる蟲を見ぬ。其の壞爛し又復、臭穢にして、過往の者瞻近すべからざるを覩、彼の仙、忽ちに思念を起すらく『我が身の無常なること、此に異らず』とて、遂に輪廻に於て、厭離を生じぬ。此の時に當り一の童子あり、亦、死せる蟲を見て、彼の仙人と同じく輪廻の苦を厭ひぬ。而して彼の仙人及以、童子既に輪廻を厭ひ、後勤めて、解脫の正道を修習せり。彼の仙人は卽ち我が身是にして、彼の童子は卽ち耶舍是なり、是の故に耶舍、今我に遇ひ、妙法を聞き、無學の果を證するを得たり』と。是に於て俱梨迦長者及び諸の眷屬、佛の說きたまふを聞き已りて、歡喜し、信受し、禮謝して、退きぬ。是に於て、世尊諸の聖衆を將ゐて、

〔八〕以下耶舍の本生を說けるものなり。本生譚(Jataka)は佛の好みて說き給へる方便の說法の一にして、漢譯佛典中にも若干之を集めたるものあり又た本經の如き諸經に散見するを見れども巴利文には「Jataka」と稱する經現存し、五百五十の本生譚を戴せたり。

汝今、出家して已に無學を證せり。宜しく方便を以て、化して歡喜せしむべし』と。佛、誡勅し已りて、卽ち與に同に家中に詣り、食を受けむとしぬ。時に倶梨迦長者、門首に立ちて顒いで、佛の至りたまふを望み、佛既に門に至れば、倶梨迦長者、佛の足を頂禮し、香を焚き迎引して、第二門に至りたまふ。時に耶舍の母及び乳母、眷屬悉く出て迎接し、初め世尊の相好端嚴にして、威光、殊異なるを覩、又、耶舍及び諸の羅漢の法服もて身を嚴り、威儀、詳審にして、凡て諸の進止、殊異の道あるを見て、圍繞し、瞻仰して、歡喜すること極まりなかりき。倶梨迦長者、佛に請うて座に就かしめ(奉り)、諸の阿羅漢等、亦復、座に就かしめ、是の時、諸の眷屬と次第に足を禮し、禮し畢り、瞻仰して、各一面に住しぬ。

爾の時、世尊、耶舍の母及び諸の眷屬のために、應ずる如く法を說き、其をして歡喜せしめ又、菩提の心を發起せしめたまひ、乃ち之に告げて曰く『布施、持戒は天上に生るゝを得、復、快樂すと雖も、未だ輪迴を出でず。輪迴を出でむと欲すれば、當に煩惱を斷ずべし。生滅の法に於て、須らく了知すべし。汝等、諦かに聽き、深心もて思惟せよ。我れ今汝の爲に分別して廣說せむ』と。佛言く『色は是れ無常なり、是れ苦なり、是れ空なり、是れ無我の法なり』と。又言く『受・想・行・識は是れ無常なり、是れ苦なり、是れ空なり、是れ無我の法なり。汝等知るや不や』と。是の如く、世尊廣く分別を爲したまへる時、耶舍の母及び乳母等、皆な已に宿て善本を植ゑたれば、今、世尊、爲に妙法を說きたまへるに遇ひ、潔白の衣、染めて衆くの色と成さむに、其の染むる所に隨つて、皆鮮妙を得むが如く、耶舍の母等も亦復、是の如かりき。世尊乃至、廣く爲に、苦・集・滅・道の四聖諦の法を演說したまふや、耶舍の母等、座を起たずして法眼淨を得、貪愛を斷除し、諸の疑惑を離れ、而も諸法に於て知見礙なかりき。卽ち座より起ちて、佛の前に住立し白して言く『五蘊三毒は苦・空・無我・無常の法なり、我れ已に實に知りぬ』と。

かに受くべし』と。

佛言く『俱梨迦、汝、佛に歸依し(奉り)、法に歸依し(奉り)、僧伽に歸依し(奉れ)、汝、形壽を盡すまで、違悔することを得ざれ』と。俱梨迦言く『我れ今、佛に歸依し(奉る)。法に歸依し(奉る)、僧伽に歸依し(奉る)』と。佛言く『俱梨迦、汝今、我に於て受け、三歸依を得竟んぬ。當に世間の第一の[六]優婆塞たるべし』と。爾の時、俱梨迦、佛の爲に種々の法を說きたまふを蒙りて、乃ち塵垢を遠離し、法眼の清淨を得、又、與に[七]三自歸を受くるを蒙り已りて、心意泰然とし、歡喜すること量なく、卽ち佛に白して言く『我れ來日に於て、自らの居舍に就き齋を備へ供養し(奉ら)む。唯、願くは世尊及び聖衆等、慈悲もて愍念し、同に降赴を賜へ』と佛、卽ち默然たり。時に俱梨迦、佛の請を受けたまひしことを知り、歡喜、踊躍し、旋繞すること三匝、佛を禮して退きぬ。彼の俱梨迦、旣に佛に請ひ已りて、速かに家の中に至り、彼の妻子男女幷びに諸の眷屬に告ぐらく『彼の耶舍は夜出で〻、縛囉迦河を渡り、佛に投じて出家し、已に沙門と作り、兼て已に阿羅漢果を證するを得たり。我れ耶舍を尋ねて亦彼に到り、便ち世尊の我が爲に法を說きたまふを蒙り、塵垢を離る〻を獲、法眼淨を得、又、我が爲に三自歸の法を受けたまひぬ。我れ已に佛に來日、供養せむことを請ひたれば、佛、聖衆と、必ず來り降赴したまはむ。汝、諸の眷屬、今、當に我が爲に、速かに舍宅を淨め、香水を地に灑ぎ、塵をして坌らしむるなく、及つ速かに種々の飮食乃至香花供養の具を備辦すべし。汝等、專至なれば、亦、大利を獲む』と。旣に來朝に至り、明相現はれ已れば、家內の營辦、一一皆、畢んぬ。俱梨迦長者卽ち庭の際に於て、爐を執り、香を焚き、遙かに世尊に白しぬ『飮食已に辦はれり、願くは佛、垂降したまへ』と。

爾の時、世尊卽ち拘抳に告げたまはく『諸の羅漢等、共に往いて、俱梨迦の請に赴くべし』と。又、耶舍に告げて曰く『汝、本の家に歸るに、形服、舊に非れば、母親、眷屬、心に必ず悲惱せむ。

【六】優婆塞(Upāsaka)(重出)。佛敎の四衆のうち在家の男をいひ、又た意譯して近事男といふ。
【七】三自歸。三歸に同じ。

ひ、乃ち諭して言く『善來せり、長者、疲勞なきを得たるや、且く坐に就く可し、今、汝と語らむ』と。時に倶梨迦長者、初め世尊の威光、相好を覩、又、軟言の慰諭を蒙りて、但、益瞻仰するのみにして全く子を覓むることを忘れぬ。世尊告げて曰く『我に妙法あり。汝、聞くことを樂ふ耶』と。倶梨迦長者言く『願くは佛、哀愍して、唯、宣示を垂れたまへ』と。佛言く『布施・持戒は生天の因なれども、天の果報は究竟と爲すに非ず。若し煩惱を斷てば、聖道に趣くべし、倶梨迦長者、我れ今汝に問はん。色は是れ常なりや、非常なりや。是れ苦なりや、非苦なりや。是れ空なりや非空なりや、有我なりや無我なりや』と。又曰く『受・想・行・識は是れ常なりや、非常なりや。是れ苦なりや、非苦なりや、是れ空なりや、非空なりや。有我なりや、無我なりや』と。爾の時、廣く爲に解說したまひ『汝、觀察して實言もて我に報へよ』と。時に倶梨迦長者曰く『我れ今、實に、色・受・想・行・識は乃ち是れ無常・苦・空・無我の法なりと知れり』と。

　爾の時、世尊又、爲に四諦の法を廣說したまひぬ。時に倶梨迦長者、是に因りて、塵垢を除去し、法眼淨を得、身心適悅にして、歡喜すること、量なかりき。

　爾の時、世尊、彼の長者の心意、開解し、恩愛、淡薄にして、若し其の子の沙門の相と作れるを見んも、必ず憂苦なからむことを知りたまひ、乃ち問を發して言く『倶梨迦、汝、何の因緣にて、來りて此に至りしや』と。倶梨迦長者、具さに上の事を以て、世尊に告ぐるや、佛、苾芻耶舍を呼びたまふに、卽ち出でたり。是の時、長者、耶舍の出づるや、沙門の形を作せるを見、復、漏盡きて、無學の果を證したるを知り、乃ち是の言を作すらく『我が子、快き哉、初め自利を能くし、又、利他を能くせり。我をして、殊妙の法を聞き、塵垢を遠離して、法眼を淸淨ならしめたるは、皆、我が子の、斯の妙利を獲たるに由れり』と。是に於て、倶梨迦、復た佛に白して言く『我れ、今家に住す、願くは佛、戒を垂れたまへ』と。佛言く『善き哉、善き哉、我れ今汝の爲に、三歸を受けん。汝、當に諦

爾の時、耶舍、宿て黠慧あり、又、無學を證したれば、纔かに佛の此の妙伽陀を說きたまふを聞き、乃ち自ら思惟すらく『世尊此を說きたまふは、我に於て猶、在家の寶飾の衣を著くるが爲なり』とて、乃ち佛に白して言く『世尊、我れ今、佛法の中に於て、願はくは沙門と爲らむ。[五]世尊、大慈もて、惟聽許を見(しめ)たまへ』と。佛言く『善來せよ、苾芻』と。鬚髮自ら落ち、袈裟、身に著きて、沙門の形と成り、儀相、具足せり。

四十四、倶梨迦入信(優婆塞の初め)

時に倶梨迦長者、始めて天曉に及びて、彼の左右、忽忽として報じて言く『長者の子耶舍、天曉を待たずして、舍より出でゝ去りぬ。今迴るを見ず、未だ至る所を委かにせず』と。時に倶梨迦長者是の語を聞き已りて、驚き怪しむこと非常にして、乃ち私かに自ら念ふらく『我が子、夜、出づるは、不正の人の相誘ふに非ざるを得む耶』とて、又、侍人に問うらく『我が子履く所、服る所、常なりや常に非る耶』と。侍人對へて曰く『彼の常に服せる妙衣、寶履、常の處に在らず、必ず身に著隨せるならむ』と。是の時、倶梨迦長者、又復、思惟すらく『我が子耶舍、寶の莊れる履及び上妙の衣を著けたれば、必ず惡事なからむ。我れ今、宜しく速かに諸處に尋ね覓めむ』と。是に於て、諸の僮僕をして頭を分つて尋ね覓めしめ、兼ねて自ら城門を出でゝ、嚩囉迦河の岸に至り、訪問、尋求せるに、忽ち岸の邊に於て子の著たる所の寶を莊れる履を見、又、彼の岸に佛有し、及つ弟子を將ゐて、彼に於て遊止したまふことを聞き、心に自ら思惟すらく『我が子、決定ず、彼に在りて住せむ』と。時に倶梨迦長者卽ち自ら履を脫ぎ、河を渡り、訪ね覓めて、將に佛の所に至らむとす。佛亦、遙かに見て、來りて子を尋ぬることを知りたまひぬ。既に佛の前に至り、佛の光明を覩、又、異相を見て、未だ子を言ふに及ばず、唯、卽ち驚歎せるのみ。世尊、方便して其の發心を承けたま

【五】世尊大慈惟見聽許。

端嚴にして與に等しき者なく、常人に非る如きを見、乃ち之に告げて曰く『我れ苦し、』と。爾の時、世尊即ち軟言を以て、之を慰呼したまはく『善男子よ、汝來れ、我れ今此處に、安樂にして無事なり』と。時に彼の耶舍、世尊、慈悲の聲もて、言を軟らげ相呼びたまふを聞き得て、即ち寶履を脱ぎ、岸の側らに致きて、縛囉(迦)河を渡り、佛の所に詣り、佛足を頂禮し、却きて一面に住りぬ。是に於て、世尊乃ち耶舍と同に還遊止し、座を敷きて坐し、即ち耶舍の爲に、應ずる如く、法を說きたまひぬ。

爾の時、世尊、耶舍に謂うて曰く『布施、持戒は、生天の因にして、五欲自在ならむと雖も、輪廻未だ斷たざれば、天福を以て、心に喜樂を生ずる勿れ。汝今、煩惱を割斷し、蓋障を除去し、解脱を得むことを求めむと欲すれば、當に聖道に於て、修習を加ふべし。道跡を證すべし、涅槃を證すべし』と。又言く『耶舍、我れ今、汝に問はん。色は是れ常なりや、是れ非常なり耶。是れ苦なりや、非苦なり耶。是れ空なりや、非空なりや。有我なりや、無我なり耶。受・想・行・識是れ常なりや、非常なりや。是れ苦なりや、非苦なりや。是れ空なりや、非空なりや。有我なりや、無我なりや』と。時に彼の耶舍、世尊の是の如き法を說きたまふを聞くことを得て、譬へば、白色の衣の染著と爲し易きが如く、塵垢を離れ、法眼淨を獲ることを得たり。

是に於て、世尊、又、爲に苦・集・滅・道の四聖諦の法を廣說したまひぬ。是に於て、耶舍即ち、座上に於て、漏盡の意解を得、無學の果を證し、便即ち世尊に答へて曰く『佛の說きたまふ所の如く、色・受・想・行・識は乃ち是れ無常・苦・空・無我の法なり』と。世尊、彼の實に已に漏盡解脱を證するを得たれども、猶、在家の寶飾の衣を著くることを知りて、乃ち耶舍の爲に伽陀を說きて曰く、

若し正道を得るも、　猶、莊嚴を戀はゞ　梵行を行ふと雖も、　未だ[三]息心と名けず　若し能く調伏すれば、　[四]執杖さへ自ら驚かむ　婆羅門なりと雖も、　是は眞の沙門なればなり。

【三】息心は、沙門(Sramana)の別譯なり。
【四】一杖・二杖・三杖等と名くる婆羅門行者を指す。

卷の第八

四十三、耶舍出家

爾の時、世尊、初めて法輪を轉じ、五苾芻を度し已り、諸の苾芻を將ゐて、[一]嚩囉迦河の岸に往き、遊止して、暫く住まりぬ。時に波羅國の中に、倶梨迦長者の子、名けて[二]耶舍と曰ふものあり、家中巨だ富みて、廣く財寶あり、母氏眷屬皆、國中の豪族にして、多畜・奴婢、互に强盛を誇り、是の奴婢の輩皆悉く、年少、聰明、多藝にして、復、歌樂を擅にして、常に左右に侍りぬ。時に、長者の子、耶舍、忽ち一日に於て、自家の中に在り、諸の妓人をして容を嚴り、服を麗しくして、音樂を鼓動せしめ、諸の眷屬と其の快樂を恣にし、旦より夜に至て、方に始めて停息せり。時に妓女の輩、各所止に還り、其の困乏せるを以て、睡、昏重を極め、警覺する所なかりき。時に長者の子耶舍、夜の後分に於て、諸の房室を巡り、庫藏を檢察し、諸の妓女の、門、掩閉せず身に拘檢なく、或は髮髻、蓬亂し、或は衣服、身を離れ、仰覆縱横にして、形體を現露し、猶ほ死人の、一も異別無きが如きを見たり。時に長者の子耶舍、因果成熟して出家の時至り、斯の相狀を覩て、忽ちに厭離を生じ、猶、發狂せるが如し。耶舍、其の富盛を以て摩尼莊る所の履あり數、千緉に及びしが、是に於て寶の莊る履を著け、夜、王宮に詣り、守門者に告げて曰く『我れ苦し我れ苦し。請ふ、王に報ぜよ』と。其の守門者、肯へて聞報せず、復、後門に詣り、守門者に謂うて曰く『我れ苦し、我れ苦し、請ふ王に報ぜよ』と。其の守門者、亦又、聽さゞりき。是の時、耶舍、夜の後分より、直ちに天曉に至るや、乃ち城門を出でゝ、嚩囉迦河の岸に至り、往來して行き、口中但だ『我れ苦し、我れ苦し』と言ふのみなりき。

爾の時、世尊、彼の岸に在し、晨旦に經行したまひしかば、是に於て、耶舍遙かに、世尊の威德、

【一】嚩囉迦(Vāraṇā)(Naśī)。後の梵語はロック・ヒル自身が疑問符を附して出すもの Varaṇā は彼が Feer より引用して出すもの。

【二】耶舍(Yaśas)。ロック・ヒル、子の名のみを出して父の名を出さず。

り。世と出世間との梵・魔・天人・沙門・婆羅門等を愍念し、利益したまふが爲なり』と。時に彼の善摩夜叉、是の唱を作し已るや、彼の四大王天、三十三天及び彼の諸天、互相に告唱し、須臾の間に、乃至梵界、諸の梵天等、皆、悉く世尊彼の波羅奈國鹿野苑の中、四八仙人住處に在し、三び法輪を轉じて、三寶出見し、人天及び諸の有情を利樂したまふを聞知し、各々、寶幢・幡蓋を執持して、來りて佛の所に詣り、天の妙花を雨らし、天の妓樂、謌唄を作して讃歎し、種々に供養し、歡喜踊躍し、佛を禮して退きぬ。

衆許摩訶帝經卷第七

諸天告唱歡喜

當る梵語は梵本 Lalita Vistara に依れば dvādaśākara-dharmacakra なり。

【四二】 鉤捉は、明かに憍陳如(Kauṇḍinya)なり。玆に於てか先の疑問は再び出づる次第にて、玆に突然此の名を出せるも、別人とは覺えず、五人の代表として先に屢々出でたる灑替梨迦其の人なるべきことは燎然たり。彼ら五人共に二つの名を有せりと解すべきか、未だ明かならず、因に尊者とは佛弟子中の長老に用ゐたる敬稱にして梵語は Ayuṣmat, Bhadanta 等あり。

【四三】 無常以下の四は佛敎の四法印といふ。佛敎と外道とを區別する四個のモツトウなり。Lalita vistara の順序に從へば duḥkham anityam anātmā nirikṣathā (苦・無常・無我・空)。

【四四】 無學(Aśaikṣa)。佛敎の聖者四果中ゝ最高阿羅漢を言ふ。學すべきことは一切學びて最早や一物の學ぶべきことも殘さざるの意なり。此れに對して前三果は尙ほ學ぶべきこと有るが故に有學或は學といふ共に梵語 Śaikṣa の譯なり。

【四五】 (原文)
所作已辦　梵行已立
我生已滅　永斷輪迴
阿羅漢の德を述べたる典型的の句なり。

【四六】 福田。供養に値する者の意なり。農夫は春、種を田に蒔かば、秋、收穫を得んが如く應に供養すべき者に供養すれば其の福報、大なるものあればなり。

【四七】 ロック・ヒル此の名を擧げず。

【四八】 仙人住處(Ṛṣipatana)此の原語より見れば、寧ろ仙人墮處とするを適譯とせん。然れども兩者共に用ゐらる。

其の道を修せり。汝等、若し能く此の四諦眞實の道に於て了覺を得れば、[四〇]自然に、彼の集なく、解なく、明なく、慧なく、菩提なく、不生なく、乃至梵界・魔界・諸天・世人・沙門・婆羅門等も亦、所住なきを知り、顚倒の想を離れて、心意、快然たらむ。當に來りて、決らず無上の正等正覺を證すべし』と。

爾の時、世尊是の如く[四一]三びに十二行法輪を轉じたまへる時、尊者[四二]鈎捉等、塵垢を除去して、法眼淨を得、及び彼の八萬の天人、法眼淨を得たり。是に於て、五人既に道を悟り已り、乃ち佛に白して言く『我等、佛の法に於て出家せむと欲す、願くは聽許を賜へ』と。爾の時、如來、五人に謂うて曰く『善來せよ、苾芻』と。是に於て、五人の鬚髪自ら落ち、袈裟身に著きて、沙門の形と成りぬ。爾の時、世尊復、鈎泥等に謂うて言く『色は是れ常なりや、是れ無常なりや。是れ苦なりや。是れ非苦なりや。是れ空なりや。是れ非空なりや。是れ有我なりや、是れ無我なりや。受・想・行・識は是れ常なりや、是れ無常なりや。是れ苦なりや、是れ非苦なりや、是れ空なりや、是れ非空なりや。是れ有我なりや、是れ無我なりや』と。鈎泥答へて言く『世尊、我れ色・受・想・行・識を觀ずるに、皆な是れ[四三]無常・苦・空・無我の法なり』と。爾の時、[四五]五苾芻、佛の是の五蘊の法を說きたまふを聞き、乃ち漏盡を得、[四四]無學を證しぬ。時に佛謂うて言く『汝等、所作已に辦じ、梵行已に立てり、我が生已に滅し、永く輪迴を斷てり。我れと汝等と六人、當に世間第一の[四六]福田と爲るべし』と。三寶の名、今、已に具足せり。

四十二、諸天告唱歡喜

爾の時、世尊是の法を說きたまふ時、一の夜叉の名けて[四七]菩摩と曰ふもの有り、高聲に唱へて言く『今日、世尊は、波羅奈國の鹿野苑の中、仙人住處に於て、三び四諦の十二行法輪を轉じたまへ

---

mārga)。
1 正見(Samyag-dṛṣṭi)。
2 正思惟 (Samyak-saṅkalpa)。
3 正語(Samyag-vāk)。
4 正業(Samyak-karmānta)。
5 正命(Samyag-ājīva)。
6 正勤(Samyag-vyāyāma)。
7 正念(Samyak-smṛti)。
8 正定(Samyak-samādhi)。
本文中八正とあるは八正道なり。

【三六】 以下四聖諦 (Catvary-āryasatyāni)、或は四眞諦といふものなり。
以下三轉十二行相中の第一轉四行相なり。
苦は、梵語 Duḥkha にして集滅は先に擧げたり。
【三七】 道(Mārga)。
【三八】 以下第二轉。
【三九】 以下第三轉。
【四〇】 以下の如き慧や菩提等を否定するが如きは後の發達佛教の空觀思想を含むものにして、佛既にこの說を爲し給へるやは疑問なれども、以下本經にはかゝる思想頗る多し。之れ本經が大乘系統に屬し、可なり後世の作なることを示すものなり。
【四一】 三轉十二行法輪を譯して斯く書せるも、十二行法輪を三度轉ずるに非ず、三度を合して十二となるは本文を讀まば明ならん。十二行法輪に

し、或は二人乞食して三人奉事し、互に給侍を爲して、精進懈ることなかりき。佛因りて之を制して曰く[三一]『二事の法あり、修行の人、行ふことを得ず。云何が二事なる。色欲に於て、貪を生ずることを爲り。此は輪迴の根にして、上人の法にあらず。若しは人の自ら其の心を正しうし、其の苦行を修するあり。此の[三二]五蘊[三三]三毒の是の如きの諸法に於て、迷なく、執なく、智眼もて觀察して、彼の輪迴を斷ち、苦樂を離れて、[三四]中道を行ひ、復、[三五]正見・正思惟・正語・正業・正命・正勤・正念・正定に於て——此の八正に於て——廣く修習し、神通を獲、涅槃を證すれば、中道と名くるを得、當に無上の正等、正覺に趣くべし。我れ是の事に於て、悉く辨じて、餘すことなし』と。

爾の時、世尊、是の如く說き已りて、又復、五人の能く法を受くるに堪ふるを觀知し、卽ち復、告げて曰く[三六]『此は是れ苦なり、汝、須らく知るべし』と。是に於て、五人思惟し、慧の眼を以て是の法を觀ずるに、過去の世に於て、曾て聞聽する所たりしかば、菩提發生して、了知するを得たり。又復、告げて曰く『此は是れ集なり、汝、應に斷ずべし』と。是に於て、五人復、是の法を思ひ、慧の眼を以て觀ずるに、過去の世に於て、曾て聽聞する所たりしかば、菩提發生して、了知するを得たり。又復、告げて曰く『此は是れ滅なり、汝、應に證すべし』と。是に於て、五人又復、思惟し、慧の眼を以て此の法を觀ずるに、過去に、已に曾て聞聽せるものなれば、菩提、發生して、復、了知するを得たり。又復、告げて曰く『此は是れ[三七]道なり、汝、應に修すべし』と。是に於て、五人又復、思惟し、慧の眼を以て、此の法を觀察するに、亦、過去の世に於て、曾つて聞聽する所たりしかば、菩提發生して、還了知するを得たり。

爾の時、[三八]世尊又、五人に告げて曰く『苦の法、我れ已に知りぬ、集の法、我れ已に斷じぬ。滅の法、我れ已に證しぬ、道の法、我れ已に修しぬ。我れ是の法を以て、乃ち佛の道を成じたり』と。

爾の時、[三九]世尊又、五人に告げて曰く『汝等應に學ぶべし。吾れ苦を知り、集を斷じ、滅を證し、

【三一】茲に二事とあり修行の人の捨つべき兩極端を擧ぐべき筈なるに、一の極端なる欲樂のみを擧げ他の一を擧げず。轉法輪經其他の經典を見るも他の一は時の婆羅門等が苦行して徒らに心身を苦しむるも無益にして、上人の法に非ざれば當に棄捨すべしといふものにして、本經にも次に「苦樂を離れて」とあるは此の二極端を棄捨しての意なること勿論なれば「若しは人の自ら」以下の文（若有人能自正其心修其苦行）に此の意を見るの外なかるべし。恐らくは文に誤脫もあらんか。

【三二】五蘊（Pañcopādāna-skandhāḥ）悉しくは五取蘊、又た五陰ともいふ。
(1) 色蘊(Rūpa-skandha)。
(2) 受蘊(Vedanā-sk.)。
(3) 想蘊(Saṃjñā-sk.)。
(4) 行蘊(Saṃskāra-sk.)。
(5) 識蘊(Vijñāna-sk.)。
心(後の四)を主としたる萬有の分類なり。世間も人間も一切此の五要素より成る。

【三三】三毒は、前に擧げたる貪・瞋・癡なり。

【三四】中道(Madhyama-pratipadā)。此の梵語は次の八正道と共に梵本 Lalita Vistara に依て出せり。

【三五】八正道 (Āryāṣṭaṅga-

梨迦・摩斛梨迦・末斛羅嘲嚩・鉢囉賀拏・尾娑羅多等——方に新に澡沐し、香油を身に塗り、廣く飲饌を排べ、坐を列べて食する次、彼の五人等、遙かに世尊を見、他の人に非ざるを知り、皆、大いに驚き怪しみ、互相に議りて曰く『今此の太子、山に居り、苦行し、佛の道を成ぜむと欲せるも、今乃ち志を退き、還我等を尋ねたり。我等、安坐して迎侍することを得る勿れ』と。世尊遙かに知りたまへども、默して行詣するに、佛身巍々として金山の如く、尊貴、吉祥にして、相好具足し、大なる威德ありて、能く儔匹ぶものなかりき。時に五人等、佛の俯近に威德、加臨するを見るや、能く安坐するものなく、皆、起ちて迎侍しぬ。是に於て、五人咸言く『善來したまへり、請ふ當に坐に就くべし』と。是の時、五人或は佛の爲に座を敷く者、或は水を汲みて足を洗ふ者、或は名衣を奉上する者、或は手を接りて扶持する者あり、是に於て、五人佛に承事すること、往昔に同じ。是の時、世尊、安祥として坐に就き、從容として言りたまひ、五人に謂うて曰く『汝等五人、初め我を見たる時、共に要議あり、我を輕ぜんと欲せり。汝等甚だ愚なり。汝等皆是れ我が族なれば、當に我が戒を行ふべし』と。是の時、世尊復五人に告げて曰く『汝等如來に於て輕慢を生起する莫かれ。何を以ての故に。汝等、若し如來に於て、輕慢を起さば、無利益を得、後、長夜に於て、大なる苦惱を獲ん』と。五人白して言く『佛、昔時に於て、所有る威儀は最上にして、世法の殊妙なりしの事と、後苦行を行ひ、最勝、清淨、無上の智を得て、妙法に通達したまへるとは、本より觸るゝ所なり。行きて、今、何處にか在す』と。佛曰く『汝、灑替梨迦・末斛梨迦・末斛囉嘲嚩・鉢囉賀拏、尾娑囉多等、若し衆生の廣大の供養、廣大の施、上妙の飲食、酥乳の味に於て、食し畢りて、沐浴し、香油を身に塗り、諸根を潔淨にし、嚴好、殊麗ならしめば、前後顧視するに、容色適悅ならん。汝等是の如くして、[二九]我を見る者と爲へども、我を見るに非ず』と。灑替梨迦等言く『是の如し、是の如し』と。時に彼の五人常に乞食を行ひしも、世尊到り已るや、或は三人乞食して二人奉事

【三〇】　爲見我者非見於我。我(ātman)を見る者とは外道の悟りを得たる者を言ふ。

奈國の鹿野の苑に在るを見たまひぬ。

四十、烏波譏の感嘆

是に於て、世尊菩提樹より、波羅奈國の鹿野の苑に往きたまふ時、路次に於て、一の仙人あり、[26]烏波譏と名け、相逆ひて來る。時に彼の仙人忽ち路次に於て、世尊を見るを得、又身長、[27]丈六にして金色晃然、相好端嚴にして殊特、世に超ゆるを見、驚歎、良久して乃ち是の言を作しぬ『瞿曇、瞿曇、汝の相好を觀るに湛然、清淨にして、復、金色の如く、世の同しき所に非ず。何に因つて出家せりや、何法に歸依するや、誰をか汝の師と爲す、今復、何へか去る』と。

爾の時、世尊、乃ち伽陀を說き、仙人に答へて曰く

我れ今、師とする所なく　世に處りて獨にして侶もなく、　正等菩提を悟り　最たる天人の師
となり、　世間、諸の法を知り、　不染にして、亦不斷なり、　一切の智力を具したれば、　當
に魔羅の軍を降すべし。

烏波譏仙人言く『瞿曇、實に汝の言の如くば、是れ佛たること疑ひなけむ』と。佛言く『是の如く了知し、及び漏盡を得、罪業を降伏したるが故に、號けて佛と爲す』と。時に烏波譏仙人、又復、問うて言く『瞿曇、今何にか往く』と。佛言く『波羅國に往いて、大法鼓を擊ち、大法輪を轉じ、當に世間未曾有の說を說くべし、亦復、過去佛の勅を宣示し、當に世間をして、法を知り、欲を離れしむべし』と、佛、是を說き已るや、彼の烏波譏仙人、世尊を頂禮し、路に隨ひて去りぬ。

四十一、鹿野苑初轉法輪

爾の時、世尊卽ち自ら彼の波羅奈國の鹿野の苑に往きたまふ時、彼の五人、――其の名は[28]灑替

【二六】 烏波譏(Upika)。一般に烏波迦と書す。

【二七】 釋尊の如き應身佛は一般に丈六なりと言はる。但し古來周の尺度に依りて八尺と爲すべしとの說行はる。

【二八】 此の五比丘の名には、他經間に於ても、多少の差異はあれども、未だ斯の如く異なるを見ず、爲に五人の名を何處で分つべきかにさへ苦心せり。ロック・ヒルの出す限りに於ては、西藏傳も略〻普通の五比丘なりといへば本經の名の出づる所何れにあるやを知らず。或はロック・ヒルの見たる以外の西藏傳にありや要するに後考を俟つの外なし。

因に通說の五比丘の名を擧ぐれば、
1. 憍陳如(Kaunjinya)。
2. 馬勝或は阿濕恃(Aśvajit)。
3. 跋波(Vāspa)。
4. 摩訶那摩(Mahānāma)。
5. 跋提梨迦(Bhadrika)。

起し、將に妙法を演べんとして、先づ偈を說きて言く

我れ今、法の甘露の雨を降らさば　當に、[二二]樂聞及び一切を潤すべし、　此に從て、人間は法の因を得む。　若し弊魔を見れば、廣說せず。

是の時、梵王娑婆世界の主、此の偈を聞き已り、定ず、世尊の妙法を演說したまはむことを知りて、身心快樂し、喜びに自ら勝へず、頭面を以て、世尊の足を禮し、右に繞ること三匝し、隱沒して退きぬ。

三十九、對機の觀察

爾の時、世尊卽ち自ら思惟すらく『今は、何人か先づ法を聞くを得む。乃ち憶ふに、往昔の阿囉拏迦羅摩等の仙人、先づ法を聞くべし。何を以ての故に。我れ往昔に於て、彼の住處を過ぎけるに、其の妙供を受け、及つ其の囑を受けたり。我れ今先づ彼の人の爲に法を說かむ』と。是の念を作したまへる時、乃ち天人あり、來り佛に白して言く『彼の阿囉拏迦羅摩等、皆、已に命終して、方に今七日なり』と。世尊、默知したまひ、又天の告ぐるを聞き、乃ち嗟歎して曰く『無常の大事に世驚かざらむ乎。又、阿囉拏迦羅摩等の薄祐、是の如きを念はゞ、正法を聞かざらむ耶』と。

爾の時、世尊復、念じたまはく『何人か、先に法を聞く可き。彼の[二三]嚕捺囉迦囉摩子、亦嘗て我に供へ亦嘗て我に囑せり』と。是の念を作す次、彼に天人あり、名けて[二四]囉吒と曰へるが、又、佛に告げて曰く『彼の嚕捺囉迦囉摩子、亦無常に趣けり』と。世尊默知したまひ、復、天の告ぐるを聞き、世尊又歎じて曰く『正法、聞き難し、薄祐乃ち爾り』と。是に於て、世尊、五人を思念したまひ『我れ王宮を出で山に入りて苦行せるに、是等尋ね來りて、我に供侍せり、我れ應に先づ彼の人の爲に法を說くべし』と。是に於て、淨き[二五]天眼を以て、何處に在るやを觀じ、彼の五人、波羅

【二二】樂聞とは、聞かんことを樂ふ者。

【二三】嚕捺囉迦囉摩子(Udraka Rāmaputra)。重出。先には嚕を烏とし囉を羅とせるも同人なり。

【二四】囉吒(Raṭṭa ?)。

【二五】天眼(Divya-cakṣu)。六神通の一。

說法を言はず亦心を生じたまはざるを知りて、斯の念を作しぬ『若し是の如くんば、世間は滅壞せむ。何を以ての故に。如來應正等覺の世間に出でたまはむこと、[18]優曇鉢の花、時に乃ち一び現はるゝが如し。今法を說かず、自ら法樂を取りたまはゞ、當に一切の貪欲ある者、邪法を樂ふ者をして、覺らず、悟らざらしむべし。云何にして、世間を滅壞せざらしめむ。我れ今彼に往いて、其の勸請を伸べむ』と。是の時、梵王、娑婆世界の主、彼の梵界を離れ、臂を展ばすが如き頃に、卽ち佛の前に至り、佛の前に住立して、伽陀を說きて曰く

出世したまへ　[19]摩伽《陀》の國は、　過去には《其の》法、無垢なりき。　悉く、甘露の門を開き、
法を演べて衆生を濟ひたまへ。

世尊、告げて言く『我が法、甚だ深うして、見難く、了し難し。我れ若し輒ち說かば、速かに滅壞を取らむ。何を以ての故に。世間の一切の、邪法を樂ふ者、貪欲ある者、聽受することを樂はず、覺悟すること能はざらむ。何を以ての故に。貪欲の者は、黑暗、覆うて障げむが故に』と。梵王白して言く『世尊、衆生は、世間に生れ、世間に老いれども、利根、鈍根及以中根、乃至相好ありて、化し易く、塵垢の輕微なる　諸の　[20]異生等あり。世尊、譬へば青蓮花、白蓮花等、水中に於て生れ、水に於て長じ、水に於いて老いれども、其の中、或ひは水を出づる者あり、或ひは水を出でざる者あるが如く、亦復是の如し。世尊、諸の異生等、若し爲に種々の妙法を說かざれば、皆な沈墮に趣かむ。唯願くは善逝、其の法寶を賜へ、唯願くは、善逝、甘露を降らしたまへ』と。

爾の時、世尊、梵王の慇懃なる勸請を受け已り、默して、之を許したまひ、審かに、諦かに、世間の衆生、世間に生れ、世間に老いれども、鈍根者、利根者乃至中下、顏貌の好醜、化し易きと化し難きと、[21]少塵と極少塵と、是の如き衆生等を觀察して、『我れ若し爲に種々の妙法を說かざれば、諸の苦の本を知らず、悉く沈墮に趣むかむ』と。世尊、是の如く觀察し、知り已りて、大悲を

【一八】 優曇鉢(Udumbara)。又た無花果と意譯し「いちじく」なり、果實の内部に花咲けば無花といへるなり。稀なる事の譬に常に用ゐらる。

【一九】 摩伽(Magadha)。又た摩揭陀とも書けり、此の頌の意味を明かにせんため河口慧海氏の西藏佛傳を譯せる頌文を擧げ置かん「古來摩揭陀に教はあれど正しくもなく、智も又汚れたり。されば甘露の法の門開き給へよ、汚れなき覺了の教を說き給へ。」以下略す。
又た方廣大莊嚴經に依るも摩伽陀の國は諸の異道多く邪見盛なれば出世し給へと請へるが故に本經の伽陀も其の意味に解したきも次の如くなればかくは解し難し、
出世摩伽國　過去法無垢
悉開甘露門　演法濟衆生

【二〇】 異生(Prthagjana)。各々類を異にして生るゝが故に異生といふとて凡人のことなり。

【二一】 塵は、塵欲なり。

の如き滅を解すれば、則ち一大苦蘊の滅を得む。

爾の時、世尊、七晝夜に於て、禪定に在し、是の如く十二緣生を觀察し已り、乃ち三摩地を出でて、伽陀を說きて曰く、

淨行もて、苦の相を觀察する時、　一一の法、因る所あるを知らむ、　若し、苦の相の不生を知らば　自然に、一切の愛する所、斷たれむ。　淨行もて、滅受を觀察する時、　滅受の法の盡くるなきことを知らむ　若し、滅受の不生を知らば　自然に、一切の愛する所、斷たれむ。　淨行もて、　緣生を觀察する時、　乃ち緣生の法の、盡くるなきことを知らむ、　若し、緣生の不生を知らば　自然に、一切の愛する所、斷たれむ。　淨行もて、有漏を觀察する時、　乃ち有漏法の、盡くるなきことを知らむ、　若し有漏法の不生を知らば　自然に、一切の愛する所、斷たれむ。　淨行もて、是の如き法を觀察し、　是の如き法、悉く無生なりと知らば　日の遍く、世間を照し、虛空に　行住して、礙ぐる所なきが如けむ。　淨行もて、苦の相を觀察し、　一一の苦、悉く無生なりと知らば、　煩惱を破壞して、餘すことなきを得んこと、　佛の、魔羅[一五]の軍を降伏するが如けむ。

三十八、梵天の說法勸請

爾の時、世尊、伽陀を說き已りて、復是の言を說きたまはく『若し、衆生、輪廻を斷ち、甚深の法を知り、微妙の言辭、悉く能く通解するあらば、是の如きの人是れ有智の者なり、我れ此等の人の爲に說かむ、我れ此等の人をして知らしめむ。我れ今是の如く、獨り林野に處るは　相應行[一六]に依て、行法の樂みを見んとてなり』と。是の時、世尊、此の語を說き已り、自在に行住して、諸の繫著なく、說法を言はず、亦心を生じたまはざりき。是の時、娑婆世界[一七]の主、大梵天王、世尊に於て、

【一五】 魔羅は、Māra（魔）の音譯。

【一六】 瑜伽論に於ける三種相應の一。相應行は理と相應するが故にかく名く。

【一七】 娑婆世界の主、大梵天王（Brahmā sahāmpati）第六卷「世の主」の註參照。

爾の時、世尊、又復、菩提樹を離れ、彼の[二]母喞鱗那龍王の宮に往きたまふ。彼の宮に到り已るや、一樹の下に於て、跏趺して坐し禪定に入りたまふ。是の時彼處に七日七夜、大雨を降霔せり、時に母喞鱗那龍王、雨方に霔ぐを以て、佛の定に在るを知り、其の風雨の氣、互に佛の身を侵さむことを恐れ、又蚊蚋蝱蠅の聖體を唼擾せむことを恐れ、遂に自らの身を以て纒繞すること七匝、首を印げて、上に覆ふに傘蓋の相の如く、七晝夜を經るも、動かず搖がざりき。佛、將に定を出でむとしたまふや、龍自ら身を攝めぬ。龍王、宮に還りて、復、種々の花鬘、塗香を以て、其の身を嚴飾し、來りて、佛の所に至り、佛足を頂禮して白して言く『世尊、七日已來、風雨の氣、蚊蝱の類ひ、侵擾したまへるや否や。聖體云何なりや。』是に於て世尊伽陀を說きて曰く

世間の一切の、衆生等を觀察するに、若し侵害なきを得れば、歡喜し、復た快樂す。欲を離れ、煩惱を斷てば、此の樂み、比喩し難けむ。無明、若し調伏しなば、斯れ最上の樂みと爲す。

爾の時、世尊是の伽陀を說き、龍王に答へ已りて、卽ち彼處を離れ、還りて菩提樹の下に來り、結跏趺坐し七晝夜を經、定に入りて、[三]十二緣生を觀察したまひき。云何が根本にして、因より生を得るや。所謂、1無明に因りて、乃ち2行を緣じ、行、3識を緣じ、識、4名色を緣じ、名色、5六入を緣じ、六入、6觸を緣じ、觸、7受を緣じ、受、8愛を緣じ、愛、9取を緣じ、取、10有を緣じ、有、11生を緣じ、生、12老死・憂悲・苦惱を緣ず、是の如き因に由りて一大苦蘊の[四]集を得。是の如き根本、生ぜざれば、則ち一切、滅を得む。所謂、無明、滅すれば、卽ち行滅し、行、滅すれば、卽ち識滅し、識、滅すれば、卽ち名色滅し、名色、滅すれば、卽ち六入滅し、六入、滅すれば卽ち觸滅し、觸、滅すれば卽ち受滅し、受、滅すれば、卽ち愛滅し、愛、滅すれば、卽ち取滅し、取、滅すれば、卽ち有、滅し、有、滅すれば卽ち生滅し、生、滅すれば卽ち老死・憂悲・苦惱、滅せむ。是

【二】母喞鱗那龍王(Mucilinda)。

【三】Dvādaśāṅga pratītya-samutpāda（十二支緣生）。普通十二緣起或は因緣と言ふ。三界の苦を生ずる根本原因を推求し之を無明に見出す佛教教理にして有名なるものなり。

1 無明(Avidyā)。
2 行(Saṃskāra)。
3 識(Vijñāna)。
4 名色(Nāmarūpa)
5 六入(Ṣaḍāyatana)。
6 觸(Sparśa)。
7 受(Vedanā)。
8 愛(Tṛṣṇā)。
9 取(Upādāna)。
10 有(Bhava)。
11 生(Jāti)。
12 Jarā-maraṇa-śoka-parideva-duḥkha-daurmanasya-upāyāsa（老死愁悲苦憂惱）

(12)は本文と少しく當らざるが如きも何れか二を合して一となしたるなるべし。

倘ほ茲に緣ずとは緣生するの意此れにつきては第十卷末の文明かなり。

【四】集(Samudaya)は、四諦の第二の集にして發生の意味なり。倘ほ苦蘊は一切の有爲(生滅に亘るもの)をいふ。五蘊より成り苦を免れざればなり。

の時、天魔は佛、世に出づれば、衆生を敎化し、三界を出離せしめて、當に我が境を空しうすべきを恐れ、常に其の隙を伺ひ、來つて惑亂せむと欲しければ、忽ち疾を發したまへるを知り速かに天界を離れ、來りて佛の所に至り、是の言を作すらく『善逝、汝今、安らかならざるは、涅槃の時至れるなり。我れ今請ふらくは、佛、大涅槃に入りたまはむことを』と。爾の時、世尊、是れ魔來りて我が心を亂さむと欲するなりと知して、佛、魔に謂うて言く『涅槃は未だ至らず、我れ今、直ちに[九]聲聞の弟子の、佛の法分を解し、智慧、明達にして、教の本を了知し、廣く法相を演ぶるものを待たむ、乃至[一〇]苾芻・苾芻尼・優婆塞・優婆夷等、梵行を修持し、衆多の人――大地に周からむと欲する――及び彼の天人ありて、皆、解脫を證せむ。我れ是の時に於て、方に涅槃に入らむ』と。時に彼の天魔、佛の語を聞き已りて、涅槃したまはざるを知り、心に懊惱を生じ、是に於て、天魔、慚恥して退きぬ。

爾の時、帝釋天主、遙かに世尊の體、風病を發したまへるを知り、天より下りて贍部洲に至り、――菩提樹を去ること近からず、遠からざるに大なる[一一]訶梨勒林あり――中に於て住まり、此の林の中に於て、上好の訶梨勒を取り已り、佛の所に往きぬ。佛の所に到り已りて頭面を地に著け、世尊の足を禮し、禮し已り、瞻仰して、一面に住立し、白して言く『世尊、我れ聖體、小く風病あるを知りぬ。此の贍部洲に訶梨勒の色妙に馨香はしきあり、斯の恙を療す可し、我れ今、持ち來りたれば、世尊に奉上すべし、唯願くは、大慈納受して食りたまへ』と。世尊受け已りて、尋いで便ち服食するに、風病卽ち除こり、體、安かなること故の如し。世尊勞を慰めたまへば、帝釋乃ち退きて、天宮に還歸しぬ。

三十七、龍宮樹下禪定（十二緣生の觀察）

【九】聲聞（Śrāvaka）。

【一〇】佛教の四衆と名けらるるもの
苾芻 Bhikṣu―出家―男
苾芻尼 Bhikṣuṇī―出家―女
優婆塞 Upāsaka―在家―男
優婆夷 Upāsikā―在家―女

【一一】訶梨勒林（Haritaki）。天主將來とも譯し五藥の一なり、大さ、棗の如く其の味酢く苦味あり、服すれば便を能くすと。

四を合して、一と爲す、四器は合すと雖も、楞際、疊り存せり。是に於て、世尊、生を利せむが爲の故に、即ち此の鉢を持ちて、布薩婆梨迦の所に於て、施す所の食を受けたまひ、既に納受し已りて、即ち布薩婆梨迦に謂うて曰く『我れ今汝が爲に、[五]三歸を演說せむとす。汝當に諦かに受くべし』と。時に布薩婆梨迦、敎を奉じて住まりぬ。

世尊曰く『佛に歸依し(奉る)、法に歸依し(奉る)、[六]未來の僧伽に歸依し(奉る)。此れは是れ三歸なり、汝の形壽を盡すまで、違悔するを得ざれ』と。時に布薩婆梨迦、佛に白して言く『我れ今ま佛に歸依し(奉る)、法に歸依し(奉る)、未來の僧伽に歸依し(奉る)、此の形壽を盡すまで、敢へて違悔せず』と。

爾の時、世尊、布薩婆梨迦に謂うて曰く『隨喜の布施は果を感ずること虛しからず、汝自ら施を捨したれば、定らず快樂を獲、求むる所の福報、願の依に皆な得、又復、當に最上の寂靜を證すべし。布薩婆梨迦、若し布施を行へば、作す所、福利あり、人天及び魔も迷惑すること能はざらむ。乃至禪定・智慧、若し能く盡く行はゞ、能く苦の源を竭し[七]見前に聖を證せむ』と。是の時、布薩婆梨迦、是の說を聞き已りて、心意快然として、歡喜踊躍し、『願くは、未來世の中に於て、憶念し、受持して、亦、忘失せざらむ』と。是の語を作し已り、佛を禮して退きぬ。

三十六、風病現示(魔と帝釋)

爾の時、世尊、商主布薩婆梨迦の施す所の食を受得したまひ、即ち持ちて彼の尼連河の邊りに往き、即ち岸の上に於て草を敷きて坐し、受くる所の食を喫り、食既に畢已りて、又復、盥漱したまふ。是の如きの際、忽ち體中に風病を發せるを覺えたまふ。——何を以ての故に、佛、[八]出世間なるに斯れを示したまふや。衆生をして、身は幻の如きことを知らしめむと欲するに緣るが爲の故に——是

【四】楞際は、縫目なり。

【五】三歸(Tri-śaraṇa-gamanāh) 佛法僧の三寶に歸依すと稱ふる三歸(依)の法を言ふ。佛敎を信奉するの表白なり其の語本文の如きも梵語にては Buddhaṃ śaraṇaṃ gacchāmi Dharmaṃ śaraṇaṃ gacchāmi Saṅghaṃ śaraṇaṃ gacchāmi 普通之を三度するを常法とす。

【六】茲に未來と附せるは未だ僧伽(saṅgha)なかりしが爲なり、一般の佛傳にはこの商主は未だ僧伽なかりし時なれば佛法の二歸依をなせりと傳ふ。僧伽は略して僧ともいふも今日の如く一個の僧の意にはあらず、佛の敎に從ひ佛の法を行ふ比丘等の敎團を總稱して言へるなり。

【七】見前は、現前に同意義。

【八】出世間とは、世間に對して言ふ語、梵語Loka-uttaraを譯せるものにして世間的の一切の規約條件を離れたる貌。

『我れ今、食を奉げ、最上の供養を爲さば、如來は必ず當に最上の法を演說して、我等をして獻食の因を以て、天の樂果を得しむべし』と。是の念を作し已りて、尋いで佛の所に至り、卽ち頭面を用て如來の足を禮し、禮し已りて起立し、瞻仰して住したる時、布薩婆梨迦、佛に白して言く『世尊、我れ親友と種々の飮食を辦造して、來り供養せむとす。願くは佛、慈愍して、唯だ納受を垂れたまへ』と。

爾の時、世尊許せども、未だ受けず。何を以ての故に、佛初め道を成じたれども、未だ應器あらず、是の思惟を作したまはく『我れ若し、應器を以て、斯の供養を受けざれば、彼の外道、天魔必ず毀謗を生じ、是の如き言を作さむ「豈、過去の正等正覺の、衆生を利益せむが爲の故に、是の如く、其の供養を受けたまひしものあらむや」と』。佛(是の)念を作せる時、彼の梵天子、佛に白して言く、『世尊、過去の正等正覺、衆生を利益せむが爲の故に、皆、應器を持ちて、檀施の飮食、供養を受けたまへり』と。是に於て、世尊應器を思欲すれば、彼の四大天王、卽ち佛の意を知りて、乃ち各自らの天に於て、其の妙工をして寶石を選び取り、少時の間に於て、應器の淸淨、瑩徹にして、殊妙、比ひなきものを造成せしめぬ。時に四天王、鉢を造成し已り、各々自ら持ち同に來り奉獻せむとし、佛の所に至り已りて、卽ち頭面を以て世尊の足を禮し、禮し已りて、瞻仰して、一面に住立しぬ。爾の時、四大天王、異口同聲に世尊に白して言く『我等今者、各、寶石を以て、應器を造り得、同に來りて奉上せんとす。唯、願くは世尊、哀愍して納受したまへ』と。是の語を作し已りて顒いで佛の旨を聽きぬ。

爾の時、世尊復自ら思惟すらく『今此の四王、各一鉢を獻げぬ。我れ若し一を受くれば、三天喜ばず、我れ若し三を受くれば、一天、惱を生ぜむ。我れ今、等しく四天の鉢を受けむ』と。旣に鉢を受け已りて、又復、思惟すらく『唯一の器を用ゐんか、四鉢孰れか先たらむ』と。卽ち神力を以て、

復、伽陀を說きて曰く

能く、世間の一切の愛を斷ちなば　一切の煩惱、自ら除滅せむ。　煩惱を知る者は、輪廻を脫れ、
當に、解脫の快樂を得べし。

三十五、商主供養

爾の時、世尊、七晝夜に於て跏趺して坐し、禪定に入りたまふ。爾の際に當りて、亦人の食を持ちて供養するものあるなかりしも、纔く偈を說き已るや、忽ちにして商主あり、布薩婆梨迦[三]と名け、五百の量車を將き、諸の寶貨を載せて、他國に往かむと欲して、近地を經過しぬ。時に布薩婆梨迦、宿の善根力を以て、常に思念を起すらく『云何が、我をして、善友及び妙眷屬を獲得せしめむ』と。忽ち、人の、世尊定に入りて、七日飲まず、食したまはずと言ふを聞き、是の念を作して言く『今、佛世尊、烏嚕尾羅池の側ら、尼連河の邊りの菩薩樹の下に、七晝夜を經るも、飲まず、食したまはずして定に入ると。解脫の樂を得、等正覺を成ぜしかば、此れ我が善友たり、當に我が爲に、我を益すべし。我れ今宜しく速かに彼に詣り、食を奉げ、最上の供養を作すべし』と。是の心を發し已りし時、天人あり、天報通を以て、布薩婆梨迦の是の如き心を發せることを聞知し、乃ち布薩婆梨迦及び一切將ゆる所の車乘等を觀照し已り、乃ち先に佛に白して言く『今商主布薩婆梨迦、佛此に在して、解脫の樂を得、等正覺を成じ、菩提樹の下に於て跏趺して坐し、禪定に入り、七晝夜を經るも、飲まず、食したまはざることを聞きぬ。彼の人、定ず、來りて、食を獻げ、供養せむ。果報を希望し、大安樂及び利益を求むるが故に』と。是の語を作し已り、隱れて見れず。是に於て、布薩婆梨迦、同行の親友と自手もて、種々の飲食の美妙・香潔・品味なるを辦造し、成し已りて、即ち專注、虔誠にして、持ちて以て、佛に奉げむとす。未だ佛の所に至らず、復、斯の念を作すらく

【三】帝梨富婆(Trapuṣa)。跋梨迦(Bhallika)。ロック・ヒルも通說の如く右の二商主を出すに本經之を合して一人となす、他に類を見ざるが如し。

卷の第七

三十四、梵天禮請

爾の時、二の梵天子あり、自らの梵界に住して、是の念を作すらく『今、南贍部洲に佛、世尊あり、烏嚕尾羅の池の側ら、尼連河の邊りの菩提樹の下に、等正覺を成じたまふ』と。彼の佛、世尊、樹下に於て、結跏趺坐し、七晝夜に於て、火界に入りたまふ時、二梵天互相に、謂うて言く『我等、天人亦大力あり、臂を展ばすが如き頃に、能く彼に到らむ。我等今者、宜しく速かに彼に往き、妙なる伽陀を以て、讃請を伸ぶべし』と。是に於て、二天、彼の梵界より、速かに佛の所に至り、旋繞し、瞻仰し、禮重し畢已りて、佛の前に住立せる時、一の天子、先づ伽陀を以て、讃請して曰く

　願くは佛、[一]道樹より起ち、衆生界を救度し　爲に、最上の法を説き、智の法寶を得しめたまへ。

第二の天子、亦伽陀を説きて、讃請して曰く

　佛の面は滿月の如く、　心淨くして、煩惱除こりたまひぬ。　願くは、甘露の法を説き、　行いて世間を安樂ならしめたまへ。

二の梵天子、是の伽陀を説き、　佛を讃請し已り、隱れて、現はれず。爾の時、世尊、彼の禪定を出で、諸の世間を觀じて、伽陀を説きて曰く

世間に所有る諸の欲樂も、　乃至、天上に所有る樂みも、　若し貪を斷つの大なる樂みに比べんに、[二]十六分しての、一にも及ばざらむ。

復た伽陀を説きて曰く

世の苦の重擔を擔はゞ、　苦に迷うて、而も捨てず　若し、苦の重擔を捨てなば、　能く、最上の樂みを擔はむ。

【一】道樹は、菩提樹と言ふに同じ。

【二】比較して及ばざる譬に屢〻用ゐらる。

心に大なる歡喜を生じ、讃じて言く『善き哉、甚だ希有たり』と。爾の時、大地震動し、佛の光、普く幽暗の處を照し、所有る衆生、互ひに相覩るを得て、歸命し、頂禮しぬ。

衆許摩訶帝經卷第六

不善の業、好醜を受報せむことを觀じて、究竟して明了なりき。又復、思惟すらく『欲界・色界・無色界の苦・集・滅・道の四諦の行相、若しは染、若しは淨、[四三]分別、倶生の根、諸の惑に隨ふ』と。是の如く思ひ已りて、無漏の智觀、速かに現前し、[四四]見修の二道、頓かに捨てゝ生せず、無上の覺を成じたまひぬ。

三十三、羅護羅誕生

爾の時、魔衆即ちに皆退散し、復・淨飯王に告げて曰く『悉達多太子、金剛座の上に於て、無常を得たまひぬ』と。王、既に聞き已りて、諸の眷屬と悲啼し、懊惱し、迷悶して、地に倒れぬ。時に天人あり、淨飯王に告ぐらく『太子、已に無上の菩提を成じたまひぬ』と。王、是の語を聞きて、心に大いに歡喜しぬ。及つ王に奏して云く『甘露飯王、其の一子を生みたまひ、耶輸陀羅亦一子を生みたまふ』と。王と諸の眷屬皆、大いに踊躍しぬ。

爾の時、淨飯王、諸の臣僚に勅し、街巷、道陌をして掃灑して淸淨ならしめ、衆くの妙香を焼き、幢幡・眞珠・瓔珞を竪立し、城の四門に於て、皆、金銀、珍寶の種種の財物を聚め、諸の沙門、婆羅門及び諸の外道、貧乞の人に施して、爲に福祐を作さしめぬ。甘露飯王、子を生むの時、眷屬、歡喜せしかば、[四五]阿難陀と名け、耶輸陀羅、子を生むの時、月に蝕障ありしかば、[四六]羅護羅と名けぬ。時に淨飯王言く『耶輸陀羅の子、佛の種に非ざらむ』と。耶輸、聞き已りて、恒に憂惱を懷けり。王宮の後園の池の岸に一石あり、菩薩石と名けぬ。羅護羅、石に坐し戯を作せるに、母、忽ち之を見て、誓を立てゝ言く『若し是れ佛の種ならば、願はくは水に溺れざれ。如し佛の種に非ずば、卽ち水の下に沈めよ』と。是の誓を作し已り、手を以て、石を推したれば、子も亦墮落せるも、石は水面に浮び、子は猶戯を作せり。時に淨飯王、諸の眷族と來りて岸の上に至り、子の是の如きを見て、

【四三】 委しくは分別起・倶生起といひ惑心の起るにつきての區別なり。邪師・邪教・邪思惟に依つて起るは前者にして、之に依らず自然に起るを後者とす。

【四四】 惑(煩惱)に、見惑と修惑との二あり、此の各ゝを斷ずるを見道・修道といふ。羅漢四果のうち預流果に入れば見惑を斷じ最後の羅漢果に入れば修惑を斷じ盡す。

【四五】 阿難陀(Ānanda)は、梵語にて「歡喜」の字義を有す。

【四六】 羅護羅(Rāhula)。第一卷に羅怙羅とあるに同じ。月蝕は印度にてRahuの神之を捕ふるが故に生ずといふより此の說あり。

天の神、地より涌出し、合掌して、唱へて言く『魔王、我が佛は、往昔、三大阿僧祇劫を經て、無數百千那由他倶胝の頭目、髓腦・國城・妻子・金銀・珍寶を捨て、衆生を利益し、無上の智を求めたまふこと、眞實にして、虛しからず。汝、魔、疑ふこと勿れ』と。魔王聞き已りて、心に驚怖を懷き、默して自ら思念すらく『若し菩薩をして、道を成ぜしめば、我が境界を侵し、我が威光を奪はむ』とて、天宮に旋歸し、別に魔計を作し、卽ちに三女を化りて、端正に莊嚴し、佛の前に來り、窈窕として逶迤し、詐りて瞻仰を爲して、魔魅せむと欲せしめたるに、佛、神力を以て、變へて老母の髮白く、面皺み、陋惡にして尫羸なると成し、鏡を以て之を照したまへば、慚ぢ滅ぢて退きぬ。魔王見已りて、事の成らざるを恨み、心に熱惱を生じ、卽時に三十六倶胝の鬼魅の兵將の、身に鎧甲を披け、手に槍劍、及び弓弩、羂索の種々の器仗を執れるを統領し、復、毒龍・猛獸・象馬・水牛・虎狼、野干等を集め、奔り聚めて同に行かしめ、又宮中に於て、雲雷・電閃・霹靂・風雹を現はして、四面より一時に、逼惱し侵害しぬ。佛、眼に之を視て、彼の愚迷を愍れみ、慈心定[三六]に入りたまふ。卽時に淨光天子、虛空中に於て、大なる傘蓋を變りて遍き空中を覆ひ、風雹を遮止し(奉れ)ば、刀劍、弓箭の種々の器仗、倶に天花――謂はゆる、優鉢羅花[三七]、鉢納摩花、倶母那花、奔茶利迦花――と作り、金剛座を繞りて、佛を供養するが如かりき。卽ち三摩地に於て、神通力を運かし、多を合して一と成し、一を以て多と爲し、虛空の中に上りて、行住坐臥し、身の上に水を出し、身の下に火を出し、水を履むこと地等の如く、種々に神變し已りぬ。復、彼の衆の[三八]布捺識囉邪見[三九]・疑惑[四〇]・貪欲・瞋恚・愚癡等、及び彼の有情の離欲・著欲・有想・無想・等引[四一]、近分解脫[四二]・非解脫、是の如き等の法を觀じ、通達して明了に、宿命通を以て、魔等の有情の過去の父母、一生・二生・百生・千生乃至增劫・減劫・無數の劫の世界の國土・族姓・眷屬・富貴・貧賤・長壽・短壽・命終・生處を觀じて、證知せざるはなく、天眼通を以て、魔等の有情の未來の諸趣、生死の因果、及び身・語・意等の善・

【三六】空理に安住して他と諍はざる無諍定なるべし。

【三七】鉢納摩(Padma)。黃蓮華。

【三八】布捺識羅は梵語、Pudgala(補特伽羅)にして「我」の意なり、故に布捺識囉邪見とは「我」ありと執する外道等の邪見なり。

【三九】疑惑は、梵語(Vicikitsā)。

【四〇】貪欲以下は、三毒と稱し一切の煩惱を總括するものなり。
(1) Rāga
(2) Dveṣa
(3) Moha
又た三毒の火といひ、三火ともいふ。

【四一】等引(Samāhita)。定の一種。此の力に依りて身心の平等を引生するが故にかく名く。三摩四多と音譯す。

【四二】色界及び無色界の八根本定に對する方便加行の定を近分定(Sāmantaka-samādhi)と言へば、この定に達して得る解脫を近分解脫と言ふべし。非解脫は解脫せざるもの\意味なりと思へ共、或は近分定の一種未至定(anāgamya-samādhi)に相當する解脫を譯せるやも知れず。

柔軟にして、兜羅綿の如し――[三〇]菩提樹の前に詣り、金剛座の上に陳きぬ。

三十二、降魔成道

爾の時、菩薩、相好の身を擧し、金剛座に登りて、結跏趺坐し、誓を發して言く『我れ此の座を起たず、直ちに[三一]漏盡に至らむ』と、意を正しうし、心を繋びて、三摩地に入りたまふ。時に魔宮の中に、二種の旗あり、一は喜相と名け、二は疑相と名け、動けば、表はす所あり。時に疑相の旗、忽然として搖り動きたれば、魔見て驚き疑ひ、不吉あらむことを慮れ、卽ち觀相を作し、淨飯王の子、悉達多、金剛座に坐し、無上の覺を求めたまふことを知り、時に魔、[三二]波旬、嫉妬心を生じ、身を變へて、人と爲り、詐りて淨飯王の書を作り、菩薩の前に至りて、敬を致し、問訊すらく『云何が此に住して、久しく歸還せざる。提婆達多、太子の宮に入り、恣に非法を行ひ、釋種を殺す』と。菩薩、初め聞きたまふや、[三三]三種の不善を生じたまふ――婬欲と、親里の殺害とを尋思し、及び瞋恚を起せるも、――魔の所作と知るや、復、三善を成じたまふ。一には離欲、二には不殺、三には無瞋なり。魔、復、問うて言く『云何が、此の菩提樹の下に坐したまふや』と。佛言く『我れ無上の智を求む』と。魔言く『無上の智、汝、何にして之を得むや』と。佛言く『汝は是れ、魔罪の人たるに、一の婆羅門に供を設くるも、尚自在の報應を得む。我れ、三大阿僧祇劫を經て、無數百千[三四]那由他俱胝の頭目・髓腦・國城・妻子・金銀・珍寶を捨て、衆生を利益し、無上の智を求むに、云何が得ざらむ』と。魔言く『我れ、一の婆羅門に會を設けむに富貴、自在を得むことは、汝能く我が與に證を爲せり。汝の三大阿僧祇劫を經て、頭目髓腦等を捨て、衆生を利益し、無上の智を求むること、誰か汝を證するや』と。爾の時、世尊、金剛座の上に於て、卽ち右手の金剛莎帝迦萬字網輓の相を展べ、無畏の印を作し、地面の上に觸れて、告げて言く『我が爲に證明せよ』と。時に[三五]地

【三〇】菩提樹(Bodhi-druma)(ラリタ・ヴイスタラに依る)佛、この樹下に於て菩提を成ぜしに依り此の名あり。其の名には異說あれども西域記は畢鉢羅樹(Pippala)なりと言ふ。

【三一】漏盡は、煩惱盡くるの意。

【三二】波旬(Māra Pāpiyan)。(ラリタ・ヴイスタラに依る)。

【三三】三不善とは、十惡中の邪淫・殺生・瞋恚の三惡に當り、次の三善とは、十善中の之に反する三種に當る。十善のことは後に註す。

【三四】那由他俱胝　那由他 Nayuta) 俱胝(Koṭi) 共に數詞にして俱胝ば兆に當り、百俱胝が一阿由多(ayuta)にして、百阿由多が一那由多なりといふ。尚ほ百千とは西洋風の計算にて十萬を言ふ。かくてこの計算は兆の那由他(一萬兆)倍の又た十萬倍となり、如何に呼ぶべきかを知らず。其の又た無數倍といふことゝならんも、要するに無數の形容語と見て可ならん。

【三五】地天は、地居(Bhauma)の天の意なり。

未だ時刻を逾えざるに、山卽ち摧け毀れぬ。菩薩、茲れ何の業緣ぞと驚き怪しみたまへる時、淨光天子、菩薩に白して曰く『萬行、今、圓かにして、四智[三六]將に就らむとす。此の地、薄祐にして勝ふる能はず。此を去ること遠からず、金剛座[三七]あり、三世の如來、正覺を成じたまふの處なり』と。菩薩卽ち往きたまへば、天人、前を引き、足下に蓮を生じ、海水、潮を泛らし、大地、震ひて、響く聲、鐘を扣くが如し。菩薩徐ろに行いて、一の大窟に至れば、內に黑龍あり、昔より兩目なかりしに、地震ひ、海潮るを聞きて、卽時に窟を出でゝ、雙の眼、頓かに明き、菩薩の身相端嚴にして光、聚日を逾えたまふを見ることを得て、龍、大いに歡喜し、瞻視し戀仰し、偈を說きて言く、

地、震ひ、海、潮りて、倶に聲を作せり。我れ今聞きて、速かに宮殿を離れたるに、忽ちに、光明を得、如來を見(奉り)、一心に瞻仰すれば、歡喜を生じぬ。

爾の時、龍王、菩薩に告げて言く『憶念するに、昔時、佛の出世あるの時、我が兩眼、倶に光明を得、彼の世尊を見たり。今亦是の如く、眼を開くことを得、佛身の相を見たり』と、卽ち偈を說きて言く、

我れ昔し、佛の大なる威德を承けぬ。我をして、相好の身を覩るを得しむれば 必ず、牟尼の覺道成るに遇はむ。佛の端正なるを見るに、亦是の如し。

三十一、入菩提道場

爾の時、菩薩、金剛座に至らむと欲したまひ、先づ右足を擧げ、行くこと牛王の如く、身は寶山の若く、袈裟動かず、心、虛空に等しく、面滿月の如く、金光、照耀して、大法の藥を繞み、靈禽、異獸、右に旋りて隨つて轉じて、是の如き等の十種の祥瑞ありき。菩薩思念すらく『吉祥草[三八]を以て、金剛座に鋪かむ』と。天主帝釋、卽時に身を化へ、香醉山[三九]に往いて、吉祥草を取り、――其の草、

【三五】金翅鳥(Garuḍa)。又た迦樓羅等と譯し、龍を取つて食となす、所謂八部衆の一なり。

【三六】四智(Catvāri Jñānāni) (1) 大圓鏡智(Ādarśajñāna)。(2) 平等性智(Samatājñāna)。(3) 成所作智(Kṛtyānuṣṭhānajñāna)。(4) 妙觀察智(Pratyavekṣaṇājñāna)。(名義集)

【三七】金剛座(Vajrāsana)。

【三八】吉祥草(Kuśa)。古來印度に於て儀式に用ゐらるゝ神聖なる草。

【三九】香醉山(Gandhamādana)。又た香山といひ、香林を有するを以て有名なり。

今饑渇せり、當に糜粥を以て、我に施せ』と。童女白して言く『吾此の食を作り、苦行の仙人に施さむ。汝の取る可きに非ず』と。時に天主帝釋、卽ち自ら身を化へて婆羅門と爲り、女の前に住立したれば、女、乳粥を以て布施して與へむと欲せり。婆羅門曰く『我は敢へて受けず、[二三]世の主、大人あり宜しく應に供養すべし』と。童女復、問うらく『世の主とは何人ぞや』と。婆羅門言く『此を去ること遙かに匪ず、大梵王あり』と。童女言を承け、卽ち彼處に詣りて、粥を以て施を奉げぬ。大梵王曰く『我れ敢へて受けず。[二四]淨光天子あり、最上にして殊勝なれば、汝宜しく供養すべし』と。女復、彼に往いて、粥を以て布施せるに、淨光天子言く『我れ敢へて受けず。一の菩薩あり、尼連河に浴し、身、氣力を乏ひ、手を以て樹を攀きて河岸の上に出で、袈裟衣を被、將に佛果を成ぜむとす。若し能く供養すれば、大なる勝利を得む』と。童女聞き已るや、卽時に馳せ往いて、鉢を以て粥を盛り、虔心に上獻すれば、菩薩默然として、其の供養を受け已りて、鉢を擲げ、尼連河に入る。龍王、前に至りて鉢器を取らむと欲するに、帝釋、身を化へ[二五]金翅鳥と爲れば、龍卽ち驚き退き、帝釋、鉢を得て、忉利天に安き、塔を建てゝ供養せり。爾の時、菩薩、二童女に問うらく『此の乳糜を施せるに、何の求むる所かある』と。童女答へて曰く『我れ聞くならく、雪山に相近く婆儗囉(底)河の側ら、迦毘羅仙人の住處に、淨飯王の童子の身相、端嚴にして、當に輪王と作るべきありと。求めて夫と爲さむと欲するなり』と。菩薩告げて言く『彼の童子は、夙に梵行を修し、欲を離れ清淨にして、一切義成と名け、久しからざるの間に當に菩提を得べし。云何が汝の與に、夫と爲らむ耶』と。童女聞き已り、默然として住立しぬ。

三十、盲龍豫言

菩薩身を擧して、一の石山の、峭峻にして、孤り拔んで、林樹甚だ衆きに登り、此に於て安坐し、

---

(2)の漢譯、佛所行讃又た梵本に同じく女の名難陀婆羅闍を上げ、(3)と最もよく一致する方等大莊嚴經も(3)と同じく、斯那鉢底と其の女善生(Sujātā の意譯)を上げたり。

【二一】 牛乳と米飯とより作る粥。

【二二】 莎惹帝迦(Svastika) Lalita-vistara (梵本) には Śrīvatsasvastikānandyāvartapadmavardhamānādini maṅgalyāni とあり方等大莊嚴經之に相當する所に千輻輪波頭摩等吉祥之相と譯せり。抄譯なるを知るべし。此の梵文中 Śrīvatsa にも萬字の意あれども、svastika は一層多く用ゐらるゝ上に莎惹帝迦萬字と書するを見れば Svastika なること明かなり。因にラリタ・ヴイスタラの此の文は佛、八十種好の最後のものなり。(前卷註一七參照)

【二三】 世の主、梵天を娑婆の主(Sahāmpati) といひ、娑婆とは此の三千大千世界の意なれば茲に意譯して世の主といへるなり。

【二四】 淨光天子は明かならず徧淨天か淨居天の誤りにはあらざるか。方廣大莊嚴經に依るに本經に淨光天とあるは多く淨居天(色界第四禪の上)なり。

まへども、氣力羸劣して起つこと能はず、即ち飲饌、並びに湯藥等を取り、節次に服食し、仍ほ香油を以て其の身體に塗り、澡浴し、眠寢して、身心を安適にし、勢力を增長したまへり。時に彼の五人、相謂ひて曰く『昔者、太子輪王の位を捨て、迦毘羅城を出で、山野の中に入りて、久しく玆に苦行したまひ、道果、將に就らむとして、節志堅からず。何の期するありてか、今に於て、情に恣せて飲食し、香油、體に塗り、身を澡ぎ寢に安きたまふ。是の如く虧喪して、云何が出離せむ。我等此に於て、虚しく其の功を捐てぬ。聞くならく、波羅奈國に[一九]鹿野苑あり、羅漢の聖衆、恒に其の中に住すと。宜しく彼處に往いて、各明道を求めむ』と。

二十九、二女献乳

爾の時、菩薩尼連河の水に浴したまふに、體、羸せ力弱りて、歩を擧ぐること攸難く、岸の樹、枝を垂れたるを攀きて、出づることを得、即ち西嚢野偏聚落の所に往きたまふ。其の聚落の内に[二〇]二童女あり、一は難那と名け、二は難那末羅と名け、身色端正にして、心性、慈善なり。頃ろ、太子の雪山の下、婆儗囉底河の邊、迦毘羅仙人處に在りて、梵行を學修し、三十二相の福德莊嚴を具したまふを聞き、深く心に悅慕し、願くは匹偶たらむと、布施、修福して、願ふ所を遂げむことを求めぬ。爾の時、童女、尼連河の側らに苦行の仙人ありと聞き、遂に勤誠を發して、乳粥を施さむと欲し、即ち千牛を以て分つて兩群と爲し、五百牛の乳を搾りて、彼の五百牛に飲ましめ、復、五百を以て分つて兩群と爲し、二百五十牛の乳を搾りて、二百五十牛に飲ましめ、是の如く分ち飲ま(しめ)て、八頭牛に至り、復、八牛の乳を搾りて最も濃厚となし、玻瓈の器を用て、乳糜の粥を煮たるに、乳糜の上に於て[二一]蒜惹帝迦萬字の千輪輻相を現はしぬ。時に一人ありて、此の輪相を見て自ら思念すらく『若し人、食するを得ば、速かに無上の菩提の果を證せむ』と。即ち童女に告ぐらく『我れ

【一九】鹿野苑(Mṛgadāva)。

【二〇】二童女の名(1)Nandā (2)Nandābalā 第九卷には難那及び其の長女とあり難那を父親の名とす。ロック・ヒルは西藏傳を述べて父親の名はSenaにして彼れ此の村に長たるが故に聚落の名をSenāniといふとせり。此の父子の名に就きては異說多し、今その一二を列記すれば
(1)Bigandet 所傳のビルマ傳 父Thena(sena) 女Thodzata(sujatā)
(2)Buddhacarita. 女Nandabalā
(3)Lalitavistara,父Senapati 女Sujātā

なし。若し正覺を求めば、何ぞ節食に在らむ。正見、相應すれば、取捨、能く忘れむ。是れ正に菩提、是れ眞の究竟なり、譬へば、濕れる柴の體、滋潤なりと雖も、若し火の然えたるに遇へば、必ず熾燄を生ぜんが如く、叉婆羅門の家、欲を行ずと雖も、心、著する所なければ、亦解脱を得るが如く、我れ今、亦爾り。若し正法に依りて行ひ、著する所なくば、必ず菩提を證せむ』と。

時に淨飯王、彼の太子、山野の中に在りて精勤、苦行し、日、麻麥を食して無上の道を求めたまふことを知り、涕涙悲泣して、心に痛惱を懷き、酥鉢囉沒駄王と、各二百五十人を遣はして侍衞、給使せしめたまふ。時に耶輸陀羅、忽然として懷妊せしかば、王、卽ち告諭すらく『宮人、眷屬、今より往、太子が山に在りての苦行の事を說言するを得ざれ。彼傷惱して、腹の子を損動せむを慮ればなり』と。

二十八、尸陀林の靜觀

爾の時、菩薩、尸陀林の中に往き、右脅にして、屍を枕に、足を累ねて臥し、思想したまはく『世間は有爲にして生滅し、蟻の循環して、窮盡あることなきが如し』と。思ひ已り、復坐して三摩地に入る時、童男・童女あり、林の下に來りて、菩薩の目を閉ぢて動かざるを瞻見し、手に柴枝を執り、菩薩の耳に穿し、兩邊通過せしめ、倶に是の言を作す『此の塵土、[一八]鬼も親近するを得ず』と。卽ち砂石・瓦礫、を以て、菩薩の身に擲げて、各捨て去りぬ。須臾の間を經て、三摩地を出でたまふに、正念現前して、身心動かざれども、又自ら思惟すらく『今此の所作も亦正行に非ず、無上の道に於て相應せず。憶念するに、昔日太子たりし時、暫く王宮を出で贍部樹の下に往いて、三摩地に入りしに、彼の處は清淨にして罪垢を遠離し、諸の穢惡なく、善根を出生したりき。彼に於て修行すれば、必ず道果を圓ぜん』と。是の念を作し已り、卽便ち身を擧げ、往いて前行せむと欲した

【一八】鬼(Piśāca)（ロック・ヒル）。鬼に諸種あれどロック・ヒルの如きは委しく畢舍遮といふ。人間の血肉を食ふ鬼なり。

の時、心、顚倒せず、亦散亂なく、策勵、猛利にして、念定現前し、一心に專注し無漏を引發するも、亦、未だ現行せざりき。[一四]又復、息を閉ぢ、外視聽を忘れ、氣、臟腑に積り、脹れて遍身に滿ち、苦惱至極なること、以て方比するなきも、菩薩、爾の時、心、顚倒せず、亦散亂せず、堅進に修習して、念定現前し、專ら一心に注ぎ、無漏を引發するも、而も現行せず。是の如く修し已りて、又自ら思念すらく『我れ今、後に於て、飲食を斷絕せむ』と。[一五]時に天子あり、遙かに已に觀知して、菩薩に告げて言く『我が此の色身毛孔の內に、天上細妙の珍食あり、供養に充つるに堪ゆ』と。菩薩告げて曰く『我が食する所の如きは、本より艱辛に非ず。食、汝の身に出づれば、亦、淸淨に非ず。若し我をして食せしむれば、必ず地獄に墮ちむ。天子、但、隨方に有る所、或は米、或は豆を以て、汝の豐儉に聽して以て供獻を作せば、我卽ち之を受けむ』と。天子敎を奉じ穀を以て膳となしたまへば、菩薩食し已りて、身體、羸瘦し、顏容、憔悴せるも、心に苦惱なく亦、退失なく、精進の意を發して念定現前し、專ら一心に注ぎ、無漏を引發するも、亦、未だ現行せざりき。[一六]又食ふ所を節するに、身轉た羸惡となり、兩目深く陷ちて、井に星を現ずるが如きも、菩薩、爾の時、心に苦惱なく亦退失なく、精進の意を發して念定現前し、專ら一心に注ぎ、無漏を引發するも、亦、現行せざりき。[一七]又食ふ所に於て、減じて極少ならしめ——或は一豆・一麻・一米・一麥——是の如く食し已りて、身力轉た乏しく、若しは行き、若しは步むに一起一倒したまふも、爾の時、菩薩精進して退くことなく、念定現前して專ら一心に注ぎ、無漏を引發するも、亦現行せざりき。而して復、思惟すらく、『此の行、眞に非ず、究竟に至らず』と。

是の念を作す時、三の天子あり、菩薩の前に至り、其の形容、困憊して變異したまへるを見て、各、菩薩の顏貌を述ぶること不同にして、或は黑色と言ひ、或は紫綠とする者ありき。菩薩聞き已りて、復、自ら思惟すらく『我、此の方に於て、是の如く勤苦し、容色、變異すれども、終に獲る所

【一四】第四苦行。
【一五】第五苦行。
【一六】第六苦行。
【一七】第七苦行。

二十七、七種苦行の實修

時に淨飯王、正殿に臨御し、太子を憶念するも、未だ止まりたまふ所を知らず、情に憂惱を懷けるに、近臣、奏して云く『王舍城を離れ、烏捺囉迦囉摩子の處に於て、單身、介立して道法を勤求したまふ』と。王、既に聞き已りて、心轉た悲傷し、卽ち親人三百を遣はして彼に往いて侍從せしむ。時に天指城の酥鉢囉沒駄王、亦た二百人を遣はして、彼に往いて侍從せしめ、此の五百人至り已りて足を禮し、圍繞して瞻仰しぬ。菩薩自ら念ずらく『王宮を棄捨し、山の寂靜に居り、結志修習して、甘露の滅を求むるに、今此の人衆、晝夜に煩雜して、聖道を妨ぐ』とて、唯、伯叔舅氏五人を留め、餘は遣はして、國に迴らしめ、菩薩卽時に此の五人を將ゐて、識耶[六]仙人の聚落、烏嚕[七]尾螺西襄野爾と名くるに往き、側近を經行して、寂靜の處を觀眺したまふに、尼連河[八]に次きて、一の林野の地土、平正にして樹木幽閑なること月の清涼なるが如く、呼びて聖地と爲すを見、五人に告げて曰く『善男子、若し人此に於て諸の梵行を修すれば、未だ寂滅を證せざるも、久しからずして證得せむ、我れ今、依止して、無上の道を求めむ』とて、卽ち[九]樹の下に於て、結跏趺坐[一〇]し、學修、禪觀したまひ、口を閉ぢ、齒を齧み、舌、上腭を拄へ、心神を收攝すること、手の物を握るが如し。良久の間を經て、毛孔、汗を出すも、精進して退かず念定相應し、專ら一心に注ぎて、無漏[一一]を引發せるも、而も現行せざりき。[一二]復別觀を修し、跏趺して坐し、口を合せ、目を閉ぢ、舌、上腭を拄へ、氣息を屏へ住めて出入せざらしむれば、良久の間に、氣逼り、頭頂の疼痛すること至て甚しく、錐の腦を刺すが如し。斯る大苦を受くるも、心、顚倒せず、亦散亂せず、堅固に精進し、念定、現前して、專ら一心に注ぎ、無漏を引發せるも、而も現行せざりき。[一三]是の如きの息氣、漸次に運動して、頭頂より下りて兩耳の門に至れば、痛楚、復增すこと地獄の苦の如きも、菩薩爾

【六】識耶(Gayā)。
【七】Uruvilvā Senāni. Uruvilvā Senāpati(grāma)。前者はロック・ヒルに依る西藏傳にして、後者は「大事」の梵本記する所たり。
【八】尼連河(Nairanjanā)。普通に尼連禪河と言ふ。
【九】以下七種の苦行。第一苦行。
【一〇】結跏趺坐 (Nyaṣidat paryaṅkam ābhūjya)。左右の足を組みてその甲を兩股の上に載する坐法なり。
【一一】無漏(anāsrava)。漏は煩惱の異名なれば無漏は煩惱を離れたるなり。茲に無漏は無漏果の意なり。
【一二】第二苦行。
【一三】第三苦行。

卷の第六

二十六、阿囉拏、烏捺囉迦二仙訪問

爾の時、阿囉拏迦羅摩[一]の處に往いて、道法を學ばむとし、至り已りて、合掌し、拳を擎*げて問を致したまはく『汝が宗の行法、其の義云何』と。阿囉拏迦羅摩曰く『我、昔し、精進し、定慧[二]を修習して、有想天三摩地門[三]に至り、皆悉く通達せり。汝何ぞ知らざる』と。菩薩、卽時に思惟したまはく『羅摩得る所の智慧及び有想天三摩地門は眞實にして虛しからず』と。復自ら念言したまはく『我れ此の法に於て、云何が未だ得ざる』と。刹那の頃を經て、禪定智慧皆成就を獲たまひ、告言して曰く『汝が宗の行法、今、我れ已に得たり』と。時に阿囉拏迦羅摩、彼の菩薩得る所の法、實の如く謬りなきを觀て、尊重、恭敬すること自らの本師の如く、卽ち最上の香花珍果を以て、一心に供養しぬ。菩薩復思ふらく『今此の行法も、未だ究竟せず、正道となるに非ず』とて、卽乃ち捨て去り、烏捺囉迦囉摩子[四]の處に往いて、法行を學修したまはむとし、至り已りて、頂禮、合掌し、問ひて曰く『汝が得る所の法、其の義云何』と。時に烏捺囉迦囉摩子言く『我、昔し精進して智慧を修習し、非々想處三摩地門[五]に至り、久しく已に證得せり。汝、何ぞ知らざるや』と。菩薩聞き已りて、卽ち彼の人修する所の智慧及び非々想處三摩地門は虛謬なきを觀じたまひ、復自ら思惟すらく『我れ此の法に於て、云何が未だ得ざる』と。是の念を作す時、倶に成就を獲、卽乃ち告げて言く『汝の法行、我れ今亦得たり』と。時に烏捺囉迦囉摩子、心に未だ信許せざりしも、意を諦かにして、如實にして謬なきを觀察するや、崇重、供養すること、本師よりも過ぎたり。爾の時、菩薩又自ら思惟したまはく『此の法行も亦、未だ究竟せず、眞の覺の路に非ざれば、須らく、彼れを捨てゝ別に明道を求むべし』と。

【一】阿囉拏迦羅摩(Arāḍa Kālāma)重出。第二卷彼を二人となすことの茲と合致せざることは前に言へり。而して第二卷の二人說あるにも拘らず、吾人は此の經の本旨は一人說にありと斷言せん。因に二人說をなすものは漢譯に於ては過去現在因果經及び修行本起經なり。

※擎の字皆勤とすれども、今ま明本を採る。

【二】戒と此の定・慧の二を合して三學といふ。佛徒の修學すべき三要なり。

【三】有想天とは、無想天及び非想非々想處を除ける一切の天を指す。故に有想天三摩地門とは外道の有想天に生ずる果を得んとして修する禪定なり。

【四】烏捺囉迦囉摩(Udraka Rāmaputra)。

【五】一般に非想非々想處といふ梵語は Naivasaṁjñā-nāsaṁjñā-āyatana なれば、本文よりも之を適譯とすべし。その三摩地門は外道の之に達せんとするの行なり。

假使世間並びに四大海の中に滿たせる珍寶も猶尙足らず。譬へば大火の乾ける薪を然やすが如く、身心を貪愛するも亦復、是の如し。大王、我此る物を觀るに、由兎の家の如く、毒蛇の如く、一切の憂惱、怖畏の根本なり。大王、假使、大風能く一切の諸山を吹き動かすも、蘇迷盧に於ては終に動かすこと能はず、假使、世間の所有る珍寶、最上の資財・國城・妻子・象馬・僮僕は能く一切の人心を惑亂するも、我が心に於ては、終に動かすこと能はず、唯涅槃、解脫のみ、是れ眞の究竟たり』と。爾の時、民彌娑囉王言く『汝、今此れに於て、何の求めたまふ所かある』と。菩薩告げて言く『我れ、阿耨多羅三藐三菩提を求む』と。王言く『若し菩提を成ぜば、願くば攝受を賜へ』と。菩薩答へて言く『是の如からむ、是の如からむ』と。王、歡喜を生じて復た本の處に歸りぬ。

二十五、苦行者歷訪

爾の時、菩薩[四〇]鷲峰山に往きたまふに、山の側ら遙かに非ずして、仙人の梵行を勤修し、能く一足を以て地を履み住まること一日を經るを見たまふ。菩薩之を聞きて、亦一足を以て地を履み、住まること兩日を經たり。仙人復、五熱を以て、身を炙り立つこと、一日を經たるに、菩薩是れに於て、立つこと兩日を經たり。時に彼の仙人互相に驚き怪しみ、降伏して稱讚すらく『此は是れ修行、此は是れ[四一]大沙門なり』と。菩薩問うて言く『汝等修行して、何に於て求むる所かある』と。一は云く『我は帝釋を求む』と。一は云く『我は梵王を求む』と。一は云く『我は魔界の身を求む』と。爾の時菩薩即ち自ら思惟したまはく『今、此の仙人の修する所の行は、皆是れ邪道にして、我が依る所に非ず、我れ今、此に於て、帝釋を求めず、梵天を求めず、魔界を求めず、本より宿願を爲し、衆生を利樂し、佛果を求め成ぜむとす。道、既に眞に非ざれば、宜しく應に彼を捨つべし』と。

衆許摩訶帝經卷第五

【三九】 前に註せる妙高山に同じ。

【四〇】 鷲峰山 (Gṛdhrakūṭa-parvata)。靈鷲山とも譯し、共に意譯なり、音譯して耆闍崛山とも言ふ。

【四一】 大沙門 (Mahā-śramaṇa)。

く供養すれば。須臾の間を經て、菩薩復問ひたまはく『迦毘羅城、此を去ること遠きや近きや』と。仙人答へて言く『玆より彼に至るまで、十二由旬なり』と。菩薩、思惟すらく『城邑遙かならず、如し釋種來らば、必ず魔難を作さむ』と、即ち仙人に別れ、殑伽河[三七]を過り、王舍城に往き、自らの工巧を以て、樹の葉を採取し、鉢器を作爲し、城に入りて鉢を持ちたまへり。

二十四、民彌王、俗利の勸誘

時に民彌娑曪王[三八]、高樓の上に在りて、遙かに菩薩の身相端嚴に、威儀寂靜にして、體に法服を挂け、手に應器を持ちて、門を巡りて、乞食したまふを見て、興歎して言く『王舍城の中に住する所の人に、是の如き威儀、色相ある《者》なし。今、此の苾芻は當に庶人下族の類ひに非るべく、應に是れ王種の位を捨て出家し、罪業を滅除し、淨命を修持するなるべし』と。

爾の時、菩薩、鉢を持ち、城を出でゝ、一の山中に往き、鉢を以て地に置き、端坐し、定に入りて思惟すらく『民彌娑曪王、我を見て、心を發しぬ。必ず異なる意あらむ』と。是の念を作す時、王、大臣に告ぐらく『我、樓の上に於て、一の苾芻の身相端嚴にして、威儀調順せるを見たり。是れ庶人、下族の生む所に非ざらむ。汝、當に、今何處に在るやを訪尋すべし』と。即時に使を遣はし、往いて山間に至らしむるに、此の苾芻、安詳として坐するを見ぬ。國王、知り已りて躬自ら臨幸し、接見して、瞻仰するに心に歡喜を生じ、因りて告言して曰く『汝の身貌、甚だ是れ端嚴にして、若し苾芻たらば、相ひ宜稱せず。我に宮殿・樓閣・嬪妃・美女・最上の富貴あり、汝に與へて受用せしめむ。苾芻と作る勿れ。汝の身は何姓なりや、何の種族ありや。我が爲に宣說せられよ』と。菩薩白して言く『雪山に相近く迦毘羅城あり、我の父王、姓は刹帝利、名けて淨飯と曰ひ、方に是の國を理む。我、須らく君父を捨棄するは、菩提を求むるが爲なり。若し是れ愚癡、貪愛の人は、

【三七】殑伽河(Gaṅgā)。恒河なり。

【三八】民彌娑曪(Bimbisāra)。(重出)。

むの時、樹の上に安置し、樹神に告げて言く『此の袈裟を以て、我が與に、彼の淨飯王の子、悉達多に奉げたまへ』と。時に帝釋、是の事を知り已り、自ら其の身を變へて、一の獵士と爲り、手に弓劍を携へ、此の袈裟を披、太子の來るを見て、路傍に坐りければ、太子問うて曰く『汝は是れ獵師なり。云何が、身の上に、此の[三三]憍尸迦衣の細妙なる法服ありや。以て我に與ふべし』と。獵人告げて言く『唯、此の袈裟は、我愛樂するに非れば、今汝に與へむと欲す。是の服は微妙なれば、恐らくは人、侵奪せむとして、汝の性命を傷けむ』と。菩薩告げて曰く『一切の世間は我が威力を知らむ。汝但、服を施して、憂慮を懷く勿れ』と帝釋天主卽ち本の形に復し、頭面に足を禮し、乃ち袈裟を以て、菩薩に奉上したまふ。授け已るや、(菩薩)披たまふに、身と等しからず。帝釋、衣の等しからざるを見て、心に自ら疑を懷きたるも、是の念を作す時、菩薩、威神もて、其の袈裟を身と相等からしめたまひぬ。[三四]忉利の諸天、歸命し供養し、婆羅門、長者は後に於て彼處に塔廟を建立し、恒に苾芻ありて、往來禮拜せり。

二十三、婆哩誐嚩訪問

爾の時、菩薩、威儀、具足し、漸次に經行せるに、一の仙人の[三五]婆哩誐嚩と名け、手を以て顋を揩へ、顏容悅ばざるを見て、菩薩問うて言く『意に於て云何』と。仙人答へて言く『我が此の住處に多羅樹あり、花果繁盛し、其の味甘香なりしに、忽然として乾枯し、我をして煩え惱しむるなり』と。菩薩復、問ひたまはく『仙人此に住して、本より修行を爲し、花果、枯朽するに愁悶を致す耶』と。仙人聞き已りて、心、忽ち惺悟し、又、一の菩薩の色相、端嚴なるを見て、瞻仰し戀慕して、復、問うて言く『汝は是れ出家の菩薩なりや不や』と。菩薩答へて言く『汝、見るに分明ならむ』と。婆哩誐嚩、卽ち疑惑を斷ち、[三六]法眼淨を開き、菩薩に請ひて、坐せしめ、花果を以て法の如

【三三】「憍尸迦衣の最妙なる」は、迦尸產の細軟なる布(Kāśika-sūkṣma)の譯なるべし。因みに迦尸は有名なる織物の產地なり。

【三四】忉利の諸天(Trāyastriṃśāḥ)。欲界六天中の三十三天なり、忉利天は音譯にして、三十三天は意譯の差あるのみにして同一天なり、最下の四天王天の上位にあり。

【三五】婆哩誐嚩(Bhārgava)又婆伽とも、棄惡とも譯せり。

【三六】法眼淨とは、淸淨なる法眼の意なり。法とは眞諦を指せば分明に眞諦を見るを斯く言ふ。大乘の無生(法)忍に同じ。

爾の時、菩薩、髻髪を截り已り、湌那に問うて曰く『汝の意云何。能く此に住して、同に修行すべきや不や』と。湌那曰く『王族の意、此に住せしめず、何ぞ敢て固より違はむや』と。菩薩即ち、萬字の福相、百千の威德あるの手を以て、迦蹉迦馬王の頂を摩で、菩提の[二六]記を授け、彼の湌那をして迦毘羅城に歸らしめぬ。〔湌那〕行くこと七晝夜、二更の初めに至つて、城外園苑の中に到るや、王、宮人眷屬に勅し、園に至りて迎接せしむるに、唯、馬王を見るのみにして、太子を見ざりき。時に宮嬪・眷屬・倶に馬前に向ひ、馬王の項を抱きて、高聲に啼哭すれば、迦蹉迦馬、是の哭聲を聞き、心に太子を思ひ悲涙し、傷痛し、須臾の間を經て、兩邊を廻顧し、即乃ち命終り、宿の因緣を以て、[二七]六業婆羅門の家に生れ、利根にして結、薄く、聰明にして、智多く、太子、成佛の後、即ち佛の所に詣り、法を聞き、道を悟りて、[二八]無生忍を得たり。

爾の時、菩薩は復、思惟したまはく『我今落髮して、沙門の相を作しぬ、云何にして身の上に[二九]袈裟衣を得む』と。是の如く、念じ已りたまふに、[三〇]阿耨波摩城に、一の長者あり、眷屬、熾盛にして、財富、量りなきこと毘沙門の如く、家に十子あり、人相、端嚴にして、智慧、聰利なり、倶に出家を樂ひ、淨く梵行を修し、外の境、遷變して恒なきことを觀ずるに因て[三一]辟支迦を成じ、父、亡するの後に、老母、信重して、一の袈裟を製り、辟支迦に施せるに、子、母に白して曰く『我れ當に、久しからずして、涅槃に入るべし、今此の袈裟、我れ若し之を受くるも、使用する所なけむ。此を去ること遠からず、淨飯王の子あり、悉達多と名け、久しからずして、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまはむ。此の袈裟を以て、彼の菩薩に奉ぐれば、老母をして、大なる果報を得しめむ』と。此の語を說き已りて、大神通を運かし、虛空中に於て、其の雲雷・閃電・風雨を現はし、然る後に火を化り、身を焚きて、[三二]圓寂界に入りぬ。是の時、老母、將に壽を捨てむとするに臨み、持つ所の袈裟を、一の女に付與して、菩薩に奉げしむるに、此の女、忽然として、身に病患を得、無常に臨

【二六】記を授くることを授記(Vyākaraṇa)といふ。將來、菩提の果を得べしと豫言することなり。因みに授記は十二分教(佛說諸藏の分類)の一なり。

【二七】六業婆羅門。婆羅門の義務に六業(ṣaṭ-karman)あり、又同名を以て呼ばるゝ婆羅門の一派あり。

【二八】無生滅の理に安住して動かざる位。或は菩薩十地中の初地とし或は七地、八地とするも、こは最初より確定せるものにはあらざるべし。下の法眼淨と略ゝ同意義なるもこは主として大乘にて用ふ。

【二九】袈裟衣(Kaṣāya)。又た壞とも譯す。元來此の語壞色の意味にて佛教に於て三衣に青・黃・赤・白・黑の五つの正色を避けて他の雜色を用ゐたれば、その雜色(壞色)より之を名けて袈裟といへるなり。之に三種あれば又た三衣といふ。

【三〇】阿耨波摩城 (Anupama)。

【三一】辟支迦 Pratyeka(buddha)。又た意譯して緣覺ともいひ、又た說法せず獨り寂靜の樂をうくるより獨覺ともいふ、聲聞と菩薩(佛)との間に此れを加へて三乘といふ。

【三二】圓寂界。原語(Nirvāṇa)なるべし、然れば涅槃に同じ。

爲に偈を説きて言く、

我れ、最上の道にして、　一切の佛の行處を得ば、　汝等、及び彼の諸の　有情を度脱せむ。

此の語を説き已りて、即ち、寶冠と上妙の衣服とを脫ぎたまひて、飡那に告げて曰く『我が衣服及び彼の馬王を將て歸り、父王に奉ぜよ。若し菩提を證せずば、誓つて廻らざるなり』と。復、偈を説きて言く、

汝、馬王及び寶衣を將て　速かに本國なる迦毘羅に歸れ、　我は雪山に住して、梵行を修せむ。
菩提、未だ證せずしては、　未だ歸るまじ。

爾の時、菩薩、此の偈を説き已るや、飡那之を聞きて、復、悲泣し白して言く『今此の山中、多く、虎狼・師子、諸の惡き禽獸あり、菩薩は一身にて云何が住したまふべき。又此の山野の中、皆叢林・荊棘・土石、磽确あり、菩薩、旦暮に云何が經行せむ』と。菩薩言く『飡那、汝何ぞ愚迷なる。衆生の身は業惑の感ずる所にして、四大和合すれば、性相、違反す。老・病・死の苦み、如し身に至らむ時は、尊貴・上族・富豪・貧賤・端正・醜陋・少壯・老年・寃親・人・我を擇ぶに非ず、速かに散壞に歸して、倶に無常を受けむ。云何が修行して諸の危難を怖れむや』と。飡那曰く『菩薩の行、其の義、是の如けむも、王或は我を見、太子を見ざれば、必ず憂惱を生じたまはむ。如し大病を致さば、其の事云何』と。菩薩言く『我、今、出家して、菩提分法[二四]・布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を行じ、十力・四無所畏を成就せむに、豈父母をして、不吉を得しめむや』と。是の語を作し已りて、即ち座より起ち、合掌、頂禮し、手を擧げて、劍の[二五]優鉢羅花の葉の如きを執り、即ち自ら髪を截り、虛空中に擲げたまふに、天主帝釋、大神力を運し、手を以て髪を接け、諸の天子と、忉利天に安き、法の如く供養し、後、淨信の婆羅門、長者の居士あり、此の山地に於て塔廟を起立せり。

して無上正遍智或は無上等正覺ともいふ。從つて此の經に或は無上覺といひ或は等正覺といひ、或は單に菩提といふも皆なこの四語の四乃至一語の組合せなることを知るべし。

【二四】菩提分(Sapta Bodhyaṅgāni)は、七つあり又た覺支といひ、時に三十七を數ふることもあり。布施以下は六波羅蜜(六度)なり。

十力(Daśa-balāni)・四無所畏(Catvāri vaiśāradyāni)は、共に佛と菩薩とにあれども各と異れり、茲にては佛の十力・四無所畏を指せること勿論なり。

茲に力といふも皆な智力(jñānabala)にして、普通の體力を言ふに非ず、四無所畏は一切智・漏盡・説障道・説盡苦道の四なり。

次に布施以下六度を列すべし(名義集)

(1) 布施(Dānapāramitā)。
(2) 持戒(Śīlapāramitā)。
(3) 忍辱(Kṣāntipāramitā)。
(4) 精進(Vīryapāramitā)。
(5) 禪定(Dhyānapāramitā)
(6) 智慧(Prajñāpāramitā)。

【二五】青蓮華。茲に劍をその葉に譬へたるは未だ開かざる葉を以てせるならん。

たり』と。太子告げて言く『我、往昔に於て、菩提心を發し、[二〇]三大阿僧祇劫を經て、萬行を歴修し、無上の覺を求め、衆生を度せむと欲しぬ。今、此の王宮は我が止まる所に非ず』と。摩賀襄摩、是の語を聞く時、倍復、憂惱し、涕涙し、悲泣し、麁澁の言を發すらく『苦なる哉、苦なる哉、我が淨飯王の望む所、就らず、太子をして、深宮を棄捨し、出でゝ遠行せしめたまふことを致きぬ』と。時に耶輸陀羅、是の語を聞き已りて、驚疑し、惶怖し、迷悶して、地に倒れ、良久して乃ち蘇り、太子に告げて言く『何に緣りて、今日我を捨てゝ去りたまふや』と。娛閉迦・蜜里識惹、及び諸の宮嬪、悲涙して、前行し、淨飯王に告ぐらく『太子、故なくして、宮寢を離れ、彼の山野に往かむと欲したまふ。鬼魅の著く所の如く、以て遮止するなし。唯王、當に嚴しく勗めて、遽かに往かしめたまふ勿れ』と。王、既に聞き已りて、誡勅を行はむと欲せるも、帝釋、梵王、諸の天子と、菩薩を接迎して、卽ちに城外に出でしめたまひぬ。菩薩の右邊には、色界の天子、善く威儀を現はし、菩薩の左邊には、欲界の天子、手に幢幡を執り、無數の天樂あり、導引して前行し、百千の天子あり、虛空中に於て、優鉢羅花・倶母那花・[二一]白蓮華及び曼陀羅花を雨らし、復沈香・末香・栴檀の香、種々なる上妙の衣服を雨らし、復、天子あり、歌舞し、作唱し、復、天子あり、手に馬足を捧げ、菩薩を瞻仰して、一心に隨行し、[二二]倶吠囉等の無量の諸天、恭敬し、圍繞したまひぬ。須臾の間に、雪山の中に至り、迦毘羅城を去ること、一十二由旬なりき。

二十二、入山、出家の相を作す

爾の時天主帝釋、及び大梵天王等、合掌して白して言く『我等、諸の天、精進の心を發して、菩薩に隨侍して、山中に來至せり。若し我が菩薩、[二三]阿耨多羅三藐三菩提を成就したまはむ時、願くば、攝受を垂れて、我等を度脫したまへ』とて、右邊に住立し、一心に瞻仰しぬ。菩薩、卽時に、

【二〇】菩薩、佛たらんとするの志を立てゝより成佛するまでの年時を言ふ。三大阿僧祇劫とは三阿僧祇大劫の意味なり、大・中・小のうち大劫を以て計算して、阿僧祇大劫の三倍なり。

【二一】先に出せる奔拏里迦(Puṇḍarīka)なり。他も皆其の處に註せり。

【二二】倶吠囉(Kubera)。古く印度の Vaiśravaṇa と同一視さるゝより後には毘沙門天(四天王の一)と同一視さる。支那に入りては Kumbira と音、似たるより金毘羅とも同一視されたり。

【二三】阿耨多羅三藐三菩提(anuttarasamyaksambuddhi)。無上(anuttara)正(Samyak)遍(sam)智(buddhi)と意譯

は波囉拏舍囀帝と名けぬ。此の四天子、菩薩の前に至り、合掌し、恭敬して、菩薩に告げて曰く『今、外に出でゝ、菩提の行を修したまふことを知りぬ。我等四天、願くば、隨從せむと欲す』と。菩薩問うて言く、『汝、力あり耶』と。第一の天子言く『所有る大地の土、以て負ひ行くべし』と。第二の天子、言く『所有る大海、江河以て負ひ行くべし』と。第三の天子言く『所有る一切の山嶽以て負ひ行くべし』と。第四の天子言く『所有る大地、山嶽及び河海等、以て負ひ行くべく、而かも疲困なし』と。菩薩、聞き已り、卽ち神力を以て、足を移して地を蹈みたまふに、地、大いに震動し、四大天子、住立せむとするも能はずして、各驚き怪しむらく『誰れか、菩薩、斯る威力を有ちたまふを知らむや。我等、四天、云何にして懺謝せむ』と。是の時、飡那、是の神力を見、卽ちに、馬王を牽きて、菩薩の前に至りぬ。

爾の時、大威德ある諸天及び諸の龍神、愛する(者)に別離せむことを傷み、上空中に於て、啼泣して、淚を下しぬ。飡那言く『云何が、空中に雲、無くして、雨を下すや』と。菩薩言く『此れ降雨に非ず、我れ將に外に出でむとするに、天龍、別れを傷みて啼泣し淚を雨らせしなり』と。飡那、聽受し住立して合掌しぬ。菩薩、卽時に深く、佛身の功德・威儀・利樂の法を思ひ、復た父母の養育・慈愛・顧復の恩を思ふに、『故し告辭せざれば、孝行に虧くる有らむ』と。是の念を作し已りて、卽ち殿内に入り、淨飯王の正に睡眠に當けるを見て、右に繞ること一匝、合掌して啓して白く『我、此の時に於て、雪山の中に往いて、無上の道を求め、世間の生・老・病・死を度脫して、諸の衆生をして、大解脫を得しめむ』と。言ひ已りて辭する時、釋種、摩賀囊摩あり、太子を瞻見して、戀慕し、憂惱し、悲泣し、涕淚して云く『何の因業にて、王宮を輕捨したまふや』と。太子答へて言く『我一切の衆生を利益し、佛果を成ぜむことを求むるが爲なり』と。摩賀囊摩白して云く『王、我が輩に勅して、長時に警護し、太子をして暫く宮禁を出でしめたまふこと無からしめ

心を施與するなり。
【一九】四天子の名、ロック・ヒル出さず。

し、處處に鈴を懸けて、警覺し、守護せり。云何がして出でむや』と帝釋告げて言く『但過去の[12]無量阿僧祇劫に行ひたまへる行願は、衆苦を斷ち、世間を度脱せむが爲なることを念じたまへ』と。是の語を作す時、四天王等、威神力を以て、彼の衆人をして、能く障を爲さざらしめ、即時に帝釋は一の寶階を化りて、[13]般卿迦夜叉主に告げて言く『聖者、菩薩、現に高樓に處られたまふ。汝、寶階を以て前に於て、迎へ接けよ』と。夜叉、聞き已りて、教の依に奉行しぬ。菩薩之を下り、即ち[14]滄那を覓め、馬王に鞁かせむとしたまひ。尋いで滄那の正に睡眠に當けるを見て、偈を說きて言く

善き哉、滄那、汝、速かに起き　我が馬王、[15]迦蹉迦に鞁けかし。　乘りて、諸佛修行の山に入り
牟尼の無上覺を證せむことを求む。

此の偈を說き已るや、滄那、睡眠より覺め、即ち起ちて合掌し、菩薩に告げて言く『事は倉卒なる無けれ。何ぞ夜半に於て、急に馬王を要め、乘りて遠く去らむとは欲したまふや。況んや此の宮禁、且く兵難・賊難、及び水火の難なきに、云何が、此の如き』と。菩薩言く『汝、昔より來、嘗て驅馳を奉ぜしに、云何が今に於て相順はざる』と。滄那、白して言く『今半夜に當り、眞僞分ち難し。不虞ありて以て大罪を招かむことを慮れてなり』と。菩薩、聞き已りて、默然として思念し、人の知り覺らむことを恐れ、[16]自ら中の廐に往きたまふ。時に天主・帝釋、手に火炬を執り、路を引きて前行し、其の廐の門に至りて、馬王を牽致するに、馬即ち驚駭して、足もて地を跑きぬ。是の時、菩薩、[17]萬字の福相、百千の威德あるの手を擧げて、[18]無畏の印を作し、馬王の頂を摩でゝ、告げて言く『迦蹉迦、我れと緣あり。若し能く我れを雪山の中なる、諸佛の行處に送らば、無上菩提の果を證得し、大法雨を降して、普く世間を潤ほし、一切の有情、皆利樂を得む。汝の福も、量りなからむ』と。時に迦蹉迦、即ち教の旨を受けて、身足動かざりき。

爾の時、復た[19]四の大天子あり、一は倶羅と名け、二は烏波倶羅と名け、三は波囉拏と名け、四

【一二】Aprameya-asaṅkhyeya-kalpa（無量　阿僧祇　劫）阿僧祇又た「數へ得ぬ」の意なれば無量無數の劫の意となり要するに無限の長年月を示す。
【一三】般卿迦（Pañcika）。
【一四】滄那（Chandaka）（重出）。
【一五】迦蹉迦（Kaṇṭhaka）又た犍陟と書す。尙ほ鞁字は他皆「被」となすも、今ま明本を採れり。
【一六】原文は、自往中廐とあれば斯く譯したれども中廐の二字は四門出遊の項に見るも顚倒と思はる。若し然らば「自ら廐の中に往き給ふ」と譯すべし。
【一七】（Śrīvatsalakṣaṇa）。音譯して、室利靺蹉洛刹曩といひ萬字は其の意譯なり、こは印度古來よりの吉祥シンボルなり、茲に佛の手に此の相ありとせるは三十二相の外に佛の有せらるゝ八十種好のうちに此の相あればなり。因みに此の原語よりも第六卷註二二の梵語は一層よく萬字の意を表はす。
【一八】無畏の印。悉しくは施無畏の印、即ち右手を擧げ五指を舒べ外に向くる印契にして、之に依て衆生の類に無畏

夢み、六に吉祥の雲、宮舍より出づと夢み、七に滿月に其の蝕障ありと夢み、八に日出でゝ、未だ高からず、復、東に於て沒すと夢む』と。卽時に太子復自ら思惟したまはく『曾つて五夢を作しぬ。一に床座、妙高山[七]の如く、坐臥自在なりと夢み、二に兩手、左、東海に托し、右、西海に托し、復二足を以て南海の中に托すと夢み、三に花果の樹木及び諸の藥草、長、天界に至ると夢み、四に大身の飛禽、其の類甚だ衆く、形白く、頭黑きと、及び諸の小鳥の種々の顏色あると、四方より來りて都て面前に至り、變じて、一色と爲りて、其の足を禮すと夢み、五に大なる石山の上に、經行して、顧望すと夢みぬ』と。太子自ら心に思念すらく『我が夢、此の如し、定ず俗を捨てゝ、大菩提を證することを得む』と。爾の時、耶輸陀羅、前の八夢を思ひ、告げて、太子に其の吉凶を占ひたまはむことを請へり。太子曰く『一に上族、離散すと夢るも、宗姓、團聚して未だ始より暫くも分れず。二に吉祥の座破ると夢るも、座今故の如し。三に腕釧損れ墮つと夢るも、見り汝の臂に在り。四に牙齒墮落すと夢るも、墮つる者あるに非ず。五に髮、亂れ垂ると夢るも、孰れか垂髮を覩む。六に吉祥の雲、宮を出づと夢るも、夫は吉祥[八]なるに、我れ又宮に在り。七に月蝕障ありと夢るも、今天上に在り、何ぞ障あらむ耶。八に日出でゝ未だ高からず、復、東に於て沒すと夢るも、此の時、夜半にして、日又未だ出でず。夢る所、惡しきことなし、汝、何ぞ憂ひ疑はむや』と。太子此の八夢を思惟し、當に是れ我が出家の兆なる應しとて、卽ち耶輸陀羅に告げたまはく『我れ今、當に一切衆生の爲に、彼の山間に往き、涅槃[九]解脫[一〇]の法を志求すべし』と。耶輸陀羅言く『如し夫の志したまふ所ならば、我れも亦、隨ひ往かむ』と。

爾の時、帝釋天主及び梵天王、太子に告げて言く『善き哉、善き哉、速かに五欲を捨てゝ、早く宮殿を出でたまへ、明相、現前して、一切智を證したまはむ』と。菩薩言く[一一]『憍尸迦、我れ深宮に在ること、虎の穽に入れるが如く、象・馬・車・歩の四兵、圍繞し、宮殿の門戸並びに皆、鎖閉

【七】妙高山(Sumeru)。音譯して蘇迷盧とも須彌といふ。印度の世界觀に於て一小世界の中心をなす最大の山なり。不動の貌を表はす譬として常に用ゐらる。

【八】吉祥(Śri)に、愛する者の意あればかく言へるならん。

【九】涅槃(Nirvāṇa)。又た寂滅、滅度と意譯し火の滅せる如く一切の煩惱を滅せる當體をいふ。又た佛、羅漢等の入寂をも言ひ、後には更に深邃なる内容を持つに至るも、茲にてはこの初めの意なり。

【一〇】解脫(Vimukti)。涅槃と同じく佛教の理想を示す語にして三界に輪迴する苦の繫縛を脫し得たる當體を言ふ。

【一一】憍尸迦(Kauśika)。(重出)。

二十一、出　城

爾の時、悉達多太子、諸の宮嬪と娛樂を作せるに忽ちに思惟したまはく『我に今耶輸陀羅・娛閉迦・蜜里識若――是の如きの夫人及び六萬の婇女ありと雖も、若し男女なく、便ち去りて修行せむか、衆人俱に、悉達多太子は、是れ丈夫に非ずと言はむ。出別の後、卽ち耶輸の身に懷妊あらしめむ』と。是に由て、太子、諸の宮嬪の爲に說きたまはく『幻を生ずるに緣て、生死[三]輪迴あり、若し心を息めざらば、窮盡あることなけむ。若し女人と其の床座を同ふするは、足、火を履むに、速かに大なる苦を得むが如し。是の故に、我れ今厭離を生じぬ』と。是の語を作したまふ時、一の妓女あり、口に涎沫を吐き、手足、紛紜し、髮髻散亂し、迷悶して地に倒れぬ。時に諸の宮人、驚き怖るゝこと異常なり、時に太子之を見て、深く傷愍を生じ、歎じて言く『苦なる哉、云何が、此の[四]死相の不祥なるあるや』とて、偈を說きて言く

須臾にして變壞し、惡相を生じ　手足、紛紜して、涎沫流れぬ。　此の無常にして苦惱の身を觀る、　是の故に、我れ今、解脫を求めむとす。

爾の時、太子此の偈を說き已りて、諸衆生を觀ずるに、『[五]我も人も衆生も壽者も堅實の相あるなく、尸陀林に入らむに愛樂する所なきが如く、淤泥を履まむに、唯だ臭惡を增すが如く、毒蛇を養はむに、終に益する所なきが如く、電の如く、夢の如く、沫の如く、泡の如けれども、根本の[六]無明に覆はれて覺らず』と。是の如く觀じ已りたまふ時、淨飯王自ら其の四夢を說く『一に滿月に其の蝕障ありと夢み、二に日出でゝ、復、東に於て沒しぬと夢み、三に大なる人衆來りて禮拜すと夢み、四に自身笑うて、復哭すと夢みぬ』と。耶輸陀羅復、八夢を說く『一に上族、離散すと夢み、二に吉祥の座破ると夢み、三に腕釧、損れ墮つと夢み、四に牙齒墮落すと夢み、五に髻髮亂れ垂ると

【三】輪迴(Saṃsāra)　苦の三界を生れ代り死に代りて限りなきこと車輪の如きが故に輪迴といふも、この梵語には元來車輪の意味はなし、此の意味よりすれば今一つの譯語流轉はこの原語に近し。

【四】この死相は死兆(Ariṣṭa)の意味なるべし、惡相の相も兆の意味なり。

【五】我相・人相・衆生相・壽者相等につきては第十卷に註す。

【六】無明(Avidyā)。第六卷十二緣生の註を見よ。

巻の第五

二十、四門防護（下）

爾の時、摩賀嚢摩、此の偈を說き已りて、即ち北門に往き、高聲に問うて言く『此に何人ありて、睡らず守護するや』と。甘露飯王言く『我、此の處に於て睡らず、守護す』と。摩賀嚢摩言く『若し睡らず守護したまはゞ、諸の過失なけむ』とて偈を說きて言く

睡りを怖るゝこと、山險の如く、　亦、汎れたる河海の如し。　一心に、難危を防がん（が如く）　睡りを止めむも亦、是の如し。

時に摩賀嚢摩、此の偈を說き已りて、即ち市肆、街巷に往き、處々に巡行し、衆人を覺察し、睡りを止めて、守護せしむ。而して偈を說きて言く

法に依て、非法を離れ、　實言して、妄言すること勿れ。　淨飯王は、最上にして、　睡りを止めて、守護せしめたまふ。

時に、魔賀嚢摩、此の偈言を說き、天色、將に曉けなむとして、淨飯王の前に詣りて、王に白して言く『一晝夜を過ぎ、內外、安靜にして、諸の魔難なし、唯願くば、大王、更に軍衆に勅し、用心、守護して、七晝夜を過ごさしめば、彼の太子をして定らず輪王の位を得しめたまはむ』と。是の如く防護して、六晝夜に至りし時、忉利天主、太子の意、道場に往かむと欲するを覩じて、偈を說きて言く

善き哉、大丈夫、　牟尼、[一]釋の師子は　必ず、王の宮殿を捨て、　趣きて山野の處を求め、　[二]六波羅を圓滿し、　無上の智を成就して　群生を拔濟したまひ、　究竟して、彼岸に至らしめむ。

【一】師子は、衆獸の王なれば人中の最尊なるものをかく呼ぶ、而して釋と冠するは釋迦族の出なればなり。梵語(Sākyasiṁha)。

【二】六波羅(Ṣat-pāramitā)。委しくは六波羅蜜(多)、意譯して六度或は六到彼岸と言ひ、菩薩の行なり、名目は此の卷、後の註を見よ。

めば、　過咎、必ず、生ぜざらむ。

爾の時、摩賀嚢摩、此の偈を說き已り、卽ち南門に往きて復、問うて言く『此に何人か有りて、睡らず守護するや』と。時に斛飯王告げて言く『我れ今、此に在りて專心に防衞す』と。摩賀嚢摩告げて言く『大王、若し睡眠したまはずば、諸の過失なけむ』と。時に摩賀嚢摩卽ち偈を說きて言く、

人の睡れるは亦、死せるが如し。　須らく、睡魔あることを知るべし。　若し能く睡ることを止め得ば　過咎、必ず、生ぜざらむ。

爾の時、摩賀嚢摩、此の偈を說き已り、卽ち西門に往きて、復、問うて言く『此に何人か有りて睡らず守護するや』と。時に白飯王告げて言く『我れ今此に在りて、專心に防衞す』と。摩賀嚢摩告げて言く『大王、若し睡眠したまはずば、諸の過失なけむ』と。時に摩賀嚢摩卽ち偈を說きて言く、

睡りに耽るは、酒を飲み　酔うて、曠野に入り　過失、卽ち隨つて生ずるが如し。　是の故に、須らく睡りを止めたまへ。

十方に徧からむ、我れ今、歸命して禮す。

爾の時、太子、是の[二一]伽陀を聞きて、心に歡喜を生じ、卽ち眞珠の瓔珞を以てするに、其の威力を承けて、窓牖の中に入り、女の項に安著しぬ。時に淨飯王、是の事を見已りて、卽ち二萬の宮人を以て、蜜里誐惹女を圍繞し、王宮に入れ(しめぬ)。爾の時、太子に[二二]三夫人、耶輸陀羅・[二三]娛閉迦・蜜里誐惹、及び六萬の宮人ありて、朝夕に供侍すれども、心に愛著なく、專ら捨樂を求む。

十九、四門防護(上)

時に淨飯王、是の事を知り已りて、[二四]三王に告諭すらく『婆羅門あり、我が太子を相すらく、若し七日の內に出家せずば、必ず轉輪王と作らむと。汝等、諸王、七晝夜に於て、共に守護すべし』と。復、民衆を起して七重の城、七重の壕塹を造らしむ。城には鐵の門を安き、門の上下に於て遍く鈴鐸を置き、若し門を開くの時は、鈴聲、響を一由旬の外に振はす。爾の時、太子、其の內宮に於て、諸の宮人と妓舞し樂を作すこと、晝夜異るなし。時に淨飯王、詔して群臣をして諸の禁掖に於て、處々に防衞せしめ、仍ち四兵——象・馬・車・步——を遣して、城の四門に於て分布し巡察せしめぬ。時に淨飯王は、城の東門に在り、斛飯王は城の南門に在り、白飯王は城の西門に在り、甘露飯王は城の北門に在り、各臣僚を領ゐて、夜も睡眠せず專心に守護す。復、大臣[二五]摩賀囊摩に命じて、其の夜分に於て、住らず、來往して四門を巡歷し、軍衆を警覺し睡眠せざらしむ。爾の時、其の人衆を領ゐ、巡りて東門に至り、而して卽ち問うて言く『何人か此に在りて、睡らずして守護するや』と。時に淨飯王告げて言く『我れ今、此に在りて、躬自ら防衞す』と。摩賀囊摩告げて言く『大王若し睡眠したまはずば、諸の過失なけむ』と。時に摩賀囊摩卽ち偈を說きて言く、

睡りに耽るの人は死せるが如く、亦魔に魅せられたる人の如し。若し能く、其の睡りを止

[二一] 伽陀は(Gāthā)の音譯。偈、頌又は偈頌、皆な同じ。

[二二] 三夫人。太子の夫人に就きては此の三人說の外に一人、二人とする兩說あり。本經と共に三人說を取るものは漢譯に於ては十二遊經及び毘耶雜事の二あるのみならん。

[二三] 娛の字明本以外は全部之を虞とするも、今、前後に合せ明本の娛を採れり。

[二四] 三王。淨飯王の三弟を言ふ。卽ち白飯王・斛飯王・甘露飯王、是れなり。

[二五] 摩賀囊摩。(Mahānāma)

下に於て圍繞して侍立し、食時を經ぎたり。淨飯王、心に自ら思惟すらく『太子外に出で、已に時の約を過ぎ、猶、未だ迴歸せず。我れ當に自ら往いて太子を觀視すべし』と。卽ち車駕を嚴りて聚落に出臨し、閻浮樹の下に至りて、乃ち太子の三摩地に入りて身心動かず、日色轉ずと雖も、樹の影、移らざるを見る。時に淨飯王歎じて言く『善き哉、善き哉、大威德ある大丈夫なり、甚だ稀有となす。日、行いて住らざれども、樹の影、移らず』と。頭を以て地に至り、菩薩の足を禮して、偈を說きて言く、

善き哉、大丈夫　世間に甚だ稀有なり。　生時、光明を放ち　大地、皆な震動せり　今、閻浮樹に坐するや、　日、轉ずれども影移らず、　時の衆、普く見聞しぬ。　我れ今、歸命して禮す。

爾の時、太子、禪定より起ち、卽ち車輦に乘りて迦毘羅城に歸らんとて、[18]尸陀林を經ぎ、彼の林中に死人あり、裸形臭惡にして、支體壞れ、爛れたるを見て、其の世間に於て深く厭離を生ず。王、太子と迦毘羅城に入りたまふ時、相師あり、太子の威德、殊異なるを瞻見して、淨飯王に告ぐ『今此の太子、七日の內に於て若し出家したまはずば、定ず轉輪聖王の位あらむ』と。爾の時、相師卽ち偈を說きて言く、

大王今、當に知るべし、　悉達多太子　七日、出家したまはずば、　當に、輪王の位を作し、　四大洲を統領し、　富、七寶を有ちたまはむ。　如し正等覺を成ぜば、　法の財もて世間を救はむ。

爾の時、相師此の偈を說き已るや、太子車を進めて漸く前行す。時に釋種あり、[19]迦羅叉摩と名け、其の女を、[20]蜜里誐惹と名く、太子の威儀、尊重なるを瞻見して、讃歎を興げ、太子の前に於て、卽ち偈を說きて言く、

父は解脫の樂みを得む。　母の身も、亦復、然らむ。　此の悉達多を生みたればなり。　願くば、我が與に、夫たらむことを。　當に、二足の尊を成じ、　圓かに涅槃の法を證し、　名聞えて、

【一八】尸陀林(Sītavana)。本經、後に尸林とあり、寒林とあるは、皆此の林なり。迦毘羅城の人、死屍を葬れる林なり。

【一九】迦羅叉摩(Kālika)(ロック・ヒル)

【二〇】蜜里誐惹(Mrgaja)(ロック・ヒル)。意譯して十二遊經は鹿野とし根本有部毘那耶雜事は鹿養とす。

く調伏し、能善く勤求す、是れ眞の出家なり、是れ眞の善友なり』と言ひ已りて頂禮し、馬に上つて宮に歸り、卽ち宮中に於て意を至して、出家の法は、其の行甚だ妙にして、其の理、甚だ深きことを思惟し、王宮を厭離し、解脫を求めむと欲す。時に淨飯王、阿誐多に問うて曰く『太子出遊して、何の見る所かありし』と。阿誐多逡巡ひて、具さに上の事を白す。王、奏する所を聞き、又復、思惟すらく『相師、曾て、若し出家せざれば、必ず輪王と作らむと言へり。我れ須らく今辰、別に方便を設け、彼の太子をして出家の意を斷たしむべし』と。

十八、閻浮樹下靜觀

卽ち悉達多に告ぐらく『[一七]迦里沙迦聚落は國の重地なり、汝今、彼に往き、吾に代りて撫臨し、當に一方の人民をして和悅せしむべし』と。太子聞き已りて迷悶して、樂しまず、晝夜に思念して、專ら出家を求むるも、未だ本心を遂げず、往いて迦里沙迦聚落に赴く。行いて路次に至れば、五大寶藏ありて地より涌出す。主藏の神等、太子に白言すらく『此等の寶藏は菩薩の所有なり、唯だ願くは菩薩、我が爲に之を受けたまへ』と。太子告げて言く『此等の寶藏は衆寶の聚る所にして、有情愛著すれども、我が求むる所に非ず』と。主藏の神、菩薩の言を聞き、領納せざるを知りて、卽ち同類を率ゐて大海に入りぬ。爾の時、太子漸次に前行して、迦里沙迦聚落の界に至る。多くの人あり、各牛具を執りて苦力耕種し、手脚、麤惡にして塵土、身に坌まり、衣服、破弊し、飢渴して力無く、是の如き種々の苦惱逼迫せるを見る。太子宿に慈愍を懷き、之を見て、驚きて問ふ。左右告げて曰く『此れは是れ太子の部內に耕種するの人なり』と。太子之を聞き、卽ち『丁壯牛畜を放免せしめて、自ら生を營むに任せ、官司をして、更に拘檢あらしめざれ』と、是の語を作し已りて、卽ち閻浮樹の下に往き、結跏趺坐して禪定に入りたまふ、其の諸の臣僚、僮僕、吏民も、亦た樹の

[一七] ロック・ヒル此の名を出さず。

し』と。是の念を作し已りて、情、適悅せず。爾の時、淨飯大王、阿識多に問うて曰く『太子、外に出でゝ何の見る所かありし』と。爾の時、阿識多、具さに上の事の如く、一一に宣說す。王既に聞き已りて、思念す『昔時、婆羅門ありて、太子を占相すらく、福德、淳厚にして、諸相具足せり、決定、出家して正覺の道を成ぜむと。卽ち宮內をして五欲を以て種々に適悅ならしめ、彼をして愛著して出家の意を捨てしめむ』とて、卽ち偈を說きて言く、

我れ五欲の大なる富貴を以ちて、　太子、天中の天を適悅せしめ、　彼をして心に出家を求むることなからしめ、　輪王の最上の位を付與せむ。

爾の時、悉達多太子、復、自ら城を出でゝ遊觀せむと思惟し、卽ち阿識多に告ぐ『我れ城外に園苑を遊觀せむと思す、我が與に、前の如く上好の車騎を安置し莊嚴せよ』と。是に於て阿識多卽ち厩の中に往き、法の如く、上好の車騎を裝飾して、太子の前に至る。爾の時、太子卽ち車騎に乘りて、外に出でゝ遊觀す、時に兜率天子、是の思惟を作す、『今茲菩薩は城を出で、遊觀して、出家の緣を求む。我れ應に沙門の相を作し、鉢を持ち乞食し、太子の前に現はる當し』と。是の念を作し已りて、卽ちに鬚髮を剃り、身に法服を被、手に[一六]應器を持ちて、馬前に住立しぬ。太子見已りて廻みて阿識多に問ふ『此れ何人ぞや』と。阿識多答へて言く『此れ出家人なり』と。太子問うて云く『何をか出家と名く』と。阿識多答へて言く『此の人、生死を了悟し、輪廻を斷たむことを誓ひ、菩提の因を修して、解脫の果を求め、鬚髮を剃除し、身に法服を被ひ、身心を清淨にす、此れを出家と名く』と。太子聞き已りて、心に踊躍を生じ、卽便ち馬を下りて苾芻に問ふ『云何、出家に何の利益かある』と。苾芻答へて言く『夫れ出家なる者は、其の親愛を離れ、榮樂に著せず、恒に梵行を修して、堅く律義を守り、塵勞を棄背し、根識を禁縛して、妄念生ぜず、實行增長す。是の如く進修するを出家者と名く』と。太子聞き已り、歎じて言く『善き哉、汝、大丈夫、其の濁世に於て能善

【一六】應器（Pātra）。比丘の持つ鐵鉢をいふ。その大いさ等法に應ずが故に應器といふも、梵語には應の意味なく單に鉢の義のみ。

す』と。太子問うて云く『汝能く免るゝや』と。阿識多言く『亦た免るゝ能はず』と。又復、問うて言く『汝既に免れず、我れ免るゝことを得んや不や』と。阿識多言く『倶に是れ幻質なり、云何が獨り免れむ』と。太子聞き已りて卽ち王宮に歸り、復、自ら思惟すらく『假合の身は衆病の集まる所たり。衆生愚迷なり、深く憐愍すべし』と。時に淨飯王、阿識多に問うて曰く『太子外に出でゝ何の見る所か有りし』と。爾の時、阿識多、具さに上の事を說く。王既に聞き已りて、子の出家せむことを恐れ、復、宮中をして五欲の樂みを以て、太子に娛侍せしめ、卽ち偈を說きて言く、

【一三】色・聲・香・味・觸の、最も妙なるは、　深宮の太子の情を娛樂せしめむ、　若し愛樂を生じて、
貪著せば、　應に出家して覺道を求めざるべし。

爾の時、太子復、自ら、城を出でゝ遊觀せむと思惟し、卽ち阿識多に告ぐ『汝今、諦かに聽け、我れ城外にて園苑を遊觀せむと思す。我が與に前の如く、上好の車騎を安置し莊嚴せよ』と。時に阿識多是の語を聞き已りて、卽ち厩の中に往き、法の如く、上好の車騎を裝飾して、太子の前に至る。爾の時、太子卽ち車騎に乘り、城外に出づるに、其の馬前に於て、一の死人の氣絕え神逝き、猶、土木瓦石の如く、知覺する所無く、男女眷屬の圍繞して悲み哭くを見、阿識多に問ふ『此れは是れ何人なりや』と。阿識多答へて云く『此れは是れ死人なり』と。太子復た問ふ『云何が死と名く』と。阿識多答へて云く『有爲の體は壽に短長あり、一旦無常なれば、永く親眷に別る。此れを名けて死と爲す』と。太子聞き已りて阿識多に問うて曰く『汝、能く免るゝや不や』と。阿識多答へて云く『亦た免るべからず』と。太子問うて云く『汝の身免れず、我れ應に免るゝことを得べきや』と。阿識多答へて曰く『【一四】三界は無常なり、生滅して住まらず、太子の身も亦復、是の如し』と。太子爾の時、心、適悅せず、王宮に却歸し、王宮に至り已りて、復、思惟す『無常の法は念々住まらず、【一五】乃至、有色・無色・非想非々想處も、斯の無常の大患を免るゝ有るなし。諸の衆生に於て、深く悲愍すべ

【一三】色以下觸まで順次に眼・耳・鼻・舌・身の五根に對する五境なり。根は(indriya)境は(āyatana)なり。

【一四】三界とは、左の三にして皆な是れ有爲轉變の世界なり。
(1) Kāmadhātu (欲界)
(2) Rūpadhātu (色界)
(3) Ārupyadh tu (無色界)

【一五】有色は、色界なり、非想非非想處は無色界の四種のうち最上にして、從て三界の最高の天なり、梵語にては Naivasamjñānāsamjñā-āyatana なり。

『此れは是れ何人なりや』と。阿識多曰く『此れは是れ老人なり』と。太子問うて云く『何をか名けて老となす』と。阿識多言く『幻化の體、堅實あるなし。[一〇]四相、遷移して、[一一]六情、昏昧に、起坐するに、力無く、杖を執つて行く。之を名けて老と爲す』と。太子問うて云く『汝能く免るゝや不や』と。阿識多曰く『我れ何ぞ能く免れむ』と。太子問うて云く『汝は卽ち免れず、我能く免るゝや不や』と阿識多曰く『貴賤異りと雖も、幻の體は一般なり。日月推遷すれば、人の能く免るゝものなし』と。太子聞き已りて、悅ばずして歸り、復、自ら思惟すらく『四大假りに合し、五蘊、實なし。始め少年よりして、便ち衰老を成ず。是の如きの相、深く悲愍すべし』と。爾の時、淨飯王阿識多に問うて曰く『我が子、外に出でゝ、何の見る所かありし』と。阿識多曰く『太子、外に出でゝ、一の老人の髮白く、面皺めるを見たまへり』とて、具さに上の事を說く。王旣に聞き已りて、前に相師が占ひて太子後に必ず出家せむと言へるを憶ひ『太子今に於て深宮に安處し、五欲の樂みを受けなば、情必ず愛著して、出家せざらむ』とて、卽ち偈を說きて言く、

王は、相師の太子を占へるを聞きぬ、　恐らくは、後に父を捨てゝ出家を求めんと。　今、五欲を以て、其の情を悅ばしめば、　愛著して、必ずや輪王の位を繼がむ。

爾の時、太子復、城を出でゝ遊觀せむと思惟し、卽ち阿識多に告ぐらく『汝今諦かに聽け。我れ城外にて園苑を遊觀せむと思す。我が與に前の如く、上好の車騎を安置莊嚴せよ』と。時に阿識多是の語を聞き已りて、卽ち厩の中に往き、法の如く上好の車騎を裝飾して、太子の前に至りぬ。爾の時、太子卽ち車騎に乘りて、城外に出づれば、其の馬前に於て、一の病人の形體、羸瘦し、心神劣弱なるを見、太子識らず、阿識多に問うらく『此れは是れ何人なりや』と。阿識多答へて言く『此れは是れ病人なり』と。太子問うて言く『何をか名けて病となす』と。阿識多、答へて云く『[一二]四大の體、互相に乖反して病の生ずる有り。形容瘦惡にして、心識安きことなし。此れを名けて病と爲

【一〇】四相。生滅に亘るものの四つの狀態、生相・住相・異相・滅相之なり。

【一一】六情。六情とは、眼等の六根をいふ。

【一二】四大の體(Catvāri Mahabhūtāni)。委しくは四大種と言ふ。(名義集)。
(1) Pṛthivīdhātu (地大)
(2) Abdhātu (水大)
(3) Tejodhātu (火大)
(4) Vāyudhātu (風大)
吾人の肉體は此の四大より成るに依て、之に不調にして乖反することあれば、病を生ずるなり。

を以て、彼の龍の命を斷てり。龍、毒氣あり、之に被觸せむ者、遍身、青黑し、因て以て名を迦[六]路那夷と立てたり。太子行いて河邊に至り、先づ提婆達多をして、彼の大樹を出さしむるに、提婆達多、其の神力を極せども、終に擧ぐる能はず。次に難陀力を盡して、樹を挽くに及んで、稍しく地を離れぬ。是の時、太子已れの神力を以て、手から大樹を把り、折つて兩段となし、虛空中に擲げ、河の兩邊に於て、各一段を下す、衆人に告げて言く『此の娑囉迦里拏樹は、是れ大良藥にして火も燒く能はず、若し瘡腫あらんに、之を塗れば、卽ちに差えむ。汝等、衆人、復た忘失する勿れ』と。太子是の語を作し已りて、卽ち車騎に乘り、城邑に廻歸したまふ。

十七、四門遊觀

時に相師あり、太子を相して曰く『若し七歲に至りて、而かも出家せずば、轉輪王と作らむ』と。太子城に入り、將に王宮に至らむとす、釋種[七]伽吒儗里に一の女あり、[八]娛閉迦と名く。高樓の上に在りて、忽ち太子の身相端嚴なるを見て、心に戀仰を生じぬ。太子此の女を見已りて、車騎を住めしめ、首を廻らして觀瞻し、手に執れる弓箭、覺えず地に墮ちぬ。時に諸の人、此の童女の福相殊勝なるを見、皆言く『此の女、太子に事ふるに堪へたり』と。父淨飯王、是の事を知り已りて、童女二萬を遣はし、娛閉迦女を圍繞して、王宮に入れしめぬ。

爾の時、太子夫人を納れ已りて、城外にて園苑を遊觀せむと思惟し、卽ち車を御する人、[九]阿識多に告ぐらく『汝今ま諦かに聽け。我れ城外にて園苑を遊觀せむと思す。我が與に法の如く、上好の車騎を安置し、莊嚴せよ』と。時に阿識多、是の語を聞き已りて、卽ち廐の中に於て、法の如く、上好の車騎を安置莊嚴し、太子の前に至る。爾の時、太子卽ち車騎に乘りて城外に出づるに、其の馬前に於て一の老人の髮白く、面皺み、杖に策りて、呻吟するを見、太子識らず、阿識多に問うらく、

【六】 迦路那夷(Kālodāyin) 茲には龍の名とせるも、一般には此の龍を殺せる人の名は(Udāyin)とし、彼れ殺す時龍の毒氣のため全身黑色となりたれば、其の後彼を黑色の烏那夷卽ち(Kāla-udāyin = Kālodāyin)と名けたりとなす。ロック・ヒルも亦然り、而も之を後に淨飯王の使者として佛に歸城を請へる烏那曳最(十二卷に出づ)と同人なりとす。

【七】 伽吒儗里 (Kinkini-svara(西藏 Dril-bu sgra)ロック・ヒル此の名を出すも當らざるが如し。彼は尙ほ Schiefner の當てたる Ghaṇṭā-śabda を出せり。依つて西藏語を括孤内に出し置けり。

【八】 娛閉迦 (Gopikā or Gopā) 十二遊經は同じく音譯して瞿夷となし、毘那耶雜事は意譯して牛護となせり。

【九】 阿識多(Agata ?) ロック・ヒル御者食那とし、多くの佛傳然り。今ま梵語は推定に依て擧ぐ。

り、[四]婆羅迦里努と名け、太子と時を同じうして生る。此の樹久しからずして、長さ百肘に及び、太陽未だ出でざれば、樹身柔軟にして、爪甲も能く傷くれども、日既に天に昇れば、則ち斧も入る能はず。火も爇く能はず、尋いで河津、汎漲して、浸して樹根を壞てるを以て、洪川に偃し仆れ、下流、乾涸しぬ。時に酥鉢囉沒駄王、嚕賀迦河が大樹の爲に塞がれ、水、通行せず、國内の民衆、水の受用に乏しむを以て、使を發して國を出で、淨飯王に告げしむ『顚れたる木、流を壅ぎ、邦人大いに恐る。太子の神力を假り、樹を去り川を導かむと欲す』と。時に淨飯王默然として允さず『若し太子自ら去なば、卽ち當に意の隨なるべし』と。大臣あり、名けて[五]僉那と曰ひ、潜かに王の意を知り、方便力を以て太子に告げて言く『嚕賀迦河の旁に園苑あり、亭臺樓觀、花卉池沼、甚だ是れ嚴飾なり。去いて遊從せらる可し』と。太子言を聞き、卽ち眷屬及び諸の臣僚と、同に迦毘羅城を出で、彼の園中に往いて、意の隨に遊戲す。時に提婆達多、一の飛鵝の空に從つて過ぐるを見、弓を挽き仰射せるに、太子の前に墮ちたり。太子之を見て傷害を嗟念し、與に其の箭を拔き、鵝を放ちて飛び去らしむ。提婆達多、人を遣はして鵝を取らしむるに、太子告げて曰く『我れ菩提心を發し、常に慈愍の行を行ひ、諸の有情を利益し、損惱を見るを欲せざれば、所有る飛鵝は、箭を拔きて、放ち去り、彼をして安隱ならしめぬ。汝宜しく心を迴して、瞋恨を生ずる勿れ』と。提婆達多、是の語を聞き已りて、默然として悅ばざりき。

爾の時、酥鉢囉沒駄王、其の太子、近く園林に在すを知り、卽ち國人を遣はし、彼の河津に往き、其の大樹を出すに、唱聲に力を用ゐ、響き郊原を震はさしむ。太子之を聞き、諸の左右に訪ふ。群臣具さに白すらく『此れは是れ酥鉢囉沒駄王、其の人衆を遣はして、河中の樹を出さしむるなり』と。太子聞き已りて『我れ當に自ら往くべし』と。河を去ること遠からず、一の大窟あり毒龍の居る所たり。太子、前に至るや、龍乃ち窟を出づ。衆人恐懼して、太子を傷けむことを慮り、卽ちに利劍

【四】婆羅迦里拏(Kalyāṇa-garbha)。之れ亦たロック・ヒルの出す所なり、該當せざるが如きもそのまゝ玆に註せり。

【五】僉那(C'andaka)。普通車匿と譯し馭者となし、ロック・ヒル亦た馭者と傳ふるに玆に大臣とせり。

千子に圍繞せられむ』と。時に淨飯王、是の事を聞き已りて、心大いに歡喜し、卽ち群臣及び諸の釋種を集めて、具さに斯の事を白す。時に大臣あり、淨飯王に白すらく『若し太子に輪王の位を紹がむことを要めば、速やかに、國内の公卿、臣僚、士庶の舍に於て、淑女を選擇して、其の妃配と爲したまへ。仍つて種々の上妙の衣服、眞珠・瓔珞・珍玩の具及び舍宅樓閣等を造り、是の如く造り已りて、卽ち良辰を選び、太子をして王の正殿に於て※師子座に坐せしめ、公卿、臣僚及び長者居士等の所有る童女に命じて、悉く王宮に赴かしめ、如し、端正にして福德あり殊勝なる女の、太子樂ふ者あらば、卽ち上件の珍玩物等を賜ひ、納れて夫人と爲られたまへ』と。

爾の時、淨飯王卽ち所奏の依にし、後、吉日に至りて悉達多太子をして、王の寶殿に登り、師子座に坐せしめ、集る所の童女、俱に來りて會に赴きぬ。爾の時、一の童女あり[二]耶輸陀羅と名け、召しに赴かず。父其の故を問ふに、耶輸陀羅曰く『金帛、財貨は我が家自ら有り。何ぞ王宮に錫賚を受くるを須たむ』と。父又、告げて言く『汝、王宮に至らば、太子見已りて、或は當に採擇し、納れて夫人と爲すべし。豈に獨り寶玩を贈遺に充つるのみならむや』と。童女聞き已りて、卽ち上妙の衣服を著け、身に瓔珞を嚴りて、王宮に赴く。太子、是の童女の福相殊勝にして、身に光明あるを見て、心大いに歡喜し、師子座を下り、古の儀禮に依つて、互相に拜を設け、拜し已りて、坐に復り合掌恭肅す。時に僚等俱に王に白して言く『是の如き童女、諸相具足して、福德深厚なり。太子の與に其の夫人と爲るに堪へたり』と。王卽ち二萬の童女に命じて、耶輸陀羅を圍繞せしめて、同に宮室に入らしめぬ。

十六、藥樹因緣

爾の時、迦毘羅城に遠からずして、一の大河あり[三]嚕賀迦と名く。河岸の上に於て、一の大樹あ

※師子座(Simha-āsana)。

【二】耶輸陀羅(Yaśodharā)。十二遊經は同じく音譯して「耶惟檀」となし毘那耶雜事は意譯して「名稱」となせり。尚ほロック・ヒルは父の名(Daṇḍapāṇi を出せり。)

【三】嚕賀迦(Lohita)(ロック・ヒル)。

十四、遊觀捔術（下）

爾の時、提婆達多、手に弓箭を持ち、迦毘羅城を出で、而して*教射せんと欲す。悉達多太子知り已りて、五百の眷屬と、亦た國城を出で、同じく弓射を爲す。時に提婆達多、即ち、弓箭を持ち、遙かに一樹を射るに、其樹、箭に中り、弦に應じて倒る。悉達太子も亦た、一樹を射るに、箭の力、甚だ大にして、樹、兩斷すと雖も、儼然として動かず。提婆達多、樹の故の如きを見、箭中らずと疑ひ、太子に白して言く『常に聞くならく、太子、五種の射法を解すと。云何が樹を射て、中つる能はざる』と。是の如く言ひ已るや、帝釋天主、虚空中に於て、自ら思惟すらく『我れ須く、今日、菩薩の神通の威力を顯發すべし。若し是の如くせずば、云何ぞ、有情、彼の菩薩の、善能く一切の衆事に通達したまふを知らむ』と。是の念を作し已りて、即ち大風を化して、箭の中れる樹を吹かしむるに、忽然として地に倒る。時に提婆達多、即ち自ら驚歎しぬ。爾の時、太子、又た七の〔一〕多羅樹、七重の鐵鼓、七重の鐵豬を安置せしめ、衆をして之を射しむ。時に提婆達多、自らの威力を顯はさんと、弓を挽き、前み射て、一の多羅樹を透し、難陀之に次ぎ、二の多羅樹を透せり。悉達多太子即便ち、射るに隨て、所有る、七の多羅樹、七重の鐵鼓及び鐵豬等、皆な悉く透過し、其の箭、地に入り、龍王の宮に至る。爾の時、龍王、菩薩の箭を見、手を以て、之を捧ぐ。箭の入る處に於て、湧水、上流したれば、即ち信心ある婆羅門、長者、有りて、塔を起てゝ供養し、一切の苾芻、常に來りて瞻禮せり。爾の時、悉達多太子乃ち寶輦に乘りて、王城に廻歸したまふ。

十五、納妃

相師あり、太子を占つて曰く『十二歳に至り、若し出家せずば、轉輪王と爲り、四洲を統領し、

* 而欲教射。

【一】多羅(Tāla)。椶櫚樹に類し、高き者は七八十尺にも及び、肉堅く、葉稠密にして、此の樹下にあれば雨を防ぐといふ。

我等遠く象を馳れるは、輪王に献げむが爲なりき。斯る凶惡なる人に遭ひ、即時に殺害を行はる。難陀、象の尾を執りて、象を七歩の外に擲てば菩薩、大なる威神あり、象を擲つこと塊を拋つが如し。

衆許摩訶帝經卷第三

に物を害ねむ。彼の悉達多は、慈悲、聰敏にして、有情を利濟す。是の如き弓射を傳習するに堪當す』と。其の[五九]五種あり、一は遠射と曰ひ、發つ所の箭、能く遼遠を極む。二は聞聲射と曰ひ、其の聲音を聞きて、卽ち之を射る可し。三は中射と曰ひ、發つ所の箭、意に隨て中る。四には親的射と曰ひ、發つ所の箭疎闊なし。五は斷物射、射る所の物、透斷せざる無し。是の如くして、菩薩善く五射を解したまへり。

十三、遊觀捔術（上）

爾の時、[六〇]毘舍離城に、一の大象あり。形相端正にして、大勢力を具へたり。彼の國の人衆、咸な共に商議すらく『迦毘羅城の淨飯大王に、一の太子あり、悉達多と名け、相師之を視て、轉輪王の位ありと(言へり)。卽ち、此の象を馳りて、貢獻に充てむ』と。乃ち珠瓔・珍寶を以て、種々に嚴飾して、將に迦毘羅城に往き、王宮の門に至らむとす。時に提婆達多、門を出でゝ、象を見、門人に詰問して曰く『此の象、何所より來る』と。門人答へて言く『毘舍離城の聚落の人衆、悉達多に轉輪王の分あるが爲に、此の象を馳りて獻ぜんとす』と。時に提婆達多、此の事を聞き已りて、心に嫉妬を生じ、門人に告げて曰く『彼の悉達多に、何ぞ王位あらむ』と。卽ち器仗を持ち、象を殺して命終せしむ。爾の時、難陀、此の死せる象を見、提婆の瞋怒に殺されたるを知り、難陀、與に其の勇力を闘べんと欲して、卽ち象の尾を執り、手を以て之を擲ぐるに、象、本の處より、七步の外に離れぬ。時に悉達多、其の死せる象の本の處より離れたるを見て、是れ難陀が、威力を示さむが故に、手に象の尾を執り彼處に擲げたるが故なるを知る。爾の時、悉達多太子、自らの威神を顯はさんと、其の一手を以て象の尾を執持し、空に向て擲ぐるに、七重の城を過ぎて、土塊を投ずるが如し。時に毘舍離城の象を獻ずるの者、悉達多の大なる威力あるを見て、卽ち偈を說きて言く

【五九】參考のため「飜譯名義集」に依り、之に當ると思はるゝものを出し置かん
(1) Dūravedha
(2) Śabdavedha
(3) Marmavedha
(4) Akṣūṇavedha
(5) Vetya (Vedhya)
尙ほ第五は、荻原雲來博士が、その著、佛教辭典に於て斷定せるが如く名義集の所載は、括孤內の梵語に訂正せらるゝを可とせんことは、此の經に依ても證せられん。

【六〇】毘舍離(Vaiśāli)

こと能はず。何を以ての故に。菩薩の神力に由る。其の左手の一指を擧げ、金の器に鉤住すれば、象をして力を盡すも、動かすこと能はざらしむ。爾の時、淨飯王卽ち自ら思惟すらく『菩薩其の兩指を擧げて、彼の金の器に鉤くれば、假使百千の大象も、亦、動かすこと能はず。是れ、菩薩に千象の力あるに由る。若し諸の童子、菩薩と鬪戲せんと欲せんに、小なる飛鵝を大なる鶴に比するが如く、其の力、等しからざらむ』と。

十二、習學書藝

復次に、菩薩王宮に在せる時、五百の眷屬と入學して讀書したまへり。爾の時、本師第一の書を將ちて太子をして讀ましむるに、太子告げて言く『此の書、我れ解せり』と。其の師卽ち第二の書を讀ましむるに、太子之を見て、復、師に白して言く『此の書も亦解せり』と。是に於て、本師乃ち[五五]五百種の書を以て、太子に授與するに、太子白して言く『此の五百種の書、我れ一一、倶に解せり。如し他の書あらば、卽ち當に我れに與ふべし』と。師乃ち白して言く『其の世間に於ては、只此等の五百種の書あるのみ、此の外に有るなし』と。爾の時、太子卽ち自ら書を寫して、師をして之を讀ましむ。師乃ち歎じて言く『我れ昔しより來、目に未だ曾て觀ず』と。太子告げて曰く『此れは是れ、梵の書なり。時に彼の[五六]梵王、我れ當に輪王の位を紹ぐべきを知り。我れに傳授せり』と。卽ち微妙の梵音を以て、自ら讀誦したまふ。時に大梵天王、虚空中に於て高聲に讃じて言く『此れは是れ梵天の書なり』と。師、天の證を聞きて、深く信解を生じぬ。

爾の時、太子の舅氏の[五七]婆捺梨と、復一人の、[五八]婆賀儞嚩と名くると有り。此の二人は善く弓射を解せり。五百人あり親しく其の藝を學べり。又此の二師互相に言うて曰く『彼の提婆達多は、其の性麁惡にして、心に嫉妬多し、所有る射法、宜しく之に告ぐべからず。若し或は教授せば、必ず將

【五五】 佛本行集經第十一卷此の中の六十餘種の名目を擧げ、Lalitavistara 梵本、又若干を擧げたり。

【五六】 梵王(Mahābrahmā) 後に娑婆主梵天王といふと同神なり。

【五七】 婆捺梨 (Subhba ?) ロック・ヒル、太子の叔父として右の名を出せども調象の師となす。同じく叔父とするより、此の名を出し置けるも該當せざるが如し。外に Sudrśa とでも名づくる叔父ありしか?

【五八】 婆賀儞嚩(Sahadeva)。

即ち山中に住して禪定を修習し、歳月久しからずして復、神通を得たり。其の後時に於て、身に少しく病あり、良藥及び花果等を服食して、乃ち除愈することを得たり。弟子告げて曰く『我今出家せるは、出世の解脱の甘露を求めむが爲なり。師、所得あらば、願くば告諭を賜へ』と。師曰く『我れ自ら修行して、歳月、彌久なるも、斯の甘露に於て、猶ほ未だ得ず。云何が我をして復、汝を爲けしめむや。今淨飯の王子あり、悉達多と名け、等正覺を成じ、眞の甘露を得たまはむ。彼に於て出家し、一心に梵行して出離を求め、族姓の相及び我人の相を作すこと莫くば、即ち無爲の法を成就することを得む』と。爾の時、阿私陀仙人、即ち偈を説きて言く

我れ是の如き山に住して、　久しく梵行を修し、　復た神通を得と雖も、　而も未だ甘露を飲まず。　自ら知んぬ、　身は無常にして、　恒に生滅に處り、　聚集して假りに和合す。　即ち是れ無常の法なることを。

爾の時、仙人此の偈を説き已るや、曩羅那、師の誨示に感じ、禮拜し、供養し、即ち婆羅奈國に往いて、五百の[五二]摩拏嚩迦婆羅門の[五三]圍陀經を念ずるを見たれども、究竟に非るを知りて、親近せず、即ちに佛の所に往いて法の要を聞かむことを希ふ。爾の時、曩羅那、姓は[五四]迦底、姓を以て名と爲す。佛爲に、法の要を開示し、寂滅の樂を得たれば、乃ち大迦底と名く。

十一、菩薩神力

復次に、太子、乳母の懷に在し金の器を執りて食したまふ。須臾にして食し已り乳母即ち金の器を收めむとするに、器重きこと山の如く、之を擧ぐるに起らず、即ち上の事を以て、具さに王に告ぐ。王、宮人と同に往いて器を取るに、亦、擧ぐる能はず、即ち國人を集めて同に金の器を擧げむとするに、其の器、愈重し。復、大象五百頭を駕うて彼の金の器を挽くに、金の器の少分も搖動する

【五二】摩拏婆迦(Māṇavaka) 婆羅門の弟子を通稱して斯く言へば、人名にはあらず、以下同じ。
【五三】圍陀經(Veda) 吠陀とも音譯し四種あり。印度最古の文献にして婆羅門所依の經典なり。
【五四】迦底(Kātyāyana, Mahā) 漢譯は迦旃延、大――とするもの多し。

若し人、男女あらんに、愛憐して、心も足らず。是の如く、福相殊るれば、之を覩て恒に適悅せんを。仙人、太子を見たまひて、云何にしてか、啼哭する。我が子若し驚き怖れなば、忽然として病惱を生ぜむ　未だ意の云何を委かにせず、速かに我が爲に宣說せられよ。

爾の時、阿私陀仙人、是の偈を聞き已りて、卽ち王に白して言く『太子久しからずして卽ち正覺を成ぜむ。云何が、身に於て怖畏すること有らむ。假使、空中に大金剛を降すも、彼の眞珠の空に滿ちて下るが如く、彼の菩薩の身の一毫をも侵すこと能はず。世間の所有る一切の大火も、燒くこと能はず。一切の大風も、吹ばすこと能はず。一切の毒藥も、損ふ能はず。刀劍弓箭も、傷くること能はず。毒龍猛獸も、害する能はず。又此の菩薩、過去の世に於て大慈悲を行ひ、諸の衆生に於て、未だ曾て捨離せず、彼の有情をして、常に安隱を獲しめたまふ。云何ぞ菩薩、斯の怖畏あらむや。虛空中に於ては、帝釋・梵天王等ありて、共に守護したまふ。我が今啼哭するは、自ら已れの身、年命、中夭して、其の佛の世に於て、甚深の法藏を聽聞するを得ず、其の善財に於て、分あるなきことを觀じ、是の故に感傷して、自ら啼哭するのみ。請ふらくは、王、憂ふる無かれ』と。爾の時、阿私陀、又復、思惟すらく『我れ神通ありしも、菩薩の威、制して顯現せざらしめぬ。是の故に步行して王宮に入れり。今若し城を出でむにも、復、邐步すれば、彼の諸の有情卽ち慢心を起さむ。大神通の仙、步みて、王城を出づと』是の念を作し已りて、淨飯王に告ぐらく『我れ今、王に辭れて迦毘羅城を出でむ。我が與に四衢の道路を修治したまへ』と。時に淨飯王、卽ち有司に勅して、道路を修治し、砂礫穢惡の物を去除し、白檀の香水を以て、地に灑ぎて清淨にし、處々に幢・幡・瓔珞[五〇]を竪立し、衆くの妙香を燒かしめ、王并びに諸臣・長者・居士、恭敬し、圍繞して、迦毘羅城を出で、彼の仙人を送る。時に阿私陀、國王に辭れ已りて、意に隨て前行し、枳瑟計馱山[五一]に行き、

【五〇】（イ）Dhvaja（幢）
（ロ）Patakā（幡）
（ハ）Muktādāma（瓔珞）
【五一】枳瑟計馱山（Kiṣkindha）。重出

すれば、卽ち、相見るを得む』と。時に阿私陀請うて、床帷に就き、太子を臨視するに、爾の時、太子、睡眠に處ると雖も、兩眼倶に開きて、目、眴動したまはず。時に阿私陀、卽ち偈を說きて言く。

諸天、境を觀る時、　物を觀て、眼、眴がず、　菩薩は睡眠すと雖も、　境を觀たまふに、　亦是の如し。

爾の時、仙人、此の偈を說き已りて、宮人・乳母、太子を捧持して、仙人に奉上す。時に、阿私陀、詳かに、太子の容貌の常に非るを觀じて、卽ち王に問うて言く『曾つて相師あり、來りて相を占へるや否や』と。大王、白して言く『婆羅門あり、此の太子を相すらく「若し出家せざれば、必らず轉輪王の位を得む。若し能く出家すれば、定らず正覺を成ぜむ」と』。仙人聞き已りて、卽ち偈を說きて言く、

昔、邪見なる外道の身に墮ち、　今、福德ある輪王の子に逢ひます。　能く、煩惱を除きて、菩提を證し、　善く、甚深の法海藏を說きたまはむ。　相好を圓ずと雖も、輪王を棄てゝ、　大牟尼と成り、群品を救ひたまはむ。　是の故に、我れ今、歸命して禮す、　願はくは、親近するを得て、[四八]塵勞を滅せむ。

爾の時、仙人此の偈を說き已りて、審かに自身の壽命の長短を觀じて、太子の成佛の事を見得るや否やと、是の如く觀じ已りて、太子の、彼の王城を出で、山野に入り、年二十九にして、其の山中に於て、六年苦行し、甘露の[四九]滅を證し、無上の道を成じたまふを見るを得たり。爾の時、仙人、復、自身の、佛の出世に値ふも、年命短促にして、久く遇ひたまはざらむことを觀じて、甚だ感傷を懷き、覺えず聲を失して、自ら啼哭しぬ。時に淨飯王、仙人の哭するを見、驚き怪しむこと、常に異り、卽ち偈を說きて言く、

【四八】塵勞。煩惱の異名。

【四九】滅は、寂滅の意味にて、涅槃と同義にして、所謂四諦の第三に當る所證の境地なり。從つて甘露滅を、かく譯し置けり。尤も從來は甘露滅を一熟字となす。

はなく、眷屬、熾盛にして王の族斷えず、人天中に於て[四四]等々なし。若し出家せずんば、年三十二にして、金輪王と作りたまはむ』と。

爾の時、摩賀摩耶、太子を生み已りて、七日にして命終し、忉利天に生れて、*五欲の樂を受く。爾の時、太子の顔容端正にして、人天、目覩して、敬受すれども足らず。假使ひ、世間の巧妙なる金師、金を以て像を造るも、亦復、及ばず。譬へば、諸天の[四五]半努迦石の、大光明ありて、一切を照耀するが如く、菩薩の身の光明の寂靜なるも、亦復、是の如し。又蓮華の開敷して水を出でたる、菡萏の馨香ある、一切の有情、見む者、愛樂するが如く、菩薩の身も、見む者、恭敬すること亦復、是の如し。又此の菩薩の兩目、清淨にして、明朗に遠視し、一由旬の微細の塵色をも見ること天眼に過ぎ、晝夜異ることなし。又此の菩薩の語言の音聲、美妙にし清く響くこと頻伽の音の如く、亦、雪山に其の飛禽あり、花水を食し、食し已りて醉ひ、聲を發して相呼ぶ、其の音の和雅なるが如く。亦復、是の如し。

十、阿私陀仙人感傷

爾の時、曩攞那仙、本の師阿私陀仙人に告げ白ふらく『我れ今、彼の迦毘羅城に往いて、菩薩を禮拜せむ』と。師言く『往くべし』と。卽ち本師と[四六]神通力を運かし、迦毘羅城に往くに、城を去ること遠からざるに、菩薩の威、彼を制して通を失はしめしかば、歩行して城に至り、淨飯の宮に詣る。時に門を守るの人、卽ち以て、王に白す。乃ち門人に勅して、引いて入内せしむ。王、相見え已りて歡喜すること量りなく、請じて床座に就け、[四七]閼伽水を獻じ、樂を作し、食を設けて、種々に供養す。王卽ち問うて言く『仙人、云何なる因緣にて、此に至る』と。時に阿私陀、王に白す『我れ今、一切義成大牟尼師に見えむと欲す』と。王言く『今太子正さしく睡眠に當く。且に候つこと須臾

【四四】無等々(Asamasama)。等しき者なしの意。

＊ 五欲とは、色・聲・香・味・觸の五境をいふ。五境そのものは欲に非れども貪欲の心を起さしむる因となる所より又かく名く。

【四五】半努迦石(Paṇḍukam-bala)又た白色なる羊毛の上衣をも意味すれば白色の寶石なるべし。

【四六】神通力。(Abhijña) 佛・菩薩・聲聞・外道に通じて有する無礙力なるも外道は、神境・天眼・天耳・他心・宿命の五通を具するのみにして第六の漏盡通は佛敎の聖者のみに局るといふは佛敎一般の通說なり。

【四七】閼伽。(Argha) 功德水と意譯せり。

して見えざること、亦、龍馬及び其の象王の如し。十に太子の身の諸の毛孔に、各一毛生じ、紺青にして右旋轉す。十一に太子の髮毛、端直にして、上に靡き、金色の身を嚴りて、衆の愛樂する所たり。十二に、太子の身皮薄潤にして、塵垢著かず。十三に太子の身皮、金色に光り曜き、妙なる金臺を衆寶の莊嚴するが如く、人天愛樂す。十四に太子の手足の掌中、頸及び兩肩の七處充滿す。十五に、太子の肩・頸、殊妙にして、一一圓滿す。十六に、太子の雙腋の下、一一充實す。十七に、太子の容儀、廣大にして、圓滿端嚴なり。十八に、太子の身相、修廣、端正にして、人天に出過す。十九に、太子の體相、周匝圓滿にして、量、[三八]諸瞿陀樹に等し。二十に、太子の頷・臆・身の上半、威容廣大にして[三九]師子王の如し。二十一に、太子常に光明あり、各一尋に面ふ。二十二に、太子の齒、四十を具し、齊平にして、雪の如く淨く、密にして根深く、堅固にして動かず。二十三に、太子、口に四牙あり、鮮白、鋒利なり。二十四に太子口中に一切の食ふ所、常に上味を得、能く正しく呑み、咽津の液、通流して、永く衆病を離れ、身心適悦なり。二十五に太子の舌相、廣淨にして、能く面輪を覆ひ、髮の際に至つて等し。二十六に、太子の[四〇]梵音、洪雅にして、其の聲の振ふ響、猶天鼓の如く、言詞、婉約にして[四一]頻伽の音の如し。二十七に、太子の眼睫、青紺色を作して、猶、牛王の如く相雜亂せず。二十八に、太子の眼睛、紺青と鮮白となれども、紅の環相ひ間てゝ青白、分明なり。二十九に、太子の面輪、天の滿月の如し。三十に、太子の眉相、彎長して、天帝の弓の如し。三十一に、太子の兩眉の中間に[四二]白毫相あり、右に旋り、柔軟にして兜羅綿の如く、鮮白の光、淨きこと珂雪に逾えたり。三十二に、太子の頂上に[四三]烏瑟膩沙あり、金頂の骨、高く顯はれ、周圓、亦た天蓋の如し。是の如きの三十二大丈夫相は、過去の世、無量百千萬億劫の長時に精進し、間なく一切の戒行及び諸の善法を修習して遺餘なかりしかば、今、相好の功德を成就したまふことを得たるなり。是の故に菩薩、淨飯の宮に生れて、飮食・衣服・臥具・象馬の一切の珍寶具足せざる

Rathakāya　（車衆）
Pattikāya　（歩衆）
【三六】　鵝王。(Rājahaṃsa)
【三七】　金色鹿王。(Aiṇeya) 翳泥耶等と音譯し、一種の鹿にして黒色なり。
【三八】　諸瞿陀は、經初の尼倶陀に同じくNyagrodha なり。
【三九】　師子王(Siṃha(rāja))。
【四〇】　梵音。(Brahmasvara) 大梵天王の出す音聲にして五種の淸淨微妙の音ありといふ。
【四一】　頻伽。迦陵頻伽鳥(Kalaviṅka)のこと、又た好聲鳥といひ其の聲和雅にして聽く者をして厭かしめずと。
【四二】　白毫相。(Ūrṇākeśa)
【四三】　烏瑟膩沙(Uṣṇīṣa)意譯して肉髻と言ふ。

爾の時、淨飯王、宮人に告諭すらく『我が與に、力を勤して太子を養育せよ。時に依りて乳哺し、洗浴し[三二]莊嚴し、心を用ゐ、愛を保ちて、所を失はしめざれ。我が子生るゝ時、天、甘露を降しぬ。相師、之を視るに、[三三]三十二の大丈夫相あり。若し復家に在らば、轉輪王と作らむ。乃ち[三四](イ)金輪寶・(ロ)象寶・(ハ)馬寶・(ニ)摩尼寶・(ホ)玉女寶・(ヘ)主藏寶・(ト)主兵寶あり。是の如き七寶悉く皆な具足し、千子に圍遶せらる。甚だ希有と爲す。勇猛にして畏るゝなく、能く他の寃を破す』と。爾の時、相師偈を說きて曰く

千輻の金輪寶は　轂輻相ひ周圓し、　空を飛びて、四方に行き、　須臾にして本處に復る。
象寶は最も殊勝にして、　白さ珂雪に類び　贍部洲を巡遊するに、　隨處に礙げなし。　馬寶は足に威勢あり、　靑き頸は世に希有なり、　*常に往くに虛空を行き、　往來すること風の轉ずるが如し。　最上の摩尼寶は、　光、一由旬を照し　夜の黑暗中に、　天に當りて、　明月を出すが如し。　女寶は世に希有にして、　微妙、甚だ端嚴なり。　親しく輪王に侍して、能く思ふ所の事を知る。　藏寶は大威德あり、　能く世間の寶を主どり　海の中、地の下の珍も、　王、須れば、卽ち現ぜしむ。　主兵臣は、巨力あり、　能く　[三五]四兵――象と、馬と步と、　兼ねては車に於て、到る處に、　違背するものなからしむ。

爾の時、淨飯王、復相師に問ふ『云何が、我が子の三十二相なるや』と。相師答へて言く『三十二相とは、一に太子の足下、千輻輪の紋あり。轂・輻・輞の三、悉く皆な圓滿す。二に、太子の手足、皆な悉く柔軟にして、兜羅綿の如し。三に、太子の手足、猶[三六]鵝王の如くして、網輓あり、眞金の色の如し。四に、太子の手足の諸指、纖く長し。五に太子の足の跟と趺と相稱ふ。六に太子の足下、平滿にして香奩の底の如し。七に、太子の雙腨、漸次に纖圓にして、[三七]金色鹿王の腨の如し。八に太子の雙臂、修く直にして、象王の鼻の如く、手を垂るれば、膝を過ぐ。九に太子の陰相、密に

【三二】莊字裝とする本あれども今は普通の用例に依り宋・元・明三本を採れり。

【三三】(Dvātriṃśanmahāpuruṣa lakṣaṇa。) 三十二大丈夫相。略して三十二相(Dvātriṃśa-llakṣaṇa)と言ふ。こは次にある七寶と共に、將來佛となる菩薩と、轉輪王となる王子とに、生れながらにして具する特徵にして、次下に其の名目を擧げたり。

【三四】Saptaratnāḥ(七寶)
(イ) Cakraratna
(ロ) Hastiratna
(ハ) Aśvaratna
(ニ) Maṇiratna
(ホ) Strīratna
(ヘ) Gṛhapatiratna
(ト) Pariṇāyakaratna
前に擧げたる四種の王は、輪寶に依りて區別さるゝが故に、茲に金輪寶とあるは、金輪王にして、四洲を統治すべきものなることを示す。

※ 常往虛空行。

【三五】四兵。印度の軍隊は四つの兵種を有し、四支軍衆(catur-aṅga-bala-kāyaḥ)と言ひ左の如し。(名義集)
Hastikāya (象衆)
Aśvakāya (馬象)

して來るや』と。師曰く『今此の光明は眞金の色の如し。淸涼寂靜にして、三界を照す。此れは是れ佛、生るゝの瑞なり』と。囊羅那、師に告げて曰く『我れ今彼に往いて、菩薩を禮拜せむ』と。仙人告げて曰く『彼に大威德あり、諸天龍神、圍遶して、守護し、能く見るを得ることなけむ。佛世尊、迦毘羅國に入り、名を聞くの時を候り、汝、彼こに詣るべし、大いに勝利を得む』と。

復次に菩薩生るゝ時、五百の白象あり、五百の從人あり、時を同じうして生る。地中の寶藏も自然に出現し、天は甘露を降らし、諸の小國の王、並び來りて、慶賀す。

八、命名

爾の時、淨飯王、此の祥瑞の種々に殊勝なるを見て自ら言うて曰く『我が子、降生して、大吉祥を具す、能く一切の福德を圓滿し、能く一切の善事を成就せむ。應に爲に號を立てゝ、[二七]一切義成と名けむ』と。

復た次に、迦毘羅城に[二八]夜叉神あり、舍迦嚩駄囊と名く。若し諸の衆生の所有る男女、初生の後、將て神廟に詣り、夜叉を拜せしめて、其の守護を求む。時に淨飯王も亦太子をして[二九]四寶の車に乘らしめて、彼の神祠に詣る。將に廟庭に至らむとするに、夜叉出で迎へて、車前を拜す。淨飯王曰く『天神の至尊すら菩薩を禮重す。應に爲に號を立て、名けて[三〇]天子と爲すべし』と。又釋衆等の輩、氣志剛强にして以て調伏し難きも、此の菩薩の身相端嚴にして、威容、和雅に、人天仰ぎ重んずるを見て、卽ちに自ら心を廻し、其の憍慢を捨て、情性、柔順となり、默然として瞻仰せり。斯れに因つて名を立て、名けて[三一]寂默と爲したまへり。

九、相師占看

雪山といひ、或はヴィンドヤ山といへども、短見の及ぶ所未だ他に此の山を擧ぐるを聞かず、只だ本經と西藏の律藏(ロック・ヒルに依る)のみなり。

【二六】囊羅那(Nalada)那羅陀とするを普通とし l を r とするもあり。

【二七】Sarvārthasiddha。sarva-artha-siddha 一切　義　成

【二八】夜叉の名(Yakṣa Śakyavardana)。(ロック・ヒル)

【二九】四寶とは、金・銀・瑠璃及び頗胝迦(水晶)の四なり。かの有名なる須彌山は此の四寶に依つて作られ、東・西・南・北に各ゝ其の光を發つが故に妙光山の一名を得といはる。四寶並に四寶車等の事は大智度論第十、第十一卷を見よ。

【三〇】天子(Devatideva)。右は天中の天と直譯すべき語にして天子に當る梵語は別に Devaputra あれども、今まロック・ヒルに從へり。

【三一】寂默(Muni)(重出)。

し、[一四](イ)曼多羅花、(ロ)優鉢羅花、(ハ)倶母那花、(ニ)奔拏里迦花を雨らし、及び(ホ)沈香・(ヘ)檀香・(ト)末香・(チ)多摩羅香・上妙なる衣服等を雨らしぬ。爾の時、諸天虚空中に於て、偈を說きて言く、

善く生れたまひぬ。大[一五]牟尼、　百福莊嚴相あり。　煩惱の塵を斷ち盡して、　無上覺を證したまはむ。　能く圓滿の身に於て　大光明の色を放ち　遍く、世間一切の　愚癡の暗を照したまはむ。

七、祥瑞

爾の時、天子此の偈を說き已るや、四國の王有りて、各一子を生む。[一六]舍衞國の阿羅拏王、一の太子を生む。王、思惟して曰く『我が子、生るゝ時、世界は清淨、湛然にして安隱なりき』とて、立てゝ[一七]鉢囉洗嚢喩那と名く。[一八]王舍城の摩訶鉢那王、一の太子を生む。王思惟して曰く『我が子生るゝ時、大光明あり、能く世間を照せり』とて、立てゝ、[一九]尾弭娑囉と名く。[二〇]倶尸那城の設多儞迦王、一の太子を生む。王、思惟して曰く『我が子、生るゝ時、世界、光明あり、天地朗然たりき』とて、立てゝ、[二一]烏那野嚢と名く。[二二]烏惹儞國の阿難多儞弭努王、一太子を生む。王、思惟して曰く『我が子、生るゝ時、大光明ありて、諸の幽暗なかりき』とて、立てゝ[二三]鉢囉愈多と名く。是の如きの王子、皆な是れ菩薩の聖感に《依つて》來生せり。

復次に城を去ること遠からずして、一の大山あり、[二四]緊使吉陀と名く。山中に一の仙人あり、[二五]阿私陀と名く。恒に其の山に處り、梵行を修し持てり。爾の時、仙人に一の外甥あり、[二六]嚢羅那と名け、仙人に承事し、法の要を聞かむことを求む。仙人卽ち爲に善惡の法を說きたれば、此に因つて出家せり。菩薩生るゝ時、大光明ありて、世間を照耀せるに、嚢羅那之を見て、驚き疑ふも測らず。卽ち菴中に入り、其の師に問うて曰く『今此の光明、世間を照耀すること、猶、衆日の如し。云何が

【一四】花及び香の名を次第に依て記す(名義集)。
(イ) Mandāra
(ロ) Utpala　(青蓮華)
(ハ) Kumuda　(赤蓮華)
(ニ) Puṇḍarika　(白蓮華)
(ホ) Kṛṣṇāgaru
(ヘ) Candana
(ト) Cūrṇa
(チ) Tamālapattra
【一五】牟尼(Muni)。意譯して寂默といふ。佛以前より印度にては聖者を名けて牟尼と尊稱せり。
【一六】Śrāvastī 王 Aranemi
【一七】鉢囉洗嚢喩那(Prasenajit)一般に波斯匿王と音譯するまた第十二巻の如く勝軍王と意譯することもあり。
【一八】Rājagṛha 王 Mhāpadma 第十一巻には此の王を摩賀鉢納摩と書けり。
【一九】尾弭娑囉(Bimbisāra)一般に頻婆娑羅と書す。
【二〇】Kauśambī王Śatanika
【二一】Udāyana
【二二】Ujjayini 王 Anantanemi
【二三】鉢囉愈多(Pradyota)
【二四】緊使吉陀(Kiskindha)後に阿私陀の歸り行ける山を枳惡計駄といふも、之に同じなるべし。
【二五】阿私陀(Asita)彼の住山に就きては或は漠然

の水を飲み已りて、王に告げて曰く『所有る一切の牢獄に禁繫さるゝ、苦惱の衆生は、請ふらくは、王、放免したまへ。所有る一切の衣食を、貧乏、寒餒の衆生に、願はくは王、布施したまへ』と。是の如く、種々に諸の福業を作せり。

爾の時、摩賀摩耶、淨飯王に告ぐらく『我れ今園苑に於て住止せむことを思ふ』と。王卽ち彼の酥鉢囉沒駄王に告ぐ『汝の女、摩賀摩耶、園苑に住せんことを樂ふ』と。酥鉢囉沒駄王、卽ち工人を遣はして、大いに營繕を興す。地位は寬博に、樓觀は華煥なり。龍弭禰園と名く。時に摩賀摩耶、諸の宮嬪と、同に園內に往いて、無憂樹[九]を見るに、芬芳茂盛にして、葉を布ね、花を開く。卽ち右手を以て、彼の樹枝を攀くに、太子を生まむ欲せるも、諸の人衆四邊に圍遶するを視て、慚色あるを示す。天主知り已りて、乃ち風雨を作し、彼の人衆をして四散し馳走らしむ。爾の時、天主復自ら身を化して、一の老母となり、夫人の前に在りて、太子を收めんとす。是の時、太子初めて母胎を出で、身、金山の如く眞金の色の如し。其の老母をして、收め捧げんに、及ばざらしめ、太子、告げて言く『放て、放て、憍尸迦[一〇]よ、我、自ら出生せむ』と。是の時、大地卽ち大いに震動し、大光明を放ちて、普く世間を照す。衆生、之を見て、未曾有と歎ぜり。時に淨飯王、斯の祥瑞を見て、太子の前に於て、旋遶する、三匝りして、太子の足を禮して、歎じて言く『善き哉、善き哉。我れ今日に於て、大丈夫、福德の子を生み、我をして長夜に、快く善利を得しむ』と。爾の時、太子の身相は圓滿し、內外は瑩淨にして、猶ほ、瑠璃の、塵垢も、雜穢も、一切・著かざるが如し。其の四方に於て、各七步を行く。東方は、涅槃[一一]の最上なることを表はし、南方は群生を利樂することを表はし、西方は生死を解脫することを表はし、北方は永く輪廻を斷つことを表はす。時に諸の天人、虛空中に於て、白き傘蓋[一二]を持ちて、菩薩の頂きを覆ひ、又復、諸天は二種の雨——或は冷き或は溫きものを降らして、頂に灌ぎ、沐浴せしめ、又復、空中の諸天及び龍[一三]は天の伎樂を作

【九】 無憂樹(Aśoka)阿輸迦と音譯す。灌木にして紅の美しき花を開く。

【一〇】 憍尸迦(Kauśika)。天主帝釋の異名なり。

【一一】 槃の字、盤とする本あれども、今ま普通の用例に從ひ宋・元・明三本を採る。

【一二】 傘蓋(Chattra)。

【一三】 龍(Nāga)。

卷の第三

六、誕生

爾の時、摩賀摩耶、四種の夢を作す。一に、白象、口に六牙ありと夢む。二に、白象、天より來り下りて腹中に入ると夢む。三に、自らの身、大高山に上ると夢む。四に、衆多の豪貴なる大人、倶に來りて拜跪すと夢む。是の夢を作し已り、卽ち上の事を以て、淨飯王に告ぐ。王、此の夢を以て、其の相師に問ふ。相師、王に告ぐらく『今ま、此の夫人必ず太子の諸の相好を具するを生まむ。若し王宮に在らば、轉輪王と作り、若し是れ出家せば、諸の梵行を修し、正等覺を成じ、天人師と號けむ』と。爾の時、菩薩、降生の時、大地[一]震動し、大光明を放ち、衆生、之を覩て、未曾有と歎ず。帝釋天主、[二]護世の四王、各、刀劍羂索及び弓箭等を持ちて、菩薩を守護し、所有る一切の魔及び非魔、諸の鬼神等も害する能はず。[三]摩尼珠及び[四]迦葉迦寶の、所有る一切の穢惡、塵垢も、染すること能はざるが如く、菩薩の身も亦復、是の如し。又、母身の內外をして、瑩淨ならしむること、猶[五][六]瑠璃の如く、能く菩薩の色相、諸根を見ること、彼の[七]水精の五色の線を貫くに、分明に顯露する如し。又母身をして、氣力增盛して、諸の疾苦なく、志意堅固にして、五戒を受持し、精進して、犯すことなく、諸の過失を離れしむ。

爾の時、摩賀摩耶、淨飯王に告ぐらく『我れ、今日に於て、忽ちにして自ら、四大海の水を飲まむことを思ふ』と。王、是の語を以て、諸の相師に問ふ。相師、答へて言く『摩賀摩耶、必ず太子の、諸の相好を具し、無上道を修して、等正覺を成ずるを生まむ。若し海水を飲まざれば、太子の身相も圓滿せざらむ』と。時に迦毘羅國に一人あり、[八]囉羯多鍝と名け、善く幻術を解す。王卽ち召せるに、至りて、正殿內に於て、四大海の水を化る。此の海水を取り、夫人に與へて飮ましむ。此

【一】震の一字振とする版あれども今は宋・元・明三本に依り震とす、以下之に準ず。
【二】護世(Lokapāla)左に四王を列す(名義集)
(1) Vaiśravaṇa (多聞)
(2) Dhṛtarāṣṭra (持國)
(3) Virūḍhaka (增長)
(4) Virūpākṣa (廣目)
【三】摩尼(Maṇi)。
【四】迦葉迦(Kācaka)。意譯して鍮石と言ふ。
【五】猶の字、凡て由とするも、今ま明本を採れり、下之に準ず。
【六】瑠璃(Vaiḍūrya)。
【七】水精(Sphaṭika)。又玻璃或は頗胝迦とも書す。
【八】ロック・ヒル名を擧げず。

爲るに堪ふ。願くは、菩薩速かに人間に降り、我が爲に法を說き、我をして長夜に甚だ、善利を得しむるを得むことを』と。

爾の時、菩薩、兜率天子に告ぐ、『汝、今、我が爲に、一切の樂を動かせ』と。諸天、聞き已りて、競うて音樂を奏す。爾の時、菩薩、大法螺を吹くに、其の聲高遠にして、天樂の一切の音韻に過ぎたり。是の如く、南贍部洲の一十八種の調し難き有情も、菩薩、無礙辯を以て、大法音を振ひ。彼の有情をして、自然に降伏せしめむこと、亦復是の如し。而して偈を說きて言く、

師子一たび吼ゆれば、衆獸伏し、　三八 金剛一たび杵てば、群峯、碎け、　三九 修羅、無數なれども、四〇 一輪に降り、世間の黑暗は、一日に破る。

爾の時、六欲天子及び 四一 天帝釋、菩薩が、六牙の白象に乘りて、兜率天を下り、摩耶の腹に處するを觀見して、卽ち甘露を降らし、母腹の清淨安隱を守護して、偈を說きて曰く、

我れ、天子の閻浮の、　甘蔗王の宮に、　下りて、生を受けたまふを觀る。　有情を利して、宿願に酬へんが爲なり。　日の初めて出でゝ、光明を放つが如し。

衆許摩訶帝經卷第二

託胎　二三

rthika ?)。

【三五】 六大力士。
(1)Udraka R̄maputra
(2)Ārāḍa
(3)Kalāma
(4)Subhadra
(5)Parivrajaka
(6)Samjaya(māṇavaka)。
茲に阿囉拏迦濕摩を二人となすも第六卷は一人となす。原本一人なりしを二人とせるため烏盧尾羅を十八人外に出す外なきに至りしならむ。

【三六】 烏盧尾羅迦葉(Uruvilvā Kāśyapa)。第九卷に烏嚕尾螺迦葉といふに同じ。

【三七】 由旬(Yojana)。又た踰繕那とも譯し、印度の里程なれども甞、一定せず、支那の里程にて三十里といひ又た四十里といふ。然るにモニエル・ウイリヤムスの梵英辭典には一由旬は四拘盧舍にして九哩に當るといひ、又た八拘盧舍一由旬說もありといふ。要するに一由旬は帝王の一日の行程なりといへば略ゝ想定するの外なからん。

【四〇】 一輪とは、一轉輪聖王なり。尙ほ次の一日とは太陽一度出づればの意なり。

【四一】 天帝釋(Śakra)。茲に天帝釋とあるは後の如く天主帝釋(Śakra devendra)とあるを主を脫せるにはあらざるや。尤も同神なれば、何れにするも差支なかるべし。尙ほ帝釋天主といふも天主帝釋に同じ。天主といふは、帝釋が忉利天の主にして外の三十二天を統轄するに依る。

【三八】 金剛(Vajra)金剛石なり、堅固にして一切の物を破壞するに依て、常にかゝる譬に用ゐらる。

【三九】 修羅(Asura)。委しくは阿修羅と言ふ。六道の一。

にして、上味の甘蔗、香味の稻米、肥力の大牛あり、諸の貧乞及び鬪諍の事なくば、是の如き國土を名けて中國と爲す。我れ卽ち往いて生れん。彼の有情・毀言――菩薩、過去に、大勝因を修し、去何が、今に於て、却りて邊地に生るゝ――を興すを恐るゝなり。三には時分を觀ず。若し[二七]增劫八萬歲あるの時は、有情の根、鈍く、智慧愚劣にして、法の器たるに非ず、是の故に生れず。若し、減劫百歲の時に於ては、[二八]五濁に近しと雖も、彼の時の衆生、根性、猛利にして、機器、成熟せり。是の故に菩薩卽乃ち下生せむ。四には上族を觀ず。若し淨飯王は、過去の世、成劫の初めより、衆許王の後、子孫相繼ぎ、淨飯王に至り、倶に是れ輪王の族なり。是の故に菩薩卽ち、往いて、生を受けむ。五には母身を觀ず。若し是れ女人の、智慧甚だ深く、福德量りなく、諸相端嚴にして、戒を持すること淸潔に、過去の諸佛同じく授記を與ふるに、我れ卽ち生を受けむ。今、摩耶を見るに、上の功德を具へ、復た是れ王種なり。卽乃ち彼に生れむ。爾の時、菩薩、是の觀を作し已りて、復た、[二九]六欲天子に告ぐ『汝今ま諦かに聽け。我れ當に[三〇]南贍部洲に下生して、質を摩耶に託すべし。汝等、我が爲に[三一]甘露の雨を降らし、我れをして樂を受けしめよ』と。天子告げて言く『南贍部洲に[三二]六大惡人あり、一は老迦葉、二は摩娑迦梨虞[三三]娑子、三は娑惹野尾囉致子、四は阿嚩多繼捨迦摩羅、五は迦毗野、六は儞誐囉儩帝子なり。南贍部洲に、復、[三四]六裸形外道あり、一は俱吒多努婆羅門、二は酥嚕拏多拏婆羅門、三は摩儗婆羅門、四は梵受婆羅門、五は布娑迦囉婆羅門、六は路呬毗婆羅門なり。南贍部洲に、復[三五]六大力士あり、一は烏捺囉矩囉摩子、二は阿囉拏、三は迦類摩、四は酥跋捺囉、五は波里沒囉惹迦、六は散耶摩拏縛迦なり。是の如き一十八種は、調伏すべきこと難し。

爾の時、人間に一仙人あり、年已に衰老なる、[三六]烏盧尾羅迦葉と名く。』と。(又)思惟して言うて曰く、『當に此の國土の福勝の地は十二[三七]由旬なるべし。其の中間に於て、菩薩の安坐し說法するの處と

【二八】五濁(Kaṣāya)。
(1) 命濁(Āyuṣkaṣāya)
(2) 見濁(Dṛṣṭikaṣāya)
(3) 煩惱濁(Kleśakaṣāya)
(4) 衆生濁(Sattvakaṣāya)
(5) 劫濁(Kalpakaṣāya)

【二九】六欲天子。欲界に六天あれば、欲界の六天子の意なり。卽ち四王天・忉利天・耶摩天・兜率天・樂變化天・他化自在天等六天の天子なり。

【三〇】南贍部洲 (Jambūdvīpa)。又た閻浮提とも書き世界四洲の内南方の國土なり。

【三一】甘露(Amṛta)。又た音譯して、阿密哩多といひ、字義につき譯すれば不死の意なり、天の所食にして味、甘美にして、之を食する時、長壽を得といふ。

【三二】六大惡人。佛敎に所謂六師外道なり、卽ち左の如し
(1) Pūraṇa Kāśyapa
(2) Maskarin Gośāliputra
(3) Sañjayin Vairaṭiputra
(4) Ajitakeśakambala
(5) Kakuda Kātyāyana
(6) Nirgrantha Jñātiputra
第十二卷又た此の六師を出し同じく音譯なれども大いに異れり。

【三三】娑字は婆字となす版あれども梵語より見て宋・元・明三本の婆を採れり。

【三四】六裸形外道(Nagna-ti-

爾の時、酥鉢囉沒駄王、彼の星賀賀努王の太子の、賢徳を具有するを聞き、即ち使人を遣はして彼の國王に告ぐ『我れに二女あり、一は摩耶と名け、二は摩賀摩耶と名く。初生の時、相師占ひて言く『此の二女、若し後に子を生まば、三十二相を具し、金輪王と爲らむ』と。星賀賀努王聞き已りて、淨飯太子に告げて曰く『酥鉢囉沒駄王、二女を娉りて汝に與へ妻と爲さむと欲す。若し後に、子を生まば、必ず輪王と爲らむ』と。即ち釋種五百人等を遣はして、彼に往いて女を迎へしむ。爾の時、邊國に別に一族あり、半拏嚩[二五]と名け、兵衆を其の要路に率領して、劫奪を行はむと欲す。釋衆知り已りて、患害に遭はむことを慮れ、具さに上の事を述べて、王の同行せむことを請ふ。王即ち白して言く『我れ今ま、年老いて、戎事を厭ふ。子の淨飯をして躬自ら討伐せしめむ。如し勝捷を獲ば、當に自ら願を立つべし』と。

爾の時、星賀賀努王四兵を選練し釋種等を付して、子の淨飯に與へ、たれば、(淨飯)同に惡族を殺し、女を迎へて廻歸し、即ち王に白して言く『王の先に宣べたる所、別に願を立てしむとは、其の義云何』と。王即ち告げて言く『汝、今に於て、當に一女を納れて以て己が妻となすべし。如し後に子あらば、善く保護を加へて國位を嗣がしめよ』と。王の沒後に及びて、其の大臣等、共に淨飯太子を立て、即きて王位を紹がしむ。時に王の國界、人民、豐盛にして、王は、夫人及び諸の宮嬪と、恒に快樂を受けたり。

時に釋迦菩薩、兜率天の宮に在まし、人間に生れんと欲して、五種の觀察を作したまふ。一には種姓を觀ず。菩薩思惟すらく、若しイ婆羅門[二六]、ハ吠舍、ニ首陀は、種姓、上に非れば、我が生るゝ所に非ず。若しロ刹帝利は、我れ即ち當に生ずべし。彼の時の人、富貴を重んずるを以ての故に、若し下姓に生るれば、人の重んぜざる所なり。今、衆生を攝化せんが爲に、彼(等)をして歸依せしめむ。是の故に、當に刹帝利の家に生るべし。二には國土を觀ず。若し其の國土、最上殊勝

【二五】半拏嚩(Paṇḍava)。

【二六】印度の四姓(四階級)なり。
(イ) Brahmaṇa (僧侶)
(ロ) Kṣatriya (武士)
(ハ) Vaiśya (庶民)
(ニ) Śūdra (奴隷)
(ロ)(ハ)(ニ)後に各々刹利、毘舍、輪陀とあれども異るに非ず。

【二七】劫(Kalpa)は、頗る長き時日を呼ぶ名にして俗に盤石や芥子の譬を以て説明するも元來は算數を超えたるに名けたれば之を計算せんとするは無益なるべし。之に增劫、減劫の二種を立て、人の壽命十歲より百年毎に一歲を增して人壽八萬四千歲に至る間を增劫といひ之に反するを減劫と名く。
　倘ほ次に成劫とあるは住劫增劫・空劫と共に四劫と名けらるゝものなれども、この各劫は前述の劫(小劫)を二十度增減したる量なれば、前と區別する時中劫と名けられ、增減二劫の人壽に關して說くに對し、こは世界の成立、並びに破壞の經過につきて四種の異を立つるものなり。而してこの四中劫を合して大劫と名く、從つて單に劫と言ふも時に依り、此の三の異あるを知るべし。

爾の時、迦毘羅國の主、星賀賀努王、大福德を具し、資財、量なく、人民熾盛にして、國土、豐かに實る。此を去ること遠からず、一の國土あり。名けて天指城と曰ひ、王あり[19]酥鉢囉沒駄と名く。其の國、大いに富み、金銀珍寶、處々に盈ち滿ちたり。彼の王に、妃あり、[20]龍弭禰と名け、身色、端嚴にして、諸相、具足せり。其の國內に於て、一の長者あり、宿ねて善本を植ゑ、福德、純厚なり。眷屬、熾盛にして、庫藏、衆多なること、[21]毘沙門天王の如し。

爾の時、長者に、一の園苑あり、衆卉・名花・流泉・浴地・亭臺樓閣・異獸靈禽、具足せざるなし。時に酥鉢囉沒駄王、其の妃后及び諸の眷屬と此の園に來り、樂みを作し遊戲す。時に彼の妃后、此の園林の、種々の華煥なるを見て、心に愛樂を生じ、即ち王に告ぐ『我れ、此の園に、恒に以て遊戲せむを要む』と。王、妃に白して言く『惟、此の園林は、長者の所有なり。云何にしてか、能く得む。我れは國王たり、當に自ら剏め造るべし』と。即ちに國人に命じて、大いに園苑を興し、泉池臺觀、勝絕第一なり。龍弭禰園と名く。爾の時、酥鉢囉沒駄王、長夜に思惟すらく『我れ今、云何が、一子の金輪王と爲るを生むことを得む』と。是の如く思念するに、忽ち後時に於て、妃乃ち娠むあり、懷妊九月に一女を誕生す。顏貌端正にして、諸相具足し、福德智慧、其の世間に於て、最も殊勝と爲す。是の如くして、衆人斯の福相を覩て、倶に言ふ『希有なり。應に是れ[22]毘首羯摩天の作る所か、或は是れ幻化の成す所なるべし』と。女、生るの後、一日・二日・三七日に至り、王此の女の爲に諸の戚里及び群臣等を集め、慶賀、樂を作し、即ち爲に名を立て、名けて[23]摩耶と爲す。其の女、身の相に、而も八乳あり。相師占つて曰く『此の女、後時に當に貴子の灌頂王位を紹ぐを生むべし』と。又後時に於て、復た一女を生む。端嚴福相にして、最も其の上たり。初生の時、大光明あり、遍く國城を照し、祥瑞、常に非ず。因りて慶賀の日に即ち爲に名を立て、[24]摩賀摩耶と名く。相師占つて曰く『此の女の生まむ男は、三十二相を具し、金輪王と爲らむ』と。

【一九】酥鉢囉沒駄(Suprabuddha)。音譯して善覺王と言ふ。

【二〇】龍弭禰(Lumbinī)。

【二一】毘沙門天王(Vaiśravaṇa-rāja)。佛法の護持並びに施福の神。四天王の一として北方を守る多聞天は之と同神なり。

【二二】毘首羯摩天(Viśvakarman)。帝釋の臣、種々の工巧物を司る神。

【二三】摩耶(Māyā)。此の梵語、幻の意なり、衆人の賞歎せる語より此の名を選べりと。

【二四】摩賀摩耶(Mahāmāyā)。

孫相繼ぎて、五萬五千の王あり、迦毘羅大城に都す。後ちに於て、復た一王あり、十車王と名け、十車王の後に九十車王あり。九十車王の後に、百車王あり。百車王の後に、畫車王あり。畫車王の後に最勝車王あり。最勝車王の後に、牢車王あり。牢車王の後に十弓王あり。十弓王の後に九十弓王あり、九十弓王の後に、百弓王あり。百弓王の後に最勝弓王あり。最勝弓王の後に畫弓王あり。畫弓王の後に、牢弓王あり。此の王、南閻浮提に於て、弓射第一なり。時に[一七](イ)牢弓王に、其の二子あり。一は(ロ)星賀賀努王と名け、二は(ハ)師子吼王と名く。爾の時、星賀賀努王、其の四子を生む。一は(ニ)淨飯王と名け、二は(ホ)白飯王と名け、三は(ヘ)斛飯王と名け、四は(ト)甘露飯王と名く。淨飯王に、二子あり、一は(チ)悉達多と名け、二は(リ)難陀と名く。白飯王に、二子あり、一は(ヌ)婆帝疎嚕と名け、二は(ル)婆捺哩賀と名く。斛飯王に、二子あり、一は(ヲ)摩賀曩摩と名け、二は(ワ)阿儞樓駄と名く。甘露飯王に、二子あり、一は(カ)阿難陀と名け、二は(ヨ)提婆達多と名く。淨飯王に、女あり蘇鉢囉と名け、白飯王に、女あり、鉢怛囉摩黎と名け、斛飯王に女あり、跋捺黎と名け、甘露飯王に女あり、細嚩囉と名く。悉達多に子あり、(タ)羅怙羅と名く。此の佛子は是れ、過去の衆許王の種族にして、今ま佛の世に値ひ、佛に隨つて出家し、生死を了悟して、善く輪迴を斷ち、眞空を契證して、聖位を成ぜり』。

爾の時、大目犍連、是の語を說き已りて、卽ち座より起ち、合掌して、佛に向ふ。佛言く『汝、本の座に復せよ。善き哉、善き哉。汝、能く諸の苾芻の爲に、釋種の過去に、生ぜる所の種姓の事を說き、諸の苾芻をして、快く善利を得、長夜に[一八]安隱ならしむ』と。時に諸の釋衆皆大いに歡喜し、信受して奉行せり。

五、託　胎

【一七】ロツタ、ヒルに依て牢弓王以下の系圖を左に表示せり。

- (イ) Dhanvadurga
  - (ロ) Simhahanu
    - (ニ) Śuddhodana
      - (チ) Siddhārtha — (タ) Rāhula
      - (リ) Nanda
    - (ホ) Śuklodana
      - (ヌ) Jina
      - (ル) Bhallika
    - (ヘ) Dronodana
      - (ヲ) Mahānāma
      - (ワ) Aniruddha
    - (ト) Amṛtodana
      - (カ) Ānanda
      - (ヨ) Devadatta
  - (ハ) Simhanada

(ヌ)のJinaは本經所出と合せず。

【一八】安隱は、安穩と同義。

王の勅を承け、卽ちに臣僚及び諸の親愛と、補多落迦大城を出で、城を去ること遙かならずして、自ら安止す。王復た遣はして遠處に居住せしむ。時に[一〇]雪山の側ら、[一一]婆儗囉河の岸邊に、一の仙人あり、[一二]迦毘羅と名け、淨く梵行を持し、菴居して道を修せり。太子復眷屬を將ゐて、仙人に依止し、禽獸を採獵して、以て其の命を活かす。後に於て、太子色慾を憶念して顏容、瘦悴せり。仙人疑ひて問へば、太子具さに言ふ。『我れ婬樂を思ひて、斯の苦を致す』と。仙人白して言く『親姉に於ては、欲事を行ふ勿れ。餘は意に隨ふ可し』と。太子、男女の衆多に耽著し、稚戲し喧鬧すること、日に月に滋甚し。仙人、心、虛靜ならず、根識、散亂し、卽ち太子に告ぐ。『我れ今別處に往いて、居を營まむ』と。太子之を聞き、深く自ら慚ぢるの感ひあり『大仙、此に於て、修行すること、歲久し。道果已に就り、遷移すべからず。我れ今辰に於て、將に眷屬を領ゐて、別に住止を求めむとす』と。仙人聞き已りて、甚だ本心に適ひ、卽ち菴居の側近の處に、殊勝の地を揀び、金瓶の水を以て、地を澆りて界と爲し、太子をして住せしむ。其の後人民、熾盛にして、眷屬繁多なり。界に依て城を修め、國土を建つるに因て、[一三]迦毘羅國と名け、復後時に於て、賢人の指引あり、別に一城を造りて、名けて[一四]指城と曰ふ。王、此の城に於て、亦た都邑と號く。

爾の時、[一五]尾嚕茶迦王、大臣に問うて曰く『我れの太子、今何處にか在る』と。大臣白して言く『今、雪山の南、婆儗羅河の側ら、迦毘羅城に在し、二大城を建てゝ、以て都邑となし、臣僚士庶、骨肉眷屬、富盛にして、繁多なること、大國の如きものあり』と。時に尾嚕茶迦甘蔗王、躬を曲げ、首を俛れ、大臣に問うて言く『我の童子に能く此の事ありや』と。大臣白して言く『太子の仁德、玆の雄盛を致す』因つて[一六]姓氏を立つ。尾嚕茶迦甘蔗王命終の後、能仁、位を嗣ぎ、能仁、子あり、烏囉迦目佉王と名く。烏囉迦目佉王、子あり、若迦捉王と名く。若迦捉王、子あり、賀悉帝王と名く。賀悉帝王、子あり、努布囉迦王と名く。努布囉迦王、子あり、烏布囉迦王と名く。是の如く子

[一〇]　雪山（Himalaya or Himavat）。

[一一]　婆儗囉（Bhagirathi）本經中、後には婆儗囉の次に底或ひは體の字を加へたり。加ふるを可とす。

[一二]　迦毘羅（Kapila）。

[一三]　迦毘羅國（Kapilavastu）。

[一四]　指城（Devadaha）。後に天指城と出づ、天の一字脫せしなるべし。又天臂城とす。

[一五]　尾嚕茶迦王（Virudhaka）。前出せしも、此の經は此れを以て初出となすは、恐らく前に脫せるものならむ。尙ほ原語よりするに茶は荼の誤りなるべし。

[一六]　姓氏。釋迦（Śākya）の姓を立てたるを言ふ。梵語 Śak は可能の意味を有せば、王「能くも此の事を爲し得たる哉」と嘆賞せるに依て釋迦の姓が附せられたりといふなり。

八夫人に命じて、乳母となし、太子を養育せしむ。爾の時、大王、長子をして、王位を紹嗣がしめむと欲す。其の小國王、是の事を知り已りて、心に忿怒を生じ、即ち使臣を遣はして、具さに前の事を論ぜしむ。『先に、我が女の生子を王と爲すを許せり。何故に、今に於て、自ら言約に違ふや。脫し或は是の如くば、我れ即ち廣く兵衆を將ゐて汝の國を討滅せむ』と。時に大國王、此の語を聞き已りて、即ち愁惱を生じ、大臣に告げて言く『長を棄てゝ、幼を立つるは、理に於て、宜しきに非ず』と。群臣奏して言く『彼の小國王、心力、豪强にして、兵戰に善なり。戈を擧げて、境を犯さば、必ず敗衂を貽さむ。若し長子を遣りて、速疾に外に出さば、即ち我が家國、當に兵禍を免るべし』と。王是の語を聞くも、默然として、未だ允さず。爾の時、太臣、共に權謀を設け、即ち近郊に於て、一の御園を造る。亭池・花果・林欝・池沼・流泉・飛閣、處々に遍滿し、復た、沈檀・香木・雜寶・纓絡を以て、種々に殿宇樓觀を嚴飾せり。爾の時、大王の長子、諸の臣僚と、城を出でゝ、遊賞し、此の園林を見て、左右に訪ね問ふ。『是れ誰の所有なりや』と。從臣對へて曰く『此は是れ御園なり』と。太子聞き已りて、即時に馬を迴す。左右、暫く入りて觀覽せむことを勸請す。太子告げて曰く『皇王の御苑、我れ何ぞ敢へて往かむ』と。從臣復曰く『若し是れ、臣下及び諸の庶民ならば、即ち入るを得ざらむ。國王の長子、遊翫するに、妨げ無けむ』と。是の時、太子即便ち、園に入り、樂を作し嬉戲しぬ。一大臣あり、王に上請すらく。『先に造れる御園、今已に成就せり。請ふらくは、王、觀看せられよ』と。王、奏する所を聞き、即時に、俯近の苑囿に臨幸し、[九]忽ち樂を作せるを聞き、王、心に疑慮す。大臣白して言く『太子先に是れ、此に在りて樂を作す』と。王遂に赫怒し『我れ此の園を造り、未だ曾て遊觀せず。云何が、太子先に入りて樂を作せるや。其の罪、捨て難し、即ちに國を出でしめよ』と。大臣諫爭すれども、王の怒り已まず、尋いで詔命を下し『僕從及び其の眷屬を將ゐて、與に七日を限り、國城を出離することを許す』と。太子、父

【九】忽聞作樂王心疑慮。忽聞の次に恐らくは脫文あらむ。

四、釋迦族因緣

其の七最後の甘蔗王、其の四子を生む。一は烏羅迦目佉と名げ、二は迦羅尼と名け、三は賀悉帝曩野と名け、四は蘇曇布囉迦と名く。四王子を生み已りて、其の後時に於て、妃后、命終せり。王、卽ち愁惱し、手を以て頤を搘へ、情に悲痛を懷く。時に大臣あり、王の樂まざるを見て、共に奏して言く『大王、云何がして愁惱を懷き、神情、悅ばれざる』と。王、卽ち答へて言く『我れ、妃后、今、忽ちに無常せるが爲に、斯の痛苦あり』と。大臣、聞き已りて、王に白して言く『我れ聞く。*隣國の小王あり。王に、一女あり。大福德を具し、端正殊妙なり、國后と爲すに堪へたり』と。王、群臣に語るらく『彼の小國王、我が境を侵さむと欲す。云何が、親しみを成さむ』と。大臣、白して言く『別に小國あり、亦た端正殊勝の女を生めり。若し納れて妃と爲さば、王の情に適はむ』と。王、旣に聞き已りて、卽ち使臣を遣はし、彼の小國に往いて、具さに、王の意を述ぶ、『其の女を娉り、立てゝ妃后と爲さむと欲す』と、小王、聞き已りて、歡喜し、慶慰し、乃ち使臣に告ぐ『若し大國王、我が女を娉り、立てゝ妃后と爲さむと欲せば、如し男子を生まば、灌頂王位を紹がしめば、我れ卽ち之を許さむ』と。使臣、國に廻りて、具さに上の事を奏す。王、奏する所を聞き、深く情に悅ばず、『我れに長子あり、合に王位を紹ぐべし。云何が、幼小なるを、而も立つるを得んや』と。大臣白して言く『但だ且く娉り納れたまへ。後時に子あるも、男女未だ定まらず』。王、是の語を聞き、卽ち金・銀・珍寶・羅紈・疋帛・嚴身の具を以て、迎へ娶りて、國に歸る。後に於て、懷妊、凡そ九月の載を經て、一子の身相端嚴なるを生む。乃ち生辰に於て、群臣慶賀す。王曰く『今我が是の子、當に何なる名をか立つべき』と。大臣奏して言く『彼の小國王、女を納れて妃となし、太子を生じて、王の寶位を繼がしめむと貴ふ。今請ふらくは、名を立て、名けて八樂王と爲したまへ』と。

【七】
1 烏羅加目佉。(Ulkāmukha)
2 加羅尼(Karakarna)。
3 賀悉帝曩野(Hastināijaka)。
4 蘇曩布囉迦(Nūpura)。茲に所謂最後の甘蔗王の名は下に尾嚕荼迦王として出づるもの(Virudhaka)之れなり。
※隣國小王王有一女。

【八】 樂王。(Rājyananda)。

思惟す。是の如く、思ひ已りて、其の二滴の精、結びて二卵を成す。日の出づる毎に、日の所照を被り、久しからざるの間に其の卵、自ら破れ、二童子の色相端正なるを生む。瞿曇仙人、此の二童子を將ゐて、甘蔗園に入り、棲泊、居止す。瞿曇、日の炙く所に因て、尋いで即ち命終す。爾の時、金色仙人、來りて園中に入り、問うて言く『童子、汝、誰人ぞや』と。童子答へて言く『我れは即ち瞿曇の生む所の子なり』と。金仙聞き已りて、心に歡喜を生じ、因りて二童を挈へ、菴に歸りて養育す。初生の時、卵、日に因つて照さるゝを以て、乃ち名を立て、名けて[三]日族となし、第一姓となす。復是れ瞿曇生む所の子、因つて瞿曇を立てゝ、第二姓となす。又た是れ自身の生む所、因りて[四]阿儗囉娑を立てゝ、第三姓となす。甘蔗園中に於て、收得し養育するに因つて、因りて[五]甘蔗を立てゝ第四姓となす。

爾の時、大國王あり、婆囉捺嚩惹と名く。其の王、命終して、子の、位を嗣ぐものなし。輔相大臣、共に斯の事を議し、未だ何人が、灌頂王位に當るべきかを委かにせず。一の大臣あり、群臣に白して言く『先に迦囉拏王に一の太子あり、名けて瞿曇と曰ひ、父の王位を捨て、山林の間に於て、訖里瑟拏吠波野曩仙人に事ふ。彼れは是れ釋種なり、灌頂王位を[六]詔嗣するを得べし』と。群臣、聞き已りて、即ち山中に往き、仙人の所に詣り、頭面に足を禮し、白して言く『大仙、過去、迦囉拏王に一の太子あり、名けて、瞿曇と曰へり。今、何處にか在します』と。大仙白して言く『久しく、已に命終せり』と。復た群臣の爲に、具さに上の事を說く。大臣聞き已りて、心に懊惱を生じ『我等、今は甚だ、大罪を得たり』と。是の語を作し已りて、二童子の身相端嚴なるを見、問ふ。『是れ誰ぞや』と。金仙答へて言く『此れは即ち瞿曇の生む所の子なり』と。群臣聞き已りて、倶に踊躍を懷き『今ま、此の童子は是れ王の種族』と、即ち灌頂王位を繼紹せしむ。是の故に姓を立てゝ、甘蔗王と名く。此の王の後、子孫、相繼ぎ、一百の甘蔗王あり、補多落迦城に都す。

【三】日族(Sūryavansa)。
【四】阿儗囉娑(Aṅgirasa)。
【五】甘蔗(Ikṣvāku)。
【六】詔は紹の誤りなるべし。

を出でしめ、『木籤を以て、其の肢體を貫かしめよ』と、王、令を宣べ已る。是の時、仙人、頂きに花鬘を戴せ、身に青衣を著く。從者、周迴し、手に器仗を執りて、高聲に唱ひて言く『此は是れ犯戒、殺人の賊なり』と。爾の時、仙人都て、怯怖なし。城門の外に至り、即ち、王の法に依りぬ。

爾の時、本師、訖里瑟拏吠波野養仙人、菴中に來至して、弟子を見ず、即ち隣近に往いて、漸次に尋ね訪ひ、忽ち弟子の、其の手足を縛られ、木籤上に在りて、是の如き苦を受くるを見る。師、既に見已りて、身毛驚き竪ち、悲涙涕泣して、其の弟子に問ふ『汝、何故が、是れ、斯の過罪あるや。又、汝、此の身に諸の苦惱を受け、晝夜に疼痛す。云何か、當に忍ぶべき』と。弟子白して言く『大仙、我れ此の身に於て、諸の疼痛を求むるも、都て得べからず』と。師曰く『汝何如が是れ、其の苦惱を離るや』弟子白して言く『我れ、師の前に對して、誠實の願を發さむ。若し吾が此の身、實に、疼痛なくんば、即ち我が師の身をして、金色ならしめよ』是の願を作し已りて、刹那の頃を經るや、師自ら身を變じて、眞金色と作る。一切の人衆、皆な悉く之を見、是の故に立てゝ、【二】金色仙人と名く。爾の時、弟子復師に問うて曰く『我れ此に命終して、當に何處にか生ずべき』と。師曰く『婆羅門の法に准ずるに、若し嗣子を絕てば、即ち生ずる處なし。弟子白して言く『我れ、童子となり、王宮を樂はず、位を捨てゝ出家せり。豈に子あらむや』と。師即ち告げて曰く『汝、今に於て、何ぞ王宮に在る時の娛樂の事を思惟せざるや』と。弟子白して言く『我れ今、此の身に、王法の苦相を受くること是の如きを見る。云何がして、能く前の娛樂を思はんや』と。

爾の時、金色仙人、大神通を具し、刹那を經る間に、虛空中に於て、大風雨を降らし、弟子の身に淋ぎて、即ち清涼を得しめ、諸の苦惱を離れて、平復故の如からしむ。是に由て、弟子、前の快樂を思ひて、欲心を生じ、二滴の精を滴らして、地面上に墮つ。爾の時、瞿曇仙人に、四の思惟あり。一には自身を思惟し、二には衆生を思惟し、三には衆生の成佛を思惟し、四には一切の佛刹を

【二】金色(Kanakavarṇa)。

三、甘蔗王因緣(下)

爾の時、補多落迦大城に、一の婬女あり。色相端嚴にして、形體殊妙なり。時に一人あり、彌里拏羅[一]と名け、此の女人に於て、耽染を生じ、即ち金銀・珠寶、上妙の衣服を以て、之に給與す。忽ち、後時に於て、復一人あり、此の婬女に於て、亦た愛著を生じ、婬女に告げて言く『我れ、金錢五百を以て、汝に與へ受用せしめん。汝、吾れに隨つて、同に、娛樂を爲す可し』と。婬女聞き已りて、即ち與に同行し、乃ち侍婢をして、往いて、彌里拏羅に白さしむ『今ま、他に適あり、未だ相ひ就くに遑あらず』と。拏羅、言を聞き、即ち婢に告げて曰く『彼れ、若し家に歸らば、速かに我が住する園林の中に來至せしめよ』と。婢、本舍に迴り、具さに其の事を以て、婬女に白す。婬女、聞き已りて、略、行くの意なし。婢、允さゞるを知り、復彌里拏羅の處に往いて、具さに、婬女、違背の事を說く。彼の人、聞き已りて、心に忿怒を生じ、婢を遣はして、速かに、我が園林の中に至らしめんことを勸說せしむ。婢、既に教を受け、種々の方便を以て、婬女を誘引したれば、婬女、遂に行く。彼の人、見已りて、之を訶責して曰く『我れ、昔より來、恒に衣服・寶貨・財物を以て、常に給濟せり、何が故ぞ、今棄てゝ、我に背くや』と。即ち利劍を持ちて、彼の婬女を殺す。爾の時、瞿曇の菴舍、彼の園林に近し、彌里拏羅、潜かに執る所の利劍を將ち、菴內に送置して、遂に遁れ去る。時に婬女の婢、高聲に唱びて言く『此處に殺人あり』と。衆多、聞き已りて、倶に仙人居る所の菴舍に詣り、彼の利刃の鮮血、尙ほ存するを獲、衆人責めて言く『汝は是れ仙人。何故に、今に於て、殺害を行ふや』と。是の語を作し已りて、即ち繩索を以て、仙人の手を縛り、送りて城中に往き、王殿の前に至るや、衆人告げて曰く『此は是れ出家の仙人、梵行に棄背し、不淨行を行ひ、復た利劍を以て、婬女の命を斷てり』と。王、是の事を聞き、心に忿怒を生じ、即ち城

【一】ロック・ヒル・女の名(Bhadrā)のみを出して男の名を出さず。

ふること能はず、城中に往いて、自ら住止せんと欲す』と。師、即ち告げて言く『瞿曇、汝、先に此れに來り、善く山野に住せり。何が故ぞ、今に於て、却りて城邑に往くや。汝、今去るの時、城內に往く勿れ。只だ補多落迦城の側近き寂靜の處に於て、菴を卓てゝ居止し、諸根を守護し、梵行に精進せよ』と。瞿曇童子、是の語を聞き已りて、即ち補多落迦大城の外、寂靜の處に往き、菴を卓て、志を結びて、梵行を崇修しぬ。

衆許摩訶帝經卷第一

て、修行して、佛道を成じたり。

爾の時、訖哩吉王に、一の太子あり、[五三]善生と名く。此の善生王、復た王子を生じ、是の如く子孫相繼ぐこと、一百王あり。其の最後の王、復た一子を生じ、[五四]迦囉拏王と名く。其の後時に於て、二の王子を生じ、一は[五五]瞿曇と名け、二は[五六]婆囉捺嚩惹と名く。此の(第二の)王子、王宮を愛樂し、國位を貪り、恒に自ら思惟すらく『世間を安慰し、王事を行はむ』と。爾の時、瞿曇王子、恒に復思惟すらく『衆生、生死して[五七]三塗に沈沒し、苦惱、輪迴して、出離し難し』と。是の念を作し已り、卽ち父王に詣り稽首し、拜跪して、王に白して曰く『我れ、今、王宮を樂はず、山野に於て、梵行を修習せんと欲して、出家を求む』と。王卽ち告げて言く『汝、我が子たり、所有る國土、及び、王位、宰輔大臣、指掌に在るが如し。何が故ぞ、輕棄して出家を求むる』と。瞿曇白して言く、『大王、我れ三界を觀ずるに、幻の如く、化の如し。其の堅實なるなく、念々、無常なり。何ぞ愛樂に堪へむ。我れ今日に於て、王を辭し、出家せむ』と。王既に聞き已り、子の志意を知りて卽便ち聽許せり。

爾の時、山中に、一の仙人あり、[五八]訖哩瑟拏吠波野努と名け、其の山間に於て、草を以て、菴を爲り、居止して、修行せり。時に瞿曇童子、卽ち彼處に往いて、踊躍し、歡喜し五體を地に投じ、仙の足を頂禮して、仙に白して曰く『我れ、王宮に別れて、此の處に來り、仙人に奉事せむとす。願くは攝受を賜へ』と。是の如くして、仙人、太子の志意の堅固なるを觀じ、卽便ち攝受せり。爾の時、童子卽ち山間に於て、果を採り、水を給へ、仙人に奉事し、是の如く辛勤して、歲月を累經たれば、師、彼の童の精勤にして、退かざるを以て、卽ち爲めに、號を立てゝ、亦仙人と名く。後に於て、父王迦囉拏、乃ち命終せるの時、弟、[五九]婆囉捺嚩惹、卽ち王位を紹ぎて、其の國事を行ふ。時に瞿曇仙人、王の命終を知り、本師に告げて曰く『我れ今、其の山中に於て、果を採り、水を給

【五三】善生(Sujāta)。

【五四】迦羅拏王(Karṇika)。(以下甘蔗王冊立までの梵語はロック・ヒルに依れり)。

【五五】瞿曇(Gautama)。

【五六】婆囉捺嚩惹(Bharadvāja)。

【五七】三惡道と言ふに同じ。卽ち塗は途にして、火途、血途、刀途の三は各〻地獄の猛火、畜生相食むの血、及び餓鬼の迫らるゝ刀劍の充滿するを示せば、三途とは地獄、畜生、餓鬼の三惡道なり。

【五八】訖哩瑟拏吠波野努(Kṛṣṇavarṇa)。

【五九】嚩字なけれども之を補へり。

復た、里娛王を生じ、里娛王、復た、商迦囉迦王を生じ、商迦囉迦王、復た、阿難那王を生じ、阿難那王、復た、阿那里舍目佉王を生じ、阿那里舍目佉王、復た、惹那迦王を生じ、惹那迦王、復た散惹曩佉王を生じ、散惹曩佉王、復た、惹曩沙婆王を生じ、惹曩沙婆王、復た、案曩播曩王を生じ案曩播曩王、復た、鉢囉祖囉曩播曩王を生じ、鉢囉祖囉曩播曩王、復た、阿喇多王を生じ、阿喇多王、復た、波羅喇多王を生じ、波羅喇多王、復た、鉢囉底瑟恥多王を生じ、鉢囉底瑟恥多王、復た、酥鉢囉底瑟恥多王を生じ、酥鉢囉底瑟恥多王、復た、摩賀摩羅王を生じ、摩賀摩羅王、復た、嚩賀曩王を生じ、嚩賀曩王、復た、酥摩帝王を生じ、酥摩帝王、復た、涅里姹嚩賀王を生じ、涅里姹嚩賀王、復た、捺捨駄努王を生じ、捺捨駄努王、復た、設多駄努王を生じ、設多駄努王、復た、曩嚩帝駄努王を生じ、曩嚩帝駄努王、復た、室左怛囉駄努王を生じ、室左怛囉駄努王、復た、尾喇多駄努王を生じ、尾喇多羅努王、復た、涅里姹駄努王を生じ、涅里姹駄努王、復た、捺捨囉他王を生じ、捺捨囉他王、復た、設多囉他王を生じ、設多囉他王、復た、曩嚩帝囉他王を生じ、曩嚩帝囉他王、復た、唧怛囉囉他王を生じ、唧怛囉囉他王、復た、涅里姹囉他王を生じぬ。是の如き等の子孫相繼ぐこと、七萬七千王、[四七]僧迦大城に都す。又最後の王、復た一王を生じ、阿末麗沙王と名く。彼の王、子あり、龍護王と名く、子孫相繼ぐこと、一百王、波羅奈國に都す。又最後の王に於て、其の一子を生じ、[四八]訖哩吉王と名く。

二、甘蔗王因緣・(上)

爾の時、[四九]迦葉[五〇]1如來、2應供、3正遍知、4明行足、5善逝、6世間解、7無上士、8調御丈夫、9天人師、10佛・世尊、世間に出現せり。彼の佛世尊、[五一]菩薩たりし時、持戒梵行し、大誓願を發して、無上覺を求め、[五二]兜率天に於て、※補處となり、機緣、成熟して、訖哩吉王の宮に下生し、位を捨

【四七】僧迦大城(Sankha)。
【四八】訖哩吉王(Krkin)。
【四九】迦葉(Kāśyapa)。過去七佛の一、委しくは迦葉波とす。
【五〇】如來以下は佛の十號にして一切の佛に通ず。
(1)Tathāgata
(2)Arhat
(3)Samyaksambuddha
(4)Vidyācaraṇasampanna
(5)Sugata
(6)Lokavid
(7)Anuttara
(8)Puruṣadamyasārathi
(9)Śāstā(devamanuṣyāṇām
(10)Buddha-lokajyeṣṭha
【五一】菩薩(Bodhisattva)悉しくは菩提薩埵といひ、又た意譯して覺有情といふ將來、佛となるべき者なり。
【五二】兜率(Tuṣita)。都史多とも音譯し彌勒(Maitreya)の淨土にして、欲界諸天中、上より第三位にあり。
※補處(の菩薩)とは現在の佛に次ぎ成道して佛となるべき菩薩を言ふ。

亦た怛摩黎多城に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、名けて海王と爲す。子孫相繼ぎて、一萬八千の王あり。[四三]難多布里也城に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、妙意王と名く。子孫相繼ぎて二萬五千の王あり、[四四]王舍城に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、娑多謨努那王と名く。子孫相繼ぎて、一百の王あり、亦た波羅奈國に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、大軍王と名く、子孫相繼ぎて、一千の王あり、[四五]矩舍嚩帝大城に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、海軍王と名く。子孫相繼ぎて、一千の王あり、補多羅迦城に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、娑多半尼囉王と名く。子孫相繼ぎて、八萬四千の王あり、矩舍嚩帝城に都す。最後の王に於て、復た一王を生じ、摩呬目佉王と名く。子孫相繼ぎて、十萬の王あり、亦た波羅奈國に都す。最後王に於て、復た一王を生じ、摩呬鉢帝王と名け、亦た地主王と名く。子孫相繼ぎて、一百の王あり、阿喩駄大城中に都す。最後の王に於て、復た一王を生じ、持世王と名く。子孫相繼ぎて、八萬四千の王あり、[四六]彌體羅城に都す。最後の王に於て、復た一王を生じ、大天王と名く、梵行、清淨にして、子孫相繼ぎて、八萬四千の王あり、亦た彌體羅城に都す。最後の王に於て、復た一王を生じ儞彌王と名く。彼の王、復た、摩娛努王を生じ、摩娛努王、復た、涅里姹儞彌佉努王を生じ、涅里姹儞彌佉努王、復た、嚕波佉努王を生じ、嚕波佉努王、復た、佉努摩曩王を生じ、佉努摩曩王、復た、佉努滿多王を生じ、佉努滿多王、復た、酥涅里舍王を生じ、酥涅里舍王、復た、娑涅里舍王、復た、酥嚕多細曩王を生じ、酥嚕多細曩王、復た、達魔細曩王を生じ、達魔細曩王、復た、尾儞多王を生じ、尾儞多王、復た、摩賀尾儞多王を生じ、摩賀尾儞多王、復た、尾儞多細曩王を生じ、尾儞多細曩王、復た阿輸迦王を生じ、阿輸迦王、復た、尾識多輸迦王を生じ、尾識多輸迦王、復た、頗羅娑埵王を生じ、頗羅娑埵王、復た、惹羅娑埵王を生じ、惹羅娑埵王、復た、浚度摩囉王を生じ、浚度摩囉王、復た、阿嚕拏王を生じ、阿嚕拏王、復た、儞扇波帝王を生じ、儞扇波帝王、

【四一】瞻波大城(Campā)。
【四二】怛摩黎多城(Tāmalitti)
【四三】難多布里也城(Nandivardhana ?)
【四四】王舍城(Rājagṛha)。
【四五】矩舍嚩帝(Kauśāmbī)。
【四六】彌體羅城(Mithilī)。

あり、烏波矩舍王と名く。烏波矩舍王、子あり、摩賀矩舍王と名く。摩賀矩舍王、子あり、酥捺哩舍曩王と名く。酥捺哩舍曩王、子あり、摩賀酥捺哩舍曩王と名く。摩賀酥捺哩舍曩王、子あり。鉢囉拏耶王と名く。鉢囉拏耶王、子あり摩賀鉢囉拏耶王と名く。摩賀鉢囉拏耶王、子あり、鉢囉拏那王と名く。鉢囉拏那王、子あり、摩賀鉢囉拏那王と名く。摩賀鉢囉拏那王、子あり、鉢囉半迦囉王と名く。鉢囉半迦囉王、子あり、鉢囉多波王と名く、鉢囉多波王、子あり、嚩彌嚕王と名く。嚩彌嚕王、子あり、彌嚕摩多王と名く。彌嚕摩多王、子あり、阿哩唧王と名く。阿哩唧王、子あり、囉哩唧瑟摩王と名く。囉哩唧瑟摩王、子あり、曩哩唧瑟摩多王と名く、曩哩唧瑟摩多王、子あり、阿哩止婆滿多王と名く。是の如き等の王、子孫、相繼ぎ、共に一百の大國王あり。皆な[三四]布多羅迦城に都す。最後の王に於て、其の一王を生じ、降怨王と名く。彼の王、大威德ありて、諸怨を降す。是の故に、降怨王と名く。是の如く、此の王の子孫、相繼ぎて、帝位、絕えず。五萬四千の王あり、[三五]阿喩駄也城に都す。又此の最後の王、復た一子を生じ、無能勝王と名く。彼の王の子孫相繼ぎ、帝位、相承けて、六萬の天子あり [三六]波羅奈國に都す。最後の王に於て、又一子を生じ、耨鉢囉娑訶王と名く。子孫相繼ぎて、八萬四千の王あり。[三七]緊閉羅城に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、梵授王と名く。子孫相繼ぎて、三萬二千の王あり、[三八]賀悉帝曩布里城に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、賀悉帝捺多王と名く。子孫相繼ぎて、五千の王あり、[三九]怛叉尸羅城に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、娑多黎薩王と名く。子孫相繼ぎて、三萬二千の王あり、[四〇]烏囉娑大城に都す。最後王に於て、復た一王を生じ、曩誐曩嚩曩王と名く。子孫相繼ぎて、三萬二千の王あり、無能大城に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、勝軍王と名く。子孫相繼ぎて、一萬八千の王あり、[四一]瞻波大城に都す。最後王に於て、復た一子を生じ、龍天王と名く。子孫相繼ぎて、二萬五千の王あり、[四二]怛摩黎多城に都す、最後王に於て、復た一子を生じ、名けて仁王となす。子孫相繼ぎて、一萬二千の王あり、

寶等は後に註す)。

【三〇】 烏波尼嚕(Upacāru)。

【三一】 室尼嚕(Cārumant)。

【三二】 摩尼嚕 (Upacārumant)。

【三三】 以下諸王の名、西藏佛傳にあるべしと思考すれども、ロック・ヒルも之を略したれば、今ま之を擧ぐることを得ず。「佛教大年表」には漢譯諸典の外梵本の島史(Dīpavaṃsa)及び大統史(Mahāvaṃsa)の所載を表示したれども、一致せざるもの多ければ、之に依つて推定することも斷念したり。尙ほ都城の名は之を註し置けるも、譯者の推定なれば、或は當らざるものもあらむ。但しロック・ヒルと註せるは、彼をそのまゝ採用せるものなり。

【三四】 布多羅迦城(Potala(ka))(ロック・ヒル) 下に補多羅或は補多落城とあるも皆な同じ。

【三五】 阿喩駄也城(Ayodhya)。

【三六】 波羅奈國(Vārāṇasī)。

【三七】 緊閉羅城 (Kapilavastu)。(重出)

【三八】 賀悉帝曩布里城 (Hastināpura)。

【三九】 怛叉尸羅城 (Takṣaśilā)。

【四〇】 烏囉娑大城 (Ujjaini (Uraśā)。

自然に開裂し、一の童子を生ず。身相、端嚴にして、[二七]三十二相を具す。名けて[二八]尼嚕と爲す。大智慧あり、福德、無量なり。[二九]金輪王と爲り、四天下を統ぶ。尼嚕輪王、其の後時に於て、左股上に在りて、亦た一皰を生じ、其の皰、柔軟にして、常に兜羅綿を以て拂ふ。肉皰を拂ふに、諸の疼痛なし。後ちに於て、還た熟して、自然に開裂し、一の童子を生ず。端正殊妙にして、三十二相を具す。[三〇]烏波尼嚕と名け、智慧、深遠にして、福德無量なり。銀輪王と爲り、三天下を統ぶ。烏波尼嚕王、還た、後時に於て、右足上に向きて、一肉皰を生じ、其皰、柔軟にして、亦た兜羅綿を以て拂ふ。肉皰を拂ふに、諸の疼痛なし。後ちに於て、皰、熟して、自然に開裂し、一の童子を生ず。身相、端嚴にして、三十二相を具す。[三一]室尼嚕と名け、福慧、深厚なり、銅輪王と爲り、二天下を統ぶ。室尼嚕王、左足上に於て、一肉皰あり。其の皰、柔軟にして、兜羅綿を以て、拂ふ。肉皰を拂ふに、諸の疼痛なし。後ちに於て、皰、熟して、自然に開裂し、一の童子を生ず。色相、端正にして、三十二相を具す。[三二]摩尼嚕と名け、福慧、深厚なり、鐵輪王と爲り、一天下を統ぶ』。爾の時、大目犍連、釋衆に告げて言く『是の如く、王位相繼いで、今に至るまで、其の數、極めて多し。是の如く衆許王に子あり、名けて愛王と爲す。愛王、子あり、善友王と名く。善友王、子あり、最上王と名く。最上王、子あり、戒行王と名く。戒行王、子あり、頂生王と名く。頂生王、子あり、尼嚕王と名く。尼嚕王、子あり、烏波尼嚕王と名く。烏波尼嚕王、子あり、室尼嚕王と名く。室尼嚕王、子あり、摩尼嚕王と名く。摩尼嚕王、子あり、[三三]嚕卿王と名く。嚕卿王、子あり、酥嚕卿王と名く。酥嚕卿王、子あり、母卿王と名く。母卿王、子あり、母卿鱗捺王と名く。母卿鱗捺王、子あり、阿誐王と名く。阿誐王、子あり、阿儗囉他王と名く。阿儗囉他王、子あり、婆儗囉他王と名く。婆儗囉他王、子あり、娑誐囉王と名く。娑誐囉王、子あり、摩賀娑誐囉王と名く。摩賀娑誐囉王、子あり、舍矩爾王と名く。舍矩爾王、子あり、摩賀舍矩爾王と名く。摩賀舍矩爾王、子あり、矩舍王と名く。矩舍王、子

【二六】 摩努沙(Manuja ?) 茲に摩努沙というて、頂生王の一名の如く說けども、前五王の例に見るに、頂生王の大臣の名なるが如し。かくて次の大臣列名の第六摩努惹との同異が問題となるが、恐らく同人にして、次の列名は他の五例の如く、重出なるべしと思考す。Manuja とは人類の祖 Manu の所生の意味なれば、名宰相として、此の名ありといふにあらむ。

【二七】 三十二相の事は、本文後に名目を列記すれば之を看んことを要するも、こは轉輪王及び菩薩の生れながら有する特徵なり。

【二八】 尼嚕(Cāru)。以下四轉輪の梵語本文と合致せざるが如きも、暫くロツク・ヒルの出す王名を、そのまゝ出し置けり。

【二九】 印度にては法に依て國を治むる理想的王者を轉輪聖王(cakravartirāja)といひ、三十二相を具し、七寶を有し、千子に圍遶せらるとなす。茲に金輪王とは、その最も重大なる者にして、此の外に銀・銅・鐵の輪寶を有する三種の轉輪王あり。次下に出づるもの之なり。金輪王は印度の四洲を統御し以下三、二、一洲を統御すと言ふ(三十二相・七

作す』と、即ち多人を集め、共に以て、責斷す。復た彼の時に於て、衆人中に於て、一の福德を具する者を揀び、立てゝ田主となし、田土を均分して、各、平等ならしめ、法に依らざる者あれば、彼をして調伏せしむ。田種、若し熟すれば、其の[16]少分を輸りて、以て田主を賞す。是の如く、田主受けて戒行を行ひ、世間を安慰し、法に依て決斷し、調伏すべき者は、即便ち調伏す。此に由つて、世間に[17]刹帝利の姓を立て、[18]三摩達多王と名く。王に大臣あり、名けて有情となす。其の王後時に一太子を生み、名けて[19]愛子となす。王に大臣あり、伊賀迦と名く。時に愛子王、一太子を生み、名けて[20]善友と曰ふ。彼に大臣あり、帝羅迦と名く。時に善友王、復一子を生み、名けて、[21]最上と曰ふ。彼に大臣あり、阿跋羅建陀と名く。最上王に子あり、名けて[22]戒行と曰ふ。彼に大臣あり、哆羅惹迦と名く。其の王、頂上に一肉皰を生じ、其の皰、柔軟にして、常に、[23]兜羅綿を以て拂ふ。肉皰を拂ふに諸の疼痛なし。其の皰、後ちに熟し、自然に破裂して、一の童子を生ず。福德、端嚴にして、三十二相を具し、衆の愛重する所たり。因て以て、名を立て、[24]頂生王と名く。纔かに王頂を下るや、即ちに內宮に入る。

爾の時、戒行王の內宮の中、六萬の宮人あり。各嬭乳あり、倶に王に白して言く『我れに嬭乳あり、願くは、太子に嬭せむ』と。此の因緣に由り、亦た[25]我嬭王と名く。

爾の時、世間の所有る衆生は、智慧漸く增し、能く細かに思惟し、微細の事の、或は是、或は非、及工巧等を稱量分別す。是の故に、名を立て、[26]摩努沙と號く。

爾の時、六大天子の壽命、無量にして、六大臣あり、一は有情と名け、二は伊賀羅と名け、三は帝羅迦と名け、四は阿跋羅建陀と名け、五は哆羅惹迦と名け、六は摩努惹と名く。是の如き六大臣、聰明にして多智、能く世間を治め、大威德あり。時に頂生王、其の右股に於て、一肉皰を生じ、其の皰柔軟にして、常に兜羅綿を以て拂ふ。肉皰を拂ふに、諸の疼痛なし。後ちに於て、皰、熟して、

【一六】茲には少分とあれども、大事(Mahāvastu)六分の一と明記せり。蓋し印度の租稅は、收益の六分の一の定めなれば、之を採りしものなるべし。

【一七】刹帝利(Kṣatriya)。印度に於ける四姓の一、古は婆羅門姓に次ぎ、四姓中第二位とされしが、佛、出世時代には、既に婆羅門を凌ぎて第一位とせらるゝに至れり。茲には、Kṣatriya の姓を立つるに至りし理由を擧げ、彼の王が稻田(Śālikṣetra)の主なりしが爲なりと言へるなり。

【一八】三摩達多王(Mahāsammata)、此の王に就きては、解題を參看すべし。

【一九】愛子(Roca)。

【二〇】善友(Kalyāṇa)。

【二一】最上(Varakalyāṇa)。

【二二】戒行(Upoṣadha)。

【二三】兜羅(Tūla)。綿の一種にして、この譬は柔軟なるものにつき、常に用ゐらる。

【二四】頂生(Mūrdhagata)。

【二五】我嬭王(Māndhātṛ)。dhātṛ は乳母の意あり、dhe は乳を飲ますことにして、Mām は我れ(aham)の一變化なれば、此の梵語に我嬭の意あり。

に、壽命、長遠にして、所有る地味、猶ほ天饌の如かりき。而るに、後時に於て、此、美食に於て、貪著を生ぜるが故に、身、卽ち沈重となり、光明、卽ち滅せり。是に於て、世間、普く皆、黑暗なり。又彼の有情、食を貪ること少き者は、身相、滅せず、食を貪ること、多き者は、身相、損滅しぬ。此れに由て、二相黑白を分別し、互相に、輕毀して、不善の行を行ふ。是に依て、爾の時、地味卽ち滅し、地餅、復た生ず。色相、殊妙に〔且つ〕甘美にして馨香はしく、諸根を增益し、身心適悅にして、壽量、長遠なり。食を貪ること、少き者は、身相減せず、食を貪ること多き者は、身相、損滅しぬ。此れに由つて、二相黑白を分別し、互相に輕毀して、不善の行を行ふ。爾の時、地餅亦復見えず。此れに由て、久しきに非ずして、復た林藤を生ず。色相殊妙にして、其の味、甘美なること、亦た天食の如く、肢體を充益し、壽命長遠なり。食を貪ること少き者は、身相、滅ぜず、食を貪ること多き者は身相、損滅しぬ。此れに由て、二相、黑白を分別し、互相に輕毀して、不善の行を行ふ。爾の時、林藤亦復た見えず。是に於て、世間に自然の香稻あり、地より出生す。其の*米、香り、美しく、長さ四指にして、時に依りて、成熟し、其の味ひ、甘美にして、肢體を充益し、壽量長遠なり。是に由つて、衆生の貪愛、增すが故に、所有る香稻、亦た沒して、見えず、是の故に、今者、此の稻種を求めて、田野に住し、廣く、勤力を施して方に成熟するを得たり。稻米を生ずと雖も、其の米、漸くに、小なり』と。是に於て、衆生、地の利に貪著し、廣く、田野を占めて、多く種植せんことを競ふ。而も非法を行ひ、賊盜の想ひを生じて、他の田種に於て、復た偸盜を行ふ。時に一人あり、是の米を偸むを見、是の如くする一遍、二遍乃至三遍にして、告げて言うて曰く『汝、自ら米あり、何ぞ自ら用ゐず、云何が、他に於て偸盜を行ふや。今より後、更に米を盜む勿れ』と。賊、是の言を聞き、猶ほ過ちを改めず、復、後時に於て、又偸盜を行ふ。前の人、復見て、之を責めて曰く『前に已に、汝を、「偸盜を行ふ勿れ」と誡めたり。何故に此の時、又亦賊を

＊米。宋・元・明の三本、味に作る。

亦、甚だ香美にして、肢體を充益し、壽量、長遠なり。是れに由りて、爾の時、香稻を食するに、漸く腹の内に、妨礙する所あるを覺えて、卽ち思惟すらく『云何が、除き去らむ』と。是の念を作し已りて、卽ち二根を生じ、男女の差別、行相、各、異る。爾の時、有情、色・香・味に於て、展轉、愛著し、自らの親愛《者》に於ては、香・花・衣服を以て、種々に供養し、復た、軟言を以て、慰喩、歡喜して、彼をして忻慶せしめ、若し衆生の、已れに於て、非愛なるあれば、卽便ち輕毀し、種々に訶責し、或は瓦石を以て、互相に鬪打し、不善の行を行ふ。又彼の衆生、所有る過去の正法を、今、非法となし、過去の律儀を、今、非律儀となし、乃至、晝夜の時分も亦、顚倒に分別し、譬へば人あり、斗を以て炭を量り、滿てるを平にする、不正の行を爲すが如く、亦復た是の如く、顚倒を以ての故に、正法を邪と爲す。是に依て、香稻、亦復た隱沒せり』。爾の時、大目犍連、釋衆に告げて言く『香稻、隱沒するに由つての故に、彼の衆生をして、遂日、諸處に、稻種を尋求して、之を種ゑむを欲せしむ。時に一人有り、其の性、慵懶にして、財利に貪著し、稻種ありと雖も、而も種うる能はず。此の人知り已りて、之に告げて言く『汝に稻種あらば、我に少分を與へよ。我、之を種ゑむを要す』と。彼の人、言うて曰く『我れ、香稻あれども、自ら受用せんを要す。汝、今若し、要せば、我卽ち汝に與へむ。後ち一日、二日乃至七日に於て、我が稻を却還せよ』と、此の人、言うて曰く『善き哉、善き哉、若し一日、二日乃至、七日にして或は未だ還すことを得ずば、如し半月、一月に至らば、卽ち、之を還すことを得む』と。是の言を作し已りて、卽ち自ら思惟すらく『自前の香稻は、種うるに非ずして、自ら生じ、勤力を假らずして、自在に受用せり、今ま稻種を得たり。須らく、田野に住して、廣く勤力を施し、晝夜に相續して、方に生長を得べし』と。是の如く、念じ已りて、心に苦惱を生じ、悌涙、悲泣す。又復、思惟すらく『過去の世、所有る衆生、色相、端正に、諸根、圓滿し、人相、具足し、身心、適悅にして、身に光明あり。空に騰ること自在

色相、恒に自ら端嚴なり。是の如く心に隨つて、二相[11]、黑白の果報を分別す。而も彼の衆生、互相に憎嫉して不善を成す。不善を以ての故に、此れに由て、地味卽便ち隱沒す。隱沒するを以ての故に、諸の衆生をして、心に熱惱を生じて、是の如きの言を作さしむ『今、食する所なし。深苦なり、深苦なり』と。又復た思惟すらく、『最上の地味、云何が隱沒せる。未來の衆生、云何が、食を得む。苦惱、疲乏の患ひを生ぜしめむこと、知るべからず、言說すべからず』と。

爾の時、大地の中、久しからざるの間に、卽ち地餠[12]を生ず。其の味、殊妙にして、馨香の甘美なる、迦梨尼迦囉花[13]の如し。而して諸の衆生、此の地餠を食し、身體を充益し、長壽安樂に、身相端嚴にして、氣力增盛す。若し諸の衆生、食を貪ること多き者は色相、損減し、食を貪ること少き者は、色相、故の如く、其の損減なし。此れに由て、二相黑白を分別す。而も、互相に非りて、不善の業を行じ、彼の地餠をして、隱沒、見えざらしむ。見えざるを以ての故に、諸の衆生、復た苦惱を生じ、是の如き言をなす。『深苦なり、深苦なり』と。又復た思惟すらく、『所生の地餠、云何が隱沒せる。其の義、知らず、而して諸の有情、卽ち飢困疲乏の苦みを得たり、未來の衆生、當に何に於てか、食すべき』と。是に由て、久しからずして、彼の衆生のために、復た林藤[14]を生ず。其の色、殊妙にして、香味甘美なれば、是の如きの有情、此の林藤を食して、氣力は增盛し、壽量は長遠に、形色、端嚴にして、人相具足す。又た彼の衆生、食を貪ること多き者は、色相損減し、食を貪ること少き者は、色相故の如し。是の如き有情、二相黑白と分別す。而も互相に、非りて、不善の業を行ふ。是に由て、林藤隱沒して見えず。既に見えずして、諸の衆生をして、心に熱惱を生じ、是の如き言を作さしむ。『苦なる哉、苦なる哉。是の如き美味、云何が隱沒せる。其の義、知らず。我等、云何がして、飲食を得む』と。是に由て、久しからずして、大地の中、自然の上味の香稻[15]を出生す。其の稻、時に依りて、自然に成熟す。爾の時、衆生卽ち、之を取りて食するに、

〔一一〕 二相は、好醜の二、黑白は、善惡の二業なり。

【一二】 地餠
1 Pṛthivīparvataka
2 Bhūmiparpaṭaka
(1)はロック・ヒルの所出。(2)は「大事」梵本の所出。共に地餠の意あれば玆に兩語を出し置けり。

【一三】 迦梨尼迦羅花(Karṇikāra(puṣpa))。牙色花と意譯す。枳橘易土集に慈恩傳第三を引き「羯尼迦樹、處處成レ林、發レ蕚開レ榮、四時無レ間、花如ニ金色一」といふ。

【一四】 林藤(Vanalatā)。

【一五】 香稻(Śāli)。此の語普通の稻或は米の意なれども「大事」の所出をそのまゝに出せり。然れども、此の稻、自然に生じ、朝に刈れば夕に實り、夕に刈れば朝に實り、長さ四指に達すといへば、次の耕作に依つて生ずる米とは異ることといふまでもなし。

緣有るやを聞かむことを樂ふ。汝、今志心して爲に宣說せよ』と。

爾の時、會中の大目犍連、默然として思惟し、須臾の頃を經て、僧伽梨衣[六]を收め、頭邊に安在し、右脇に枕臥し、足を累ね、不動にして三摩地[七]に入り、而して復た、世尊過去の世の、所生の處、若くは姓、若くは族、及び因緣の事を觀察し、實の如く其の錯謬なきことを了知し、卽便ち定を出で大衆の前に於て、復た本の座に坐し、尊者、大目犍連、釋衆に告げて曰く『我れ、三昧に於て、彼の憍荅摩の往昔の事を觀じたてまつるに、世界、壞する時、彼の諸の衆生、命終の後、遍靜天[八]中に往生することを得たり。彼の天に生れ已りて、諸根は圓滿し、身相は端嚴なり、衆くの苦、生ぜず、身心適悅なり。色相光明あり空に騰ること自在にして、天の甘味を以て飲食となし、壽量長時にして、中夭者なかりき。爾の時、大地、大水の所生は、虛空中に滿ち、猶ほ大海の風、波浪を吹くが如く、熟乳を煎ずるに、其の水清涼なるが如く、彼の後時の一切衆生が食する所の清淨にして最上なる地味[九]となる』と。爾の時、大目犍連、復た衆に告げて言く『爾の劫[一〇]、壞するに當りて、衆生の遍靜天に生ぜる者、彼の天中の福壽、倶に盡きたるを以て、遍靜天を捨てゝ、人間に生る。所生の身、亦天界の如く、身相端嚴にして、諸根缺くることなく、妙色廣大にして、自ら身光あり、恒常に照曜し、長壽喜樂にして、空に騰ること自在なり。其爾の時に於て、日・月・星・辰無く、歲數・月時等無く、亦男女衆生の相無し。出生の地味以て飲食と爲す。是の如きの地味は甘美・細妙なれば、衆生食し已りて、愛著を生じ、其の後時に於て、味を貪ること轉た盛なり。忽ち身體をして沈重を得しめ、所有る光、忽然として見えず、是に於て、世間普く皆な黑闇なり。爾の時、有情、是の世間の普く皆な黑暗なるを見、種々に驚惶し、心に憂惱を生ず。是れに由て、世間に日月及び星曜等、出現し、始めて晝夜及び其の時候を分つ。是の如き有情の壽命は、長遠にして、諸の病惱なし。其の地味に於て、貪著多き者は、色相損減して、醜惡を得、貪著少き者は、其の身の

【六】 僧伽梨衣(Saṅghāṭi)。比丘三衣の一、衆聚時衣と意譯し大衆の集會せる場合に着す。

【七】 三摩地(Samādhi)。次に定とあるは(Samādhi)の意譯なり、又三昧とあるは三摩地と共にその音譯なり。因に禪又は禪那の梵語は、Dhyāna にして、之と別語なり。但し意、相通ずれば、本經の如きも併用せり。

【八】 1 遍靜天(Śubhakṛtsnāḥ)。2光音天(Ābhāsvara)。遍靜天は普通遍淨天と譯き梵語は(1)であるが「大事」の梵本を見るも、ロック・ヒルに依る西藏傳も(2)を擧げたれば茲に二語を出せり。尙ほ普通の譯例に從へば、光音天と譯すべかりしものならん。

【九】 地味(Pṛthivīrasa)。

【一〇】 劫(Kalpa)。劫に關しては後に委しく註釋すべし。

衆許摩訶帝經

卷の第一

＊一、衆行王因緣

是の如く、我れ聞けり。一時、佛、[一]迦毘羅國[二]尼倶陀林中に在しぬ。爾の時、迦毘羅國に大釋衆有りて、自ら思惟す。『我が佛世尊、過去の世に於て何處か所生なる。何姓、何族なる。何の因緣か有る』と。而して思惟し已り、諸衆に告げて曰く、『釋迦世尊、過去の世に於て、何處か所生なる、何姓、何族なる。何の因緣か有る。我等今者、佛の所に往いて此の義を問ひ、佛の所說の如く、教の依に受持せんと欲す』と。是の如く言ひ已り、大釋衆と卽ち佛の所に往き、頭面に足を禮したてまつり、位に依りて坐しぬ。爾の時、迦毘羅國の大釋衆、佛に白して曰く、『世尊、我等大釋衆、迦毘羅國の精舍の中に住して、忽ちに思惟せり。我が佛世尊、過去の世に於て、何處か所生なる。何姓、何族なる。何の因緣かある』と。我等知らず。今釋衆と佛の所に來詣して、此の義を問ひたてまつる。唯願はくば世尊、我が爲に宣說したまへ、我等、聞くを得ば、教の依に受持せむ』と。

爾の時、世尊、衆の疑を斷ぜんが爲に、卽ち此の義を說き、釋衆に告げて曰く、『我れ、先には、此の義を宣說せんとは欲せざりき、何を以ての故に、所有る諸魔、外道、若し此の事を聞かば、復、謗りて言はむ、『[三]沙門、[四]憍答摩自ら其の美を說く、樂ふ所は卽ち說き、樂ふに非れば說かず、何の益する所か有らむ』と。

爾の時、[五]大目犍連、現に大衆中に在り、卽ち坐より起ち、尊顏を瞻仰して、目暫くも捨てず。世尊告げて曰く『目連、彼の諸の釋衆、我が過去に於ける事、所生の處、何姓、何族、何の因

＊此の見出しは全經を通じて譯者の挿入せるものにして原本にはなし。

【一】迦毘羅國（Kapilavastu）。

【二】尼倶陀林（Nyagrodha-ārāma）。第十二卷には之を彌也識嚕駄と音譯せり。此の樹は節なく、縱廣なりと言はれ、榕樹の一種なり。

【三】沙門（Sramana）。意譯して勤息等と言ひ、元は佛教外道に通じて用ゐられたり。

【四】憍答摩（Gautama）。瞿曇とも譯す。

【五】大目犍連（Mahāmaudgalyāyana）。略して目連ともいひ、又た大をも音譯して摩訶目犍連とも言ふ。本經には犍を虔とも書けり（第十三卷）。

最後に本國譯の註釋につき、一言したきは、本註釋は主として佛傳に特有なるものに力點を置いた自然の結果として、教理關係の語につきては簡略になつたが、此の缺點は他の教理關係の經典及びその註釋に依つて補つて貰ひたい。尙ほ地名人名等の原語は主として西藏傳を紹介せるロツク・ヒル (Rockhill, The Life of the Buddha) に依り、次いでは梵本「大事」(Mahāvastu) に依り、時にラリタ・ヴイスタラ (Lalitavistara) に依りて、之を出し、固有名詞以外の術語の原語も、先づ原則としてはこの次第に依り、尙ほ發見し得ざりし時に、飜譯名義集其他梵語關係の辭典に依りて之を註して置いた。然しながら其の梵語が果して本經の譯名に當るや否や、不明なる時は疑問符を附して置いた。尙ほ一般を通じて「ロツク・ヒル之を出さず」と註せるのみなるは、他に於ても發見し得なかつたものであることを承知して貰ひたい。最後に本經を譯し、解題を書き綴つて、自ら省みるに、骨を折つた割に成績を擧げ得なかつたことは慚愧の至りである。之れ偏に予の淺學未だ西藏語を解せず西藏傳を直接參照し得なかつたに依るものと信ずるが故に、吾人は三度讀者と共に、本經を直接西藏傳と對照して、學界の渴望を醫す識者の出現を熱望して、筆を擱かうと思ふ。

昭和四年六月十日

東京四谷の寓居にて

譯者　寺崎修一識

少卿の官位に補せられた年月が、わかれば、本經譯出の最上限を知り得るわけであるが、之については未だ明文を見ない。然し若し法天（天息災或は施護にても茲では差支ない）の改名せる者とすれば、彼が天息災、施護と共に之に補せられたるは宋史第五卷に依るに、雍熙二年（西紀九八五）十月の事であるから、之を以て本經譯出の最上限となし得る。例へ又此らの三人の何れとも、法賢が別人であるにしても、彼がこの官位に補せられたる年月は恐らく、此の年以前には出ないと思ふ。殊に出家を官位に補することは、極めて稀なる事であつて、此の三人に賜はれる官位の如きも、此年初めてゞあり、而も太宗皇帝が新譯の經を覽、之を嘉して三人に與へたるものなることを思ふ時、益々此の年月以前に彼の補位を進めることは不可能となる。かくて推定するに本經の譯出は宋の太宗の代にして、雍熙二年（九八五）十月より淳化五年（九九四）四月に至る十ケ年間のうちなることが知られるわけである。

五　內容の一般

本經の內容は、最初の概說中に言へるが如く、一言にして言へば、釋尊の傳記であつて、劫初の王、衆許摩訶帝より始まる王統より說き起し、釋尊の誕生・出家・成道・轉法輪・化度と次第して、迦毘羅國歸還後、諸々の釋迦族の爲に說法するを以て終る。而して佛の說法中隨處に空觀思想を說き、更に空にも住せざれと說くあたり、可なりに進める大乘思想を含むが故に、本經は明かに大乘に屬する佛傳經典なりと言はねばならぬ。

偖て、一般の經典は科段を分ちて、其の經の內容を表示するを常とすれども、本經には通例用ゐる序分、正宗分、流通分といふが如き三大段さへも具せざれば、

六

今ま、本經の內容を一目瞭然たらしめんが爲に、左に、吾人の假りに挿入せる本文中の見出しを拔き出し、兼ねて目次（本丁）の用に供するに止めやう。因みに本經には他經の如き品の名を附してゐない。

義の七十二部を合して、同一人の譯出としてゐる。然るに近頃、小野玄妙氏は南禪寺經藏一切經中の尊勝大明王經、佛說大乘戒經、護國尊者所問大乘經(三部共、法賢と同時代の三藏、施護の譯)の奧書に記されたる譯場列位には法天法賢の二名が併出されてるのを發見して、兩者別人說を主張してゐる(佛典研究第一卷第二號、法天三藏と法賢三藏)。吾人も兩者の大師號異なり、彼は傳教大師であり、此は明教大師である點より(兩者の譯出經に出づ)、此の同人說には聊か疑義を抱ける矢先に、小野氏の發表を得て、益々その疑義を深めた次第であるが、玆に不思議に思はれるのは、法賢の譯出經中に常に用ゐらるゝ大師號明教大師は、佛祖統記(同上 p. 398)に依れば、同時代の北印度の僧天息災に授けられたもので、彼の譯出經にも常に用ゐられてゐることである。尙ほ今一つは兩者の譯出經には共に朝散大夫試鴻臚少卿と朝散大夫試光祿卿との二官位のうち何れかゞ用ゐられてゐることである。是に依つて觀るに、佛祖統記が同人說を立てるならば、寧ろ天息災、法賢同人說を立てゝ、然るべきではなかつたらうか。因みに法賢が天息災、法天及び北印度の僧施護の三人のうち、何人かの改名後の名であるらしきことは、此の三人には只紫衣を賜れるのみにして、未だ官位に補せられぬ以前の譯出經ありて、各々已が印度に於ける所屬寺を出してゐるけれども、法賢には、之がない事に依つて有力に支持せられると思ふ。從つて佛祖統記の所說「法天改名法賢」の文中、法天の二字は生かし得ぬとしても、「改名法賢」の四字までも、それが爲に抹殺することは出來ぬと思ふ。此の後の四字に法天を冠するに依つて、困難が生ずるのである。宋史第五卷を按ずるに、淳化三年九月及び至道元年十二月の兩度に群臣が太宗皇帝に奉らんとせる尊號に法天の二字あれども、共に嘉納せられなかつた。眞宗の咸平四年(西紀一〇〇一)に法賢入滅してより、二百六十九年後(咸淳五年、一二六九)に志磐法師が佛祖統記を編める時、先に聞き傳へたる「改名法賢」の智識に斯くの如き事實を結び付けて(皇帝の名、尊號等は下臣之を用ゐぬを禮とす)、法天改名法賢の說を構成せるものであらう。

然しながら此等の事の決定は、將來に待つことゝして、次に本經譯出の年時につきて言はんに、その憭かなる年月は不明である。然れども、小野氏發表の南禪寺經藏一切經中、護國尊者所問大乘經の奧書に依れば、大宋の淳化五年(西紀九九四)四月には、法賢が既に試光祿(祿)卿の官位にあるのに、本經には試鴻臚少卿とあれば、本經の譯出は、その最下限が淳化五年四月となる。次に彼が試鴻臚

資料を以て比較せんとする識者の一日も早く出でんことを再び熱望して、之を省き、註釋中、時に、著しきものを、他傳と比較して之を示すに止めやうと思ふ。

斯く本經が漢譯中、唯一の西藏系佛傳たる一點は、既に言へるが如く、又同時に本經の特色をなすものであつて、之が爲に本經は、漢譯佛傳中に――一致すると否とに拘らず――一の新しき資料を提供し得る。この意味に於て、本經は充分存在の理由を有するものといはねばならぬ。然るに古來之を翫ぶもの極めて稀なりしのみならず、近來の佛傳研究者に依つても閑却されて、餘り省みられなかつたことは、甚だ遺憾である。然れども將來は、西藏佛典研究の盛大を馴致すると思はるゝ佛教學界の目下の趨勢に考へ及ぶ時、漢譯佛傳經典に於ける、本經の地位は益々高まるであらう。

尙ほ本經の特色とすべきは、本經が地名、人名等の固有名詞を殆んど皆梵語の音をそのまゝに譯し、而も、その際に用ゐたる漢字は、悉く從來の譯經者の用ゐたるものと全く異ることである。然しこの用字の從來と異なるは、法賢と同時の譯經者に共通の事であつて、而も彼ら相互の間には、一致存するが故に、彼らの時代卽ち宋代の支那音に準據せるが爲ならん。

次に、これは特色とはいひ得ないであらうが、本經中、同一梵語を譯するに、前後相違して一致せぬものが頗る多い事は慥かに注目に値する。一二の相違ならば、後世の誤脫とも見られやうが、斯く甚だしきを見、且つ本經の宋本も亦後世の諸本と大差なきを見れば、この不一致は法賢譯出當時よりの事と言はねばならぬ。之れ、詔を奉け恐らく譯場に於てなせる本經の譯出は、決して法賢一人の作にあらず、他に綴文者あり、筆受者あり潤文者ありて、夫々飜譯事業を分擔せるが爲に生じたる結果であらうが、それにしても譯場の常として十名にも達する證義者もある筈だのに、どうして、かゝる不一致を見るに至つたであらう。思へば思ふ程、不審の至りである。

四　譯出の時と人

本經の譯出者は、每卷の初めに

『西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚少卿明敎大師臣法賢奉　詔譯』

とあるに依つて、明かであるが、法賢については少しく語らねばならぬ。彼は古來、太祖の開寶六年(西紀九七三)支那に來れる中印度摩揭陀國那爛陀寺の沙門法天と同人とされてゐる。之れ佛祖統記第四十三卷雍熙二年(大正藏經四十九 p. 399)の下に「法天改名法賢」とあるに由來するものであらう、南條目錄も之に依つて兩者を同人とし法天名義の四十六部、法賢名

Samaditta には「平等に與へられたる者」「平等に與ふる者」の字義あれども適切ならず、殊に可笑しきことにはこの經の題名の衆許の意義を考ふる時、その經文中の三摩達多よりは、他經の三摩多に近い。說きて玆に到れば、本經のみ而も唯一回だけの所出なる三摩達多の語は恐らく、達の一字の衍入せる結果にはあらざるか。因みに起世因本經は音譯すること正しきも、摩訶三摩多を意譯して、大衆平等王とせるは、旣に河口慧海氏の指摘せるが如く(西藏傳印度佛敎史上十二頁)、字義よりして當らぬ。

三　佛傳中の地位及び本經の特色

佛傳に關する經典全部の系統を分類することは、別に有名なる佛傳經典を飜譯する仁あつて、その解題中に說明するであらうから、吾人のこの解題中には之を惜くが、その系統中に於ける本經の地位並びに特色については、玆に觸れて置く必要がある。

然らばその地位は如何、之に關しては旣に常盤大定博士及び立花俊道氏が指摘せるが如く、吾人も又此の經は西藏傳系に屬することを主張したい。而も之が漢譯中西藏系の唯一のものである所から、同時に本經の特色を爲してゐるのである。率直に言はんに吾人は未だ西藏語を解せざる者であり、從つて直接に西藏佛傳に依ることは不可能である爲に、暫くロツク・ヒル及び河口慧海氏の前出二著に依つて、之を見たけれども、之に依るのみにても、本經の內容の結構は、全く西藏傳のそれと一致することを知り得たのである。而もこの一致は獨り、その結構のみに止まらず、地名、人名等の瑣末の點にまで及ぶことは、驚くべき程である。尤も吾人の註釋中、本經に相當する西藏傳を出すことの出來なかつた箇所も往々あるけれども、こは多くロツク・ヒル略して吾人に傳へぬが爲であつて、他より推量するに、彼の依れる西藏原本には之あるべきを信ずる。尙ほ又ロツク・ヒル出すものにして本經と一致せぬものも若干あるが、こは一の西藏語を梵語に還元するに、數種の語が可能である爲に、ロツク・ヒルの選定せる梵語が適々本經の音と一致せざるに至つたものであらう。斯の如きは間接の資料に依れるが爲に來れる止むを得ぬ結果であるが、希くは更に有識の士ありて、本經を直接西藏の佛傳と比較せんことを。かくして恐らく兩者の一致は益々明かにされるであらう。尙ほ、此の兩者の一致につきては、之を比較對照し、細かに之を證すべきであるが、間接の資料しか持たぬ吾人が、之を本經と比較することは、餘り意義あることゝも思はざれば、後に西藏佛傳の直接

は勿論なく、西藏一切經中にも同名の經典はないので(昭和法寶目錄第一卷)、法賢が之を何れの原本に依つて譯出せるかは明かでないが、少くも後に言はんが如く、西藏佛傳と同一系統に屬することだけは言ひ得ると思ふ。尙ほ本經には原本等の對照すべきものなきのみならず、漢譯中にも之の異譯と傳へらるゝものがない。

概說は之で止め、以下諸項を分つて少しく本經を解明しやう。

二　衆許摩訶帝の名に就いて

世界最初の王の名を出す經典は可なりに多い。今之を表示せん。

(以下諸經が最初の王として出す名は皆、本經の所謂衆許摩訶帝或は三摩達多を指すことは疑ひない。但し大王・大人・田主の三名は今茲には直接關係がない。)

	名	出典
1.	Mahāsammata	Mahāvastu (梵本、)
		ロツク・ヒル所出西藏傳(Life of Buddha P. 7)
		Dīpavaṃsa (梵本、)
		Mahāvaṃsa (梵本、)
2.	摩訶三摩多(大平等)	起世經第十卷(縮、辰一、71a)
	〃　(大衆平等)	起世因本經第十卷(同　115a)
3.	大三末多	彰所知論下卷(藏四、9a)
4.	三摩達多	衆許摩訶帝經第一卷
5.	民主	長阿含經第二十二卷(昃九、120b)
6.	大王	大樓炭經第六卷(辰一、27b)
7.	大人	四分律第三十一卷(列五、1a)
8.	田主(大衆所立之王)	佛本行集經第四卷(辰七、16a)

此の表中、(2)(3)の原語が Mahāsammata にして(1)の諸傳と一致することは何人も異議がなからう。然るに唯この衆許摩訶帝經のみは三摩達多と出して、梵名 Samdatta の音を思はしめるのは、如何なる理由に基くものであらう。南條文雄博士も衆許摩訶帝を Samdatta Mahārāja と推定せるも、(大明三藏聖教目錄 No. 859)、恐らく本經の三摩達多及び衆許摩訶帝よりの逆推と思はれるばかりで、短見の及ぶ所、梵本に典據ありとは考へられぬ。若し例へ之ありとするも、又本經、三摩達多となす理由が何れにありとするも、Mahāsammata の三梵本の典據と三漢譯並びに西藏譯の助證あるを破ることは出來ないであらう。從つて吾人は此の王の名は本經の音譯を採らず、寧ろ起世經等の摩訶三摩多(彰所知論の大三末多)の音譯の正音なることを認めやうと思ふ。況んや此の梵語の字義よりするに、Sammata には衆議に因りて立てる者(長阿含の所謂民主)の意義を明かに有し、立名の因緣に合致するに於て、益々之に依るの外なきを感ぜざるを得ぬ。然るに

衆許摩訶帝經解題

一 概説

本經の題名なる佛說衆許摩訶帝經を見る時、何人も恐らく佛が衆許摩訶帝卽ち衆許大帝の事を說ける經典なるべしと想像し、之が佛傳中に置かるゝ事に不審を抱くであらう。然しながら一度、その內容を播讀すれば、直ちにその然らざるを知らん。成る程初め世界の初王たる衆許大帝に、說き起すとはいへ、斯の如きは此の經全體の結構よりすれば、序說にすぎざるものである。勿論こは佛の出世せられた釋迦種族の光輝ある王統の歷史を述べてはゐるが、而も要するに引續き說かんとする佛傳を飾る以上には出ない。之を尙ほ極言すれば、他の佛傳經典に於て、或は過去七佛乃至千佛等を說き、釋尊の法系を擧げ、以て佛法の悠久なる妥當性を示さんとし、或は、釋迦佛の本生を說き、過去無數劫に於ける、その善行の數々(六度萬行)を擧げ、以て偉大なる佛格の由來する所、甚だ遼遠なるを示さんとすると一般、こは現實に卽して、釋尊の肉身的血統の高貴を誇るものなれば、前二者の佛傳中の一部分と見らるゝと同樣に、本經の衆許摩訶帝以下、王統の談も、全く佛傳中の最初の一段に外ならぬことゝなる。故に本經は終始を一貫して、一個の佛傳であつて、その題名の如きは、その最初の一段につきて假りに附したる名目といはねばならぬ。

次に本經は、最初より第二卷の前半に至るまで、卽ち王統の談は大弟子目連が佛命により說示せるもので、以下は佛自らの說き給ふ所であるが（本經內容中その名文なきも、推論上よりと、題名に佛說を冠するとより、かく斷定していゝ）、本經は佛傳の全部に及ばず、迦毘羅城歸還の段を以て、第十三卷の最終卷を終つてゐる、而もその最終段を見れば、普通の經典の如き、一經終結の形式を踏んでゐない。從つて本經は此の十三卷を以て完結せるものにあらずと推定される樣に見ゆるけれども、元來此の經は、卷首に明かなるが如く、尼倶陀林に於て諸の釋迦族の爲に說かれたる經典なれば、時期には名文なきも、釋尊が歸城せられたる時の所說たることは明かである。かくて本經が釋尊歸國までにて終れる理由は、自ら明であらう。(尤も佛傳經典の佛傳全部を載せざることは獨り本經のみでなく、殆んど全部がさうである。)

尙ほ本經が宋代の譯で法賢三藏の手に成るものであるが、現在に於ては、梵本

眷屬、八萬那由他の人、及び九十六萬那由他の天是れなり。

[八五] 汝等當に知るべし」。過去の種因は、無量劫を經るも、終に磨滅せざるを、我、往昔に於て、一切の善業を精勤に修習し、及び大願心を發して、退轉せざりしが故に、今に於て一切種智を成就するを得たり。汝等、宜しく應に道行を勤修して、懈怠を得るなかるべし』。

時に、諸の比丘、佛の所說を聞き、歡喜頂戴して、禮を作して退きぬ。

過去現在因果經卷第四(終)

【八五】この一節は、釋尊一代の現在の事蹟の、偶然ならず、悉く過去の因緣なるを敍して、佛道を志求するものは、須らく斯くあるべしとて、勤修を勸發せるなり。經名の過去現在因果の意義はこゝにあらはる。

し』との此の念を作し已りて、即ち行いて之を逆ひ、[八二]子兜婆に到りて、迦葉に逢ひたまふ。時に彼の迦葉、旣に相好威儀の特に尊きを見、即便ち合掌して、此の言を作さく、『世尊は實にこれ一切種智、實に是れ慈悲もて衆生を濟ひたまふ者、實に是一切の所歸依處なり』と。即便ち五體を地に投じ、佛足を頂禮して、佛に白して言く、『世尊は、今是れ我が大師なり。我は是弟子なり』と。是の如く三たび說く。佛即ち答へて言はく、『是の如し、迦葉。我は是れ汝が師、汝は是れ我が弟子』。佛又語りて言はく、『迦葉、當に知るべし。若、人、實に一切種智に非ずして、汝を受けて弟子と爲さんと欲せば、頭則ち破裂して、以て七分と爲らん』。又復、告げて言はく、『善い哉、迦葉。快き哉。迦葉。當に知るべし、五受陰の身は是れ大苦聚なるを』。時に迦葉、此の言を聞き已りて即便ち諦を見、乃至、阿羅漢果を得たり。爾の時、世尊、即ち迦葉と、倶に竹園に還りたまふ。此の迦葉に、大威德あり、智慧聰明なるを以て、是の故に之を名けて[八三]大迦葉と爲す。

* * *

[八四]爾の時、世尊、諸比丘に告げたまふ、『普光如來の、世に出興したまへる時の、善慧仙人は、豈異人ならんや。即ち我が身、是れなり。緣路に遇ふ所の五百の外道の、共に論議し、及び隨喜せる所の者は、今、此の會中の優樓頻螺迦葉兄弟、及び其の眷屬の千比丘、是なり。時に花を賣れる女は、今の耶輸陀羅、是れなり。善慧仙人が、髮を地に布ける時、傍に二人ありて、佛前の地を拂ひ、及び二百人の隨喜して助けたる者は、今、此の會中の舍利弗・大目揵羅耶那、幷に二百の弟子比丘、是れなり。虛空諸天の、善慧仙人が、髮を以て地に布けるを見て、悉く皆隨喜して讃歎せる者は、我初めて得道して、鹿野苑中に、始めて法輪を轉ぜる(時の)八萬の天子、及び頻毘婆羅王の將ふる所の

【八二】子兜婆。宋・元・明の三本には于兜婆に作る、于の方可ならん。然らば兜婆(Stûpa)に至りての意となる。

【八三】大迦葉。佛の十大弟子の最初に位し、頭陀第一の稱ある。

【八四】これより後は、流通分即ち、一經の結文にて、初の本生談と釋尊傳とを統合せるものなり。本生(Jâtaka)は、常にこの形式を取る。本經は本生の形式によりて、釋尊傳を成せるものなり。

たまへば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と成る。爾の時、世尊、舍利弗、及び目揵羅夜那の爲に、廣く四諦を說きたまふに、二人即ち阿羅漢果を得たり。又復、彼の二百の弟子の爲に、廣く四諦を說きたまふに、即ち諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得、乃至、亦阿羅漢果を成ず。爾の時、世尊、即ち[七五]一千二百五十の、皆大阿羅漢なると與に、摩竭提國に於て、廣く衆生を利したまふ。諸比丘中、多く人あり、[七六]目乾羅夜那と名く。世尊、故に此の目揵羅夜那を名けて、大目揵羅夜那と爲したまふ。

三十六、度大迦葉

[七七]爾の時、偸羅厥叉國に、一婆羅門あり。名けて[七八]迦葉といふ。三十二相あり。聰明智慧にして、[七九]四毘陀經を誦し、一切の書論、通達せざるなし。極大巨富、善能く布施す。其の婦、端正にして、擧國無雙なり。二人自然に欲想あるなく、乃至、亦一室に同宿せず。久しく往昔に於て、善根を種ゑたるが故に、家に在りて五欲の樂を受くるを樂はず。日夜思惟して、世間を厭離し、精勤に出家の法を求め訪ね、是の如く推尋するも、得已る能はず。即ち家事を捨てゝ、山林に入り、心に念じ口に言ふ、『諸佛如來は、出家修道す。我、今、亦當に佛に隨つて出家すべし』と。即便ち金縷にて織り成せる珍寶の衣、價直百千兩金なるを脫ぎ去りて、壞色の[八〇]納衣を著、自ら鬚髮を剃る。

爾の時、諸天、虛空中に於て、既に迦葉の自ら出家せるを見已りて、之に語つて言ふ、『善男子、甘蔗の種族、白淨王の子、其の名薩婆悉達なるが、出家學道して、一切種智を成じ、世を擧りて號して[八一]釋迦牟尼佛と爲す。今、千二百五十の阿羅漢と、王舍城竹園中に在りて住したまふ』。爾の時、迦葉、天語を聞き已りて、歡喜踊躍して、身毛皆竪ち、即便ち往いて竹園僧伽藍に趣く。爾の時、世尊、其の當に來るべきを知り、自ら思惟して、其の善根を觀じ、『宜しく往いて之を度すべ

【七五】一千二百五十。諸經典の最初に見ゆる、會座に列せる千二百五十の阿羅漢は、即ちこれなり。
【七六】目乾羅夜那。宋元明の三本及び聖語藏本は乾を揵に作る。
【七七】之の一節は大迦葉、歸佛を叙す。
【七八】迦葉(Kāśyapa)。
【七九】四毘陀經。(Ṛg-veda)。(Sāma-veda)。(Yajur-veda)。(Atharva-veda)。
【八〇】壞色納衣。納衣或は衲衣に作る。不用の布片にて、縫ひつゞり合せたる僧衣。故に糞掃衣ともいふ。壞色とは白色を壞る義にて、青・黑・木蘭の三色をいふ。
【八一】釋迦牟尼佛。(Śākya-muni-buddha)。釋迦は能仁、牟尼は寂默、佛は覺者と譯す。

然れども、知る所を以て、當に汝が爲に說くべし」とて、即ち偈を說いて言く、

一切諸法の本は　因緣より生じて、主なし。　若、能く此れを解せば、　即ち眞實の道を得ん

爾の時、目揵羅夜那、舍利弗の、此の語を說き已るを聞きて、即ち諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得ぬ。

爾の時、舍利弗、目揵羅夜那と、各、佛法に於て、甘露を得已りて、共に相謂つて言く、『我等已に佛法に於て、各利益を得たり。今、宜しく應に共に佛所に往いて、出家を求索むべし』。此の語を作し已りて、各、弟子を喚び、之に語つて言く、『我等、今、已に佛法に於て、甘露味を得たり。唯此の法のみあつて、是れ出世の道なり。我、今、往いて佛に出家を求めんと欲す。汝等云何』。諸弟子等、其の師に答へて言く、『我等、今、知見する所あるは、皆大師の力なり。師、若、出家したまはば、我悉く隨從せん』。是に於て、二人、即ち二百の弟子を將て、竹園に往詣す。既に門に入り已りて、遙に如來の相好莊嚴、諸比丘衆の前後に圍遶するを見て、心大に歡喜し、踊躍身に遍ねし、爾の時、世尊、舍利弗及び目揵羅夜那が、諸弟子と、相隨つて來るを見已りて、諸比丘に告げたまふ、『汝等當に知るべし。今、此の二人、諸弟子を將て、我が所に來至して、出家を欲求す。一を舍利弗と名け、一を目揵羅夜那と名く。當に我が法中に於て、上弟子と爲るべし。舍利弗は、[七四]智慧中に於て、最第一と爲し、目揵羅夜那は、神通中に於て、復無上と爲す』。

佛所に至り已りて、頭面に足を禮して、佛に白して言く、『我、佛法に於て、已に道跡を得たり。出家せんを樂ひ欲す。願はくは、時に聽許したまへ』。爾の時、世尊、即便ち喚んで『善來比丘』と言ひたまへば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と成りぬ。時に、彼の二百の弟子、既に其の師の沙門と成れるを見已りて、倶に佛に白して言く、『我等も亦師に隨つて出家せんを欲す。唯願はくは、世尊、愍を垂れて聽許したまへ』。是に於て、世尊、即ち復喚びて、『善來比丘』と言ひ

【七四】智慧第一。佛の十大弟子の中に於て、舍利弗は智慧第一なり。目連は神通第一なり。共に佛の左右に侍して、その化を助くる事、實に大なりき。

[七三]一切諸法の本は、因緣より生じて、主なし。若、能く此を解せば、則ち眞實の道を得ん。時に、舍利弗、阿捨婆耆の、此の偈を說くを聞き已り、即ち諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得、道跡を見已りて、心大に踊躍し、身の諸情根、皆悉く悅豫し、自ら念言す、『一切衆生悉く「我」に著し、所以に輪廻して、生死に在り。若、我想を除けば、即ち我所に於て、亦皆離るゝを得んこと、譬へば、日光の、能く闇を破るが如けん。無我の想も、亦復是の如く、悉く能く我見の闇障を破る。我、昔より來、修學すべき所、皆、邪見と爲し、唯、今の得る所のみ、是れ正眞の道なり』。此の念を作し已りて、阿捨婆耆の足を禮し、所止に還歸す。時に、阿捨婆耆、前に至りて食を乞ひ、訖りて竹園に還りぬ。

時に、舍利弗、還つて住處に至る。時に、目揵羅夜那、善根已に熟し、舍利弗の諸根寂定に、威儀庠序(あり)、顏容の怡悅、常日に異るを見て、即便ち問うて言く、『我、今、汝が、諸根顏貌、常と異るあるを觀る。必、當に已に甘露の妙法を得たるべし。我、昔、汝と共に誓言を結べり。「若、妙法を聞かば、要、相啓悟せん」と。汝が得る所あるもの、願はくは我が爲に說け』。時に、舍利弗、即便ち答へて言く、『我、今、實に已に甘露の法を得たり』。目揵羅夜那、聞き已りて、歡喜無量、歎じて言く、『善哉、時に我が爲に說け』。舍利弗言く、『我、今、出で行いて一比丘に逢へり。衣鉢を執持し、村に入りて食を乞ふ。諸根寂靜にして、威儀庠序(あり)。我、既に見已りて、深く恭敬を生じ、既に其の所に到り、之に問うて言く、「我が意、汝を觀るに、新出家に似たり。而も能く此の如く、諸情根を攝す。問ふ所あらんと欲す。唯願はくは、答へられよ。汝が今の大師、其の名は何等ぞ。教誡する所ある、何の法をか演說する」。時に、阿捨婆耆、即便ち安庠として答へらる。言く「我が大師は、一切種智を得ましまず。是れ、甘蔗の種、天人の師なり。相好・智慧・及び神通力、與に等しきものなし。我、既に年幼にして、學道日淺し。豈能く如來の妙法を宣說せん。

【七三】これを因緣偈といふ。諸法は因緣生にして、實體なしといふなり。之を緣生無性といふ。龍樹の「中論」は、この緣生無性を、理論化せるものなり。佛教一切の哲理は、悉くこ緣生無性の基礎原理の上に築かる。然らざるものは、すべて外道の教に墮す。

し、退いて所住に還る。

閻浮提中、諸王の佛を見る、頻毘娑羅王を、最も[六五]其の首と爲し、諸の僧伽藍にて、竹園僧伽藍は、最も其の初と爲す。

三十五、舍利弗・目連

[六六]爾の時、世尊、諸比丘と、竹園僧伽藍に住したまふ。時に、王舍城中に、一婆羅門あり。聰明利根にして、大智慧あり、諸の書論に於て、通達せざるなく、辯才論議に、能く摧伏する莫し。一の姓は[六七]拘栗、名は[六八]優婆室沙。母の名[六九]舍利なるが故に、世を擧りて喚んで[七〇]舍利弗と爲す。二の姓は[七一]目揵連、名は目揵羅夜那、各一百の弟子あり。普く國人の宗とし仰ぐ所と爲る。二人互に共に以て親友たり。極めて相愛重し、咸共に誓つて言ふ、『若、先づ諸の妙法を聞くを得ば、要、相開悟して、悋惜を得るなけん』。爾の時、[七二]阿捨婆耆比丘、衣を著け、鉢を持して、村に入りて乞食す。善く諸根を攝し、威儀庠序なり。路人見るもの、皆恭敬を生ず。時に、舍利弗、忽ち路次に於て、阿捨婆耆が、善く諸根を攝し、威儀庠序なるに逢ひ見る。彼の舍利弗、善根既に熟す。阿捨婆耆を見て、心大に歡喜し、踊躍身に遍ねく、停歩瞻視して、暫くも捨つる能はず、即便ち問うて言く、『我が意、汝を觀るに、新出家に似たり。而も能く此の如く諸情根を攝することよ。問う所あらんと欲す。唯願はくは、答へられよ。汝が今の大師、其の名は何等ぞ。教誡する所あらんに、何の法をか演說する』。時に、阿捨婆耆、即便ち安庠として、之に答へて言ふ、『我が大師は、一切種智を得たまふ。是れ、甘蔗種、天人の師。相好・智慧・及び神通力、與に等しき者なし。我既に年幼にして、學道日淺し。豈能く如來の妙法を宣說せん。然れども知る所を以て當に、汝が爲に說くべし』とて、即ち偈を說いて言く、

【六五】其首。最初の歸依、最初の供養を以て、最も功德大なりと爲すを以て、大に之を旌表するなり。

【六六】この一節は舍利弗・目連の歸佛を叙す。

【六七】拘栗(Kolita)。

【六八】優婆室沙(Upatiśya)。

【六九】舍利(Śāri)。

【七〇】舍利弗(Śāriputra)。

【七一】目犍連(Maudgalyāyana)。普通には、拘栗を以て目連の名とするに關らず、此經は之を舍利弗の姓とす。また同一の目連を以て、姓とし名とするは、誤なり。

【七二】阿捨婆耆(Aśvajit)。馬勝と譯す。五比丘の一人。

したまふを知り已りて、佛足を頂禮し、辭退して去る。王、城に還り已りて、即ち諸臣に勅して、竹園に於て、諸堂舍を起さしめ、種々に莊飾して、極めて嚴麗ならしめ、繒の幡蓋を懸け、散花燒香し、悉く皆辦じ已りて、即便ち駕を嚴しめ、往いて佛所に至り、頭面に足を禮して、佛に白して言く、『竹園[六一]僧伽藍、修理已に畢りぬ。唯、願はくは、世尊、比丘僧と與に、我を哀愍するが故に、往いて彼に住したまへ』。爾の時、世尊、諸比丘及び無量の諸天の與に、前後に圍遶せられて、王舍城に入りたまふ。如來の門閫を蹈みませる時に當りて、城中の樂器、鼓せずして自ら鳴り、門の狹きは更に廣く、門の下れるは更に高く、一切の丘墟、皆悉く平坦に、臭穢の塵垢、自然に香淨に、聾者は聽くを得、瘂者は能く言ひ、盲者は視るを得、狂者は正を得、拘癖の疾病は、普く皆除癒し、枯木花を發き、腐草榮秀し、涸池潤を增し、香風淸く靡き、鳳・雀孔[六二]・翠・鳬・雁・鴛鴦、異類の衆鳥、繽紛として翔集して、和雅の音を出す。是の如き等の種々の祥瑞あり。旣に城に入り已りて、頻毘娑羅王と倶に竹園に往きたまふ。爾の時、諸天、虛空中に滿ちぬ。時に、王、即便ち手に[六三]寶缾を執り、盛るに香水を以てし、如來の前に於て、是の言を作す『我、今、此の竹園を以て、如來及び比丘僧に奉上る。唯、願はくは、哀愍し、我が爲に納受したまへ』。此の言を作し已りて、即便ち水を捨てぬ。爾の時、世尊、默然として、之を受け、偈を說いて呪願したまふ。

若、人、能く布施せば、慳貪を斷除す。　若、人、能く忍辱なれば、永く瞋恚を離る。　若、人、能く善を造せば、則ち愚癡に遠かる。　能く此の三行を具すれば、速に般涅槃に至る。

若、貧窮の人あり、財の布施すべきなくば、他の施を修するを見ん時、[六四]隨喜の心を生ぜよ。隨喜の福報は、施と等しくして異るなし。

爾の時、婆羅門・大臣・及び餘の人民、王の如來に僧伽藍を奉施しまつれるを見て、皆悉く踊躍して、隨喜の心を生じぬ。爾の時、頻毘娑羅王、僧伽藍を施し已りて、心大に歡喜し、頭面に足を禮

【五八】竹園(Venuana)。

【五九】三不堅法。有形の身・命・財。

【六〇】三堅法。無極身・無窮命・無盡財。

【六一】僧伽藍(Saṅghārāma)。衆園、又は僧房と譯す。

【六二】雀孔。恐らくは孔雀の轉倒せるものならん。

【六三】寶缾。寶瓶の水を、尊者の手にそゝぐは、印度に於ける布施の儀禮なり。捨水は、瓶の水を出すことゝなるべし。

【六四】隨喜。他の善を爲すに同情するなり。隨喜の功德は、大に稱讚せらる。蓋、人情の最も難しとする所。

も彼の火性は、手より生ぜず、及以び燧より出でず、亦復、手及び燧鑽を離れず。彼の情・塵・識も、亦復是の如し』。

時に、頻毘娑羅王、又、自ら思惟す、『若、情・塵・識の和合を以ての故に、善惡あり、果報を受けば、便ち常に合すと爲んか、應に離絕すべからず、若、常に合せずば、是則ち斷と爲す』。爾の時、世尊、王の心念を知りて、即便ち答へて言はく、『此の情・塵・識は、不常不斷なり。何を以ての故に、合するが故に、不斷なり、離るゝが故に不常なり。譬へば、地水を緣とし、かの種子を因として、芽葉を生ずるが如し。種子既に謝す、常と名くるを得ず。芽葉を生ずるが故に、斷と名くるを得ず。斷常を離るゝが故に、[五六]中道と名く。三事の因緣も、亦復、是の如し』爾の時、頻毘娑羅王、此の法を聞き已りて、心開意解し、諸法中に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得。八萬那由他の婆羅門・大臣・人民も、亦諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得。九十六萬那由他の諸天、又諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得たり。

時に、頻毘娑羅王、即ち座より起ち、佛足を頂禮し、合掌して佛に白す、『快き哉、世尊、能く轉輪聖王の位を捨てゝ、出家學道し、一切種智を成じたまへること。我、昔、愚癡にして、世尊を留めて、小國を臨治せんを欲せり。今、慈顏を覩、又正法を聞きて、方に慚愧を懷き、昔過を追悔す。唯、願はくは、世尊、大慈悲を以て、我が懺悔を受けたまへ。我、昔日に於て、世尊に白して言く、若、道を得ん時、願はくは、先づ我を度したまへと。今日、始めて宿願の成し遂ぐるを蒙り、世尊の恩を荷ひて、道跡を履むを得たり。我、今日より。世尊及び比丘僧を供養して、當に[五七]四事をして、乏しきあらざらしむべし。唯願はくは、世尊、[五八]竹園に住して、摩竭提國をして、長夜安きて獲しめたまはんを』佛即ち答へたまはく『善い哉、大王、乃ち能く[五九]三不堅法を捨てゝ、[六〇]三堅法を求むること。當に王の願をして、滿足を得しむべし』。時に頻毘娑羅王、佛の、請を受けて竹園に住

ふなり。無我說より當然起る問題にて、無我と輪迴との關係は、佛教々理史上の大問題なり。

【五四】我造、我受。こゝの「我」は「わが」にあらずして、「が」と訓すべし。佛教は常識の「われ」を假我として認むれど、當時の外道のすべてが認めたる、不變の實體としての「我」を否定せるなり。こゝは外道の說くが如き「我」の造「我」の受を否定しつゝ、而も果報の中に苦樂する假我の存在を立つなり。

【五五】情塵識。情は根に當り、塵は境に當る。即ち六根・六境・六識にして、根境の接觸によつて識あり。識に假我あるなり。これを永遠の實我と爲すべからず。

【五六】中道。こゝの中道は、初轉法輪の中道と、その意義を異にす。前のは、不苦不樂の中道なり。こゝのは事實の眞理をいふ。この意味の中道は、大に發展して、後の佛教の根本原理となれり。「中論」のMadhyama-pratipad は、これなり。

【五七】四事。異說あり。或は房舍・衣服・飲食・華香とし、或は衣服・飲食・臥具・湯藥とし、或は、衣服・飲食・散華・燒香とす。

如來の所に於て、深く敬信を生じ、如來の、必、一切種智を成じたまへるを、決定して知るを得、迦葉の是佛弟子なるを審に知りぬ。爾の時、諸天、虚空中に於て、衆の天花を雨らし、妙伎樂を作し、異口同音に唱へて言く、『善い哉、優樓頻螺迦葉、快く此の偈を說けり』。

　爾の時、世尊、諸大衆の、心意決定して、復狐疑なきを知ろし、又、其の根の、皆已に成熟せるを觀じたまひ、卽ち爲に說法したまふらく、『大王當に知るべし。此の[四八]五陰の身は、識を以て本と爲す。識に因るが故に、意根を生じ、意根を以ての故に、[四九]色を生ず。而して、此の色法は、生滅して住せず。大王、若、能く、是の如く觀ぜば、則ち能く身に於て、善く[五〇]無常を知らん。此の如く身を觀じて、身相を取らずば、則ち能く[五一]「我」及び我所を離れん。若、能く、色の「我」・我所を離るるを觀ぜば、卽ち色の生ずるは、便ち是れ苦の生ずるを知り、若は、色の滅するは、便ち是れ苦の滅するを知らん。若、人、能く此の如き觀を作せば、是を名けて解と爲す。若、人、斯の觀を作す能はずば、是を名けて縛と爲す。[五二]法は、本、「我」及以び我所なし。倒想を以ての故に、橫に「我」及以び我所ありと計するも、實法あるなし。若、能く此の倒惑の想を斷ぜば、則ち是れ解脫なり』。爾の時、頻毘娑羅王、心に自ら思惟す、『若、衆生の、「我」ありと言ふを、名けて縛と爲し、一切衆生は、皆悉く「我」なしと謂はゞ、旣に「我」あるなし、[五三]誰か果報を受くるぞ』。爾の時、世尊、彼の心念を知ろして、卽ち之に語りて言はく、『一切衆生の、爲す所の善惡、及び受くる果報は、[五四]皆「我」の造にあらず、亦「我」の受にあらず。而して、今、現に、善惡を造作し、果報を受くる者あり。大王諦かに聽きたまへ。當に王の爲に說くべし。大王、但、[五五]情・塵・識の合するを以て、境に於て染を生じ、累想滋茂し、是の緣を以ての故に、生死に馳流して、備に苦報を受くるも、若、境に於て染なく、其の累想を息めば、則ち解脫を得るなり。情・塵・識の三事の因緣を以て、共に善惡を起し、及び果報を受くるのみ、更に別の「我」なし。譬へば、火を鑽るが如し。手の燧を轉ずるに因りて、火の生ずるあるを得るも、然

【四八】　五陰。色・受・想・行・識をいふ。色は物質現象、受・想・行・識は、精神現象なり。識に眼・耳・鼻・舌・身・意の六あり。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が、色・聲・香・味・觸・法の六境に接觸して生ずる處なり。

【四九】　生色。色は一切の物質現象なり。物質現象は意根の創造する所、意根は識の生ずる所といふに、唯心說の萌芽を見る。

【五〇】　無常。こゝは色の無常より、無我に及び、色の生に苦を知り、法の無我より空に及べるなり。これを諸行無常・諸法無我・一切皆苦・諸法皆空といふ。無常・無我・苦・空を四法印と稱し、佛敎を他敎に區別する標幟なり。

【五一】　我(Ātman)。心的實在の稱。我所は我が所有物の意にて、我に附屬し、我によりて執著せらるゝ事物をいふ。

【五二】　法(Dharma)。有形無形の一切の事物の稱。實法なしといふは、不滅の實體を有するものなしといふなり。萬有を一貫する法則なしといふにあらず。

【五三】　誰受果報。無我といふならば、現に苦樂善惡を感じつゝあるものは何ものぞとい

に語りたまふ、『汝、今、宜しく應に諸の神變を現ずべし』。時に、迦葉、卽ち虛空に昇りて、身上より水を出し、身下より火を出し。身上より火を出し、身下より水を出し。或は大身を現じて、虛空中に滿ち。或は復小を現じ、或は一身を分ちて、無量身と爲し。或は地に入り、還つて復踊出し、虛空中に於て、行住坐臥するを現ず。擧衆見已りて、未曾有と歎じ、皆悉く第一大仙と稱へ言ふ。爾の時、迦葉、此の變を現じ已りて、卽ち空より下りて、佛前に到り、頭面に足を禮し、佛に白して言く、『世尊は實に是天人の師、我は、今、實に是尊の弟子なり』。是の如く、三たび說くや、佛卽ち答へて言はく、『是の如く、是の如し。迦葉よ、汝は、我が法に於て、何等の利を見て、火具を棄捨して、出家せるや』。是に於て、迦葉、偈を以て答へて言ふ、

我、昔日の中に於て、　火に事ふる所の功德にて、　天人の中に生れ、　五欲の樂を受くるを得、　恒に是の如く輪轉して、　生死の海に沒しぬ。　我、此の過患を見て、　所以に之を棄捨せり。　又復、　火に事ふるの福は、　天人中に生るゝを得て、　貪・恚・癡を增長す。　是の故に、　我は遠離せり。　又復、火に事ふるの福は、　將來の生を求めんが爲なり。　旣已に生あるが故に、　必、老病死あり。　已に此の如き事を見て、　是の故に、火法を棄てぬ。　施會と、苦行を修すると、　及以び火に事ふるの福とは、　梵天に生るゝを得と雖も、　これ究竟の處に非ず。　是の因緣を以ての故に、　所以に火に事ふるを棄てぬ。　我、如來の法を見るに、　生老病死を離れて、　究竟解脫の處なり。　是の故に、今、出家す。　如來は眞に解脫して、　諸天人の師たり。　是の因緣を以ての故に、　大聖尊に歸依しまつる。　如來、大慈悲より、　種々の方便を現じ、　及び諸の神通力もて、　以て我を引導したまふ。　云何ぞ復應に、　火法に奉事すべきか』。

爾の時、頻毘娑羅王、及び諸の大衆、優樓頻螺迦葉の、此の偈言を說くを聞きて、心大に歡喜し、

爾の時、世尊、漸く王舍城に近づき[四六]杖林に住まりたまふ。時に、優樓頻螺迦葉、即便ち其の常に使ふ所の人を遣はし、頻毘娑羅王に白して言く、『我、今、佛法中に於て、出家修道し、今、佛に隨從して、來りて杖林に至りぬ。大王、宜しく先づ禮拜供養したまふべし』。王、來信に、此の言を說くを聞き已りて、方に決定して優樓頻螺迦葉の、佛弟子と爲れるを知り、即ち勅して駕を嚴しめ、諸大臣・婆羅門、及び人民衆と、佛所に往詣し、杖林の外に至りて、王即ち輿を下り、儀飾を除却し、歩んで佛前に至る。爾の時、空中に天あり。王に語りて言く、『如來、今、此の林中に在す。是諸天人の最上福田なり。大王、宜しく應に恭敬供養したまふべし。又應に國中の人民に宣示して、皆悉く其をして如來を供養せしめまつるべし』。時に、王、既に彼の天語を聞き已りて、心大に歡喜し、倍踊躍を增し、便ち林中に進み、遙に如來の相好莊嚴を見、又優樓頻螺迦葉兄弟三人、幷に其の弟子の、前後に圍遶すること、盛滿の月が、衆星の中に處するが如くなるを見て、歩々踊悅して、自ら勝ふる能はず。既に佛所に至り、頭面に足を禮し、佛に白して言く、『我は、是、[四七]月種、摩竭提王、名は頻毘娑羅、世尊知りたまふや不や』。佛即ち答へたまはく、『善哉、大王』。是に於て、頻毘娑羅王、却いて一面に坐す。時に、婆羅門、及以び大臣・諸人民衆、皆悉く座に就く。

爾の時、世尊、既に來衆の皆安坐し已るを見て、即ち梵音を以て、頻毘娑羅王を慰問して言はく、『大王、四大常に安穩なりや不や。民務を統理して、乃ち勞する無きや』。王即ち答へて言く、『世尊の恩を蒙りて、幸に安穩なるを得』。爾の時、頻毘娑羅王、及び餘の大學婆羅門・長者居士・大臣・人民、既に迦葉の佛弟子と爲れるを見て、自ら相謂つて言く、『嗚呼如來に大神力あり、智慧深遠、不可思議なり。乃ち能く此の如きの人を伏して、以て弟子と爲せりとは』。爾の時、復諸餘の人衆あり、心に自ら念言す、『優樓頻螺迦葉、大智慧あり、普く世人の爲に歸信せらる。云何ぞ當に沙門瞿曇の爲に、弟子と作るべきか』とて、心に狐疑を懷く。爾の時、世尊、彼の心念を知り、即ち迦葉

【四六】杖林。(Yaṣṭhivana)。

【四七】月種(Candra-vaṁśa)。

まへ』。佛、『善來比丘』と言へば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、卽ち沙門と成る。時に、那提迦葉・伽耶迦葉、又佛に白して言く、『我が諸弟子、今、皆、佛法に於て出家せんと欲す。唯願はくは、世尊、愍を垂れて聽許したまへ』。佛卽ち答へて、『善哉善哉』と言ひ、爾の時、世尊便ち、『善來比丘』と呼びたまへば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、卽ち沙門と成りぬ。

爾の時、世尊、卽ち那提迦葉・伽耶迦葉、及び諸弟子の爲に、大神變を現じ、又其の心に應じて、爲に說法し、語りて言はく『比丘、當に知るべし。世間は皆貪欲・瞋恚・愚癡の猛火の爲に燒炙せらる。汝等、往昔奉事せる三火を、既に能く絕棄しぬ。此の外惑を除くも、今、[四四]三毒の火、尙猶身に在り。宜しく速に之を滅すべし』。時に諸比丘、佛の此の語を聞きて、諸法中に於て、遠塵離苦して、法眼淨を得たり。世尊、又爲に廣く四諦を說きたまふや、皆悉く阿羅漢果を得たり。

三十四、頻王歸佛

爾の時、世尊、心に自ら念言す、『頻毘娑羅王、往昔、我に於て約誓の言ありき、「道、若、成ぜば、願はくは、先づ度せられよ」と。今日時至りぬ。宜しく應に彼に往きて其の本願を滿ずべし』。此の念を作し已りて、卽ち迦葉兄弟及び千の比丘、眷屬の與に、圍遶せられて、王舍城に往き、頻毘娑羅王の所に詣りたまふ。爾の時、[四五]頻毘娑羅王が、昔、聚落を以て、優樓頻螺迦葉に給せる者、既に迦葉及び其の弟子の、悉く沙門と爲れるを見て、卽ち還つて王に啓し、此の如き事を說く。王、諸臣と、既に此の語を聞きて、心に大に驚怪し、默然として聲なし。時に外人民、此の語を聞き已り、各相謂つて言く、『優樓頻螺迦葉は、智慧深遠、與に等しきものなく、年また耆老にして、已に阿羅漢を得たり。云何ぞ反りて瞿曇の弟子と爲らんや。終に此の理なし。乃ち說いて沙門瞿曇が弟子と爲れりと言ふべきのみ。』

【四四】三毒。直前にある貪欲・瞋恚・愚癡をいふ。內に燃ゆる三毒の火を、外の三火に比して說く。これ釋尊の常に用ひらるゝ隨機說法、應病與藥の一例なり。

【四五】（原文）爾時頻毘娑羅王、昔以聚落、給優樓頻螺迦葉者。こゝの意は、昔頻王が迦葉に給せる聚落のものといふにあるべし。

り、兄の住處に至るに、空寂にして人なし。心大に悲絶して、其の兄及び諸弟子の[四二]所在を知らず、四向推尋して、遇舊人を見、之に問うて言く、『我が仙聖兄、及び諸弟子、所在を知らず。汝之を見たりや不や』。舊人答へて言く、『汝が仙聖兄は、諸弟子と事火の具とを棄て、皆悉く瞿曇の所に往いて、出家學道す』。是の時、二弟、此の語を聞き已りて、心大に懊惱し、未曾有と怪しみ、又自ら念言す、『云何ぞ阿羅漢道を棄てゝ、復更に他餘の法を求むるか』。即便ち馳せ往いて、其の兄の所に至り、到り已りて、兄及び及び眷屬の、鬚髮を剃除し、身に袈裟を披るを見、即便ち跪き拜して、兄に問うて言く、『兄は本既に是大阿羅漢なり。聰明智慧、與に等しき者なく、名十方に聞え、宗とし仰がざるなきに、何が故に今自ら此の道を捨てゝ、還つて人に從つて學ぶか。これ小事にあらず』。

爾の時、迦葉、其の弟に語りて言く、『我、世尊を見るに、大慈大悲を成就して、三事の奇特あり。一には、神通變化なり。二には慧心淸徹して、決定して一切種智を成就するなり。三には、善く人根を知りて、隨順攝受するなり。此の事を以ての故に、佛法中に於て、出家修道す。我、今、復、國王臣民に宗敬せらるゝ所。世論機辯、能く折するものなしと雖も、然れども永く生死を絶つの法に非ず。唯、如來の演說すべき所のみ有りて、能く生死を盡す。[四三]既に是の如き大聖の尊に値ふ。而して、自ら勵んで、彼の高勝を師とせずんば、則ち是無心なり、亦無眼と爲す』。二弟白して言く、『若、兄の語の如くば、決定して是一切種智を成ぜるなり。我が知得する所は、皆是兄の力、兄、今、既に佛に從つて出家しぬ。我等も亦願はくは、兄に隨順して學せん』。即ち各其の諸弟子に語つて言く、『我、今、大兄に同じて、佛法中に於て、出家學道せんと欲す。汝が意云何』。時に、諸弟子、即ち師に答へて言く、『我等が知見あるを得る所以は、皆大師の恩なり。大師、若、佛法中に於て、出家せんと欲せば、亦願はくは、隨從せん』。是に於て、那提迦葉・伽耶迦葉、各二百五十の弟子と與に、佛所に至り、頭面に足を禮し、佛に白して言く、『世尊、唯願はくは、慈哀もて我等を濟度した

【四二】所在。縮刷藏經には所在處に作る。

【四三】既。縮藏には既に作る。大正藏經には即に作りて、聖語藏本に既に作ると註す。

弟子答へて言く、『我等の知る所は、皆尊者の恩なり。年少沙門、既に尊者の歸信する所と爲る、豈當に虚あるべけんや。我等も亦諸の奇異あるを見ぬ。尊者、若、必、其の法を受けんと欲せば、我等も亦願はくは隨從歸依せん』。

時に、迦葉、諸弟子の、是の言を作すを聞き已りて、即便ち相與に倶に佛所に詣り、佛を白して言く、『我及び弟子、今、定んで歸依す。唯、願はくは、大仙、時に我等を攝したまへ』。佛、『善來比丘』と言へば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と成る。爾の時、世尊、即ち所應に隨つて、廣く四諦を說きたまふ。時に、迦葉、說法を聞き已りて、遠塵離垢して、法眼淨を得、乃至、漸々阿羅漢と成りぬ。爾の時、迦葉の五百の弟子、既に其の師の已に沙門と爲れるを見て、心に願樂を生じて、亦出家せんと欲し、即ち佛に白して言く、『我等の大師、已に大仙の攝受する所と爲り、今、沙門と成りぬ。我等も亦大師に隨つて、學せんを樂ふ。唯願はくは、大仙、我が出家を聽したまへ』。佛、『善來比丘』と言へば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と成る。是に於て、世尊、即ち爲に四諦の法輪を轉じたまふ。時に、五百の弟子、遠塵離垢して、法眼淨を得、[三九]須陀洹果を成じ、漸々修行して、乃至、亦阿羅漢果を得たり。爾の時、迦葉及び五百の弟子、其の火に事ふる種々の具を以て、悉く皆尼連禪河に捐棄て、師徒相與に佛に隨つて去る。

爾の時、迦葉の二弟、一を[四〇]那提迦葉と名け、二を[四一]伽耶迦葉と名く。各、二百五十の弟子あり。尼連禪河の側に在りて、兄の下流に居る。忽ち其の兄、幷に及び弟子の、火に事ふる所の具の、悉く流を逐うて來るを見、心に大に驚愕して、自ら念言す、『我が兄、今、何の不祥あるか。事火の具、今、水に隨つて流る。はた惡人の害する所に非ずや』。是の時、二弟、奔り競つて相就き、共に議して言ふ、『我が兄、今や、若、復、惡人の害する所と爲らざるか。諸物何に縁りてか水に從つて來れる。苦しい哉、怪しい哉。我等、宜しく速に共に兄の所に至るべし』。即便ち相與に流に泝りて上

【三九】 須陀洹(Srota-āpanna)。預流と譯す。三界の見惑を斷じて、初めて聖者の流類に入りし位をいふ。即ち四果の中の初果なり。乃至の中には、須陀含 Sakṛdāgāmi (一來)、阿那含 Anāgāmi (不還)を略す。以上の三に阿羅漢 Arhat (不生) を加へて、四果といふ。

【四〇】 那提迦葉 (Nadi-kāśyapa)。

【四一】 伽耶迦葉 (Gayā-kāśyapa)。

我が[三五]四部衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、未だ具足せざるが故に。應に度すべき所のもの、皆未だ究竟せず。諸外道衆、悉く未だ降伏せず』と。爾の時、如來、亦復三たび答へたまふ。魔王聞き已りて、心に愁惱を懷き、卽ち天宮に還る。世尊、卽便ち尼連禪河に入り、神通力を以て、水を兩開せしめ、佛の所行の處、歩々塵起り、兩面の水を、皆悉く湧き起らしむ。迦葉遙に見て、佛は沒溺せりと謂ひ、卽ち弟子と、船に乘りて來り、旣に河側に至り、佛の行きたまふ處、皆悉く塵の起るを見、其の希有を歎じて、自ら念言す、『年少沙門、此の如き神通の力ありと雖も、然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

是の時、迦葉、卽ち佛に問うて言く、『年少沙門、船に上らんと欲するや不や』。佛言はく、『甚だ善し』と。時に世尊、卽ち神力を以て、船底を貫きて入り、※結加趺坐したまふ。迦葉、佛の船底より入りて、而も穿漏なきを見、其の希有を歎じて、心に自ら念言す、『年少沙門、乃ち是の如き自在神力あり。然も、故、我が眞の[三六]阿羅漢を得たるに如かざるなり』。佛卽ち語りて言はく、『迦葉、汝は阿羅漢にあらず。亦復、是れ[三七]阿羅漢向にあらず。汝、今、何が故に、大我慢を起すぞ』。迦葉、此の如き語を說きたまふを聞く時、[三八]心に愧懼を懷き、身毛、皆竪ちて、自ら念言す『年少沙門、善く我が心を知る』と。卽ち佛に白して言く、『是の如し、沙門、是の如し。大仙、善く我が心を知る。唯願はくは、大仙、我を攝受したまへ』。佛卽ち答へて言はく、『汝旣に年耆百二十歳、又復多く弟子眷屬あり、又國王臣民の敬ふ所と爲る。若、決定して我が法に入らんと欲せば、先づ弟子と、熟共に論詳せよ』。迦葉答へて言く、『善い哉、善い哉、大仙の勅の如くせん。然れども、我が內心は、決定せざるに非ず。當に還つて弟子と論ずべしと爲すのみ』。此の語を作し已り、卽ち本處に還り、諸弟子を集め、之に語つて言く、『年少沙門、此に住して以來、其の種々の神通變化を見るに、極めて奇特と爲す。智慧深遠にして、性又安庠なり。我、今、便ち其の法に歸依せんと欲す。汝等云何』。

【三五】衆。僧伽（Saṃgha）の譯。四部僧伽とは、（Bhikṣu, Bhikṣuṇī, Upāsaka, Upāsikā）なり。前二は出家の男女、後二は在俗信者の男女。

※結加。宋元明の三本及聖語藏結跏に作る。

【三六】阿羅漢（Arhān）。正しくは、應供と譯し、義によりて、殺賊又は不生と譯す。佛教にては、小乘の極聖位と爲し、これに阿羅漢向、阿羅漢果を分つ。この經より見れば、これを聖位に用ふるは、敢て佛教に限らず。釋尊は之を依用せるに過ぎざる事と見らる。

【三七】阿羅漢向。阿羅漢果に向ふ因位に向といふ。これにつきて、先づ四沙門果を知るの要あり。四沙門果とは、須陀洹・一來・不還・阿羅漢をいふ。須陀洹とは、三界の見惑を斷ずるをいひ、一來とは、欲界の修惑（又は思惑）の九品中、前六品を斷ずるをいひ、不還とは、後三品を斷ずるをいひ、阿羅漢とは色界、無色界の一切の修惑を斷ずるをいふ。されば阿羅漢には、三界の見惑、修惑、すべて斷盡せらるゝなり。この四果に向ふを四向といひ、よつて四向四果あり。

【三八】心懷を、大正大藏經には必懷に作る。必は心の誤なり。

故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

爾の時、迦葉、心に自ら念言す『明日、摩竭提王・及び諸の臣民・婆羅門・長者・居士等、當に來りて我に就きて、七日の會を作すべし。年少沙門、若、來りて此に在り、國王・臣民・婆羅門・長者・居士等、其の相好、及以び神通威德力を見ば、必ず當に我を捨てゝ、之に奉事すべし。願はくは、此の沙門、七日中に於て、我が所に來らざらんを』と。佛、其の意を知ろして、即便ち住いて北欝單越に詣り、七日七夜、彼に停りて、現じたまはず。七日を過ぎ已り、集會畢訖り、國王辭し去るや、迦葉、心に念ず『年少沙門、七日に近く、我が所に來らざるは、善い哉、快い哉。我、今、既に集會の餘饌あり。以て之に供へんと欲す。其れ、若、來らば、善く時宜を得ん』。是に於て、世尊、即ち其の意を知り、欝單越より、譬へば、[三一]壯士の臂を[三二]屈神する如き頃に、來りて其の前に到りたまふ。時に、迦葉、忽ち如來を見て、心大に驚き喜び、即ち佛に問うて言く『汝、七日に近く、何處に遊行して、相見えざりしぞ』。佛即ち答へて言はく『摩竭提王・及び諸臣民・婆羅門・長者・居士、七日中に於て汝が集會に就く。汝、[三三]近ごろ心に念じて、我を見るを欲せず。是の故に、我、北欝單越に往きて、以て汝を避くるのみ。汝、今、心に念じて、我をして來らしめんと欲す。所以に、今、故に來りて汝に詣るなり』。迦葉、佛の此の言を說くを聞き已りて、心驚き毛竪ちて、此の念を作す『年少沙門、乃ち我が意を知る。甚だ奇特と爲す。然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

爾の時、世尊、又他日に於て、心に自ら思惟したまふ『優樓頻螺迦葉、根緣漸く熟す。今は正に是調伏其の時なり』。是を思惟し已り、即ち尼連禪河に趣き、既に河側に到りたまふ。是の時、魔王、佛所に來詣し、佛に白して言く『世尊、今は宜しく般涅槃すべし。[三四]善逝、今は宜しく般涅槃すべし。何を以ての故に。應に度すべき所の者、皆悉く解脫せり。今は正に是般涅槃の時なり』。是の如く、三たび請ふや、世尊、爾の時、魔王に答へて言はく『我、今、未だ是般涅槃の時ならず。所以は何。

【三一】壯士。大正大藏經に牡士に作る。牡は壯の誤。

【三二】屈神。宋・元・明の三本に伸に作り、聖語藏本に申に作る。

【三三】近心念。宋・元・明の三本に起心念に作る。起の方可なるべし。

【三四】善逝。(Sugata)の譯。よく彼岸に到りたまへる人。佛十號の一。

致せるを感じぬ。然れども、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

爾の時、世尊、別に他日に於て、林間を經行し、糞穢中に諸幣帛あるを見、即便ち拾ひ取り、之を浣濯せんと欲し、心念に石を須む。釋提桓因、即ち佛意を知り、大壯士の臂を屈伸する如き頃に、[二八]香山の上に往き、四方石を取りて、樹間に安置し、即ち佛に白して言く『石上に就きて、衣を浣濯したまふべきなり』。佛復心に念じたまふ、『今應に水を須むべし』。釋提桓因、又香山に往き、大石槽を取り、清淨の水を盛りて、方石の所に置く。釋提桓因、所爲の事畢りて、忽然として現ぜず、天宮に還歸る。爾の時、世尊、浣濯已に竟りて、還つて樹下に坐したまふ。是の時、迦葉、佛所に來至し、忽ち樹間に、四方石及び大石槽あるを見、即ち自ら思惟す『此の中、云何ぞ此の二物あるか』。心に驚怪を懷き、往いて佛に問ふ、『年少沙門、汝が此の樹間に、四方石及び大石槽あり。何より來れるか』。是に於て、世尊、即ち之に答へて言はく『我向に經行して、地の幣帛を見、取りて之を浣はんと欲し、心に此を須ひんを念ふ。釋提桓因、我が此の意を知り、即ち香山に往き、之を取りて來りぬ』。迦葉聞き已りて、未曾有と歎じ、自ら念言す『年少沙門、是の如き大威神力あり、能く諸天に感ずと雖も、然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

爾の時、世尊、又他日に於て、指地池に入りて、自ら洗浴し、洗浴し訖已りて、心念に出でんと欲するに、攀ぢ持つ所なし。池上に樹あり、[二九]迦羅迦と名く。枝葉蔚映して、池上に臨む。樹神即便ち此の樹枝を[三〇]按じて、佛をして攀ぢて出でしめ、還つて樹下に坐したまふ。時に迦葉、佛所に來至し、忽然として樹の枝を曲げ蔭を垂るゝを見、怪んで佛に問ふ『此の樹、何が故に枝を曲げ蔭を垂るゝか』。佛即ち答へて言はく『我、向に於て、池に入りて、洗浴し、出づるに攀づる所なし。樹神感を致して、我が爲に之を曲げぬ』。是に於て、迦葉、樹の枝を曲ぐるを見、又佛の言を聞きて、未曾有と歎じ、自ら心に念ず『年少沙門、乃ち此の如き大威德力あり、能く樹神を感ぜしむ。然も

【二八】香山(Gandhamādana-giri)。無熱池の北にあり、池を隔てゝ、大雪山に對す。閻浮提洲の最高中心にして、漢の崑崙山に當るとぞ。

【二九】迦羅迦(Kālaka)。

【三〇】按。おしくだす。

婆羅門法中、火に奉事するを最と爲し、一切の衆流中、大海を其の最と爲し、諸の星宿中に於て、月光を其の最と爲し、一切の光明中、日照を其の最と爲す。諸福田中に於て、佛福田を最と爲す。若、大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし。

佛、食し已畢りて、却つて所止に還り、鉢を洗ひ、口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。明日食事、復往いて佛を請ず。佛、『善哉』と言ひ、即ち共に俱に行き、既に其の舍に到りて、種種の食を下す。佛、即ち呪願したまふ。

婆羅門法中、火に奉事するを最と爲し、一切の衆流中、大海を其の最と爲し、諸の星宿中に於て、月光を其の最と爲し、一切の光明中、日照を其の最と爲し、諸福田中に於て、佛福田を最と爲す。若、大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし』。

爾の時、世尊、呪願し已畢りて、即便ち食を取り、獨樹下に還り、食し畢りて、心念に水を須む。釋提桓因、即ち佛の意を知り、大壯士の臂を屈伸するが如き頃に、天より來り下りて、佛前に到り、頭面に足を禮し、即便ち手を以て地に指して池を成す。其の水清淨にして[26]八功德を具ふ。如來即便ち得て之を用ひ、澡漱既に畢りて、釋提桓因の爲に、種々の法を說きたまふ。釋提桓因、既に法を聞き已りて、歡喜踊躍し、忽然として現ぜず、天宮に還歸る。是の時、迦葉、中食後に於て、林間を[27]經行し、心に自ら念言す、『年少沙門、今日は食を受けて、樹下に還歸れり。我當に彼に往いて之を看視るべし』。即ち佛所に詣り、忽ち樹の側に、一大池あるを見る。泉水澄淨して、八功德を具ふ。怪んで佛に問ふ、『此の中、云何ぞ忽ちに此の池あるか』。佛即ち答へて言はく、『且に汝が供を受け、此の處に還歸り、食ひ訖りて、水を須め、澡漱洗鉢せんとするや、釋提桓因、我が此の意を識り、天上より來りて、手を以て地を指し、此の池を成しぬ』。爾の時、迦葉、既に池水を見、復佛言を聞きて、心に自ら思惟す、『年少沙門、大威德あり、乃ち能く此の如く天瑞を

【二六】八功德。澄淨・淸冷・甘美・輕軟・潤澤・安和・除患・增益をいふ。但し、異說あり。

【二七】經行。同所を行きつもどりつ繰り返すをいふ。運動の爲、又は睡眠を防ぐ爲にせらる。

はく、『汝、今、此の鉢中の果を識るや不や』。迦葉答へて言く、『此の果を識らず』。佛言はく、『此より西行する數萬踰闍那にして、瞿陀尼に到り、此の果を取り來る。名は呵梨勒、極めて香美と爲す。汝之を食ふべし』。迦葉聞き已りて、心に自ら念言す、『彼の道や、此を去る、極めて長遠と爲す。而して此の沙門、乃ち、能く俄爾に已に往還するを得たる、其の神通を視るに、未だ曾て有らざる所。然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

迦葉卽便ち種々の食を下す。佛卽ち呪願したまはく、

婆羅門法中、火に奉事するを最と爲し、一切の衆流中、大海を其の最と爲し、諸の星宿中、月光を其の最と爲し、一切の光明中、日照を其の最と爲し、諸の福田中に於て、佛福田を最と爲す。若、大果を求めんと欲せば、佛福田を供すべし』。

佛、食ひ已畢りて、所止に還歸り、鉢を洗ひ口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。

明日の食時、復往いて佛を請ず。佛言はく、『汝去れ、我後に隨つて往かん』。迦葉適き去る。俄爾の間に、世尊卽便ち、(一五)鬱單越に至り、自然の粳米の飯を取り、鉢に滿てゝ持ち來り、迦葉未だ至らざるに、佛已に先づ到る。迦葉後れて來り、佛の已に坐したまふを見、卽便ち問うて言く、『年少沙門、何の道より來りて、先づ此に至れる』。佛、鉢中の粳米の飯を以て、以て迦葉に示し、之に語つて言はく、『汝、今、此の鉢中の飯を識るや不や』。迦葉答へて言く、『此の飯を識らず』。佛言はく、『此より北行する數萬輸闍那にして、鬱單越に到り、此の自然の粳米の飯を取り來る。極めて香美と爲す。汝、之を食ふべし』。迦葉聞き已りて、心に自ら念言す、『彼の道は、此を去る、極めて長遠と爲す。而して此の沙門、卽ち能く俄爾に、已に往還するを得ぬ。復神通の測量すべき難しと雖も、然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

迦葉卽便ち種々の食を下すや、佛卽ち呪願したまふ、

【一五】 鬱單越(Uttara-kuru)。須彌山說に於ける、北方の人間世界。

田中に於て、佛福田を最と爲す。若、大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし』。

佛、食ひ已畢りて、所住に還歸り、鉢を洗ひ口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。

明日の食時、復往いて佛を請ず。佛言はく、『汝、去れ。我、後に隨つて往かん』。迦葉適き去る。俄爾の間に、世尊、即便ち【二二】弗婆提に至り、【二三】菴摩羅果を取り、鉢に滿てゝ、持ち來り、迦葉未だ至らざるに、佛已に先づ到る。迦葉後に來り、佛の已に坐したまふを見、即便ち問うて言く、『年少沙門、何の道より來り、先に此に至れる』。佛、鉢中の菴摩羅果を以て、以て迦葉に示し、之に語つて言く、『汝、今、此の鉢中の果を識るや不や』。迦葉答へて言く、『此の果を識らず』。佛言はく、『此より東行する數萬踰闍那にして、弗婆提に到り、此の果を取り來る。名は菴摩羅、極めて香美と爲す。汝、之を食ふべし』。迦葉聞き已りて、心に自ら念言す、『彼の道や、此を去る、極めて長遠と爲す。而して此の沙門、乃ち能く俄爾に、以て往還するを得たり。其の神力を觀るに、未だ曾て有らざる所。然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

迦葉即便ち種々の食を下す。佛即ち呪願したまふ、

婆羅門法中、　火に奉事するを最と爲し、　一切の衆流中、　大海を其の最と爲し、　諸の星宿中に於て、　月光を其の最と爲し、　一切の光明中、　日照を其の最と爲し、　諸福田中に於て、　佛福田を最と爲す。　若、大果を求めんと欲せば、　當に佛福田を供すべし』。

佛食し、已畢りて、所止に還歸り、鉢を洗ひ口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。

明日の食時、復往いて佛を請ず。佛言はく、『汝去れ。我後に隨つて往かん』。迦葉適き去る。俄爾の間に、世尊即便ち【二三】瞿陀尼に至り、【二四】呵梨勒果を取り、鉢に滿てゝ持ち來り、迦葉未だ至らざるに、佛已に先づ到る。迦葉後れて來り。佛の已に坐したまふを見、即便ち問うて言く、『年少沙門、何の道より來りて、先づ此に至るか』。佛、鉢中の呵梨勒果を以て、以て迦葉に示して、之に語りて言

【二二】弗婆提(Pūrva-videha)。須彌山說に於ける、東方の人間世界。

【二三】菴摩羅(Āmra)。

【二三】瞿陀尼(Godhanya)。須彌山說に於ける、西方の人間世界。

【二四】呵梨勒(Haritaki)。

迦葉の斧既に擧り已りて、又肯て下らず。心に自ら思惟す、『此れ亦當に是沙門の所爲なるべし』と。卽ち佛所に詣り、佛に白して言く、『我が斧已に擧り、復肯て下らず』と。佛卽ち答へて言はく、『汝、還り去るべし。斧自ら當に下るべし』。迦葉卽ち歸れば、斧卽ち下るを得、心に自ら念言す、『年少沙門、復神妙なりと雖も、然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

爾の時、迦葉、卽ち佛に白して言く、『年少沙門、此に止りて、共に梵行を修すべし。房舍衣食は、我當に相給すべし』。時に、世尊、默然として、之を許したまふ。迦葉、佛の許しを知り已りて、其の所住に還り、卽ち勅して、日々、好飲食を辦じ、并に床座を施し、明の食時に至り、自ら行いて佛を請ず。佛言はく、『汝去れ。我後に隨つて往かん』。迦葉適き去る。俄爾の間に、世尊、卽便ち【一九】閻浮洲に至りて【二〇】閻浮果を取り、鉢に滿てゝ、持ち來り、迦葉未だ至らざるに、佛已に先づ到る、迦葉後に來り、佛の已に坐したまふを見、卽便ち問うて言く、『年少沙門、何の道より來り、先づ此に至るか』。佛、鉢中の閻浮果を以て、以て迦葉に示して、之に語りて言はく、『汝、今、此の鉢中の果を識るや不や』。迦葉答へて言く、『此の果を識らず』。佛言はく、『此より南行する、數萬踰闍那にして、彼に一洲あり。其の上に樹あり、名けて閻浮といふ。此の樹あるに緣りての故に、閻浮提といふ。我が此の鉢中のは、是彼の果なり。一念の頃に於て、此の果を取り來る。極めて香美と爲す。汝、之を噉ふべし』。是に於て、迦葉、心に自ら思惟す、『彼の道、此を去る、極めて長遠と爲す。而して此の沙門、乃ち能く俄爾に、已に往還するを得、神通變化、殊に自ら迅速なり。然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

迦葉卽便ち種々の食を下す。佛卽ち呪願したまふ、

婆羅門法中、　火に奉事するを最と爲し、　一切の衆流中、　大海を其の最と爲し、　諸の星宿中　に於て、　月光を其の最と爲し、　一切の光明中、　日照を其の最と爲し、　諸の福

【一九】閻浮洲(Jambu-dvîpa)。須彌山說に於ける南方の人間世界。
【二〇】閻浮(Jambu)。

『此れ必當に是の沙門の所爲なるべし』。卽ち佛所に往き、佛に白して言く、『我、朝に火を燃し、今、之を滅せんと欲するに、肯て滅せず』。佛卽ち答へたまふ、『汝還り去るべし。火自ら當に滅すべし』。迦葉便ち歸りて、火の已に滅するを見、心に自ら念言す、『年少沙門、復神妙なりと雖も、然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

爾の時、迦葉の諸弟子衆、晨朝に薪を破るに、斧肯て擧らず。卽ち迦葉に向つて、具に此の事を說く。迦葉聞き已りて、心に自ら思惟す、『此れ必復是沙門の所爲なり』とて、卽ち弟子と、佛所に來至して、佛に白して言く、『我が諸弟子、朝に薪を破らんと欲するに、斧肯て擧らず』。佛卽ち答へて言はく、『汝還り去るべし。斧自ら當に擧るべし』。迦葉便ち歸りて、諸弟子の斧、皆擧るを得たるを見、自ら念言す、『年少沙門、復神妙なりと雖も、然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

迦葉の弟子、卽ち斧を擧るを得るも、復肯て下らず。還迦葉に向つて、具に此の事を說く。迦葉聞き已りて、心に自ら思惟す、『此れ亦當に是沙門の所爲なるべし』と。卽ち弟子と、往いて佛所に至り、佛に白して言く、『我が諸弟子、旦に薪を破らんと欲し、斧旣に擧るを得るも、復肯て下らず』。佛卽ち答へたまはく、『汝、還り去るべし。當に斧をして下らしむべし』。迦葉旣に歸りて、諸弟子の斧の皆下るを得たるを見、心に自ら念言す、『年少沙門、復神妙なりと雖も、然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

爾の時、迦葉、晨朝時に於て、自ら薪を破らんと欲するに、斧擧るを得ず。心に自ら思惟す、『此れ亦當に是沙門の所爲なるべし』。卽ち佛所に詣り、佛に白して言く、『我、旦に薪を破るに、斧肯て擧らず』。佛卽ち答へて言はく、『汝、還り去るべし。斧自ら當に擧るべし』。迦葉旣に還れば、斧卽ち擧るを得たり。心に自ら念言す、『年少沙門、復神妙なりと雖も、然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

定めて火に事ふ』。佛言はく、『不、大梵天王、夜來りて法を聽けり。是其の光のみ』。是に於て、迦葉心に自ら念言す、『年少沙門、復神妙なりと雖も、然れども、故、我が道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、迦葉の五百の弟子、各[一八]三火に事ふ。晨朝時に於て、倶に火を燃さんと欲するに、火肯て燃えず。皆迦葉に向つて、具さに此の事を說く。迦葉聞き已りて、心に自ら思惟す、『必當に是の沙門の所爲なるべし』。卽ち弟子と、來りて佛所に詣り、佛に白して言く、『我が諸弟子、各三火に事ふ。旦に之を燃さんと欲するに、火燃えず』。佛卽ち答へたまはく、『汝、還り去るべし。火當に自ら燃ゆべし』。迦葉便ち還れば、火の已に燃ゆるを見、心に自ら念言す、『年少沙門、復神妙なりと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり』。

諸弟子衆、火を供養し畢りて、之を滅せんと欲するに、滅せしむる能はず。卽ち迦葉に向つて、具に此の事を說く。迦葉聞き已りて心に自ら思惟す、『此れ亦當に是沙門の所爲なるべし』。卽ち弟子と、來りて佛所に至り、佛に白して言く、『我が諸弟子、朝に火を滅せんと欲して、火滅せず』。佛卽ち答へて言はく、『汝、還り去るべし。火自ら當に滅すべし』。迦葉便ち歸れば、火の已に滅するを見、心に自ら念言す、『年少沙門、復神妙なりと雖も、然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

爾の時、迦葉自ら三火に事ふ。晨朝に火を燃さんと欲するに、肯て燃えず。卽ち自ら思惟す、『此れ必復是の沙門の所爲なり』と。卽ち佛所に往き、佛に白して言く、『我、朝に火を燃すに、肯て燃えず』。佛卽ち答へて言はく、『汝、還り去るべし。火自ら當に燃ゆべし』。迦葉便ち歸りて、火の已に燃ゆるを見、心に自ら念言す、『年少沙門、復神妙なりと雖も、然も、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

時に、迦葉、火を供養し畢りて、之を滅せんと欲するに、滅せしむる能はず。心に自ら思惟す、

【一八】三火。朝・中・暮の三時、火を祀るをいふ。

しめ、三歸依を授けて、鉢中に置き、天明に至り已る。迦葉の師徒、倶に佛所に往き、『年少沙門、龍火猛烈なり。はた此の傷くる所と爲るなきか。沙門の室を借るに、我、昨、相與へざりし所以のものは、正に此が爲のみ』。佛言はく、『我、內、清淨なり、終に彼の外災の爲に害せられず。彼の毒龍は、今、鉢中に在り』。卽便ち鉢を擧げて、以て迦葉に示す。迦葉の師徒、沙門の火に處して燒けず、惡龍を降伏して、鉢中に置けるを見、未曾有と歎じ、弟子に語りて言く、〔一六〕『年少沙門、復神通ありと雖も、然れども、故、〔一七〕我が道の眞なるに如かざるなり』。

爾の時、世尊、迦葉に語つて言はく、『我、今、方に、此の處に停止せんと欲す』。迦葉答へて言く、『善い哉、意の隨なり』。是の時、如來、第二夜に於て、一樹下に坐したまふ。時に四天王、夜、佛所に來りて、共に法を聽き、各光明を放ち、照すこと日月に踰ゆ。迦葉、夜起きて、遙に天光の如來の側に在るを見、弟子に語つて言く、『年少沙門も、亦火に事ふ』と。明日の曉に至り、往いて佛所に詣り、問うて言く、『沙門、汝火に事ふるか』。佛言はく、『不。四天王あり、夜來りて法を聽けり。是其の光のみ』。是に於て、迦葉、弟子に語つて言く、『年少沙門、大神德あり。然れども、故、我が道の眞なるに如かざるなり。

第三夜に至り、釋提桓因來り下りて法を聽き、大光明を放つこと、日の初めて昇るが如し。迦葉の弟子、遙に天光の如來の側に在るを見て、師に白して言く、『年少沙門、定めて火に事ふ』と。明旦に至り、往いて佛所に詣り、沙門に問うて言く、『汝、定めて火に事ふ』。佛言はく、『不。釋提桓因、來り下りて法を聽けり。是其の光のみ』。時に、迦葉、弟子に語つて言く、『年少沙門、神德盛なりと雖も、然れども、故、我が道の眞なるに如かざるなり』。

第四夜に至り、大梵天王、來り下りて法を聽き、大光明を放つこと、日の正に中するが如し。迦葉、夜起きて、光明ありて、如來の側に在るを見、沙門必定して火に事ふとて、明日佛に問ふ、『汝、

【一六】以下「年少沙門、……然故不如我道眞也」を重複すること、二十二回、以てその摧伏し難き我慢を發揮す。

【一七】道眞。神通に對す。神通は不思議の法術なり。道眞は眞實の正道なり。

三十三、化三迦葉

爾の時、世尊、卽便ち思惟したまふ、『我、今、應に何等の衆生を度してか、能く廣く一切の人天を利すべき。唯、〔一三〕優樓頻螺迦葉兄弟三人あり。摩竭提國に在りて、仙道を學び、國王臣民、皆悉く歸信す。又、其の聰明や、利根にして、悟り易し。然れども、其の我慢も、亦摧伏し難し。我、今、當に往いて之を度脫すべし』。是を思惟し已りたまふや、卽ち波羅㮈を發して、摩竭提國に趣き、日將に昏暮れんとして、優樓頻螺迦葉の住處に往きたまふ。時に、迦葉、忽ちに如來の相好莊嚴を見、心大に歡喜して、是の言を作さく、『年少沙門、何所より來れるか』。佛卽ち答へて言はく、『我、波羅㮈國より、當に摩竭提國に詣るべし。日既に晩暮る。一宿を寄せんと欲す』。迦葉又言す、『寄りて宿止するは、甚相違せず。但、諸房舍は、悉く弟子住して、唯石室のみあつて、極めて潔淨と爲す。我が〔一四〕火に事ふるの具、皆其の中にあり。此の寂靜の處、相容るゝを得べし。然れども惡龍ありて、其の內に居在す。恐らくは相害せんのみ』。佛又答へて言はく、『惡龍ありと雖も、但以て借されよ』。迦葉又言す、『其の性、兇暴なり。必、當に、相害すべし。是れ惜むあるに非ず』。佛又答へて言はく、『但以て借されよ。必、辱しむるなからん』。迦葉又言す、『若、能く住せば、便ち住すること意の隨にせよ』。佛、『善哉』と言ひ、卽ち其の夕に於て、石室に入り、結跏趺坐して、三昧に入りたまふ。

爾の時、惡龍、毒心轉盛にして、擧體より烟出づ。世尊、卽ち火光三昧に入りたまふや、龍是を見已りて、火焔天を衝き、石室を焚燒す。迦葉の弟子、先づ此の火を見て、還つて師に白す、『彼の年少沙門の、聰明端嚴なるが、今、龍火の爲に燒害せらる』。迦葉驚き起きて、彼の龍火を見、心に悲傷を懷き、卽ち弟子に勅して、水を以て之に澆ぐに、水滅する能はず、火更に熾盛にして、石室融け盡く。爾の時、世尊、身心動かず、容顏〔一五〕怡然として、彼の惡龍を降して、復毒するなから

【一三】優樓頻螺迦葉(Uruvel-vā-kāśyapa)。

【一四】事火具。三迦葉は事火婆羅門なり。火は、婆羅門敎に於て、神の表現とするものにして、日夕之に奉事する事が、重要なる作法とせらる。

【一五】怡。やはらぐ。

哉、汝が此の事を爲せるは、眞實に快し。既に能く自ら度し、又能く他を度す。汝、今、此に在るが故に、我をして來りて道跡を見るを得しめぬ』。即ち佛前に於て、[八]三自歸を受けたり。是に於て、閻浮提中に、唯、此の長者のみ、[九]優婆塞と爲し、最初に三寶を供養するを獲得ぬ。

爾の時、又、耶舍の朋類、五十の長者子あり。佛の出世したまへるを聞き、又耶舍が、佛法中に於て、出家修道せるを聞き、各自ら念言す『世間に、今、無上尊あり。長者子耶舍、聰慧辨了して、才藝人を兼ねるに、乃ち能く其の豪族を捨て、五欲の樂を棄て、形を毀り志を守りて、沙門と爲れり。我等、今、復何をか顧戀して、出家せざらんや』。是の念を作し已りて、共に佛所に詣る。未だ至らざる間に、遙に如來の相好殊特にして、光明赫奕たるを見て、心大に歡喜し、擧體清涼に、敬情轉至り、即ち佛所に前み、合掌圍遶し、頭面に足を禮す。諸長者子は、[一〇]德本を宿植し、聰達悟り易し。如來、即ち其の所應に隨つて、爲に說法したまふ『善男子、色・受・想・行・識は、無常・苦・空・無我なり。汝、之を知るや不や』。此の語を說き已りたまふ時に、諸長者子、諸法中に於て、遠塵離垢し、法眼淨を得て、即ち佛に答へて言す『世尊、色・受・想・行・識は實に是、無常・苦・空・無我なり。唯願はくは、世尊、我が出家を聽したまへ』。佛、『善來比丘』と言ふや、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と成る。爾の時、世尊、又爲に廣く四諦を說きたまふ。時に、五十の比丘、漏盡意解して、阿羅漢果を得たり。爾の時、始めて五十六の阿羅漢あり。

是の時、如來、諸比丘に告げたまふ『汝等比丘汝等の、所作已に辦じぬ。世間の爲に上福田と作るに堪ふ。宜しく各遊方教化して、慈悲心を以て、諸衆生を度すべし。[一一]我も、今、亦當に獨、[一二]摩竭提國、王舍城中に往きて、諸の人民を度すべし』。諸比丘言さく『善哉、世尊』。爾の時、比丘、頭面に足を禮し、各衣鉢を持ち、辭別して去る。

【八】三自歸。佛・法・僧の三寶に、自ら歸依する誓を爲すをいふ。

【九】優婆塞(Upāsaka)。淸信士。俗身の奉佛者なり。

【一〇】宿植德本。過去世に於て、今世福德を獲べき種を植うるなり。

【一一】我、今亦を、大正大藏經は諸今亦に作る。諸の字恐らくは我の誤なるべし。

【一二】摩竭提國王舍城（Rājagṛha of Magadha)。

——若、能く此の如き者を、——是を眞の出家と爲す。身、曠野に在りて、麁澁を服食すと雖も、意猶五欲を貪ぼるを、是を出家に非ずと爲す。一切善惡を造るは、皆心想より生ず。是の故に、眞の出家は、皆心を以て本と爲す。

爾の時、耶舍、旣に如來の、此の偈を說きたまへるを聞き已りて、心に自ら念言す『世尊の、此の偈を說きたまふ所以のものは、正當に我が猶七寶を著くるを以てなるべし。我、今、宜しく此の如き服を脫すべし』。卽便ち佛を禮し、佛に白して言く『唯願はくは世尊、我に出家を聽したまへ』。佛、『善來比丘』と言ふや、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、卽ち沙門と成る。

爾の時、耶舍の父、旣に天曉に至りて、耶舍を求覓むるに、所在を知らず。心大に懊惱し、悲號啼泣し、路に緣りて、推し尋ね、恒河の側に到り、其の子の屐を見、心に自ら思惟す『我が子、正當に此の道より去りしなるべし』。卽ち其の跡を尋ねて、佛所に至る。爾の時、世尊、其が、子の爲の故に、來りて此に至るを知りたまひ、若、卽ち耶舍を見るを得しめば、必ず大苦を生じて、或は能く命終せんとて、便ち神力を以て、耶舍の身を隱したまふ。其の父、卽便ち前んで佛所に到り、頭面に足を禮し、退いて一面に坐す。是に於て、如來、卽ち其の根に隨つて、爲に說法したまふ、『善男子、色・受・想・行・識の無常・苦・空・無我なるを、汝は之を知るや不や』。時に、耶舍の父、此の言を說きたまへるを聞きて、卽ち諸法に於て、遠塵離垢し、法眼淨を得て、佛に答へて言く『世尊、色・受・想・行・識は、實に是無常・苦・空・無我なり』。爾の時、如來、旣に其が道跡を見て、恩愛の漸く薄きを知りたまひ、之に問うて言はく『汝、何の因緣にて、來つて此に至れるぞ』。其れ卽ち答へて言く、『我に一子あり、名けて耶舍といふ。昨夜の中に、忽ちに所在を失ひ、今旦推し求めて、其の寶屐の、恒河の側に在るを見、足跡を追ひ尋ねて、故に此に來り至る』。爾の時、世尊、其の神力を攝したまふ。其の父、卽便ち耶舍を見るを得て、心大に歡喜し、耶舍に語りて言ふ、『善哉善

卷の第四

三十二、度耶舍

[一]爾の時、長者子あり。名けて[二]耶舍といふ。聰明利根にして、極大巨富なること、閻浮提中、最も第一たり。天冠瓔珞を服し、[三]無價の寶履を著く。其が、中夜に於て、諸の妓女と、相娛樂し已りて、各還つて寢息す。忽ち眠より覺めて、諸の妓女を見るに、或は伏して臥すあり、或は仰いで眠るあり。頭髮蓬のごとく亂れ、涎唾流れ出で、樂器服玩は、顚倒して縱橫す。旣に是を見已りて、厭離の心を生じ、自ら念言して言く『我、今、此の災怪の內にありて、不淨中に於て、妄に淨想を生ず。』是の念を爲す時、天力を以ての故に、空中に光明（あり）、門自然に開く。光を尋ねて去り、鹿野苑に趣（かんと）、路、恒河に由り、高聲に『苦なる哉怪なる哉』と唱へ言ふ。佛言はく『[四]耶舍、汝便ち來るべし。我に、此に、今、離苦の法あり』。耶舍聞き已りて、著くる所の寶屐の、價閻浮提に直るを、卽便ち之を脫して、恒河を渡り、往いて佛所に詣り、三十二相・八十種好・顏容挺特し、威德具足せるを見て、心大に歡喜する、踊躍無量に、[五]五體を地に投じて、佛足を頂禮す『唯、願はくは、世尊、我を救濟したまへ。』佛言はく『善哉、善男子、諦に聽きて善く之を思念せよ』。如來卽便ち其の[六]根に隨順して、爲に說法したまふ、『耶舍、色・受・想・行・識の、無常・苦・空・無我なるを、汝、之を知るや不や』。是の時、耶舍、此の語を說きたまへるを聞きて、卽ち諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得たり。是に於て、如來、重ねて四諦を說きたまふや、漏盡意解し、心に自在を得て、阿羅漢果を成じ、卽ち佛に答へて言く、『世尊、色・受・想・行・識は、實に是れ無常・苦・空・無我なり』。爾の時、如來、猶、耶舍の、嚴身の具を著くるを見たまひ、卽ち偈を說きたまはく、

復、居家に處し、　寶の嚴身具を服すと雖も、　善く[七]諸情根を攝して、　五欲を厭離する、

【一】この一節は耶舍及び其家族及朋友五十人の出家を叙す。
【二】耶舍（Yaśas）。
【三】無價。無上にしてはかりがたき價。
【四】原文。汝便可來、我此今有離苦之法。此今は强めて言へるものにて、こゝに卽今ありの意ならん。
【五】五體投地。頭・二肘・二膝を地につけて禮するをいふ。印度の最敬禮なり。
【六】根。根は力なり。能力のこと。
【七】諸情根。感覺の機關なる眼・耳・鼻・舌・身の五根。

梵・沙門・婆羅門の、轉ずる能はざる所』。爾の時、大地、十八相に動き、天龍八部、虛空中に於て、衆伎樂を作し、天鼓自ら鳴り、衆名香を燒き、諸妙花を散じ、寶幢・幡・蓋・歌唄もて讚歎し、世界の中、自然に大に明なり。

[一五九]阿若憍陳如は、弟子中に於て、始めて悟るを以ての故に、第一の弟子たり。時に、彼の摩訶那摩等の四人、佛の轉法輪を聞き已り、阿若憍陳如が、獨、[一六〇]道跡を悟れるにて、心に自ら念言す、『世尊、若、更に我が爲に說法したまはば、我等も亦當に復道跡を悟るべし』。此の念を作し已りて、尊顏を瞻仰して、目暫くも捨てず。爾の時、世尊、四人の念を知ろして、卽便ち重ねて爲に廣く四諦を說きたまふ。時に、四人、諸法中に於て、亦塵垢を離れて、法眼淨を得たり。時に、彼の五人、道跡を見已りて、佛足を頂禮し、佛に白して言く、『世尊、我等五人、已に道跡を見、已に道跡を證しぬ。我等、今、佛法に於て、出家修道せんと欲す。唯、願はくは、世尊、慈愍もて聽許したまへ』。時に世尊、彼の五人を、『善來比丘』と喚びたまへば、鬚髮自から落ち、袈裟身に著きて、卽ち沙門と成る。

爾の時、世尊、彼の五人に問ひたまふ、『汝等比丘、[一六一]色・[一六二]受・[一六三]想・[一六四]行・[一六五]識の、是常たりや無常たりや、是苦たりや非苦たりや、是空たりや非空たりや、有我たりや無我たりやを知るか』。時に、五比丘、佛の、是の五陰の法を說きたまふを聞き已りて、漏盡き意に解して、阿羅漢果を成じ、卽便ち答へて言く、『世尊、色・受・想・行・識は、實に是れ[一六六]無常・[一六七]苦・[一六八]空・[一六九]無我なり』。是に於て、世間に始めて六阿羅漢あり。佛阿羅漢は、是れ佛寶たり、四諦の法輪は、是れ法寶たり、五阿羅漢は、是れ僧寶たり。是の如く、世間に三寶具足して、諸の天人の第一[一七〇]福田たり。

過去現在因果經卷第三

れ。煩惱のこと。

【一五七】法眼淨。或は淨法眼、清淨法眼に作る。四諦の理を分明に見るをいふ。四沙門果中の初果のこと。

【一五八】阿迦膩吒(Akaniṣṭha)。色究竟と譯す。色界十八天中の最上位に在り。

【一五九】この一節は、五比丘を度せるを叙す。

【一六〇】道跡。僧肇曰く「法眼淨、須陀洹道也。始見二道跡一故、得二法眼名一」。初果のこと。

【一六一】色(Rūpa)。有形の物質。

【一六二】受(Vedanā)。感受作用。

【一六三】想(Saṃjñā)。想知作用。

【一六四】行(Saṃskāra)。意志作用。

【一六五】識(Vijñāna)。了別識知、及びその體。以上の五を五陰又は五蘊といふ。蘊(Skandha)、も陰も、積集の義。有爲法はすべて積集によりて成り又作用するを以てなり。

【一六六】無常。諸行の無常。

【一六七】苦。一切の皆苦。

【一六八】空。一切の皆空。

【一六九】無我。諸法の無我。これ等を法印といふ。合して四法印とし、以て、佛教たる印(標幟)とす。

【一七〇】福田。供養すれば、福德を生ずること、田地の穀物を生ずるが如きをいふ。佛又は僧を喩ふ。

き苦あらざる者なし。譬へば、灰を以て火上に覆はんに、若、乾草に遇へば、還復、燒燃するが如し。是の如く、諸苦はに[一四八]「我」出るを本と爲す。若、衆生あり、微我の想を起せば、還復、更に此の如きの苦を受く。貪欲・瞋恚・及以び愚癡は、皆悉く「我」の根本に緣りて生ず。又此の三毒は、是諸苦の因なり。猶、種子の能く芽を生ずるが如し。衆生は是を以て三有に輪迴す。若、我想及び貪・瞋・癡を滅せば、諸苦亦皆此よりして斷ず。悉く彼の八正道に由らざるなし。人の、水を以て盛火に澆ぐが如し。一切衆生は、諸苦の根本を知らず、皆悉く輪迴して、生死に在り。憍陳如よ。[一四九]苦は應に知るべし、[一五〇]習は當に斷ずべし、[一五一]滅は應に證すべし、[一五二]道は當に修すべし。憍陳如よ、我は苦を知り、以て習を斷じ、以て滅を證し、以て道を修するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。是の故に、汝、今、應當に苦を知り、習を斷じ、滅を證し、道を修すべし。若、人、[一五三]四聖諦を知らずば、當に知るべし、是の人の、解脫を得ざるを。四聖諦は、是れ眞、是實なり。苦は實に是れ苦、習は實に是れ習、滅は實に是れ滅、道は實に是れ道なり。憍陳如よ、汝等解せりや未だしや』。憍陳如言く、『解し已る、世尊。知り已る、世尊』。四諦に於て、解知を得たるを以ての故に、故に[一五四]阿若憍陳如と名く。

佛、四諦[一五五]十二行の法輪を三轉したまへる時に當り、阿若憍陳如は、諸法中に於て、[一五六]塵に遠かり垢を離れて、[一五七]法眼淨を得たり。時に、虛空中の、八萬那由他の諸天も、亦塵垢を離れて、法眼淨を得たり。

爾の時、地神、如來が、其の境界に在りて法輪を轉じたまへるを見て、心大に歡喜し、高聲に唱へて言く、『如來、此に於て、妙法輪を轉じたまふ』。虛空の天神、既に此の言を聞きて、又踊躍を生じ、展轉の唱聲、乃ち[一五八]阿迦膩吒天に至る。諸天聞き已りて、欣悅無量、高聲に唱へて言く、『如來、今日、婆羅㮈國、鹿野苑中、仙人住處に於て、大法輪を轉じたまふ。一切世間の天・人・魔・

【一四八】我。自己に實體ありと爲し、自他を分たしむる根本主體。これを本として三毒あり。我と三毒とを合して、習とす。これ苦果を生ずる原因なり。

【一四九】苦（Duḥkha）。三界六趣の苦報。

【一五〇】習(Samudaya)。苦報を集起する原因。

【一五一】滅(Nirodha)。寂滅涅槃の果報。

【一五二】道(Mārga)。涅槃に通入せしむる八正道。以上を合して四諦といふ。

【一五三】四聖諦（Catvāri-ārya-satyāni)。聖者所見の四個の眞理。

【一五四】阿若(Ājñāta)。已知の義。

【一五五】三轉十二行。三轉とは、示轉・勸轉・證轉なり。示轉とは、苦は實に是苦、云云と示すをいふ。勸轉とは苦は當に斷ずべし、云云と勸むるをいふ。證轉とは、我は苦を知り、云云を證を示すをいふ。十二行の解釋に二種あり。一は數の十二にして、四諦の一一に示・勸・證の三轉ありて、十二の敎となるをいふ。二は行の十二にして、三轉の一一に眼・智・明・覺の四智を生ずるをいふ。

【一五六】塵も垢も、共に、けが

言はく、『汝等共に我を見るも起たずと約せるに、今、何が故に、先に誓へる所に違ひ、卽ち驚き起ちて、我が爲に事を執るぞ』。時に彼の五人、佛の此の語を聞きて、深く慚愧を生じ、卽ち前んで白して言く、『瞿曇、道を行きて疲惓なきを得たりや』。爾の時、世尊、五人に語りたまはく、『汝等、云何ぞ無上尊に於て、高情を以て、姓を稱へ喚ぶか。我が心は空の如く、諸の毀譽に於て、分別する所なし。但汝が憍慢、自ら惡報を招く。譬へば、子有り、父母の名を稱するは、世儀の中に於て、猶尙不可なるが如し。況んや、我は、今、是、一切の父母たるをや』。時に彼の五人、又此の語を聞きて、倍慚愧を生じて、佛に白して言く、『我等愚癡にして、慧識あるなく、今、已に正覺を成じたまへるを知らず。所以は何ん。往に如來が、日に麻米を食ひ、苦行六年にして、今還つて飮食の樂を受くるを見たり。我、是を以ての故に、道を得ずと謂へり』。爾の時、世尊、憍陳如に語りて言はく、『汝等、小智を以て、輕しく、我が道の成ぜると成ぜざるとを量るなかれ。何を以ての故に。形、苦にあれば、心則ち惱亂し、身、樂に在れば、情則ち樂著す。是を以て、苦樂は兩ながら道の因にあらず。譬へば、火を鑽るに、之に澆ぐに水を以てすれば、則ち必破暗の照あるなきが如し。智慧の火を鑽るも、亦復、是の如し。苦樂の水あれば、慧光生ぜず、生ぜざるを以ての故に、生死の黑障を滅する能はず。今、若、能く苦樂を棄捨して、[一四六]中道を行ぜば、心則ち寂定して、能く彼の八正聖道を修して、生老病死の患を離るゝに堪ふ。我、已に中道の行に隨順して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得たり』。時に、彼の五人、既に如來の此の如きの言を聞きて、心大に歡喜して、踊躍無量、尊顏を瞻仰して、目、暫くも捨てず。

爾の時、世尊、五人の根が、道を受くるに堪任ふるを觀じて、之に語りて言はく、『憍陳如よ、汝等當に知るべし。[一四七]五盛陰苦・生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦・怨憎會苦・所求不得苦・失榮樂苦は、憍陳如よ、有形も、無形も、無足なる、一足なる、二足・四足・多足なる、一切の衆生、悉く此の如

【一四六】中道。(Majjhimāpaṭipadā)。不苦不樂の中道にして、實修上に名くるものなり。「般若經」に至りて、この語は、諸法の實相を表はすものとなり、其後佛教々義の中心題目となれり。後に頻王に對する說法中に、この意味の中道が見らる。

【一四七】五盛陰苦とは、勢力熾盛なる五陰（色・受・想・行・識即ち人身組織の成分）に受くる者。卽ち心身に受くる苦を總じていふ。五盛陰苦、乃至、所求不得苦を、普通に八苦と爲す。ここの文勢を案ずるに、五盛陰苦を開きて、生老病死の四苦と爲し、これに愛別離苦以下の四苦を加へて、八苦とするものゝ如し。

三十、目眞龍王

【一三五】爾の時世尊、卽ち復前行し、次で阿闍婆羅水の側に到り、日暮止宿して便ち定に入りたまふ。爾の時に當り、七日風雨あり。時に彼の水中に、大龍王あり、【一三六】目眞隣陀と名く、佛の入定を見て、卽ち其の身を以て、圍遶七匝する、滿七日已りて、時に、彼の龍王、化して人形と爲り、頭面に足を禮して、佛に白して言く、【一三七】『世尊、此に在して、七日の中、乃ち甚風雨を患ひたまふに至らずや』。

爾の時、世尊、偈を以て答へたまはく、

諸天及び世人は、　五欲を歡ぶ所なるも、　我が禪定の樂に比するに、　譬喩と爲すべからず。

時に、彼の龍王、佛の此の偈を聞き、歡喜踊躍し、頭面に足を禮して、所止に還歸る。

三十一、度五比丘

【一三八】爾の時、世尊、卽ち復前行して、婆羅㮈國に往き、【一三九】憍陳如・【一四〇】摩訶那摩・【一四一】跋波・【一四二】阿捨婆闍・【一四三】跋陀羅闍の止住せる所の處に至りたまふ。時に彼の五人、遙に佛の來りませるを見て、共に相謂つて言く、『沙門【一四四】瞿曇、苦行を棄捨し、還り退いて飲食の樂を受け、復道心なし。今、旣に此に來る。【一四五】我等、須く起つて之を迎ふべからず。亦、禮敬を作し、所須を問ひ、爲に坐處を敷く勿らん。若、坐せんと欲せば、自ら其の意の隨なり』。此の語を作し竟りて、各、默然たり。爾の時、世尊、來りて旣に至り已るや、五人覺えず各坐より起ちて、禮拜奉迎し、互に爲に事を執る。或は復爲に衣鉢を持つ者あり。或は水を取りて盥漱に供ふる者あり。或は復爲に脚を澡洗する者あり。各本誓に違ふも、猶故のごとく、佛を稱して以て瞿曇と爲す。爾の時、世尊、憍陳如に語つて

【一三五】目眞龍王の保護を叙す。
【一三六】目眞隣陀(Mucilinda)。
【一三七】(原文)世尊在此、七日之中、不至乃甚患風雨耶。
【一三八】この一節は、鹿野苑の初轉法輪を叙す。
【一三九】憍陳如(Kauṇḍinya)。
【一四〇】摩阿那摩(Mahānāma)。
【一四一】跋波(Vāpa)。
【一四二】阿捨婆闍(Aśvajit)。
【一四三】跋陀羅闍(Bhadrajit?)。普通に(Bhadrika)に作る。
【一四四】瞿曇(Gautama)。釋尊の姓なり。
【一四五】(原文)我等不須起迎之也、亦勿作禮敬問所須爲敷坐處、若欲坐者自隨其意。

ば、當に今施す所の福を以て、還つて人天に生じ、邪見を起さず、功德を增進し、常に諸佛如來に近づき奉るを得、妙說を聞くを得、諦を見、證を得て、所願具足せしむべし』。

爾の時、世尊、呪願し訖已りて、卽便ち食を受け、食既に畢竟りて、澡漱して鉢を洗ひ、卽ち商人に三歸を授けたまふ。一に歸依佛、二に歸依法、三に歸依將來僧なり。三歸を授け竟りて、因りて之と別れて、便ち前行したまふ。威儀庠序、步、鵝王の如し。

二十九、優波伽外道

【一三二】路に外道の【一三三】優波伽と名くるに逢ひたまふ。既に如來の相好莊嚴、諸根寂定なるを見て、歎じて奇特と爲し、卽ち偈を說きて言はく、

世間の諸衆生、　皆三毒に縛せられ、　諸根、又輕躁、　外境に馳蕩す。　而るに今、仁者を見るに、　諸根極めて寂靜なり、　必、解脫の地に到れること、　決定して疑あるなし。　仁者の學せる所の師、　其の姓字は何等ぞ。

爾の時、世尊、偈を以て答へたまはく、

我、今、已に一切衆生の表に超出し、　微妙深遠の法を、　我今已に具に知る。　三毒五欲の境、　永く斷じて【一三四】餘習なきこと、　蓮花の水に在りて、　濁水の泥に染まざるが如し。　自ら八正道を悟り、　師なく等侶なく、　清淨智慧を以て、　大力の魔を降伏し、　今、正覺を成ずるを得て、天人の師と爲るに堪ふ。　身口意滿足す。　故に號して牟尼と爲す。　婆羅㮈に趣きて、甘露の法輪を轉ぜんと欲す。　是天・人・魔・梵の、轉ずる能はざるべき所なり。

爾の時、優波伽、此の偈言を聞きて、心に歡喜を生じ、未曾有と歎じ、合掌恭敬し、圍遶して去り、迴顧瞻矚し、見えずして乃ち止みぬ。

【一二七】鉢多羅(Patra)。應器と譯す。出家の食器にして唯一個のみを有すべし。

【一二八】四天王。東方持國天(Dhṛtarāṣṭra)。南方增長天(Virūḍhaka)。西方廣目天(Virūpākṣa)。北方多聞天(Vaiśravaṇa)。

【一二九】按令成一、使四際現。四鉢を累ねて一と成し、緣に際限ありて、四個なるを明ならしめるなり。

【一三〇】臛は宋・元・明の三本に捨に作る。前の牧牛女の乳糜供養の下に同じ呪願あり。

【一三一】(原文)若有命過墮惡道者。命過とは、生命が過ぎ去る事ならん。

【一三二】この一節は優波伽外道との問答を叙す。

【一三三】優波伽(Upaka)。

【一三四】無餘習。三毒・五欲を斷じ盡して、後にのこる習性。

惟し已りて、卽ち座より起ちて、婆羅捺國に詣りたまふ。

二十八、二商供養

爾の時、五百の商人あり。二人主たり。一を跋陀羅斯那と名け、二を跋陀羅梨と名く。行いて曠野を過ぐ。時に、天神あり、之れに語りて言ふ、[一一五]如來・[一一六]應供・[一一七]正遍知・[一一八]明行足・[一一九]善逝・[一二〇]世間解・[一二一]無上士・[一二二]調御丈夫・[一二三]天人師・[一二四]佛・[一二五]世尊ありて、世に出興したまひ、最上の[一二六]福田たり。汝、今、宜しく應に最も前に供を設くべし』。時に彼の商人、天語を聞き已りて、卽ち之に答へて曰く、『善い哉、告の如くせん』。又天に問うて言く、『世尊、今、何許に在るとか爲す』。天又報へて言く、『世尊、久しからずして、當に此に來至したまふべし』。是に於て、如來、無量の諸天の與に、前後に導從せられて、多謂婆跋利村に到りたまふ。時に、彼の商人、旣に如來の威相莊嚴を見、又、諸天の前後に圍遶するを見て、倍歡喜を生じ、卽ち蜜麨を以て、佛に奉上る。爾の時、世尊、心に自ら思惟したまふ、『過去の諸佛は、[一二七]鉢多羅を用つて、以て食を盛りたまへり』。時に、[一二八]四天王、佛の心念を知り、各一鉢を持ちて、佛所に來至し、以て奉上る。是に於て、世尊、自ら念言したまふ、『我、今、若、一王の鉢を受けば、餘王は、必、當に恨心を生ずべし』とて、卽便ち普く四王の鉢を受けまし、累ねて掌上に置き、[一二九]按じて一と成らしめ、四際を現ぜしむ。

爾の時、世尊、卽便ち呪願したまふ、『今、布施する所は、食者をして、氣力を充すを得しめんと欲す。當に施者をして、色を得、力を得、[一三〇]膽を得、喜を得、安快無病にして、終に年壽を保ち、諸善鬼神、恒に、隨つて守護せしむべし。飯食の布施は、三毒の根を斷ち、將來當に三堅法の報を獲べし。聰明智慧にして、篤く佛法を信じ、在々の所生、正見不昧にして、現世の中、父母妻子、親戚眷屬、皆悉く熾盛に、諸の災怪不吉祥の事なく、門族の中、[一三一]若、命過して、惡道に墮するなら

【一一五】如來(Tathāgata)。如より來生する意。この以下佛の十號なり。
【一一六】應供(Arhat)、人天の供養に應ずべき意。
【一一七】正遍知（Samyaksaṁbuddha)。正しく遍ねく知る意。
【一一八】明行足（Vidyācaraṇa-sampanna)。三明の行の具足する意。
【一一九】善逝(Sugata)。善く涅槃に入れる意。
【一二〇】世間解(Lokavit)。世間の一切を解了する意。
【一二一】無上士(Anuttara)。一切衆生中、無上の大人なる意。
【一二二】調御丈夫（Puruṣa-damyasārathi)。丈夫を方便調御する意。
【一二三】天人師(Śāstā-devamanuṣyāṇāṁ)。人間天上の導者の意。
【一二四】佛(Buddha)。覺者の意。
【一二五】世尊(Lokanātha)。十號を具足して世に尊重せらるる意。
【一二六】福田。將來の福德を生ずべき處。田が穀物を生ずるに比して、如來又は比丘を福田といふ。

『諸衆生の爲に、大法輪を轉じたまへ』。爾の時、世尊、大梵天王、及び釋提桓因等に答へて言はく、『我も亦一切衆生の爲に、法輪を轉ぜんと欲す。但所得の法や、微妙甚深にして、解し難く、知り難し。諸衆生等、信受する能はず、誹謗の心を生じて、地獄に墮せん。我、今、此れが爲の故に、默然たるのみ』。時に梵天王等、乃ち三たび請ひまつるに至り、爾の時、如來、滿七日に至りて、默然として之を受けたまふ。梵天王等、佛の請を受けたまへるを知り、頭面に足を禮して、各所住に還る。

二十七、向鹿野苑

爾の時、世尊、梵天王等の請を受け已りて、又七日に於て、[一二三]佛眼を以て、諸衆生の上中下の根、及諸煩惱の、亦下中上を觀じたまひて、滿二七日なり。爾の時、世尊、又復思惟したまふ、『我、今、當に甘露の法門を開くべし。誰か應に先に在りて聞くを得べき者ぞ。阿羅邏仙人は、聰慧にして悟り易く、又先に道成ぜば我を度したまへと發願せり』。是の念を作したまへる時、空中に言あり、『阿羅邏仙人、昨夜命終す』と。爾の時、世尊、卽便ち彼の空中の聲に答へて言はく、『我も亦其が昨夜命終せるを知る』。又自ら思惟したまふ、『迦蘭仙人は、利根明了なり。亦應に先に聞くべし』。空中に又言ふ、『迦蘭仙人、昨夜命終す』と。爾の時、世尊、卽ち復答へたまはく、『我も亦其が昨夜命終せるを知る』。爾の時、世尊、又自ら思惟したまふ、『彼の王師・大臣の遣はせる所の、憍陳如等の五人、我を瞻視せるもの、皆悉く聰明にして、又過去世に、我に於て應に先づ法を聞くべきを發願せり。我、今、宜しく此の五人の爲に、先づ法門を開くべし』。又自ら思惟したまふ、『古昔、諸佛の轉法輪處は、皆悉く[一二四]波羅㮈國、鹿野苑中、仙人住處に在り。又此の五人の、止住する所の處も、亦彼處に在り。我、今、應に往いて其の住處に至り、大法輪を轉ずべし』。是を思

互跪とせらる。

【一二三】佛眼。五眼の第一。五眼とは、肉眼・天眼・法眼・慧眼・佛眼なり。

【一二四】波羅㮈國、鹿野苑。(Mṛgadāva of Vārāṇasī)。婆羅門は、今のベナレスなり。

佛と佛とのみ、乃ち能く之を知る。一切衆生、〔一〇九〕五濁の世に於て、貪欲・瞋恚・愚癡・邪見・憍慢・諂曲の爲に覆障せられ、薄福鈍根にして、智慧あるなし。云何ぞ能く我が所得の法を解せん。今、我、若、〔一一〇〕轉法輪を爲さば、彼、必、迷惑して、信受する能はず、誹謗を生じて、當に惡道に墮し、諸の苦痛を受くべし。我、寧、默然として般涅槃に入らん』。

爾の時、如來、偈を以て頌して曰はく、

聖道は甚だ登り難く、　智慧の果は得難し。　我、此の難中に於て、皆悉く已に能く辨ぜり。
我が所得の智慧は、　微妙、最第一なり。　衆生は諸根鈍にして、　樂に著し、　癡に盲ひられ、　生死の流に順ひ、　其の源に反る能はず。　斯の如き等の類、　云何ぞ度すべき。

爾の時、如來、此の念を作し已るや、大梵天王、如來の、聖果已に成じて、默然として住し、法輪を轉じたまはざるを見て、心に憂惱を懷きて、即ち自ら念言す、『世尊、昔、無量億劫に於て、衆生の爲の故に、久しく生死に在り、國城・妻子・頭目・髓腦を捨て、備に衆苦を受け、始めて今に於て所願滿足して、阿耨多羅三藐三菩提を成じつゝ、云何ぞ默然として說法したまはざるか。衆生は、〔一一一〕長夜、生死に沈沒するを。我、今、當に往いて法輪を轉ぜんを請ひまつるべし』。是の念を作し已りて、即ち天宮を發して、猶、壯士の臂を屈伸する如き頃に、如來の所に至り、頭面に足を禮し、遶ること百千匝にして、却いて一面に住し、〔一一二〕胡跪合掌して佛に白して言く、『世尊、往昔、衆生の爲の故に、久しく生死に住し、身頭目を捨てゝ、以用て布施し、備に諸苦を受け、廣く德本を修し、始めて今に於て無上道を成じつゝ、云何ぞ默然として說法したまはざる。衆生、長夜、生死に沒溺し、無明の暗に墮し、出期甚だ難し。然るに、衆生あり。過去世の時、善友に親近し、諸の德本を植ゑ、法を聞きて、聖道を受くるに堪任ふ。唯願はくは、世尊、斯れ等の爲の故に、大悲力を以て、妙法輪を轉じたまへ』。釋提桓因、乃至、他化自在天も、亦復、是の如く、如來に勸請す、

大は等の六種なり。例せば、動・偏動・等動の如し。
【一〇〇】曼陀羅花(Mandārava)。
【一〇一】摩訶曼陀羅花 (Mahāmandārava)、
【一〇二】曼殊沙花(Mañjūṣaka)。
【一〇三】摩訶曼殊沙花 (Mahāmañjūṣaka)。
【一〇四】菩提樹(Bodhidruma)。
【一〇五】聖迹。聖道なり。
【一〇六】離喜樂根。五淨居天に喜樂根なきは、前の阿羅邏仙との問答の下に叙せり。
【一〇七】十善。十惡なきなり。十惡とは、殺生・偸盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見なり。この十善は天子に生るゝの業因とせらる。
【一〇八】漏。けがれ。身口よりもれて善根をけがす意。煩惱の異名。
【一〇九】五濁。劫・見・煩惱・衆生・命の濁りけがるゝをいふ。
【一一〇】轉法輪。說法のこと。法の說かるゝ處、一切の障礙を摧破せざるなきを、輪寶の轉ずる處、一切を摧破せざるなきに喩ふ。
【一一一】長夜。無始以來未だ曾て無明を離れざるをいふ。
【一一二】胡跪。右膝を地に着け、左膝を竪てゝ危坐するなり。胡人の敬相にして、これに左跪長跪の二種あり。前揭のものは或は左跪とせられ、又は

て、柔軟清淳に、雜色の瑞雲より、甘露を雨を降し、園林の花果、榮ゆるに時を待たず。又、[一〇〇]曼陀羅花・[一〇一]摩訶曼陀羅花・[一〇二]曼殊沙花・[一〇三]摩訶曼殊沙花・金花・銀花・琉璃等の花・七寶の蓮花を雨らし、[一〇四]菩提樹を遶ること、滿三十六踰闍那なり。是の時諸天、天伎樂を作し、散花燒香し、歌唄讃嘆し、天の寶蓋、及以び幢幡を執り、虛空に充塞して、如來を供養す。龍神八部の、設くる所の供養も、亦復、是の如し。

爾の時に當り、一切衆生、皆悉く慈愛ありて、瞋害の想なく、歡喜踊躍して、[一〇五]聖跡を見るが如く、怖畏の情なくして、其の心調柔に、憍慢の意を離れ、亦慳嫉諂誑の心なし。五淨居天、[一〇六]喜樂根を離るゝも、亦皆歡悅して、自ら勝ふる能はず。地獄の苦痛、暫く休息を得て、大歡喜を生じ、一切の畜生、相食噉する者、復惡心なく、餓鬼飽滿して、飢渴の想なし。世界の中、幽瞑の處、日月の威光の照す能はざる所、皆大に明なり。其の中の衆生、悉く相見るを得て、各是の言を作す、『此の中、云何ぞ忽ち衆生あるか。大聖法王、世に出興し、大法の光を以て、非法の暗を破るが故に、一切をして、皆悉く明朗ならしむ』。甘蔗先王の、國を棄て道を學して、五通仙を得、又[一〇七]十善を行じて、天に生るゝを得たるもの、皆神通に乘じて、菩提樹に到り、虛空中に在りて、歡喜合掌し、而して讃歎して言く、『我が甘蔗種族の中に於て、能く[一〇八]諸漏を斷じ、一切智を成じて、世間の眼たるは、甚、奇特たり』とて、一切、歡喜踊躍せざるなし。唯、魔王のみ有りて、心に獨、憂愁す。

二十六、梵天勸請

爾の時、如來、七日中に於て、一心に思惟し、樹王を觀て、自ら念言したまふ、『我、此の處に在りて、一切の漏を盡し、所作已に竟り、本願成滿す。我が所得の法や、甚深にして解し難く、唯、

【九四】識 Vijñāna)。過去の行業によりて受くる、現在受胎の初一念。
【九五】行(Saṁskāra)。善惡の行業。
【九六】無明(Avidyā)。無始の迷惑無智。
【九七】無明滅。迷の緣りて起る經路を知る時は、やがてその中に悟の緣りて來るべき經路を見出す。これにも逆順兩觀あり。現苦の滅すべき理由を求めて、最後に無明滅に至るは、逆觀なり。無明滅によりて、乃至現苦の滅に至るは、順觀なり。
【九八】八正聖道(Āryāṣṭāṅga-mārga)。
正見。四諦の理を正しく見ること。
正思惟。四諦の理を正しく觀察すること。
正語。不實の語なきこと。
正業。身の三惡業を離るゝこと。
正命。正法に隨順して生活すること。
正精進。一心專念に努力すること。
正念。正法を憶念して忘れざること。
正定。清淨の禪定に入ること。
【九九】十八相動。六種震動に、各、小中大の三種あり。小は普通の六種、中は徧の六種、

の如く思惟して、中夜盡くるに至りぬ。

爾の時、菩薩、第三夜に至りて、衆生性は、何の[八四]因緣を以て、[八五]老死あるかを觀じて、即ち老死は[八六]生を以て本と爲し、若、生を離るれば、則ち老死なく、又復、此の生は、天より生ぜず、自より生ぜず、緣なくして生ずるに非ず、因緣よりして生じ、[八七]欲有・色有・無色有の業に因りて生ずるを知りぬ。又三有の業の、何よりして生ずるかを觀じて、即ち、三有の業の[八八]四取より生ずるを知りぬ。又復四取の、何よりして生ずるかを觀じて、即ち、四取の、[八九]愛よりして生ずるを知りぬ。又復、愛の何よりして生ずるかを觀じて、即便ち愛の[九〇]受よりして生ずるを知りぬ。又復、受の何よりして生ずるかを觀じて、即便ち、受の[九一]觸よりして生ずるを知りぬ。又復、觸の何よりして生ずるかを觀じて、即便ち、觸の[九二]六入よりして生ずるを知りぬ。又、六入の何よりして生ずるかを觀じて、即ち六入の[九三]名色より色生ずるを知りぬ。又名色の何よりして生ずるかを觀じて、即ち名色の[九四]識よりして生ずるを知りぬ。又復、識の何よりして生ずるかを觀じて、即便ち識の[九五]行よりして生ずるを知りぬ。又復、行の何よりして生ずるかを觀じて、即便ち行の[九六]無明より生ずるを知りぬ。

若、[九七]無明を滅すれば、則ち行滅し、行滅すれば、則ち識滅し、識滅すれば、則ち名色滅し、名色滅すれば、則ち六入滅し、六入滅すれば、則ち觸滅し、觸滅すれば、則ち受滅し、受滅すれば、則ち愛滅し、愛滅すれば、則ち取滅し、取滅すれば、則ち有滅し、有滅すれば、則ち生滅し、生滅すれば、則ち老死憂悲苦惱滅す。是の如く、逆順に、十二因緣を觀じ、第三夜分に至りて、無明を破り、明相出づる時、智慧の光を得、習障を斷じて、一切種智を成じぬ。

爾の時、如來、心に自ら思惟したまふ、『[九八]八正聖道は、是三世諸佛の履み行きて、般涅槃に趣きたまへる所の路なり』我、今、已に踐み、智慧通達して、罣礙する所なし。

時に、大地、[九九]十八相に動き、遊霞飛塵、皆悉澄淨し、天鼓自然に妙聲を發し、香風徐に起り

【八四】 以下十二因緣 (Dvādaśāṅga-pratītyasamutpāda)。逆觀順觀を叙す。無明より次第に現實の苦の緣起せるを觀ずるは、順觀なり。現實の苦が如何にして緣起せるかを觀じて無明に終歸するは、逆觀なり。以上は迷のよりて來る上につく。悟のよりて起るにつきても、順逆兩觀あるべし。

【八五】 老死(Jarāmaraṇa)。

【八六】 生(Jāti)。天より生ずるとするは一因說又は邪因說なり。自より生ずとあるは、無因說又は自然說なり。因緣より生ずとするは佛敎の因緣說なり。業とは羯磨Karmaの譯にて所作なり。業は因なり。

【八七】 有(Bhava)。未來の存在を定むる業。存在に欲・色・無色の三種あるを、三有といふ。

【八八】 四取(Upādāna)。愛するものに對する欲求。欲・見・戒・我語の四種を、四取といふ。

【八九】 愛(Tṛṣṇa)。樂境に對する渴愛。

【九〇】 受(Vedanā)。苦樂の感受。

【九一】 觸(Sparśa)。外物との接觸。

【九二】 よりて之を識別す。六入又は六處(Ṣaḍāyatana)。六根の具足。

【九三】 名色(Nāma-rūpa)。心・身分離の初位。

老死に歸し、更に嬰兒と爲りて、五道に輪轉し、自ら悟る能はず。菩薩見已りて、大悲心を起して、自ら思惟す、『衆生 皆斯の如きの患あり、云何ぞ中に於て、五欲に耽著し、横に計して樂と爲し、顚倒の根本を斷ずる能はざるぞ』。

爾の時、菩薩、次に諸天を觀じて、彼の天子を見るに、其の身清淨にして、塵垢を受けざること、眞の瑠璃の如く、大光明あり、兩目瞬かず。或は居して須彌山の頂に在るあり。或は復、居して須彌の四鎭※に在り、或は復、居して虛空の中に在り。心常に歡悅して、不適[八二]の事なし。天の美樂を奏し、以て自ら娛樂して、晝夜を識らず。四方諸趣、絶妙ならざるなし。東を視て耽著し、歲を彌りて轉ずるを忘れ、西を瞻て耽湎し、年を經て迴らず、乃至南北も、皆亦是の如し。飮食衣服、念に應じて卽ち至る。此の如き適意の事ありと雖も、猶、欲火の爲に煎燋せらる。又、彼の天福盡くる時に、[八三]五死相の現ずるを見る。一には、頭上の花萎む。二には、眼瞬く。三には、身上の光滅す。四には、腋下より汗出づ。五には、自然に本座を離る。其の諸眷屬、天子の身に、五死相の現ずるを見て、心に戀慕を生ず。天子も、亦復、自ら己が身に、五死相あるを見、又眷屬の、己を戀慕するを見、爾の時に當りて、大苦惱を生ず。菩薩既に彼の諸天子に、是の如き事あるを見、大悲心を起して、自ら思惟す、『此の諸天子は、本少善を修して、天の樂を受くるを得たるも、果報將に盡んとして、大苦惱を生じ、旣に命終し已りて、彼の天身を捨てゝ、或は三惡道中に墮するあり。本、善行を造り、爲に樂報を求めしに、今の得る所、樂少く苦多し。譬へば、飢ゑたる人の、雜毒の食を噉ふ、初は美と爲すと雖も、終に大患を成すが如し。云何ぞ智者、此を貪り樂しまんや。色・無色界の諸天は、壽命の長きを見て、便ち常樂と謂ふも、旣に變壞を見れば、大苦惱を生じ、卽ち邪見を起して、因果なしと謗る、此の事を以ての故に、三塗に輪迴して、備に諸苦を受く。菩薩、天眼力を以て、五道を觀察し、大悲心を起して、自ら思惟す、『三界の中、一の樂あるなし』と。是

※四鎭。四方の要處、卽ち四天王の居所なり。
【八二】不適事。心にかなはぬ事。
【八三】五死相。天人の五衰なり。

を見已りて、心に思惟す、『此等の衆生、本惡業を造り、世樂の爲の故に、今、果を得ること、極めて大苦と爲す。若、人、此の如き惡報を見るあらば、復更に應に不善の想を作すべき無からん』。

爾の時、菩薩、復畜生を觀ずるに、種々の行に隨つて、雜醜の形を受く。或は復、骨肉筋角皮牙毛羽の爲に、殺を受くる者あり、或は復人の爲に、重擔を荷負し、飢渴乏極して、人知るなき者あり。或は其の鼻を穿ち、或は其の首を[八〇]鉤し、常に身肉を以て、人に供へ、還つて其の類と、更相食噉す。是の如き種々の苦を受く。菩薩既に見て、大悲心を生じて、即ち自ら思惟す、『斯等の衆生、恒に身力を以て、人に供へ、又楚撻飢渴の苦を加ふ。皆是本惡行を修せる果報なり』。

爾の時、菩薩、次に餓鬼を觀じて、其の恒に黑闇の中に居て、未だ曾て暫くも日月の光を覩ず、還、是、其の類の、亦相見ざるを見る。形を受くる長大、腹は太山の如く、咽頸は針の若く、口中に恒に大火ありて熾燃し、常に飢渴の爲に燋迫せられ、千億萬歲、食聲を聞かず。設、天雨の、其の上に灑ぐ者に値ふも、變じて火珠と成る。或は、時に、*過ぎて江海河池に臨むに、水即ち化して熱銅燋炭と爲る。動身擧步の聲、人の五百乘の車を牽くが如く、支體節々、悉く皆火然す。菩薩既に是の如き等の種々の諸苦を受くるを見て、大悲心を起して、自ら思惟す、『斯等、皆、本、慳貪を造し、財を積んで施さゞるが爲の故に、今、斯の罪報を受けしむ。若、人、彼が此の苦痛を受くるを見ば、宜しく應に惠施して、悋惜を生ずる勿るべし。設、財なからしめば、亦、應に肉を割きて、以用て布施すべし』。

爾の時、菩薩、次に復人を觀じて、[八一]中陰より、始めて入胎せんと欲するを見る。父母和合して、顚倒想を以て、愛心を起すや、即ち不淨を以て、已が身と爲し、既に胎に處し已りて、生熟*二藏の間に在り、身體を熏炙すること、地獄の苦の如し。滿十月に至りて、然る後に方に生る。初生の時、外人の爲に抱き執らるゝや、麁澁の苦痛、刀劍を被るが如し。是の如く、久しからずして、復

【八〇】鈎は、鉤と同じ。

*過。宋明の三本に遇に作る。然らば「江海河池に遇ひ臨む」なり。

【八一】中陰。中有に同じ。死して後、未だ次の生を受けざる間をいふ。

*二藏。明本に二臟に作る。

是の時、魔王、空中の聲を聞き、又、菩薩の恬然として異らざるを見、魔、心に慚愧し、憍慢を捨離し、卽便ち道を復して、天宮に還歸る。群魔憂感して、悉く皆崩散し、情意沮悴して、復威武なく、諸の鬪戰の具、林野に縱橫す。惡魔退散の時に當りて、菩薩の心淨く、湛然として動かず。[七五]天に烟霧なく、風條を搖がさず。落日光を停めて、倍更に明盛に、澄月映徹し、衆星燦朗として、幽隱の闇暝も、復障礙なし。虛空の諸天、妙花香を雨らし、衆伎樂を作して、菩薩を供養す。

二十五、成道觀照

[七六]爾の時、菩薩、慈悲力を以て、二月七日の夜に於て、魔を降伏し已りて、大光明を放ち、卽便ち入定して、眞諦を思惟し、諸法中に於て、禪定自在に、悉く過去所造の善惡を知りて、此より彼に生じ、父母眷屬・貧富貴賤・壽夭長短、及び名姓字、皆悉く明了なり。卽ち衆生に於て、大悲心を起して、自ら念言す、『一切衆生、救濟者なく、五道に輪廻して、津を出るを知らず。皆悉く虛僞にして、眞實あるなし。而して其の中に於て、橫に苦樂を生ず』。是の思惟を作して初夜の盡くるに至る。

爾の時、菩薩、既に中夜に至りて、卽ち天眼を得、世間を觀察して、皆悉く徹見すること、明鏡の中に、自ら面像を覩るが如し。諸衆生を見るに、種類無量なり。此に死して、彼に生れ、行の善惡に隨つて、苦樂の報を受く。地獄中の[七七]考治の衆生を見るに、或は洋銅を口に灌ぎ、或は銅柱を抱き、或は鐵床に臥し、或は鐵鑊を以て、之を煎煮し、或は火上に於て、[七八]串炙を加へ、或は虎狼鷹犬の爲に食はれ、或は火を避けて樹下に依るに、樹葉墜落して、皆刀劍と成り、其の身を割截するあり。或は斧鋸を以て、肢體を[七九]解剔し、或は熱沸せる灰河の中に擲ち、或は復、糞屎の坑中に擲つ。是の如き等の種々の諸苦を受くるも、業報を以ての故に、命終に死せず。菩薩既に此の如き事

【七五】此一節は、菩薩の降魔によつて、天地の光景頓變せるを描く。成道せる釋尊の目に映ぜる法界觀なり。

【七六】觀照は二段に分る。初に五道を觀じ、次に十二因緣を觀ぜり。

【七七】考は元本に栲に作り、明本に拷に作り、聖語藏本に老に作る。

【七八】丳。くし、くしざす。宋本聖語藏本に脯に作る。

【七九】剔。きりほどく。

種々の醜身もて、菩薩を怖さんと欲するも、終に菩薩の一毛だをも、動かす能はず。魔益憂愁す。

空中に神あり。名けて［七二］負多と曰ふ。身を隱して言ふ、『我、今に於て、牟尼尊の心意泰然として、怨恨の想なきを見る。是の諸魔衆、毒心を起して、怨なき處に於て、横に忿を生ずるも、是の癡惡魔、徒に自ら疲勞するのみ、永く得る所なけん。今日、宜しく應に恚害の心を捨つべし。汝が口乃ち須彌山を吹いて、其を崩倒せしむべく、火を冷ならしむべく、水を熱ならしむべく、地性の堅强なるを、柔軟ならしむべしとも、汝は菩薩が歷劫に修習せる善果、正思惟定・精勤・方便・淨智慧光を壞る能はじ。［七三］此の四功德や、能く斷截し、留難を爲作し、正覺を成ぜざる無し。千日の照、必ず能く暗を除き、木を鑚りて火を得、地を穿ちて水を得る如し。精勤方便もて、求めて得ざるなし。世間の衆生、三毒に沒して、救ふ者あるなし。菩薩の慈悲や、智慧の藥を求めて、世の爲に患を除くを、汝、今、云何ぞ之を惱亂する。世間の衆生、癡惑無智にして、悉く邪見に著す。今、法眼を設け、正路を修習し、衆生を導かんと欲するを、汝、今、云何ぞ導師を惱亂する。是則ち不可なり。譬へば、曠野の中に在りて、商人の導師を欺誑せんと欲するが如し。衆生、大黑暗の中に墮し、茫然、所止の處を知らず。菩薩爲に大智慧燈を然すを、汝、今、云何ぞ吹いて滅せしめんと欲するぞ。衆生、今、生死の海に沒す。菩薩爲に智慧の寶船を修するを、汝、今、云何ぞ沈溺せしめんと欲するぞ。忍辱を芽と爲し、堅固を根と爲し、無上大法を以て大果と爲すを、汝、今、云何ぞ攻伐せんと欲するぞ。貪恚癡の鏁、諸の衆生を縛す。菩薩苦行もて、爲に之を解かんと欲し、今日決定して、此の樹下に於て、※結加趺坐して、無上道を成ぜん。此の地は、乃ち是過去諸佛の［七四］金剛の座なり。餘方悉く轉ずとも、此の處は動ぜず、妙定を受くるに堪ふ。汝が摧く所に非ず。汝、今宜しく欣慶の心を生じ、憍慢の意を息め、知識の想を修して、之に奉事すべし』。

［七二］　負多（Bhūta）。

［七三］　此四功德。是等の四功德を斷截したり、これを妨礙したりして、正覺を成ぜざらしむる事能はじの意、

※結加。宋・元・明・聖語の四本、結跏に作る。

［七四］　金剛座。（Vajra-āsana）。上地面に達し、下金輪に據る一大石の頂の平丹なるもの。「西域記」の中にいふ、昔賢劫の初、大地と俱に起る。三千大千世界の中に據る。下は金輪を極め、上は地際を侵す。金剛の成す所。周り百餘歩。賢劫の千佛、之に坐して金剛定に入る。故に此名あり、云々。

或は、猪・魚・驢馬・師子・龍頭・熊・羆・虎・兕、及び諸獸の頭なる、或は一身多頭なる、或は面に各一目なる、或は衆多の目なる、或は大腹長身なる、或は羸痩無腹なる、或は長脚大膝なる、或は大脚肥腨なる、或は長爪利牙なる、或は頭の胸前に在る、或は兩足多身なる、或は大面傍面なる、或は色の灰土の如き、或は身より烟焰を放つ、或は象身に山を擔ふ、或は被髮裸形なる、或は復面色の半赤半白なる、或は脣垂れて地に至る、或は褰を上げて面を覆ふ、或は身に虎皮を著くる、或は師子蛇皮なる、或は蛇の遍ねく身を纏ふ、或は頭上に火燃ゆる、或は瞋目怒臂なる、或は傍行跳擲する、或は空中に旋轉する、或は馳歩して吼嚇する、是の如き等の諸惡類形の、稱計すべからざるありて、菩薩を圍遶す。或は復菩薩の身を裂んと欲するあり。或は四方に烟起りて、炎焰天を衝き、或は狂音奮發して、山谷を震動し、風火烟塵、暗うして見る所なく、四大海水、一時に涌沸す。護法の天人・諸龍鬼等、悉く魔衆を忿り、瞋恚增盛して、毛孔より血流る。

　淨居天衆、此の惡魔の、菩薩を惱亂するを見、慈悲心を以て、之を愍傷し、是に於て、來下して、虛空に側ち塞り、魔軍衆の、無量無邊なるが、菩薩を圍遶し、大惡聲を發して、天地を震動するも、菩薩の心定まりて、顏に異相なきこと、猶、師子の、鹿群に處るが如くなるを見て、皆悉く歎じて言く、『嗚呼奇なる哉、未曾有なり。菩薩決定して當に正覺を成ずべし』。是の諸魔衆、互に相催[六九]切し、各威力を縱して、菩薩を摧破(せんとて)或は角目切齒し、或は橫飛亂擲す。菩薩之を觀る、童子の戲の如し。魔、益、愁ひ忿り懟み、更に戰力を增す。菩薩、慈悲力を以ての故に、石を抱く者をして、擧ぐるに勝ふる能はず、其の擧るに勝ふる者をして、下すを得る能はざらしむ。飛刀舞劍、空中に停まり、電雷雨火は、五色の華と成り、惡龍の吐毒は、變じて香風と成る。諸惡類形、菩薩を毀らんと欲するに、動くを得る能はず。魔に姊妹あり。一を[七〇]彌伽と名け、二を[七一]伽利と名く。各々手を以て髑髏器を執り、菩薩の前に在りて、諸の異狀を作して、菩薩を惱亂す。是の諸魔衆、

【六九】催切。うながし、せきたつ。

【七〇】彌伽(Megha)。

【七一】迦利(Kali)。

み、歯落ち涎を垂れ、肉消え骨立ち、腹の大なる鼓の如く、杖に柱へられて羸歩し、自、復する能はず。

魔王、既に是の如く堅固なるを見て、心に自ら思惟す、『我、昔、曾て、雪山の中に於て、此の[六三]摩醯首羅を射しに、卽便ち恐懼して、其の善心を退けり。而して、今、瞿曇を動かすことを辦ぜず。既に、此の箭も、及び我が三女も、能く移轉して、愛恚を生ぜしむる所に非ず。當に、復、更に、他餘の方便を作すべし』。卽ち軟語を以て、菩薩を誘うて言く、『汝、若、人間の受樂を樂しまずば、今、便ち、天宮に上昇すべし。我、天位及び五欲の具を捨てゝ、悉く持つて汝に與へん』。菩薩答へて言く、『汝、先世に於て、[六四]少施の因を修す、今、故に自在天王と爲るを得たるも、此の福に期あり、要、還、[六五]三塗に下生し沈溺して、出濟甚だ難からん。此を[六六]罪因と爲す。我が須ゆる所にあらず』。魔、菩薩に語る、『我が果報は、是汝が知る所。汝の果報は、誰か復知る者ぞ』。菩薩答へて言く、『我が果報は、[六七]唯此の地のみ知る』。此の語を說き已るや、時に、大地、[六八]六種に震動す。是に於て、地神、七寶の瓶を持ち、中に蓮花を滿てゝ、地より踊出して、魔に語つて言く『菩薩、昔、頭目髓腦を以て、以て人に施し、出せる所の血、大地に浸潤し、國城・妻子・象馬・珍寶、用て布施せること、稱計すべからず。無上正眞の道を求めんが爲なり。是を以ての故に、汝、今、應に菩薩を惱亂すべからず』。魔是れを聞き已りて、心に怖懼を生じ、身毛皆竪つ。時に、彼の地神、菩薩の足を禮し、花を以て供養し、忽然として現ぜず。

爾の時、魔王、卽ち自ら思惟す、『我、強弓・利箭、幷に及び三女を以て、兼て方便和言を以て、之を誘ふも、此の瞿曇の心を壞亂する能はず。今、當に更に、諸種の方便を設け、廣く軍衆を聚め、力を以て迫脅すべし』。是の念を作す時、其の諸軍衆、忽然として來至し、虛空に充滿す。形貌各異る。或は戟を執り、劍を操り、頭に大樹を戴き、手に金杵を執り、種種の戰具、皆悉く備足す。

【六三】摩醯首羅(Maheśvara)。大自在天のこと。宋・元・明の三本には、此の字なり。

【六四】少施因。布施の業因によつて、生天の果を得ること。前に見ゆ。

【六五】三塗。火塗・刀塗・血塗なり。塗又は途に作る。三悪道のこと。

【六六】罪因。欲界中に於て最高の果報は、天上界の生なれども、猶これ生死、輪廻の域を脫せざるを以て、斯くいへるなり。

【六七】唯此地知。菩薩は、この時に右手を以て地を指せり。之を觸地印とも、降魔印ともいふ。印度の雕刻に多く見らる。支那の雕刻には多からざれども、長安花塔寺のものに三四あり。實物は、に、我が細川護立侯の所藏する所、寫眞は「支那佛教史蹟」第一集の中に見らる。

【六八】六種震動。動・起・涌・震・吼・擊なり。前三は形の變、後三は聲の變なり。一一に三相ありて、十八相となる。

女倶に前んで其の父に白して言く、『不審し、今、何が故に憂愁したまふか』。父即ち心を寫して、諸女に語つて言く、『世間に、今、沙門瞿曇あり。身に法鎧を被り、自在の弓を執り、智慧の箭を鏃し、衆生を伏し我が境界を壞らんと欲す。我、若、如かずんば、衆生彼を信じて、皆悉く歸依し、我が土則ち空しからん。是の故に愁ふるのみ。未だ道を成ぜざるに及んで、往いて摧挫し、其の橋梁を壞らんと欲す』。是に於て、魔王、手に强弓を執り、又五箭を持ち、男女眷屬、倶時に彼の畢鉢羅樹下に往き、[五四]牟尼を見るに、寂然不動にして、生死[五五]三有の海を度らんと欲す。

爾の時、魔王、左手に弓を執り、右手に箭を調へ、菩薩に語りて言く、『汝、[五六]刹利種、死は甚だ畏るべし。何ぞ速に起たざる。宜しく汝が轉輪王の業を修し、出家の法を捨つべし。[五七]施會に習ひ、生天の樂を得るは、此の道第一、[五八]先の所行に勝る。汝は是刹利轉輪王の種、而して乞士と爲るは、此れ所應に非ず。今、若、起たずんば、但好く安坐せよ、[五九]本誓を捨つるなかれ。我試みに汝を射ん。一たび利箭を放つや、苦行仙人、我が箭聲を聞きて、驚怖、惛迷して性を失はざるなり。況んや汝瞿曇、能く此の毒に堪へんや。汝もし速に起たば、安全を得べし』。魔、此の語を説きて、以て菩薩を怖す。菩薩怡然として、驚かず動かず。魔王卽便ち弓を挽き箭を放ち、幷に天女を進む。菩薩、爾の時、眼、箭を視るだもせざれば、箭、空中に停まり、其の鏃下向して、變じて蓮花と成る。時に三天女、菩薩に白して言く、『仁者の至德は、天人の敬ふ所、應に供侍あるべし。我等、今、年、盛時に在り、天女の端正なる、我に踰ゆる者なし。天、今、我を遣はして、以て相供給せしむ。晨昏寢臥、願はくは左右に侍せん』。菩薩答へて言く、『汝、小善を植ゑて、天身と爲るを得、無常を念ぜずして、妖媚を作す。形體美はしと雖も、心端しからず、淫惑不善なり。死して必ず當に[六〇]三惡道中に墮すべし。鳥獸の身を受け、之を免れん事甚だ難し。汝等、今、[六一]定意を亂さんと欲する、非清淨心を、今、便ち去るべし。吾は相須ひず』。時に三天女、變じて[六二]老姥と成り、頭白く面皺

【五四】牟尼(Muni)。聖人のこと。寂默と譯す。
【五五】三有。三界の存在をいふ。いづれも生死流轉の存在なり。
【五六】刹利(Kṣatriya)。四姓の中婆羅門族と共に、一般民衆の上に位する王士族。
【五七】施會生天。布施は、印度に於て、王士長者居士の須らく爲すべき義務とせられ、而して布施の功德として、生天の果報ありと信ぜられたり。釋尊は、一般人士に對して、常に施論・戒論・生天論を説き、以て之を誘導し、一旦出家するに及び、初めて四諦八正道を説かれたり。施會とは、王者の如きものゝ行ふ行事なり。大衆に對して、自己を空しくしての大施會が、屢々經典中に説かる。
【五八】勝先所行。宋・元・聖語藏の三本には先勝所行と作し、明本には先聖所行と作す。
【五九】本誓。この坐を起たずして、成道せんといふ誓願。こゝは、この誓願を捨てずば、捨てざれ。我に覺悟ありと、惆悵せるなり。
【六〇】三惡道。地獄・餓鬼・畜生をいふ。
【六一】定意。三昧のこと。
【六二】姥は媼に同じ、うば。

不吉を破り、以て吉祥を成ぜん』とて、菩薩又言く、『汝が手中の草は、此は得べきや不や』。是に於て、吉祥、即便ち草を授けて以て菩薩に與へ、因りて發願して言く、『菩薩道成ぜば、願はくは、先づ我を度したまへ』。菩薩受け已りて、敷いて以て座と爲し、草上に於て[五〇]結加趺坐し、『過去佛の所坐の法は、自ら誓つて「正覺を成ぜずんば、此の座を起たじ」と言ひませる如く、我亦是の如くせん』。此の誓を發す時、天龍鬼神、皆悉く歡喜し、淸涼の好風、四方より來り、禽獸鬱を息め、樹條を鳴らさず、遊雲飛塵、皆悉く澄淨なり。知りぬ、是、菩薩の必ず道を成ぜん相なるを。

二十四、降魔

爾の時、菩薩、樹下に在りて、誓言を發する時、天龍八部、皆悉く歡喜して、虛空中に於て、踊躍讃嘆す。時に、[五一]第六天の魔王の宮殿、自然に動搖す。是に於て、魔王、心大に懊惱し、精神躁擾して、聲味御せず。自ら念言す、『[五二]沙門瞿曇、今、樹下に在り、五欲を捨てゝ、端坐思惟す。久しからずして當に正覺の道を成ずべし。其の道、若、成ぜば、廣く一切を度し、我が境を超越せん。道の未だ成ぜざるに及んで、往いて之を壞亂せん』。爾の時、魔子薩陀、父の憔悴を見て、往いて白して言く、『不審し、父王、何故に憂慼したまふ』。魔王答へて言く、『沙門瞿曇、今、樹下に坐す。其の道將に成じて、我を超越せんとす。今、之を壞らんと欲す』。魔子卽便ち前んで父を諫めて言く、『菩薩の淸淨は[五三]三界に超出し、神通智慧、明了ならざるなく、天龍八部、咸く共に稱讃す。これ父王の、能く摧屈する所に非ず。須らく惡を造りて、自ら禍咎を招くべからず』。魔に三女あり。形容儀貌極めて端正たり、妖冶巧媚、善能く人を惑はすこと、天女中に於て、最も第一たり。熏ずるに名香を以てし、好瓔珞を佩ぶ。一を染欲と名け、二を能悅人と名け、三を可愛樂と名く。三

【五〇】結加趺坐。左の趾を右の股の上におき、右の趾を左の股の上におく坐相をいふ。

【五一】第六天。欲界天に六あり。その最高卽ち第六を、他化自在天と爲す。これ魔王の所住なり。

【五二】沙門瞿曇（Sramaṇa Gautama）。

【五三】三界。欲界・色界・無色界をいふ。以て、迷界の全部を總括す。

頭面に足を禮し、以て奉上す。太子、卽便ち彼の女の施を受けて、之を呪願す、『今、施す所の食は、食ふ者をして、氣力を充すを得しめんと欲するなり、當に施家をして、膽[四五]を得、喜を得、安樂無病にして、年壽を終保し、智慧具足せしむべし』。太子、卽ち復是の如き言を作す、『我、一切衆生を成熟せんが爲の故に、此の食を受く』。呪願し訖りて、卽ち受けて、之を食ふや、身體光悅氣力充足して、[四六]菩提を受くるに堪へぬ。

二十三、菩提樹下

爾の時、五人、旣に此の事を見、驚きて之を怪しみ、退轉を爲せりと謂ひ、各々所住に還る。菩薩獨り行いて、[四七]毘鉢羅樹に趣き、自ら發願して言く、『彼の樹下に坐し、我が道成らずば、要、終に起たじ』。菩薩の德重くして、地、勝ふる能はず。時に、歩々、地、爲に震動して、大音聲を出す。爾の時、盲龍、地動の[四八]響を聞きて、心大に歡喜し、兩目開明し、『曾て先佛に、此の瑞應あるを見たり』是の念を作し已りて、地より踊出し、菩薩の足を禮す。時に、五百の靑雀あり、虛空を飛騰して、菩薩を右遶し、雜色の瑞雲、及以び香風、隨つて映拂す。爾の時、盲龍偈を以て讃じて曰く、

　菩薩の足の踐む處、地、皆、六種に震ひ、大深遠の音を發するを、我、聞いて、眼、開明す。
　又、見る、虛空中に、靑雀、菩薩を遶り、瑞雲極めて鮮映に、香風甚だ淸涼なるを。
　此の菩薩の瑞相は、悉く過去佛に同じ。是を以て知る、菩薩の、必定して正覺を成ぜんを、

是に於て、菩薩則ち自ら思惟す、『過去の諸佛は何を以て座と爲し、無上道を成じたまへるか』。卽便ち、草を以て座と爲したまへるを自ら知るや、釋提桓因、化して凡人と爲り、淨軟草を執る。菩薩問うて言く、『汝の名は何等か』。答ふ、『[四九]吉祥と名く』。菩薩之を聞きて、心大に歡喜し、『我、

【四五】得膽得喜の膽は恐くは膽の誤か。然らば膽は物質の多きなり。喜は精神の樂なり。成道後二商の供養を受けたまふ時に、同じ呪願あり。この一句。宋本には得捨得喜に作り、元・明二本には得色得力得捨得喜に作る。

【四六】菩提(Bodhi)。舊には道、新には智と譯す。

【四七】毘鉢羅樹(Pippala)。佛この樹下に成道したまへるを以て、之を菩提樹といふ。

【四八】嚮。宋・元・聖語の三本に響に作る。響の方意義通ず。

【四九】吉祥。しあはせ、めでたしといふ程の意味。

子の所に至る。形、消痩して、皮骨相連り、血脈悉く現はるゝこと、[四三]波羅奢化の如くなるを見、頭面に足を禮し、地に悶絶し、良久しくして乃ち起ち、涙を銜んで言く、『大王、太子を憶念して、日夜を捨てたまはず。今、故に、我を遣はし、此の千乘を領し、資生の具を載せ、以て太子に餉りたまふ』。時に、太子、車匿に答へて言く、『我、父母に違ひ、及び國土を捨て、遠く來つて此に在るは、至道を求めんが爲なり。云何ぞ當に復此の餉を受けんや』。爾の時、車匿、此の語を聞き已りて、心に自ら思惟す、『太子、今、既に此の如き資供を受くるを肯んじたまはず。我當に別に一人を覓めて、此の千乘を領して、王の所に還歸せしめ、我、此に住まりて、太子に奉事すべし』。即ち一人を差はし、車を領して去ら(しめ、)是に於て、車匿、密に太子に侍して、晨に昏に離れず。

二十二、棄捨苦行

爾の時、太子、心に自ら念言す、『我、今、日に一麻一米を食ひ、乃至、七日に一麻一米を食ひ、身形消痩、枯木の若きあり、苦行を修する、滿六年に垂として、解脱を得ず。故に道に非るを知る。昔、閻浮樹下に在りて、思惟せる所の法、離欲寂靜こそ、是最も眞正なるに如かず。今、我、若、復、此の羸身を以て道を取らば、彼の諸外道、當に自餓これ般涅槃の因と言ふべし。我、今、復、節々に、[四四]那羅延力ありと雖も、亦此を以て道果を取らじ。我、當に食を受けて、然る後に成道すべし』。是の念を作し已り、卽ち座より起ち、尼連禪河に至りて、水に入りて洗浴す。洗浴既に畢るや、身體羸瘠して、自ら出る能はず。天神來下して、爲に樹枝を按し、攀ぢて池を出るを得ぬ。時に、彼の林外に、一牧牛女人あり、難陀波羅と名く。時に、淨居天、來下して勸めて言ふ。『太子、今、林中に在り、汝、供養すべし』。女人、聞き已りて、心大に歡喜す。時に、地中、自然に千葉の蓮花を生じ、花上に乳糜あり。女人、此を見て、奇特の心を生じ、卽ち乳糜を取り、太子の所に至りて、

ありといふなり。結とは煩惱の異名なり。我を根本義とする説よりせば、到底この難より脱すべからず。蓋、これ佛教の無我説よりせる數論説の批判なり。

[三九] 梵行。淨行に同じ。

[四〇] 迦闍山 (Gayāśirṣa or Gajaśirṣa)。

[四一] 尼連禪河(Nairañjanā)。

[四二] 根。根性・根機のこと。根性は性質なり。根機は能力なり。

[四三] 波羅奢花(Palāśa)。赤花樹と譯す。

[四四] 那羅延(Nārāyaṇa)。堅固力士或は鉤鎖力士と譯す。婆羅門教の三位神の一たる、毘紐奴天(Viṣṇu)の異名。

月に踰ゆるを遇ひ見る。即ち太子に向ひ、具に大王・摩訶波闍波提・及び耶輸陀羅が憂苦の情を說く。太子即ち深重の聲を以て、答へられて言く、『我、豈、父王・親戚の恩情の深きを知らざらんや。但生死愛別離の苦を畏れ、斷除せんと欲するが爲の故に、此に來るのみ』。是の如き種々の言辭の說く所、志意の堅固なること、須彌山の移動すべからざるが如く、我を捨てゝ去るや、草芥を棄つるが如し』。

『爾の時、即便ち五人を選擇して、隨從給侍もて、所在を伺察せしめぬ。遣はせる所の人中、一人有りて、還つて、說いて言ふ、「太子は當に阿羅邏・迦蘭仙人の所に至るべし。路、恒河に由る。天神力を以て、水を渡るを得、王舍城に至る。時に、頻毘娑羅王、太子に來詣して、方便もて、應に出家すべからず。國を分ちて共に治めん。及以び全く與へん。幷に兵を與へて他國を伐たしめんと欲するを譬說す。太子、亦復、皆悉く受けず。即ち又前行して仙人の所に達し、爲に法を說きて、其の心を降伏し、又、伽闍山、苦行林中、尼連禪河の側に至り、靜坐思惟して、日に一麻一米を食ふ」』と。

爾の時、白淨王、王師・大臣が、彼の使人の、此の如き語を說くを聞き已りて、心大に悲惱し、擧體戰き掉ひ、身毛皆堅ち、即ち王師、及び大臣に語つて言く、『太子、遂に轉輪王位・父母・親屬の恩愛の樂を捨て、遠く深山に在りて、此の苦行を修す。我、今、薄福、生れて此の如き珍寶の子を失ふ』。王即ち復使人の所言を以て、摩訶波闍波提及び耶輸陀羅に向つて、爲に之を說く。

時に、白淨王、即便ち五百乘の車を嚴駕し、摩訶波闍波提及び耶輸陀羅、亦復相與に五百乘を辦じて、一切の資生皆悉く具足し、即ち車匿を喚び、之に語つて言く、『汝、太子を送りて、遠く深山に放ちぬ。今復汝をして此の千乘を領し、資糧を載致して、太子に送與せしむ。隨時供養して、乏少せしむるなく、盡きなば更に來りて請へ』。車匿勅を受け、即ち千乘を領し、疾速に去りて、太

---

kāśānantāyatana)。色想を厭ひて、無邊の虛空を緣じ、心の空無邊と相應する定を修して得る所の果報なり。識處。委しくは識無邊處(Vijñānānantāyatana)。虛空を厭ひて、內識を緣じ、心識無邊と相應する定によりて得る果報をいふ。無所有處(Ākiñcanyāyatana)。識を厭ひて心識所有なしと觀ずる定に相應する果報なり。非想非非想處 (Naivasaṁjñānāsaṁjñāyatana)。識處は有想なり。無所有處は無想なり。又、共に捨つるを以ていふ。非想とは麁想なきなり。非非想とは細想なきにあらず。この定によつて修得せらるゝ果報なり。

【三五】 究竟解脫。阿羅邏仙人は、この非想非々想處を以て、終局の理想境とせるなり。太子は、これに滿足せざりき。これ次の問答ある所以なり。

【三六】 我。數論の根本義たる神我 Puruṣa に突入して、問を起せるなり。佛教の無我は、斯の如き實體を認めざるものなり。

【三七】 攀緣。心が外境によりまつはること。

【三八】 我想。根本の我より派生する我執。自他を對立せしむるに起るなり。こゝに細結

を前んで去る。時に、二仙人、太子の去るを見て、各心に念言す、『太子の智慧、深妙奇特にして、乃ち爾く測り難し』。合掌して奉送し、視を絶して方に還る。

二十一、六年苦行

爾の時、太子、阿羅邏・迦蘭二仙人を調伏し已りて、卽便ち[四〇]迦闍山苦行林中に前進す。是れ憍陳如等五人の止住する所の處。卽ち[四一]尼連禪河の側に於て、靜坐思惟して、衆生の[四二]根を觀ず、『宜しく應に六年苦行して、以て之を度すべし』。是を思惟し已りて、便ち苦行を修す。是に於て、諸天、麻米を奉獻す。太子、正眞の道を求めんが爲の故に、淨心に戒を守りて、日に一麻一米を食ひ、設、乞ふ者あれば、亦以て之をも施す。

爾の時、憍陳如等五人、既に、太子の端坐思惟して、苦行を修し、或は日に一麻を食ひ、或は日に一米を食ひ、或は復二日、乃至、七日に、一麻米を食ふを見、時に憍陳如等、亦苦行を修して、太子に供奉し、其の側を離れず。既に此を見已りて、卽ち一人を遣はし、還つて、王師、及以び大臣に白して、具に太子所行の事を說く、爾の時、王師・大臣、倶に宮門に還る。顏貌愁悴・身形萎熟すること、猶、人あり、其の所親を喪び、葬送既に畢りて、折忍して歸るが如し。時に、守門者、王に白して言く、『師と大臣と、今、門外に在り』。王、既に聞き已りて、氣奔り聲絕え、身首纔に動く。時に、守門人、王の此の意を解し、卽ち呼んで前ましむ。王、與に相見て、悲んで言ふ能はず。是の如き、良久しうして、微聲にして問ふ、『太子は既に是我が性命、卿等、今、獨、此の歸りを作す。我が性命、云何ぞ存せん』。王師答へて言く、『我、王勅を奉じ、太子を尋ね求めて、便ち跋伽仙人の住處に至り、太子を訪ね覓む。仙人、我に太子の所在を語り、并に太子の所言の事を說きぬ。我、便ち、前行して、中路に於て、太子が、樹下に在りて、端坐思惟し、相好光明、日

別なる悅豫をいふ。

【二九】 樂根。こゝは意識の分別ある悅豫にあらず。恰の相、至極淨妙なるをいふ。

【三〇】 念(Smṛti)。記憶作用にして、一度經驗せることを、忘れざるをいふ。第三禪の樂、極めて勝るゝを以て、染著に墮せざらんが爲には、之を念ずるを要す。これ正念なり。第四禪に至りて、下地の過を念じ、又、自地の功德を念ず。これ淨念なり。

【三一】 捨(Upekṣā)。諸法に執著する念を捨離して、平等に住せしむる作用なり。かくて不苦不樂の境に入る。

【三二】 無想(Asaṃjñi)。心・心所卽ち精神作用の都絕するをいひ、この境地を無想定といふ。この無想定を修すれば、無想果を得。これに應ずる存在を、無想天といふ。

【三三】 別有一師。無想天に生るゝを以て、最高解脫とせる一派あり。次の如く非想非々想天に生るゝを以て、最終解脫とせる一派あり。

【三四】 空處・識處・無所有處・非想非々想處を、四空處といふ。三界に配すれば、無色界の境なり。この四空處は、前の四禪天の上に位す。四空定に相當する實在なり。

空處。委しくは空無邊處(Ā-

せば、應に此の如きの行を修學すべし』。

爾の時、太子、仙人の言を聞きて、心喜樂せず。卽ち自ら思惟す、『其の知見する所、究竟の處にあらず。是永く諸結煩惱を斷ずるにあらず』。卽便ち語りて言く、『我、今、汝が所說の法中に於て、未だ解せざる所あり。今、相問はんと欲す』。仙人答へて言ふ、『敬んで來意に從はん』。卽ち之に問うて曰く、『非想非非想處に、「我」ありとせんや、「我」なしとせんや。若、「我」なしと言はゞ、應に非想非非想處といふべからず。若、「我」ありと言はゞ、「我」は知ありとやせん、「我」は知なしとやせん。「我」、若、知なくば、則ち木石に同じ。「我」、若、知あれば、則ち攀緣あり。既に攀緣あれば、則ち染著あり。染著を以ての故に、則ち解脫に非ず。汝は麁結を盡すも、自ら細結の猶存するを知らざるを以て、是を以ての故に、謂つて究竟と爲すも、細結滋長して、復、下生を受けん。此を以ての故に、彼岸に度るに非るを知る。若、能く「我」及以び我想を除かば、一切盡捨せん。是を則ち名けて眞の解脫と爲す』。仙人默然として、心に自ら思惟す、『太子の所說、甚だ微妙と爲す』。

爾の時、太子、復、仙人に問ふ、『汝、年、幾に至りて出家せりや。梵行を修して來、また幾許の年ぞ』。仙人答へて言く、『我、年十六にして、便ち出家し、梵行を修して來、一百四年』。太子、聞き已りて、心に念言す、『出家以來、乃ち是の如く久しうして、所得の法、正に此の如きか』。時に、太子、勝法を求めんが爲に、卽ち座より起ちて、仙人と別る。爾の時、仙人。太子に語りて言く、『我、久遠來、此の苦行に習ひてだも、所得の果、正に此の如きのみ。汝は是れ王種なり。云何ぞ能く苦行を修せんや』。太子答へて言く、『汝が所修の如きは、苦と爲すに非ず。別に最苦難行の道あり』。仙人、既に太子の智慧を見、又志意の堅固にして虧けざるを見て、決定して一切種智を成ぜんを知り、太子に白して言く、『汝、若、道成ぜば、願はくは、先づ我を度したまへ』。是に於て、太子答へて『善哉』と言ひ、次で迦蘭所住の處に至りて、論議問答する、亦復是の如くして、太子卽便ち路

なり。

【三三】 忍辱。如何なる毀辱をも、忍耐甘受すること。

【三四】 禪定。これに四禪四空定あり。次に述べらる。

【三五】 覺。新譯に尋（Vitarka）といふ。麁心もて事理を推尋する作用なり。

【三六】 覩。新譯に伺（Vicāra）といふ。細心もて事理を伺察する作用なり。

【三七】 初禪以下第四禪を、四禪天といふ。四禪定に相當する實在と考へられたるなり。三界に配すれば、色界に屬せらる。第一に、覺・覩あり、喜・樂あり。次に覺・覩を去りて喜樂を得。次に喜を去りて樂を得。最後に樂を去りて、不苦不樂の捨に入るなり。少しく委說すれば、初禪以上は、欲界の如き分段食を要せざるを以て、從つて鼻・舌の二識なくして、眼・耳・身・意の四識のみあり。初三識に樂受あり。意識に喜受あり。第二禪以上は、意識あるのみなれば、樂受なくして喜受あるのみ。第三禪には、淨妙なる樂受あるのみ。第四禪には、苦樂を超越せる捨受あるのみ。而して覺覩の作用は、初禪にあれども、第二禪以上になし。次第に禪定の進む內面生活の描寫なり。

【三八】 喜心とは、意識の無分

靜なるを見て、深く愛敬を生じ、卽ち太子に問ふ、『所行の道路、疲るゝ無きを得たりや。太子の初めて生れし、及以び家を出でし、又來つて此に至る、我悉く之を知る。能く火聚に於て、自ら覺りて出でましぬ。又、大象の、羂索中に於て、自ら免脫するが如し。古昔の諸王、盛年の時、恣に五欲を受け、根熟するに至りて、然る後に方に國邑樂具を捨てゝ、出家學道せり。これ未だ奇とするに足らず。太子、今、此の壯年に、能く五欲を棄てゝ、遠く此の間に至る。眞に殊特と爲す。當に勤精進して、速に彼岸に度るべし』。太子、聞き已りて、卽ち之に答へて曰く、『我、汝が言を聞きて、極めて歡喜を爲す。汝、我が爲に、生老病死を斷ずるの法を說くべし。我、今、聞かんことを樂ふ』。仙人答へて言く、『善哉、善哉』。

卽便ち說きて曰く、[一八]『衆生の始は、[一九]冥初に始まる。冥初より[二〇]我慢を起し、我慢より癡心を生じ、癡心より染愛を生じ、染愛より[二一]五微塵氣を生じ、五微塵氣より、[二二]五大を生じ、五大より、貪欲・瞋恚等の諸煩惱を生じ、是に於て、流轉して、生・老・病・死・憂悲苦惱す。今、太子の爲に、略して之を言ふのみ』。爾の時、太子、卽便ち問うて曰く、『我、今、已に、汝の所說の生死の根本を知る。復、何の方便もて、能く之を斷ぜん』。仙人答へて言く、『若、此の生死の本を斷ぜんと欲せば、先づ當に出家して、戒行を修持し、謙卑、[二三]忍辱にして、空閑處に住し、[二四]禪定を修習すべし。欲惡不善の法を離れて、[二五]覺あり、[二六]觀ありて、[二七]初禪を得。覺・觀を除き、定生じて喜心に入り、[二八]第二禪を得。喜心を捨てゝ、正念を得、[二九]樂根を具して、第三禪を得。苦樂を除き、[三〇]淨念を得、[三一]捨根に入りて、第四禪を得、[三二]無想の報を獲。[三三]別に一師あり、此の如き處を、名けて解脫と爲すと說く。定より覺め已りて、然る後に方に解脫の處に非るを知り、色想を離れて、[三四]空處に入り。有對想を滅して、識處に入り、無量の識想を滅し、唯、一識を觀じて、無所有處に入り。種々の想を離れて、非想非非想處に入る。斯の處を名けて、[三五]究竟の解脫と爲す。是、諸學者の彼岸なり。太子、若。生老病死の患を斷ぜんと欲

【一八】衆生之始。阿羅邏仙人の說く所は、數論(Sāṁkhya)の二十五諦說なり。
【一九】冥初は(Prakṛti)。自性冥諦と譯せらるゝもの。世界の根本。身心の本源。
【二〇】我慢(Ahaṁkāra)。自我意識にして、主觀客觀を區別せしむるもの。無明の根本なり。
【二一】五微塵氣。五惟(5Tanmātra)の事。色・聲・香・味・觸、卽ち客觀を成す要素なり。
【二二】五大(5Mahābhūta)。地・水・火・風・空、卽ち物質なり。
以上數論の組織の槪要なり。但し、普通に傳へらるゝものと異る。普通には、冥諦より大(Mahat)を生じ、大より我慢を生じ、我慢より五惟、五惟より五大と爲す。而してこゝには我慢より派生する心根・五知根・五作根の十一根を略して、是等十一根と五惟、五大との關係交涉より起る貪瞋等の煩惱を、單に五大より導き來れり。略說せるなり。猶又、冥初と相抱合して、根本體を成す神我(Puruṣa)をこゝには略せり。數論の實際修道は、この根本體の抱合を分離せしめて、神我を冥初より獨立せしむるにあり。この修道法は、次に記さるゝ四禪四空定

我、今、既に轉輪王の位を捨てぬ。亦復、何に緣りてか、應に王の國を取るべき。王が善心を以て、國を捨てゝ、我に與ふるだも、猶尙取らず。何に緣りてか、兵を以て他國を伐ち取らん。我、今、父母に辭別し、鬚髮を剃除し、國を捨てし所以は、生老病死の苦を斷ぜんが爲の故のみ。五欲[15]の樂を求めんが爲に非ざるなり。世間の五欲は、大火聚の如く、諸衆生を燒いて、自ら出る能はざら(しむ)。云何ぞ、我が、之に貪著せんを勸むるか。我、今、來りて此に至る所以は、二仙人、阿羅邏・迦蘭あり。是れ解脫を求むる、最上の導師なり。彼處に往いて、解脫の道を求めんと欲す。宜しく久しく停まりて、此に在るべからざるなり。我、既に、王が、初始の言、喜心もて我に賜ふに違ふも、嫌恨を致すなかれ。王、今、當に正法を以て國を治むべし。人民を枉ぐるなかれ』。此の言を作し已りて、太子卽ち起ちて、王と別る。時に、頻毘娑羅王、太子の去るを見て、深く大に惆悵し、合掌流淚して、是の言を作す、『初、太子を見て、心大に踊躍し、太子既に去るや、倍、悲苦を生ず。汝、今、大解脫の爲の故に、去らんと欲せば、敢て相留めじ。唯、願はくは、太子、期する所を速に果さんを。若、道成せば、願はくは、先づ度せられよ』。太子、是に於て、辭別して去る。時に、王、奉送し、路側に次まり、極目瞻矚し、見えずして、乃ち反る。

二十、問道二仙

爾の時、太子、卽便ち前んで彼の阿羅邏仙人の所に至る。時に、諸天、仙人に語つて言く、『薩婆悉達、國土を棄捨し、父母に辭別して、無上正眞の道を求めて、一切衆生の苦を拔かんと欲するが爲の故に、今、已に來りて、此に至るに垂とす』。時に、彼の仙人、既に天の語を聞きて、心大に歡喜し、俄爾の頃に、遙に太子を見、卽ち出で〻奉迎し、讃じて『善來』と言ひ、倶に所住に還り、太子を請じて坐せしむ。是の時、仙人、既に太子の顏貌端正にして、相好具足し、諸根[16]の恬[17]

【一五】五欲。色・聲・香・味・觸の欲、卽ち物質上の欲望。

【一六】諸根は、眼・耳・鼻・舌・身の五、又は意を加ふる六にして、根とは力用ある機關をいふ。

【一七】恬。やすし、しづか。

城に入り已るや、諸人民衆、太子の顔貌、相好殊特なるを見て、歡喜愛敬し、擧國皆悉く奔馳して瞻視す。是の如き諠譁、頻毘娑羅王に徹す。王、便ち驚いて問ふ、『此は是何の聲ぞ』。諸臣答へて言く、『白淨王の太子、名は薩婆悉達。昔、諸の相師、其の應に轉輪王位を得て、四天下に王たるべきを記し、又復、其、若、出家せば、必ず當に一切種智を成就すべきを記せり。其の人、今、來りて此の城に入り、外の諸人民、馳せ競うて來り看る。是を以ての故に、所以に諠鬧す』。時に、頻毘娑羅王、既に此の語を聞きて、心大に歡喜し、踊躍身に遍ねく、即ち一人に勅し、往いて太子の所在を伺察せしむ。使者、勅を受け、太子を尋ね求め、[九]般荼婆山に在り、一石上に端坐思惟するを見、時に使即ち歸りて、具に大王に白す。王即ち駕を嚴しめて、諸の臣民と、太子の所に詣る。般荼婆山に至りて、遙に太子を見れば、相好光明、日月に踰ゆ。即便ち馬を下り、儀飾及び諸の侍衞を除却し、前んで坐して問訊す、『太子、四大悉く調和するや不や。我、太子を見て、心甚だ歡喜す。然れども、一の悲あり。太子は本これ、[一〇]日の種姓、累世相承けて、轉輪王たり。太子、今、轉輪王の相、皆悉く具足するに、云何ぞ之を捨て、來つて深山に入り、沙土を[一一]踐藉して、遠く此に至るか。我、是を見るが故に、所以に悲むのみ。太子、若、父王今在すを以ての故に、聖王の位を取らざらんを欲せば、當に我が國分の半を以て、之を治むべし。若、少しと謂はゞ、我、當に國を捨て、盡く以て相奉じ、太子に臣とし事ふべし。若、復、我が此の國を取らずば、當に、[一二]四兵を給すべし。自ら攻伐して、他國を取るべきなり。太子の欲する所、それ相違はじ』。爾の時、太子、頻毘娑羅王の、此の語を說くを聞き已りて、深く其の意に感じ、即ち王に答へて言く、『王の種族は、もとこれ[一三]明月、性自ら高涼なり。鄙事を爲さず。爲す所、作す所、淸勝ならさるなし。今、是の言を發するは、未だ奇と爲すに足らず。[一四]然して、我、王が、中情の懇至、前後に倍するを觀る。王よ、今、便ち身・命・財に於て、三堅法を修すべし。亦、不堅の法を以て、餘人に勸奬むべからず。

【七】頻毘娑羅(Bimbisāra)。影勝、影堅と譯す。摩竭陀國の大王。

【八】記。授記(Vyākaraṇa)の略。豫言のこと。

【九】般荼婆山(Pāṇḍava)。

【一〇】日種(Sūrya-vaṁśa)。甘蔗王の苗裔にして、印度の玉族中、最も純潔なる血統を維持するを誇りとせり。

【一一】藉は、ふむなり。

【一二】四兵。象・馬・車・步の四種。

【一三】月種(Candra-vaṁśa)。日種と相并んで、印度王族中の雄たり。

【一四】(原文)然我觀王、中情懇至、倍於前後、王今便可於身命財、修三堅法、亦不應以不堅之法、勸奬餘人。王にこの親情あらば、我が有形不堅の身命財を棄てゝ、無形堅牢の法を修せんとするを止むべからずといふなり。三堅法とは、無極身・無窮命・無盡財をいふ。

無しやを知る能はず。太子、云何ぞ現樂を捨てゝ、未來の不定の果報を求めんと欲したまふぞ。生死の果報だも、尙、決定して有りや無しやを知るべからず。云何ぞ乃ち解脫の果を求めんと欲したまふぞ。唯、願はくは、便、宮に還りたまへ』。太子答へて言く、『彼の二仙人の、未來の果を說くに、一は有りと言ひ、一は無しと言ふは、皆、是疑心なり、決定の說に非ず。我、今、終に彼の敎に修順[三]せず。應に此を以て難詰せらるべからず。所以は何。我、今、果報を希ひ慕ふが爲に、此に來至せず。目に見る所の生老病死、必らず應に之を經べきを以ての故に、此の苦を解脫し免れんを求むるのみ。汝をして、久しからずして、我が道の成るを見しめん。我が此の志願は、終に迴すべからず。還つて父王に啓して、說くこと此の如くせよ』。爾の時、太子、此の語を作し已りて、卽ち座より起ち、王師・大臣と辭別し、北行して、阿羅邏・迦蘭仙人の所に詣る。

時に、王師・大臣、太子の去るを見て、啼泣懊惱し、一には太子の情の深きを念じ、二には、王の使を奉受して、太子の所に來り、而して復其の意を移轉する能はざる(を念じ)、路側に徘徊して、自ら反る能はず。互に共に議して言く、『旣に王の使を被りて、力效なく、今、空しく歸りて、云何が奉答せん。我等、當に從へる所の五人の、聰明智慧あり、心意柔軟にして、性を爲す忠直に、種族の强なる者を留め、密に伺察して、其の進止を看しむべし』。此の言を作し已りて、其の傍を顧瞻て、[四]憍陳如等の五人を見、之に語りて言く、『汝等、悉く能く此に留止るや不や』。五人答へて言く、『善い哉、勅の如くにして、進止に去來に、當に密に伺察すべし』。卽便ち辭別して太子の所に趣むき、王師・大臣は、宮城に還歸る。

十九、頻王見太子

爾の時、太子、彼の阿羅邏・迦蘭仙人の住處に往(かん)とて、[五]恒河を渡り、路、[六]王舍城に由る。旣に

【三】修順。宋・元・明三本幷に聖護藏本は、隨順に作る。隨順を可とせん。

【四】憍陳如(Kauṇḍinya)。後に出家して佛弟子となれり。五比丘の第一。

【五】恒河(Gaṅgā)。

【六】王舍城(Rājagṛha)。大國摩竭陀の都。

んと欲す』。太子答へて曰く、『[二]父王、汝を遣はして、何の道ふ所をか欲したまふ』。王師卽ち言く、『大王、太子が深く出家を樂み、此の意廻し難きを、久しく知ろす。然れども、王、太子に於て、恩愛の情深く、憂愁の盛火、常に自ら燃然す。太子の歸るを須ちて、以て之を滅せんのみ。願はくは、便、駕を廻して、宮城に還反りたまへ。物務ありと雖も、太子をして全く道業を棄てしめじ。靜心の處は、必ずしも山林ならず。摩訶波闍波提・耶輸陀羅・内外の眷屬、皆悉く憂惱の大海に沒し、太子の還つて之を拯濟せんを思ふ』。

爾の時、太子、王師の語を聞き、深重の聲を以て、王師に答へて言く、『我、豈、父王が、我に於て、恩情の深きを知らざらんや。但、生老病死の苦を畏れ、是を以て、此に來れるは、斷除の爲の故なり。若、恩愛をして、終日、合會し、又、生老病死の苦なからしめば、我復何すれぞ來りて此に至らん。我、今、父王に遠違する所以は、將來の和合を爲さんと欲するが故のみ。父王の憂愁の大火、今、熾然すと雖も、我と父王と、唯、今生に、此の一苦あるを餘すのみ。將來は、自ら當に、永く、斯の患を絕つべし。若、汝が言の如く、吾をして宮に處りて道業を修せしめば、七寶の舍に、中に焔火を滿す如し。人ありて、能く此の室に止るべきや不や。雜毒の食の如し。設、飢たる人有らんに、終に之を食はじ。我、旣に國を棄てゝ、出家學道す。云何ぞ我をして復宮城に還り、學道を修せしめんや。世間の人は、大苦中に在り。小樂の爲の故に、倘復耽湎して、暫くも捨つる能はず。況んや、我、此の極寂靜處に在りて、諸の患苦なきに、而も能く捐棄して、還つて惡に執かんや。古昔の諸王の、入山學道せる、中路に、還、欲を受くる者なし。父王、若、必ず我をして歸らしめんと欲したまはゞ、便、是先王の法に違ふ』。

爾の時、王師、太子に白して言く、『誠に太子の、今の所說の如し。然るに、諸仙聖、一は未來定んで果報ありと言ひ、一は定んでなしと言ふ。此の二仙聖だも、倘、未來世中の、必定して有りや

【二】（原文）父王遣汝、欲何所道。

卷の第三

十八、追尋太子

爾の時、白淨王、王師及び大臣を發遣し已りて、卽ち太子の瓔珞を以て、摩訶波闍波提に與へ、之に語りて言く、『此は是太子所服の瓔珞。車匿の還るに付して、以て汝に與へしむるなり』。摩訶波闍波提、瓔珞を見已りて、倍、悲絶を增して、自ら念言す、『四天下の人、極めて薄福たり。此の明智の轉輪聖王を失はんとは』。又、餘の莊嚴具を送りて、以て耶輸陀羅に與へ、之に語つて曰く、『太子、此の嚴身の具を以て、持つて汝に與へしむ』。耶輸陀羅、旣に此の物を見て、悶絶して地に躃る。王、又、人を遣はして、耶輸陀羅に勅す、『自ら愛敬せしめ、胎子をして安穩ならざらしむるなかれ』。

爾の時、王師及以び大臣、跋伽仙人の苦行林中に至り、從人及び諸の儀飾を除き去つて、便ち仙人所住の處に前む。仙人請じて坐せしめ、互に相問訊す。是に於て、王師、仙人に語つて言く、『我は是白淨王の師。今、來りて此に至る所以の者は、彼の白淨王の、足相[一]の太子、生老病死の苦を厭惡し、出家學道して、路、此の林に由れり。大仙見たまへりや不や』。跋伽仙人、王師に答へて言く、『我、近、此に於て一童子の顏容端正、相好具足せるを見たり。來りて此の林に入り、我と議論して、遂に一宿を經ぬ。知らず、乃ち是王の太子なりしか。我等所修の道を鄙薄し、此より北行して、彼の阿羅邏・迦蘭に詣りぬ』。爾の時、王師・大臣、此の言を聞き已りて、卽便ち疾く彼の仙人の所に往く。中路に於て、遙に太子が、樹下に在りて、端坐思惟するを見る。相好光明、日月に踰えたり。卽便ち、馬を下り、侍衞を除却し、諸の儀服を脫して、太子の所に前み、一面に坐して、互に相問訊す。是に於て、王師、太子に白して言く、『大王、太子を尋ね求めしめらる。所說あら

【一】足相。三十二相を具足すること。三十二相については、第一卷を見よ。

が故に、愁苦を生じたまふ。又復、大王、嚴に内外に勅して、太子を守護し、家を出でんを慮り恐れたまへるに、諸天來りて、導引して城を出でたり。是の如きの事は、復人力にあらず。唯、願はくは、大王、當に歡喜を生ずべし。愁惱を懷くなかれ。須らく自ら出でたまふべからず。若し、太子を憶ふこと、猶已みたまはずば、我、今、當に大臣と與に、所在を尋ね求むべし』。王、此の語を聞きて、心に自ら念言す、〔六四〕『我は、太子の廻すべからざるを知る、未だ便ち捨つるに忍びずと雖も、復之を追はじ。今、當に試みに師、及び、大臣をして、更に一たび尋ねしむべきなり』。即便ち師及び大臣に答へて言く、『善い哉、去るべし。擧宮內外、心皆苦惱して、速に還らんを〔六五〕佇逐す』。是に於て、王師・大臣、即便ち辭して出で、太子を追ひ尋ぬ。

過去現在因果經卷第二

擧宮泣悲

五三

【六四】（原文 我知太子、雖不可迴、未忍便捨、不復追之。雖の字、恐らくは迴の字の下に在るべし。然らざれば意義通ぜざるを以て、暫らく下に移して譯せり。

【六五】佇逐。元・明・聖語藏本に、佇遲に作る。佇遲を可とせん。まちまつなり。

不や』。耶輸陀羅、即ち答信して言く、『大王が此の宮に來りたまへる時に當りて、太子、我を指したまふに、即ち娠めるあるを覺えぬ』。王、其の語を聞きて奇特の心を生じ、憂惱暫く歇み、自ら念言す、『我前に、子あらば、出家を聽さしめんと許せる所以のものは、七日の中に、必、子(ある)の理なく、轉輪王の位、自然に至らん(故なり)。謂はざりき、七日未だ滿ぜずして、便ち娠めるあらんとは』。深く自ら智慧淺短にして、所爲の方便、之を住むる能はず。輕しく此の約を作せるを咎め悼みて、重ねて悔恨を增す、『太子の神略、人の意表に出づ。今日の事、亦復、兼て是諸大天の力なり。我、今、應に車匿を責むべからざるなり』。時に白淨王、心に自ら思惟す、『太子の出家は、必ず迴すべからず。設し、更に、餘の方便を作さしめんとも、亦留むる能はじ。復、國を棄て〻出家學道すと雖も、然れども已に子あり、種嗣を絕たず。我、今、應に耶輸陀羅に勅して、好く所懷の子を將護せしむべし』。

時に、白淨王、愛念の情深く、車匿に語つて言く、『我、今、往いて當に太子を尋ね求むべし。知らず、卽時、定んで何許に在るか。其、今、旣已に我を捨て〻學道す。我、復、何ぞ獨り生き獨り活くるに忍びん。便ち當に追逐して、其の所在に隨ふべし』。爾の時、王師と、及び大臣と、王が出で〻、太子を尋ね求めんと欲するを聞き、二人俱共に來りて王を諫めて言く、『大王、應に自ら憂惱を生ずべからず。所以は何。我、太子を觀じて、其の相貌を見るに、過去世の中に、久しく已に出家の業を修習したまふ。設、復、釋提桓因たらしめんも、亦當に樂しまざるべし。況んや復、今轉輪王の位もて、能く留めんや。大王、憶はずや、太子初めて生れて、行くこと七步し、手を擧げて住まり、我生已盡・是最後身と言ふや、諸梵天王・釋提桓因、悉く來り下りて從へり。此の如き奇特(あり)。云何ぞ世を樂しまん』。又復、王に白す、『阿私陀仙、昔、太子を相せり。「年、十九に至らば、出家學道して、必ず當に一切種智を成就すべし」と。今や、時、旣に到る。大王、何

【六三】(原文)我前所以許令有子聽出家、七日之中、必無子理、轉輪王位、自然而至。

は、以て耶輸陀羅に與へたまふ。我、爾の時に於て、此の誨を聞くと雖も、猶、左右に侍して、歸るの情あるなかりき。時に、太子、便ち利劍を以て、自ら鬚髮を剃るや、天、空中に於て、隨って接して去りぬ。卽便ち前行して、獵者に逢ひ、身に著くる所の七寶の妙衣を以て、獵人に與へ、袈裟と貿易へたまへり。是に於て、虛空に大光明あり。我、太子の形服既に變ぜるを見、深く其の意の必らず迴るべからざるを知り、我、卽ち悶絕して、心大に懊惱せり。太子、前んで跋伽仙人所住の處に至るや、我、便ち彼に辭別して歸りぬ。此の諸奇特は、皆是れ天力、復人事に非ず。願はくは、我及び揵陟を責むるなかれ』。時に摩訶波闍波提、及び耶輸陀羅、既に車匿の、此の事を說くを聞き已りて、心少しく醒悟し、默然として聲なし。

爾の時、白淨王、悶絕始めて醒め、勅して車匿を喚び、之に語つて言く、『汝、云何ぞ諸釋種姓をして、大苦惱を生ぜしむるか。我に嚴制あり、內外の官屬に勅して、太子を守護し、其の出家を畏れたり。汝、復、何の意ぞ、輒く揵陟に被せて、太子に與へ、密に去らしめたるか』。車匿、聞き已りて、大怖懼を生じ、王に啓して言く、『太子の出城は、實に我が咎に非ず。唯、願はくは、大王、我が具さに說くを聽きたまへ』。卽ち寶冠及び髻中の明珠を以て、王の足下に置き、『太子、我をして、此の冠・珠を以て、王の足下に置き、七寶の瓔珞を、摩訶波闍波提に與へ、餘の莊嚴具を、耶輸陀羅に與へしめたまふ』。王、諸物を見て、倍、悲絕を增す。『復、木石と雖も、猶尙、感あり。況んや乃ち父子恩愛の深きをや。』車匿、具に前事を以て、王に啓して言ふ、『太子、我に勅す。父王、もし、「太、要ず、子有れば、當に出家を聽すべし。今、未だ子あらざるに、云何ぞ去る。去る時に臨みて、又啓せざる」と謂ひたまはゞ、汝、我が爲に具に父王に答ふべし。「耶輸陀羅、久しく已に娠めるあり。」王、宜しく之に問ひたまふべし。昔の勅や、此の如し、專輒を爲すに非ず」』。王、此の言を聞き、卽便ち耶輸陀羅に問はしむ、『太子云く、汝久しく已に娠めるありと。實に此の如しや

今、我を捨てゝ、趣むく所を知るなし。古昔諸王の、入山學道するや、皆妻子を將て、暫くも相棄てざりき。世間の人、一たび遇うて相識れば、別るとも相忘れず。夫婦の情、恩愛の深きを、乃ち、反りて、更に、是の如く薄からんとは』、と。車匿を詰りて言く、『寧ろ智者と怨讎を作すとも、愚人と共に以て親厚を爲さゞらん。汝、癡頑人、盜んで太子を送つて、何處に置き、此の釋族をして、復熾盛ならざらしむるぞ』。又、揵陟を責む、[六一]『汝、太子を載せて、此の王宮を出づるに、去る時に近づきて、寂然として聲なく、今、空しく反りて、何の意ぞ悲み嘶く』。

爾の時、車匿、卽便ち答へて言く、『我、及以び、揵陟を責むるなかれ。所以は何に。此は是天力なり。人の所爲に非ず。爾の夕に當りて、夫人・婇女、皆悉く惛臥せり。太子、我に勅して、起ちて馬に[六二]被せしむ。我、爾の時に於て、大高聲を以て、太子を諫め、夫人、及び諸婇女をして、此を聞きて、驚き悟らしめんと欲せるも、揵陟に被するに及ぶまで、都て覺る者なかりき。城門每に開くや、四十里に聞ゆるに、爾の時に當りて、自然に開きて、又一の聲だも無かりき。此の如きの事、豈、天力に非ずや。城を出づる時、天、諸神をして、手に馬の足を捧げ、幷に我を接せしめ、虛空の諸天、隨從する無數なりき。我、當に云何してか能く止むべきぞ。時に、天、既に曉くるや、行くこと、三諭闍那。彼の跋伽仙人の住所に至り、又復、諸の奇特の異事あり。願はくは我が說ふを聽きたまへ。太子、既に跋伽仙人の苦行林中に至り、卽便ち馬を下り、手に馬背を撫で、幷に我に勅して宮城に還らしむ。我、此の時に於て、太子に隨從して、永く歸るの意なかりしに、太子、遣られて、終に住まるを聽したまはず。又復、我に就きて、七寶の劍を取りて、自ら唱へて言ふ、『過去の諸佛は、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんが爲の故に、飾好を捨てゝ、鬚髮を剃除したまへり。我、今、亦、當に諸佛の法に依るべし』。此の言を唱へ已りて、卽ち寶冠、及以び明珠を脫し、悉く我に付し、還つて王の足下に置(かしむ)。又、瓔珞を以て、摩訶波闍波提に與へ、餘の莊嚴の具

【六一】（原文）汝載太子、出此王宮、近去之時、寂然無聲。

【六二】被。明本鞁。

波提、是の語を聞き已りて、迷悶して地に躃る。是の如く、展轉して、乃至、王に達す。王、此の言を聞きて、屹然聲なく、其の精魄を失し、四體を喪ふが若し。擧宮内外、皆亦是の如し。時に、諸大臣、卽ち入りて太子の住處を檢視し、宮城を案行して、城の北門の、自然に已に開けるを見、又復、車匿・揵陟を見ず、卽ち[六〇]門司に問ふ、『誰か此を開くものぞ』。互に相推撿するに、皆知らずといひ、幷に防人に問うに、亦、此の門の開ける意を解せずといふ。時に、大臣、心に自ら思惟す、『北門既に開けり。太子、必ず當に此よりして出でたるべし。宜しく速に太子の所在を尋ね覓むべし』。卽ち千乘萬騎に勅して、絡繹として四に出で、太子を追ひ求むるに、天力を以ての故に、迷うて道逕を失し、之く所を知らず。卽便ち還歸りて、大王に白して言く、『太子を推尋するに、所在を知らず』。爾の時、車匿、歩みて揵陟を牽き、及び莊嚴の具もて、悲泣嗚咽しつゝ、路に隨つて還る。擧邑の人民、此を見て驚愕し、懊惱せざるなく、悉く皆競ひ來りて、車匿に問うて言く、『汝、太子を送つて、何處に置き、今、揵陟と獨り還るか』。車匿既に諸人の此の問を得て、倍更に悲絶して、之に答る能はず。此の諸人民、揵陟が、鞍・勒・七寶の莊嚴を被帶するを見ると雖も、太子を見ず。猶、死人の、飾るに花綵を以てするが若し。

是に於て、車匿、前んで宮城に入るや、揵陟悲み嘶けば、諸廐の群馬、一時に哀鳴す。外の諸官屬、摩訶波闍波提、及び耶輸陀羅に白して言く、『車匿、唯、揵陟と俱に還る』。此の言を聞き已りて、地に宛轉して、自ら念じて曰く、『今、唯、車匿・揵陟の、相隨つて俱に還るを聞きて、太子の歸りますと道ふ聲を聞かず』。摩訶波闍波提、卽ち是の言を作す、『我、太子を養ひ、年、長大に至りて、一旦に我を捨て、所在を知らざるは、譬へば、果樹の、花を結び實を成すが、熟するに臨みて地に落つるが如し。又、飢人の、百味の饌に遇うて、之を食はんと欲するに臨みて、忽然翻り倒るゝが如し』。耶輸陀羅、又自ら言つて曰く、『我、太子と、行住に坐臥に、相遠離せざりしに、

【六〇】門司は、守門者。防人は、番兵。

か』。太子答へて言く、『汝等の所行は、至苦ならざるに非ず。然れども求むる果報や、終に苦を離れず』。太子、諸仙人と、此の議論を設けて、言語往復し、乃ち日暮に至る。太子卽便ち彼に停りて一宿し、旣に明旦に至りて、復、更に思惟す、『此の諸仙人は、苦行を修すと雖も、皆、解脫眞正の道に非ず。我、今、應に此に止住すべからず』。卽ち仙人と、辭別して去らんと欲す。時に、諸仙人、太子に白して言く、『仁者の此に來るや、我皆、我が人衆をして、威德增盛ならしむるを歡喜す。今、何が故に忽ちに去らんと欲するぞ。是の、我等【五八】威儀を失するが爲か。此の衆中、相犯觸するが爲か。何の因緣を以てか、此に住せざる』。太子、答へて言く、『是、汝等に、是の如き失あるに非ず。賓主の儀、亦少く所なし。但、汝が修する所は、苦因を增長す。我、今、道を學するは、苦本を斷ぜんが爲なり。此の因緣を以て、是の故に去るのみ』。諸仙人衆、自ら共に議して言く、『其の修する所の道は、極めて廣大たり。云何ぞ、我等、之を留むるを得ん』。

爾の時、一仙人あり。善く相法を知る。衆人に語りて言く、『今、此の仁者、諸相具足す。必ず當に一切種智を得て、天人師と爲るべし』。卽便ち俱に太子の所に往詣して、是の言を作す、『修する所の道異る。敢て相留めじ。若、去らんと欲せば、北に向つて行くべし。彼に大仙あり。【五九】阿羅邏・加蘭と名く。仁者、往いて其に就きて語論すべし。我、仁者を見るに、亦、當に、必らず、彼處に住まらざるべし』。是に於て、太子、卽便ち北に行く。諸仙人衆、太子の去るを見て、心に懊惱を懷き、合掌隨送し、極望絕視して、然る後に乃ち還る。

十七、擧宮泣悲

爾の時、太子、旣に宮を出で已りて、天曉に至る。耶輸陀羅及び諸婇女、眠より覺めて太子を見ず、悲號啼泣して、卽便ち往いて摩訶波闍波提に啓す、『今旦、忽ち太子の所在を失ふ』。摩訶波闍

【五八】威儀は、たちゐふるまひの作法にかなふこと。犯觸は、作法を破り規律にそむくこと。威儀を失ひ、犯觸すとは、賓客に對して、禮儀に欠けたりやの意。

【五九】阿羅邏・加蘭（Arāḷa-kālāma）。一仙人の名なれども、此經は、分ちて二仙人と爲し。優陀羅仙人の名なし。加蘭の加、明本に迦に作る。本經も、後に迦蘭に作る。

し、涕泗交流れ、卽ち揵陟を牽き、寶冠・嚴身の具を執持し、車匿は號咷し、揵陟は悲鳴しつゝ、路に緣りて歸る。

十六、苦行林一宿

爾の時、太子、卽便ち前んで跋伽仙人所住の處に至る。時に彼の林中に諸鳥獸あり。旣に太子を見て、皆悉く矚目し、端住して瞬かず。跋伽仙人、遙に太子を見て、自ら念言す、『此は是何の神ぞ。日・月天たりや。帝釋たりや』。便ち眷屬と。來りて太子を迎へ、深く敬重を生じて、是の言を作す、『善來、仁者[五六]』。太子、旣に諸仙人衆を見、心意柔軟・威儀庠序として、太子、便卽ち其の住處に前む。諸仙人等、復、威光なく、皆悉く同じく來りて、太子を請じて坐せしむ。太子坐し已りて、彼の仙人の行を觀察するに、或は草を以て衣と爲す者あり。或は樹皮・樹葉を以て、服と爲す者あり。或は、唯、草木花果のみを食ふあり。或は、一日一食、或は二日一食、或は三日一食にして、是の如く、自餓の法を行ずるあり。或は水火に事へ、或は日月を奉ず。或は一脚を翹げ、或は塵土に臥す。或は荊棘の上に臥すあり。或は水火の側に臥すあり。太子、旣に此の如き苦行を見て、卽便ち跋伽仙人に問ふ、『汝等、今、此の苦行を修する、甚、奇特たり。皆、何等の果報をか求めんと欲する』。仙人、答へて言く、『此の苦行を修するは、天に生れんと欲するが爲なり』。太子又問ふ、『諸天樂しと雖も、福盡くれば則ち窮り、六道に輪廻して、終に苦聚と爲る。汝等、云何ぞ諸の[五七]苦因を修して、以て苦報を求むる』。太子卽便ち心に自ら歎じて言ふ、『商人は寶の爲の故に、大海に入り、王は國土の爲に、師を興して相伐つ、今、諸仙人は、生天の爲の故に、此の苦行を修す』と。是の歎を作し已り、默然として住す。

跋伽仙人、卽ち太子に問ふ、『仁者、何の意ぞ、默然として言はざる。我等の所行は、眞正に非る

【五六】仁者。敬意を含めたる第二人稱。

【五七】苦因、苦報。苦行を修するは、苦因なり。輪廻を免れざる天に生るゝは苦報なり。

ぜず。

爾の時、太子、便ち利劍を以て、自ら鬚髮を剃り、即ち發願して言く、『今、鬚髮を落しぬ。願くは、一切の與に、煩惱、及以び[五四]習障を斷除せん』。釋提桓因、髮を接して去る。虛空の諸天、燒香散花して、異口同音に讃じて言く、『善哉、善哉』。爾の時、太子、鬚髮を剃り已りて、自ら其の身に著くる衣の、猶、是七寶なるを見て、即ち心に念言す、『過去の諸佛の出家の法や、著くる所の衣服、當に此の如くなるべからず』。時に淨居天、太子の前に於て、化して獵師となり、身に袈裟を被る。太子、既に見て、心大に歡喜して、之に語つて言く、『汝が著くる衣は、是寂靜の服、往昔の諸佛の[五五]幖幟とする所なり。云何ぞ、此を著けて、罪行を爲すか』。獵師答へて言く、『我、袈裟を著けて、以て群鹿を誘ふ。鹿、袈裟を見て、皆來りて我に近づく(を以て)、我、之を殺すを得』。太子又言く、『若し、汝が說ふ如くば、此の袈裟を著くるは、但、諸鹿を殺すことを爲さんと欲するが故のみ。解脫を求めて、之を服するにあらず。我、今、此の七寶の衣を持つて、汝と貿易へん。吾が此の衣を服するは、一切衆生を攝救して、其の煩惱を斷ぜんと欲するが爲なり』。獵者答へて言く、『善い哉、告ぐるが如くせん』。即ち寶衣を脫して、獵者に與へ、自ら袈裟を著け、過去の諸佛所服の法に依る。時に、淨居天、還、梵身に復して、虛空に上升し、其の所止に歸る。時に、空中に、異光明あり。車匿、此を見て、心に奇特を生じ、『未曾有なり。今、此の瑞應は、小緣の爲に非ず』と歎ず。車匿、既に、太子の鬚髮を剃除して、身に袈裟を著くるを見、定んで太子の必ず廻るべからざるを知り、地に悶絕して、倍、懊惱を增す。爾の時、太子、之に語つて言く、『汝、今、宜しく此の悲愁を捨てゝ、便ち宮城に還り、具に我が意を宣ぶべし』。太子、是に於て、即ち徐に前行す。車匿歔欷して、頭面もて禮を作し、乃ち、遠望して、太子を見ざるに至りて、然る後に方に起ち、擧體戰き掉うて、自ら勝ふる能はず。揵陟及び莊嚴の具を顧み看て、嗚咽悲哽

【五四】習とは、煩惱の餘習、煩惱の體既に盡きたる後に、猶殘る習慣性をいふ。

【五五】幖幟。袈裟は三世諸佛の解脫幢相といはる。諸佛これによつて自己の解脫を表示す。

聖王の、國位を厭ふ者ある、山林に入りて、出家求道せんに、中途に、還、五欲を受くるあるなし。我が、今の出家も、亦復、是の如し。未だ菩提を成ぜずんば、終に宮に還らじ。内外の眷屬、皆當に我に於て恩愛の情あるべければ、汝が辯を以て、爲に之を解釋くべし。我に於て、横に憂惱を生ぜしむるなかれ』。太子、又、身の瓔珞を脫して、以て車匿に授け、之に語つて言く、『汝、我が爲に、此の瓔珞を持つて、摩訶波闍波提に奉りて、道ふべし、「我、今、諸苦の本を斷ぜんが爲の故に、宮城を出で、此の願を滿ぜんを求む。復、我に於て、反りて更に苦を生ずるなかれ」と』。又、身上の餘の莊嚴具を脫して、以て耶輸陀羅に與へ、亦復、語りて言へ、『人の世に生るゝ、愛別離の苦あり。我、今、此の諸苦を斷ぜんと欲するが爲に、出家學道す。我を以ての故に、恒に愁憂を生ずるなかれ』。幷に、諸の親屬も、皆、亦、是の如し。爾の時、車匿、此の語を聞き已りて、倍、悲絕を增すも、太子の勅令に違ふに忍びず。卽便ち長跪して、寶冠・明珠・瓔珞、及び嚴飾の具を受け取り、淚を垂れて言く、『我、太子の此の如き志願を聞きて、擧身戰き掉ふ。設令、人有り、心、木石の如くなるも、此の語を聞かば、亦、當に悲感すべし。況んや、我は、生來、太子に奉侍せり。此の誓言を聞いて、感絕せざらんや。唯、願はくは、太子、此の志を捨てよ。父王及び摩訶波闍波提・耶輸陀羅、幷に餘の親屬をして、大悲苦を生ぜしむるなかれ。若、決定して、此の意を迴さゞらしめば、是の處に於て、復、我を棄つるなかれ。我、今、太子の足下に歸依せん、終に遠離して去るの理あるを見ず。設し、當に宮に還らば、王、必ず、我を責むべし、「云何ぞ、獨、太子を委てゝ歸る」と。何の言もて、大王に上答せしめたまはんと欲するか』。太子答へて言く、『汝、今、應に此の如き語を作すべからず。世は皆離別す、豈常に集聚せん。我、生れて七日にして、母、命終したまへり。母子だも、尙、死生の別あるを、況んや餘人をや。汝、我に於て、偏へに戀慕を生ずるなかれ。揵陟と倶に宮に還るべきなり』。是の如く、再び勅するも、猶、去るを肯ん

云何ぞ太子を捨てゝ、獨、宮に還らんや』。太子卽便ち車匿に答へて言く、『世間の法、獨り生れて獨り死す、豈、復、伴あらん。又、生老病死の諸苦あり。我、當に云何ぞ此と侶と作るべき。吾、今、諸苦を斷ぜんと欲するが爲の故に、此に來至す。苦、若、斷ぜん時、然る後、當に一切衆生の與に伴侶と作るべし。我、卽時に於て、諸苦未だ離れず。云何ぞ、汝が爲に侶と作るを得ん』。車匿又、曰く、『太子、生來、深宮に長じ、身體手足、皆悉く柔軟に、眠臥床褥、細滑ならざるなし。如何ぞ一旦に荊棘瓦礫泥土を履藉して、樹下に止宿せん』。太子答へて言く、『誠に汝が語の如し。設し、我、宮に住せば、乃ち此の荊棘の患を免るべきも、老病死の苦に、會、自、侵されん』。車匿、旣に、太子の此の語を聞き、悲泣して淚を垂れ、默然として住す。

時に、太子、卽ち車匿に就いて、七寶の劍を取りて師子吼す、『過去の諸佛は、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんが爲の故に、飾好を捨棄し、鬚髮を剃除したまへり。我、今、亦、當に、諸佛の法に依るべし』。此の言を作し已りて、便ち寶冠を脫し、髻中の明珠を、以て車匿に與へ、之に語つて曰く、『此の寶冠、及以び明珠を以て、王の足下に致し、汝、我が爲に大王に上白すべし、「我、今、生天の樂の爲の故ならず。亦復、父母に孝順ならざるに非ず。亦、忿恨瞋恚の心なし。但、彼の生老病死を畏るゝを以て、除斷せんが爲の故に、此に來至するのみ」と。汝、應に我を助けて隨喜欣慶すべし。吉祥に於て、更に悲愁を生ずる勿れ。父王、若、我が今の出家は、未だ是時ならずと謂ひたまはゞ、汝、我が語を以て、大王に上啓せよ、「老病死の至る、豈、定まれる時あらんや。人、少壯なりと雖も、焉んぞ此を免るゝを得んや」と。父王、若、復、我を責めて、「本、要ず、子あれば當に出家を聽すべし。今、未だ子あらざるに、云何ぞ去るか。及び宮を出づる時、《云何ぞ》※啓聞せざる」と言ひたまはゞ、汝、我が爲に、具に父王に啓すべし、「耶輸陀羅、久しく已に身めるあり。王、自ら之に問ひたまへ。昔の勅は此の如かりき。[五三]專輒を爲すに非ず」と。往古に諸の轉輪

※啓聞。聖語藏本に啓問に作る。

【五三】專輒は、もつぱらなること。

去の諸佛、出家の法なり。我、今、亦然り』。是に於て、諸天、馬の四足を捧げ、并に車匿を接し、釋提桓因、蓋を執りて、隨從す。諸天卽便ち城の北門をして、自然に開かしめて、聲あらしめず。太子、是に於て、門より出づれば、虚空の諸天、讃歎しつゝ隨從す。爾の時、太子、又師子吼す、『我、若、生老病死・憂悲苦惱を斷ぜずんば、終に宮に還らじ。我、若、阿耨多羅三藐三菩提を得ず、又復、法輪を轉ずる能はずんば、要らず、還、父王と相見じ。若、當、恩愛の情を盡さずば、終に、還、摩訶波闍波提、及び耶輸陀羅を見じ』。太子が此の誓を說く時に當り、虚空の諸天、讃じて言く、『善い哉、斯の言必ず果さん』。天曉に至りて、所行の道路、已に三踰闍那なり。時に諸天衆、既に太子に從ひ、此の處に至り已るや、所處の事畢りて、忽然として現ぜず。爾の時、太子、次で、行いて、彼の[48]跋伽仙人の苦行林中に至る。太子、此の園林の、寂靜にして、諸の諠鬧なきを見、心に歡喜を生じて、[49]諸根悅豫す。卽便ち馬を下り、背を撫でゝ曰く、『爲し難き所の事を、汝は作し已畢りぬ』。又、車匿に語る、『馬の行く駿疾にして、[50]金翅鳥王の如かりしに、汝は恒に隨從して、我が側を離れず。世間の人、或は善心あるも、形隨はず。或は形力を運ぶも、心稱はず。汝、今、心形皆悉く違ふなし。又、世間の人は、富貴に處れば、競ひ隨つて奉事す。我既に國を捨てゝ、此の林中に來るに、唯汝一人のみ、獨、能く我に隨ふ。甚、希有と爲す。我、今、旣已に閑靜處に至りぬ。汝、便ち揵陟と俱に宮に還るべし』。爾の時、車匿、此の語を聞き已りて、悲號啼泣し、迷悶して地に躃れ、自ら勝ふる能はず。是に於て、揵陟、既に遣らるゝと聞き、膝を屈して足を舐め、涙落つる雨の如し。車匿答へて言く、『我、今、云何ぞ、太子の此の如く言ふを聽くに忍びんや。我、宮中に於て、大王の勅に違ひ、輙、揵陟に[51]被せて、以て太子に與へ、今日、來りて此に至らしむるを致しぬ。父王、及び摩訶波闍波提、太子を失ふが故に、必、當に憂惱すべし。宮中内外、亦、應に[52]搔動すべし。又復、此の處、諸の嶮難多く、猛獸毒蟲、道路に交横す。我、今、

【四八】跋伽(Bhaga)。又は(Bhārgava)。
【四九】諸根は眼・耳・鼻・舌・身・意の六根。悅豫はよろこびたのしむ。
【五〇】金翅鳥(Garuḍa)。龍を取りて食とすといはるゝ鳥。想像の上に成れる神祕的動物。
【五一】被。明本に鞁に作る。馬をよろほふこと。
【五二】搔。宋元明三本、騷に作る。

を見て、（思惟すらく）、『髮・爪・髓腦・骨・齒・髑髏・皮膚・肌肉・筋・脈・肪・血・心・肺・脾・腎・肝膽・腸胃・屎尿・涕唾、外に革囊を爲し、中に臭穢を盛る。一の奇とすべきなし。强ひて熏ずるに香を以てし。飾るに花綵を以てす。譬へば、假借せるを、當に還すべきが如く、亦久しきを得ず、百年の命、臥して其の半を消す。又、憂惱多くして、其の樂幾くもなし。世人云何ぞ恒に此の事を見て、覺悟せず、又、其の中に於て、婬欲に貪著するぞ。我、今、當に、古昔諸佛所修の行を擧し、急に應に此の大火の聚に遠かるべし』。

爾の時、太子是を思惟し已りて、後夜に至る。淨居天王、及び欲界の諸天、虛空に充滿し、即ち共に聲を同じくして、太子に白して言く『內外の眷屬、皆悉く惛臥す。今、正に、是出家の時』。爾の時、太子、卽便ち、自ら往いて車匿の所に至るに、天力を以ての故に、車匿自ら覺む。之に語りて言く『汝、我が爲に 犍陟[四二]に 被[四三]せ來るべし』。爾の時、車匿、此の言を聞き已りて、擧身戰怖して、心に猶豫を懷く。一には、太子の命に違ふを欲せず。二には、王の勅旨の嚴峻なるを畏る。思惟良久しくして、淚を流して言ふ『大王の慈勅、是の如きの嚴（あり）、且つ又、今は、遊觀の時に非ず。又怨敵を降伏するの日に非ず。云何ぞ、此の後夜の中に於て、忽ちに馬を索め、何くの所にか之かんと欲したまふぞ』。太子、又復、車匿に語りて言く『我、今、一切衆生の爲に、煩惱結[四四]使の賊を降伏せんと欲するが故ぞ。汝、今、應に我が此の意に違ふべからず』。爾の時、車匿、聲を擧げて號泣し、耶輸陀羅及び諸眷屬をして、皆悉く太子の當に去るべきを覺り知らしめんと欲す。天神力を以て、惛臥すること故の如し。車匿卽便ち馬を牽いて來る。太子徐に前んで、車匿及以び犍陟に語る『一切の恩愛、會は當に別離すべし。世間の事は、果遂すべき易く、出家の因緣は、甚だ成就し難し』。車匿聞き已りて、默然として言なく、是に於て、犍陟は復 噴鳴[四五]せず。

爾の時、太子、明相[四六]出づるを見るや、身の光 明[四七]を放ちて、十方を徹照し、師子吼して言く、『過

【四二】犍陟（Kaṇṭhaka）。太子の愛乘せる白馬の名。
【四三】被。明本に鞁に作る。鞁は馬に裝束するなり。
【四四】結は、心身を纏縛するの義。使は、心身を驅使するの義。共に煩惱の異名。
【四五】噴は、鼻をならすなり。
【四六】明相。明星のこと。「方廣大莊嚴經」を見るに、こゝに相當する個所は、弗沙之星、正與月合とあり。弗沙、又は沸又は孛とせられ、（Puṣya）の音譯。鬼宿なり。明相は普通には明け方に始て天空白色を呈する時に云はる。此の明相の現ずるを待つて朝粥を食するを律制とす。
【四七】放身光明。「大莊嚴經」に、出家せんとする時に當りて、菩薩放大光明、照燭一切無量世界とあり。本經にも前に既に放身光明の事あり。

の期を過ぎなば、轉輪王の位、自然に至り、復出家せじ』。

爾の時、太子、心に自ら念言す、『我、年、已に一十有九に至り、今は是二月、復是七日なり。宜しく應に方便して出家を思求すべし。所以は何。今、正に是時なり。又父王に於て所願已に滿ずればなり』。此の念を作し已りて、身より光明を放ちて、四天王宮を照し、乃至、淨居天宮を照し、人間をして、此の光明を見しめず。爾の時、諸天、此の光を見已りて、皆太子の出家の時至るを知り、即便ち來り下りて、太子の所に到り、頭面に足を禮し、合掌して白して言ふ、『[四〇]無量劫來、修せる所の[四一]行願、今、正に是成熟の時』。是に於て、太子、諸天に答へて言く、『汝等の語の如く、今、正に是時なり。然れども、父王、內外の官屬に勅して、嚴に防衛せらる。去らんと欲するも、從ふなし』。諸天、白して言く、『我等、自ら當に諸の方便を設け、太子をして出でしめ、知るもの無からしむべし』。諸天即便ち其の神力を以て、諸官屬をして、皆悉く惛臥せしむ。

爾の時、耶輸陀羅、眠臥の中に、三大夢を得たり。一には、月地に墮つと夢む。二には、牙齒落つと夢む。三には、右臂を失ふと夢む。此の夢を得已りて、眠の中より驚き覺め、心大に怖懼し、太子に白して言く、『我、眠の中に於て、三惡夢を得たり』。太子問うて言く、『汝が夢は、何等ぞ』。耶輸陀羅、即便ち具に夢むる所の事を說く。太子、語りて言く、『月猶天に在り。齒また落ちず。臂復尙在り。當に知るべし、諸の夢は虛假にして、實に非るを。汝、今、應に橫に怖畏を生ずべからず』。耶輸陀羅、又太子に語る、『我が自ら夢みる事を忖る如くんば、必ず是太子出家の瑞なり』。太子又答ふ、『汝、但安眠せよ。此の慮を生ずる勿れ。要、汝をして不祥の事あらしめじ』。耶輸陀羅、此の語を聞き已りて、即便ち還眠る。太子、即ち坐より起ち、遍く妓女、及び耶輸陀羅を觀るに、皆木人の如く、譬へば芭蕉の中に堅實なきが若し。或は樂器の上に倚り伏して、臂脚の地に垂る〻あり。更に相枕し臥して、鼻涕・目涙し、口中より涎を流す。又復、遍く妻及び妓女を觀、其の形體

【四〇】無量劫來。劫は劫波(Kalpa)の略。非常の長時なり。無量無限の時以來の意。

【四一】行願。願は志願、行は之に應ずる實行。成道の大願を立て、種々の身を受けて、この大願に向つて修し來りしをいふ。

別離苦を、皆解脫せしめん。願はくは、必らず、許を垂れて、留難せられざれ』。時に、白淨王、太子の語を聞きて、心大に苦痛すること、猶、金剛の、山を摧破するが如く、擧身戰き掉ひ、本座に安んぜず、太子の手を執りて、復言ふ能はず。啼泣流涙し、嘘唏哽咽し、是の如き、良久しうして、微聲に言ふ『汝、今宜しく應に出家の意を息むべし。所以は何。年既に少壯、國未だ嗣あらざるを、便ち我に委して、嘗て[三六]廻顧せずとは』。爾の時、太子、既に、父王の流涙して許さゞるを見て、所止に還歸し、出家を思惟し、愁憂して樂しまず。

爾の時、迦毘羅旆兜國の諸大相師、太子を[三七]占知す『若、出家せずんば、七日を過る後、轉輪王の位を得、四天下に王として、七寶自ら至らん』と。各、知る所を以て、往いて、王に白して言く『釋迦種姓、此に於て、方に興らん』。王、是の語を聞きて、心に歡喜を生じ、即ち諸臣幷に釋種の子に勅す『汝、相師の此の如く言ふを聞くや不や。皆、應に、日夜、太子を侍衞し、城の四門に於て、門ごとに各千人もて、城外[三八]一踰闍那內を周匝して、人衆を邏邐して、之を防護すべし』。復、耶輸陀羅、幷に諸內宮に勅す『倍、警戒を加へ、七日を過るまで、家を出でしむる勿れ』。

時に、王、又來りて太子の所に至る。太子、遙に見、卽ち往いて奉迎し、頭面に足を禮して、起居を問訊す。王、太子に語る『我、昔、既に阿私陀の說を聞き、及び衆相師、幷に諸奇瑞にて、必定して、汝が世に處するを樂しまざるを知りぬ。國嗣既に重し。屬もて當に相繼ぐべし。唯、願はくは、我が爲に、汝が一子を生みて、然る後に俗を絕てよ。復相違せじ』。爾の時、太子、父王の言を聞きて、心に自ら思惟す、『大王の苦に我を留むる所以のものは、正に自ら國に紹嗣なきが爲のみ』。是の念を作し已りて、王に答へて言く『善い哉、勅の如くせん』とて、卽ち左手を以て、其の妃の腹を指す。時に耶輸陀羅、便ち體の異るを覺え、自ら娠めるあるを知る。王、太子が『勅の如くせん』の言を聞き、[三九]心に大に歡喜して、謂へらく『太子、七日の內、必ず未だ兒あらじ。若、此

【三六】廻顧。聖語藏本に懷顧に作る。

【三七】占知。宋・元・明三本幷に聖語藏本に、幷知に作る。

【三八】踰闍那(Yojana)。印度の里數の單位。或は四十里に當るとせらる。王軍一日の行程なりといふ。

【三九】(原文、)心大歡喜、當謂太子七日之內とあり。當の字誤つて挿入せられしならん。之を刪れり。

を開悟し、解脫の路を示す』。此の念を作し已りて、卽ち自ら〔三三〕方便を思惟して、出家の因緣を求覓む。

爾の時、白淨王、優陀夷に問うて言く、『太子の今出、寧ろ樂めるありや不や』。時に優陀夷、卽ち答へて言く、『太子向きに出でゝ、經し所の道路、諸の不祥なし。既に園中に到りて、太子獨り自ら樹下に在り、遙に一人を見たり。鬚髮を剃除し、〔三四〕染色衣を著け、太子の前に來りて、共に言語し、言語既に畢りて、虛に騰つて去る。竟に亦何を論說せるかを知らず。太子是に因りて、駕を嚴しめて歸る。爾の時に當りて、顏容歡悅し、還つて宮中に至りて、方に憂愁を生じぬ』。時に、白淨王、既に此の語を聞きて、心に狐疑を生じ、亦復、是何の瑞相たるかを知らず。深く懊惱を懷きて、自ら念言す、『太子、決定して捨家學道せん。又、其の妃を納れ、久しうして子なし。我、今、應に耶輸陀羅に勅すべし。〔三五〕當に思ひ方便して、國嗣を絕つ莫るべし。復、應に警戒して、太子の去るを知らざらしむる勿るべし』。既に是の念を作すや、思惟する所の如く、卽便ち耶輸陀羅に勅す。耶輸陀羅、王の勅を聞き已りて、心に慚愧を懷き、默然として住し、行止坐臥、太子を離れず。時に王、復、諸の妙妓女を增して、以て之を娛樂(せしむ)。

十五、出　家

爾の時、太子、年十九に至り、心に自ら思惟す、『我、今、正にこれ出家の時』と。便ち往いて、父王の所に至る。威儀庠序として、猶、帝釋の、梵天に往詣するが如し。傍臣見已りて、王に白して言く、『太子、今、大王の所に來る』と。王、此の言を聞きて、憂喜交集る。太子既に至りて、頭面に禮を作す。爾の時、父王、卽便ち之を抱き、勅して坐せしむ。太子坐し已りて、父王に白して言く、『恩愛の集會には、必ず別離あり。唯、願はくは、我が出家學道を聽したまへ。一切衆生の愛

〔三三〕方便。方法、てだて。

〔三四〕染色衣。袈裟のこと。食ふべからざる草木の花葉皮を以て染むるを以てなり。

〔三五〕(原文)我今應勅耶輸陀羅、當思方便、莫絕國嗣。當の字、或は常の誤ならん。

又諸の妓女衆に嚴勅す、『太子の意を悅ばせ、晝夜を捨つるなかれ』。

時に、白淨王、天力にして、復人事に非るを知ると雖も、太子を愛重して、言はざる能はず。心に自ら思惟す、『太子前に已に三城門を出でたり。今は唯北門のみあつて未だ出でず。それ必ず久しからずして、更に出遊を求めん。當に復彼の外園林を莊嚴して、倍光嚴ならしめ、諸の[二五]不可意の事あらしむるなかるべし』。思惟せる所の如く、具に諸臣に勅す。時に、王、又心に自ら願つて言く、『太子、若、城の北門を出でん時、唯、願はくは、諸天、復、不吉祥の事を現じて、我が子をして心に憂惱を生ぜしむるなからんを』。既に心願し已りて、遂に御者に勅す、『太子、若、出でば、當に乘馬をして、四に、諸人民の光麗なる莊飾を望み見るを得しむべし』。是の時、太子、王に啓して、出遊(せんと)す。王、違ふに忍びず、便ち優陀夷、及び餘の官屬と、前後に導從して、城の北門を出でゝ、彼の園所に至る。太子、馬を下り、樹に止息し、侍衞を除去して、端坐思惟し、世間の老・病・死・苦を念ず。時に、淨居天、化して比丘と作り、法服にして、[二六]鉢を持ち、手に錫杖を執り、地を視て行き、太子の前に在り。太子、見已りて、即便ち問うて言く、『汝は是何人ぞ』。比丘答へて言く、『我は是比丘』。太子又問ふ、『何をか比丘とはいふ』。答へて言く、『能く[二七]結賊を破り、[二八]後身を受けざるが故に、比丘といふ。世間は皆悉く無常危脆なり。我が修學する所は、[二九]無漏の聖道なり。[三〇]色・聲・香・味・觸・法に著せず、永く[三一]無爲を得て、[三二]解脫の岸に到るなり』。此の言を作し已り、太子の前に於て、神通力を現じて、空に騰りて去る。爾の時に當り、諸從官屬、皆悉く覩見す。

太子、已に此の比丘を見、又廣く出家の功德を說くを聞きて、其の宿懷厭欲の情に會し、便ち自ら唱へて言く、『善哉、善哉、天人の中、唯此を勝と爲す。我當に決定して是の道を修學すべし』。此の語を作し已りて、即便ち馬を索めて宮城に還歸る。時に、太子、心に欣慶を生じて、自ら念言す、『我、先に老・病・死・苦を見て、晝夜常に此が爲に逼らるゝを恐れしに、今、比丘を見るや、我が情

【二五】不可意。可意はこゝろにかなふこと。不可意は、心にかなはざるなり。

【二六】鉢。鉢多羅(Pātra)の略。應器と譯す。一人の食量に應ずる器の義にして僧侶の食器なり。僧侶の食器は、一鉢に限られたり。

【二七】結は、煩惱の異名、心身を纏縛するを以てなり。

【二八】後身。輪廻の後身なり。後身を受けずとは、寂滅涅槃に入りて、輪廻の身を脫するをいふ。

【二九】無漏。漏は煩惱の異名。漏は漏泄の義。煩惱日夜に六根より漏れ流るゝ故にいふ。無漏は、煩惱を離れたるをいふ。

【三〇】色聲等。六境といひ、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根に對する外境なり。

【三一】無爲。爲は爲作。生滅變化をいふ。無爲は、生滅變化なき涅槃をいふ。

【三二】解脫。外境の爲に束縛せらるゝを離脫するを云ふ。

らん。今、誠言を獻ぜん。願はくは、責められざれ。古昔の諸王も、及び今現在のも、皆悉く五欲の樂を受けて、然る後に出家す。太子云何ぞ永絕して顧みざる。又、人の世に生るゝ、宜しく人行に順ふべし。國を棄てゝ、道を學するものあることなし。唯願はくは、太子、五欲を受けて、子息あらしめ、王嗣を絕たざれ』。爾の時、太子、之に答へて言く、『誠に所說の如し。[二三]但、我、國を捐つるを以ての故に、爾るにあらず。亦復、五欲に樂なしと言はず。老病生死の苦を畏るゝを以ての故に、五欲に於て、敢て愛著せざるなり。汝が向に言る所、「古昔の諸王は、先づ五欲を經て、然る後に出家す」と。此の諸王等、今、何許にか在る。愛欲を以ての故に、或は[二四]地獄に在り、或は餓鬼に在り、或は畜生にあり、或は人・天に在り。是の如き輪轉の苦あるを以ての故に、是を以て、我、老病の苦、生死の法を離れんと欲するのみ。汝、今、云何ぞ我をして、之を受けしむる』。時に優陀夷、才辯を竭して、太子に勸奬すと雖も、迴らしむる能はず。卽便ち退坐して、所止に歸る。太子、仍つて勅して駕を嚴しめて宮に還る。諸の妓女衆、及び優陀夷、愁憂慘戚・顏貌顰蹙して、人の新に愛する所の親屬を喪ふが如し。太子、宮に到りて、惻愴常に倍す。

時に白淨王、優陀夷を呼びて、之に問うて言く、『太子の今出、寧ろ樂めるありや、不や』優陀夷言く、『城を出づる、遠からずして、死人に逢ひ見る。亦、其の何れよりして來れるかを知らず。太子と我と、同時に之を見たり。太子問うて言く「此は何人たるか」。我も亦覺えず「此は死人」と答へぬ』。時に、王、卽ち復諸の從者に問ふ『汝等、皆、城の西門外に、死人あるを見しや不や』。從者答へて言く『我等見ず』。王、此の語を聞きて、神意豁然として、自ら念言す、『太子、優陀夷の二人のみ獨見たるは、此は是れ天力なり、諸臣の咎に非ず。必定して當に阿私陀の言の如くなるべし』。此の念を作し已りて、心大に苦惱し、復妓女を增して、以て之を娛樂(せしめ)、日々人を遣はして、太子を慰誘し、之に語つて言く、『國は是汝の有なり。何が故に、愁憂して樂しまざるか』。王

【二三】（原文）但我不以捐國故爾。聖語藏本に、捐の字損に作る。

【二四】地獄・餓鬼・畜生・人・天を、五道又は五惡趣といふ。之に修羅を加へて、六道とす。迷界卽ち輪迴界の全部なり。

や、淨居天王の、威神の力、優陀夷をして覺えず答へ言はしむ『是れ死人なり』。太子、又、問ふ、『何を謂つて死と爲すか』。優陀夷言く、『夫れ死と謂ふは、[一八]刀風形を解いて、神識去り、四體諸根、復、知る所なきなり。此の人の世に在るや、五欲に貪著し、錢財を愛惜し、辛苦經營、唯積聚を知るのみ、無常を識らざるに、今や一旦之を捨てゝ死す。又父母親戚眷屬の爲に愛念せらるゝも、命終の後は、猶草木の如く、恩情の好惡、復相關せず。是の如く、死は誠に哀れむべきなり』。太子聞き已りて、心大に戰き怖れ、又、優陀夷に問うて言く、『唯此の人のみ死すや、餘も亦當に然るべしや』。即ち復答へて言く『一切の世人、皆應に此の如くなるべし。貴も賤も、免脫するを得る有るなし』。太子、素性、恬靜にして動じ難きも、既に此の語を聞きて、自ら安んずる能はず、即ち微聲を以て、優陀夷に語る『世間、乃ち復此の死苦あるを、云何ぞ中に於て、[一九]放逸を行じつゝ、心木石の如くにして、怖畏を知らざる』。即ち御者に勅す『車を廻らして還るべし』。御者答へて言く『前に二門を出でしに、未だ園所に至らず、中路にして反り、大王をして深く嗔責せられしむるを致せり。今、豈敢て復此の如くせんや』。時に、優陀夷、御者に語りて言く『汝が所說の如し。應に便ち歸るべからず』。即ち復前行して、彼の園中に至るに、香華幡蓋、衆伎樂を作し、衆妓の端正、猶、諸天の婇女の如く、異るなきが、太子の前に在りて、各競つて歌舞し、恣態を以て、其の意を悅ばし動かさんを冀ふ。太子の心安くして、移動すべからず。即ち園中に止り、樹間に蔭息し、其の侍衞を除きて、端坐思惟し、昔、曾て、[二〇]閻浮樹下に在りて、欲界を遠離し、乃至、[二一]第四禪定を得たりしを憶ふ。

爾の時、優陀夷、太子の所に到りて、此の言を作す『大王、勅して、太子と共に朋友たらしめらる。脫し得失あらば、互に相開悟せん。朋友の法、其の要三あり。一には、過失あるを見ば、輒ち相諫曉せん。二には、好事あるを見ば、深く[二二]隨喜を生ぜん。三には、苦厄に在りて、相棄捨せざ

【一八】刀風。無常の風。一切を斬り殺すにいふ。

【一九】放逸。精進の反對にて、善に進まざるをいふ。

【二〇】閻浮樹下。淨飯太子となつて後、父王と共に出遊せし時の樹下思惟なり。前に出づ。

【二一】第四禪定。欲界以上の色界四禪の第四。初禪は、既に欲界を離れ、飲食に要せらるゝ鼻舌の二識なきを以て、眼・耳・身・意の四識の喜樂二受のみあり、且つ覺觀の精神作用あり。第二禪は、たゞ意識あるのみにて、喜捨の二受あり。覺觀の精神もなし。第三禪は、また意識のみにて、樂捨の二受あり。第四禪は、また意識のみにて、捨受のみあり。

【二二】隨喜。他のよきを同情し喜ぶことにて、人情最も難しとする所なれば、その功德從つて大なり。

爾の時、太子、復、少時を經て、王に啓して出遊す。王、此の語を聞きて、心に自ら念言す、『彼の優陀夷、既に太子と、共に朋友たり。今、若、出遊せば、或は前に勝りて、復、俗を厭ひ出家を樂しむの心なけん』。是の念を作し已りて、卽便ち聽許す。時に、王、又復、諸大臣を集め、悉く之に語つて言く、『太子、今、復、出遊を求めぬ。我、違ふに忍びず、已に、復、之を聽しぬ。太子、前に東南の二門を出でゝ、已に老病を見、還つて輒ち憂愁せり。今は宜しく西門より出でしむべし。我が心其を慮りて、還又、樂しまず。[一七]然れども優陀夷は、是其の良友なり。冀くは、今出でゝ還らんに、復、應に、爾るべからざらんを。卿等、好く道路を修治せしめ、園林・臺觀を、皆嚴整ならしめ、香華幡蓋を、前に數倍とし、また老病臭穢ありて、道側に在らしむる無かれ』。臣、勅を受け已りて、卽ち外司に語りて、道路并に及び園林を嚴治して、光麗常に倍し、王、又、先づ諸の妙妓女を送りて、彼の園中に置き、又復、勅して優陀夷に語りて言く、『若、路側に當りて、不祥の事あらば、方便を以て、其の心を誘ひ悦ばすべし』。并に諸臣に勅して、太子に隨從し、皆伺察せしめて、若不吉あれば、遠く之を驅逐（せんと）す。爾の時、太子、優陀夷と、百官導從して、燒香散華し、衆伎樂を作して、城の西門を出づ。時に淨居天、心に自ら念言す、『先に老病を二城門に現じ、擧衆皆見たれば、白淨王をして、從者并に及び外司を嗔責せしむ。太子の今出や、王制嚴峻なり。我、今、死を現じ、若し皆見ば、王の忿怒を增し、必ず罰戮を加へ、枉、無辜に及ばん。我、今日に於て、現ずる所の事、唯、太子及び優陀夷の二人をして、見しめんのみ。餘の官屬をして、責を受けざらしめんなり』。此の念を作し已りて、卽便ち來り下り、化して死人と爲る。四人輿を擧げ、諸の香華を以て、屍上に布散し、室家大小、號哭して之を送る。爾の時、太子、優陀夷と、二人のみ獨見る。太子問うて言く、『此は何物とか爲す。花香を以て、其の上を莊飾し、復、人衆ありて、號哭して相送る』。時に優陀夷、王勅を以て の故に、默然として答へず。是の如く三たび問ふ

【一七】（原文）然優陀夷、是其良友、冀今出還不復應爾。

ず。即ち車を迴らして還りぬ』。王、此の語を聞きて、心に大に愁憂し、其の出家を慮る。時に、王、即便ち諸臣に問うて言く、『太子前には城の東門を出で〻、老人に逢ひ見て、愁憂して樂しまざりき。此の事を以ての故に、吾卿等に勅して、道路を淨治し、老病をして巷側に在らしむる無らしめぬ。云何ぞ、今、城の南門を出で〻、復、疾病の人あるを致せるか、又、太子をして逢値して之を見しめたりや』。諸臣答へて言く、『近く王の勅を受け、嚴に外司に命じて、諸臭穢・老病の、道側に在らしむるなからんとて、互に相撿覆して、敢て懈怠するなかりき。知らず、何に緣りてか、忽ちに病人ありしぞ。是我等の罪咎に非るなり』。爾の時、王、諸の從者に問うて言く、『汝等幷に病人の路に在りて、何よりして至れるかを見たりや』。從者答へて曰く、『蹤跡あるなし。何れより來れるかを知らず』。時に、王、深く太子に於て[一五]猶豫の心を生じ、其の學道を恐れ、更に妓女を增して、其の意を悅ばしめ、又復、五欲の中に於て、戀著の心を生ぜしめんを欲しぬ。

爾の時、一婆羅門子あり[一六]優陀夷と名く。聰明智慧にして、極めて才辯あり。時に、王、即便ち請じ求めて宮に入れ、之に語つて言く、『太子、今、世に在りて、五欲を受くるを樂まず。恐くはそれ久しからずして出家學道せん。汝、之と共に朋屬と作り、具に世間の五欲の樂事を說きて、其をして心動きて、出家を樂しまざらしむべし』。時に優陀夷、即便ち答へて言く、『太子の聰明、與に等しきものなし。所知の書論、皆悉く淵博にして、幷に、是、我が、今、未だ曾て聞かざる所、云何ぞ、之を誘說せしむるを見んや。譬へば、藕絲を以て、須彌を懸けんと欲する(ごとく)、我も亦是の如し。終に太子の心を迴らす能はじ。大王、既に勅して朋友と作らしむ。要らず當に自ら我が知見する所を竭すべし』。時に優陀夷、王の勅を受け已りて、太子に隨從し、行住に坐臥に、敢て遠離せず。時に、王、又復、諸妓女の、聰明智慧・顏容端正にして、歌舞に善く、能く人を惑はすものを選び、種々に莊飾し、光耀目を悅(ばしむる)を、皆悉く遣はし、往いて太子に給侍(せしむ)。

【一五】猶豫。うたがひ、ためらひ、あしやの心。

【一六】優陀夷(Udāyin)。

んを求む。吾免るゝ能はず。遂に復、之を許しぬ』。諸臣答へて言く、『當に更に外の諸官屬に嚴勅して、道路を修治し、繒の幡蓋を懸け、散華燒香し、皆華麗ならしむべし。臭穢、諸の不淨潔、及以び老病をして、道の側に在らしむるなかるべし』。爾の時、迦毘羅旆兜城の四門の外に、各一園あり。樹木花果・浴池樓觀、種々に莊嚴して、皆悉く異るなし。王、諸臣に問ふ、『外の諸園觀、何れをか勝と爲す』。諸臣答へて言く、『外の諸園觀、皆等しくして異るなく、*忉利天の歡喜の園の如し』。王、又、勅して言ふ、『太子、前に出でしは、已に東門よりせり。今は、南門より出でしむべし』。爾の時、太子、百官導從して、城の南門を出づ。時に淨居天、化して病人と作る。身瘦せ腹大に、喘息呻吟し、骨消え肉竭きて、顏貌痿黃に、擧身戰き掉うて、自ら持する能はず。兩人扶腋して、路側に在り。太子卽ち問ふ、『此は何人とか爲す』。從者答へて曰く、『此は病人なり』。太子又問ふ、『何を謂つてか病と爲す』。答へて曰く、『夫れ病と謂ふは、皆、嗜欲に由る。飮食度なければ、四大調はず、轉變して病を成し、百節に苦痛あり、氣力虛微にして、飮食寡少、眠臥安からず、身手ありと雖も、自ら運ぶ能はず、要ず他の力を假りて、然る後に坐起す』。爾の時、太子、慈悲心を以て、彼の病人を看、自ら愁憂を生じて、又復、問うて言く、『此の人獨りのみなりや、餘も皆然りや』。答へて曰く、『一切の人民、貴賤有ることなく、同じく此の病あり』。太子聞き已りて、心に自ら念言す、『此の如きの病苦、普く應に之に嬰るべし。云何ぞ世人、樂に耽りて畏れざる』と。此の念を作し已り、深く恐怖を生じて、身心の戰動すること、譬へば、月影の波浪の水に現ずるが如し。從者に語りて言く、『此の如き身は、是、大苦の聚なるを、世人は、中に於て橫に歡樂を生じ、愚癡・無識にして、覺悟するを知らず。今、云何ぞ、彼の園に往きて、遊觀嬉戲せんと欲する』と。卽便ち車を迴し、還つて王宮に入り、坐に自ら思惟し、愁憂して樂しまず。王、從者に問ふ、『太子今出でゝ、寧ろ樂しめる有りや不や』。從者答へて言く、『始め南門を出でゝ、病人に逢ひ見たり。此を以て樂しま

*忉利天歡喜園、前に出づ。

せんを樂ひ欲す』。王、此の語を聞き、心に歡喜を生じて、自ら念言す、『太子は當に是宮に在りて夫婦の禮を行ふを樂しまざるべし。所以に園林に出でゝ去らんを求むるのみ』。卽便ち之を聽し、諸群臣に勅して、園觀を整治し、經る所の道路を、皆淸淨ならしむ。太子、卽便ち往いて王の所に至り、頭面に足を禮し、辭して出で去る。時に、王、卽便ち一舊臣の、聰明智慧にして、言辯に善き者に勅して、太子に從はしむ。爾の時、太子、諸官屬と、前後に導從（せられて）、城の東門より出づ。國中の人民、太子の出るを聞き。男女路に盈ち、觀る者雲の如し。時に、※淨居天、化して老人と作り、頭白く背傴り、杖に拄へられて羸歩す。太子、卽便ち從者に問うて言く、『此は何人とか爲す』。從者答へて曰く、『此は老人なり』。太子、又問ふ、『何を謂つてか、老と爲す』。答へて曰く、『此の人、昔日、曾て嬰兒・童子・少年を經たり。遷謝して住まらず。遂に根熟するに至り、形變じ色衰へ、飮食消せず、氣力虛微、坐起に〔一三〕苦極し、餘命幾くもなし。故に謂つて老と爲す』。太子、又問ふ、『唯、此の人のみ老なりや、一切皆然りや』。從者答へて言く、『一切、皆悉く應當に此の如くなるべし』。爾の時、太子、是の語を聞き已りて、大苦惱を生じて、自ら念言す、『日月流れ邁き、時變り歲移り、老の至る電の如し。身安んぞ恃むに足らん。我、富貴と雖も、豈獨免れんや。云何ぞ、世人、而も怖畏せざる』。太子、本より以來、世に處するを樂しまず、又、此の事を聞きて、益厭離を生じ、卽ち車を迴して還り、愁ひ思うて樂しまず。時に、王、聞き已りて、心に煎憂を懷き、其の學道を恐れ、更に妓女を增し、以て之を娛樂（せしむ）。

爾の時、太子、復、少時を經て、王に啓して出遊す。王此の言を聞き、心に憂慮を生じて、自ら念言す、『太子前に出でゝ、老人に逢ひ見て、憂愁して樂しまず。今、云何ぞ、復、出るを求むる』。王、太子を愛して、違異するに忍びず。〔一四〕僶俛して之に從ひ、卽ち諸臣を集めて共に議して言く、『太子前には城の東門を出でゝ、老人に逢ひ見、還つて輒ち樂まざりき。今、已に、復、出でゝ遊觀せ

※淨居天。前に出づ。

【一三】極。つかる。

【一四】僶。心に欲せざる事を勉めてなす。俛。勉に同じ、つとむ。

く其が爲に婚所を訪ね索むべし』。諸臣答へて言く、『【一〇】一釋種婆羅門あり。【一一】摩訶那摩と名く。其の人に女あり。【一二】耶輸陀羅と名く。顏容端正にして、聰明智慧あり、賢才人に過ぎ、禮儀備に擧る。是の如き德あり。太子の妃たるに堪ふ』。王卽ち答へて言く、『若、卿の語の如くば、便ち爲に之を納れん』。王、宮內に還り、卽ち宮中の聰明有智なる舊宿女人に勅す、『汝、往いて摩訶那摩長者の家に至り、其の女の容儀禮行の、何如たるかを瞻看すべし。彼に停まる、滿七日に至るべし』。王勅を受け、已りて、卽便ち彼の長者の家に往き、七日中に於て、具に此の女を觀、還つて王に答へて言く、『我、此の女の容貌端正・威儀進止を觀るに、與に等しき者なし』。王其の言を聞きて、極大歡喜し、卽便ち人を遣はして、摩訶那摩に語つて言く、『太子年長じて、納妃を爲さんと欲す。諸臣幷に言ふ、「汝が女淑令なり。宜しく此の擧に堪ふべし」。と今、相屈せんと欲す』。時に、摩訶那摩、王の使に答へて言く、『謹んで勅旨を奉ぜん』。王卽ち諸臣をして、吉日を擇び採り、車馬乘を遣はして、往いて之を迎へしむ。旣に宮に至り已るや、太子、婚姻の禮を具足し、又復、更に諸妓女衆を增して、晝夜娛樂(ましむ)。爾の時、太子、恒に其の妃と、行住坐臥、未だ曾て俱にせずんばあらざるも、初より自ら世俗の意あるなく、靜夜中に於て、但、禪觀を修するのみ。時に、王、日々、諸の婇女に問ふ、『太子は妃と相接近するや不や』。婇女答へて言く、『太子に夫婦の道あるを見ず』。王、此の語を聞きて、愁憂して樂しまず。更に妓女を增して、之を娛樂(せしむ)。是の如く、時を經るも、猶、接近せず。時に、王、深く不能男ならんを疑ひ恐れぬ。

十四、四門遊觀

爾の時、太子、諸妓女の、花果茂盛し、流泉淸涼なる園林に歌詠するを聞き、太子忽ち便ち出でて遊觀せんと欲す。卽ち妓女を遣はして往いて王に白して言く、『在宮日久し。暫く園林に出で遊戲

【一〇】太子の妃につきては、諸說一ならず。或は一人と爲すあり。或は三人と爲すあり。更に一人說につきても、本經は釋種婆羅門の女耶輸陀羅と爲し、「普曜經」は執杖(Daṇḍapāṇi) 釋種の女瞿夷 (Gopī)と爲し、「本行集經」は釋種大臣檀荼波尼(Daṇḍapāṇi)の女瞿多彌(Gautamī)と爲す。

【一一】摩訶那摩(Mahānāma)。

【一二】耶輸陀羅(Yaśodharā)。

十二、樹下思惟

爾の時、太子、王に出遊せんを啓す。王卽ち聽許す。時に王、卽ち太子幷に諸群臣と、前後に導從せられて、國界を按行し、次で復、前行して王の田所に至りて、卽便ち閻浮樹下に止息して、諸の耕人を看る。爾の時、淨居天、壤蟲を化作し、烏隨つて之を啄む。太子、見已りて、慈悲心を起し、『衆生や愍むべし。互に相呑食す』とて、卽便ち思惟して、『欲界の愛を離れ、是の如くして、乃至、四禪地を得たり。』日光[九]昕赫するや、樹爲に枝を曲げ、隨つて太子を蔭ふ。爾の時、白淨王、四面に推求して、太子を問ひ覓む。從人答へて曰く、『太子、今、閻浮樹下に在り』。時に、王、卽便ち諸の群臣と、彼の樹の所に往く。未だ至らざるの間に、遙に太子の端坐思惟するを見、又、彼の樹曲りて、其の軀を蔽ふを見て、深く奇特を生ず。時に王卽ち前んで太子の手を執り、問うて言く、『汝、今、何が故に、此に在りて坐するか』。太子答へて言く、『諸衆生を觀るに、更相呑食す。甚だ傷み愍むべし』。王、此の語を聞きて、心に憂惱を生じ、其の出家を慮り、宜しく急に婚娉し、以て、其の意を悅ばすべしとて、卽便ち之を呼びて、倶共に國に還らんとす。太子答へて言く、『願はくは、此に停まらん』。王其の語を聞きて、心に卽ち念言す、『彼の阿私陀が、往日に說ける所、太子、今、將に其の言の如くならんとす』。王卽ち淚を流し、重ねて喚んで國に還らんとす。太子既に父王の此の如くなるを見、卽便ち隨從して、所止に歸る。王、在家を樂しまざるを恐れ愁憂ひ、更に妓女を增して、之を娛樂しましむ。

十三、納妃

爾の時太子、年十七に至る。王、群臣を集め共に議して言く、『太子、今は年已に長大なり。宜し

【九】昕。あさ。

更に强き者を覓む。諸臣答へて言く、『太子の祖王に、一良弓あり。今、王庫に在り』。太子語りて言く、『便ち取り來るべし』。弓既に至り已るや、太子卽ち牽きて以て一箭を放ち、諸鼓を徹し過ぎて、然る後に地に入り、泉水流出し、又亦、大鐵圍山[五]を穿ち過ぐ。爾の時、提婆達多、又、難陀と、共に相撲戲す。二人力等しくして、亦勝つ者なし。太子又前んで、手に二弟を執りて、之を地に擲し、慈力を以ての故に、傷き痛ましめず。爾の時、四遠の諸人民衆、既に太子に此の如き力あるを見て、高聲に唱へ言ふ、『白淨王の太子は、但智慧の一切人に勝るゝのみにあらず、其の力の勇健も、亦等しき者なし』と。歎伏せざるなく、益恭敬を生ず。

十一、灌頂太子

爾の時、白淨王、卽ち諸臣を會して、共に議して言く、『太子、今や年已に長大に、智慧と勇健と、皆悉く具足す。今、宜しく應に四大海水を以て、太子の[六]頂に灌ぐべし』。又復、餘[七]の小國王に勅下す、『却後二月八日、太子の頂に灌がん。皆來り集るべし』。二月八日に至る。諸の餘國王、幷に及び仙人・婆羅門等、皆悉く雲集し、繒の幡蓋を懸け、香を燒き、花を散じ、鍾を鳴し、鼓を擊ち、諸の伎樂を作し、七寶の器を以て、四海の水を盛り、諸仙人衆、各頂戴して、婆羅門に授け、是の如くして、乃至、遍ねく諸臣に及び、悉く已に頂戴して、傳へて王に授與す。時に、王、卽ち以て太子の頂に灌ぎ、七寶の印を以て、用つて之を付す。又、大鼓を擊ちて、高聲に唱へ言ふ、『今、薩婆悉達を立てゝ、以て太子と爲す』。爾の時、虛空の天・龍・夜叉・人非人等、天の伎樂を作し、異口同音に、讚じて善哉と言ふ。迦毘羅旆兜國の、太子を立つる時に當りて、餘の八國王も、亦是の日に於て、同じく太子を立つ。

【五】鐵圍山(Cakravāḍa)。須彌山を圍みて、九山八海あり。その外圍を限る山。

【六】灌頂(Abhiṣeka)。國王の卽位する時、又立太子の時に、王又は太子の頂に海水を灌ぐは、印度の祝禮なり。これが佛教中に傳はりて、摩頂灌頂、授記灌頂等となる。

【七】(原文)又復勅下餘小國王。

【八】淨居天(Śuddhāvāsa)。色界十八天の中、最高の五天をいふ。

て住まる。此の諸軍衆、皆敢て前まず。提婆達多、諸人に問うて言く、『何が故に、此に住りて、前まざるか。』諸人答へて言く、『一大象あり、門に當りて立つ。擧衆、之を畏るゝが故に、敢て前まず。』提婆達多、此の言を聞き已りて、獨、象の所に前み、手を以て頭を搏つ。卽便ち地に躃る。是に於て、軍衆次第に過るを得たり。爾の時、難陀、又、眷屬と、亦、城を出でんと欲す。其の諸軍衆、徐歩して漸く前む。難陀卽ち問ふ、『何が故に、行くことゝ遲きぞ』。諸人答へて言く、『提婆達多、手にて一象を搏ち、躃れて城門に在り。行く者の路を妨ぐ。是を以ての故に、遲し。』難陀、卽便ち前んで象の所に至り、足指を以て、象を挑げ、路傍に擲著す。無數の人衆、聚りて共に之を看る。爾の時、太子、十萬の眷屬の、前後に圍遶すると與に、始めて城門を出づ。路傍に人衆の聚り看るを見、卽便ち問うて曰く、『此の諸人輩、何の看る所をか爲す』。從人答へて言く、『提婆達多、手にて一象を搏ち、躃れて城門に在りて、人の行路を妨ぐ。難陀、次に出でゝ、足指を以て挑げて、此に擲著す。是の故に、行人悉く聚りて之を看る』。是に於て、太子卽ち自ら念言す、『今、正に是力を現はすの時』と。太子便卽ち手を以て象を執り、城外に擲著し、還、手を以て接して、傷損せしめず。象又還つて蘇りて、苦痛する所なし。時に、諸人民、未曾有と歎ず。王此を聞き已りて、深く奇特を生ず。是の如く、太子と、及び提婆達多と、幷に難陀と、四遠の人民、皆悉く來集して、彼の園中に在り。

爾の時、彼の園、種々に莊嚴して、金鼓・銀鼓・鍮石の鼓・銅鐵等の鼓を施列して、各七枚あり。爾の時、提婆達多、最も先きに之を射て、三金鼓を徹す。次に及び難陀も、亦、三鼓を徹す。諸の來人衆、悉く皆雅歎す。爾の時、群臣、太子に白して言く、『提婆達多と、及び難陀と、皆已に射訖りぬ。今や次第は正しく太子に在り。唯、願はくは太子、此の諸鼓を射よ』。是の如く、三たび請ふ。太子、善しと曰て、之に語つて言く、『若、我をして諸鼓を射しめんと欲せば、此の弓力弱し』

巻の第二

十、競試武藝

[一]爾の時太子、年十歳に至る。諸釋種中、五百の童子皆亦同年なり。太子の從弟[二]提婆達多、次に[三]難陀と名くる、次に[四]孫陀羅難陀と名くる等に、或は三十相・三十一相なる者あり。或は復、三十二相ありと雖も、相分明ならず。各、技藝に閑うて、大筋力あり。時に、提婆達多等の五百童子、旣に太子が、諸藝に皆通じて、名の十方に徹するを聞き、共に相謂つて言く『太子、復、聰明の智慧あり。善く書論を解すと雖も、力膂に至りては、詎ぞ我等に勝らん。太子と、其の勇健を較べんと欲す』。爾の時、父王、又、國中の善く射を知るものを訪ねて、之を召し來りて、太子に敎へしむ。卽ち後園に往きて、鐵鼓を射んと欲す。提婆達多等、五百の童子、亦、悉く隨從す。時に、師、卽便ち一小弓を授けて、太子に與ふ。太子、笑を含んで之に問うて言く、『此を以て我に與へて、何等をか作さんと欲する』。射師答へて言く『太子をして、此の鐵鼓を射しめんと欲す』。太子、又、言く『此の弓、力弱し』。更に是の如き七弓を求めて將來し、師卽ち授與す。太子、便ち七弓を執り、以て一箭を射、七の鐵鼓を過ぐ。時に彼の射師、往いて王に白して言く『大王、太子は自ら射藝を知り、一箭力を以て、七鼓を射過ぐ。閻浮提中、能く等しき者なけん。云何ぞ我をして爲に師と作らしむるか』。爾の時、白淨王、此の語を聞き已りて、心大に歡喜して、自ら念言す『我が子の聰明なる、書論算數は、四遠悉く知るも、其の射藝は、四方の人民、未だ知る者あらず』。卽ち太子及び提婆達多等、五百の童子に勅し、又復、鼓を撃ちて國界に唱令す『太子薩婆悉達、却後七日、當に後園に出づべし。武藝を試みんと欲す。諸人民中、勇力あるものは、悉く此に來るべし』。第七日に到り、提婆達多、六萬の眷屬と、最も先に城を出づ。時に、一大象あり。城門に當り

【一】この一段を「本行集經」も「普曜經」も、納妃に關係せしめて、「本行集經」は、捔術爭婚品の題號をさへ與ふるは、此經が十歲の時と爲すに異る。「所行讚」は、納妃以前の所に、唯二句のみにて之を記す。

【二】提婆達多(Devadatta)。天授と譯す。釋尊の從弟にして、四王八子の一人なり。生々釋尊の怨なりとせらる。釋尊の晩年、獨立の教團を組織し、嚴格なる主義によつて、之を統理し、その一派は、少くも紀元五世紀まで繼續せり。されど、佛典には、生きながら地獄に墮せりと傳ふ。

【三】難陀(Nanda)。歡喜と譯す。釋尊の異母弟なり。在俗の時に、孫陀利と名くる女を妻とせしを以て、また孫陀羅難陀とも稱す。本經には、難陀と孫陀羅難陀とを別人とす。

【四】孫陀羅難陀(Sundara-nanda)。

年七歳に至り。父王、心に念ず、『太子、已に大なり。宜しく書を學ばしむべし』と。國中の聰明なる婆羅門の、諸の書藝を善くするを訪ね覓め、請使して、來りて以て太子に教へしむ。爾の時、一婆羅門あり、[二〇一]跋陀羅尼と名く。五百の婆羅門と、以て眷屬たり。來りて、王の請を受く。即ち婆羅門に白して言く、『尊者を屈して、太子の師と爲さんと欲す。[二〇二]此爾るべしや不や』。婆羅門言ふ、『當に知る所に隨つて、以て太子に授くべし』。時に、白淨王、更に太子の爲に、大學堂を起し、七寶もて莊嚴し、[二〇三]床榻學具、極めて精麗ならしめ、吉日を卜擇して、即ち太子を以て、婆羅門に與へて、之を教へしむ。爾の時、婆羅門、四十九の書字の本を以て、教へて之を讀ましむ。時に太子、此の事を見已りて、其の師に問うて言く、『此は何等の書ぞ。閻浮提中の、一切の諸書、凡そ幾種あるか』。師即ち默然として、答ふる所を知らず。又復、問うて言く、『此の[二〇四]阿の一字に、何等の義あるか』。師、又、默然として、亦、答ふる能はず。內に慚愧を懷きて、即ち座より起ち、太子の足を禮して、讃歎して言く、『太子初生して、七步を行く時、天人之中、最尊最勝と、自ら言へり。此の言虛ならず。唯、願はくは、爲に閻浮提の書に凡そ幾種あるかを說きたまへ』。太子答へて言ふ、『閻浮提中、或は[二〇五]梵書あり、或は[二〇六]佉樓書、或は[二〇七]蓮花書あり。是の如き等の六十四種あり。此の阿字は、是梵音聲なり。又、此の字義は、是、不可壞なり。亦、是、無上正眞道の義なり。凡そ此の如きの義、無量無邊なり』。爾の時、婆羅門、深く慚愧を生じ、還つて王の所に至り、王に白して言く、『大王、太子は是、天人中、第一の師なり。云何ぞ我をして教へしめんと欲したまふか』。爾の時、父王、婆羅門の言を聞きて、倍、歡喜を生じ、未曾有と歎じ、即ち厚く彼の婆羅門を供養して、意の之く所に隨（はしむ）。凡そ諸の技藝・典籍・議論・天文・地理・算數・射御、太子悉く自然に之を知る。

過去現在因果經卷第一

【二〇一】跋陀羅尼（Badarāyana）。吠檀多經の作者たる大婆羅門の名。

【二〇二】（原文）此可爾不。

【二〇三】榻。榻に同じ。こしかけ。

【二〇四】阿。A、四十二字門の第一にして、一切言語の根本なれば、これに甚深の義ありとせらる。阿に否定の義あるより、これに哲學的意義を與へて、本不生とし、之を宇宙の根本原理とする思想も起れり。

【二〇五】梵書（Brāhmī）。「本行集經」に、梵天所說書とし、今の婆羅門書正に十四音これなりと註す。梵語の書なり。

【二〇六】佉樓書（Kharoṣṭī）。「本行集經」に、驢脣と譯す。西北印度に行はれたる文字にして、梵字が左より右に走るに反し、右より左に向つて書す。

【二〇七】蓮花書（Puṣkarasārī）。「本行集經」に、此名の仙人の說ける書とす。

て、皆悉く具足す。又復、別に爲に三時殿を起す。溫涼・寒・暑に、各自處を異にし、其の殿は皆七寶を以て莊嚴し、衣裳服飾、皆悉く時に隨ふ。王、太子の家を棄てゝ道を學ばんを恐れて、其の城門の開閉の聲をして、四十里に聞えしむ。又復、五百の妓女の、形容端正にして、肥えず瘦せず、長からず短からず、白からず黑からず、才能巧妙にして、各數技を兼ぬるを擇び取り、皆名寶を以て、其の身を瓔珞し、百人の一番、迭ひに代りて宿衞す。其の殿前に於て、甘果を列樹し、枝葉蔚映し、花實繁茂す。又、浴地あり、澄清淨潔なり。池邊の香草、雜色の蓮花、猗靡芬敷する、稱計すべからず。[一九六]異類の鳥、數百千種、心目を光麗た(らしむ)るが、太子を趣悅す。

八、母后生天

太子既に生れ、始めて滿七日にして、其の母命終す。太子を懷ける功德の大なるを以ての故に、[一九七]忉利に上生して、封受自然なり。太子、福德威重にして、[一九八]女人の、禮を受くるに堪ふるものなきを自ら知る。故に將に終らんとするに因りて、之に託して生れたるなり。爾の時、太子の姨母、[一九九]摩訶波闍波提、太子を乳養して、母の如く異るなし。

九、學諸書藝

時に白淨王、勅して七寶の天冠及以び瓔珞を作りて、太子に與ふ。太子、年漸く長大して、象馬牛羊の車を辨ずるが爲に、凡そ是童子の玩好する所の具、給與せざるなし。

爾の時、擧國の人民、皆仁惠を行ひ、五穀豐熟し、風雨時を以てし、又、盜賊なく、快樂安穩なり。皆是太子の福德力の故なり。時に、王、又、靑衣の所生なる、是の[二〇〇]車匿等、五百の蒼頭を以て、太子に給侍せしむ。

【一九六】(原文)異類之鳥、數百千種、光麗心目、趣悅太子。

【一九七】忉利。須彌山の頂上にある忉利天にして、帝釋を主とし、その歡喜園は、歡喜の果報を享受すとせらる。

【一九八】女人堪受禮。太子は福德威重にして、母として事ふべき女人なきを以て、摩耶夫人が、やがて命終すべきを知つて、託生せるなりといふの意。

【一九九】摩訶波闍波提 (Mahāprajāpatī)。大愛道、大生主と譯す。

【二〇〇】車匿 (Chandaka)。後に白馬揵陟を引きて、太子の出家に隨從せるもの。

二十九には、眼の色、金精の如し。
三十には、[一八八]眼睫、牛王の如し。
三十一には、眉間の[一八九]白毫相、軟白なること[一九〇]兜羅綿の如し。
三十二には、[一九一]頂髻の肉成る。

此の如き相好の身を具有す。若、在家せば、年二十九にして、轉輪聖王と爲らん。若、出家せば、一切種智を成じ、廣く天・人を濟はん。然るに、王の太子は、必ず當に學道して、[一九二]阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得べし。久しからずして當に清淨の法輪を轉じて、天・人を利益し、世間の眼を開くべし。我、今、年壽、已に百二十、久しからずして命終して、[一九三]無想天に生れん。佛の興るを見ず、經法を聞かず。故に自ら悲しむのみ』。又、仙人に問ふ。『尊者、向に占つて言ふ、『二種あり、一には當に王と作るべし。二には、正覺を成ぜん』と。而して、今、云何ぞ、決定して一切種智を成ぜんとは言ふ』。時に、仙人言く、『我が相の法、若、衆生あり、三十二相を具するも、或は非處に生じ、又は明顯ならずば、此の人、必、轉輪聖王と爲らん。若、三十二相、皆其の處を得、又復、明顯ならば、此の人、必、一切種智を成ぜん(といふ)。我、大王の太子の諸相を觀るに、皆其の所を得、又、極めて明顯なり。是を以て、決定して正覺を成ぜんを知る』。仙人、王の爲に、此の語を說き已り、辭別して退く。

七、三時殿

[一九四]爾の時、白淨王、既に仙人の決定の說を聞きて、心に愁惱を懷き、出家を慮り恐れ、即ち五百の青衣の賢明多智なるを擇びて、爲に[一九五]嬭母と作し、太子を養視す。其の中或は乳する者あり、或は抱く者あり、或は浴する者あり、或は浣濯する者あり。是の如き等の比、太子に供給し

【一八八】睫。まつげ。
【一八九】毫。ほそげ。白き毛のうづまけるを白毫といふ。
【一九〇】兜羅(Tūla)。花絮、木わたのこと。
【一九一】頂髻。梵語烏瑟膩(Uṣṇīṣa)。肉髻と譯す、頂上に肉あり、隆起して髻の形を爲すもの。また無見頂相といふ、何人も見る能はざればなり。その本は必ずや髪髻なりしならんも、肉髻となりしは、また恐らくは雕刻より來りしものならん。
【一九二】(Anuttara-samyak-sambodhi)。新に無上正遍智と譯す。古く無上道と譯せるは、簡にして適切なれば、求道、成道など、すべて道の字を菩提に當てるが、佛教學界の常途なり。本經の正覺も、また三藐三菩提の譯にして、これまた廣く用ひらる。
【一九三】無想天。色界　禪天中の第四禪天の第四。十八天中の第十三に當る。
【一九四】この一節は、太子の出家を阻止せんが爲の第一手段としての、三時殿を說く。
【一九五】嬭。音ないは母なり。音ねは音にはあね(姉)なり。音ねはちゝ(乳)なり。

九には、[一七五]平住して、兩手膝を摩す。
十には、[一七六]陰藏の相、馬王・象王の如し。
十一には、身の[一七七]縱廣等しくして、[一七八]尼拘類樹の如し。
十二には、一一の孔に一毛生じ、青色柔軟にして右旋す。
十三には、毛上向して靡き、青色柔軟にして、右旋す。
十四には、金色の相、其の色の微妙なる、[一七九]閻浮檀金に勝る。
十五には、[一八〇]身光の面、一丈なり。
十六には、皮薄く細滑にして、塵垢を受けず、[一八一]蚊蚋を停めず。
十七には、[一八二]七處の滿、兩足の下、兩手の中、兩肩の上、項の中に、皆滿字あつて、分明なり。
十八には、[一八三]兩腋下の滿、[一八四]摩尼珠の如し。
十九には、身、師子の如し。
二十には、身廣く端直なり。
二十一には、肩圓好なり。
二十二には、口に四十齒あり。
二十三には、齒白く齊しく、密にして根深し。
二十四には、四牙最白くして大なり。
二十五には、[一八五]方なる頰車、師子の如し。
二十六には、味中上味を得、咽中の二處より津液流出す。
二十七には、[一八六]舌大に軟薄にして、能く面を覆ひ、耳の髮の際に至る。
二十八には、梵音深遠にして、[一八七]迦陵頻伽の聲の如し。

【一七五】平住。直立したまゝ、體を屈せぬをいふ。
【一七六】陰藏。男根の腹中に陰藏せらるゝこと、馬陰の如きをいふ。
【一七七】縱廣。身長と、兩手を張れる長さとなり。
【一七八】尼拘類樹(Nyagrodha)。無節と譯す。
【一七九】閻浮檀(Jambu-nada)。閻浮は樹名、ナダは河、閻浮樹の下を流るゝ河中に生ずる沙金を、閻浮檀金といふ。
【一八〇】身より常に放つ光明の四面各一丈なるをいふ。
【一八一】蚋は。蚊に同じ。
【一八二】七處の滿の滿は、缺陷なきなり。滿字は卐字なり。吉祥の標とせらる。
【一八三】兩腋下の肉、充滿するをいふ。
【一八四】摩尼(Maṇi)。如意珠と譯す。
【一八五】頰車。兩頰の隆滿なること、師子の頰の如きをいふ。
【一八六】舌大。舌の廣く長く、薄くして、之を展ぶれば面を覆ふといふなり。これを廣長舌相といひ、說法の自在なる標示とす。
【一八七】迦陵頻伽(Kalaviṅka)。妙聲と譯す。鳥の名。

太子、今、見るを得べしや不や』。卽ち仙人を將て、太子の所に至り、王及び夫人、太子を抱きて出で、仙人を禮せんと欲す。時に、彼の仙人、卽ち王を止めて曰く、『此は是天人[166]三界中の尊なり。云何ぞ我を禮せしむるか』。時に、彼の仙人、卽ち起ちて合掌し、太子の足を禮す。王及び夫人、仙人に白して言く、『唯、願はくは、尊者、太子を相することを爲せ』。仙人、善しと言つて、卽便ち占相す。具に相を見已りて、忽然悲泣して、自ら勝ふる能はず。王及び夫人、彼の仙人の悲泣流涙するを見て、擧身戰き怖れて、大憂惱を生ずること、大波浪の小船を動かすが如し。仙人に問うて言く、『我子の初めて生るゝ、諸の瑞相を具せるに、何の不祥ありてか、悲泣する』。爾の時、仙人、歔欷して答へて言く、『大王、太子の相好具足して、不祥あるなし』。王又問うて言く、『願はくは、更に我が爲に太子を占視せよ。長壽の相ありや不や。轉輪王の位を得て、四天下に王たるや、不や。我が年旣に暮る。國土を以て、皆悉く之に付し、當に山林に隱れて、出家學道すべきを欲す。志願すべき所は、唯、此に在るのみ。尊者、必定の果を觀ると爲すや』。

爾の時、仙人、又、王に答へて言く、『大王、太子は、三十二相を具す。

一には、足下安平、平なること、[167]奩底の如し。

二には、足下の[168]千輻網輪、輪相具足す。

三には、[169]手足相、指の長、餘人に勝る。

四には、手足柔軟、餘の身分に勝る。

五には、[170]足跟廣、具足滿好なり。

六には、足指合、[171]縵網、餘人に勝る。

七には、[172]足趺高平、好く跟と相稱ふ。

八には、[173]伊泥延鹿[174]腨、纖好なること、伊泥延鹿王の如し。

【一六六】三界は、欲・色・無色の三世界をいふ。世界をその性質上より三大別せるなり。色界・無色界は天のみなれども、欲界には天と人とあり。天人は天と人となり。

【一六七】奩。かうばこ。

【一六八】千輻網輪。千の輻のある輪なり。この相を具へたる足を佛足石として、印度以來禮拜す。

【一六九】手足相は、手指纖長相の稱あるものなれど、こゝには手足の指とす。

【一七〇】跟。くびす。

【一七一】縵網。手足の指と指との間に、縵網ありて、鵝鴨の足指の如きをいふ。何の爲に斯の如きものが、大人相中に加はりしか明ならず。恐らくは雕刻より得たる相ならんか。

【一七二】趺。跗に同じ、あしのかふ。

【一七三】伊泥延(Aiṇeya)は、黑き雌鹿。

【一七四】腨。こむら。

に歡喜し、諸の【一五七】怵惕を離れぬ。彼の婆羅門、又、王に白して言ふ、『【一五八】一梵仙あり、【一五九】阿私陀と名く。【一六〇】五通を具足して、【一六一】香山にあり。彼、能く王の爲に諸の疑惑を斷ぜん』。諸婆羅門、此の語を說き已りて、辭別して去る。

爾の時、白淨王、心に自ら思惟す、『阿私陀仙人は、居して香山に在り。途逕嶮絕して、人の到る所にあらず。當に何の方を以てか、請じ來りて此に至るべき』。【一六二】王が此の心念を作す可きの時、阿私陀仙人、遙に王の意を知り、又復、先に諸の奇瑞の相を見、菩薩が、生死を破らんが爲の故に、生を受くるを現ずるを深解し、神通力を以て、虛に騰りて來り、王宮の門に到る。時に、守門者入りて王に白して言ふ、『阿私陀仙人、虛空に乘じて來り、今、門外に在り』。王、聞いて歡喜し、卽ち勅して前ましめ、王、門上に至りて、自ら之を奉迎し、既に仙人を見るや、恭敬禮拜して、卽ち問うて言く、『尊者既に來り、門に住まりて進まざるは、守門者が、前むを聽さゞるが爲か』。仙人答へて言く、『止むるものを見るなし。既に來りて相詣る。宜しく須らく先づ白すべし』。王、便ち隨從して、後宮に入り、敬請して坐せしめ、問訊して言く、『尊者、【一六三】四大常に安和なりや不や』。仙人答へて言く、『大王の恩を蒙りて、幸に安樂なるを得』。時に白淨王、仙人に白して言く、『尊者が、今日、能くぞ來り下降す。【一六四】我等の種族、方に大に熾盛に、今より已去、日に吉祥に就かん、是の經過の爲の故に、此に來るや』。仙人答へて言く、『我、香山に在りて、大光明、諸奇特の相を見、又、【一六五】大王の心の所念を知る。是の因緣を以ての故に、來りて此に到る。我、神力を以て、虛に乘じて來るに、上の諸天の說くを聞きぬ。「王の太子、必ず當に一切種智を成じて、天人を度脫するを得べし」。又、王の太子、右脇より生れ、七寶の蓮花の上に墮して、行くこと七步、其の右手を擧げて、我於天人之中。最尊最勝、無量生死、於今盡矣。此生利益一切天人と師子吼せり。又復、諸天、闡遶恭敬せり』と。此の如き大奇特の事あるを聞く。快き哉、大王よ、宜しく應に欣慶すべし。

【一五七】怵。おそる、かなしむ。惕。うれふ、おそる。
【一五八】梵仙。梵は、淨き意、仙は、婆羅門教の聖者。婆羅門教によりて淨行を修せる聖者なり。
【一五九】阿私陀(Asita)。
【一六〇】五通。天眼・天耳・神足・他心・宿命の五神通のこと。
【一六一】香山。「所行讃」は近處の園中とし「本行集經」は南天竺頻陀山とし「普曜經」は雪山とす。香山は無熱池の北にあつて、世界の最高中心と想像せらるゝを以て、雪山といふに最も多く一致す。
【一六二】王可作此心念之時の可は恐らくは於の誤ならん然らば「王が此の心念を作す時に於て」なり。
【一六三】四大。地・水・火・風は、一切の事物を組織する元素なるを以て大といふ。こゝの四大は、四大より成れる身體をいふ。
【一六四】我等の種族を熾盛ならしめ、益々吉祥ならしめんが爲にとて來降せるやの意。
【一六五】王心を知るは他心通なり。乘虛は神足通なり。前に五通具足をいふは、こゝに至るの伏線なり。

〔一五二〕波斯匿と名け、偸羅拘吒國の太子は〔一五三〕拘膓婆と名け、犢子國の太子は、〔一五四〕優陀延と名け、跋羅國の太子は、欝陀羅延と名け、盧羅國の太子は、疾光と名け、徳叉尸羅國の太子は、弗迦羅婆羅と名け、拘羅婆國の太子は、拘羅婆と名く。

六、占　相

〔一五五〕爾の時、白淨王、普く群臣に勅して、聰明多聞にして善く占相を知り、諸の世人の爲に知識せらるゝ者を訪ねしむ。群臣聞き已りて、四方に推し覓む。時に王、即便ち後園中に於て、一大殿を起して、窓牖欄楯、七寶もて莊飾す。爾の時、群臣、五百の婆羅門の、聰明にして、相を知り、諸奇瑞を見るを得て、來りて王に詣らんと欲せしに、王の信を遣はすに會して疾速に至り、諸臣王に白す、『知相婆羅門、今已に到る』。王聞いて歡喜し、即ち勅して前ましめ、請じて殿に入りて坐するや、諸の供養を設く。彼の婆羅門、即ち王に白して言く、『我、聞く、大王、新に太子を生み、諸の相好奇特の瑞ありと。願はくは、我等をして、悉く之を見るを得しめたまへ』。時に、王、即ち勅して太子を抱きて出づ。諸婆羅門、既に太子の相好威嚴を見て、未曾有と歎ず。王、即ち問うて言く、『今、太子の其の相云何を占へ』。婆羅門言ふ。〔一五六〕『一切衆生、皆子の好からんを欲するも、大王の今所生の太子は、是大珍異なり。憂怖を生ずるなかれ』。即ち又白して言ふ、『所生の太子は、大王よ、是王の子と言ふと雖も、乃ち是、世間人天の眼なり』。王、復、問うて言ふ、『云何ぞ知るを得たる』。婆羅門言ふ、『我、太子を觀るに、身色光焔、猶、眞金の如く、諸の相好あり、極めて明淨と爲す。若、出家せば、當に一切種智を成ずべし、若、在家ならば、轉輪聖王と爲りて、四天下を領せん。譬へば、江河は、海を第一と爲し、衆山の中に、須彌を最勝とし、凡そ諸の光暉は、日を無上と爲し、一切の清涼は、唯、明月あるが如く、天人世間は、太子を尊しと爲す』。王、此の語を聞きて、心大

【一五二】波斯匿(Prasenajit)。勝軍と譯す。後に佛教の歸依保護者たり。

【一五三】拘膓婆(Kuruva)。膝邊と譯す。

【一五四】優陀延(Udayana)。出愛と譯す。後に佛教の歸依者たり。

【一五五】これより阿私陀仙占相の一段なり。

【一五六】一切衆生。諸のいきとしいけるもの。

子、既に入るや、[一四八]梵天の形像、皆座より起ち、太子の足を禮して、王に語りて言ふ『大王當に知るべし。今、この太子は　天人中の尊なり。虛空の天神、皆悉く禮敬す。大王、豈、此の如きを見ざるか。云何ぞ、今、此に來りて、我を禮する』。時に、白淨王・及び諸釋子・群臣內外、是を聞見し已りて、未曾有と歎じ、卽ち太子を將て、天寺を出で、還つて後宮に入る。

爾の時に當りて、諸釋種姓も、亦、同一日に、五百の男を生み、時に、王の廐中の、象は白子を生み、馬は白駒を生み、牛羊、亦、五色の羔犢を生み、是の如き等の類、數、各、五百。王家の靑衣、亦、五百の　[一四九]蒼頭を生む。爾の時、宮中の五百の伏藏、自然に發出し、一一の伏藏に、七寶の藏ありて、之を圍遶す。又、諸の大國の商人あり。海より寶を採り、迦毘羅旆兜國に還り、彼の諸商人、各、奇寶を齎らして、來りて王に獻ず。時に、白淨王、諸商人に問ふ『汝等、海に入り、諸の珍寶を採りて、悉く皆吉利なり、苦惱なきや不や。及び諸の伴侶、遺落なきや』。彼の諸商人、答へて言ふ『大王、經る所の道路、極めて自ら安穩なり』。王此の言を聞きて、甚大歡喜す。卽ち諸婆羅門等を遣請す。婆羅門衆、皆悉く集り已るや、諸の供養を設け、或は象・馬・及以び七寶・田・宅・僮僕を與ふ。供養し畢已りて、太子を抱きて出で、卽便ち諸婆羅門に白して言く『太子の爲に、何等の名をか作すべき』。諸婆羅門、卽ち共に論議して、王に答へて言く『太子の生時、一切の寶藏、皆悉く發出し、有ゆる諸瑞、吉祥に非るなし。此の義を以ての故に、當に太子を名けて　[一五〇]薩婆悉達と爲すべし』。此の語を說く時、虛空の天神、卽ち天鼓を擊ち、燒香散花して、善哉と唱言し、諸天人民、卽便ち稱して、薩婆悉達と曰ふ。

爾の時、八王、亦、此の日に於て、白淨王と、同じく太子を生む。彼の諸國王、各、歡喜を懷きて『我、今、子を生み、諸の奇異あり』とて、是薩婆悉達の瑞相たるを知らず、皆婆羅門を集めて、各太子の爲に、好名字を制す。王舍城の太子は、名けて　[一五一]頻毘娑羅といひ、舍衞國の太子は、

【一四八】梵天(Brahma)は、毘紐天(Viṣṇu)、濕婆天(Śiva)、と相幷んで、後世の婆羅門教の最高神たり。釋尊の當時にあつても、日天・火天・帝釋天等と相幷んで、民族一般の最高神たりしなり。この梵天が太子の足を禮せしといふは、將來佛に對する絕對歸依を表する記述なり。

【一四九】蒼頭。大家に事ふる身分いやしきもの、奴僕なり。

【一五〇】薩婆悉達（Sarvasiddhārtha）。一切義成の義。悉達の譯は、Siddhārtha の音と義とを兼ね具ふる無比の翻譯なり。

【一五一】頻毘娑羅(Bimbisāra)。影堅・影勝と譯す。後に佛教の歸依保護者たり。

る勿らんを。此の言を作し已りて、天の細氎を以て、太子を裹み抱きて、夫人の所に至る。時に、四天王、虛空中に在りて、恭敬隨從し、釋提桓因、蓋を執りて來り覆ひ、二十八大鬼神王あり。園の四角に在りて、守護奉護す。

爾の時、一青衣あり。聰慧明了なり。藍毘尼園より、還つて宮中に入り、白淨王の所に到りて、王に白して言く、『大王の威德、轉、更に增進したまふ。摩耶夫人、已に太子を生みます。顏貌端正にして、〔一四〇〕三十二相、八十種好あり。蓮花の上に墮し、自ら行くこと七步、其の右手を擧げて、師子吼す『我、一切天人の中に於て、最尊最勝なり。無量の生死、今に於て盡きぬ。此の生、一切の人天を利益せん』。是の如き等の諸奇特の事あり。具に說くべからず』。時に、白淨王、彼の青衣の、此の語を說くを聞き已りて、歡喜踊躍して、自ら勝ふる能はず。即ち身の〔一四一〕瓔珞を脫して、以て之を賜ふ。

爾の時、白淨王、即ち〔一四二〕四兵を嚴しめ、眷屬圍遶し、并に一億の釋迦種姓と、前後に導從せられて、藍毘尼園に入る。彼の園中に、天龍八部の、皆悉く充滿するを見、夫人の所に到りて、太子の身の、相好殊異なるを見、歡喜踊躍すること、猶、江海の諸大波浪の如し。其の短壽を慮りて、懷に入りて〔一四三〕悚惕すること、譬へば、〔一四四〕須彌山王の、動搖すべきこと難きが、大地動く時に、此の山も乃ち動くが如し。彼の白淨王は、素性恬靜にして、常に歡慼なきも、今、太子を見て、一は喜び、一は懼るゝも、亦復、是の如し。摩耶夫人の性たる調和にして、既に太子を生み、諸の奇瑞を見て、倍柔軟を增す。爾の時、白淨王、〔一四五〕叉手合掌して、諸天神を禮し、前んで太子を抱き、七寶の象輿の上に置き、諸群臣、後宮の婇女、虛空の諸天と、諸の伎樂を作し、隨從して城に入る。

〔一四六〕時に、白淨王、及び諸釋子、未だ〔一四七〕三寶を識らず。即ち太子を將て、往いて天寺に詣づ、太

【一四〇】三十二相。次の阿私陀仙の占相の條下に、一々記述せらる。三十二相は、大人の相にして、精神界にあれ、物質界にあれ、苟しくもこれを具足するものは大人英雄なりとせらる。一々の相は、經論の上に多少の相違あり。

【一四一】瓔珞。貴人が、頭・頸・胸などに掛くる珠玉のかざり。

【一四二】四兵。象・馬・車・步の四種の兵。

【一四三】悚。おそる。惕。られふ。おそる。

【一四四】須彌山(Sumeru)。印度の世界說に於て、世界の中心たる大山。

【一四五】叉手。手を組み、前方にさし出すこと。

【一四六】この一節は、「普曜經」に入天祠品と名けらるゝものなり。

【一四七】釋尊の成道ありて後に始めて三寶あるをあらはす。三寶とは佛・法・僧なり。佛法を識らざる時に、天を祠れる寺に詣でしといふは、佛法内にては、天寺に詣せぬ事を暗示す。

然に奇特の樹を生ず。四には、園苑に異なる甘果を生ず。五には、陸地に寶蓮花を生じ、大さ車輪の如し。六には、地中の伏藏、悉く自ら發出す。七には、諸藏の珍寶、大光明を放つ。八には、諸の天の妙服、自然に來り降る。九には、衆川萬流、恬靜澄淸なり。十には、風止み雲除こりて、空中明淨なり。十一には、香風芬芳として、四方より來り、細雨の潤澤、以て飛塵を斂む。十二には、國中の疾病、皆悉く除愈す。十三には、國内の宮舍、明曜ならざるなく、燈燭の光、復、用を爲さず。十四には、日月星辰、停住して行かず。十五には[一三八]毘舍佉星、下りて人間に現じて、太子の生るゝを待つ。十六には、諸梵天王、素寶蓋を執り、列して宮上を覆ふ。十七には、八方の諸仙人師、寶を奉じて來り獻ず。十八には、天の百味の食、自然に前に在り。十九には、無數の寶瓶に、諸の甘露を盛る。二十には、諸の天の妙車、寶を載せて至る。二十一には、無數の白象の子、首に蓮花を戴き、殿前に列住す。二十二には、天の紺馬寶、自然にして來る。二十三には、五百の白師子王、雪山より出で、其の惡情を息め、心に歡喜を懷きて、城門に羅住す。二十四には、諸の天伎女、虛空中に於て、妙音樂を作す。二十五には、諸の天の玉女、孔雀の拂を執つて、宮墻の上に現ず。二十六には、諸の天の玉女、各金瓶を持ち、香汁を盛り滿てゝ、空中に列住す。二十七には、諸天歌頌して、太子の德を讃ず。二十八には、地獄休息して、毒痛行はれず。二十九には、毒蟲隱伏し、惡鳥善心なり。三十には、[一三九]諸惡律儀、一時に慈悲あり。三十一には、國内の孕婦、產するものは、悉く男にして、其の百病あるは、自然に除癒す。三十二には、一切の樹神、化して人形を作し、悉く來りて禮侍す。三十三には、諸の餘の國王、各名寶を齎らし、同じく來つて臣伏す。三十四には、一切の人天、非時の語なし。

爾の時、諸婇女衆、此の瑞相を見て、極大歡喜して、自ら相謂つて言く、『太子、今、生るゝや、此の如き嘉祥の事あり。唯、願はくは、長壽にして、諸の疾苦なく、我等をして大憂惱を生ぜしむ

---

rāja Upananda-nāgarāja)。これは二龍王なれども「普曜經」は九龍と作す。「所行讃」「本行集經」は、單に空中より二水流下せりと爲す。

【一三三】八功德。澄淨・淸冷・甘美・輕輭・潤澤・安和・除患・增益をいふ。但し異說あり。

【一三四】夜叉。(Yakṣa)。八部鬼衆の、勇健と譯せらる。

【一三五】離喜樂。阿迦膩吒天は、色界十八天の最上天色究竟天なり。色界を四禪天に分つ時は、初禪天には喜樂の二受あり、二禪天には喜捨の二受あり、三禪天には樂捨の二受あり、四禪天には捨受あるのみ。受とは感覺なり。色究竟天は、第四禪天の最高なれば、素より喜樂の二受なし。こゝは喜樂の感情を離れたる色究竟天まで大に歡喜したりといふ意なり。

【一三六】道。菩提の譯語なり。

【一三七】三十四瑞應は「所行讃」「本行集經」に見えず。「普曜經」に三十二を列擧す。大體は類似するも、互に增減あり。

【一三八】毘舍佉(Viśākha)。氐宿。二月の星の名。

【一三九】律儀。制法にかなひ、威儀の整ふをいふ。惡律儀とは、制法にかなはざる不良の徒のこと。「普曜經」には、漁獵怨惡とあり。

亦、七寶の七莖の蓮花を生ず。大きさ車輪の如し。菩薩、卽便、蓮花の上に墮し、扶持する者なくて、自行くこと、[二六]七歩し、其の右手を擧げて、[二七]師子吼す、[二八]『我、一切の天人の中に於て、最尊最勝なり。無量の生死、今に於て盡く。此の生に、一切の人天を利益せん』。

是の言を説き已れる時、四天王、卽ち天の繒を以て、[二九]太子の身を接して、寶机の上に置き、[三〇]釋提桓因、手に寶蓋を執り、大梵天王、又、[三一]白拂を持ちて、左右に侍立し、[三二]難陀龍王、優波難陀龍王、虚空中に於て、清淨の水の、一は溫、一は涼なるを吐きて、太子の身に灌ぎ、——身は黄金色にして、三十二相あり。大光明を放ちて、普く三千大千世界を照す。——天龍八部、亦、空中に於て、天の伎樂を作し、歌唄讃頌し、衆名香を燒き、諸妙花を散じ、又、天衣及以び瓔珞を雨らし、繽紛として亂れ墜つること、稱げて數ふべからず。

爾の時、摩耶夫人、太子を生み已りて、身安く快樂にして、苦患あるなく、歡喜踊躍して、樹下に止まる。前後に、自然に、忽ち四井を生ず。其の水、香潔にして、[三三]八功徳を具す。爾の時、摩耶夫人は、其の眷屬と、須ひんと欲する所に隨つて、自恣に洗漱す。復、[三四]諸夜叉王あり、皆悉く圍遶して、太子及び摩耶夫人を守護す。爾の時に當り、閻浮提の人、乃至、阿迦膩吒天は、[三五]喜樂を離ると雖も、皆、亦、此に於て、歡喜讃歎すらく、『一切種智、今や世に出でます。無量の衆生、皆利益を得ん。唯、願はくは、速に正覺の[三六]道を成じ、法輪を轉じて、廣く衆を度したまへ』。唯、魔王のみ有りて、獨、愁惱を懷きて、本座に安んぜず。

五、瑞應

爾の時に當り、感ずる所の瑞應、[三七]三十有四なり。一には、十方世界、皆悉く大に明なり。二には、三千大世界、十八相に動き、丘墟も平坦なり。三には、一切の枯木、悉く更に敷榮し、國界自

武門の神とせらる。

【二四】二月は、宋・元・明の三本に四月となす。「本行集經」は二月八日と爲し、「所行讃」は四月八日と爲し「普曜經」は日を記さず。

【二五】無憂(Aśoka)。

【二六】七歩。「本行集經」には、七菩提分の表示とせらる。七菩提分とは、修道の要件なり。

【二七】師子吼。その音聲を、大師子が無畏の音聲を以て吼ゆる時、一切の禽獸を慴伏せしむるに喩へたるなり。經にては、これを釋尊の説法の音聲に喩ふ。

【二八】誕生偈にして、初の一句は、普通に天上天下唯我獨尊といふものに相當す。

【二九】太子。誕生まで菩薩と呼び、誕生し終つて後より、太子と呼ぶ。太子以後は、人間としての生活なり。呼稱の相違にも、寓意あり。但、成道以前を、悉く菩薩と通稱する佛傳もあり。

【三〇】釋提桓因(Śakra-devānām-Indra)。因(Indra)は帝なり。諸天の帝たる釋、卽ち帝釋天なり。

【三一】白拂。拂子のこと。獸毛又は麻等を束ねて、之に柄をつけ、蚊蝿諸蟲を拂ふに用ふ。

【三二】難陀龍王(Nanda-nāga-

を楽みて、憒閙を喜ばざらしめたり。

四、誕　生

【二〇】時に白淨王、心に自ら思惟す、『夫人懷妊し、日月將に滿んとす。而も其の生產の相あるを見ず』と。此の念を作す時、會、夫人の信を遣はして王に白すに遇ふ、『我、今、園林に出でゝ、遊觀せんと欲す』と。時に、王、此を聞きて、益歡喜を懷き、卽ち外に勅して、【二一】藍毘尼園を淨くし掃灑せしめ、更に諸の妙花果を栽植せしむ。流泉浴池を、悉く清潔ならしめ、欄楯階陛は、皆七寶を以て、莊嚴を爲すに、翡翠・鴛鴦・鸞・鳳凰・鷖・異類の衆鳥、鳴いて其の中に集る。繒の【二二】幡蓋を懸け、散華燒香して、諸の伎樂を作すこと、猶【二三】帝釋の歡喜の園の如し。又、勅して、中間の經行する所の處を、皆嚴淨に、種々莊嚴せしむ。又、勅して、十萬の七寶の車輦を嚴辦す。一一の車輦は、雕玩殊絕なり。又復、外に勅して、象兵・馬兵・車兵・步兵の四軍を嚴辦す。又復、後宮の婇女の、容顏端正、不老不少・氣性調和・聰慧明了なるを選び取り、其の數凡そ八萬四千あり、以用て摩耶夫人に給侍せしむ。又復、八萬四千の端正なる童女を擇び取り、妙瓔珞嚴身の具を著け、香花を齎らし持ち、先づ往いて彼の藍毘尼園に住せしむ。王、又、諸の群臣百官に勅して、夫人去れば、皆悉く侍從せしむ。

是に於て、夫人、卽ち寶輿に昇り、諸の官屬、幷に及び婇女の輿に、前後に導從せられ、藍毘尼園に往く。爾の時、復、天龍八部ありて、亦、皆隨從して、虛空に充滿す。爾の時、夫人、既に園に入り已るに、諸根寂靜に、十月滿足し、【二四】二月八日、日の初めて出る時に於て、夫人、彼の園中に、一大樹の、名けて【二五】無憂と曰ふ有るを見る。花色香鮮に、枝葉分布して、極めて茂盛を爲す。卽ち右手を擧げて、之を牽きて摘まんと欲するや、菩薩、漸々に右脇より出づ。時に、樹下に、

守る天子にして、東方持國天・南方增長天・西方廣目天・北方多聞天なり。

【一五】色界は、三界の中位にあり。その下位にある欲界の穢色を離るゝも、猶淨色あるを以ていふ。これに四級十八種あり。

【一六】欲界は、三界の下位にあり。婬貪・食貪あるを以ていふ。この界に屬する天に、六種あり。四天王天、乃至、他化自在天なり。

【一七】夜三時とは、初・中・後の三時。戌(初更)・子(三更)・寅(五更)をいふ。

【一八】相好。委しくいへば、三十二の相と、八十種の好となれども、相好と熟する時は、整備圓滿なる風貌姿容のこと。

【一九】諸根とは、眼・耳・鼻・舌・身の五根、または意を加ふる六根。根とは、强き作用を起す機關をいふ。

【二〇】これより以下、誕生の一段なり。

【二一】藍毘尼(Lumbini)。

【二二】幡は、はた。蓋は天蓋。天蓋は初は、日光又は雨を拒ぐ爲に用ひられたる傘蓋なれども、後には方形又は圓形にして、周圍に繒幡瓔珞を埀れたる莊嚴具となれり。

【二三】帝釋、(Indra-śakra)。忉利天卽ち三十三天主なり。

『此の中、云何ぞ忽ちに衆生を生ずる』。菩薩、降胎の時、三千大千世界、[一〇二]十八相に動き、清涼の香風、四方に起り、諸の疾を抱くもの、皆悉く除こり愈え、[一〇三]貪欲・瞋・癡、亦、皆休息す。

爾の時、兜率天宮に、一天子あり。是の念言を作す『菩薩、已に白淨王宮に生れぬ。我も、亦、當に、復、人間に下生すべし。菩薩成佛せば、我、先に在りて、其の眷屬と爲り、供養し聽法するを得ん』。此の念を作し已りて、即便ち[一〇四]王舍城中[一〇五]明月の種姓[一〇六]旃陀羅及多王の家に下生す。復、天子ありて、舍衞國の王家に生れ、復、天子ありて、偸羅厥叉國の王家に生れ、復、天子ありて[一〇七]犢子國の王家に生れ、復、天子ありて、跋羅國の王家に生れ、復、天子ありて、盧羅國の王家に生れ、復、天子ありて[一〇八]德叉尸羅國の王家に生れ、復、天子ありて、[一〇九]拘羅婆國の王家に生れ、復、天子ありて、婆羅門の家に生れ、復、天子ありて、[一一〇]長者・居士・[一一一]毘舍・[一一二]首陀羅の家に生れ、復、五百の天子ありて、釋種姓の家に生る。是の如き等の諸天子衆あり、其の數、凡そ九十九億ありて、人間に下生す。又、[一一三]他化自在天、乃至、[一一四]四天王より、下生する所のもの、稱計すべからず。復、[一一五]色界の天王あり、其の眷屬と、亦、皆、下生して、仙人と作りぬ。

菩薩の胎に在るや、行に住に坐に臥に、妨礙する所なく、又、母をして、諸の苦患あらしめず。菩薩、晨朝に、母胎中に於て、色界諸天の爲に、種々の法を說き、日中時に至りて、[一一六]欲界諸天の爲に、亦、諸法を說き、日晡時に於て、又復、諸鬼神の爲に法を說き、[一一七]夜の三時に於て、亦復、是の如く無量の衆生を成熟し利益す。菩薩の胎に在るや、夫人・婇女の、來りて禮拜して供養する者あり。或は、復、來りて、是の願を作して言ふあり『當に轉輪聖王と成るを得しむべし』と。菩薩、聞き已りて、心に喜樂せず。或は、復、來りて、是の願を作して言ふあり『當に一切種智を成ずるを得しむべし』と。菩薩聞き已りて、心大に歡喜す。菩薩の處胎、滿十月に垂んとして、身の諸の支節、及以び[一一八]相好、皆悉く具足して、亦、其の母をして、[一一九]諸根寂靜に、園林に處る

【一〇二】十八相動。動・起・踴・震・吼・擊の六種震に、各、單・徧・等徧の三種ありて、總計十八種震動となる。

【一〇三】貪・瞋・癡。三毒の煩惱といふ。一切の煩惱の根本なり。

【一〇四】王舍城(Rājagṛha)。釋尊當時、恒河の南にありし大國、摩伽陀國の都。

【一〇五】明月種姓(Candravaṃśa)。日種(Sūrya-vaṃśa)に對す。

【一〇六】旃陀羅及多(Candragupta)。月護と譯す。

【一〇七】犢子國(Vatsa or Vaṃśa)。釋尊當時、恒河の南、摩揭陀國の西にありし大國。

【一〇八】德叉尸羅國(Takṣaśilā)西北印度。印度河流域の中にありし古國。

【一〇九】拘羅婆國(Kaurava)。印度河と恒河との間、中國にありし國。

【一一〇】長者は、商業に從事して、豪富を擁する人。居士は同じく富裕なる商家の主人。

【一一一】毘舍(Vaiśya)。

【一一二】首陀羅(Śūdra)。前二は、四姓の第三第四なり。

【一一三】他化自在天。欲界六天の最高、即ち第六天の魔王なり。

【一一四】四天王は、欲界六天の最下にあり、須彌山の四方を

眠寤の際、其の狀夢の如くにて、諸の瑞相を見る。極めて奇特と爲す』。王卽ち答へて言ふ、『我、向に、亦、大光明あるを見、又復、汝が顏貌の常に異るを覺ゆ。汝、爲に、見し所の瑞相を說くべし』。夫人、卽便ち具に上の事を說く。偈を以て頌して曰く、

白象に乘じ、　皎淨なること日月の如く、　[九八]釋・梵・諸天衆、皆悉く寶幢を執り、香を燒き、
天花を散じ、　幷に衆の伎樂を作しつゝ、　虛空中に充滿し、　圍遶して來下し、　來りて
我が右脇に入るや、　猶、瑠璃に處くが如き有るを見る。　今、以て、大王に現す、　此は何の
瑞相とか爲す。

爾の時、白淨王、摩耶夫人の諸瑞相を見已りて、歡喜踊躍して、自ら勝ふる能はず。卽便ち[九九]善相婆羅門を遣請して、妙香花・種々の飮食を以て、之を供養し、供養し畢已りて、夫人の右脇を示し、幷に瑞相を說き、婆羅門に白して言く、『願はくは、爲に之を占へ、何等の異あるか』。時に婆羅門、卽ち之を占つて曰く、『大王、夫人の懷ける所の太子の、諸の善妙の相は、具に說くべからず。今、當に王の爲に略して之を言ふべきのみ。大王、當に知るべし。今、此の夫人の胎中の子は、必ず能く釋迦種族を光顯せん。降胎の時、大光明を放ち、諸天釋梵の、執侍圍遶せるは、此の相、必ず是正覺の瑞なり。若し、出家せずんば、轉輪聖王と爲り、四天下に王として、七寶自ら至り、[一〇〇]千子具足せん』。時に、王、此の婆羅門の言を聞きて、深く自ら慶幸し、踊躍無量なり。卽ち金、銀の雜寶、象、馬の車乘、及以び村邑を以て、用て此の婆羅門に供給し、時に、摩耶夫人、其の婇女幷に及び珍寶を以て、亦、以て奉施す。

菩薩の處胎より以來、摩耶夫人、日に、更に、[一〇一]六波羅蜜を修行す。天獻の飮食、自然にして至り、復、人間の味を樂まず。三千大千世界、常に皆大に明らかにして、其の界の中間の幽冥の處、日月の威光の、照す能はざる所、亦、皆朗然たり。其の中の衆生、各相見るを得、共に相謂つて言く、

【九八】釋とは、帝釋天。梵とは梵天。印度の世界說にては、帝釋は欲界の忉利天の主にして、梵天は色界の天子なり。天とは神のこと。

【九九】善相婆羅門。よく占相を爲す修行者。

【一〇〇】千子具足は、輪王の一指格たり。千子具足して、而も各勇健なるによりて、能く四天下を制御するを得べし。

【一〇一】波羅蜜(Pāramitā)。到彼岸又は度と譯す。吾人を運載して、彼岸に度らしむる乘りもの。これに六種あり。菩薩の行法とせらる。左の如し。
檀那 Dāna(布施)。
尸羅 Sīla(持戒)
羼提 Kṣānti(忍辱)。
毘梨耶 Vīrya(精進)。
禪那 Dhyāna(禪定)。
般若 Prajñā(智慧)。

を建てゝ、魔幢を傾倒し、煩惱海を竭し、[九〇]八正路を淨うし、[九一]諸法印を以て、衆生の心に印し、大法會を設けて、諸の天人を請ぜん。汝等、爾の時、亦、當に皆同じく此の會に在りて、法食を飡受すべし。是の因緣を以て、應に憂惱すべからず』。爾の時、菩薩、偈を以て頌して曰く、

我、此に於て、久しからずして、當に閻浮提に下り、迦毘羅旆兜の、白淨王の宮に生れ、父母親屬を辭し、轉輪王の位を捨てゝ、出家して道を學することを行じ、一切種智を成じ、正法幢を建立し、能く煩惱の海を竭し、[九二]惡趣の門を閉塞し、淨く八正道を開き、廣く諸の天人を利すること、其の數、不可計なるべし。是の因緣を以ての故に、應に憂惱を生ずべからず。

爾の時、菩薩、擧身の毛孔より、皆、光明を放つ。諸天子等、菩薩の言を聞き、又復、身より大光明を出すを見て、歡喜踊躍して、諸の憂苦を離れ、各、心に念言す、『菩薩、久しからずして、當に[九三]正覺を成ずべし』。

三、下生託胎

[九四]爾の時、菩薩、降胎の時至るを觀じ、卽ち[九五]六牙の白象に乘じて、兜率宮を發す。無量の諸天、諸の伎樂を作し、衆の名香を燒き、天の妙花を散じつゝ、菩薩に隨從して、虛空の中に滿ち、大光明を放ちて、普く[九六]十方を照し、四月八日の、明星の出る時を以て、[九七]神を母胎に降す。時に、摩耶夫人、眠寤の際に於て、菩薩の、六牙の白象に乘じ、虛に騰りて來り、右脇より入るに、影の外に現はるゝこと、瑠璃に處くが如く、夫人の體安くして快樂なること、甘露を服するが如く、自身を顧み見れば、日月の照すが如く、心大に歡喜して、踊躍無量なるを見る。此の相を見已りて、豁然として覺め、希有の心を生じ、卽便ち往いて白淨王の所に至りて、王に白して言く、『我、向に、

礙を除くが如く、説法以て一切の邪見を摧破するをいふ。

【八九】幢。はたほこ。竿頭に龍の頭をつけ、たれぎぬを垂るゝもの。

【九〇】八正路。また八正道、八支正道といふ。見・思惟・語・業・精進・命・念・定の正しきこと。

【九一】諸法印。苦・空・無常・無我を以て四法印と爲し、また無常・無我・寂靜を以て、三法印と爲す。

【九二】惡趣。惡道に同じ。最惡の地獄・餓鬼・畜生の三を三惡道といひ、之に人間・天上を加へて、五道といひ、修羅を加へて六道といふ。

【九三】正覺は、眞正なるさとり。佛陀のこと。

【九四】これより、下生託胎の一段なり。

【九五】六牙白象。象は印度にては龍と共に勝れたるものゝ象徴にして、中に於て、六牙の白象は、最勝を表す。「普曜經」は、菩薩自身が、白象として、胎中に入れりと作し、兎・馬・象の三獸渡河を三乘に比し、象は菩薩たるの意を表はすと爲す。これ象を精神的に解釋せるものなり。

【九六】東西南北四維上下。

【九七】神は、たましいなり。

如し。又、水を渡らんと欲するに、忽然として橋船を失ふが如し。亦、嬰孩兒の、其の慈母を喪亡するに似たり。我等も、亦、是の如し。所歸依の處を失ひ、方に生死の流に漂うて、了に出づるの緣ある無し。我等、長夜に於て、癡の箭の爲に射らるゝを、既に大醫王を失ふ、誰か當に我を救ふべき者ぞ。無明の床に滯臥し、長へに愛欲の海に沒するを、永く尊者の訓を絕たんか、未だ超出の期を見ざるなり。

爾の時、菩薩、諸天子の悲泣懊惱するを見、又復、戀慕の偈を說くを聞き、即ち慈音を以て、之に告げて曰く、『善男子、凡そ人の生を受くる、死せざる者なし。恩愛の合會には、必らず別離あり。上は[八三]阿迦膩吒天に至り、下は[八四]阿鼻地獄に至るまで、其の中の一切諸衆生等、無常の大火の爲に、煎炙せられざるあるなし。是の故に、汝等、應に我に於て、獨、戀慕を生ずべからず。我、今、汝と、皆悉く、未だ生死の熾火を離れず。乃至、一切の貧富貴賤も、皆免脫せず』。是に於て、菩薩、即ち偈を說いて言く、

[八五]諸行は無常なり、是れ生滅の法なればなり。生滅、滅し已りて、寂滅なるを樂しと爲す。

爾の時、菩薩、天子に語りて言ふ、『此の偈は、乃ち是れ過去諸佛の共に說く所。諸行の[八六]性相や、法として皆是の如し。汝等、今は憂惱を生ずるなかれ。我が生死にある無量劫來にして、今は唯此の一生の在る有るのみ。久しからずして當に諸行を離るるを得べし。汝等當に知るべし。今は、是、衆生を度脫するの時ぞ。我、應に、閻浮提中、迦毘羅旆兜國、甘蔗の苗裔、釋姓の種族、白淨王の家に下生すべし。我、彼に生れ、父母を遠離し、妻子及び[八七]轉輪王の位を棄捨して、出家學道し、苦行を勤修し、魔怨を降伏して、一切種智を成じ、一切世間の天・人・魔・梵の、轉ずる能はざる所の[八八]法輪を轉じ、亦過去の諸佛の行ぜる法式に依りて、廣く一切の諸天人衆を利し、大法[八九]幢

【七九】動・起・踊・震・吼・擊を六種震動といふ。これに徧の六種、等徧の六種を加へて、十八相と爲す。

【八〇】魔(Māra)。欲界六天の最高天にあるを以て、第六天の魔王といふ。他化自在天これなり。

【八一】行は、遷流の義、生滅變化すべき一切の事物を諸行といふ。

【八二】波羅奢花(Palāśa)。赤花樹。

【八三】阿迦膩吒(Akaniṣṭha)色究竟と譯す。色界十八天の最高にあり。

【八四】阿鼻(Avici)。無間と譯す。八熱地獄の最下にあり。苦を受くる間斷なきを以て、この名あり。

【八五】諸行の行は、うつりかはる義なれば、諸行とは生滅變遷する萬物のこと。寂滅とは一切の動亂を超越する義にして、涅槃のさとりをいふ。この四句の偈は、「涅槃經」にもあり。これを和譯せるものは我がいろは歌なり。

【八六】性相とは、本質のこと。

【八七】轉輪王(Cakravartti-rāja)。輪寶を轉じて、一天四海を威服統御する理想的王者の義。

【八八】韓法輪とは、說法のこと。輪寶を轉じて、一切の障

太子を懷抱して十月を滿足して、太子便ち生れ、生れて七日已りて、其の母命終す』。既に此の觀を作して、又、自ら思惟す、『我、今、若、便即ち下生せば、廣く諸天人衆を利する能はじ』。仍て天宮に於て、五種の相を現じ、諸天子をして、皆悉く、菩薩の期運應に下りて作佛すべきを覺知せしむ。一には、菩薩の眼、瞬動を現じ、二には、頭上の花萎み、三には、衣に塵垢を受け、四には、腋下より汗出で、五には、本座を樂しまず。時に諸天衆、忽ち菩薩に此の異相あるを見て、心大に驚怖し、身の諸の毛孔より、血の流るゝこと雨の如し。自ら相謂つて言く、『菩薩、久しからずして、我等を捨てん』。

爾の時、菩薩、又、五瑞を現ず。一には、大光明を放ちて、普く三千大千世界を照す。二には、大地、十八相に動き、須彌・海水・諸天の宮殿、皆悉く震ひ搖ぐ。三には、諸[八〇]魔の宮宅、隱蔽して現ぜず。四には、日月星辰、復、光明なし。五には、天龍八部、身皆震ひ動きて、自ら禁ふる能はず。

是の時、兜率の諸天、菩薩の身に、已に五相あるを見、又復、外の五の希有の事を覩て、皆悉く聚集りて、菩薩の所に至り、頭面に足を禮して、白して言ふ、『尊者、我等、今日、此の諸相を見、擧身震動して、自ら安んずる能はず。唯、願はくは、我が爲に、此の因緣を釋きたまへ』。菩薩、即便ち諸天に答へて言く、『善男子、當に知るべし。[八一]諸行は皆悉く無常なり。我、今、久しからずして、此の天宮を捨てゝ、閻浮提に生れん』。時に諸天、此の語を聞き已りて、悲號涕泣し、心大に憂惱して、擧身より血の現ずること、[八二]波羅奢花の如し。或は、復、本座を樂しまざるあり。或は其の莊嚴の具を棄つるあり。或は宛轉して地に迷悶するあり。或は深く無常の苦を歎ずる者あり。

爾の時、一天子あり、即ち偈を說いて言く、

菩薩の此に在るや、　我等の法眼を開きしを、　今や我に遠かり去る。　盲の導師に離るゝが

【六八】一生補處。等正覺とて、一生の後に佛處を補ふべき位置に達するをいふ。

【六九】兜率天(Tuṣita)。欲界六天の第四位にあり。等正覺の菩薩、こゝにありて、下生成佛を待つと信ぜらる。

【七〇】聖善白は、元・明二本倶に聖善慧と作す。

【七一】十方。四方・四隅・上・下。

【七二】三千大千世界。日月・須彌・四天下・六欲天・梵世天を合して、一世界といひ、これを千個合したるを小千世界といひ、小千世界を千個合したるを、中千世界といひ、中千世界を千個合したるを大千世界といひ、大千世界を三千倍したるを、三千大千世界といふ。

【七三】閻浮提。(Jambu-dvipa)の略。須彌四洲の南方にある人間世界。

【七四】迦毘羅旆兜國(Kapila-vastu)。

【七五】釋迦(Śākya)。能と譯す。

【七六】甘蔗(Ikṣvāku)。日種王族の祖先。

【七七】白淨王(Śuddhodana-rāja)。普通に淨飯王といふ。

【七八】摩耶夫人(Māyā-devi)。摩耶は幻化と譯す。

彼に於て命終して、即便ち上生して、[58]四天王と爲り、三乘の法を以て諸天衆を化し、彼の天壽を盡して、人間に下生し、[59]轉輪聖王と爲りて、四天下に王として、[60]七寶具足す。一に金輪寶、二に白象寶、三に紺馬寶、四に神珠寶、五に玉女寶、六に主藏臣寶、七に主兵臣寶なり。千子具足して、皆悉く勇健、能く怨敵を伏す。正法を以て治めて、諸の憂惱なく、常に[61]十善を以て、諸の人民を化し、此に於て壽終り、[62]忉利天に生れて、彼の天主と爲り、壽終り、下生して、轉輪聖王と爲り、其の壽命を終へて、乃至、第七[63]梵天に生れぬ。上りて天主と爲り、下りて聖主と爲ること、各三十六反、其の間に、或は仙人と爲り、或は外道[64]六師と爲り、或は婆羅門と爲り、或は小王と爲り、是の如く變現すること、稱げて數ふべからず。

二、生兜率天

[65]爾の時、善慧[66]菩薩、功行滿足して、位[67]十地に登り、[68]一生補處に在りて、一切種智に近づくや、[69]兜率天に生れて、[70]聖善白と名く。諸天主の爲に、一生補處の行を說き、亦[71]十方國土に於て、種々の身を現じて、諸衆生の爲に應に隨つて法を說き、下りて當に作佛すべき期運將に至らんとして、即ち五事を觀ず。一には、諸衆生の熟すると未だ熟せざるとを觀じ、二には、時の至ると未だ至らざるとを觀じ、三には、諸國土の、何れの國か中に處するを觀じ、四には、諸種族の、何の族か貴盛なるを觀じ、五には過去の因緣、誰か最も眞正にして、應に父母と爲るべきを觀ず。五事を觀じ已りて、即ち、自ら思惟す、『今、諸衆生は、皆これ我が初發心以來、成熟せる所のもの、能く清淨の妙法を受くるに堪ふ。此の[72]三千大千世界に於て、此の[73]閻浮提の[74]迦毘羅旆兜國は、最も中に處すと爲す。諸族種姓にて、[75]釋迦は第一、[76]甘蔗の苗裔、聖王の後なり。[77]白淨王の過去の因緣を觀ずるに、夫妻眞正にして、父母と爲すに堪ふ。又、[78]摩耶夫人の、壽命の脩短を觀ずるに、

【五九】轉輪聖王。須彌四洲、即ち人間世界を統領する大帝のこと。輪寶を轉じて、一切を威服するを以て、この稱あり。三十二相を具備すといはる。

【六〇】七寶。轉輪王の七寶なり。

【六一】十善。殺生・偸盜・邪婬・妄語・綺語・兩舌・惡口・貪欲・瞋恚・愚癡(或は邪見)の十惡を離るゝをいふ。

【六二】忉利天(Trāyastriṃśa)譯して三十三天といふ。須彌山の頂上にあり。帝釋を以て、天主とす。欲界六天の第二。

【六三】梵天は(Brahmaloka-deva)の略。欲界の上に位する色界四禪天の中の初禪天をいふ。

【六四】六師。富蘭那迦葉等の六人。佛陀の當時、相當の勢力あり、懷疑・破壞の思想を以て、衆を惑はせり。

【六五】これより、普光佛本生中、善慧の生兜率天の一段にして、善慧はこれより菩薩と稱せらる。生兜率天は、八相示現の一なり。

【六六】菩薩。菩提薩埵(Bodhisattva)の略。覺有情と譯す。

【六七】十地。菩薩の修行階位。これに二種あり。普通は歡喜地、乃至、法雲地をいふ。

爾の時、當に第一聲聞弟子と作るべし』。

爾の時、普光如來、貧人を記し已りて、八萬四千の比丘、及び燈照王、幷に【五一】婆羅門、諸の臣民等の與に、前後に圍遶せられて、提播婆底城に入りたまふ。時に、燈照王、其の眷屬と、四事を以て、普光如來、幷に及び八萬四千の比丘を供養し、四萬歳を經て、王卽ち位を捨てゝ、以て其の子に付し、其の眷屬、及び、夫人の眷屬、各八萬四千人と、同じく佛法に於て、出家修道し、【五二】陀羅尼、諸法【五三】三昧を得たり。善慧比丘、亦、普光如來に隨つて、王の供養を受け、滿四萬歳にして、諸法中に於て、深三昧を得、衆生を教化すること、稱げて數ふべからず。

爾の時、善慧比丘、普光如來に白して言く、『世尊、我、昔日に於て、深山の中に在りて、五の奇特の夢を得たり。一には、大海に臥すと夢み、二には、須彌に枕すと夢み、三には、海中の一切衆生、我が身內に入ると夢み、四には、手に日を執ると夢み、五には、手に月を執ると夢みき。唯、願はくは、世尊、我が爲に、此の夢の相を解說したまへ』。爾の時、普光如來、答へて言はく、『善哉。汝、若、此の夢の義を知らんと欲せば、當に汝が爲に說くべし。大海に臥すと夢みたるは、汝が身、卽時【五四】生死の大海の中に在るなり。須彌に枕すと夢みたるは、生死を出でゝ、【五五】般涅槃を得るの相なり。大海中の一切衆生の、身內に入ると夢みたるは、當に生死の大海に於て、諸の衆生の爲に、歸依處と作るべきなり。手に日を執ると夢みたるは、智慧の光明、普く【五六】法界を照すなり。手に月を執ると夢みたるは、【五七】方便智を以て、生死に入り、淸涼の法を以て、衆生を化導して、惱熱を離れしむるなり。此の夢の因緣は、是、汝が將來成佛の相なり』。善慧聞き已りて、歡喜踊躍、自ら勝ふる能はず、佛を禮して退く。

爾の時、普光如來、復、少時を經て、般涅槃に入りたまふや、善慧比丘、正法を護持する、滿二萬歳、三乘の法を以て、衆生を敎化し、利益する所のもの、稱計すべからず。爾の時、善慧比丘、

と譯す。善法を勤修して、惡法を止息すればなり。

【五一】婆羅門(Brāhmaṇa)。淨行と譯す。印度四姓の最高位にあるもの、或は他姓にても、淨行を勤修して、嘉納せられたるものにいふ智慧のこと。

【五二】陀羅尼(Dhāraṇī)。總持と譯す。善法を持して散ぜざらしむるをいふ。

【五三】三昧(Samādhi)。等持と譯す。心を一境に止めて、動かざるにいふ。禪定の極なり。

【五四】生死大海。生滅流轉の苦界を大海にたとへたるなり。

【五五】般涅槃(Parinirvāṇa)。圓寂など譯す。一切の寂滅、障礙、擾亂の止滅して、絕對の自由安穩に入れる境地をいふ。

【五六】法界。宇宙をいふ。これに事・理を分ち、また事理の關係に於て、不離相卽を說く。

【五七】方便智。方便卽菩提にして、善巧の方便もて、衆生を化益するを以て、道となすをいふ。方便(Upāya)に種々の意味あれども、善き方法によりて他を導くを本義とす。

【五八】四天王。須彌山の四方を鎭護する天王。欲界六天の第一。

我等、皆、願はくは、其の眷屬と爲らん』。是の時、普光如來、卽ち之を記したまひて曰く、『汝等、皆當に其の國に生るゝを得べし』。

爾の時、如來、既に記を授け已りて、猶、善慧が、仙人の髻を作し、鹿皮の衣を披るを見たまひ、如來、此の服儀を捨てしめんと欲して、卽便ち地を化して、以て淤泥と爲す。善慧、佛の應に此より、行くべくして、地の濁溢するを見、心に自、念言す、『云何ぞ乃ち【四三】千輻輪の足をして、此を蹈んで過ぎしめん』。卽ち皮衣を脫して、以用て地に布くに、泥を掩ふに足らず。仍て又髮を解きて、亦、以て之を覆ふ。如來、卽便ち之を踐んで度り、因って之を記したまふ。曰く、『汝、後に佛を得んに、當に【四四】五濁惡世に於て、諸の天・人を度して、以て難しと爲さゞること、必らず我の如くなるべし』。時に善慧、斯の記を聞き已りて、歡欣踊躍、喜び自ら勝へず。卽時に便ち【四五】一切法空を解し、【四六】無生忍を得、身、虛空に昇り、地を去る七多羅樹にして、偈を以て佛を讃ず。

今、世間の導を見るに、我をして慧眼を開かしめ、爲に淸淨の法を說いて、一切の著を去離せしむ。今、天人の尊に遇ふに、我をして無生を得しむ。願はくは、將來に果を獲んこと、亦、【四七】兩足尊の如くならん。

是の時、善慧、此の讃を說き已りて、空中より下りて、佛前に到り、【四八】五體を地に投じ、佛に白して言く、『唯、願くは、世尊、我を哀愍するが故に、我が出家を聽したまへ』。爾の時、普光如來、答へて、『善哉、※善來、比丘』と言へば、鬚髮自ら落ち、【四九】袈裟身に著きて、卽ち【五〇】沙門と成りぬ。

爾の時、二の貧窮の老人あり。各、親屬一百人と倶なり。佛の相好の、威德嚴顯なるを覩、自、貧乏にして、以て供養するなきを傷む。是の時、如來、其の心の至れるを愍み、卽ち前地を化して、諸の草穢を生じ、二貧人をして、地の不淨を見て、歡喜の心を發して、便ち灑掃せしむ。普光如來、之を記したまうて、曰く、『汝、無量阿僧祇劫を過ぎて、釋迦牟尼佛の、世に出興せんとき、汝等、

【四三】千輻輪足。三十二相の一。佛足の裏に、千の輻輪の文ありといはる。

【四四】五濁。五つのけがれ、いまはしき事。劫濁（劫は時、時の下る事）。見濁（人の考のあしき事）。煩惱濁（煩惱の盛なる事）。衆生濁（人の德行のなき事）。命濁（命の短くなる事）。

【四五】一切法空。一切の萬法を、そのまゝにして、之を空と觀ずること。因緣の和合によつて成立し、一としてそれ自體なきを以てなり。

【四六】無生忍。無生法忍の略。法空智をいふ。卽ち生滅の法を空して、不生不滅の法を忍可決定するなり。

【四七】兩足尊。又、二足尊といふ。二足を有する生類中にて、最も尊き人をいふ。こゝは普光如來を指す。

※善來比丘。善慧仙人はこの出家によりて、善慧比丘となれり。

【四八】五體。兩手・兩膝・頭のこと。これを地に著くるは、印度の最敬禮なり。又、五輪著地ともいふ。

【四九】袈裟。（Kaṣāya）。染色衣と譯す。食ふべからざる草木の皮葉花を以て染む。出家の正衣。

【五〇】沙門（Śramaṇa）。勤息

閡を生じて、吾が施心を壞る莫れ』。青衣、答へて言ふ、『善い哉、善い哉、敬んで來命に從はん。今、我、女、弱くして、前むを得る能はず。請ふ二花を寄せて、以て佛に獻ぜん。我をして生生、此の願――好醜ともに離れじ――失はざらしめ、必ず心中に置きて、佛の之を知ろしめたまはんを』。

爾の時、燈照王、其の諸子、及び衆くの官屬・婆羅門等と、好香の花、種種の供具を持ちて、出で、普光如來を奉迎し、擧國の人民、亦皆隨從す。是の時、善慧の五百の弟子、共に相謂つて言く、『今日、國王、及び諸の臣民、悉く皆普光佛の所に往詣す。大師、今、亦、當に已に去るべし。我等、宜しく、應に彼に往きて、禮敬すべし』。此の語を作し已りて、卽ち共に倶に行く。道に在る、未だ遠からずして、善慧に逢ひ見、師徒相遇うて、喜悅無量、卽ち共に同じく普光佛の所に詣る。燈照王が、已に佛前に到り、最も初に在りて供養禮拜するを得、是の如く次第して、諸大臣に至るまで、亦各禮敬し、幷に名花を散ずるに、花悉く地に墮つるを見る。

時に、善慧、五百の弟子と與に、諸人衆の供養し畢るを見已りて、如來の相好の容を諦觀し、又、諸の苦の衆生を濟拔せんと欲し、亦、一切種智を滿足せんと欲するが故に、卽ち五莖を散ずるに、皆空中に住まりて、化して花臺と成り、後に二莖を散ずるに、亦、空中に止まりて、佛の兩邊を夾む。爾の時、國王、及び其の眷屬、一切の臣民、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等、此の奇特を見て、未曾有と嘆ず。是に於て、普光如來、無礙智を以て、善慧を讃じて言はく、『善哉善哉、善男子、汝、是の行を以て、無量阿僧祇劫を過ぎて、當に成佛を得て、釋[四一]迦牟尼如來、應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號すべし』。善慧が記[四二]を受くる時に當り、無量の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等、諸の妙花を散じて、虛空の中に滿たしめ、誓を發して言ふ、『善慧が將來に佛道を成ぜん時、

【四一】釋迦牟尼(Śākyamuni)。能仁寂默と譯す。釋迦は能と譯せられ、牟尼を「瑞應本起經」には儒と譯し、「修行本起經」には仁と譯し、之を合して能儒又は能仁といふ。「慧苑音義」に牟尼を寂默と譯せるは、適譯なり。其後、釋迦牟尼を能仁寂默と義譯して、能仁の慈悲あるが故に涅槃に住せず、寂默の智慧あるが故に生死に住せずと解するに至れり。これ菩薩の不住涅槃の思想を以て、釋尊に見たるものにして、語學上よりせば、少しく議すべき點あれども、釋尊を表はすものとして、妙釋といふべし。如來(Tathāgata)。應供(Arhat)。正遍智(Samyaksaṁbodhi)。明行足(Vidyā-caraṇa-sampanna)。善逝(Sugata)。世間解(Lokavid)。無上士(Anuttara)。調御丈夫(Puruṣa-damya-sārathi)。天人師(Deva-manuṣya-śāstṛ)。佛(Buddha)。世尊(Bhagavat)。以上を佛の十號といふ。

【四二】記。委しくは、記別といふ。豫言なり。

て王に輸れと』。善慧聞き已りて、心大に懊惱し、意猶息まずして、苦に花所を訪ぬ。俄爾、即ち王家の青衣に遇ふ、密に七莖の青蓮花を持ちて過ぐ、王の制令を畏れて、瓶中に藏め著くるに、善慧の至誠、其の蓮花に感じ、踊りて瓶の外に出でしむ。善慧遙かに見て、即ち追ひ呼んで曰く、『大姉、且く止まれ。此の花、賣るや不や』。青衣、聞き已りて、心に大に驚愕し、自、念言す、『花を藏むること、甚だ密なるに、此の何の男子ぞ、乃ち我が花を見て、買はんを求索むるか』。顧みて其の瓶を看れば、果して花の出るを見、奇特の想を生じ、答へて言ふ、『男子よ、此の青蓮花は、當に宮内に送るべし。以て佛に上らんと欲す。得べからざるなり』。善慧又言ふ、『請ふ、五百の銀錢を以て、五莖を雇はんのみ』。青衣、意に疑ひ、復、自、念言す、『此の花の直する所、數錢に過ぎざるに、今、男子、乃ち銀錢五百を以て、五莖を買はんを求むるとは』。即ち之に問うて言ふ、『此の花を持ちて、用つて何等をか作さんと欲する』。善慧答へて言ふ、『今、如來ありて、世に出興したまひ、燈照大王請じ來りて城に入りまさんとす。故に、此の花を須て、以て供養せんと欲す。大姉、當に知るべし。諸佛如來は、値遇すべきこと難し。[三八]優曇鉢花の(時に)乃ち一たび現はるゝが如し』。青衣又問ふ、『如來を供養して、何等をか求むる事をか爲す』。善慧答へて曰く、『一切種智を成就して、無量の苦の衆生を度脫せんと欲するが爲の故なり』。爾の時、青衣、此の語を聞くを得て、心に自、念言す、『今此の男子、顏容端正、鹿皮の衣を披、纔に形體を蔽ふのみなるに、乃ち爾く至誠にして、錢寶を惜まず』。即ち之に語りて曰く、「我、今、當に此の花を以て相與ふべし。願はくは、我、生生、常に君が妻たらん』。善慧答へて言ふ、『我、[三九]梵行を修し、[四〇]無爲の道を求む。生死の緣を相許すを得ず』。青衣即ち言ふ、『若、當、我が此の願に從はずんば、花は得べからず』。善慧又曰く、『汝、若、決定して、我に花を與へずんば、當に汝が願に從ふべし。我は布施を好みて、人意に逆はず。若使、來りて我より、頭・目・髓腦と、及び妻子とを乞ひ求むる有るも、汝、

程。四十里とせらる。

【三五】須彌(Sumeru)。妙高山と譯す。印度世界說に於て、世界の中心にある大山、蓋し雪山の理想化なり。

【三六】幢は、はたほこ。幡はたれはた。蓋は雨又は日光を防ぐ爲の傘蓋。

【三七】青衣。大家に奉仕する女子。

【三八】優曇鉢花(Udumbara)。靈瑞華と譯す。輪王、及び佛陀の出世の時のみ、開くといふ。

【三九】梵行。淨行に同じ。

【四〇】無爲。爲は爲作造作。本來常住にして、造作せられたるものにあらざるを無爲といふ。常住涅槃をいふ。

爾の時、善慧仙人、山中に在りて、五の奇特の夢を得たり。一には、大海に臥すと夢み、二には、[二五]須彌に枕すと夢み、三には、海中の一切衆生、其の身内に入ると夢み、四には、手に日を執ると夢み、五には、手に月を執ると夢む。此の夢を得已りて、卽ち大に驚き悟め、心に自ら念じて言ふ、『我が今の此の夢や、小緣爲るに非ず。當に以て誰にか問ふべき。宜しく城内に入りて、諸の智者に問うべし』。是の念を作し已りて、鹿皮の衣を披、手に水瓶、及び杖・繖蓋を執り、行いて城邑に入らんとて、路に外道の止住する處を過ぐ。五百人ありて、上首たり。善慧念じて言ふ、『我、今、當に夢みる所を以て、之に問ふべし。并びに其の修する所の業を觀るを得ん』。卽ち諸人と共に、道義を講論して、其の異見を破す。時に五百人、卽便ち屈を受け、弟子たらんを求め、善慧の所に於て、深く恭敬を生じ、各、銀錢一枚を以て、以て之を上つる。復、五百の外道あり。旣に善慧の辯才聰明なるを見て、亦、隨喜を生じ、時に諸の外道、自ら共に議して言ふ、『今や、普光如來、世に出興したまふ』。善慧仙人、斯の語を聞き已りて、擧體の毛竪ち、心大に歡喜すること、踊躍無量。便ち外道と分別れて去る。外道問うて言ふ、『師、何くの所にか趣く』。答へて言ふ、『我、今當に普光佛の所に往きて、供養を施さんと欲す』。外道白して言ふ、『師若し去らば、願樂はくは隨從はん』。善慧答へて曰く、『我、今、緣あり。宜しく應に先づ行くべし』。爾の時、善慧、五百の銀錢を齎し、路に隨つて去る。諸の外道衆、悲戀懊惱し、辭別して歸る。

善慧、前に至りて、王の家人の、道路を平治し、香水を地に灑ぎ、[三六]幢・幡・蓋を列し、種種に莊嚴するを見、卽便ち問うて言ふ、『何の因緣の故に、是の事を作すか』。王の人、答へて言ふ、『世に佛ありて興ります。名けて普光といひたまふ。今、燈照王、請じ來りて城に入りたまはんとす。所以に、怱怱に道路を莊嚴す』。善慧、卽ち復、彼の路人に問ふ、『汝、何處にか諸の名花あるを知るや』。答へて言ふ、『道士、燈照大王、鼓を撃ちて國内に唱令す、名花は皆賣るを得ざれ。悉く以

dharva)。「天の樂神」。阿修羅(Asura)。迦樓羅(Garuḍa)。「金翅鳥」。緊那羅(Kiṃnara)「人非人」。「大蟒神」。摩睺羅伽(Mahoraga)。以上を八部衆といふ。次の人非人は、緊那羅の譯にあらず八部衆の眷屬を總稱するなり。

【二七】(Anuttarasamyaksambodhi)。舊には、無上正眞道と譯し、新には無上正遍知と譯す。

【二八】轉法輪。說法のこと。說法もて一切の疑網を、摧破するを、輪寶の一切の障礙を擊破するに喩ふ。

【二九】三乘法。聲聞・緣覺・菩薩に對する、四諦・十二因緣・六波羅蜜の法をいふ。

【三〇】如來(Tathāgata)。の譯。如より來生せるもの。又、如に向つて去るもの。如は眞如なり。如來の語の中に、佛敎の眞理觀も、佛陀觀も、よくあらはさる。

【三一】阿羅漢(Arhān)。應供と譯す。一切世間の供養に應ずるに堪ふべき聖果をいふ。

【三二】無著は、執者なきこと。忍は。忍可決定して、確實に悟ること。

【三三】以下全部佛說なれば、【】の符號を略す。

【三四】踰闍那(Yojana)。印度の里數の單位。王軍一日の行

『是の時、太子、後宮に在りて、夫人・婇女の爲に、種々の法を說き、太子、年二萬九千歲に至りて、轉輪王の位を捨て、其の父母に啓して、出家せんことを求め欲す。既に聽かれざるや、乃至、三たび請うて、猶尙許されざるも、太子の慈悲や、志、拯濟に存し、其の小違を忍びて以て、大順を成ぜんとて、卽便ち山林の樹下に往詣して、鬚髮を剃除し、法服を被著して、苦行を勤修すること、滿六千歲にして、[二七]阿耨多羅三藐三菩提を成じて、諸天人、及び八部衆の爲に、[二八]法輪を轉じ、――此の輪や、微妙にして、一切世間の天・人・魔・梵の轉ずる能はざる所――[二九]三乘の法を以て、衆生を敎化し、利益したまふべき所、稱げて數ふべからず』。

『爾の時、父王及び其の夫人、後宮の婇女、太子普光の、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまへるを聞き、心に大に歡喜して、踊躍すること無量なり。爾の時、群臣、國內の人民・婆羅門等、太子の道の成ぜるを聞き、心に各念言す、「太子普光、轉輪王の位を捨て、鬚髮を剃除し、法服を被著して、出家修道し、正覺を成ずるを得たり。我等、今、亦、當に出家すべし」。此の念を作し已りて、悉く皆普光佛の所に至る。爾の時、普光[三〇]如來、卽ち其の心を觀じ、其の因緣に隨つて、爲に法を說きたまふに、大臣・婆羅門等、四千人ありて、[三一]阿羅漢を成じ、國中の人民及餘の四方の諸の來會衆、八萬人ありて、亦[三二]無著法忍を得たり』。

[三三]爾の時、普光如來、八萬四千の諸阿羅漢と、國界に往詣して、遊行敎化す。父王聞き已りて、心に大に歡喜し、卽ち國中に勅して、道路を平治し、香水を地に灑ぎ、諸の繒綵の寶幢・幡・蓋を懸け、衆の名華を散じ、是の如く莊嚴すること、滿十二[三四]踰闍那なり。又復、鼓を擊ちて、國內に唱令す、『諸の華あるもの、私に賣るを得ざれ。悉く輸りて王に與へよ』。幷に人民に勅す、『我に先ちて佛を供養するを得ざれ』。卽ち大臣を遣はし、幷に伎樂を作し、燒香散華しつゝ、往いて彼の普光如來を請じまつる。

は成と壞とを擧げて、他を略す。無限の長時に亘り、世界の幾變化を通しての意。

【一七】　貪欲・瞋恚・愚癡。これを三毒の煩惱といふ。一切の煩惱の根本なり。

【一八】　色・聲・香・味・觸・法。これを六境といふ。眼・耳・鼻・舌・身・意の六識の對境なり。第六の法は意識の內容にして、一切のものを含む。

【一九】　布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧。六波羅蜜といふ。大乘菩薩の行法なり。

【二〇】　四事。供養に用ふる四種。或は房舍・衣服・飲食・華香をいひ、或は飲食・衣服・臥具・湯藥をいひ、或は衣服・飲食・散華・燒香をいふ。

【二一】　佛・法・衆。三寶なり。衆は僧伽 Saṃgha の譯。二人以上を僧伽といへばなり。

【二二】　(Devapati)。

【二三】　三十二相・八十種好。兩者を合して、相好といふ。よきすがた。大なるを相といひ、小なるを好といふ、三十二相は、次に出づ。之を具するを、大人相といふ。

【二四】　普光　(Dīpaṃkara)。普通に燃燈又は錠光と譯す。

【二五】　薩婆若(Sarvajña)。一切智。

【二六】　天(Deva)。龍(Nāga)。夜叉(Yakṣa)。乾闥婆(Gan-

の、愛欲に耽惑し、苦海に沈流するを感傷して、慈悲心を起して、之を拔濟せんと欲するが所以なり』。

『又、此の念を作さく、「今、諸の衆生の、生死に沒して自ら出る能はざるは、[17]皆貪欲・瞋恚・愚癡に由りて、[18]色・聲・香・味・觸・法に樂著するが故なり。我當に決定して、其が此の病を斷ずべし」と。諸趣に生ると雖も、斯の念を忘れず、諸の衆生に於て怨親平等に、[19]布施を以て貧窮を攝し、持戒もて毀禁を攝し、忍辱もて瞋恚を攝し、精進もて懈怠を攝し、禪定もて亂意を攝し、智慧もて愚癡を攝し、是の如く、長夜に、衆生を増益して、普ねく一切の爲に、歸依と作り、諸の如來に於て、恭敬供養し、法を聽かんを樂欲し、亦、他の爲に說き、常に[20]四事を以て、衆僧に奉給し、[21]佛・法・衆に於て、尊重守護す。是の如きの諸行や、稱げて數ふべからず』。

『爾の時、王あり。名けて燈照と曰ひ、城を[22]提播婆底と名く。其の國の人民、壽八萬歲、安穩豐樂、極めて熾盛爲り、所欲の自在なること、猶、諸天の如し。時に彼の國王、正法もて世を治めて、人民を枉げず、殺戮楚撻の苦あることなく、諸の人民を視ること、一子の如き有り。時に、燈照王、始めて太子を生む。端嚴比なく、威德具足して、[23]三十二相八十種好あり。初生の日、四方皆明にして、日月珠火も、復用を爲さず。王、太子にかくの如きの瑞あるを見、卽ち諸臣を召して、共に集り議して言ふ、「太子の初めて生るゝや、此の奇特あり。太子の爲に、何等の名をか作すべき」。諸臣答へて言ふ、「應に太子を名けて、以て[24]普光と爲したまふべし」。又、相師を召して、之を占相せしむ。相師答へて言ふ、「今、太子を觀るに、若、在家せば、轉輪王と爲りて、四天下を統べん。若、出家せば、天人の尊と爲りて、[25]薩婆若を成ぜん」。王及び夫人、後宮の婇女、相師の言を聞きて、此の太子に於て、深く愛念を生じ、亦[26]天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等に、供養恭敬、尊重讃歎せらる』。

竹林精舍にあらず。竹林精舍は、王舍城にあり。

【九】淨天耳。天耳は六神通の一。

【一〇】因緣。佛敎は因緣義を、その敎理の中心とするを以て、理の上より之を說く時は、頗る複雜となるも、こゝはさる道理あるにあらず。原因と事情とを合して、わけがら程の意に用ひたるなり。釋尊が今日の如き結果を得られたるわけがらなり。

【一一】以下普光佛本生中、善慧仙人の布髮受記の一段。

【一二】阿僧祇劫(Asaṁkhyeya-kalpa)。無數長時と譯す。劫は劫波(Kalpa)の略、長時と譯す。

【一三】善慧(Sumedha)。釋尊の過去世に於ける行者としての名。

【一四】一切種智。一切の法を知了する智慧。一切智に同じ。もし、之を區別する時は、一切智は平等界の空性を見るもの、一切種智は差別界　事相を見るものなり。

【一五】五道。地獄・餓鬼・畜生・人間・天上をいふ。迷の全體なり。修羅を別立する時は、六道となる。五道六道を、又は、五趣六趣と作す。

【一六】成壞。天地に成・住・壞・空の變化あり。その中、こゝに

過去現在因果經[1]

卷の第一

[2]是のごとく、我聞けり。一時、[3]佛、[4]舍衞國の[5]祇樹給孤獨園に在しぬ。爾の時、[6]世尊、諸の[7]比丘と、[8]竹林に住したまふ。

是の諸比丘、晨朝時に於て、衣を著け鉢を持し、城に入りて食を乞ひ、所在に還歸り、食し竟りて澡漱し、各衣鉢を攝し、集りて講堂に在り、悉く共に過去の因緣を說かんと欲す。爾の時、世尊、[9]淨天耳の、世間に超えたるを以て、諸比丘の語論の聲を聞き、卽ち座より起ちて、講堂の上に到り、衆中に坐して、諸比丘に問ひたまふ、『汝等、共に集りて、何の法をか說かんと欲する』。時に、諸比丘、卽ち佛に白して言ふ、『世尊、我等、食し竟りて、澡漱已に訖るが故に、共にこゝに集りて、各、過去の[10]因緣を聞きつ說きつせんと欲す』。是の時、世尊、諸比丘に語りたまふ、『汝等、過去の因緣を聞かんと樂はゞ、諦かに聽き諦かに聽きて、善くこれを思念せよ。今、汝が爲に說かん』。比丘白して言ふ、『唯然り、世尊、願樂して聞かんと欲す』。

一、布髮受記

[11]佛、比丘に告げたまふ、『過去無數[12]阿僧祇劫に、爾の時、一仙人ありき。名けて[13]善慧と曰ふ。梵行を淨修して、[14]一切種智を求め、此の大智を成就せんと欲するが爲の故に、樂んで生死に處り、[15]五道に周遍して、一身死壞して、復一身を受け、生死無量なること、譬へば、天下の草木を盡して、斬りて以て籌と爲し、其故の身を數へんに、窮盡する能はざるが《如し》。——夫れ天地の始終を極むるを、之を一劫と謂ふ。而して其の天地の[16]成壞を經る者や、稱げて載すべからざるなり——群生

【一】本經は、劉宋の求那跋陀羅の譯。譯者、譯場、譯時につきては、解題を見よ。
【二】「佛所行讚」は、直に本經の誕生に比すべき生品より始むるを以て、初め普光佛本生なく、生兜率天・下生託胎なし。「普曜經」・「本行集經」には、本生あり。この經を、普通の三分法、卽ち序分、正宗分、流通分に分たば、初の本生の部分は、序分なり。誕生以後大迦葉歸佛までは、正宗分なり。而して最後に、流通分を加ふ。「所行讚」は、この經の正宗分に當る部分より初むるものなり。
【三】佛。佛陀(Buddha)の略。譯して覺者といふ。
【四】舍衞國(Śrāvastī)。
【五】祇樹給孤獨園(Anāthapiṇḍadasyārāma)。祇陀太子が樹林を、給孤獨長者が精舍を布施せるもの、略して祇園精舍といふ。園は精舍に同じ。
【六】世尊。婆伽梵(Bhagavān)の譯。人世最高の尊者。
【七】比丘(Bhikṣu)。乞士と譯す。衣食一切を、社會に仰ぐを以てなり。而して社會に仰ぐ爲には、之を受くるに堪ふべき資格なかるべからず。應ずる資格あるものを、應供といふ。應供とは阿羅漢なり。
【八】竹林。單なる竹林なり。

學は大小に亘つたが、解に於ては如來藏說、行に於ては往生淨土を期したものと思はれる。

六、本經の流傳

文章流暢、如何にも能く釋尊を傳してあるので、譯後他の佛傳に比して、頗る流傳した事は、其題名に倣つて、「善惡因果經」といふ樣な僞經あらしめた事によつても知られるが、一層多く之を知らしめるのは、繪因果經といふ特殊の藝術の存在によつて判ぜられる。「日本國寶全集」第三十六輯の中に、京都の上品蓮臺寺と宇治の報恩院とに、各々斷簡として保存せらる〻二本までを掲載してある。之れが解說によれば、既に正倉院文書中に、經目を見る事によつて、天平時代に於て、早く既に存在した事を語る。兩本、共に黃麻紙の卷子本で、上下の二欄に分ち、下欄には竪三寸六分の間に、界線を引いて、八字詰に經文を書寫し、上欄には竪二寸八分の中に、下の經文に應ずる事相を圖示して居る。共に字格は嚴正なる唐風の楷體で、天平寫經の代表的なものと認められる。繪は、墨彩の輪廓による簡單な象形に、丹朱・綠青・群青・雌黃・胡粉等を彩り、總じて大まかな手法である。圖中の樓閣の樣式、人物の胡服、樹石の描法等に、六朝風の餘影が存し、近來西域出土の繪經斷片に照合して、唐朝に存した一種の形式であつた事を知らしめる。類品に、益田孝氏藏のもの、東京美術學校のものがあるが、上下二欄の寸法の相違、字體の相違によつて、上の二本と區別せられ、よつて以て少くも二通り以上の經文があつた事を推せしめる。繪と經文と相待つて、何程か各時代の人の心を打つたものであらう。

* * *

最後に、一言を追加する。本經を譯するに當りて、一字をも原典の文字を失はぬ事にした。然し漢文を和文にする際に、少しく補足せねば意味が不明となるか、又は不十分な所がある時には、《 》を附して、補足を加へた事である。

昭和四年五月二十五日

譯者　常盤大定識

當するものであらう。他には之あるを見ぬのである。又、誕生時の三十四瑞應は、獨り「普曜經」(「大莊嚴經」)に於てのみ、三十二瑞應として載せられ、優樓頻螺迦葉濟度の方便として、三洲より三果を取り來れる事は、これまた「普曜經」(「大莊嚴經」)及び「中本起經」に見られるのみである。十七種の多き佛傳あるに關らず、聖善慧本生に於て、誕生三十四瑞に於て、三洲三果に於て、「普曜經」(「大莊嚴經」)に一致するのは、本經が、「所行讃」の外に「普曜經」との間に特殊の關係あるを語るものである。「所行讃」は、大小未分のものであるが、「普曜經」は純大乘の佛傳である。本經が、大小未分の「所行讃」の結構を承けつゝ、之に純大乘佛傳たる「普曜經」を加味するのは、本經が是等兩經を承けたもの、少くも兩經の間に立つ事を語るものであらうと思ふ。

五、本經の譯時及譯者

本經は、中印度の沙門求那跋陀羅(Guṇabhadra、功德賢)が、劉宋の元嘉二十一年—同三十年(西曆四四四—四五三)の間に、荊州辛寺に於て譯せるものである。

功德賢は、婆羅門種として、沙門禁絕の家に生れ、反佛教的空氣の中に生長した。偶「雜心」を見て驚悟する所あり、潜に遁れて佛教に出家し、具戒を受けて、三藏に通じたが、既にして小乘を辭して、大乘を學び、師命に從ひ、經匣を探りて、「大品」・「華嚴」を得、これを讀誦し講義して、摩訶衍(Mahāyāna、大乘)の號を以て呼ばるゝに至つた。緣熟して、師子國(Siṃhala、錫蘭島)より、海に汎びて東し、難に遇へば、十方佛を念じ、觀音を稱し、劉宋の元嘉十年乙亥(四三五)を以て廣州に達した。時に、年四十二歲であつた。刺史車朗、表して之を朝に聞し、乃ち迎へられて楊都祇園寺に住し、名僧慧嚴・慧觀之を勞ひ、文帝、請して深く崇敬を加へ、碩學顏延之・大將軍彭城王義康・南譙王義宣、之に師事するに至つた。寶雲の傳譯、慧觀の執筆によりて、祇園寺に雜阿含經、東安寺に法鼓經、丹楊郡に於て、元嘉十三年を以て勝鬘經、道場寺に於て、同二十年を以て、楞伽經を譯出するといふ風に、頗る重要な譯經を爲した。譙王が、荊州を鎭する時、その請によりて、伴はれて荊州に到り、辛寺に止住する事十年。此間に於て、華嚴經等を講じ、四十餘部百餘卷を譯出した中に、本經もある。譙王が逆を謀りて誅に伏せる時、孝武帝に迎へられて、禮遇を受け、明帝の泰始四年(四六八)、七十五歲を以て入寂した。臨終の日、天華聖像を見たといふ。彼が大品・華嚴に通じ、勝鬘・楞伽を譯し、十方佛を念じ、觀音名を稱へ、臨終に天華聖像の瑞があつた所から見るに、

猶また善慧仙人の本願は、度衆生の願と、一切智の願とで、その修する所は、從つて自利々他の菩薩行である。にも關らず、出家生活が理想とせられ、普光如來の前に散花せんが爲に、辛くも得たる五莖の蓮花を、生命を賭して與へた青衣に對して、「我梵行を修し、無爲の道を求む、生死の緣を相許すを得ず」と言つて居るのは、本生中にあらはれた全體の思想と調和せぬ。これはまた矢張正宗分の佛傳と調和せんが爲のものであらうと思ふ。正宗分には、四門遊觀の時に、北門の比丘が出家の功德を說ける中にも、太子の宮中生活にも、大迦葉の夫婦の間にも、小乘的戒律生活が頗る嚴肅に規定せられて居る。これと調和せんが爲には、出家であらねばならぬのである。

四、本經と他經との關係

本經が、佛傳文學中に於て、優秀の位置を取る事は、既に之を言つた所である。佛傳には、現存大藏經中、少くも十七種以上あるが、その中に於て、本經は純小乘的でなく、また純大乘的でなく、大小調和のものといふべく、中心を爲す佛傳が、全く小乘的なるに反して、追加の本生の中に於て、六度・十地・一切法空の如き大乘分子を加へて居るのである。十七種の佛傳の名稱や、相互の間の關係やなどは、「本行集經」の解題の中に於て、之を叙述せんと思ふから、こゝには之を略して、本經に取つて重要なものだけを指摘して見る事にする。

本經の中心を爲す部分の構想は、馬鳴菩薩造の「佛所行讚」に極めてよく一致する。即ち太子出家以後に於ける、車匿及び白馬犍陟を中心としての宮中の悲慟の如き、又、阿羅邏仙人の說ける數論の數理の如き、又、降魔の下に於ける魔王三女の活動の如き、又、成道前に於ける負多神の讚嘆の如き、又、成道後に於ける十二因緣・八正道の思惟の如き、又、頻王に對する說法の如き、いづれも「所行讚」の說相と、符節を合すが如くで、唯散文と韻文との差があるに過ぎぬ。兩者の間には、必然の關係ある事を思はしむるが、本經の如き散文の佛傳が素材となつて、かの麗妙なる「所行讚」あらしめたものではなくて、本經の成立は、たしかに「所行讚」の後であつたと思ふ。そは「所行讚」が、直に誕生より始むると異り、本經は、その前に本生を加へて居る事によつて知らるゝ。

さて又、追加の部分と思はれる初の部分の善慧本生は、恐らくは「佛本行經」の善思本生なるべく、またその菩薩として兜率天に上生せる聖善白は、「普曜經」Lalita-vistara には、まだ名がないが、「大莊嚴經」に來つて名があらはれて居る淨幢本生、「修行本起經」の無垢光本生に相

ものであるが、こゝの不斷不常の中道は、實相の上に言はれたものである。前のが道德的であるならば、こゝのは哲學的である。同じ中道であつても、修行の正道の上に言はれたものが、事實の眞相といふ意味に開展したのは、中道の觀念の一進展である。後に龍樹が、「中論」の中に於て用ひた中道 Madhyama-pratipad は、後の意味であつて、「中論」後に於ける中道觀の發展は、滔々として底止する所なきまでに至つたが、その中道觀の最初が、本經中に見らるゝのは面白いと思ふ。

ホ、本經の大乘思想

以上の如くにして、頻王に對する說法中に、頗る大乘的色彩を見出し得るが、然しそれは迎へて解釋した上の事である。本經に於て、そのまゝに見て、大いに大乘の分子を見るのは、最初の善慧本生、乃至、託胎までの間に於てゞある。そこには、善慧の本願として、「一切衆生の爲に五道に周遍し、怨親平等の心を以て、布施等の六波羅蜜の行を修すべき」を言ひ、普光如來の授記によつて、「卽時に一切法空を解せる」を言ひ、如來の滅後、「三乘の法を以て衆生を教化せる」を言ひ、幾多の修行を累ねて、比丘より菩薩に進み、「功行滿足して、位十地に登り、兜率天に上生して、聖善白の名を取り、十方國土に種々の身を現じて、應に隨つて法を說き、」而して菩薩が神を摩耶夫人の胎に降すや、夫人が「日に六波羅蜜を修行す」とまで言つて居る。これ實に明白な大乘思想である。一切法空といひ、六波羅蜜、十地といひ、殊に十方國土の應身說法の如きに至つては、相當に進める佛身觀を含むものである。これは必ず當時に行はれた大乘思想と調和せんが爲に、或は大乘佛傳より材料を取つたもので、後の追加であるに相違ない。

斯の如く、大乘分子に豐富なる善慧本生が、最後の下生發願中に、「八正路を淨うし、諸法印を衆生の心に印す」と言つて居るのは、何故であらうか。恐らくは本經正宗分の佛傳と調和せんが爲に、六度を以てせずして、現實の釋尊に見られる八正道を取つたものであらうと思ふ。正宗分の佛傳には、至る所に八正道が說かれるが、六波羅蜜が說かれてない。獨り頻王が竹園精舍を布施せる時の、釋尊の呪願の偈の中に、「能く布施せば、慳貪を斷除し、能く忍辱なれば永く瞋恚を離れ、能く善を造れば、則ち愚癡に遠かる」とある中の布施と忍辱とは、六波羅蜜中のそれであらうかとも思はれるが、然しこゝは貪・瞋・癡の三毒を離れしむる事を主としたもので、六波羅蜜を說かんとするのでは無い。されば、正宗分には六波羅蜜が無いといはねばならぬ。この正宗分と調和せんが爲には、善慧の下生發願に、八正道を以てするのが當然である。

て、初めて眞の解脫への關門が開けるのである。滅盡定と、二無我の觀とは、左程遠いものでは無いと思ふ。

二、本經の佛敎思想

顯正の中に於ては、鹿野苑の初轉法輪の說法と、頻王に對する情塵識三事生染の說法とが、之を代表する。初轉法輪の說法は、釋尊が、不苦不樂の中道によりて、能く八正聖道を修し、以て菩提を得たるを述べ、更に四諦の形式に之を概括して、現苦は、「我」想を根本とする三毒によりて起り、八正道によりて、三毒乃至「我」想を滅すべきを敎へてある。四諦の中、前二の苦集と後二の滅道との分岐點は、「我」想の有ると無きとによるのであるから、後に、五蘊の無常・苦・空・無我なるに、之を結歸せしめてある。無常・苦・空・無我は、四法印と稱せらるゝものである。我想より現苦にまで開展する經過は、乃はち菩提樹下に於ける十二因緣である。十二因緣中、識の前にある無明行は、畢竟ずるに、根本我想に外ならぬ。我想は、先天的の無明である、斯くて本經の初轉法輪には、八正道・四諦・四法印・五蘊・三毒等の敎法が見え、樹下の菩提の內容には、十二因緣が見られる。

頻王に對する說法は、「五陰が識を根本とし、識が意根を生じ、意根が色を生ずる」事に始めらるゝ。こゝに識によつて創造せられた色は、畢竟識に還元し得といふ思想の萠芽がある。而して、「識の創造せる色は、無常なものである。一切無常ならば、いづこにも「我」を見る事が出來ぬ。「我」があれば、「我所」を定立せしめて、こゝに實の「法」あらしむるも、「我」にして無くば、實の「法」なき事となる」とて、經は色を識に還元せしむる事によつて、實法なしといふ見地に達して居る。こゝに、我法二空の思想があらはれて居る。然して後に、經は、頻王の疑問として、「「我」なくば、今現に苦果になやむものは、何ものぞ」の問題を出し、之に對して、永遠の實體としての「我」を認めぬが、「情塵識の三事和合によつて、生死轉廻の衆生あり」と言つて居る。後の佛敎よりせば、實我を破して、假我を立てたのである。「情塵識の三事」といふのは、根境の和合によつて識あり、識の活動に人ありといふの意であらう。而してこの「三事の關係は、不斷不常なり」とて、「斷常を離るゝ所を中道と名け」て居る。この不斷不常といふは、後の所謂自性常の「我」を破つて、相續常の我を立てたものである。斯くて頻王に對する說法中には、唯心說の萠芽、我法二空、實我と假我、不斷不常の中道といふ樣な、佛敎に取つて、重要な思想が見らるゝ。

さてこゝの中道は、前の不苦不樂の中道とは、その意義を異にする樣に思ふ。不苦不樂の中道は、實修の上に見られた

れ實に正統婆羅門の重要なる作法である。これを破するについて、本經が如何に細密な用意を拂つたかは、優迦葉化度の下に、特に長い紙數を費し、「婆羅門中、火に奉事するを最と爲し、乃至、若、大果を求めんと欲せば、佛福田を供すべし」といふ偈文を五回も繰り返し、優迦葉の語として、「年少沙門に神通ありと雖も、我が道の眞なるに如かず」といふを二十二回も繰り返して居る。その道の眞といふのは、眞の阿羅漢を得たるの謂で、優迦葉は、自法の事火を以て、阿羅漢を得るの道と爲したのであつた。然し、佛教は、之を認めぬのである。事火の功德に對する佛教觀は、優迦葉が歸佛の後に、頻王の前にて說いた偈文の中に、優迦葉自身の口より說かしめて居る。これによれば、施會と苦行と事火とは、梵天に生るゝの行法である。而して梵天の生は五欲の樂を受くるが、然しまだ三毒の煩惱を離れて居らぬから、畢竟、老病死を伴ひ、生死輪轉の域を脫せぬといふのである。これまた必ずや佛教對婆羅門教の問題であつて、佛陀と火とのいづれに、歸依の價値があるか、要するに本尊觀の相違を表するものであらう。何にせよ、これは、古來一般民衆の頭腦に浸潤して居る、事火の信行に對する根本的の批判であるから、容易な問題では無い。今日の人には、三迦葉化度の下が、徒に冗長と思はるゝけれど、印度の當時に遡つて顧みる時は、斯くまで繰り返し〳〵反覆丁寧に說くのに、毫も無理は無いのである。釋尊は、常に施論・戒論・生天之論によつて、人を導くを常套手段としたが、そは最高の涅槃に導くまでの階梯に過ぎなんだ。布施により、又は十善によつて、生天の樂あるべき事は、本經の隨處に說く所であるが、然しその度ごとに、苦報に外ならぬ事を斷じて居る。阿羅邏仙人の涅槃とする所も、畢竟は、この生天に外ならぬものとせられて居る。「一師は、四禪天の最後の無想天に涅槃ありとし、我は四空天の最後の非想非々想處を以て、涅槃の域とする」といふのは、高低の差はあつても、その終局觀よりすれば、生天思想といふ中に一括せられるのである。太子は、阿羅邏仙人に對して、非想非々想處にも「我」があるのであつて、「我」には「知」があるから、知から外界との間に攀緣が起り、これを本として染着が附隨して來る。此處には麁結は無いにせよ、細結が盡きたのでは無い。細結がある以上は、結局は下生を受けて、再び生死海中に墮在する事となると批評した。これは前述の如く、太子の口を籍りてあらはれた、佛教より見た諸天觀であると思はれる。佛教が、滅盡定を以て、非想非々想處の上に置いたのは、やがて生天思想を脫した第一歩であつて、滅盡定に入つ

五大─諸煩惱─生死

冥初といふのは、自性冥諦 Prakṛt、我慢といふのは Ahaṃkāra、五微塵氣といふのは五惟 5 Tanmātra、五大といふのは 5 Mahābhūta で、こゝには、二十五諦の中で、十二諦しか無いが、若し細かにいふ時は、冥初より我慢に至る間に、大 Mahat があり、我慢より染愛が起る爲には、そこに心根 Manas、五知根 5 Buddhindriya、五作業根 5 Karmendriya の十一根を要するのであるが、經は之を略して居る。是等十一根を加へて見ねば、五微塵氣・五大より、諸煩惱が起り、生死の世界を展開する理由が分らぬ。數論が、斯の如く生死の世界の、よりて緣起し來れる源頭に遡つて、之を冥初に結歸せしめたのは、冥初の中に抱合せらるゝ神我 Puruṣa を、一切の束縛より解脱せしめんが爲なのである。冥初は、渾沌たる或物で、それ自身では可能性としての活動體に外ならぬ。それが活動し初めるのは、實に神我との抱合によつてゞある。神我は、永遠の獨立自由體であるべきのに、獨立自由を得ぬのは、冥初との抱合によるのであるから、修道の目的は、結局冥初から神我を解放するにある。それが爲に、修禪の要がある。仙人が太子に說ける四禪・四空定は、卽ちこゝに要求せらるゝのである。而して仙人が、究竟の解脱とせるものは、四定空の最後たる非想非々想處であつた。そこには「我」ありや、「我」なきや、所謂言忘慮絕の境地である。然るに、太子は、之に對して銳く突き込んだのは、この「我」ありや「我」なしやの問題であつた。數論の根本敎理よりせば、當然「我」Puruṣa がなければならぬ。否、根本の出發點が、「我」を解放して、一切の上に超然たらしめんとするにある。有我無我の問題は、寧ろ不要なのである。而してこの「我」には當然「知」が內含せらるゝのであるから、太子の質問に對して、仙人は呆然答ふるを得なんだのである。經は、太子の口を籍りて、仙人を窮せしめて居るが、これは寧ろ佛敎の無我說より見たる、數論の「我」觀といつた方がよいと思ふ。

八、三仙人の生天思想に對する破邪

苦行仙人に對する太子の批判に、「諸天樂しと雖も、福盡くれば、則ち窮り、六道に輪廻して、終に苦聚と爲る。」といふは、盖、佛敎から見たる諸天觀であらう。天とは、神祇のこと、吠陀以來の神祇で、當時之を禪定の階級に相當する實在として、欲・色・無色の三界に概括して居た。佛敎にても、天に最上の福樂あるを認むるが、然し解脱の妙境をこゝに認めず、人と同じく輪廻界にあるものとした。また、生死の域を脱せぬからである。優樓頻螺迦葉は事火婆羅門であつた。朝・中・暮の三時に、火に事ふるを三火といひ、こ

て、正にその絶頂に達する。斯の如き悲慟に對しての唯一の道は、神祕力によつての解決の外に、これあるを知らぬ、經は即ち「太子の神略、人の意表に出で、亦また兼て是諸大天の力なり」といふにて、此悲慟の幕に終局を與へて居る。

降魔の一段には、一方に惡魔の誘惑に對して、他方に地神の勸發を擧げ、一方に天地に滿つる魔軍の襲撃に對して、他方に負多神の證明を出し、惡と善との葛藤、進々退との煩擾を、事細かに叙してあるのは、また能く修道の歷程を知らしむるものである。この息づましき修道生活の縮寫圖を見て後に、惡魔退散の後の「天に烟霧なく、風條を搖かさず、落日光を停めて、倍更に明盛に、澄月映徹し、衆星燦朗として、幽隱の暗瞑も、また障礙なし。虛空の諸天、妙花香を雨らし、衆伎樂を作して、菩薩を供養す」といふ一節に至つて、初めて蘇息の思がせられる。これ、降魔後の、佛陀の前にあらはれたる法界觀を描いたのである。顧みれば、閻浮樹下の靜觀より、四門遊觀を經て、踰城出家、宮中の悲慟、王師大臣の追尋に至り、更に頻王の勸導拒否に初まりて、六年苦行を經て、この苦行を捨てゝの樹下の降魔に至るまで、層々靈筆を振ひ來つて、吾人心中の一切の琴線を觸動し、遂にこゝに至つて、一段落に達したのである。經の作者は、この法界觀に達するまでの經過を求めて、之を過去無量劫の善慧本生にまで遡つて居る。佛陀觀は、遂にそこに進み、更に法身觀に展開せねば止まぬものである。

ロ、阿羅邏仙人の有我思想に對する破邪

思想の方面より、本經に於て注意すべきものに、破邪と顯正との二面がある。破邪といふのは、對外道のものであり、顯正といふのは、佛教教義の叙說である。

對外道に三つある。一は苦行仙人に對するもの、二は阿羅邏仙人に對するもの、三は優樓頻螺迦葉に對するものであるが、更に之を類によつて分つならば、阿羅邏仙人に對する教義上の破邪、苦行仙人に對する生天思想の破邪、優迦葉に對する事火思想の破邪となるが、さて、優迦葉の事火も、阿羅邏の禪定も、必竟は生天の爲に外ならぬから、此點に於ては、三仙に對する破邪が、悉く生天思想に集められる事になるのである。

對阿羅邏仙人の太子の批評たる、非想非々想處には、「我」ありや、「我」なしやといふ、鋭い質問は、たしかに仙人に對する致命的の問題である。本經によつて見らるゝ仙人の思想は、世界最古の哲學といはるる數論 Sāṁkhya の二十五諦說である。最も經は概說して居るので、左記の如くになつて居る。

冥初─我慢─癡心─染愛─五微塵氣─

身に表現せられたるものを、各自の生活規範とすべきを勸發したものである。蓋、經に對するものは、常にこの用意を以てし、單に之を客觀視すべきでは無いのである。

三、本經の內容

本經に於て、特に注意せらるべきものは、蓋、(一)善慧本生中に大乘分子を織り込める事。(二)踰城より降魔に至る間に於て、絢爛の筆致ある事。(三)太子と阿羅邏仙人との問答に於て、佛教對數論の教理上の根本相違を示し、太子と苦行仙人との問答に於て、叉釋尊と優樓頻螺迦葉との問答に於て、佛教對婆羅門教の宗教上の根本相違を示せる事。(四)頻毗婆羅王に對する說法に於て、佛教の根本義を概說せる事であらう。是等の中に於て、第二は文藻の妙諦を發揮し、他の三は思想上に於て佛教の特色を發揮して居る。先づ第二より見て行く事にする。

イ、踰城より降魔に至る間に於ける文藻

本經を生きた釋尊に接せしむるものとしては、踰城より降魔に至る間に之を求めねばならぬ。その前後は、餘りに理想化せられて居る爲に、吾人との間に距離があり過ぎるが、此の間、特に踰城・宮中悲慟・降魔の三節は、他の個所に比して、文想共に激し、吾人の心に直接して來る。「百年の命、臥して其の半を消す。」人世に、徹底滿足するを得ずして、中夜迦毘羅城を出でんとせる悉達太子が、車匿をして、白馬犍陟を引き來らしむるや、車匿は一方太子の命に違ふを得ず、他方父王の勅に違ふを得ず、此間に處する唯一の道として、「聲を擧げて號泣し、耶輸陀羅及び諸眷屬をして、皆悉く太子の去るを覺らしめんとす」といふが如きは、頗る纖細な描寫である。太子を伴ひ、山に入つて後、生來太子に奉侍せる車匿は、終身太子の足下に歸依せんを懇請し、而も太子は寶冠・瓔珞・莊嚴具を車匿に託し、歸つてこれを父王・母后に奉り、耶輸陀羅に與へよといふ。こゝにもまた車匿が進退に困惑悲泣せる狀を纖細に叙してある。太子が「我、生れて七日にして、母、命終したまへり。母子だも尙死生の別あるを、況んや餘人をや」の一節に至つて、誰か卷を掩はざるものがあらう。太子の出城を知つて、宮中の混亂、此に極まれる時、夢の如くに白馬を牽きつゝ還れる車匿、及び白馬を中心としての、父王・母后、及び耶輸陀羅の憤りと、悲みと、恨みとは、また人情の機微を穿つて居る。殊に主を失つて悲み嘶ける犍陟に對して、耶輸陀羅女が、「汝、太子を載せて、この王宮を出で去る時には、寂然として聲なく、今、空しく反つて悲み嘶くは何の意ぞ」と、責め悲しむ一節に至つ

過去現在因果經解題

一、本經の名稱

本經は、佛自身の說かれた形になつて居る佛傳である。何故に、佛傳が、現名を取るに至つたかの理由は、經の初後に能く記されて居る。經は、初に、佛が祇園精舍に在せる時、諸比丘が佛の過去の因緣を說きつ聞きつせんとして、集會して語論せるに筆を起して、佛が是等の比丘に對して、その本生 Jātaka たる善慧 Sumedha 仙人の求道より說き出して、第三者の地位に立つて、八相成道を委說し、最後に、過去に種ゑたる因は、無量劫を經るも、終に磨滅せずして、能く現在の一切種智を成就するを得たるを述べてある。これ、過去現在因果の名稱の起つた理由であつて、この名稱の中には、發願修行によつて、現在の一念を徒爲に過すべからざるを敎へて居るのである。「過去の因を知らんとせば、現在の果を見よ、未來の果を知らんとせば、現在の因を見よ」といふ「善惡因果經」の語句は、全くこの經より得たものに外ならぬ。

二、本經の結構

本經は、四卷に分たれ、釋尊の前生たる善慧仙人の布髮受記に始まつて、大迦葉の化度に終り、行文流暢、繁簡宜しきに適し、佛傳中の優なるものであるが、單に卷を別つのみにて、內容を示すべき品名を細示せぬから、今內容の上より、左の如く章節を分けて見る。

第一卷——普光佛出世・善慧仙人布髮受記・生兜率天・下生託胎・誕生・三十四瑞應・阿私陀仙占相・三時殿・母后生天・學諸書藝

第二卷——競試武藝・灌頂太子・閻浮樹下靜觀・納妃・四門遊觀・出家・苦行林一宿・宮中悲慟

第三卷——王師大臣追尋・頻王迎見・問道二仙・六年苦行・捨苦行・菩提樹下・降魔成道・梵天勸請・向鹿野苑・二商主供養・優波伽外道・目眞龍王保護・初轉法輪

第四卷——耶舍出家・度三迦葉・頻王迎佛・竹園精舍・舍利弗・目犍連歸佛・大迦葉出家・結文

是等四卷の所說を、彌天の三分法に從つて分てば、普光佛出世・善慧仙人布髮受記・生兜率天・下生託胎は、釋尊の本生に屬するものなれば、佛傳そのものよりせば、畢竟序分に當るべく、最後の結文は、本生と佛傳とを綜合せるものなれば、流通分に當るべく、その中間の、誕生より大迦葉出家に至るまでは、實に佛傳そのものなれば、正宗分に當るといふべきである。佛傳そのものよりせば、この三分法を以て見るべきであるが、然し經の題名よりせば、初後にその意趣を知るべく、經は單に之を佛傳として見ず、釋尊の一

◇　◇

卷の第四

衆許摩訶帝經解題

衆許摩訶帝經

目次

本縁部 四

常盤大定
寺崎修一
平等通昭
譯

國譯一切經

大東出版社藏版